PW

メタルギア ソリッド ピース・ウォーカー シナリオ・ブック

目次

【ご注意】
本書は、開発途中のシナリオを元にして作成しているため、
ゲーム上の表現とは若干異なる場合があります。

序章

【エピグラフ】

――黒バックに文字だけ表示する。

世界がまだ西と東に分かれて対立していた時代…

その冷戦直中の、１９６４年。
ひとりの英雄がソ連に亡命した。

英雄は第二次大戦中、連合軍を勝利に導いたとされる特殊部隊の母、「ザ・ボス」。
ところがその際、ソ連に持ち込んだ米国製小型核弾頭が暴発、ソ連の一研究施設が消滅してしまう。

これを発端として全面核戦争の危機に直面した米ソ首脳は、世界の終焉を回避する為、極秘協議を行う。

二大国が下した決断は、この件における米政府の潔白を証明すること、すなわち伝説的英雄である「ザ・ボス」を抹殺することだった。

暗殺の任務についたのは英雄の唯一無二の弟子である、「スネーク」。
苦渋の選択を迫られた「スネーク」は「ザ・ボス」をソ連領内、グロズニィグラードで殺害、米国の潔白は証明され、核戦争の危機は去った。

世界を救った「スネーク」は真の英雄として「ＢＩＧＢＯＳＳ」の称号をもって迎えられる。

しかし、その授与式典を最後に、スネークはその姿を消した。

【チュートリアルシナリオデモ】バランキア港本拠

──コロンビアの北岸、バランキア界隈。亜熱帯性気候、MPOの舞台であったサンヒエロニモ半島近く。

──小屋が立ち並んでいる交易港のはずれ。海岸に掘っ立て小屋があり、そこにスネーク達の傭兵派遣会社がある。

──熱帯雨林のスコール。土砂降り、大粒の雨。昼過ぎだが、厚い雲で日差しは無い。

──中央に字幕。

【字幕】A HIDEO KOJIMA GAME

──以降、キャストを表示していく。

──バイクで小屋の手前に到着したばかりのスネーク、スタンドを立てる。

──スネーク、葉巻を咥えるが雨で火が点かない。ため息。空を見上げる。雨の滴が顔をたたく(あとで室内に入ってからやっと葉巻を吸えた、という流れ)。

──曲がった看板を拳で殴り、位置を戻す。

【テロップ】１９７４年11月４日１５：４２　コロンビアバランキヤ港沿岸

――投げ飛ばされて地面にたたきつけられる兵士のアップをインサート。
――海岸の方に歩いていくスネーク。それを背中からフォローしていくカメラ。
――叩きつけられるとレンズに泥が跳ねる。
――前方の海岸で海を背景に兵士たちがＣＱＣの練習をしている。
――その向こう、波打ち際に教官（外見は他の兵士と同じ）が１人、号令をかけている。
――号令に合わせて兵士たちは組みＣＱＣ訓練をしている。
――スネーク、雨で濡れた上着を脱ぎ捨てると上半身裸になる。胸には大きな「Ｓ」の縫い跡。ザ・ボスの胸にあった傷を連想させる。
――はみ出し兵（外見は他の兵士と同じ）が１人、近づいてくる。

はみ出し兵　「ボス！」

――腹部、胸から顔へ。スネークの顔が初めてはっきりと映る！
――近づいてきたはみ出し兵はスネークに向かって、

はみ出し兵　「ボス、お手合わせお願いします！」

――「自由操作タイム」のあとチュートリアル。

――チュートリアル終了。
――遠くからスネークを呼ぶミラー。

ミラー　「スネーク！」
――スネークの顔UPから次アーティストデモへハーモニー。

【ブリーフィング1／アーティストデモ】バランキア港本拠

――スネークの顔にヘッドライト。眩しそうな顔。
【クレジット】スネーク　大塚 明夫
――切り返し、スネーク背後からのカット。逆光でジープ、背景はよく見えない。

スネーク　「どうした？ カズ」
――ミラーUP。
【クレジット】カズヒラ・ミラー　杉田 智和

ミラー　「客人だ」
スネーク　「撤収か？」
ミラー　「心配いらない（軽く笑う息）。CIA（やつら）じゃない」
ミラー　「俺が連れてきた。尾行もない」

——ジープの後部座席に人影はふたつ。
——ミラーがスネークの脱ぎ捨てた服を投げる。
——受け取るスネーク。歩き出すスネーク。
——横からはみ出し兵追いかける。

はみ出し兵　「ありがとうございました！　BIG BOSS（ビッグボス）！」（スネークの前まで駆けてきたので、少し息が荒い）
スネーク　「スネークでいい」
はみ出し兵　「すいませんでした。…勝利（VICTORY）のボス」

——ジープ前で立ち止まり、振り向くスネーク。

スネーク　「いいか、俺たちに、勝利はない」

はみ出し兵　「『勝利か―さもなければ死しかない』？」

スネーク　「俺たちには…、そのどちらも許されない」

――スネーク、ジープに乗り込む。

――海岸に残される兵士、ジープに敬礼。

――時間経過。夜。

――小屋外全景。脇にジープが止まっている。

――小屋室内。質素な椅子とテーブルが置いてある。窓には叩きつける雨。

――ところどころ雨漏りで、バケツで受けている。ボロさを強調する。

――コーヒーを淹れている手（ミラー）。（小窓）

――ミラー（あまり顔を見せない）、テーブルに（コスタリカの）コーヒーが入ったマグカップを2つ置く。

――コーヒーからパンUP、客人は男（ガルベス）と少女（パス）。椅子に座っている。パスは奥の方にいる。

男（ガルベス）　「ありがとう」

――男（ラモン・ガルベス・メナ）は雨に濡れそぼっている。コートから雫が垂れているが、脱ごうとはしない。男はカップをもって立ち上がる。

——右手は義手、初めて見える。一口、コーヒーを飲む（マルチ、パンUP）。

男（ガルベス）「…生き返る！　やはりコスタリカコーヒーは旨い」（コーヒー園の伏線）

——テーブルの奥で少女（パス）は赤いコートのフードを被ったまま椅子に腰掛けている。少女（パス）はうつむいて（人差し指を咥えている。実は歯茎に嗅ぎたばこを塗っている）顔は見えない。

——スネークは二人の向かいの椅子に座ったまま、葉巻（火が点いてない）を咥えている。ライターが湿って、火が点かない。いらだつスネーク。

スネーク「で…、コスタリカ政府の、お偉い先生が…、このコロンビアに何の用だ？」

——以降、引き画ベースに顔窓で進行。

——スネークは政治がらみと思っている。

ミラー「コスタリカ国連平和大学のガルベス教授だ」（ガルベスはゲバラが偽名で使った、ラストネーム）

【クレジット】ラモン・ガルベス・メナ　大塚 芳忠

——ミラーはガルベスに軽く会釈（話し始めてもOKの意味）。

ガルベス　「実は…、1年ほど前から、コスタリカで武装集団を見かけるようになりました」
ガルベス　「もちろん、正規軍ではありません」
ミラー　「コスタリカは、軍隊を持たない…」
ガルベス　「ええ。憲法12条：『常設の組織としての軍隊はこれを禁止する』」
少女（パス）　「平和憲法…」

――少女（パス）、下を向いたままつぶやく。少女に目をやるスネーク。

スネーク　「ニカラグアから逃れてきた反政府組織（FSLN）じゃないのか？」
ガルベス　「いやいや、ゲリラには見えません。もっと組織的です」
スネーク　「コスタリカ政府は何と？」

――コーヒーをテーブルに強く置くガルベス。

ガルベス　「政府の見解では、コスタリカ開発公社（CODESA）に雇われた、『多国籍企業の警備員』だと」
ガルベス　「もちろん、出鱈目です。彼らは最新鋭の兵器や設備を、大量に運び込んでいます」
スネーク　「どこからそんな資金が？」
ガルベス　「…恐らく、ＣＩＡ（ラ・シーア）が関与しています」

――ガルベスを見るスネーク、ミラー。

ミラー　「ＣＩＡ？」

ガルベス　「ご存じの通り、中南米はアメリカ合衆国の裏庭…」

ガルベス　「キューバ危機以降も、アメリカ合衆国との繊細な均衡（バランス）をなんとか保っています」

スネーク　「だから、政府は奴らを追っ払えないと？」

少女（パス）　「私達は、銃を握ることは出来ません」

――ミラー、少女（パス）の前にマグカップを置く。少女に向かって。

ミラー　「日本にも平和憲法と言われる『第９条』がある。軍隊を保持しない〝戦争の放棄〟だ」

――ガルベス、スネークに詰め寄る。

ガルベス　「あなた方は、国家や思想に依（よ）らず、どんな相手とも戦うと伺っています」

――スネークをみやるミラー。

――再度、葉巻の火を点けようとするが、点かない。

ガルベス　「お願いです。軍隊を持たないコスタリカから、彼らを追い出して欲しいのです」

——ポスター（壁に貼られている）を指してガルベス。

ガルベス　「あなた方に」

——答えないスネーク。

ミラー　「俺たちを雇いたいという事か？」

ガルベス　「はい。あなた方に『抑止力』となっていただきたい」

ガルベス　「…報酬は、十分とは言えません」

ガルベス　「ですが、あなた方の前線基地として、カリブ海沖にある、洋上プラントを提供できます」

——（マルチ）マザーベース画面に合わせた空撮写真を見せる。打ち捨てられた小さなプラント。

ミラー　「いいじゃないか？」

ミラー　「コロンビアもやばくなってきたところだ」

ミラー　「スネーク、俺たちには落ち着ける場所が必要だ」

ガルベス　「非公式ではありますが…、政府の協力を取りつけました」

ミラー　「（独り言風に）できれば、移動用にヘリが要(い)るな」

ガルベス　「掛け合いましょう」

スネーク　「（制して）待て！」

——立ち上がるスネーク。

スネーク　「俺達を『戦争の犬たち(ザ・ドッグズ・オブ・ウォー)』か何かと勘違いしているようだな」

ガルベス　「ええ、私はそう聞きました。国家に帰属しない軍隊だと…」

スネーク　「俺たちは…、国を棄てただけだ」

——スネーク達の画面にＩＮ、全画面。詰め寄るガルベス。スネークにつかみかかる。

ガルベス　「お願いします！　助けてください！」

スネーク　「いいか、奴ら(ＣＩＡ)が絡んでるなら力では無理だ」

スネーク　「政治で解決するしかない」

ガルベス　「国は動けないのです」

スネーク　「帰って政府のお偉方に伝えろ」

スネーク　「知り合いの交渉人(ネゴシエーター)なら紹介してやると」

ガルベス　「いえ、私は政府の代行で来た訳ではありません」
スネーク　「じゃあ何のために」
ガルベス　「私は大学で、数十年に渡って平和を説いてきました」
ガルベス　「今夜ここには…、〝教育者〟として来たのです」

——ガルベスが目線を送ると、少女（パス）が立っている。

ガルベス　「私の教え子です。大学で平和について学んでいます」
ガルベス　「名前はパス…。パス・オルテガ」

【クレジット】パス・オルテガ・アンドラーデ　水樹 奈々

——フードを降ろすと、縮れた金髪が見える。

スネーク　「平和（ラ・パス）…」
ミラー　「へえ？　俺と同じ名前だな」
ミラー　「俺は和平（カズヒラ）。日本語で〝平和〟って意味だ」
ミラー　「よろしく、パス。カズって呼んでくれ」

——手を差し出すが、パスは反応がない。ミラー、握手を無視されて、がっかり。

——コスタリカ地図、プエルト・リモンの沿岸を北へパン。

ガルベス　「カリブ海の沿岸（マール・カリベのコステーニャ）、プエルト・リモンの北に、彼らの資材搬入港があります」

ガルベス　「数日前…パスは行方不明の友人を探して、その施設に踏み込んでしまった。そして、彼らに捕まったのです」

ガルベス　「パスは16歳の、まだ子供です」

ガルベス　「彼女は乱暴され、なんとか自力で逃げ出してきました」

【探査モード】立っているパスを見ることが出来る。カメラズームすると服が透け、傷跡が見える。

——ミラー、彼女の手首の拘束具の傷を見る。コートをたくし上げると、針の跡。

——パスの傷を見てうめくミラー。

ミラー　「ひどいな（薬を打たれたらしい）」

ガルベス　「彼女は私生児（バスタード）なんです。幼くして母親を亡くし、祖父母も内戦で…」

ガルベス　「彼女は戦争を憎んでいます。人一倍」

パス　「私の名前は〝平和（ラ・パス）…〟。私は平和を守り抜く」

――スネーク、彼らに背を向け、聴きたくない。

パス「私は、そのために生かされている」

――パス、スネークに歩み寄る。

パス「お願い！　私の国、コスタリカからあいつらを追い出して！」

スネーク「悪いが…（人情的な訴えには響いていない）」

ガルベス「（遮って）あなたを…、あなたを『BIG BOSS（ビッグボス）』と知っての頼みだ」

――何故それ（CIA時代のコードネーム）を知っている？　いぶかしげなスネークのアップ。

――F.O.

――黒バックのまま、章タイトル表示。

【章タイトル】序章

【テロップ】1974年11月10日　コスタリカカリブ海沿岸

――ゲームへ。

【チュートリアル／シナリオデモ】

ミラー「しかし、スネーク。よく依頼を受けてくれたな」

ミラー「いやぁ…、俺はありがたく思ってる」

ミラー「サンヒエロニモとも縁が切れたし…」

ミラー「本格的に傭兵ビジネスに参入出来そうだしな」

ミラー「やっぱり、あれか？　あの人(ザ・ボス)のためか？」

——ホワイトアウト。

【ブリーフィング2／アーティストデモ】　バランキヤ港本拠

——時間戻り…。

【テロップ】１９７４年11月４日２０：３１　コロンビアバランキア港沿岸

——夜、雨の中ジープの前に立っているガルベスとパス。ガルベスは襟を立てて、パスはフードを被っているがずぶ濡れ。

——ガルベスとパスはじっと動かない。

――小屋の中でミラーとスネークが会話をしている。

スネーク　「まだ居るのか」

――ミラーは愛用のキセルを持ちながら。

ミラー　「スネーク、悪い話じゃないと思う」

ミラー　「根無し草の俺達に、落ち着ける場所を提供してくれるってんだ。洋上プラントだぞ。これを機に俺達の軍を拡大できる」

――小窓、再度洋上プラント表示（ミラーが写真を見せた）。

――壁のポスター、小窓でＩＮ。

スネーク　「カズ、俺達に安住の地はいらない。俺達はこれまで通り、放浪者（ノーマッド）でいい」

ミラー　「紛争地帯を渡り歩いては、その都度、戦場に利用されるのが望みか？」

スネーク　「何処（どこ）かに居を構えたりすると、まさにその戦争屋に成りかねない」

ミラー　「聴いてくれ、俺達は傭兵じゃない。外人部隊でもない。スネーク、これは新しいビジネスなんだ」

――スネーク、葉巻に火が点かない。

スネーク「(火が点かずに苛立つ息)」

ミラー「スネーク、奴らと戦争をしようというわけじゃない。その〝警備会社〟とやらの正体を突き止めるだけでいい」

スネーク「いや、調べるまでもない。奴らの背後にいるのはCIAだ」

ミラー「待てよ、そうなると…」

スネーク「あの〝教授〟、恐らくKGBだ」

――外のガルベスを見せる。全画面、ずぶ濡れの二人が立っている。

ミラー「そうか…」

スネーク「…俺達は故郷(アメリカ)を敵に回す事になる」

ミラー「後戻りは出来なくなる…」

スネーク「…葉巻に火が点かない」

ミラー「え？」

スネーク「カズ、コーヒー淹れろ。〝教授〟本人に聞いてみよう」

——ドアを開けるとパスが入ってくる。

——ガルベスもあとに続く。入り口でスネークと向かい合う。

——ガルベスが右腕（義手）を銃のように差し出す。

——警戒するスネーク。

——立てた親指が手首側に折れるとなんと、親指がライターになっていた！

——その火で葉巻を点けるスネーク。

ガルベス「以前、私はヘビースモーカーだった。書記長閣下から勲章を貰った時に、この義手をいただいたのだが…」

スネーク「肺を患ってね。煙草を止めてからは使い道がなかったんだが」

ガルベス「（無言で吸う）」

スネーク「伝説のBIG BOSS（ビッグボス）にお会い出来て光栄だ」

ガルベス「（煙を吐き出し）そのコードネームは、CIAがでっち上げたものだ」

スネーク「では何と？　ジョンと呼べば？（かなり詳しい情報源）」

ガルベス「俺に名前はない。あんたらが好きなコードネームも10年前に棄てた」

スネーク「…KGB（ツェントル）から来たあんたのことは？　何て呼べばいい？」

ガルベス「それなら、（にやりと笑って。KGBとわかっているのなら）…話が早い」

——パス、びしょ濡れ。コートを脱いで制服姿に。制服の裾をぞうきんのように絞る（少女らしさを出す）。

ガルベス　「鞭の如くやせ細り、拷問の如く熱き土地」

ミラー　「チリの詩人、ネルーダの詩…」

——地図、中米に寄っていく。

ガルベス　「中米は北米大陸と南米大陸を繋ぐ臍の緒だ」

ガルベス　「我々はここが欲しい」

ガルベス　「ここに社会主義国を創り、南北アメリカを分断する」

ミラー　「合衆国（アメリカ）は〝裏庭〟を失う」

ガルベス　「（そう）その生産、流通、軍事戦略的価値全てを失う」

ガルベス　「そして同時に、我々は南北アメリカを射程に収める基盤（ベース）を手に入れることになる」

——地図、中米からのミサイル射程が円で表現される。アメリカ大陸がすっぽりカバーされている。
（射程1万キロ）

ガルベス　「この中央アメリカを取ったモノこそが『冷戦』に勝つ」

——地図、ニカラグアに寄っていく。

ガルベス　「まずはニカラグア」
ガルベス　「親米派のソモサ政権を転覆させる。その準備として…」
ガルベス　「我々は反ソモサ世論に拍車をかけ、そして反ソモサ勢力であるサンディニスタ民族解放戦線（FSLN）の支援を行っている」
ミラー　「ＦＳＬＮ（サンディニスタ）がニカラグアの親米政権を倒すよう、仕向けるわけか」
ガルベス　「革命が成功すれば、ニカラグアは社会主義化する」
スネーク　「しかし、合衆国（アメリカ）も黙ってはいまい？」
ガルベス　「まさに。だからこそ、ＣＩＡが動き出したのだ」

——地図、下にパン、コスタリカへ。

ミラー　「それがコスタリカの、武装集団の正体だと？」
ガルベス　「そうだ。ニカラグアでの我々の活動を妨害するため、隣国のコスタリカに軍隊を送り込んでいるに違いない」

ガルベス　「つまり、コスタリカに駐屯している軍隊はCIA資本」
ガルベス　「そしてCIAはそれだけではなく、ここで何かを始めている」

――地図、終了。

――テーブルについている一同。

ミラー　「何を？」
ガルベス　「我々もそれが知りたい」
ガルベス　「BIGBOSS（ビッグボス）、あなたとあなたの部隊に、それを突き止めて欲しいのだ」
ガルベス　「まずは、彼らの陰謀を調査するためパスが捕われていた沿岸の施設に行き、各拠点の情報を入手、そして奴らを追い出して欲しい」

――気に入らない感じで葉巻を吸っていたスネーク、煙を吐き出し、

スネーク　「俺達に、KGBとCIAのイザコザに介入しろと？」
ミラー　「…あの娘は？　さっきのは作り話か？」

――パス、人差し指を咥えている（嗅ぎ煙草を上あごから出している）。

ガルベス　「ふん、平和(パス)の話だな」
ガルベス　「彼女が捕まっていたのは本当だが、私がＫＧＢであることは伏せてある」
ミラー　「お涙頂戴の作り話で、引き受けるとでも思ったか？」
ガルベス　「いや、彼女に同行して貰ったのには理由(わけ)がある」
ガルベス　「彼女は何とか逃げ延びたが、彼女の友人はまだ生還出来ていない」
ガルベス　「何故、彼女達が襲われたか？　そのヒントがココにある」

――カセットテープをテーブルに出すガルベス。

ガルベス　「恐らく、見てはいけないものを見てしまった」
ガルベス　「いや、聴いてはいけないものを聴いてしまった」
ミラー　「カセットテープ…？」
ガルベス　「これは彼女、パスが施設から持ち帰ってきたものだ」

――ガルベス、ポケットからウォークマン（初期型）を取り出す（別体型スピーカーと共に）。

ガルベス　「このテープはパスの友人が偶然、録音したものらしい」
ミラー　「何だ、それ？」

【テロップ】 ソニーステレオカセットプレーヤー WALKMAN-TPS-L2

ガルベス 「ステレオカセットプレーヤーだ。携帯型としては世界初」

ミラー 「ああ、それなら日本で開発中だと聞いたことがある。東側でも開発が進んでいたとは」

——ガルベス、カセットをウォークマンに入れる。

ガルベス 「これを聴けば、気が変わるはずだ」

——ガチャッ。ガルベスは録音テープを再生する。

——しばらく鳥の鳴き声が聞こえる。

ミラー 「これは？ ケツァール？」

スネーク 「火の鳥の（モデルの）？」（ケツァールは手塚治虫『火の鳥』のモデルとも言われている）

ガルベス 「パスの友人は鳥の研究をしていた。森で、鳥の声を録音中に、何かに出くわした」

——ノイズが大きく、よく聞こえない。

ミラー　「(じれったく) これの何処が!?」

——スネーク、ミラーを制する。

ガルベス　「ここからだ」

——回想画面。

——木々をかき分けて遺跡へ向かう映像に合わせてテープ音声（この映像は後にセシールの回想で同じものを使用)。

——かすかに歌が混ざり出す。

——ノイズとともに切れ、歌が大きくなる。

——ＳＩＮＧが後ろに流れている。ストレンジラブが聴かせている。

——そこにザ・ボスとストレンジラブの声が響く。

ストレンジラブ　「追い返せない、凶暴な蛇だ」

ザ・ボス　「追い返す」

ストレンジラブ　「殺さなければ、あなたが咬まれる」

ザ・ボス　「帰れ！」

——回想おわり。テープ音声は続く。

スネーク　「ボス…（思わず口走る）」

ガルベス　「声紋分析の結果、ひとりの音声は、伝説の英雄であり、犯罪者である、『ザ・ボス』と一致した」

ミラー　「何だって⁉」

ガルベス　「もう一人は不明。30代の女性。イギリス訛がある」

ガルベス　「背景に聴こえている曲は、１９７３年のヒット曲」

——テープ音声。

ザ・ボス　「国に忠を尽くすか？　それとも私に忠を尽くすか？」

ザ・ボス　「国か、恩師か？　任務か、思想か？」

ザ・ボス　「私は…、自分に忠を尽くす…」

——ガルベスを睨みつけるスネーク。

スネーク　「…ボスが、コスタリカで生きているとでも？」

ガルベス　「私が知る限り、彼女はあなたと共に戦った上官…」

ガルベス　「そして、ＣＩＡの命令を受け、あなたが殺し…」

ガルベス　「あなたは、英雄ＢＩＧＢＯＳＳ（ビッグボス）に昇格した」

——銃声！（ザ・ボスを撃ち殺した時を思い出す）

——汗だくのスネーク。

スネーク　「（震える呼吸を整える）」

ガルベス　「さあ、どうします？　引き受けて貰えますか？」

ミラー　「スネーク、これは罠だ」

ガルベス　「やはり、祖国に背くことは出来ませんか？」

ガルベス　「では、これはもう、いらない？」

——ガルベス、カセットを取り出し、義手の指から火をバーナーの様に出す。テープの下に指を近づける。

スネーク　「待て！」

——スネーク、テープを取る。びっくりするミラー。

ミラー　「スネーク？」
スネーク　「あの娘のためだ。平和（パス）の」
——ガルベス、火を消す為、指を元に戻す際、中指も上げる。
——指はピースマークに。
ミラー　「なるほど、平和（パス）のために」
——ガルベス、にんまり笑い。パスも喜びで目を潤ませている。
——F.O.

【米傭兵遭遇／シナリオデモ】

【テロップ】　１９７４年11月10日　コスタリカカリブ海沿岸ボスケ・デル・アルバ
——ジャングルの中をＭ１６を構えながら進むスネーク。
——巡回する米傭兵を発見、警戒して身を隠すスネーク。
——傭兵の装備を確認。
ミラー　「いたぞ…、ＣＩＡの傭兵だ。スネーク、無駄な戦闘は避け、見つからないように

潜入するんだ」

——ブラックアウト。

——ゲームへ。

——リアルタイム無線（P141参照）。

【CQC・通信兵前／アーティストデモ】

——2階事務室に入るスネーク。

——事務室内、扉の開いた物置状の薄暗い部屋の片隅に、椅子に縛りつけられたFSLN兵（男）。

——拷問（電流）を受けた後で既に息絶えている（部屋の隅、シルエット表現などで描写抑える）。

——その先の通信設備前で、兵士が無線で話している。

無線兵　「捕虜が自白した。目標５００の潜伏場所を特定」

——場所を伝える通信兵。

本部　「了解（一日中同じ作業をしているので、少しだけうんざりした感じで）」

クリサリス　「ＴＪ-ｃｈｒｙｓａｌｉｓ（クリサリス）６０００、目標５００確保に向かう…」

本部　「槍（スピア）の積み替え完了。艀（はしけ）は、地点Ｂ（ポイントブラボー）を通過」

無線兵　「了解、通信終わり（アウト）」

【アーティストデモゲーム】

——無線終了後、背後から近づくスネーク。ＣＱＣで兵士を羽交い絞め。

——一定の間合いまでスネークが近づくとボタン表示、ボタン表示中入力で成功。成功するまで繰り返し。

——〔Ｒボタン〕スタンロッドで気絶させようと、無線兵に飛び掛かるスネーク。

——〔△ボタン〕スタンロッドをブロックする無線兵。連打で力比べ。

——兵士を羽交い締めにして、のど元にスタンロッドを押しつけるスネーク。

スネーク　「動くな！」

スネーク　「積み荷はどこに向かっている？　中は何だ！」

無線兵　「…山岳のイラス」

スネーク　「そこに何が？」

——屋外で起動音。その隙に逃げようとする無線兵に対して、

——〔Ｒボタン〕スネーク、ＣＱＣで兵士を投げる！

——兵士、棚にぶつかり中のフィルムバッジが散乱する。

――〔Rボタン〕起き上がろうとする兵士にスタンロッド。

――無線兵ののど元のスタンロッドを放電させるスネーク。

――その時、外をクリサリスが通り過ぎる！

スネーク「ん⁉」

――周囲にはフィルムバッジが散らばっている。無線兵の胸にもフィルムバッジ（放射線測定バッジで、核弾頭を扱っているとわかる）。

――バルコニーに出て外を見るスネーク。

――クリサリスが歌を歌いながら北の方角へ飛び去って行く。

――クリサリスが来た方角を見ると、海岸に港があり、トラックが動き出している。

――携帯無線機をとり、音声位相反転装置をつけてミラーにつなぐスネーク（ここで任意無線用通信機を入手。以降リアルタイム任意無線がかけられるようになる）。

――スネークは核の証拠を見つけやや興奮している。

――ミラーとの会話に合わせて、室内の壁に貼ってあった写真（FSLNリーダー、アマンダ、チコ）を表示。

スネーク「こちらスネーク、カズ 聞こえるか」

ミラー「ああ。無線機を入手したのか⁉」

スネーク　「音声位相を反転する回路を取り付けた」
ミラー　「(そいつはいい。) 探知されないように、周波数も定期的に変える事にしよう」
スネーク　「拠点地図も見つけた。物資は湿地帯から西のイラスへ向かっている」
ミラー　「さすがだ、ボス」
スネーク　「(遮るように) カズ。…フィルムバッジがあった。大量にだ」
ミラー　「…フィルムバッジ？　放射線の被曝量を測定する？」
スネーク　「通信兵の服にもな」
スネーク　「通信相手は物資のことを『槍(スピア)』と」
ミラー　「待て、じゃあそこには…」
スネーク　「核だ」
スネーク　「コスタリカに核が運び込まれている」
ミラー　「なんてこった…」

——コスタリカ地図にカメラ寄る。

——コスタリカ地図が全画面アップになって…、

——タイトル表示。

【タイトル】METAL GEAR SOLID PEACE WALKER

――F.O.

――リザルト画面へ。

【発端・資材搬入施設調査／ミッション後強制無線デモ】（ミラー）

――ミラー、スネークが入手した無線に連絡してきている。

――この無線は双方向通信。

ミラー「スネーク、入手した地図は使えそうか？」

スネーク「奴らの各拠点の位置はわかるが、記されてるのは拠点のポイントだけだ。ルートまでは判らない。現地の詳しい情報が欲しい」

ミラー「スネーク、KGBの〝教授〟は、FSLN（サンディニスタ）に協力を取り付けていると言っていた。奴はFSLN（サンディニスタ）の司令官（コマンダンテ）にコンタクトを取れと」

スネーク「FSLN（サンディニスタ）は、バックにKGBがいる事を知っているのか？」

ミラー「いや、彼らは純粋に革命を信じて戦っているはずだ。KGBはあくまで裏支援、彼らに自覚があるかどうかは疑わしい」

スネーク　「それにしても、このコスタリカに核を持ち込むとはな」

ミラー　「ああ、驚きだ。コスタリカはトラテロルコ条約を批准している。日本の非核三原則の概念に倣った、ラテンアメリカの非核化条約だ」

ミラー　「核兵器の実験、使用、輸入、配備等を全面的に禁止する…明るみに出ればラテンアメリカ核兵器禁止機構（OPANAL）が動く。国際問題だ」

スネーク　「そもそもトラテロルコ条約は、キューバ危機への反省から結ばれたものだ。それを、米州機構（OAS）の中心である合衆国（アメリカ）が反故にするとなれば…」

ミラー　「ただでさえ火種の多いこの中南米に、第2・第3のキューバが誕生しかねない。一触即発の状態になるだろう」

スネーク　「核が本当に持ち込まれたのなら、このまま放ってはおけない」

ミラー　「何かの実験か？　アピールか？　あるいは反米勢力への牽制か…」

スネーク　「そうだな。何の為に核を持ち込んだのか？　それが気になる」

ミラー　「どちらにしろ〝教授〟の依頼は『ＣＩＡがコスタリカでしている〝何か〟を阻止する』ことだ。それを調べる必要がある」

スネーク　「まずは準備を整えたい。カズ、そっちの補修状況はどうだ？」

ミラー　「ああ、急ピッチでやってはいる。いまは傷みが酷くて地獄（ヘル）さながらだが、ボス次第で天国（ヘブン）にだって出来る」

ミラー　「誰にも邪魔されない。どの国家にも縛られない避難所（ヘイブン）になる。俺達の本拠地（マザーベース）だ」

ミラー　「ここを足がかりに、あんたへの支援（バックアップ）も、もっと強化出来るってもんだ」

ミラー　「このポンコツを拡大しよう」

【マザーベースチュートリアル】

——ＮＥＸＴミッションへ（サンディニスタ司令官接触）。

第一章

軍隊なき国家

【サンディニスタ司令官接触／ミッション前強制無線デモ】（ミラー）

――ミラー、顔窓表示。

ミラー　「スネーク。あんたが入手したその無線機で、例の少女、パスと連絡が出来るようにしておいた」

スネーク　「彼女は大丈夫なのか？」

ミラー　「あの娘は俺達が心配するほど、柔じゃないよ」

スネーク　「彼女はまだ子供だ…」

ミラー　「だからこそ、有効な情報が得られるかも知れない。それに今回の、真の依頼主は彼女〝平和の使者（ラ・パス）〟だ。…そうだろ？（スネークが許諾した）」

スネーク　「…ああ、わかってる（しぶしぶ）」

ミラー　「繋ぐぞ」

――パス、顔窓表示。

パス　「スネーク…」

スネーク　「君か。どこから通信を？」

パス　「シウダード・コロンの校舎。先生が、落ち着くまで学校にいろって」
スネーク　「先生？　ああ、あいつは…（教師じゃない。思い直して飲み込む）…まあ、その方が安全だ」
パス　「うん…。先生の部屋に無線装置があるから、いつでも連絡できる」
スネーク　「無線装置…、たいした先生だ」
パス　「スネーク、必ず平和を取り戻して。それと…」
スネーク　「ああ、君の友達が見つかったら、連絡する」
パス　「ありがと。（積極性を見せる）スネーク、コスタリカのことなら何でも聞いて。地理や気候、植物とか。歴史や法律も得意」
スネーク　「わかった。何かあったら君に聞こう」
パス　「…あのね」
スネーク　「何だ」
パス　「学校で習ったの。『平和は人間の関係にとって不自然な状態』…」
パス　「『他人との関係は、常に戦争に脅かされている』って」
スネーク　「ああ」
パス　「だから、平和という状態は、自分で創らなければいけない」

パス　「嘆いていても、平和はやってこないし、続かない」
パス　「自分で向かっていかなければダメなの」
スネーク　「平和には犠牲が必要だ。申し訳ないが、俺は平和が何かは解らない。だから平和を感じた事もない。平和に興味を持った事もない」
パス　「スネーク…？（やけに同情がこもっている）」
スネーク　「ああ、…悪かった（子供に大人の理論をぶちまけた）。パス、君の考えは立派だ。それが正しい事を祈るよ」
パス　「そう…、だといいけど」
スネーク　「じゃ、その平和の為に、君に、平和（パス）に協力を頼む」
パス　「ありがとう。いつでも待ってる。じゃあ…」
——ミラー、顔窓表示。
ミラー　「スネーク。あんたの無線機で相手を呼び出す（CALL）事が出来る」
ミラー　「ただし、あんた自身はミッションの最中だ。通信中も警戒を緩めないでくれよ。周囲の状況に注意してくれ」

スネーク「了解」

ミラー「コスタリカについて知りたいことがあったら、パスが応答してくれる」

スネーク「わかった」

ミラー「スネーク、連中の搬送ルートを辿ろう。その先に奴らの本拠地があるはずだ」

スネーク「状況から見て、奴らは核を持ち込んだ可能性が高い」

ミラー「うむ。重要なのは、その槍（スピア）が核であるかどうかを確かめる事。そしてその用途もな」

スネーク「奴らの搬送ルートを追えば、核に辿り着ける」

ミラー「そうだな。まずはＦＳＬＮ（サンディニスタ）の司令官（コマンダンテ）に接触し、その先の現地情報を得よう」

ミラー「しかし、彼らが隠れ家にしている小屋は、既に襲撃を受けて、占拠されているはずだ」

スネーク「無事ならいいが」

ミラー「スネーク、拠点となった小屋に潜入、警備兵を無力化、ＦＳＬＮ（サンディニスタ）の司令官（コマンダンテ）を確保するんだ」

ミラー「警備兵は気絶、睡眠、フルトン回収によっても無力化出来る」

ミラー「どうするかはあんたの判断に任せるよ、ボス」

――章タイトル表示。

【章タイトル】第一章　軍隊なき国家

――ブラックアウト。

――ゲームへ。

――リアルタイム無線入る（P143参照）。

【アマンダ登場／シナリオデモ】

――状況：スネークが沿岸の資材施設で見たクリサリスは通信兵の指示を受けてボート小屋付近へ（数時間前）。

――潜伏していたアマンダ、チコ、二人の父を含む十名ほどのFSLN兵は米兵とクリサリスの襲撃を受けた。

――父を含む数名が付近の森で殺され、アマンダ、チコを含む6名ほどが捕まる。ボート小屋に押し込められる。

――ボート小屋はもともとアマンダたちの隠れ家。スネーク到着現在は米傭兵が彼らを監禁、周囲を巡回している。

――ドンドン壁を叩く音（アマンダたちが監禁された扉を内側から開けようとしている）。

——カメラは小屋の手前あたり、スネークUPフレームイン、小屋を見上げる。
——スネーク後頭部ナメ、小屋の2階を見上げている。扉が見える。

【アマンダ登場／アーティストデモ】

——ハンドガンを構えながら小屋の2階を見上げるスネーク。
——スネーク、扉を開ける（スネーク主観）。
——部屋の隅でアマンダ、チコ、FSLN兵4名が身を寄せて固まっている。
——一斉に威嚇の怒声！

チコ　「（スネークを威嚇するアドリブ、3秒くらい）」
FSLN1　「来るな！」
FSLN2　「誰だ！」
——スネーク、銃を構え直す。
——スネークの迫力に押されてはっと止む怒声。
——FSLNら、UPめ、横パンで面々を見せる。FSLNは口々につぶやく。
FSLN1　「誰だ？」

FSLN2　「エル・チェ？」

FSLN3　「まさか」

FSLN4　「どうする？」

――アマンダは毅然としている。下でチコはスネークをじっと見ている（兵士と言ってもまだ弱小の素人集団、今は捕虜だったため武器もない。民間人に近い反応を示している。物語終盤の彼らの頼もしさとの差を出すためここはやや頼りなげに）。

――スネークUP、銃を向けたまま。

スネーク　「FSLN（サンディニスタ）か？」

スネーク　「人を探している。お前達の司令官（コマンダンテ）」

――ペラっとSE、スネークがかざしたアマンダの父親の写真UP。

――チコUP。

――写真を見てつぶやく。

チコ　「父さん（ミ・ビエホ）…」

アマンダ　「シッ！（言っちゃダメ！）」

——チコからアマンダにパンUP。二人ともスネークを警戒して睨み付けている。
——アマンダは写真を見ると観念して。

アマンダ　「…死んだ」

アマンダ　「父さん（ミ・ビエホ）は殺された」

——スネークが自分で写真を見る手元のUP。
——父親の写真をずらすと下のアマンダの写真が見える。
——アマンダが黄色いスカーフを着けている、写真の娘と確認。
——スネークUP。

スネーク　「娘か？　君が代表者（デレガド）か？」

スネーク　「安心しろ、俺は敵じゃない」

スネーク　「吸うか？　葉巻（キューバ）だ」

アマンダ　「っ…（タバコを欲しがるアドリブ）」

——アマンダUP、葉巻よりは紙巻きが好きだが今はそれでも吸いたい。

チコ　「葉巻（シガー）か…」

——アマンダの代わりにチコが代弁。紙巻きでなくてがっかり。

アマンダ　「葉巻(シガー)でも…なんでも、吸いたい気分なの」

——場所変わって表のボート小屋川辺。

——前場面から10分程度時間経過。

——アマンダが咥えた葉巻のアップ（横位置から）。

アマンダ　「（くわえ煙草で）借りが出来たね」

——スネークの手がＩＮ、葉巻をつける。

アマンダ　「好みは紙巻き(シガレット)なんだけど」

——葉巻、着火すると画面からハケる。

——葉巻の煙をはき出すアマンダ決めアップ。ゲバラ風なポーズ。

【クレジット】アマンダ・バレンシアノ・リブレ　朴　璐美

アマンダ　「どう？（自分がキューバ葉巻なんて少し得意げ）エル・チェみたい」

スネーク　「（アマンダのポーズに軽く笑う）」

アマンダ　「あなたもキューバ人？」
スネーク　「コロンビアの写真家だ。コスタリカの鳥を撮影しに来た」（ザ・ボスの録音テープで
　　ケツァールの声を聴いたから）
アマンダ　「鳥？」
スネーク　「ケツァール（ほかに知らない）」
　　――スネークの持つカメラUP。
アマンダ　「望遠レンズがないけど、撮れるの？」
スネーク　「望遠には頼らない。写真はタイミングだ（よくわかっていない）」
アマンダ　「そう（敵ではないと感じたので深追いをやめる）」
　　――アマンダUP。その絵の画面下から、チコの手が伸びて葉巻をほしがっている。
チコ　「俺にもくれよ！」
アマンダ　「（葉巻をちょっと上げて）話はこれが終わるまでよ（敵が来るから長居は出来ない）」
アマンダ　「（軽く叱るように）チコ」

——葉巻を高く上げて取られないようにするアマンダ。

スネーク　「状況を教えてくれ」

チコ　「ちぇっ！（走り去るアドリブ）」

——引き画。

——チコは他のＦＳＬＮ兵のいる川の方へ向かう（チコの動きで前カットと流れをつなげる）。

——ＦＳＬＮ兵は川辺で水を飲んだり、荷物（背嚢や武器）を用意している。

アマンダ　「このへんは兵士だらけ。市民警備隊じゃない。どうみても雇われ兵ね。世界中の最新装備をジャラジャラさせてる」

スネーク　「開発公社（ＣＯＤＥＳＡ）が雇った警備員と聞いたが？」

アマンダ　「そんなの嘘に決まってる。彼らは…、ＵＣＬＡよ」

スネーク　「ＵＣＬＡ…、ＣＩＡ（ラ・シーア）か」

アマンダ　「町で奴ら（ＣＩＡ）の看板も見かける。ここもチレみたいに掻き回す気だ」

スネーク　「そうだとして、奴らの目的は？」

アマンダ　「あたし達じゃない（自嘲）。奴らの目的は…」

――一階川辺寄り、室内で立って向かい合って話しているスネークとアマンダ。向こう側は川にそのまま抜けている。川の流れをバックに話している。

――アマンダの吐いた煙が空中に広がる。

スネーク「君達をニカラグアに追い返すのが目的では？」

アマンダ「そうは思えない。資材運搬や拠点の数も尋常じゃない」

アマンダ「見た？ バカでかいヘリや戦車まで、まるでダナン。きっと何かあるわ」

※ダナン：ベトナム戦争、テト攻勢の激戦区。警備という度を越えて戦争でも始めそうな様子

スネーク「この辺りにも拠点が？」

アマンダ「吊り橋を渡った北に、工場がある」

スネーク「吊り橋を渡った北の工場」

スネーク「ハーデ川(リオ・デル・ハーデ)で傭兵達が同乗した、大きな輸送用ボートを見なかったか？」

アマンダ「ああ、あの艀(はしけ)なら、もっと上流の…」

アマンダ「山岳(イラス)の方よ」

スネーク「あのボートに何が積まれているか知ってるのか？」

――壁の隙間から除いて、中を探っているFSLN兵。

アマンダ　「あっちの同志（コンパ）を紹介する？　でも山入りは勧めないよ。沢山やられてる」（クリサリスにアブダクトされている）

――FSLN兵、木箱に隠していたM72を取り出す（あとで使用、ミッションクリア時に入手）。

――嬉しそうに両手で掲げる。FSLNは無邪気な若者たち、という印象。

アマンダ　「あいつらはさらった同志（コンパ）から仲間の場所をゲロさせて…殺すんだ、豚みたいに」

アマンダ　「…ここは最後の隠れ家だった。祖国（ニカ）から『平和の楽園コスタリカ』へ追われたあたし達、サンディニスタ（フレンテ）のね」

アマンダ　「でも怪物（モンストルオ）が襲ってきて…」

スネーク　「怪物？」

アマンダ　「それで父さん（ミ・ビエホ）は…（死んだ）」

アマンダ　「父さん（ミ・ビエホ）は、あたし達の希望（エスペランサ）だった」

チコ　「いまは父さん（ミ・ビエホ）に代わって、姉ちゃんがその司令官（コマンダンテス・デラ・レボルシオン）さ」

――苦笑、父の写真を見るアマンダ（スネークから貰った）。

アマンダ「やめて。父さん(ミ・ビエホ)はサンディーノと共に戦った英雄よ。あたしはその娘ってだけ」

アマンダ「指導者(カシーケ)になるには特別な能力が要る。同志(コンパ)を束ねるための偉大な力(英雄度)がね」

スネーク「口を挿むつもりはないが言わせてくれ。英雄も指導者も、自分から名乗るもんじゃない」

スネーク「希望(エスペランサ)を継げば、必ずみんなついてくる」

アマンダ「そう？　信頼はされても、誰もあたしを司令官(コマンダンテ)とは呼ばない」

FSLN1「アマンダ！」

アマンダ「（ため息。ふっ…）ほらね」

——宙を見ると目を見開いて深刻な表情になるチコ。

チコ「（息を飲む）コリブリ‼（が来た！）」（「コリブリ」はチコ達がクリサリスを呼ぶ際の名）

——振り返るアマンダ、咥えていた葉巻が離れる。

——くるくる宙を舞う葉巻。

——その後方にクリサリスの巨体が浮かび上がる。

——スネーク（なんだあれは⁉）のUP。

——葉巻、水面に落ちて火が消える（＝会話は終わり→「これ（葉巻）が終わるまでよ」）。

ＦＳＬＮ１／２／３／４「（ＡＩボスを見た驚愕の息。４人同時）」

――通常スピード。

――クリサリスに発砲するＦＳＬＮ兵。

――声を上げて逃げ惑うＦＳＬＮ。

ＦＳＬＮ１「うわぁ」

ＦＳＬＮ２「逃げろ！」

ＦＳＬＮ３「ひぃぃ！」

ＦＳＬＮ４「散れぇっ！」

ＦＳＬＮ４「散れ、散れーっ！」

――クリサリスからの着弾が水柱を上げる！

――M72（ロケット砲）を持ってクリサリスの正面に立っているアマンダ。

アマンダ「くっ……！（M72を構える）」

――クリサリスが迫る！

――クリサリスＵＰ、マシンガン掃射！

スネーク　「伏せろ！」

――スネーク横からＩＮギリギリでアマンダにタックル。
――二人がはけた直後、着弾、水柱！
――クリサリスの手前、キッドナッパー２機が出現！
――Ｍ72を構えるスネークのＵＰ！

スネーク　「む……！（Ｍ72を構える）」

【照準射撃ゲーム】

――照準の間を行き来するクリサリスが照準に入ったタイミングでボタンを押すと成功。
――ゲームオーバーになることはないが結果はリザルトに影響する。
――クリサリス、キッドナッパー２機が順に襲撃。
――キッドナッパーのシーケンス終了後、クリサリスが出現。
――的は大きく中央で浮いている。当てやすい。プレイヤーの攻撃待ち。

――スネーク、Ｍ72を撃つ！
――Ｍ72の銃弾追跡カメラ！
――クリサリスに接近していくが…、クリサリスはカクっと曲がって無人機特有のかわし方をする。

——引きのアオリで客観的に見せる。

——通過している銃弾、シュッと斜め下に避けるクリサリス。UFOっぽい動き。

——アマンダとスネーク、俯瞰UP。

——砲弾が不自然にかわされた。

スネーク　「馬鹿な！」

アマンダ　「あれは『新しい人間（オンブレ・ヌエボ）』。無人のロボットよ！」

——チコの悲鳴！　画面、チコの方へ流れパン。

——チコがクリサリスからキッドナッパーを撃たれ、宙に飛んでいく！　アブダクト！

チコ　「ぐふぁあ！」

——アマンダとスネーク、俯瞰UPのさらに寄りアングル、二人を手持ち風でパン。

アマンダ　「チコ！」

——アマンダはハンドガンでチコのキッドナッパーを狙う。

——スネークが止める！

スネーク　「あの高さでは死ぬぞ！」

アマンダ　「撃たせろ！」

——チコは空のかなたへ。
——アマンダとスネークUP。
——うなだれるアマンダ。

アマンダ　「拷問されるくらいなら、同志(コンパ)に殺された方が幸せ」

——クリサリスの接近音大きくなる。
——顔を上げて、クリサリスを見上げるスネークとアマンダ。

アマンダ　「ここにいて。命があるうちに、あなたに借りを返す」

——スネークとアマンダをいったん引き離す理由。
——アマンダ、OFF。
——音だけで、アマンダ、ハンドガンでクリサリスを撃ちながら。

アマンダ　「こっちよ！」

——アマンダUP、背後にFSLN。

アマンダ　「（仲間に）チコを追う。勝つぞ（ベンセレーモス）！」

――アマンダ走り去る。

――奥へ飛んでいくクリサリス、パンダウンするとそれを見送っているスネークの背中。

――リザルト画面へ。

【サンディニスタ司令官接触／ミッション後強制無線】（ミラー）

ミラー　「見たか、スネーク！　さっきの巨大兵器っ！（クリサリスのこと）」

スネーク　「あれは何だ、無人兵器らしい」

ミラー　「無人兵器…？　そうか、噂に聞いてはいたが、既に完成していたとは」

スネーク　「一体、ここで何が起きているんだ」

ミラー　「アマンダじゃないが、この兵器群の投入量は尋常じゃない。明らかに過剰だ。核の持ち込みは十中八九、間違いない。…問題は核を何に使うか、だ」

スネーク　「もっと情報が欲しいな。判断材料が少なすぎる」

ミラー　「どうする？　情報源の司令官（コマンダンテ）は死んだ」

スネーク　「いや、娘のアマンダならまだ無事だ」

ミラー　「なるほど、彼女達を追うか…」

ミラー　「スネーク、次の拠点に向かおう。アマンダが無事なら、もう一度、接触出来るはずだ」

スネーク　「了解」

——NEXTミッションへ（アマンダ追跡）。

【アマンダ追跡／ミッション前強制無線】（ミラー）

ミラー　「スネーク、アマンダを追って次の拠点へ向かうんだ」

ミラー　「彼女と、FSLN（サンディニスタ）のメンバーが去った方角は次の拠点、資材置き場の場所と一致する」

ミラー　「アマンダと接触しよう」

——ゲームへ。

——リアルタイム無線（P146参照）。

【中ボス装甲車登場／シナリオデモ】

バナナ園跡地

——M16を装備したスネーク、旧バナナ工場から警戒して潜入。
——装甲車が近づいてくる轟音が聞こえる。
——強化兵（随伴兵）を連れた中ボス（装甲車）が登場。
——真っ直ぐ近づいて来る装甲車。
——停止すると後部ハッチから、さらに強化兵が降りる。
——ミラー顔窓表示。

ミラー「回避出来そうにない。スネーク、やれるか？」

——中ボス戦タイトル表示。

【LAV‐typeG　強襲装甲車両 G型】

——スネーク、M16を構える。
——ホワイトアウト。
——リザルト画面へ。

【アマンダ追跡／ミッション後強制無線】（ミラー）

ミラー　「ボス、聞いてくれ。あんたのおかげで、俺達もかなりの大所帯になってきた」

ミラー　「だがこうなってくると、糧食のことも真剣に考えないとまずい」

スネーク　「そうだな。洋上プラントだけに、備蓄も欠かせない」

ミラー　「日本のことわざにもある。「腹が減っては戦はできん」。第二次大戦で日本はそのことを学んだ」

スネーク　「食糧の供給は兵站の基本なんだが…」

ミラー　「そんなわけで、『糧食班』というのを作った。糧食班の人数と能力によって、マザーベースの食糧供給率が変化する」

ミラー　「食糧が充分に供給されないと、兵士の士気が下がるし、あまり腹を減らした兵士は逃げ出すぞ」

ミラー　「早速だが、糧食班に人員を配置してくれ」

スネーク　「了解」

――NEXTミッションへ（対装甲車戦：LAV－typeG）。

【対装甲車戦：ＬＡＶ-ｔｙｐｅＧ／ミッション前強制無線】（ミラー）

ミラー　「スネーク！　装甲車部隊だ。装甲車を破壊するか、全兵士を無力化するしかない。
排除するんだ！」

――ゲームへ。

【アマンダ救出前／シナリオデモ】

――クリア後、上空を一機のキッドナッパーが飛んで行く。

――その方向にクリサリス。

――Ｍ１６を構えたスネークも、クリサリスの方向に向かって歩き出す。

――F.O.

【アマンダ救出前／アーティストデモ】

――ハンドガンを構えるスネーク。

――見上げると、上空にキッドナッパーが現れる。

――資材中継地に隣接する森の中へ、ロープ付きのマジックハンドを撃ち込むキッドナッパー。

――背中に撃ち込まれ、上昇するアマンダ。

アマンダ　「はうっ」

――もがいてもどうにもならない。背中を釣られている！
――ナイフで背中のワイヤーを切って地面に激突！
――脚を骨折！

アマンダ　「ぐふっ！」

――再び、キッドナッパーがマジックハンドを撃ち込む。
――足首に命中！　逆さづりに引き上げられるアマンダ。

スネーク　「アマンダ！」
アマンダ　「（スネークを見ると）撃って！」
スネーク　「落ちるぞ！」
アマンダ　「あいつ（チコリブリ）を撃て！」

【照準タイミングゲーム】

――どんどん上昇してゆくアマンダ、クリサリスが接近してくる。

――アマンダ、ワイヤーをナイフで切ろうとするが、身体を曲げても届かない！
――画面にクリサリス、キッドナッパー、アマンダ。それぞれに照準可能。時間切れまでループ。

※クリサリスを撃った場合：クリサリスは、退避行動に移る。クリサリスなしの照準タイミングゲームに戻る。

※キッドナッパーを撃った場合：正解。アマンダは低めの高度から落ちる。

アマンダ　「っ…、っ…あぁっ…！（落下アドリブ）」
――地面に激突！

アマンダ　「ぐふっ！」
――全身打撲と骨折！
――フルトン回収後治療が早く終了。

※アマンダを狙った場合：アマンダの近くを銃弾がかすめる。

アマンダ　「どこを狙ってる！　あいつ（チコリブリ）を撃て！」
――ポイント減点。照準タイミングゲームに戻る。

※時間切れの場合：アマンダ、自決覚悟でハンドガンでキッドナッパーを撃って落下する。

アマンダ　「拷問で仲間を売るくらいなら、自分で命を絶つ」

——高い位置から木の中へ落下するアマンダ。

スネーク　「アマンダ！」

——全身打撲と骨折！　フルトン回収後も回復が遅い。

【アマンダ救出後／アーティストデモ】

——状況：チコを追って北上していたアマンダは一人ずつ仲間を奪われ、バナナ園跡地でクリサリスに襲われた。

——スネークの補佐もあってアブダクトは免れたが重傷を負っている。

——駆け寄るスネークからパンダウンすると画面手前にアマンダ。

スネーク　「（駆け寄って）アマンダ！」

アマンダ　「チコ…」

——震える手でポケットに手を伸ばそうとするが力が入らないアマンダ。

——苦痛に耐えている。

スネーク「どうした？」

アマンダ「巻ける？」

スネーク「ん？」

アマンダ「（ポケットに）煙草（シガレット）」

——アマンダのポケットからシガレットケース（紙巻き）を取り出すスネーク。

スネーク「ああ」

——スネーク、ケースをぱかっと開ける。

アマンダ「（急がないと）チコが…」

——痛みにうめき声を上げるアマンダ。

スネーク「動くな」

アマンダ「あの子を、…また子供扱いして、それで喧嘩を」

スネーク「（…）」

アマンダ「チコには…、知られたくなかったから。だからみんなで秘密にしてた」

アマンダ「あたし達は…ソモサの国家警備隊(グアルディア)に祖国(ニカラグア)を追われ…、国境(サン・ファン河)を越えて…ここまで流れてきた。…それでも、何とか抵抗を続けることが出来たのは…（意識が遠くなっていく）」

スネーク「アマンダ？」

アマンダ「（息を吸って）そこの工場を（見た？）…？」

スネーク「あのバナナ工場…」

アマンダ「それは表向き。本当は麻薬を精製していた工場よ。ＫＧＢの支援を受けて、その運営を任されてた。その収入で食べ物や武器を…」

【探査モード】アマンダを探査モードで見ることが出来る。レントゲン風で負傷の度合がわかる。

アマンダ「ええ、父さん(ミ・ビエホ)は黙ってたけど…、みんな知ってたこと…、チコ以外はね」

アマンダ「それもこれも…、同志(コンパ)や武器を集めて、みんなをひとつにまとめて…」

アマンダ「祖国(ニカ)を…、自分達の手で再建するためだった。…麻薬に手を染めてまで、がんばって来たのに…」

アマンダ「でも、もうだめ。あたし達は指導者（カシーケ）である、父さんを失った…」
アマンダ「あたしなんかに代わりは務まらない…」
アマンダ「工場さえも奴らに奪われ…、このままじゃ、バラバラに…、革命どころの話じゃない…」
スネーク「ほら…、巻けたぞ」
――アマンダにタバコを咥えさせるスネーク。
アマンダ「あんたは？（何をしている？）…積み荷を追っているの？」
スネーク「ああ」
アマンダ「相当、大切なものが入ってるようね？」
スネーク「全てを破滅に追いやるものだ。恐らく…核兵器」
アマンダ「（ハッとして）核兵器!?」
アマンダ「大変！　グズグズしてはいられない。イラスに行きましょう！」
アマンダ「そこが、奴らの搬送ルートなの。たぶん、チコや同志達（コンバ）もそこに囚われてるはず…」
アマンダ「チコは喧嘩すると、いつも部隊を抜けて、一人で何処かへ行ってしまうの…。だ

から奴らの拠点は、チコが一番詳しい。チコが…」

スネーク　「(革命家を装っていても) やはり弟のチコが気になるんだな」

アマンダ　「(見破られた) だから、あたしはリーダーには向いてないの…」

スネーク　「いいだろう」

スネーク　「少し、寄り道になるが、その場所を教えてくれ (目的地の確認)」

アマンダ　「山岳(イラス)に収容施設があるの…、たぶんチコも」

スネーク　「チコは山岳(イラス)の収容施設か」

アマンダ　「お願いがあるの…。チコを、チコを助けられなかった時は、チコの苦痛を…、屈辱を…、やわらげてあげて…」

アマンダ　「苦痛に負けて、仲間を売るようなことになったら…、お願い…、よ」

アマンダ　「(意識が遠い) …彼の名誉だけは、守って…」

スネーク　「それは約束出来ない」

アマンダ　「(意識が遠い) …どうして?」

スネーク　「俺達は祖国を棄てた。それでも、生きてる」

スネーク　「それでも、戦い続ける」

スネーク「生きる理由は、他にいくらでもある」

――タバコを反射的に吸う、アマンダ。少し、意識が戻る。

アマンダ「ああ、少しは生き返った…」

スネーク「アマンダ。身体が回復するまで、俺の部隊に来い」

アマンダ「…あんたの部隊？」

アマンダ「あんた、誰なの？　何故、ここに現れたの？」

スネーク「俺は…、スネーク。蛇(セルピエンテ)だ」

アマンダ「蛇？」

――煙を吸うアマンダ、痛みに顔をしかめる。

アマンダ「（また意識が遠くなる。煙草がフラフラと震え出す。寝言のように）もしかして…、あんたは偉大な指導者(カシーケ)。あたし達を…、導いて…、『自由な祖国か死か(パトリア・リブレ・オ・モリール)』」

――意識を失うアマンダUP。タバコを落とす。

――スネークの手が首（頸動脈）を触る、脈を確かめて離す。

――立ち上がるスネーク。

――引き、立ち上がっているスネーク、無線（耳）に手を当てている。

スネーク「カズ、聞こえるか」
ミラー「こちらマザーベース」
スネーク「一人回収を頼む。怪我人だ」
ミラー「了解」
スネーク「それからカズ、陸揚げされた物資はやはり山岳（イラス）の方だ」
ミラー「つまり、核もそこに運び込まれている？」
スネーク「そうだ、間違いない。急ぐぞ」

――ブラックアウト。
――リザルト画面へ。

【対装甲車戦：LAV-typeG／ミッション後強制無線デモ】（ミラー）

ミラー「スネーク、アマンダがマザーベース（プラント）に到着した」
アマンダ「（負傷でやや弱っている）スネーク」

スネーク　「アマンダ、具合はどうだ?」

アマンダ　「(節々痛そうだが威勢は良い)生まれて初めてヘリに乗ったけど、おかげで大嫌いになれそう」

ミラー　「聞いての通り元気だ」

ミラー　「アマンダ専用の周波数を用意した。必要なときは、彼女に無線(CALL)するんだ」

アマンダ　「米拠点と傭兵部隊、それからFSLN(フレンテ)のことなら何だって聞いて」

アマンダ　「お願い。同志(コンパ)とチコを」

スネーク　「わかった」

アマンダ　「よろしく、あんた(VOS)」

ミラー　「スネーク、アマンダの容体はマザーベースの『診療所』で確認出来る」

スネーク　「わかった」

ミラー　「それから、回収した戦闘捕虜を、人員配置することを忘れないでくれ」

スネーク　「わかった」

ミラー　「組織を創るのは『誰に何をさせるか』。これがマザーの成長方針を決める」

スネーク　「わかった」

ミラー　「ボスの重要な務めの一つだ」
スネーク　「わかってる」
ミラー　「ボス、もう一点報告させてくれ」
スネーク　「まだ何かあるのか…」
ミラー　「アマンダの居る『診療所』だが、他にも怪我人や病人が出たら、収容する予定だ」
ミラー　「とはいえ、適切な処置をしなければ、治る怪我も治らない」
スネーク　「ああ」
ミラー　「そこで怪我人や病人の手当のため、『医療班』を作ろうと思う」
ミラー　「医療班の人数と能力次第で、怪我人や病気の回復を早めることもできる」
ミラー　「彼らには、日頃から兵士達の健康管理も担当してもらう予定だ」
スネーク　「そうだな。病気になってから困るより、予防が大切だ」
ミラー　「その通りだ。ボス、あんたも〝手洗い・うがい〟を忘れないでくれよ」
スネーク　「そんな余裕がありゃいいんだがな…」

――NEXTミッションへ（チコ救出）。

【チコ救出／ミッション前強制無線デモ】（ミラー／アマンダ）

ミラー　「スネーク、搬送中の核は湿地帯を抜けた。イラス山岳地帯に到達したようだ」

ミラー　「だが、こちらはガイド不在だ。山岳地帯での追跡はより難しくなる」

ミラー　「そこで拠点のひとつ、捕虜収容所に潜入してくれ」

スネーク　「アマンダの弟、チコが無事ならいいが…」

ミラー　「そうだな。他にも捕らわれているFSLN（サンディニスタ）がいるかもしれない」

ミラー　「彼らをマザーベースに収容するには、『フルトン回収システム』を使ってくれ」

ミラー　「スネークは体験済みだと思うが、人体に影響はない」

ミラー　「一人一人、時間をかけて説得している余裕はないからな」

アマンダ　「スネーク、ちょっといい？」

スネーク　「アマンダ？」

アマンダ　「CIAの連中、村の家をいくつか接収して収容所にしてるの。そのどこかにチコがいるはず」

スネーク　「村の家をか…。だが、どうやって見分ける」

アマンダ　「接収された家は、監視用にドアが付け替えられてる。青いドアよ。覗き窓が付い

てる。そこから中を確かめて」

スネーク　「わかった。青いドアだな」

ミラー　「物資搬入ルートの最終拠点は近い。頼んだぞ、スネーク」

——ゲームへ。

【収容所窓覗き／シナリオデモ】

——青いドア覗き窓から中の様子を窺うスネーク。

※不正解バリエーション

①誰もいない

スネーク　「誰もいない」

スネーク　「いない」

スネーク　「いないか」

スネーク　「ちっ…だめか」

②単に覗いた時の台詞

スネーク　「ふぅん」

スネーク　「ん…」

スネーク　「んん…」

スネーク　「おぉ…」

③こちらに背を向けて小便中の兵士（前フリ）

兵士　「はふーぅ（心地よい脱力感）」

④便器に座って大便中の兵士

兵士　「誰だ！」

⑤シャワー中（着替え中？）の美女（気力回復？）

スネーク　「む…（小動揺）」

スネーク　「…んん？」

スネーク　「…おお？」

⑥実は女装趣味の敵兵？

兵士　「どなた⁉」

⑦寝ている兵士

兵士　「ｚｚｚ…（イビキ）」

※正解

スネーク　「チコ…？　チコか」

【チコ発見／アーティストデモ】

——村の北端の小屋、室内。
——ドアノブ部を壊すＳＥ。
——扉が開くとスネークが入ってくる。手にハンドガンを構えている。
——部屋の隅にチコがいる。
——部屋の外は敵兵が巡回。二人ともやや小声。

チコ　「だ、誰…？」（弱々しく）

——スネークは銃を下げる。

——チコ、顔が腫れ上がっている（尋問の跡）。

スネーク 「チコ？　…俺だ」

——チコ、相手が拷問しに来た兵士ではなく、ほっとした様子。

【クレジット】チコ　井上喜久子

チコ 「あんたは…、あの時の、（思い出し）カメラマン？」

スネーク 「そうだ、戦場カメラマン」

チコ 「あれ？　鳥を撮りに来たんじゃなかったっけ？」

スネーク 「戦場で鳥を撮るカメラマンだ」

——カメラをチラリとチコに見せる。

——チコ、スネークのカメラを見て、

チコ 「それ、もしかして、チェ？」（と好意を抱く）

チコ 「ちょっと、いい⁉」

——いきなりカメラを奪い取るチコ。

チコ　「やっぱチェが使ってたカメラだ！」（興奮している）

――スネーク、カメラを奪い返し、ポケットから写真（３枚）を取り出す。

スネーク　「それはやれない。これで勘弁してくれ」

チコ　「ん？　その写真？」

――写真のアップ（画面ＩＮ）。ぺらっとＳＥ。

――写真、チコ一人の写真をめくるとアマンダ一人の写真。

――チコのアップ、手前に写真を持つ手がＩＮ。

チコ　「あ…」

――アマンダのＵＰの写真。

チコ　「ああ、そうだ」（思い出す）

スネーク　「（先にスネークが答える）アマンダなら、無事だ」

チコ　「ほんと？」

――二人のアップ、切り返し。

スネーク　「ああ、俺のところで怪我の治療をしている」

チコ　「怪我したの⁉」（外には敵がいるのに声が大きい）

スネーク　「…心配はいらない。脚を折っただけだ」

——チコ、やや沈んでいる。

チコ　「…煙草（シガレット）ある？」

——スネーク、葉巻を渡す。

チコ　「葉巻（シガー）か…」

——チコはマッチを取り出して火を点ける。

チコ　「あっ（タバコを取り上げられた声）」

スネーク　「子供は吸っちゃいけない」

——と葉巻を奪い、チコがつけた葉巻をうまそうに吸う。

——チコは落胆する。

スネーク「（煙を吐いて）チコ、奴らの積み荷がどこへ運ばれたか知らないか？」

チコ「積み荷って…、どんな？」

スネーク「…質問を変えよう。奴らはいつもどうやって、積み荷を海岸からここまで運び上げてるんだ？」

——引き画、部屋の隅で話す二人。スネークはワンニー。

——二人の絵に重ねて、ルートをラインで辿っていく。

チコ「うん、それならわかる」

チコ「（流暢に）まずは港についた積み荷は、艀（はしけ）を使って湿地帯をのぼるんだ」

チコ「その後、バナナ園の先でジャングルトレインに積みかえられて、そこからは列車での移動になる」

——地図、列車の線路を辿る。

チコ「列車はここまで。コーヒー園の先にある、列車車庫（ターミナル）まで来ると、今度はトラックに積み替えられて、山頂に向かうトンネルに消える」

スネーク「トンネルに消える？」

スネーク　「チコ、このトンネルの先に何があるんだ?」

チコ　「誰も知らない。山に近づいた同志（コンパ）はいないから。…あそこには守り神がいるんだ」

——二人のアップ、切り返し。

スネーク　「守り神?」

チコ　「巨大なばけもの」

チコ　「(ニヤリ。UMAマニアなので楽しげ)…バシリスコさ」

——スネーク、煙を吐き出す。

スネーク　「蛇の王（バシリスコ）…?」

チコ　「見たんだ。あのあたりでたまたま野宿した時。明け方、うとうとしてたら、大きな物音がして…」

チコ　「目をあけたら30バーラ（25m）はある影が目の前を」

チコ　「…歩いてたんだ。大木みたいな足で」

スネーク　「それはどこで?」

チコ　「トンネル手前の列車車庫（ターミナル）。でも見たのはその一回だけ」

スネーク　「何故そんなところに？」
チコ　「姉ちゃん達と喧嘩して」
スネーク　「それで〝たまたま野宿〟か？」

——チコ、ごまかすように。

チコ　「そうだ！　やつらの列車はいまごろ、バシリスコがいたあたりに着いてるはずだ」
スネーク　「ここからは遠いのか？」
チコ　「遠くはない。コーヒー園をぬけて北に行ったところ」
チコ　「…何を追ってるの？」
スネーク　「〝世界の均衡(バランス)を危うく保っているもの〟、あるいは〝世界を危うく滅ぼすもの〟」

——困惑するチコ。

チコ　「？　(困惑した時に漏れる息)」
スネーク　「このあたりは奴らに占拠される以前から、麻薬工場だったと聞いている。お前、それを知ってたんだろ？」

——顔を隠すチコ。

チコ　「（漏れる息）」

スネーク　「いいさ、革命には金がいる。だが、子供のお前は許せなかった」

——スネークをにらみつけるチコ。

チコ　「そうだよ！　奴らが運搬に使ってるルートはもともと父さん達（ミ・ビエホ）が麻薬を運び出すために利用してたものだ」

チコ　「麻薬を合衆国（アメリカ）に売り捌（さば）いて、それを軍資金に使ってたんだ。僕にはうまく内緒にしてるつもりだったみたいだけど」

スネーク　「さっきの野宿の件はそういう事か？」

チコ　「工場に忍び込んで何度か…、火をつけようとした」

——涙を流すチコ。

チコ　「…みんなで僕を子供扱いする。それが耐えられなかった。もう12（歳）なのに！」

スネーク　「でも、結局は出来なかった…？」

――涙を流すチコ。

スネーク　「チコ、大人になるという事は、自分で生き方を決める事だ」

スネーク　「正しい事を貫くためには、親や家族、故郷を棄てなければならない事もある」

チコ　「でも、もう父さん（ミ・ビエホ）は…」

――地面にくずおれるチコ。号泣。

チコ　「父さん（ミ・ビエホ）」

スネーク　「…写真、見てみろ」

――チコ、写真を捲る。

――アマンダの下にチコの写真、その下にもう一枚の写真が。

――写真のアップ（画面ＩＮ）。ぺらっとＳＥ。

――リブレ一家集合写真。

――チコ、アマンダ、父（コマンダンテ・リブレ）の家族の集合写真。並んで、明るく笑う３人。

チコ　「父さん（ミ・ビエホ）…」

スネーク　「想い出だけは棄てるな。しまっておけ」

――立ち上がるスネーク。

スネーク「チコ、ここを出たいか？」

チコ「（そりゃ）出たいさ」

スネーク「俺達のところに来い。お前の姉さんもいる」

チコ「帰れない…もう、みんな(フレンテ)のところには…」

――よく見るとチコは血だらけ。尋問の痕を察するスネーク。

スネーク「…仲間の居場所を漏らしたのか？」

――下を向いて突然、押し黙る。

スネーク「そうか…」

――再び泣き出すチコ。

スネーク「恥じることはない。誰も痛みには逆らえない」

――チコ、しゃくりあげて泣く。

チコ　「…死にたい」
スネーク　「そうか、じゃあ楽にしてやろう」
——ハンドガン（サプレッサー付き）をチコに向けるスネーク。
——ベース絵切り替え、銃を突きつけるミドルショット。
——チコを小画面で挿入。
——チコ、顔を上げてビックリする。
スネーク　「さあ、自分を悔いろ」
——目を閉じるチコ。
スネーク　「よく狙え。お前は一人の男を、殺すんだ」（ゲバラの最後の言葉と言われている）
——スネーク、トリガーを引く。プシュッ（サプレッサー）！
——目を開けるチコ。
スネーク　「弾丸（タマ）を無駄にしたが、命は無駄にするな」
——チコの握るチコ自身（一人で写っている）の写真に穴が開いている（胸のあたり）。

スネーク　「いいかチコ。お前は、ここで死んだ。わかるな」
スネーク　「お前は、『新しい人間』、オンブレ・ヌエボ（hombre nuevo）になった。その新しい命を、俺にくれ」
——銃をしまい、右手を差し出すスネーク。
スネーク　「共に戦おう。〝小さな戦士〟お前のデカさを見せてみろ」
——また泣き出すチコ。
スネーク　「涙が枯れたら、約束して欲しい」
スネーク　「デカくなるまで、煙草は吸うな」
——チコ、ポカンとしている。
スネーク　「それと、英雄の現実は、伝説ほど格好良くはない」
——チコに笑顔が戻る。スネークの手を握る。
チコ　「わかったよ、ボス」

スネーク　「スネークでいい」

——チコの背中にフルトン回収用のバルーンを装着するスネーク（小画面）。
——チコ、小画面に現れる。

チコ　「何これ？」

——チコの顔窓（小画面）、ピュッと上へ。

チコ　「うわーーーっ」

——ブラックアウト。
——リザルト画面へ。

【チコ救出／ミッション後強制無線デモ】（ミラー／チコ）

ミラー　「スネーク、チコが到着した」

——顔窓切り替え。

チコ　「スネーク！」

スネーク　「チコ、着いたか」

チコ　「『着いたか』じゃねえよ。なんだいこれっ？」

チコ　「『新しい命を俺にくれ』って言いながら、殺す気かよ!?」

スネーク　「お気に召さなかったか？」

チコ　「なんだよ、あの人さらい風船！」

チコ　「これじゃコリブリと変わんねぇじゃねえか！」

スネーク　「（いじわる）いい眺めだったろう、チコ。それとも高いところは駄目か」

チコ　「そうじゃなくて、事前に説明くらいして欲しかった」

スネーク　「説明したら、自分から進んで飛んだか？」

チコ　「……！（絶句）」

――顔窓切り替え。

アマンダ　「スネーク。あたし達を助けてくれて、ありがとう」

スネーク　「ひとつ進言したいんだが、アマンダ」

アマンダ　「何？」

スネーク　「チコをもう子供扱いするな」

アマンダ　「ええ、そうね…。わかってるわ。わかってるつもり」

スネーク　「アマンダ、脚が治れば戻るんだろう？」

アマンダ　「勿論よ…。あたし達（チコと私）にはやることがある」

スネーク　「『あたし達』か…」

スネーク　「それは、チコの将来をちゃんと考えた上で言っているんだな？」

アマンダ　「どういう事？　あたし達は父の遺志を継いで革命を成功させる」

スネーク　「革命だろうが、何だろうが、銃を手にひとたび暴力に訴えれば、いずれは皆地獄に堕ちる」

スネーク　「その覚悟はあるのか？」

アマンダ　「覚悟ならある。祖国(ニカ)を捨てるくらいなら、地獄に堕ちた方がいい」

スネーク　「そうか…。なら、チコを弟としてではなく、ひとりの戦士として扱うことだ」

アマンダ　「ええ、そうね…」

スネーク　「ようこそ、地獄(アウター・ヘブン)へ」

——顔窓切り替え。

チコ　「スネーク、ちょっと頼みがあるんだ」
スネーク　「何だ」
チコ　「捕まったFSLN（フレンテ）がいたら、助けて欲しいんだ。その…」
スネーク　「喋ってしまった罪滅ぼしか？」
チコ　「それだけじゃない。同志（コンバ）なんだ」
スネーク　「わかった。だが、奴らの積み荷を追うのが先決だ」
チコ　「何でも協力するよ」
チコ　「そのあたりのことでわからないことがあったら、無線で呼んで。それから…」
スネーク　「ん？」（まだ何かあるのか）
チコ　「見たことない生き物がいたら、知らせてくれよ」
スネーク　「見たことない？　お前が言っていた〝バシリスコ〟か？」
チコ　「『UMA（ユーマ）』だよ」
スネーク　「『UMA（ユーマ）』？」
チコ　「生き残りの恐竜とか、珍しい怪物（モンスター）のことさ。いつか俺、狩人（ハンター）になりたいんだ」

スネーク　「そうか。（温かく）わかった」
チコ　「詳しく聞きたかったら、また教えるよ」
スネーク　「ああ。よろしくな、チコ」

――顔窓切り替え。

ミラー　「よし、スネーク。敵の資材は次の拠点、列車車庫（ターミナル）に向かっている」
スネーク　「チコはその先には誰も踏み込んだことがないと」
ミラー　「トンネルの向こうは恐らく奴らの本拠地だ」
ミラー　「トンネルの手前で食い止めないと〝槍（スピア）〟は敵の手に落ちる」
ミラー　「なんとしてもここで阻止するんだ。先を急ごう」
ミラー　「ボス！　ひとつアイデアがあるんだ。聞いてくれ」
スネーク　「今度はなんだ？　タブロイド紙に広告を出す気はないぞ」
ミラー　「そんな話じゃない。せっかくマザーベースも人数が増えたことだし、『諜報班』を作ろうと思うんだ」
ミラー　「諜報員をコスタリカ各地に送り込んでおけば、事前に現地の情報が得られる。こ

スネーク　れから、どこに行くことになっても困らないはずだ」
ミラー　「悪くないアイデアだ」
ミラー　「諜報班には、索敵用の装備品なども開発してもらおうと思う」
ミラー　「物資を搬送したり、マザーベースからの攻撃支援を誘導させたりもできるはずだ」
ミラー　「CO-OP相手にアイテムを送りたければ、メニューから『DELIVERY（デリバリー）』を選んでみてくれ」

——NEXTミッションへ（ジャングルトレイン追跡）。

【ジャングルトレイン追跡／ミッション前強制無線デモ】（ミラー）

ミラー　「スネーク、チコの情報によれば、積み荷の核物資は、イラス東部の山麓の列車車庫（ターミナル）で、列車からトラックに積み替えられるようだ」
ミラー　「この列車車庫（ターミナル）で搬送を阻止しなければ危険だ。急いでくれ、スネーク！」

——ゲームへ。

——リアルタイム無線（P153参照）。

【列車阻止戦前／シナリオデモ】列車車庫

——状況：線路沿いに資材搬入ルートの中継地点として使われている施設。地震で断線して以来、一般使用はされていない。それを利用して米傭兵部隊が貨物運搬に使用している。
——もともとは列車車庫として使われていた場所を中継倉庫として使用している。
——ここでジャングルトレインからトラックに荷を積み替えて基地へ輸送されているという設定。
——線路は行き止まりで、過去の地震で断絶している。
——断絶する前から道路（トラック、トレーラーが通れる、２車線ほど）が延びており、その先はトンネル。
——恐竜のような巨大な足跡が点在（ピースウォーカー歩行実験で使われていた）。
——資材輸送に使われていた列車が停留している。
——あの列車に核物資が！
——だが列車の周囲に米傭兵部隊が現れる！
——Ｍ１６を構えるスネーク！
——ホワイトアウト。
——ゲームへ。

【中ボス戦車戦前／シナリオデモ】

――敵兵を全員倒すか眠らせると発生。
――列車の積み荷を確認しようとするスネーク。
――列車に近づくとエンジン音。
――丁度トラックが走り去る瞬間だった。
――ミラー顔窓表示。

ミラー「積み荷を確認するんだ！」

――列車の扉を開けるスネーク。列車の中は空。
――反対側の扉も開いており、核弾頭が積まれたトラックが去っていくのが見える。

スネーク「核弾頭が！」

――トラックにズーム、ナンバープレートを確認！
――追おうとするスネーク、背後からキャタピラ走行音。
――中ボス戦車の砲身がスネークの方へ向いてくる。
――慌ててかわすスネーク。
――戦車発砲、列車が吹っ飛び（横転）、奥のトンネル入り口を列車と瓦礫で埋める。
――体勢を立て直すスネーク、中ボス戦車戦へ。

——中ボス名表示。

【T-72U　第2世代主力戦車】

——M16を構えるスネーク。
——ホワイトアウト。
——リザルト画面。
——NEXTミッションへ（対戦車戦T-72U）。

【対戦車戦T-72U／ミッション前強制無線デモ】（ミラー）

ミラー「スネーク！　敵戦車部隊だ。兵士を無力化するか、戦車を破壊するしかない。頼む、スネーク！」

——ゲームへ。
——戦車を破壊するか、敵兵をすべて無力化すればクリア。

【対戦車戦T‐72U／ミッション後強制無線デモ】（ミラー／チコ）

――確かに核弾頭が運ばれていた！
――列車車庫から山岳部へ通じる進路へ向かいたいがトンネルからのルートは塞がってしまった。
――トンネルの先は山岳地帯（火口）。

ミラー　「（緊迫）スネーク。トラックはトンネルの先の山道へ向かった」
スネーク　「（やや落胆）やはり積み荷は核弾頭だった」
ミラー　「…どうする？　その先は奴らの本拠地だ（危険）」
スネーク　「早く追わないと」
ミラー　「だが…」
スネーク　「カズ！　急がないと手遅れになる」
ミラー　「（ため息）わかった。あんたにとっては、仕事（ビジネス）も危険（リスク）も関係ないんだな」
スネーク　「どうやって山に入る？　トンネルは見ての通りだ」
ミラー　「ああ。戦車の砲撃でトンネルは完全に塞がれてしまった…」
スネーク　「他にルートはないのか？」
ミラー　「よし、このあたりの地理に詳しい奴に替わろう」

――顔窓切り替え。

チコ　「スネーク。山に入るルートだね」
スネーク　「わかるか?」
チコ　「ええと…。俺がいた収容所、覚えてる?」
スネーク　「あの村だな」
チコ　「そう、いったん村に戻って北の方に抜けると、山道と合流する橋がある」
チコ　「渓谷を横断してるんだ。その橋を使えばたぶん…」
チコ　「…だけど、ちょっと問題がある」
チコ　「村から北はバリケードで塞がってるんだ。壊すしかないかも…」
スネーク　「わかった」
チコ　「スネーク、イラスの山腹は、奴らの本拠地に間違いない。もしかしたら、俺が見た…」
スネーク　「〝バシリスコ〟か?」
チコ　「…やっぱり、信じてないんだね」
スネーク　「いや、これからわかる」

——顔窓切り替え。

ミラー　「スネーク、イラスには複数の火口湖がある」

ミラー　「前にオドゥベル国家企業体制の一環で、これを使った揚水発電所を建造する計画があったらしい」

ミラー　「計画は中止になったが、湖の下にはちょっとした穴が開いたままだ」

スネーク　「つまり？」

ミラー　「衛星写真を見たが、外には人工物が見あたらない」

ミラー　「そうなると、山の内側を施設に利用してる可能性が高い。単なる爆薬保管庫(イグルー)か、何かの研究施設か」

スネーク　「そんな場所に核弾頭を運び込んでどうするつもりだ？」

ミラー　「スネーク、まずは村の北にあるバリケードだ。荒っぽいが爆破するしかなさそうだ」

——ＮＥＸＴミッションへ（バリケード破壊）。

【バリケード破壊／ミッション前強制無線デモ】（ミラー）

※C4の開発が未着手の場合

ミラー 「バリケードを爆破できそうなものはあるか？」

スネーク 「いや…。どんなバリケードかにもよるが、強力な爆薬が必要だろうな。マザーベースでどうにかならないか？」

ミラー 「研究開発班にC4を作らせるのはどうだ？」

スネーク 「人手が足りないようならどこかで集めてくる必要があるだろうが…」

ミラー 「まずはマザーベースの状況を確認してみてくれ、スネーク」

※C4の開発に着手しているが未完成の場合

ミラー 「スネーク、バリケードを壊すのに、現在開発中の『C4爆弾』が使えそうだ。完成までもう少し待ってくれ」

スネーク 「わかった」

ミラー 「おっと。GMPが足りないと、開発はストップしちまう。そうなったら『実戦部隊』の人数を増やす必要があるからな」

スネーク 「気をつけよう」

※C4が既に開発、完成している場合

ミラー　「スネーク、バリケードを壊す爆薬、C4でいけそうだ。開発も完了している。『C4爆弾』を持っていってくれ」

——ゲームへ。

——リアルタイム無線（P157参照）。

【バリケード破壊／ミッション後強制無線デモ】（ミラー）

ミラー　「スネーク！　聞こえるか、スネーク」

スネーク　「どうした」

ミラー　「アマンダに何とか言ってくれ」

ミラー　「何があった？」

ミラー　「まだ怪我が完治していないってのに、もう医務室を出て戦うってんだよ」

ミラー　「あんな松葉杖姿で現場に出るなんて自殺行為だ。スネーク、あいつを止めてやってくれ」

スネーク「アマンダはそこにいるのか」
ミラー「いや、医務室だ。『どうしても出る』って息巻いて、医療スタッフの手を焼かせている」
スネーク「出してやれ」
ミラー「何だって⁉」
スネーク「アマンダを医務室から出してやれ」
ミラー「おいスネーク、冗談はよしてくれ」
スネーク「俺は真面目だ。アマンダを出してやれ」
ミラー「本気か？　あいつを殺すつもりかよ」
スネーク「（笑い）お前こそ冗談はよせ」
ミラー「じゃあどうして」
スネーク「アマンダは病室でじっとしているタイプじゃない。使命感を持って動き回ってこそ、存在意義が高まる戦士だ」
スネーク「だから現場に出してやった方がアマンダのためにいいし、彼女の同士の士気を揚げることにもなるし、ひいてはマザーベースの利益にも繋がる」

ミラー　「そういうものか…」

スネーク　「お前、戦闘に関しちゃ鼻はきくが、人間観察の方は半人前だな」

ミラー　「…じゃあ、どの班に」

スネーク　「アマンダにふさわしい部署を考えておこう。大丈夫だ、失望させたりしないさ」

ミラー　「了解。あんたがそう言うなら」

――NEXTミッションへ（火口基地潜入）。

【火口基地潜入／ミッション前強制無線デモ】（ミラー）

ミラー　「スネーク、村の北に抜けたな？　核を積んだトラックは、山の中へ入って行ったらしい」

ミラー　「おそらく積み荷の最終地点だ。そこから先の情報はない。十分注意してくれ」

――ゲームへ。

【ナンバープレート捜索／アーティストデモ】

——入り口から山腹トンネルの中に入ってくるスネーク。
——トンネルの両側は駐車場になっており、搬入トラックがずらりと並んでいる。
——隅にラバがいる場所もあり、4、5頭のラバがいる。

スネーク　「カズ、施設内部に潜入した。トラックがたくさん並んでいる」

ミラー　「沿岸から運ばれてきた核弾頭の目標地点（ポイント）がそこなら、さっきのトラックもそこに停まっているはずだ」

——ナンバープレート探し導入。

ミラー　「スネーク、核弾頭を運び込んだのはどのトラックだ？　列車車庫（ターミナル）で見たトラックと、同じナンバープレートのトラックがあるはずだ」

【アーティストデモゲーム】ナンバープレート捜索画面

——ナンバーがクローズアップで表示される。アナログキーで選択。○ボタンで決定。
——確認済みのトラックは色を変える。

※不正解の場合

――カット変わり、トラックの中を確認するスネーク。
――荷台の運転席側から端のスネークを捉える。荷台全体が見えているアングル。
――荷台は空ダンボールや工具など。

スネーク「こいつは違う」
スネーク「これじゃない」
スネーク「これは違う」
スネーク「おぉ…」
スネーク「メタル… ギア…」
スネーク「太陽ぉおお‼」
スネーク「監督！」

――元のナンバープレート捜索画面に戻る。

※正解の場合

――正解のナンバープレートが画面上にあるときに○ボタン。
――カット変わり、トラックの中を確認するスネーク。

――荷台の運転席側から端のスネークを捉える。荷台全体が見えているアングル。
――荷台は空だが、弾頭を固定していたスタンドが装着されている。

スネーク　「このトラックだ。排気管もまだ温かい」
スネーク　「…だが核弾頭は運び出された後だ」

――足早に先に進むスネーク。

【ヒューイ登場／アーティストデモ】

――状況：二階部分に広めの通路、その上の二階部分にガラス張りのオペレーションルームがある。2階部分に向かって階段が伸びている。
――階段の上で二人の男が言い争いをしている（ＣＩＡ中米支局長コールドマンと、ヒューイ）。手すり越しに二人の姿が上からわずかに見える（コールドマンはスネークから見て背中を向けているため顔が見えず、ヒューイは車いすのため手振りしか見えない）。
――駐車場の端の壁に張り付くスネーク。
――二人の口論をスネークが立ち聞きしている。

ヒューイ　「待ってくれ！　話が違う！」

コールドマン　「もういい、変更は決定事項だ」

ヒューイ　「撃たせないための抑止力を創る。そういう約束だったろ？」

コールドマン　「そうだ、その考え方には異論はない。私達の目標は『完全なる抑止力』の実現にある」

ヒューイ　「だから、僕は開発に協力したんだ」

コールドマン　「だが『完全なる抑止力』を誕生させるためには、私達の力を世界に向けて証明する必要があるのだ」

コールドマン　「核抑止力を実証するためには『核抑止の三原則』が必要だ」

コールドマン　「まず『核を持っていること』」

コールドマン　「次に『核を自分からは絶対に撃たないこと』」

コールドマン　「そして最も重要なのは…」

コールドマン　「『核を撃たれたら絶対に核を撃ち返す』ことだ」

コールドマン　「この3つを完全に実行出来ることを、証明しなければ、私達の新しい抑止力が世界に受け入れられたことにはならない」

コールドマン　「だからどうしても、実際に核を撃てることを見せてやる必要があるのだ」

ヒューイ　「決して…核が使われないのが抑止力じゃないのか…！（問い詰める感じで）」

コールドマン　「そうだ、そのために私達が人類最後の核を撃つのだ！」

ヒューイ　「僕の創造物に、そんな事はさせない！」

——コールドマン、苛立って車椅子を掴む。

コールドマン　「むう（車いすを掴む、力んだ声）」

ヒューイ　「（少し怯える）」

コールドマン　「創造物？　…そもそも、アレはお前のアイデアではない。盗作だろうが？」

——もともとソ連の科学者グラーニンの研究がＫＧＢ→ＣＩＡ→ヒューイと渡ってきている。ヒューイはこれを自分の研究として進めてきていたためコールドマンに弱みがある。計画参加の動機でもある。

——車椅子が押されて少し後退、ヒューイの背後に階段が近づく（静かなモーター音）。落ちそうだがまだ距離はある。

ヒューイ　「ああ（押されて慌て）」

ヒューイ　「…盗作？　違う。元はと言えば二足歩行のアイデアはあんたが東側から盗んでき

たんじゃないか⁉」

――車椅子が押されて少し後退、ヒューイの背後に階段が近づく。

コールドマン　「博士、いいか！　私の言う通りに、大人しくしてるんだ。盗作の件も黙っていればいい事だ」

コールドマン　「これが成功すれば、お前はこの学会を、大手を振って歩くことができる」

コールドマン　「科学と、安全保障の世界で、人類の歴史に名を残す事になる！」

ヒューイ　「そんなのは御免だ！」

――コールドマンが押さえつけ、車椅子を押し込む。階段が近づく。

コールドマン　「（冷静になって強く声で制する）博士！」

コールドマン　「実際に、撃てる事を証明出来なければ、このピースウォーカーは抑止力にはならない」

――車椅子が制止。階段ギリギリ。

ヒューイ　「僕を利用したんだな…」

コールドマン　「お互い様だ。私は再び本国での長官の座を、お前は学会を闊歩できる〝脚〟を手に入れる」

ヒューイ　「…許さない！」

——ヒューイの手元、震える手で車椅子の肘置きを握りしめている。

コールドマン　「残念だ。では。貴様の『脚（ピースウォーカー）』は貰っていく！」

——突然車椅子を突き飛ばすコールドマン！

ヒューイ　「あああ！（階段を落ちていく時の声）」

コールドマン　「（不敵な笑い声）」

——2、3段、なんとか姿勢を保とうとする車椅子（ここで初めてスネークには車椅子の全体像が見える）だが階段を踏み外し…反り返り、回転しながら車椅子が落下！

——一階床に放り出されるヒューイ、数メートル滑り壁にぶつかる。車椅子は階下に落ちる。

ヒューイ　「ぐっふぉ（壁に衝突）」

コールドマン　「…博士、平和は歩いては来ない」

コールドマン　「お互い、歩み寄るしかないのだ」

——コールドマン、右手を伸ばし、Vサインをヒューイに出す。

コールドマン　「（低く不敵に）勝利のV（ピース）サイン」

【クレジット】ホット・コールドマン　麦人

——二階を歩き去るコールドマン。

ヒューイ　「（背中を叩き付けたため声がうまく出ない）待て、待ってくれ！」

——奥へ消えるコールドマン。

——スネーク、物陰を飛び出してヒューイに接近。ヒューイの胸ぐらを掴んで顔を寄せる。

——ヒューイはコールドマンの去った方を見ており、スネークのことはほとんど見ていない。

スネーク　「おい、大丈夫か？」

ヒューイ　「（スネークを無視、コールドマンに向かって）やめてくれ！」

スネーク　「核弾頭は何処にあるんだ！」

ヒューイ　「あいつは核を使う。核を撃つ気なんだ！（錯乱して話し相手が誰かも確かめず、兵士だと

思ってすがりついている)」

——暴風、ヘリ(ハインド)のローター音!

——一階通路の向こう(次ステージ)から聞こえてくる。

——通路向こうは明かりで光り出す(基地上蓋が開いた)。

スネーク　「むぅ!」

——立ち上がって走り出すスネーク。

——ヒューイ、車椅子にしがみつき乗り込み、階段を上へ。

——ブラックアウト。

【AIボス・ピューパ登場/シナリオデモ】

——火口基地に駆け込むスネーク。

——天窓が開いており、クリサリスがワイヤーでピースウォーカーを搬出している。

——その後をハインドが飛んでいく。

——ピースウォーカーの形状。ここでは前足二本が折り畳まれている。機体の上部にはカバーが掛けられており良く見えない。布の下から後ろ足二本がのぞいているのが見える。蝶(ペレイデスモルフォ)のノーズアートも見える。

――物陰から飛び出すスネーク、銃を構える。

コールドマン　「潰せ！」

――CIA支局長が指示を出す（声のみ）とピューパが天窓から落ちてくる。

――落下の勢いで基地側壁を疾走するピューパ。

――AIボス名表示。

【ピューパ　AI搭載水陸両用戦機】

――顔窓インサート、ヒューイ。

ヒューイ　「（距離があるので、張りで）まずい、気をつけろ！　そいつは無人兵器だ！」

――2階部分のコントロールルームの窓にヒューイの影が映る（逆光で影のみ）。

ヒューイ　「来るぞ！」

――スネークのアップで。

――リザルト画面。

――NEXTミッションへ（対ピューパ戦）。

【対ピューパ戦／ミッション前強制無線デモ】（ミラー）

ミラー「気をつけろスネーク！　あんな兵器は見たことがない」
ミラー「対抗手段はわからないが、その博士が何か知っているかもしれない。とにかく、そいつを排除するんだ！」

——ゲームへ。

【ヒューイと会話／アーティストデモ】ヒューイ研究施設

——状況：火口地下にピースウォーカー製造、実験工場。火山口が掘り下げられ、上部に蓋がされているような基地で、内部でピースウォーカーを作り動作テストなどを行っていた。
——ここはあくまでＡＩボスやピースウォーカーの機体と、駆動部分、そのバランス制御、戦闘シーケンスを受け持つＡＩを開発している基地で、大脳（ママルポッド）となるＡＩの研究には関与していない。
——建築物について。国家事業施設（開発途中の揚水発電所）を改良して使っている基地という設定（これらの設定は無線機でフォロー）。山道の扉がこの掘り下げられた底につながっている。上蓋が開閉（上空から見たときただの火口に偽装するための上蓋）。

――2階の部屋から姿を現すヒューイ。車いすでカクカク階段を下りてくる。ヒューイの首位置は変わらない（階段でも安定した走行を見せる）。
――広い空間なので少し声が反響している。

ヒューイ　「（階段を降りてきながら）あれは無人兵器の試作品だ。僕が造ったんだ」
スネーク　「あんたは？」
ヒューイ　「ここで雇われてる。いや、雇われていた、かな。ヒューイと呼んでくれ」
【クレジット】ヒューイ　田中　秀幸
――ヒューイ、階段を降り切って、間近に迫ってきて、
ヒューイ　「君は誰？　ここの傭兵とは様子が違うね」
――火口内基地、底部にいるスネーク。車椅子でヒューイが近づいてくる。
――二人アップ切り返し。
スネーク　「俺か？　俺は、昆虫学者だ」
ヒューイ　「戦う、昆虫学者？」
スネーク　「蝶々の専門家だ。そう、オオルリアゲハを捕獲しに…」

ヒューイ　「オオルリアゲハ？（椅子からタカタカパンチカードが出てくる）コスタリカでは見ないな？」

ヒューイ　「…モルフォ蝶では？」

スネーク　「（そう）モルフォ蝶だ。ワシントン条約が施行されてしまう前に…」

ヒューイ　「（パンチカードを見ながら）モルフォ蝶は対象になっていないけど？」

スネーク　「ああ…、記憶違いだったかな」

ヒューイ　「君、大丈夫かい？」

スネーク　「どっちにしろ蝶には逃げられた」

――ピースウォーカーが飛び去った空を見上げて。ピースウォーカーのノーズアートの蝶のこと。ヒューイへのかまかけ。

スネーク　「あの蝶も、あんたが造ったのか？〝博士〟」

ヒューイ　「（眼鏡を直して）正解でもあり…、不正解でもある」

スネーク　「あれは何だ？　ここで何をやってる？」

ヒューイ　「君は…、単なる昆虫学者じゃなさそうだ」

――電子煙草を吸うヒューイ。

ヒューイ　「（ゆっくり話し出す）核弾頭はあれに搭載された。ついに計画が実行に移る」

スネーク　「計画…？」

ヒューイ　「そう。持ち込まれた熱核弾頭、コスタリカに乱立する各拠点基地、傭兵部隊、無人兵器、ここで行われている研究…」

ヒューイ　「全て、この計画のため」

――状況：ヒューイ研究室。ピューパ戦のステージに隣接する場所に研究室がある。その一角にモニターとキーボード、プリンタなどが置かれている。モニターの縁にはストレンジラブの写真が貼られている。

――研究室は広めの空間に実験過程を物語る下半身だけの歩行ロボットや関節パーツ、ケーブル類が散乱している。壁沿いに並んだ細かく仕分けされた棚に部品が格納されている。大学のロボット工学の研究室などのイメージ。宇宙開発の資料も多数ある。彼は昔、ＮＡＳＡにもいた事がある。彼は宇宙フェチでＮＡＳＡフェチ。

――カラーバーの画面アップからはじまる。

――ヒューイ研究室のモニター（黒地に緑色の光）、コンピュータ起動時のＰＷマークが表示されている。

ヒューイ　「この施設では無人兵器の開発が行われているんだ」

スネーク　「無人兵器？」

ヒューイ　「ロボットだよ。さっきのが、ホバー移動型の『ピューパ』。飛行タイプの『クリサリス』、キャタピラ走行の『コクーン』（ピィー、ふーと電子煙草の吸引音と煙を吐く息）」

――画面切り替わり、クリサリス、ピューパ、コクーンの線画が表示される。

――それぞれのボディ（ハードウェア）にAIポッドが装着される図。

――それぞれのAIポッドの名前が示される。TJ-chrysalis6000（ヘリ）、GW-pupa5000（ホバー）、TR-cocoon7000（戦車）。

ヒューイ　「電子頭脳によって駆動制御、目標の探知、追尾、攻撃、捕獲や移送を全て管理している。だから人が乗って操縦する必要がない」

【探査モード】

――初めて部屋の様子がわかる。

――アナログパッドでパンすると部屋の全景が見られる。

――この間もドラマは進行。

――ヒューイ、アップ。電子煙草を持っている。

――電子煙草は電池を動力として生成した、霧に併せて、ニコチンやフレーバーを吸引する嗜好品。吐く息は霧で、煙のようにうっすらと白いが、煙草自体からは煙も霧も出ない。現代のものは煙草と同じ外見の合成樹脂製だが74年当時には存在していないので、これは時代を先取ったヒューイ自家製のもの。サイズは煙草大で、横に小さいバッテリー装置がついており吸うたびにランプが点くなどオリジナルデザイン。ヒューイ自身が説明するまでは風変わりな禁煙補助具のように見える。

ヒューイ　「（電子煙草を挟んだ中指で眼鏡を直して。やや自嘲して）単純な命令しか利かないが」
スネーク　「何故そんなものをコスタリカ（ここ）で？」
ヒューイ　「CIAさ。1年前に、ここに呼ばれたんだ」
スネーク　「さっきの男か」
【フラッシュバック】CIA支局長、コールドマン
ヒューイ　「中米の支局長（ステーションチーフ）、自称熱き（ホット）・コールドマン。冷戦最盛期の英雄…。あの男がここで進めている計画が『平和歩行計画（ピースウォーカー）』だ」
スネーク　「ピースウォーカー…」

――再びモニター画面。

――アメリカ南端、中米、南米の北端、キューバが見える地図からアメリカ全土へ引いていく。中

米を中心に円（核攻撃圏内）が全土へ拡がっていく。

ヒューイ「中南米カリブ海沿岸に、新型核兵器を配備する」

ヒューイ「移動式無人核兵器をね」

スネーク「無人核兵器…？」

ヒューイ「最適な位置へ移動し、核ミサイルを発射する、自動報復システム（フェイルデッドリー）」

ヒューイ「単独で移動が可能で、レーダーにも衛星にも捕捉されにくいステルスだから、先制核攻撃で潰される危険も極めて低い」

スネーク「それが、新たな抑止力となる？」

ヒューイ「だが、問題はその移動方法だった」

ヒューイ「カリブ海沿岸は乾期（ドライシーズン）も構わず一年中雨が降る」

ヒューイ「広大な湿地、熱帯雨林、まともに道も通せない」

ヒューイ「…そこで僕は原点に還った」

スネーク「なんだ」

ヒューイ「脚だ。歩く力だ」

――彼は自分の動かない脚をたたき、皮肉げに笑う。

——画面切り替わり、クリサリス、ピューパ、コクーンの線画の中心にピースウォーカーのシルエットが出現する。部屋に置かれたロボット等も全て二足歩行。

ヒューイ「ソ連のＲＤＳ‐２２０（ツァーリ・ボンバ）をも超える大型熱核弾頭を積載できる自律歩行型核兵器（モビルランチャー）、それが『ピースウォーカー』だ」

スネーク「チコが見たバシリスコは…、ピースウォーカー（こいつ）の事だったのか」

ヒューイ「組み立てと実地検証を、ここで行っていた」

スネーク「歩く核兵器とはな…」

ヒューイ「基礎アイデアは東側の借り物（パクリ）だけどね…」

スネーク「歩兵と戦車を結ぶミッシング・リンク。金属の歯車（メタル・ギア）…」（グラーニンがＭＧＳ３でスネークに言った台詞）

ヒューイ「（響きが気に入った）メタルギア、か…」（マザーベースで開発する二足歩行兵器にメタルギアと名付けるきっかけ）

——この二人がメタルギアの名付け親だった。

ヒューイ「だが…」

ヒューイ　「実際は、数十機もの配備が必要になる」

ヒューイ　「そこでコールドマンは予算確保のため、演習を兼ねて本部（ラングレー）にデモンストレーションを行うつもりなんだ」

スネーク　「完全なる抑止力を証明するために、核を撃つ？」

ヒューイ　「『核を撃たれたら、絶対に核を撃ち返す』。その事実こそが必要だっていうんだ」

——概念図で説明。

——左右に分かれた二つのミサイル群。

——左からミサイルが右へ飛ぶと、右からミサイルが撃ち返される。

——全てのミサイルが撃ち尽くされる。

ヒューイ　「核抑止とは…、『核によって核を制する』という考え方だ」

ヒューイ　「こちらが核を撃てば報復として相手も撃ち返すだろう。そうすれば自国も滅んでしまう。それゆえに、お互いに核を撃てない」

ヒューイ　「そのおかげで、大国同士が全力で衝突するような事態は回避された。核による抑止力が平和をもたらしたんだ。少なくとも、世界規模の戦争は抑制された」

——状況がリセット。元の左右に分かれた二つのミサイル群に戻る。

ヒューイ　「だけど…核抑止論は、あくまで机上の空論だ。実際には、報復が完全に行われる保障はない」

ヒューイ　「先制攻撃で全てのミサイル基地を潰される可能性も、場所によっては撃ち返せない可能性もある」

ヒューイ　「そして何より脆弱(ぜいじゃく)なのは、報復の決定を行うのが人間だということだ」

――左からミサイルが右へ飛ぶ。右は撃ち返さない。

――そうしているうちに次々と左からミサイルが飛んでくる。

ヒューイ　「現実的に考えてくれ」

ヒューイ　「最初の1発を、仮想敵国(どこかのだれか)が撃って来たとしても…」

ヒューイ　「まともな人間なら、世界が死滅することを解っていながら、核を撃ち返すことは出来ないはずだ」

スネーク　「つまり抑止論の弱点は、報復の不確実さにあると?」

ヒューイ　「そう。それこそが、その仮想敵国(どこかのだれか)に最初の1発を撃たせてしまう、〝隙間〟を作っていることになる」

ヒューイ　「だからこその無人システムだ。ピースウォーカーなら絶対に報復する」
ヒューイ　「人間の決定を待たず報復すべき場所を判断して確実に核攻撃を実行する」
ヒューイ　「ピースウォーカーに向けて核攻撃を行うということは、自分に向けて発射ボタンを押すのと同じだ」
ヒューイ　「核抑止論の〝隙間〟は塞がる。〝どこかの誰か〟は、確実に核を撃てなくなる」
ヒューイ　「そのために、コールドマンは機械（マシン）による報復が実行されるという事を、実演する必要があると言うんだ。あいつは撃つ」
ヒューイ　「それで初めて、コールドマンの抑止論が成立するんだ」
スネーク　「それを信じたのか」
ヒューイ　「（後悔）…僕は、核抑止による平和を信じたかったんだ」
スネーク　「何故？」
——父親（オタコンの祖父）の写真見せる。
ヒューイ　「僕の父は、マンハッタン計画に参加していたんだ。生涯を賭けた研究が産んだのは…、抑止という幻想の平和システム」

ヒューイ　「そして…、歩けない、僕が生まれた」

ヒューイ　「僕は核に向き合うしかなかったんだ」

ヒューイ　「でも…、本当に核を使ってしまったら、全ては水の泡だ。あいつを、核発射を止めさせなければ…」

スネーク　「あれは何処へ運ばれたんだ?」

ヒューイ　「国境沿いの基地だ。最終実験の決行は5日後」

スネーク　「その基地は」

ヒューイ　「計画を阻止するのか?（期待）」

ヒューイ　「基地は遠い。それよりも、確実な方法がある」

ヒューイ　「実は、ピースウォーカーは…、まだ完成していない」

スネーク　「どういうことだ?」

ヒューイ　「もうひとつ、絶対的な構成要素が欠けている。人工知能の部分、つまりは大脳だ」

——AIポッドを人間の脳の部分に模した図解。

ヒューイ　「僕が担当していた電子頭脳『レプタイルポッド』は、命令を受けて目的地まで移

動したり、相手を攻撃したりするだけだ」

ヒューイ　「人間の小脳のようなものかな」

ヒューイ　「けれど、核抑止を実現するには、送られてくる膨大なデータを分析し、各機が報復に適切な目標（ターゲット）を選択して、決定する必要があるんだ。人間の指導者に代わってね」

スネーク　「だから大脳のような高度な判断力が必要なんだ」

ヒューイ　「機械の大脳…」

スネーク　「脳の構造を模したハードウェアは、僕のポッドと同じだけれど、役割はまるで違う」

ヒューイ　「それはどこで創られている？」

スネーク　「ここから北に行った、研究施設（ラボ）だ」

ヒューイ　「ストレンジラブ博士という人工知能（AI）のエキスパートが、極秘裏に開発を進めている」

スネーク　「『Dr．ストレンジラブ』」

——モニター横にストレンジラブの写真、隅っこにヒューイが顔半分だけ写っている。

ヒューイ　「あいつも合衆国(アメリカ)からスカウトされてきたらしい」
ヒューイ　「確かにＡＩ部門では最高レベルだけど、イカれた博士さ。酷い人嫌いでね」
――コスタリカ地図表示、ＡＩ研究施設の位置、その先のコスタリカ地下基地の位置出し。
ヒューイ　「その研究施設(ラボ)に行って、ピースウォーカーの〝大脳〟を破壊するんだ。人工知能(ＡＩ)の方は、まだ最終調整が終わっていないはずだ」
ヒューイ　「僕のＩＤカードを貸そう。研究所のセキュリティをパスしてくれる。それと…」
――ＩＤカードとともに手紙を渡されるスネーク。
スネーク　「手紙？　推薦状か？」
ヒューイ　「ええと、これは、僕からストレンジラブへの手紙だ。…読むなよ」
スネーク　「？」
――この手紙はアイテムとして読むことが出来る。ヒューイのストレンジラブへの思慕が綴られている。
――基地エレベーターに乗っており、上昇する二人。

スネーク　「ところで、これからお前はどうする?」

ヒューイ　「僕は…、僕は、もう科学を棄てる。このままじゃ、確実に地獄(ヘル)に堕ちるだろうから(諦め)」

スネーク　「急ぐことはない。俺達のところに来ないか」

スネーク　「お前にはふさわしい場所、天国の外(アウター・ヘブン)だ」

ヒューイ　「天国の外(アウター・ヘブン)…」

スネーク　「ああ」

ヒューイ　「楽園(コスタリカ)よりは僕向きだ」

スネーク　「じゃあ、気球での旅をプレゼントしよう。蝶になった気分が味わえる」

——火口上部、カルデラ湖を出る二人。

——カルデラ湖は鏡面反射、ハッチのように閉じていく。

——その上を移動している二人。

ヒューイ　「君は、何処のエージェントなんだ?」

スネーク　「俺か? お前と同じさ。冷戦に翻弄され、いらなくなったら棄てられた…。だから何処にも所属していない」

スネーク　「…スネークと呼んでくれ」

ヒューイ　「（反復）スネーク…、何だか呼び慣れた感じがする」

スネーク　「そりゃ気のせいだろう」

ヒューイ　「…見えるか？」

ヒューイ　「熱帯雲霧林の向こう。遺跡があるだろう？」

スネーク　「ああ」

ヒューイ　「Dr．ストレンジラブの研究施設(ラボ)だ」

——カメラパンアップすると遠景にそびえている遺跡のような建築物。

——周囲を鳥が群れて飛んでいる。

——ブラックアウト。

——リザルト画面。

【対ピューパ戦／ミッション後強制無線デモ】（ミラー／ヒューイ）

ミラー　「スネーク、博士の回収が完了した」

——ヒューイ、顔窓に表示。

スネーク「ヒューイ、調子はどうだ?」
ヒューイ「快適だ。…凄い所だね。見直したよ、ボス」
スネーク「スネークと呼べ」
ヒューイ「そう言うけど、ここではみんな陰で〝ボス〟って呼んでるよ」
スネーク「……」
ヒューイ「ところでスネーク、もしここの技術開発に力を入れたいなら、是非僕を研究開発部門に配属してくれ。きっと役に立てる」
ヒューイ「資材や設計図なんかの準備が整えば、二足歩行メカの開発も始められるんだけど…」
スネーク「それはありがたいが、いいのか? 科学が戦争に利用されても?」
ヒューイ「自分の過去の過ちを抑制する為に、使うんだ」
ヒューイ「僕の技術がピースウォーカー計画の阻止に繋がるならね」
スネーク「それもヒューイ流の〝抑止論〟か」
ヒューイ「それから、もし敵の兵器や電子頭脳に関して説明が必要なら、僕に連絡(CALL)を。専用の回線を用意させたから」

スネーク　「わかった。〝博士〟、よろしく頼む」

ヒューイ　「ああ。なんとしても、あいつ（コールドマン）の計画を阻止してくれ！」

ミラー　「ボス…、ものは相談なんだが…」

スネーク　「なんだ。『マザーベース印のレーション』を輸出するとか言うなよ？」

ミラー　「それもいいな…。…じゃない、ボス」

ミラー　「マザーベースの兵士もずいぶん増えた。そろそろ、他国への傭兵派遣も開始したい」

スネーク　「傭兵派遣か…」

ミラー　「そうでもしないと、これだけの兵士を食わせていくのは難しいぞ」

スネーク　「ああ…。わかってる…」

ミラー　「派兵するには、マザーベースから『OUTER OPS（アウターオプス）』を選んでくれ」

ミラー　「上手くいけば、兵士や、武器の設計図が手に入ることもあるし、新たなミッションに繋がるかもしれん」

ミラー　「手に入れた車輌や大型兵器を使うこともできる」

スネーク　「だが失敗すれば…」

ミラー　「わかっている。俺達の部下が死ぬこともあり得る…」

ミラー　「…無理強いはしないさ。ここのボスはあんただ」

――NEXTミッションへ（熱帯雲霧林へ）。

――Chapter1 end――

「発端・資材搬入施設調査」無線集

■プラヤ・デル・アルバ

【ミッション開始】強制無線

ミラー　「こちらミラー。スネーク、聞こえるか?」
ミラー　「無事上陸（ランディング）したな」
ミラー　「俺達にとって大いなる一歩だ」
ミラー　「この音声通信は洋上プラント、俺達のマザーベースから発信している」
ミラー　「通信は単一方向だ。指示やアドバイスはこれで行う」
ミラー　「イヤホンを外すな。聞き逃さないでくれ」
ミラー　「だが音漏れにも注意だ」
ミラー　「スネーク、操作（アクション）は大丈夫か?」
ミラー　「ここで肩慣らしをしておこう」

【移動方法の説明】強制無線

ミラー　「移動にはアナログパッドを使うんだ」

【視点変更の説明】強制無線

（シューター）

ミラー　「視点変更は○、×、△、□ボタンだ」

（アクション・ハンター）

ミラー　「視点変更は方向キーだ」

【設定の変更】強制無線

ミラー　「設定の変更にはＳＴＡＲＴボタンを押してメニューを開く」

【射撃訓練1】強制無線

ミラー　「誰もいないし、射撃訓練にもってこいだ」
ミラー　「好きなものを撃ってみるといい」

【武器選択方法】強制無線

（シューター）

ミラー　「武器選択は方向キー右を押しながら□ボタン、○ボタンだ」

（アクション）

ミラー　「武器を選ぶには、○ボタンを押しながらＲボタンを長めに押す」

（ハンター）

ミラー　「それから方向キー左右で選べばいい」

ミラー　「武器を選ぶには　Rボタンを押しながら□ボタン、○ボタンだ」

【武器の使い方】強制無線

（シューター）

ミラー　「武器を構えるにはLボタン」

ミラー　「武器を使うには構えた状態でRボタンだ」

（アクション）

ミラー　「武器を構えるにはRボタン」

ミラー　「武器を使うには、構えた状態で□ボタンだ」

（ハンター）

ミラー　「武器を構えるには△ボタン」

ミラー　「武器を使うには構えた状態で△ボタンだ」

ミラー　「構えを解除するには□ボタンだ」

【射撃訓練2】強制無線

ミラー　「射撃訓練といこう」

ミラー　「ヤシの実を撃ってみろ」

ミラー　「ドラム缶や流木、ブイ…いろいろ撃ってみるといい」

【射撃評価】強制無線

※破壊できるものを撃って当たったら

（1）

ミラー　「そうだ。いいぞボス」

（2）

ミラー　「いいぞ」

（3）

ミラー　「そうだ」

【装備品選択方法】強制無線

（シューター）

ミラー　「装備品選択は方向キー左を押しながら□ボタン、○ボタンだ」

（アクション）

ミラー　「装備品を選ぶには、○ボタンを押しながら、Lボタンを長めに押す」

ミラー　「それから方向キー左右で選べばいい」

（ハンター）

ミラー　「装備品を選ぶには、Lボタンを押しながら、□ボタン、○ボタンだ」

【マップ確認】強制無線
ミラー　「地図の確認にはＳＴＡＲＴボタンを押して
　　　メニューを開くんだ」
【双眼鏡について】強制無線
ミラー　「双眼鏡を使えば遠くの様子を確認できる」
【スタンロッドの使い方】強制無線
（シューター）
ミラー　「スタンロッドを使うには装備して、Ｌボタ
　　　ンで構えながらＲボタンだ」
（アクション）
ミラー　「スタンロッドを使うには装備して、Ｒボタ
　　　ンで構えながら□ボタンだ」
（ハンター）
ミラー　「装備したスタンロッドを使うには、△ボタ
　　　ンで構えてからもう一度△ボタンだ」
【麻酔銃】強制無線
ミラー　「麻酔銃Ｍｋ．２２は相手を眠らせる。頭部
　　　に近いほど効き目が強い」

ミラー　「麻酔銃の弾は貴重だ。無駄遣いするな」
【Ｍ１６】強制無線
ミラー　「Ｍ１６はアサルトライフル。連射が可能だ」
【グレネード】強制無線
ミラー　「グレネードは爆発物。投げて使う」
【投擲系武器の操作】強制無線
（シューター）
ミラー　「投擲系の武器を構えるにはＬボタン」
ミラー　「投擲系の武器を投げるには構えながらＲボ
　　　タンだ」
ミラー　「投擲武器は攻撃ボタンを長く押していると
　　　遠くに投げることができる」
ミラー　「投げるのはボタンを離したときだ」
（アクション）
ミラー　「投擲系の武器を構えるにはＲボタン」
ミラー　「投擲系の武器を投げるには構えながら□ボ
　　　タンだ」
ミラー　「投擲武器は攻撃ボタンを長く押していると

遠くに投げることができる」
ミラー　「投げるのはボタンを離したときだ」
（ハンター）
ミラー　「投擲系の武器を構えるには△ボタン」
ミラー　「投擲系の武器を投げるには、構えてから△
　ボタンだ」
ミラー　「投擲武器は攻撃ボタンを長く押していると
　遠くに投げることができる」
ミラー　「投げるのはボタンを離したときだ」
【訓練用かかし】強制無線
ミラー　「お、丁度良い的がある」
ミラー　「射撃練習用だ。さすが〝平和の楽園〟だな」
ミラー　「他の勢力がいる証拠だ。敵は近いな」
ミラー　「遭遇する前にこいつで予習しておこう」
【ＡＵＴＯ ＡＩＭについて】強制無線
※「訓練用かかし」の時にＡＵＴＯ ＡＩＭがオンの時
ミラー　「自動照準（AUTO AIM）ではターゲットを素早く捕捉出来
　る」
ミラー　「だが照準は〝だいたい〟だ。精密に狙って
　撃つことは出来ない」
ミラー　「敵兵（ライブターゲット）以外は捕捉しない」
ミラー　「捕捉出来ない相手もいるから注意するん
　だ」
※「訓練用かかし」の時にＡＵＴＯ ＡＩＭがオフの時
ミラー　「自動照準（AUTO AIM）を使用するには、ＳＥＬＥＣＴボ
　タンを押してくれ」
ミラー　「もう一度ＳＥＬＥＣＴボタンを押せば元に
　戻る」
ミラー　「自動照準（AUTO AIM）なら、敵を自動的にロックオンし
　てくれる」
ミラー　「ただし、急所は狙えない」
ミラー　「自動照準（AUTO AIM）の性能は、選んだ武器によっても
　違う」
【射撃詳細】強制無線
ミラー　「肩越しで構えると高い精度でターゲットを
　狙うことが出来る」
ミラー　「『部位ターゲット補正』によって、照準は
　近くの部位ターゲットへ自動補正される」

ミラー　「照準の方法を変えたければ、『オプション』で切り替えてみてくれ」

【部位効果】強制無線

ミラー　「相手の急所に当てれば、一撃でターゲットを倒すことも出来るだろう」

ミラー　「あえて急所を外すことで、相手を足止めすることも出来る」

【丈夫なかかし】強制無線

※訓練用かかしを撃ちすぎた時

(1)

ミラー　「こいつは倒れないな」

(2)

ミラー　「丈夫なかかしだな…」

※さらに撃つと

(1)

ミラー　「もうやめようボス。弾が勿体ない」

(2)

ミラー　「弾は無限じゃないぞ」

【フェンスを壊せ】強制無線

ミラー　「目標の施設への道はフェンスでふさがれているようだ」

ミラー　「グレネードなら、そのフェンスのドアを破壊できそうだ」

【ドアを壊して進め】強制無線

※プレイヤーが一定時間以上先に進まなかった時

ミラー　「ドアを壊して先に進んでくれ」

ミラー　「グレネードを使うんだ」

【グレネードを使え】強制無線

※グレネード以外の武器でフェンスに攻撃した時

ミラー　「そのフェンスのドアは、グレネードでしか壊せない」

【東へ向かえ】強制無線

※フェンスのドアを破壊したら

ミラー　「よし、ジャングルを抜ければ目的地だ。東へ向かってくれ」

【肩慣らしは十分か?】強制無線
※射撃訓練を終えずに進もうとしたら

ミラー　「スネーク。もう少しここで肩慣らしをしたらどうだ?」

【グレネードを使い切ったら】強制無線

ミラー　「どこかにグレネードが落ちてないか?」

ミラー　「回転している箱はアイテムだ。拾ってみろ」

■ボスケ・デル・アルバ

【潜入任務】強制無線

ミラー　「これは潜入任務(スニーキングミッション)だ」

ミラー　「物陰に隠れたり、迂回したり、敵の視界を避けて進むんだ」

ミラー　「安易に銃を撃つな。命取りになる」

【東へ向かえ】強制無線

(1)

ミラー　「ジャングルを抜ければ目的地だ。東へ向かってくれ」

(2)

ミラー　「東へ向かってくれ」

【張り付き】強制無線

ミラー　「壁に張り付くには、その壁を向いてアクションボタンだ」

ミラー　「張り付いたままLボタンを押して、敵の気配を探ってみろ」

ミラー　「ホフクでも同じ事ができる」

【インジケーター】強制無線

ミラー　「画面右上のインジケーターは、方角や音の発生位置などを示す」

ミラー　「周囲の状況に注意してくれ」

【カムフラ率】強制無線

ミラー　「右上の%(パーセント)表示はカムフラ率」

ミラー　「カムフラ率が低いほど敵に見つかりやすい」

ミラー　「派手に動いたり大きい音を出すとカムフラ率は下がってしまう」

【野戦服】強制無線

ミラー　「野戦服にはカムフラージュ効果がある」

【ＬＩＦＥゲージと気力ゲージ】強制無線

ミラー　「画面の左にあるＬＩＦＥゲージの残量に気をつけろ」

ミラー　「ＬＩＦＥゲージの右は気力ゲージ。消耗すると行動に悪影響が出る」

ミラー　「ＬＩＦＥゲージは時間と共に回復する。気力ゲージも同じだ」

ミラー　「立っているより、しゃがんだほうがゲージの回復が早い。ホフクしていればさらに早くなる」

■プエルト・デル・アルバ

【敵拠点侵入】強制無線

ミラー　「拠点敷地内に入ったな」

ミラー　「警備が多い。油断するな」

【東が目的地】強制無線

※定期的に促す

（１）

ミラー　「目標地点は東の家屋だ」

（２）

ミラー　「東の家屋を目指せ。拠点情報を得るんだ」

（３）

ミラー　「敷地東部の施設に入るんだ」

（４）

ミラー　「目標は東の二階建ての建物だ」

【ダンボール】強制無線

ミラー　「ダンボール？　何に使うんだ？」

【警戒を解け】強制無線

※危険フェイズ中にゴールしたら

ミラー　「まず警戒を解くんだ」

「サンディニスタ司令官接触」無線集

■エル・セナガル／ジャングル

【ミッション開始】強制無線

ミラー　「FSLN（サンディニスタ）のボート小屋を目指すんだ。まずは北西へ向かってくれ」

【無線CALLの方法】強制無線

ミラー　「STARTボタンからメニューウィンドウを開けば、さっき手に入れた無線機が使えるはずだ」

ミラー　「メニューウィンドウからOPTIONSを選べば、SELECTボタンに無線を割り当てる事ができる」

【トラックについて】任意無線

ミラー　「沿岸の施設から来たトラック…だが荷台は空だ」

■エル・セナガル／峡谷

【階段入り口の金網】任意無線

（1）

ミラー　「鍵が掛かっている。フェンスの中に入れないな」

（2）

ミラー　「頑丈そうなフェンス…ちょっと壊せそうにないな」

【ウラギンドクチョウ】任意無線

※昼のみ

パス　「このあたりを飛んでいる黄色いチョウは、ウラギンドクチョウの仲間よ」

パス　「ウラギンドクチョウは 葉っぱを食べて、その毒を身体に溜めるんだって」

■エル・セナガル／沼地

【川辺にて】任意無線

※プレイヤーが川のほうを向いていたら

（1）

パス　「そのあたりの河は山岳地帯から流れてるの。深さもあるから大きい船も通ってる」
（2）
パス　「この川にも あいつらの捨てたゴミが…許せない」
（3）
ミラー　「沿岸の積み荷はここから水路で…？」
【恐竜の足跡？】任意無線
※大きい足跡の上でＣＡＬＬ
（1）
ミラー　「恐竜の足跡…？　…鳥か？」
（2）
パス　「まるで恐竜の足跡…まさか」
【目的指示】強制・任意無線
（1）
ミラー　「ボート小屋は東だ、東を目指してくれ」
（2）
パス　「ＦＳＬＮ（サンディニスタ）の隠れ家に向かって、スネーク」

■リオ・デル・ハーデ

【司令官と接触せよ】強制無線
ミラー　「そのあたりにＦＳＬＮ（サンディニスタ）の小屋があるはずだ」
ミラー　「警備兵を無力化して、ＦＳＬＮ（サンディニスタ）の司令官（コマンダンテ）と接触してくれ」
【敵兵無力化促し】強制・任意無線
（1）
ミラー　「敵兵を全員無力化するんだ」
（2）
ミラー　「全敵兵を無力化するんだ」
（3）
ミラー　「麻酔、気絶でもいい、全敵兵を無力化するんだ」
（4）
ミラー　「敵を無力化出来るなら、睡眠・気絶・瀕死状態でも構わない」
【まだ敵兵がいる】任意無線
※敵兵が残り1名の時にＣＡＬＬすると

ミラー　「まだ敵兵がいる。無力化するんだ」

【敵兵排除を優先】任意無線

※ボート小屋のはしご前で

ミラー　「敵兵の排除を優先するんだ」

※ボート小屋一階で

ミラー　「上に誰か捕まっている。だがまずは敵兵の排除を優先しろ」

【ミッションクリア】強制無線

ミラー　「よし、FSLN（サンディニスタ）の司令官（コマンダンテ）に合流しよう。その小屋の中にいる」

【銃座の使用方法】任意無線

※銃座の近くでCALLすると

ミラー　「銃座を使うには、近づいてアイコンが出てから、アクションボタンを押すんだ！」

※銃座についたら

ミラー　「敵を狙うにはアナログパッドを使え」

※銃座についている状態でCALLすると

（1）

ミラー　「Lボタンでズーム、攻撃ボタンで攻撃だ！」

（2）

ミラー　「敵を狙うにはアナログパッドを使え」

「アマンダ追跡」無線集

■「アマンダ追跡」共通

【目的再確認】強制・任意無線

（1）

ミラー　「アマンダはバナナ園跡地の資材置き場にいるはずだ。彼女と合流するんだ」

（2）

パス　「アマンダさんと合流して、スネーク」

（3）

パス　「アマンダさんはバナナ園の資材置き場にいるらしいわ」

■リオ・デル・ハーデ

【増援に気をつけろ】強制無線

ミラー　「増援が来ているようだ。気をつけろ」

■エル・セナガル／峡谷

【行き先指示】強制無線

ミラー　「アマンダは吊り橋の先に行ったな。急ごう」

【エルード説明】強制・任意無線

※吊り橋で

ミラー　「吊り橋からぶら下がれば、敵をやり過ごせるかもしれん」

ミラー　「エルードするには、橋の手すり近くでアクションボタンを押すんだ」

※吊り橋付近でしゃがんでいる時

ミラー　「しゃがんだ状態からはエルードできない」

■バナネル・フルタ・デ・オロ／選別所

【FSLNの捕虜に注意】強制無線

ミラー　「FSLNの兵士が捕虜になっているかもしれない。注意するんだ」

【選別所の中へ】強制・任意無線

ミラー「反対側へ抜けるには、選別所の中を通らなくては…」

【捕虜のフルトン回収】強制・任意無線

ミラー「捕虜の前でアクションボタンを押せば、マザーに移送出来る」

ミラー「フルトン回収だ」

【フルトンを装備せよ】強制・任意無線

（シューター）

ミラー「捕虜を回収するには、まずフルトン回収システムを装備するんだ」

ミラー「装備品選択は方向キー左を押しながら□ボタン、○ボタンだ」

（アクション）

ミラー「捕虜を回収するには、まずフルトン回収システムを装備するんだ」

ミラー「装備品を選ぶには、○ボタンを押しながら、Lボタンを長めに押す」

ミラー「それから方向キー左右で選べばいい」

（ハンター）

ミラー「捕虜を回収するには、まずフルトン回収システムを装備するんだ」

ミラー「装備品を選ぶには、Lボタンを押しながら、□ボタン、○ボタンだ」

【フルトンを持ってない時】強制・任意無線

ミラー「バルーンがあればマザーに移送出来るんだが…」

【キジマドクチョウについて】任意無線

パス「そのあたりにはキジマドクチョウがいるみたい」

パス「幼虫が毒のあるトケイソウを食べるから、成虫にも毒があるの」

【ベニモンオオキチョウについて】任意無線

パス「ベニモンオオキチョウが飛んでなかった?」

パス「公園や街中でも見かけるチョウよ」

注：「対装甲車戦：ＬＡＶ-ｔｙｐｅＧ」無線集は、Ｐ446の【対装甲車戦無線集】を参照してください

「チコ救出」無線集

■「チコ救出」共通

【目的再確認】任意無線

（1）

ミラー　「チコを助けてやろう、スネーク。俺たちのためにもなる」

（2）

アマンダ　「占拠された村が収容施設になってるはずよ」

（3）

アマンダ　「ボス…チコをお願い…」

（4）

パス　「お願い…チコさんを助けてあげて…」

■カミーノ・デ・ラーバ／坂道

【ミッション開始】強制無線

ミラー　「チコがいる収容所は北にある。北へ向かってくれ」

【この先狙撃兵注意】強制無線

※「カミーノ・デ・ラーバ／三叉路」に続く道の途中で

（1）

ミラー　「嫌な予感がする。この先は開けた窪地だ。狙撃兵（スナイパー）が潜むには絶好の地形だぞ」

（2）

ミラー　「この先は窪地で、こちらが丸見えになる」

ミラー　「俺が敵なら、狙撃兵（スナイパー）を潜ませるところだ。気をつけてくれ」

■カミーノ・デ・ラーバ／三叉路

【狙撃兵に注意】強制無線

※カカシがスナイパーに撃たれたら

ミラー　「狙撃兵（スナイパー）だ！　うかつに進むと的になるぞ」

※カカシがスナイパーに撃たれた後で

（1）

ミラー　「連中、カカシを狙撃（スナイプ）の練習台にしてやがる」

（2）

ミラー　「狙撃兵（スナイパー）に気をつけろ。遠くから撃ってくるぞ」

（3）

ミラー　「狙撃兵（スナイパー）は遠くから狙ってくる。姿が見えなくても油断するな」

【カカシについて】任意無線

ミラー　「カカシか…海岸にあったやつと同じだな」

【線路について】任意無線

（1）

パス　「この線路で、コーヒーを運んでたのね…」

（2）

ミラー　「コスタリカの鉄道は軌間１０６７㎜。日本の国鉄と同じだ」

（3）

ミラー　「ＳＬ、走ってないかな」

【目的地再確認】強制・任意無線

（1）

ミラー　「チコがいる収容所は北にある。北へ向かってくれ」

(2)
ミラー　「北へ向かうんだ。チコはそこにいる」

■アルデア・ロス・デスピェルトス
【チコを探せ】強制・任意無線
(1)
ミラー　「チコはここの家のどれかにいる。探すんだ、スネーク」
(2)
ミラー　「どこかの家にチコが捕らわれている。見つけてくれ」
【家の覗き方】強制・任意無線
(1)
ミラー　「家の中を確認するには、ドアの前でアクションボタンを押すんだ」
(2)
ミラー　「ドアの前でアクションボタンを押せば、家の中を見ることができる」

【青いドアから覗け】強制無線
※初めて青くないドアの近くに来た時
ミラー　「収容所になっている家は、青いドアに付け替えられているらしい」
※2回目以降
(1)
ミラー　「青いドアに、監視用の覗き窓が付いているようだ」
(2)
ミラー　「覗き窓が付いているのは、青いドアだけみたいだな」
(3)
ミラー　「青いドアを調べるんだ」
ミラー　「チコはその家にいる！　ドアに近づいてアイコンが出たらアクションボタンだ！」
【青いドアを覗け（アマンダ）】任意無線
(1)
アマンダ　「接収された家のドアには、監視用の覗き窓がついている。青いドアよ」

（2）
アマンダ　「捕虜が囚われているのは、青い扉の建物よ」
（3）
アマンダ　「青い扉を探して。チコはそのどれかに囚われている」
（4）
アマンダ　「青いドアを覗いてみて、スネーク」

【ドアを覗けったら】強制無線
※ミッション開始後5分経ってもドアを覗いたことがない
（1）
ミラー　「青いドアに覗き窓がある…覗いてみるんだ！」
（2）
ミラー　「ドアの覗き窓を覗くには、近づいてアイコンが出たら、アクションボタンだ」

【チコはそこだ】強制無線
※ミッション開始後20分経ってもチコが見つからない場合、正解の家の近くで。2分おきに

（1）
ミラー　「チコはその近くにいる！　ほぼそうだ！」
（2）
ミラー　「チコはその家にいる！　ドアに近づいてアイコンが出たらアクションボタンだ！」

【警戒フェイズ以上は覗けない】強制無線
（1）
ミラー　「敵の警戒中に、家の中を覗くのは無理だ」
（2）
ミラー　「今家の中を覗くのは無理だ。まずは警戒を解いてくれ」

【覗きは慎重に】任意無線
※覗いた家にチコがいなかった後
アマンダ　「スネーク、慎重にお願い。チコの命がかかってる」

【敵の増援に気を付けろ】任意無線
（1）
ミラー　「敵に気付かれたら、増援を呼ばれるかも知

れない。見つからないようにしてくれ」

（2）

ミラー　「その場の敵を倒したとしても、増援を呼ばれたら危険だ。見つからないように進むんだ」

【村の路地は複雑】任意無線

（1）

アマンダ　「収容所の路地は複雑に絡み合ってる。うまく利用すれば、敵をやり過ごせるはずよ」

（2）

アマンダ　「路地や軒先は見通しが悪い。敵とはち合わせないように注意して」

【パスの怒り】任意無線

パス　「この人たち、村を我がもの顔で…許せない」

【ドラム缶には隠れられない】任意無線

※プレイヤーがスネークの時、ドラム缶の近くでＣＡＬＬ

（1）

ミラー　「ダンボールならともかく、このドラム缶を被るのは無理そうだ」

（2）

ミラー　「こんなにボロボロのドラム缶を被っても、すぐに見つかってしまう」

（3）

ミラー　「そんなにドラム缶を被りたいのか？　無理なものは無理だ、スネーク」

「ジャングルトレイン追跡」無線集

■「ジャングルトレイン追跡」共通

【ミッション目的再確認】任意無線

（1）
ミラー　「列車の車庫があるのはコーヒー園（カフェタル）のさらに奥だ」

（2）
チコ　「積み荷はエル・カダルソの列車車庫（ターミナル）に、向かっているはずだよ」

（3）
パス　「列車車庫（ターミナル）はエル・カダルソにあるらしいわ」

■アルデア・ロス・デスピェルトス

【列車車庫への行き方】強制・任意無線

（1）
ミラー　「列車車庫（ターミナル）は、コーヒー工場の先にある。まずはコーヒー工場を目指すんだ」

（2）
ミラー　「まずはコーヒー工場へ向かってくれ」

【三叉路を経由せよ】強制・任意無線

（1）
ミラー　「コーヒー工場に向かうには、まず三叉路に戻る必要がある」

（2）
ミラー　「機関車が置いてあった窪地を覚えているか？　そこを経由してから、コーヒー工場へ向かえ」

【チコ、村での体験を語る】任意無線

（1）
チコ　「ここに捕まってる時は、生きた心地がしなかったよ」

（2）
チコ　「スネークに撃たれた時、ほんとに死んだと思ったぜ」

■アルデア・ロス・デスピェルトス／三叉路

【北東へ進め】強制・任意無線

（1）

ミラー　「北東へ抜ければ、コーヒー工場だ。その先に列車車庫（ターミナル）がある」

（2）

ミラー　「北東にコーヒー工場がある。北東へ進むんだ」

■カフェタル・アロマ・エンカンタド／入り口

【フェンスから侵入せよ】（任意無線）

※フェンスの近くで

（1）

ミラー　「フェンスが壊れている場所があるな。あそこから侵入できないか？」

（2）

ミラー　「スネーク、フェンスが壊れているところから侵入できそうだ」

【捕虜を助けて】任意無線

※捕虜救出前にCALL

（1）

チコ　「そこにも同志（コンバ）が捕まってるかも。助けてあげて」

（2）

チコ　「お願いだ。同志（コンバ）を助けてくれ」

【見張りに気をつけろ】任意無線

※コーヒー工場の二階通路が見える辺りでCALL

（1）

アマンダ　「高い所に見張りがいるかもしれない。気をつけて」

（2）

アマンダ　「見張りに気をつけて」

■カフェタル・アロマ・エンカンタド／精製所

【工場の北が列車車庫】強制・任意無線

（1）

ミラー　「コーヒー工場を抜ければ、列車の車庫だ」

（2）

ミラー　「列車車庫（ターミナル）へは、コーヒー工場を通って行くしかない」

【捕虜はまだいる】任意無線
※捕虜を何人か助けたが、まだ捕虜がエリア内にいる状態でCALL
チコ　「同志を助けてくれたんだね。ありがとう！」
チコ　「他にも囚われている同志がいるかもしれない」

【捕虜全員救出後】任意無線
チコ　「そこにはもう同志はいないようだね」

【コーヒー工場にて】任意無線
(1)
パス　「コーヒー…今度、私が淹れてあげる」
(2)
チコ　「コーヒーって…苦くない？」

■エル・カダルソ（列車車庫）
【敵兵を無力化せよ】強制無線
ミラー　「ぎりぎり間に合ったようだな。敵兵を無力化して、列車を確保するんだ！」

※CALL後に無力化を促す
(1)
ミラー　「敵兵を全員無力化するんだ」
(2)
ミラー　「全敵兵を無力化するんだ」
(3)
ミラー　「麻酔・気絶でもいい。全敵兵を無力化するんだ」
(4)
ミラー　「敵を無力化出来るなら、睡眠・気絶・瀕死状態でも構わない」

【バシリスコの足跡】任意無線
※ピースウォーカーの足跡近くでCALL
(1)
チコ　「それはきっとバシリスコの足跡だ。気をつけてくれ」
(2)
チコ　「バシリスコは身長にして30バーラはあったはずだ」
(3)

チコ　「足跡からもデカさが分かるだろ?」

注:「対戦車戦:T-72U」無線集は、P449の【対戦車戦無線集】を参照してください

「バリケード破壊」無線集

■「バリケード破壊」共通

【バリケードを壊せ】任意無線

(1)

チコ　「収容所のバリケードを壊してくれ。俺が捕まってた村だ」

(2)

チコ　「俺が捕まってた収容所へ行って。そこにバリケードがある」

【目的再確認】任意無線

※(1)はスネーク限定

(1)

ミラー　「C4でバリケードを破壊するんだ、スネーク」

(2)

ミラー　「C4でバリケードを破壊するんだ」

【北の導水管を目指せ】任意無線

※バリケード破壊後に

(1)

ミラー　「村の北の導水管が橋代わりになっているらしい」

（2）

チコ　「北の谷川を目指すんだ」

■カフェタル・アロマ・エンカンタド／精製所

【目的確認】強制無線

（1）

ミラー　「収容施設へ戻ってくれ。チコが捕まっていた村だ」

（2）

ミラー　「収容施設まで戻るんだ」

【方向指示】任意無線

（1）

ミラー　「収容施設は南だ。南へ向かうんだ」

（2）

ミラー　「収容施設へ戻るには、この工場を通るしかない」

■カフェタル・アロマ・エンカンタド／入り口

【方角指示】強制・任意無線

ミラー　「ここから西へ向かえば、直接収容施設へ行けそうだ」

■アルデア・ロス・デスピエルトス（村）

【バリケードの位置】強制・任意無線

（1）

ミラー　「ゲートは収容施設の北西にある。施設を横断してゲートへ向かってくれ」

（2）

ミラー　「施設を横断すれば、北へ通じるゲートへ行けるだろう」

【バリケードについて】任意無線

（1）

チコ　「この村の北西にバリケードがある。先へ進むには爆破するしかないよ」

（2）

チコ　「バリケードは村の北側にある」

（３）

チコ　「バリケードを壊すには…ええと、Ｃ４だっけ？　そいつが要るみたいだ」

【バリケード位置情報】任意無線

※村の東半分にいたら

チコ　「バリケードの場所はもっと西だ」

※村の南半分にいたら

チコ　「バリケードの場所はもっと北だ」

【Ｃ４でゲートを破壊せよ】任意無線

（１）

ミラー　「目標地点はゲートの先だ。Ｃ４でゲートを破壊するんだ」

（２）

ミラー　「ゲートを破壊しなければ、吊り橋へは抜けられない。Ｃ４を仕掛けるんだ」

【Ｃ４を設置せよ】強制・任意無線

※初めてバリケードの近くに来たが、Ｃ４を装備していない

ミラー　「まずはＣ４を装備するんだ。装備しないと設置はできない」

【Ｃ４の設置と起爆方法】強制・任意無線

※バリケード破壊前。Ｃ４を装備して、バリケードの近くにいる時

（シューター・アクション）

ミラー　「構えボタンを押しながら攻撃ボタン。これでＣ４が設置できる」

ミラー　「Ｃ４を装備したまま、攻撃ボタンだけを押せば、設置したＣ４は起爆する」

（ハンター）

ミラー　「構えながら△ボタン。これでＣ４が設置できる」

ミラー　「Ｃ４を装備したまま□ボタンを押せば、Ｃ４は起爆する。構えなくていい」

【C4操作方法補足1】任意無線

※C4を装備していて、C4設置済かつ「C4の設置と起爆方法」を聞いている

（シューター・アクション）

（1）

ミラー　「構えながら攻撃ボタンを押すと、C4をもう一つ設置することになる」

（2）

ミラー　「攻撃ボタンでC4は起爆する。構えボタンは押さなくていい」

（3）

ミラー　「C4は、設置した順番に起爆する」

（ハンター）

（1）

ミラー　「構えながら△ボタンを押すと、C4をもう一つ設置することになる」

（2）

ミラー　「C4を装備したまま□ボタンを押せば、C4は起爆する。構えなくていい」

【C4を使え】強制無線

※ゲートをC4以外の武器で攻撃した時

（1）

ミラー　「だめか。もっと破壊力が強い武器がいるな…」

（2）

ミラー　「そのゲートを壊すには、C4が必要だ」

（3）

ミラー　「その武器では壊せない。C4を使え」

（4）

ミラー　「C4を使うんだ」

【ゲート破壊時の注意】任意無線

※C4を持っていてゲート付近にいたら

（1）

ミラー　「ゲートを破壊すれば、敵も集まってくる。忘れるな」

（2）

ミラー　「ゲートを破壊する時は、周囲に気を配るんだ。爆破と同時に、敵が駆けつけてくるはずだ」

（3）

ミラー　「C4は遠隔起爆も可能だ」

【バリケードはそこだ】強制・任意無線
※バリケードの近くで、ミッション開始後7分経ってもクリアできなかったら、1分おきに（1）か（2）を鳴らす
（1）
ミラー　「バリケードの位置はその辺りのようだ」
（2）
ミラー　「そこだ、そのバリケードを壊せ！」

【そこにバリケードがあるだろ】任意無線
※バリケード近くに来たら
（1）
チコ　「そこにバリケードがあるのが分かるか？
　それを壊せばいい」
（2）
チコ　「そのバリケードだよ、スネーク」

【壁は乗り越えられる】任意無線
※ゲート爆破前にゲート付近の壁の手前で（シングルプレイ時）
ミラー　「その壁は乗り越えられそうだ。こちらに戻って来られるかは別だが」
※ゲート爆破前にゲート付近の壁の手前で（CO-OP時）
ミラー　「その壁は乗り越えられそうだ」

【一人では乗り越え無理】任意無線
※ゲート爆破前にゲート付近の壁の向こう側で（シングルプレイ時）
（1）
ミラー　「この高さを一人で乗り越えるのは無理だ。
　迂回するほかない」
（2）
ミラー　「なにか台になるものがあればいいんだが」
※ゲート爆破前にゲート付近の壁の向こう側で（CO-OP時）
ミラー　「二人でなら、壁を乗り越えられるかも知れん」

【バリケード破壊成功】強制無線
ミラー　「やったぞ、スネーク！」

【敵兵に注意】強制無線
※エリアの全敵兵を無力化せずにバリケードを爆破した場合
ミラー　「今の爆発で、敵が集まってくるはずだ。気をつけろ」

【北へ向かえ】強制無線
※バリケード破壊後
（1）
ミラー　「よし！　北へ向かってくれ」
（2）
ミラー　「北へ向かってくれ」
（3）
ミラー　「北へ向かうんだ。橋へ続く道がある」

【クレフォンテスタスキアゲハ】任意無線
パス　「そのあたりにいるクレフォンテスタスキアゲハは、よく見かけるチョウね」
パス　「サナギの間に冬を越すんだって」

「火口内基地潜入」無線集

■「火口内基地潜入」共通無線

【ミッション目的再確認】任意無線
（1）
ミラー　「山の中腹に施設への入り口があるようだ。急いでくれ」
（2）
チコ　「この先には俺たちも行ったことがないんだ」
（3）
パス　「山の中腹に施設への入り口があるらしいの。気をつけて」

■ロス・カントス／渓谷

【北へ向かえ】強制・任意無線
ミラー　「橋を渡って、北へ向かうんだ」

【導水管を渡れ】任意無線
チコ　「導水管の足場を渡れるはずだ」

【足場について】任意無線

（1）
チコ　「足場は上下二重構造になってるんだ」

（2）
チコ　「上の足場は少し壊れてるけど、下側は大丈夫だよ」

【エルード示唆】任意無線
ミラー　「吊り橋からぶら下(エルード)がれば、敵をやり過ごせるかもしれん」
ミラー　「エルードするには、橋の手すり近くでアクションボタンを押すんだ」

【しゃがんでいるとエルードできない】任意無線
ミラー　「しゃがんだ状態からはエルードできない」

【エルードで隠れろ】任意無線
※導水管上で危険フェイズ中にCALL
ミラー　「敵が見ていないうちに、手すりにぶら下(エルード)がるんだ」

【チコの高所恐怖症】任意無線
チコ　「おしっこちびりそう…」

■ロス・カントス／尾根

【敵の拠点はこの先】強制無線

（1）
ミラー　「トラックの輸送ルートだ。拠点はこの先にある。頼んだぞ」

（2）
ミラー　「輸送ルートに出たな。そのまま敵の拠点に向かってくれ」

※山道に合流した辺りでCALL

（1）
アマンダ　「あいつらの拠点はその輸送ルートの先のはず」

（2）
アマンダ　「あたし達もその先に行ったことはないの」

■フェルテ・ラ・ラデラ

【拠点は砦の先】強制・任意無線

（1）

ミラー　「拠点は砦の先だ。何とか砦を越えてくれ」

（2）

ミラー　「砦を越えるんだ。敵の拠点は、その先にある」

【グンネラ・インシグニス】任意無線

※グンネラ・インシグニスのある場所（エリア侵入時の場所）で

（1）

パス　「そのあたりに、とっても葉っぱが大きい草があるでしょ？　グンネラ・インシグニスよ」

パス　「グンネラ・インシグニスの別名は貧者の傘（ソンブリヤ・デ・ポブレ）」

パス　「文字通り、傘としても使えるの」

（2）

アマンダ　「貧者の傘（ソンブリヤ・デ・ポブレ）か…」

アマンダ　「ビニールシート（チャンバ）だけじゃ足らない時は、よくお世話になった」

【砦の銃座に気をつけろ】任意無線

（1）

アマンダ　「砦の上に銃座がない？」

（2）

アマンダ　「銃座に気をつけて！」

【ハシゴルートは危険】任意無線

※砦の西側、ハシゴ付近で

（1）

ミラー　「砦へのハシゴはあるようだな。だが警戒は厳重だろう」

（2）

ミラー　「ハシゴ以外に道はないか？」

（3）

アマンダ　「敵はハシゴからの侵入を警戒しているはずよ」

（4）

アマンダ　「中央突破は戦闘になる危険性が高い」

（5）

アマンダ　「他に侵入できる場所はない？」

【潜入ルート促し】任意無線
※砦の東側、エルードできる付近で
（1）
ミラー　「そこから中に入れないか？　登るのは無理そうだが…」
（2）
アマンダ「そこから外側へ回れる？」

【砦エルード誘導】任意無線
※砦の東側、エルードしていれば入れる地点の下で
（1）
アマンダ「1階部分と地下部分の間に段差はない？」
（2）
アマンダ「手をかけられそうなところがあれば、どこからか伝って来れないかしら？」
（3）
チコ　「横からなら砦に侵入できそうだね」

【エルード中】任意無線
※東側エルード地点からエルード中
アマンダ「そのままエルードで奥へ進めない？」

【エルード終了】任意無線
※エルード中で砦の入り口の下でCALL
アマンダ「よし！　そこから中に入れそうね！」

【基地を目指せ】任意無線
※砦内部への侵入を果たした時に
アマンダ「そのまま基地の奥を目指して！」

【敵の拠点は目の前】任意無線
（1）
ミラー　「ここを抜ければ敵の拠点だ。頼むぞ」
（2）
ミラー　「敵の拠点は目の前にある。あと少しだ！」

【銃座の使用方法1】任意無線
※銃座の近くでCALL
ミラー　「銃座を使うには、近づいてアイコンが出てから、アクションボタンを押すんだ！」

【銃座の使用方法2】任意無線
※銃座に着いている状態でCALL

（1）
ミラー　「Lボタンでズーム、攻撃ボタンで攻撃だ！」
（2）
ミラー　「敵を狙うにはアナログパッドを使え」

【火口内基地の偽装について】任意無線
ミラー　「上手く偽装したもんだ。これじゃ衛星からでも捉えられない…」

注：「対ピューパ戦」無線集は、P457の【対ピューパ戦無線集】を参照してください

第二章

英雄の幻影

【熱帯雲霧林へ／ミッション前強制無線デモ】（ミラー）

――ミラー、顔窓に表示。

ミラー　「計画の中核となる兵器、ピースウォーカーの完成を阻止するには、機体の大脳部となる人工知能（AI）を制止、または破壊する必要がある」

ミラー　「ヒューイの情報によると、その人工知能（AI）は、ストレンジラブ博士の研究施設（ラボ）で、最終調整を受けているらしい」

ミラー　「熱帯雲霧林にある研究施設（ラボ）に潜入、人工知能（AI）の搬出を阻止するんだ」

――章タイトル表示。

【章タイトル】　第二章　英雄の幻影

【密林潜入1／アーティストデモ】

――引き画ジャングル（遠景に遺跡。前のアーティストデモの流用。最後はジャングルの方へパンダウン）。

――鳥の鳴き声。

【テロップ】１９７４年11月19日　コスタリカ　エレディア中央セルバ・デ・ラ・レチェ

——鬱蒼と茂る熱帯雲霧林、巨木の前をスネークを乗せたラバが進んでくる。

ヒューイ「スネーク、ラバの調子はどう？」

スネーク「このペースなら、明朝には目的地に着くはずだ」

ヒューイ「急いでくれ。人工知能（AI）は、いつ完成してもおかしくはない」

スネーク「ガイドが欲しい」

ヒューイ「わかってる。そのジャングルに詳しい、パスに協力してもらう」

パス「（気を遣う様子で）スネーク、いい？　サバイバルの達人でも、気を抜かないで」

スネーク「ああ…」

パス「そこは、４００種類の蘭を含む２５００種類の植物、５００種類の蝶、４００種類を超える野鳥が生息していると言われている太古の熱帯雲霧林（ジャングル）よ。霧で視界も悪いの」

——ひょうたんでマテ茶を飲むスネーク。

パス「その一帯は岩盤が硬い。だから、度重なる地震の中でも、マヤの遺産が生き残れ

たの」

スネーク「マヤ遺跡の中で人工知能(AI)開発とはな。ヒューイ?」

ヒューイ「ああ、そうだね。と言っても、入口のセキュリティに抜かりはない。僕が渡したIDカード、持ってるよね?」

スネーク「ああ、ちゃんと持ってる」

ヒューイ「それがあれば、ゲートを難なく通過できる。後はスネーク次第だ」

ヒューイ「人工知能(AI)さえ組み込まなければ、コールドマンの計画(ゲーム)はコールドする」

スネーク「研究所内部のセキュリティの方はどうなんだ?」

——森は美しいが霧がかかって暗い。

——手前をモルフォ蝶が舞う。

——遠景で、ラバが水を飲んでいる。

——川で休み、魚を食べるスネーク、上半身裸で胸のキズを見せる(MGS3とイメージを重ねる)。

ヒューイ「うん、そっちは心配する必要はないよ。ストレンジラブの要望で、施設(ラボ)内の警備は最小限に絞られているんだ」

ミラー「スネーク、良いニュースばかりじゃない。コールドマンに俺達の存在が知られて

しまった。施設（ラボ）周囲の警備レベルが上がっているようだ」

ミラー　「クリサリスとかいう無人飛行機（UAV）も、哨戒ヘリも多数確認した」

ミラー　「ジャングルには待ち伏せ（アンブッシュ）しているスカウト兵もいるかもしれん」

ミラー　「施設（ラボ）が近づいてきたら、今まで以上に注意してくれ」

スネーク　「了解」

——クリサリスがスネークの頭上に現れる。

スネーク　「本当だ」

——クリサリス、画面いっぱいUP、きょろきょろしているカメラ、近づく。

——木の横に伏せているスネーク。クリサリスの影がおおいかぶさる。

——クリサリスのカメラさらにUP。クリサリス発見警報！

——クリサリス主観風俯瞰カメラ、茂みを上にパン。茂みのはずれからラバが現れ、走り去っていく。

——クリサリスの音が小さくなっていく。

ミラー　「ふぅ…、何とかしのいだか…」

ミラー　「ストレンジラブ博士の研究施設（ラボ）は北へ数マイル」

ミラー　「完成間近の人工知能（AI）を破壊するんだ。一刻も早く！」

——崖を滑り降りるスネーク。

——ゲームへ。

【中ボス・ヘリ登場／シナリオデモ】

——ゆっくり進むスネーク（リラックス）。

——木漏れ日差し込む森を抜けると大滝が見えてくる（自然をじっくり見せる）。

——滝の音がゴオゴオと響き渡っており、他の音はほとんど聴こえない（そのためヘリの接近に直前まで気付かない）。

——前進するスネーク（リラックス）。

——目の前を2羽の蝶が通り過ぎる（ベースラインが変わる）。

——少し間を空けて蝶が来た方向を向く（蝶が気になった感じではなく、ヘリの気配を感じて振り向いた感じで）。

——崖下から霧状になった泉の水が、壁の様に目の前を遮る（ヘリ用エフェクト）。

——霧が一気に晴れると目の前には戦闘ヘリ（崖下から上昇してくる）。

——強化兵の着地、ローアングルのカメラに着地する随伴兵の足がＩＮしてくる。

——中ボス戦タイトル表示。

【Mi-24A汎用戦闘ヘリコプター】

——銃を構えるスネーク。

——NEXTミッションへ（対戦闘ヘリ戦：Mi-24A）。

【対戦闘ヘリ戦：Mi-24A／ミッション前強制無線デモ】（ミラー）

ミラー「スネーク！　ハインドの襲撃だ。なんとか排除するんだ！　兵士を無力化するか、機体を破壊するしかない。頼むぞ！」

——ゲームへ。

【対戦闘ヘリ戦：Mi-24A／ミッション後強制無線デモ】（ミラー）

ミラー「ボス…。俺は思うんだが、フルトンで兵士を集めて回るのも、強引すぎやしないか？」

スネーク「今さら、何を言い出すんだ」

ミラー　「それよりも志願兵を募る方が現実的だ。俺達は会社組織じゃないが、規模的には、もう大企業と言っていい」

ミラー　「いつまでもゲリラ的な方法で兵士を集め続けるわけにもいかないだろう」

ミラー　「志願兵を募るには、『RECRUIT（リクルート）』を選んでみてくれ」

ミラー　「それから、『TRADE（トレード）』を選べば、他の傭兵部隊などと、兵士を交換することもできる」

スネーク　「そんな〝潜友（トモダチ）〟がいれば、だな」

――NEXTミッションへ（研究施設（ラボ）へ）。

【研究施設（ラボ）へ／ミッション前強制無線デモ】（ミラー／ヒューイ）

ミラー　「スネーク、ストレンジラブ博士の研究施設（ラボ）に向かい、人工知能（AI）を制止、または破壊するんだ。まずは遺跡に造られた研究施設（ラボ）に向かえ」

――ゲームへ。

【セシール登場／アーティストデモ】

——森を進むスネーク（敵拠点近いので警戒状態。Ｍ１６を持って）。
——スネークの前をハチドリが前方へ飛び去っていく。
——カメラ、ハチドリをフォロー、宿り木のような枝にケツァールが留まっている。
——ケツァール、ひと鳴き。
——スネークＵＰ。銃を構えて画面からアウト。

スネーク　「ん…（発見）」

——ケツァールからパンダウン。
——右肩を木（遺跡）にもたれて座り込んだ下着姿の女性（セシール）がいる。脱力状態。
——スネークには気づいていない。

スネーク　「…おいっ」

——セシール、頭を起こす。
——逃げ疲れきって観念しているセシール（本来は聡明で芯が強く優しい女性）。

セシール　「（恐怖を超えて放心状態で）見つかっちゃった（Ah tu m'as trouve!）。私がオニね（C'est moi le loup!）」

スネーク　「フランス人か（A French…）」

スネーク　「（フランス語で）〝隠れんぼ〟（Fini de jouer a cache-cache）は終わりだ。さあ、何者だ？」

【探査モード】木により掛かってしなだれたセシールを見ることができる。胸元にズームするとSE。

――髪は乱れ、服はボロボロ。それでも美しくセクシー。

――素足が艶めかしくも、痛々しい。

セシール　「お願い、殺さないで…」

スネーク　「兵士ではなさそうだが…」

セシール　「観光客よ…」

スネーク　「名前は？」

スネーク　「ここで何をしている？」

セシール　「セシール・コジマ・カミナンデス」

【テロップ】セシール　小林 ゆう

――おびえ、警戒しているが気丈。

セシール　「あなた、ここの兵士じゃないの？」（思考が追いついてくる。これを言うまではこのあたり

の米傭兵だと思っていた)

セシール　「お願い、銃を下げて…」

セシール　「あなたは誰？」

――スネークとセシールUP、切り返しで。

――銃を降ろすスネーク。

スネーク　「俺は…、鳥類学者だ」

セシール　「(まさか) 密猟者…？」

スネーク　「この銃は護身用だ。コスタリカの、珍しい…、そいつを探していた」

――一鳴きするケツァール (画面中央にケツァール)。

セシール　「そいつ？　…ケツァールのこと？」

スネーク　「そう、ケツァールを」

スネーク　「珍しいといっても、ワシントン条約の対象には入ってない」

セシール　「〝リスプレンデント・ケツァール(カザリキヌバネドリ)〟は、対象(レッドリスト)に入っているわ」

スネーク　「そう、…詳しいな」

セシール「私も…、鳥類学者なの」
スネーク「（とぼけて）そうか、じゃあ先輩だな。…飲むか？」

——ひょうたんのマテ茶を勧めるスネーク（画面中央にひょうたん）。
——ひったくるように奪って飲み出すセシール。
——一鳴きするケツァール（しつこく鳴かせて印象づけ）。

セシール「ふぅ…助かった」
セシール「…ここは世界でも、有数の珍しい鳥たちが生息する楽園。…おまけに戦争もないから安全」
セシール「だからバードウォッチャー達にも憧れの場所だった。でも…、違った」
スネーク「何があった？」
セシール「…あんな声、録らなければ…」
スネーク「…声？」
セシール「鳥の、ケツァールの鳴き声を録っていたの」

——セシールの回想。
——マイク、肩掛けのカセットデンスケで木をかき分ける元気な頃のセシール。

セシール　「茂みを抜けると、大きな遺跡がそそり立っていた…」

——テープの音声。

ザ・ボス　「追い返す」
ザ・ボス　「殺さなければ、あなたが咬まれる」
ザ・ボス　「帰れ！」
スネーク　「あのテープは君が？」

——遺跡の入り口をそっとのぞき込むセシールを遺跡側から。

ザ・ボス　「自分に忠を尽くす」
ストレンジラブ　「誰!?」
兵士　「誰だ！」

——セシールに向かって数名の兵士が駆け寄る。

——ＳＥ。画面、黒のまま。

セシール「…その女性に捕らえられた」

――目隠しと手足を拘束されたセシールが浮かび上がる。

セシール「ところが、その人は私に優しかったの。食事を食べさせてくれて、お風呂で毎日、身体を拭いてくれた」

セシール「あの人は、ひと月で帰れるって」

セシール「…『だから絶対に、目隠しを取っては駄目。二度と出られなくなる』と」

――セシールの回想終わり。

スネーク「約束を破ったわけだ。どうやって逃げた?」

セシール「隙を見て、IDカードを盗んだ。捕まりそうになったけど、振り払って…」

スネーク「で、ここまで逃げてきて…、力尽きたわけだ」

セシール「裸足だし…、装備も…、何もないもの」

――マテ茶を飲み干すセシール。

セシール「ごめん。全部飲んじゃった（「テヘ」な感じ）」

――空のマテ茶の入ったひょうたんをスネークに返す。ひょうたんをしまい、真顔になるスネーク。

スネーク　「その施設で…、他に誰か見なかったか?」

セシール　「ええ、もう一人、女性が。でも、姿を見たことがない…」

セシール　「ずっと目隠しされてたから…」

セシール　「そうだわ…、よく歌を歌っていた」

スネーク　「歌…?（ボスが?）」

セシール　「不思議な歌声だった…」

スネーク　「どんな人物だった?　声からでも想像出来るだろ?」

セシール　「わからない。捕まった理由さえもわからないもの」

セシール　「機材も装備も、パスポートもお金も…。何もかも没収された」

セシール　「許されたのは下着だけ…、そうやって逃げられないように…」

セシール　「だから、もう身分を証明するものもない。これじゃあ、パリへ帰れない」

スネーク　「それなら…、俺達のところに来い」

スネーク　「パスポートの要らない場所だ。名前さえも要らない」

スネーク　「帰りたくなったら、いつでもパリに帰してやる」
セシール　「身体を洗って、煙草を吸って…、服を着たい」
スネーク　「葉巻ならある。キューバだ」
セシール　「フランスの煙草は？　両切りがいい」
スネーク　「…今は持っていない。だが 俺のところに来れば、フランス煙草ならいくらでもある」
セシール　「楽園みたい」
スネーク　「(笑い) あいにくそこは、天国の外(アウター・ヘブン)だ」
セシール　「ますます、魅力的なところね」
スネーク　「それで、君は逃げる時に、見たんだな？　その施設には、何があった？」
――セシールの回想。
――AIルームのシルエット。
――ママルポッドの輪郭が浮かび上がる。
セシール　「…機械が一杯あった。大学の電算機みたいな…」
スネーク　「声が聞こえた部屋には？　誰かいたか？」

セシール　「わからない。筒が…」
セシール　「奥に、大きな筒があった…」
セシール　「近寄ったら、声が聴こえた」
スネーク　「何と言っていた？」
セシール　「…ジャック」

――スネークのＵＰ！

セシール　「そう、確かにジャックって、呼び続けていた」

――ザ・ボスはスネークをジャックと呼んでいた。

スネーク　「(動揺) ジャック…」
セシール　「…ねえ、早くここから出たい。シャワーを浴びたい！」
スネーク　「待て、俺にはまだやることがある」
セシール　「まさか、あなた遺跡に行くの？　置いていかないで！」
スネーク　「大丈夫だ。すぐ仲間を寄越す」

——SEND音。

ミラー　「こちらミラー」
スネーク　「1名回収してくれ、民間人だ」
ミラー　「スネーク、民間人を受け入れる余裕はない」
スネーク　「そうか、金髪のパリジェンヌなんだが」
ミラー　「なんだと!?　で、いけてるのか?.」
スネーク　「自分で確かめろ。本人の話が本当なら、パスが言ってた友人のようだ」
ミラー　「行方不明の?.」
スネーク　「ああ、恐らく例の声を録音した本人だ。テープを聴かせてみろ」
ミラー　「そうか、無事だったんだな」
スネーク　「パスも喜ぶはずだ」
ミラー　「わかった。スネーク、遺跡（ラボ）はもうすぐだ。そこから北に向かってくれ」
スネーク　「了解」
セシール　「ねえ 私は?.」
スネーク　「そこにいろ。鳥になれるぞ」

セシール　「え？　（空に引っ張り上げられる悲鳴！）」
　——セシールの顔窓、ピュッと上へ。
　——F.O.
　——ゲームへ。

【ＩＤカードエラー／シナリオデモ】

　——目前にたたずむ巨大遺跡。
　——スネークはゲート前に入ってくる。
　——巨大遺跡入り口でヒューイにもらったＩＤカードを試すが、開かない（ブブー音）。
スネーク　「開かない」
　——もう一度試すがやはりダメ。
スネーク　「ダメか」
　——ため息をつくスネーク。
　——ミラーの顔窓表示。

ミラー　「開かない…？　どういうことだ！」

——リザルト画面へ。

【研究施設（ラボ）へ／ミッション後強制無線デモ】（ヒューイ／セシール）

——SEND音。

——ヒューイを表示。

ヒューイ　「スネーク？」

スネーク　「ヒューイ、お前のIDカードが使えない」

ヒューイ　「このIDではロックが解除されないんだ！」

スネーク　「(息を呑む)まさか…！」

ヒューイ　「どうした⁉」

スネーク　「…そこまで嫌われたか…」

ヒューイ　「ヒューイ（しっかりしてくれ）」

ヒューイ　「…IDの許可を出しているのはストレンジラブなんだ。前は使えたIDカードでも、権限を外されることがある」

ヒューイ　「…例えば、嫌いになった相手とか」
スネーク　「…心当たりが？」
ヒューイ　「まあね…。…好かれているとは思えない」
スネーク　「……（ため息）」
ヒューイ　「困ったな…。外にいる兵士も、研究室(ラボ)への入室は許可されてないから、連中のカードを奪っても意味がないし…」
スネーク　「わかった」

――画面切り替え、ミラー。

ミラー　「スネーク」
スネーク　「カズ、セシールは？」
ミラー　「さっき到着した。待ってくれ」

――画面切り替え、セシール。

セシール　「スネーク」
スネーク　「セシール、鳥になった気分は？」

セシール「素敵だった。鳥の気持ちが少しはわかったわ」
セシール「鳥の研究はやめて、空を飛ぼうかなって思う。で、どうしたの？」
スネーク「君はＩＤカードを手に入れたと言っていたな？」
セシール「ええ…。でも一度見張りの兵隊に捕まったとき、没収されちゃったの」
スネーク「取られた⁉　どんな奴にだ？」
セシール「オレンジ色のジャケットを着ていた。顔は思い出せない」
スネーク「奴ら、似た顔が多いからな。場所は？」
セシール「ええと…。あ、そこでは『ケツァール』が鳴いていた。確かよ」
スネーク「さすがバードウォッチャー（バーダー）だ」
セシール「ケツァールの鳴き声、聴く？」
スネーク「ああ」
セシール「（ケツァールの声真似）……」

——ケツァールの鳴き声（セシールの声真似）。

スネーク「ああっ？　その鳴き声は？」

セシール　「私のケツァール。回収された時、一緒に連れてきたの」
スネーク　「確か、ワシントン条約の対象に入ってると君が…」
セシール　「ウソ。今のは私の、もの真似。鳥類学者はこのくらい出来なくちゃ。うまいもんでしょ?」
スネーク　「たいした女だ…」
セシール　「ケツァールの鳴き声が聴きたかったら、私に連絡(CALL)して。それからもし、コスタリカの鳥について聞きたいことがあれば」
スネーク　「わかった。セシール、よろしくな」
セシール　「こちらこそ、スネーク。それじゃ…」
スネーク　「カズ、セシールに例のテープは?」

——画面切り替え、ミラー。

ミラー　「聴かせたよ。確かに彼女のものだった」
スネーク　「じゃあ彼女は…(パスの)」
ミラー　「パスの友人じゃない。セシールは知らないと」

スネーク「何だって？」

ミラー「年齢（とし）も10は離れてるだろう」

スネーク「だが…」

ミラー「たぶんパスは、友達が録ったテープだと思い込んでいたんじゃないか？」

ミラー「まあ、そのことはいいじゃないか。スネーク、情報を整理しよう」

ミラー「IDカードを持っている兵士は、オレンジ色のジャケットを着ていて、ケツァールが鳴く場所（エリア）にいる」

ミラー「その兵士を捜し出し、IDカードを入手するんだ」

――NEXTミッションへ（IDカード捜索）。

【IDカード捜索／ミッション前強制無線デモ】（ミラー）

ミラー「スネーク。研究施設（ラボ）に入るため、IDカードを入手するんだ」

ミラー「IDカードを持っているのは、ケツァールの鳴き声が聞こえる場所（エリア）の、オレンジ色のジャケットを着た兵士だ」

ミラー　「兵士からＩＤカードを奪うには、『ボディチェック』すればいい」

ミラー　「人工知能（ＡＩ）が運び出されるまでに研究施設（ラボ）に入らなければならない。急いでくれ！」

——ゲームへ。

【ＩＤカード認証ＯＫ／シナリオデモ】

——ゲート前、スネークＩＮ。

——ＩＤカードをスロットに通すスネーク。認証ＯＫ（ブルーライト、ピピッ音）。

——ゲートが自動で開く。

——やったぞ顔のスネーク。

——ミラー顔窓表示。

ミラー　「よし、開いたな」

——ゲートを通過、巨大遺跡の入り口へ進むスネーク。

——巨大遺跡の辺りにはオオアマナの花が咲き乱れている。

——F.O.

【Dr．ストレンジラブ登場／アーティストデモ】

――状況：一見マヤ文明の遺跡に見えるDr．ストレンジラブの研究施設（ラボ）。実際には衛星の目をごまかすために、外装だけ装っており内装は近代的、（当時の）先端技術のマシンが並ぶ。

――入り口から暗い通路を抜けると中庭がある。中庭にもオオアマナが咲いている。蝶が舞っている。ザ・ボスの愛馬のアンダルシアンがいる。吹き抜けから光が差し込み、この一角だけ幻想的な雰囲気。

――中庭を進むと研究棟になっており、ここは近代的で、大型コンピュータが並んでいる。

――その奥に制作中の人工知能（AI）、ママルポッドがある。室内はマシンのため空調が利いており、外より遙かに涼しい。

――遺跡の扉を抜けるスネーク。

――ハンドガンを構えて暗がりの通路を奥へと進むスネーク。

――通路越しの中庭（スネーク主観風）。

――中庭を目前に、中庭の陰からぬっとアンダルシアンが顔を出す。

――スネークUP。

――はっとするスネーク、立ち止まる。

――アンダルシアンが前脚を上げて嘶く。

スネーク　「（小声で）こいつは…、まさか…」

――スネーク、手に残る古傷（ＭＧＳ３で蹄に踏み折られた手の甲の傷痕）を見る。
――アンダルシアンがその手に鼻先をあててくる。すまなそうにも見える。

ザ・ボス　「命拾いしたようね――」（幻聴）

――銃を構えて（進行方向へ）振り返るスネーク！

スネーク　「（振り返りざま、思わず口走る）ボス…⁉」

――そこにはＤｒ．ストレンジラブが壁にもたれて立っている。

ストレンジラブ「誰？」
スネーク「お前は…」
スネーク「ストレンジラブ…博士だな」
ストレンジラブ「…待っていた、お前を」（ＭＧＳ３、ザ・ボスのセリフ）
ストレンジラブ「恋しかったわけではない…」

――手の甲を鼻に近づけて嗅ぎ煙草を一気に吸うと、しみこませるように空を仰ぐ（ストロボショット風で、小窓で見せる）。

ストレンジラブ「むしろ…、憎い。お前が！」
スネーク　「動くな！」
――スネーク、銃を向ける。
ストレンジラブ「『動くな』か…。武器を手にした人間は、みな抑止力（同じ事）を言う」
【探査モード】ストレンジラブの背後からオオアマナの花が現れる（暗喩）。
【テロップ】Ｄｒ．ストレンジラブ　菊地由美
ストレンジラブ「私の研究成果を、壊しに来たんだろう。知っているぞ、10年前、お前が何をしたのかも」
――スネーク、トリガーに手をかける。
ストレンジラブ「さあ、同じように殺せ」
ストレンジラブ「ボスと同じように」
――スネーク、ひるむ。汗が頬を伝う。

スネーク　「（乱れる吐息）」
ストレンジラブ　「殺せ！」
スネーク　「お前は…」
ストレンジラブ　「スネーク！　いや、BIGBOSS（ビッグボス）か？　人殺しのご褒美に貰った、穢れた名をまだぶら下げているのか」
ストレンジラブ　「お前は育ててくれた〝恩人〟よりも、実体のない〝国家〟を選んだ。世界中の戦士を失望させた」
ストレンジラブ　「任務という権力のために真の英雄を殺した」
ストレンジラブ　「それがお前の〝忠〟か？　答えろ！」
スネーク　「ボスは…」
ストレンジラブ　「さあ！　どうなんだ⁉」
スネーク　「…あの女は祖国（アメリカ）を裏切り、核（デイビークロケット）を盗んで亡命した」

——詳しい相手とみて、CIAによるカバーストーリーを話す。

——回想、MGS3。

スネーク　「合衆国（アメリカ）の核を使い、ソ連の地を撃った」

スネーク「アメリカ政府は、裏切り者のあの女を、自ら抹殺することで…、自国(アメリカ)の潔白をソ連に証明した」
ストレンジラブ「それが〝真実〟か」
スネーク「あの時、全面核戦争を止められるのは、ボスの死だけだった」
ストレンジラブ「この世で最も愛した恩人を、汚名を着せて葬り去る事がか?」
スネーク「これが語られている真実の全てだ」
スネーク「…任務(ミッション)だった」

——あざ笑うストレンジラブ。

ストレンジラブ「それが自分を守るため下した結論か」
スネーク「お前はボスの…」
ストレンジラブ「この世に置きざりにされた人間だ」
ストレンジラブ「愛した彼女に、答えを聴くまで、死ぬことも出来ない…。お前と同じ、生ける屍だ」
スネーク「(吐息)」
ストレンジラブ「逢いたいか」

スネーク　「ボスはもう、この世にいない」

ストレンジラブ　「ぬけぬけと」

――ケース（嗅ぎ煙草）から左手の甲に煙草の粉を落とす。

ストレンジラブ　「逢いたいだろう？　逢わせてやってもいい」

ストレンジラブ　「お前が奪った命を、私が蘇らせた」

スネーク　「…何だって？」

ストレンジラブ　「…吸うか？」

――左の手を前に出すストレンジラブ。

ストレンジラブ　「ただの嗅ぎ煙草（スナッフ）だ。葉巻（シガー）は吸うだろう？　ここから先は禁煙だ。彼女に逢いたければ吸っておけ」

――左の手の甲に鼻を近づけるスネーク。

――女王に忠誠を誓う騎士のようにも見える。

――ストレンジラブを睨み付けると、鼻から吸い込むスネーク。

ストレンジラブ「こっちだ」

――F.O. 後、AIルーム。

――中央のシリンダー状のママルポッドを誇らしげに示すストレンジラブ。

――スネークはその後方にいる。

ストレンジラブ「私が産み落とした〝モルフォ蝶〟だ。蛹（ピューパ）でも繭（コクーン）でもない。完全の名を享受した〝成虫（イメイゴ）〟だ」

ザ・ボスＡＩ「（探るように）誰かいるの」

――ザ・ボスの声に反応するスネーク。

スネーク「ボス…」

ストレンジラブ「客だ、紹介する」

ストレンジラブ「…妙な真似はするなよ。この部屋に居る限り　ボタンひとつでお前を、炭素の塊に変える事が出来る」

ザ・ボスＡＩ「あなたは誰？」

――ママルポッドへ近づいていくスネーク。

――ザ・ボスはカメラ、センサー類でスネークを計測している。

【クレジット】ザ・ボス　井上喜久子

ザ・ボスＡＩ「男の人…」
ザ・ボスＡＩ「戦士（War fighter）」

――ポッドの前に立つスネーク。
――ポッドのカバーが開く。
――ザ・ボスへ対面する緊張、汗がにじみ出るスネーク（嗅ぎ煙草に睡眠薬）。
――中はＡＩユニットの支柱があるのみ。
――目をこらすスネーク。

スネーク「ボスは？　…ボスなのか？」
ストレンジラブ「私は『ママルポッド』と呼んでいる」
スネーク「ママルポッド…？」
ストレンジラブ「計画への協力と引き替えに、私はザ・ボスのあらゆる情報を要求した。ＣＩＡが知り得る、全てのデータを」

――画面に書類やカルテ、資料が表示される。

ストレンジラブ「生い立ち、従軍記録と身体データ、全作戦ファイル、通信記録。いかなる状況でいかなる判断を下したか。何を奪われ、何を奪ったか。苦痛と快楽、喜び（ジョイ）と哀しみ（ソロー）、生と死の総て」

ストレンジラブ「そして、お前のことも」

スネーク「何故そんなことを？」

ストレンジラブ「コールドマンの要求はこうだった。仮想敵からの核攻撃に対し、最適な地点に効果的な報復を与えるための、相互確証破壊（MAD）に基づいた人工知能（AI）」

ストレンジラブ「人間に出来ない判断と行動を成し遂げる、抑止力としての無人装置の創造」

ストレンジラブ「私の結論はこうだ。相手が次なる核攻撃に出られぬよう、早急に、確実に、徹底的にその相手を潰す。そのための冷徹なる機械（マシン）のプログラムを作成すること」

ストレンジラブ「だがあの男には、あえて違う答えを用意した」

ストレンジラブ「『地球規模で思考し、未来と過去を熟慮し、苦痛の先に最善の判断を下す――最も優れた共感脳の思考パターンが必要だ』と」

スネーク「そのためにザ・ボスの全てを求めた？」

ストレンジラブ「…間違いではない。全人類の喉首を委ねられる人物は、私の知る限りただ一人だ」
スネーク「だが、本当の目的は何だ」
ストレンジラブ「ザ・ボスの汚名をそそぐ事だ」
ストレンジラブ「伝説的英雄であった彼女が何故、敵に寝返り、最愛の弟子であるお前に、暗殺されなければならなかったのか？」
ストレンジラブ「創られた虚構ではなく…」
ストレンジラブ「ボスの真実…、最期のボスの意志（ウィル）を確かめたい」
ストレンジラブ「それこそ、お前が知りたい事でもあるはずだ」
スネーク「いや、ボスは…、国を、俺達を棄てたんだ」
ストレンジラブ「ほう、…彼女の気持ちが解るのか？」

——やや戸惑うスネーク。実際の所はスネークにもわからない。それにここで気づく。

スネーク「お前は…、ザ・ボスのあの時の、最期の思考（ラストウィル）を、再現しようと？」
ストレンジラブ「本人に直接、聞くがいい。…ジャック」
ザ・ボスＡＩ「ジャック…」

スネーク　「(息を飲む)」
ザ・ボスＡＩ　「ジャック……！」
スネーク　「ボス…？」
――振り返るスネーク。ポッドの中は光が瞬いている。
ザ・ボスＡＩ　「ジャック……！」
――ふらつきながらポッドの中に入るスネーク。
スネーク　「ボス…」
――一歩、近づくスネーク。
ザ・ボスＡＩ　「ジャック！」
――更に一歩、突然悲鳴のような、不協和音のノイズが充満する。
ザ・ボスＡＩ　「帰れ！　もはやお前のボスは私ではない！」
スネーク　「ボス…」

ザ・ボスＡＩ　「帰れ！」
スネーク　「いや違う、俺は…」
ストレンジラブ「目的(ミッション)を果たせ、スネーク。もう一度、その尊い魂を奪うことが出来るのなら」

——ポッドのカバーが閉じる。

——F.O.

【ＡＩ引き抜きゲーム】ＡＩを抜いていくスネーク。ＡＩは永遠に抜ける（いずれにしろ気絶で全て回収される）

——残り時間が少なくなると、警告音。

ストレンジラブ「（ＯＦＦ）何…この反応は…（焦り）」
ストレンジラブ「（ＯＦＦ）ああ、まずい。止まれ！（焦り）」

——ＡＩポッドの電源を落とすストレンジラブ。

——スネーク気絶。

——ホワイトアウト。

【CQC回想1／アーティストデモ】

――ホワイトイン。

――画面はMGS3の回想（セピア）。

――オオアマナの花びらが舞っている。

――花畑で向かい合う二人（横位置）。

【アーティストデモゲーム】

――ボタン表示のタイミングで該当するボタンを押すことで成功となる。

――失敗するとそのブロックの先頭に戻る。

ザ・ボス（MGS3）「何もかも、あなたに教えた（十年間、寝食を共にしたのよ）」

ザ・ボス（MGS3）「後はあなたが自ら学ぶこと」

――ザ・ボスとスネークのアップ。

スネーク「確かに技術は。しかし、兵士としての精神は……」

――〔Lボタン〕マントを投げ、駆け込むザ・ボス。

――〔Lボタン〕スネーク、左手にナイフ、ハンドガンを右手にCQC構え。

――〔Rボタン〕スネーク発砲。

——動きを読んでいたようにスネークの左脇に潜り込むザ・ボス。
——〔Rボタン〕スネーク、ナイフをザ・ボスの首にひっかけようとのばす。
——ザ・ボスにその手をつかまれナイフを落とされる。
——地面に叩き付けられるスネーク。

スネーク「うあぁ（叩き付けられてボスを見上げる）」

——身構えるザ・ボスとスネーク。
——向かい合う二人、

ザ・ボス（MGS3）「東洋では『忠（loyalty）を尽くす』という言葉がある。…意味わかる？」
スネーク「主君への…、『愛国心（patriotism）』？」
ザ・ボス（MGS3）「国への献身」

——〔Lボタン〕持っていたハンドガンを構えようとするスネーク。
——その手をザ・ボスに取られる。解体されて四散するハンドガン。
——〔Rボタン〕ザ・ボスに手を伸ばすスネーク。
——その手を払われ踏み込まれ、押し倒そうとザ・ボスの手がスネークの首元に伸びる。
——〔方向キー右〕後ろに下がってそれをかわすスネーク。
——交差する二人のアップ。

ザ・ボス（ＭＧＳ３）「忠をつくしている限り、私たちに信じていいものはない。…たとえそれが愛した相手でも（ザ・ソローの事）」

——〔△ボタン〕ザ・ボスの腕を掴むスネーク。

スネーク「それが軍人としての精神？」

ザ・ボス（ＭＧＳ３）「ただひとつ、絶対に信じられるのは……」

ザ・ボス（ＭＧＳ３）「『任務（ミッション）』だけよ。ジャック」

——〔方向キー左〕受け流すスネーク。

——〔Ｒボタン〕ザ・ボスを倒そうとするが…。

——スネークの腕を掴むザ・ボス。空中で一回転、地面に叩き付けられるスネーク。

——ザ・ボス、スネーク主観、アオリ。

ザ・ボス（ＭＧＳ３）「私はソ連に亡命する」

ザ・ボス（ＭＧＳ３）「ジャック…、あなたは連れていけない」

——風が吹き、花びらが流れる。

——ホワイトアウト。

【クリサリス登場／シナリオデモ】

——前アーティストデモのつなぎで風の音やや先行して流してから、F.I.
——意識が戻るスネーク。投げ飛ばされた姿勢と同じ仰向けで寝ている。
——そこはオオアマナの花が咲く巨大遺跡の前だった。
——頭上にＡＩポッドを吊り下げた、ストレンジラブの乗るハインドが飛び去る。
——遺跡の向こうへ消えるハインド。
——その方向から、ＡＩボスが浮上する。
——立ち上がるスネーク。Ｍ１６を構える。
——ＡＩボス戦タイトル表示。

【クリサリス　ＡＩ搭載垂直離着陸戦機】

——ＮＥＸＴミッションへ（対クリサリス戦）。

【対クリサリス戦／ミッション前強制無線デモ】（ミラー／ヒューイ）

ミラー　「スネーク。ヒューイがクリサリスと呼んでいた兵器だ。なんとか排除するんだ！」

——ゲームへ。

――クリサリスを破壊すればクリア。

――リザルト画面へ。

【対クリサリス戦／ミッション後強制無線デモ】（ミラー）

ミラー　「スネーク…」

スネーク　「あの女(ストレンジラブ)に、まんまとやられた」

ミラー　「気にするな。まだ挽回できる」

ミラー　「…あんたにその意志があればだが」

スネーク　「俺の意志は決まっている」

ミラー　「そうか…」

ミラー　「ヒューイに位置を確認した。ピースウォーカーの最終実験基地は、その研究施設(ラボ)から北に15マイル」

ミラー　「岩石採掘場に偽装している地下基地だ。そこに潜入して、今度こそＡＩを破壊すればいい」

スネーク　「わかった」

ミラー　「スネーク…。本当にママルポッド(あれ)を壊せるか?」

スネーク　「ああ」

ミラー　「人間には、出来る事と、出来ない事がある」

スネーク　「大丈夫だ。今度はしくじらない」

ミラー　「ザ・ボスを殺したのはあんただ」

ミラー　「ママルポッド(AI)の破壊は、もう一度、その過去をなぞることになる」

スネーク　「あれは、ただの機械(マシン)だ」

ミラー　「スネーク…。…心配なんだ」

スネーク　「心配?」

ミラー　「CIA(コールドマン)が核発射をAIに委ねたのも、それが理由だ」

ミラー　「人間、重責を担う覚悟があるなら、罪人の1人や2人の死刑宣告は出来るだろう」

ミラー　「だが、数十億の罪のない民間人を殺せる人間は?」

ミラー　「何千年も築いてきた人類の歴史を、一瞬で灰に出来るか?」

ミラー　「そんな決断を、生きた人間が出来ると思うか?」

ミラー　「出来るはずがない!」

ミラー　「一人の人間が、人間という種の終末を、背負う事なんか出来ない」

ミラー　「だからこそ、臆病な人類はこの数千年もの間、生き延びてきたんだ」

ミラー　「しかし、機械（マシン）なら意志（ウィル）の力は関係ない」

スネーク　「カズ、何が言いたい？」

ミラー　「あんたは英雄だ。でも、機械（マシン）ではない」

スネーク　「俺にはあのＡＩ（ママルポッド）を破壊できないと？」

ミラー　「あの機械（マシン）の問題じゃない。あんたの中で、未だ『ザ・ボス』は死んでないってことだ」

スネーク　「ばかなっ！」

ミラー　「スネーク！　認めなければならない。ザ・ボスの死を」

スネーク　「……」

ミラー　「言葉を換えよう、…スネーク」

ミラー　「あんたは国も身分も過去も理想も、何もかも棄てた。しかし、まだ棄ててないものがある」

スネーク　「なんだって？」

ミラー　「ザ・ボスだ。あんたは、彼女を棄て切れていない」

ミラー　「だからこそ、彼女の真実を知るのを恐れている」

ミラー　「おそらく、それがあんたの行動を、未来を抑止している主因だ」

ミラー　「スネーク、彼女が亡くなって10年(ディケイド)になる」

ミラー　「いつまで亡霊(ゴースト)と生き続けるつもりなんだ？」

スネーク　「…カズ。俺は彼女の全てを知っているつもりだった」

スネーク　「しかし、彼女の最期に何があったかは、未だにわかってない」

ミラー　「その点はあの博士と同じだな」

スネーク　「彼女(ストレンジラブ)に疑われて初めて意識した」

スネーク　「俺が聞いたデブリーフィングは奴ら(CIAやKGB)が創ったカバーストーリーのひとつだったのかもしれない」

——ＥＶＡ（中国のスパイ）から聞かされたデブリーフィング、本当かどうかは怪しいということにここで気がついた。

スネーク　「俺も、今となってはザ・ボスの本意はわからない」

スネーク　「彼女が何故、あの任務を引き受けたのか？」

スネーク　「彼女は、どういう想いで死んだのか？」

スネーク「何故、俺が選ばれたのか?」

ミラー「…その真実を知りたいか?」

スネーク「……」

ミラー「真実を知っても、過去は変えられない。それでも?」

スネーク「…いや、俺がこの任務を引き受けたのは、平和を信じるコスタリカの少女の為だ」

ミラー「わかった。この議論はもうやめよう。もうじき、ピースウォーカーが完成する」

ミラー「国境近くの基地へ急ごう! …さあ、ボス」

——NEXTミッションへ（採掘場偽装基地へ）。

——Chapter 2 end——

「熱帯雲霧林へ」無線集

■セルバ・デ・ラ・レチェ／ジャングル

【スカウト兵に注意】強制無線
※ミッション開始時
ミラー　「そのあたりに偵察兵（スカウト）が潜んでいたら、発見は困難だ。気をつけろ」
※開始後数歩進んだ所で
ミラー　「気配を殺して潜んでいる敵は、エネミーサーチでも見つからないだろう」
ミラー　「注意するんだ」

■「熱帯雲霧林へ」共通

【レーダー開発促し】任意無線
※ソリトンレーダー未開発の場合。偵察兵がいる辺りで
ヒューイ　「マザーベースで携帯用の高性能なレーダーを、作れればいいんだけど」

【NVGについて】任意無線
※NVG未開発、もしくはNVGを持っている場合
ヒューイ　「暗視装置（NVG）なら、隠れている敵を簡単に見つけられるんだけど」
※NVGは開発済みだが、持っていない場合
ヒューイ　「暗視装置（NVG）なら、隠れている敵を簡単に見つけられるんだけど」
ヒューイ　「なんだ、持っていかなかったのか？」

【スナイパーに気をつけて】任意無線
※スナイパーがいる付近で
(1)
アマンダ　「繁みに偽装しているスナイパーがいるかもしれない。気をつけて」
(2)
アマンダ　「怪しそうな場所はよく様子を見ないと」
※スナイパーを発見した後
アマンダ　「発見されたスナイパーはすぐに位置を変えるはずよ」

【待ち伏せに注意】任意無線

※スカウト兵がいるあたりで

（1）

アマンダ「隠れる場所が多い。待ち伏せ（アンブッシュ）にも注意して」

（2）

アマンダ「怪しそうな場所はよく様子を見ないと」

（3）

アマンダ「どこに敵がいるかわからない。油断しないで」

【北へ向かえ】任意無線

（1）

ミラー「ストレンジラブ博士の研究施設（ラボ）は北だ。北へ向かうんだ」

（2）

ミラー「北の研究施設（ラボ）を目指してくれ」

【目的確認】任意無線

（1）

ミラー「ストレンジラブ博士の研究所は近い。急ぐんだ、スネーク」

（2）

ヒューイ「ストレンジラブ博士の研究所に向かってくれ」

（3）

ミラー「研究施設（ラボ）は巨大な遺跡の中にあるようだ」

（4）

ヒューイ「頼んだよスネーク」

ヒューイ「研究施設（ラボ）へ行って、ピースウォーカーの〝大脳〟を破壊してくれ」

【ヒューイの手紙】任意無線

※ヒューイの手紙（ストレンジラブ宛）を読む前

（1）

アマンダ「あの手紙が気になる」

（2）

チコ「ヒューイの手紙、俺も見たいな…」

（3）

ミラー「ストレンジラブ博士への手紙か…。気になるな」

（4）

パス「ヒューイさんの手紙…読んじゃった？」

（5）

ヒューイ「あの手紙は読まないでくれよ」

※手紙を読んだ後

（1）

アマンダ 「やれやれ、こんなときにラブレターとは暢気なもんだね」

（2）

チコ 「あれ、ラブレターだったの？ 俺にも見せてくれよ」

（3）

ミラー 「ははは、ラブレターとは、あの男も隅に置けないな」

（4）

パス 「勝手に他人のラブレターを見るなんて、ひどい」

【ラバについて】任意無線

（1）

チコ 「俺の家でも、ラバを飼ってたよ。働き者だった」

（2）

パス 「ラバくん、元の場所に帰れたかな…」

【チコより】任意無線

チコ 「ごめん、コリブリの歌を聴くだけで、未だに足が竦むんだ…みっともないよな」

チコ 「俺もこの辺まで来たことはないんだ。気を付けて、スネーク」

注：「対戦闘ヘリ戦：Mi－24A」無線集は、P453の【対戦闘ヘリ戦無線集】を参照してください

「研究施設（ラボ）へ」無線集

■カタラタ・デ・ラ・ムエルテ

【滝について】任意無線

パス　「見事な滝…大自然の生み出した芸術ね」

※スネーク限定

ミラー　「落ちたらまず助からないな…。あんたみたいな超人ならともかく」

■セルバ・デ・ラ・ムエルテ／崖下

【スカウトに注意】強制無線

⑴

ミラー　「偵察兵（スカウト）の中には、草や土で偽装している者もいる。自然に溶け込んでいる分、厄介だ」

⑵

ミラー　「ギリースーツを着てこのジャングルの中に潜まれたら、発見は難しい。注意しろ」

【レーザーサイトに注意】強制無線

⑴

ミラー　「スナイパーがレーザーサイトを使っていると厄介だが…」

⑵

ミラー　「レーザーの赤い光に注意しろ」

■セルバ・デ・ラ・ムエルテ／崖上

【目的再確認】任意無線

※このエリアのみで発生

ミラー　「一旦東へ抜けてくれ。その北に研究施設（ラボ）がある」

【ヘリコニア・ラティパスタ】任意無線

パス　「このあたりに咲いている蟹の爪みたいな花は、ヘリコニア・ラティパスタ」

パス　「ハチドリが蜜を求めてやってくることも多いのよ」

■リュイナス・デ・ショチケツァル

【遺跡について】任意無線

⑴

パス　「こんな遺跡、コスタリカにあったかしら」

（2）
チコ「遺跡⁉　中に秘宝が眠ってるんじゃないのか？」
（3）
パス「ショチケツァルのご加護があるといいけど…」
（4）
パス「そろそろ遺跡にたどり着いてもいい頃ね」

【目的再確認】任意無線
（1）
ミラー「目的地は雲霧林の向こう、遺跡に偽装した研究施設だ」
（2）
ヒューイ「ストレンジラブ博士の研究所に向かってくれ」

【パリジェンヌを語る】任意無線
※セシール回収後に
（1）
ヒューイ「スネーク、パリジェンヌもいいけど、早くストレンジラブ博士に会いに行ってくれ」
（2）
ミラー「パリジェンヌか…」
（3）
ミラー「ジュテーム…」

「ＩＤカード捜索」無線集

■リュイナス・デ・ショチケツァル

【ケツァール探し念押し】強制・任意無線
※ＩＤカード入手まで3分おきに

（1）
ミラー　「目的の兵士がいる場所では、ケツァールが鳴いているらしい、耳を澄ませ」

（2）
ミラー　「ケツァールの鳴き声を忘れたら、無線ＣＡＬＬするんだ。セシールが教えてくれる」

（3）
ミラー　「ＩＤカードを持っている敵兵は、オレンジのジャケットを着ているそうだ」

（4）
ミラー　「兵士は殺さずにボディチェックするんだ」

【まずＩＤカードを探せ】強制無線
※ＩＤカードを持たずに「人工知性研究所」に戻った場合

（1）
ミラー　「ＩＤカードがないと、研究施設（ラボ）には入れない。戻って探すんだ」

（2）
ミラー　「まずＩＤカードを手に入れるんだ」

（3）
ミラー　「ＩＤカードを持っている兵士を探せ。ケツァールが鳴く森にいる」

■セルバ・デ・ラ・ムエルテ／崖の上

【ボディチェックしろ】強制・任意無線
ミラー　「ＩＤカードを持っている兵士がわかったら、ボディチェックしろ」
ミラー　「気絶させたり眠らせたりしてから、ボディチェックだ。ホールドアップでもいい」

■「ＩＤカード捜索」共通

【ケツァールの鳴き真似】任意無線

（1）
セシール　「ケツァールの鳴き真似をするわ。キョーッ、キョーッ」

（2）

セシール 「キョーッ、キョーッ、キョーッ。…ケツァールの声はこんな感じよ」

(3)

セシール 「キョーッ、キョーッ、キョーッ。…どう？ 本物みたいでしょ？」

【豚の鳴き真似】任意無線

※CALLすると低確率で

セシール 「ブヒブヒ。…間違えた、豚やっちゃった」

【IDカード所持兵ヒント】任意無線

※ケツァールの鳴き声がするエリアへ入った時に

セシール 「この声…ケツァールね。あいつは近くにいるはず…！」

セシール 「オレンジ色のジャケットを着た兵士を探して」

※ケツァールの鳴き声がするエリアで、IDカードを持った兵が近くにいる時に

セシール 「あいつよ！ あいつにIDカードを奪われたの」

【アカエリシトド】任意無線

※アカエリシトドが鳴いている近くで

セシール 「この声はアカエリシトドよ」

セシール 「ケツァールの鳴き声はこう。キョーッ、キョーッ！」

【イエミソサザイ】任意無線

※イエミソサザイが鳴いている近くで

セシール 「ここで鳴いているのはイエミソサザイね」

セシール 「ケツァールの鳴き声はこう。キョーッ、キョーッ！」

【カオグロアメリカムシクイ】任意無線

※カオグロアメリカムシクイが鳴いている近くで

セシール 「この鳴き声は…カオグロアメリカムシクイかな」

セシール 「ケツァールの鳴き声はこう。キョーッ、キョーッ！」

【IDカードを拾え】強制無線

※IDカードが地面に落ちたら

ミラー　「拾うんだスネーク！」
【フルトンを外せ】強制無線
※ＩＤカードを持っている兵士をボディチェック可能な状態にした際、フルトン回収装置を装備していたら
ミラー　「フルトン回収装置を外してからボディチェックしろ」
ミラー　「ボディチェックしようとして、フルトン回収してしまわないようにな」
【装備品を捨ててから拾え】強制無線
※装備品がｆｕｌｌの時にＩＤカードを拾おうとしたら
ミラー　「荷物がいっぱいだ。何か捨てないと新しいアイテムは拾えない」
ミラー　「装備品ウィンドウを開いて、捨てたいアイテムを選んでＤＲＯＰ（ドロップ）してくれ」
【オレンジ兵殺害】任意無線
※オレンジ色のジャケットを着た兵を殺してしまった場合
（１）
セシール　「ＩＤカードを持ってなかったの？　そいつじゃなかったみたいね」
（２）
セシール　「そいつだと思ったんだけど…別人だったのかしら？」
（３）
ミラー　「こいつはＩＤカードを持ってなかったみたいだな。別の兵士を当たろう」
【ＩＤカード入手】強制無線
ミラー　「カードを手に入れたようだな。それで施設（ラボ）に入れるはずだ」
【施設（ラボ）に入れ】任意無線
（１）
セシール　「そのＩＤカードで施設（ラボ）に入れるはずよ」
（２）
セシール　「私のおかげで施設（ラボ）に入れるわね。ふふっ♪」
（３）
ミラー　「遺跡へ向かってくれ。ＩＤカードがあれば、研究施設（ラボ）に入れるはずだ」

（4）

ミラー　「時間がない、一刻も早く遺跡へ戻って、人工知能(AI)を破壊するんだ」

【IDカード入手後】任意無線

（1）

セシール　「キョーッ、キョーッ。…え？　もういい？」

（2）

チコ　「ケツァールの鳴き声、よく聞き分けられたね。こんな感じだったかな？　キョーッ！」

（3）

パス　「IDカードが見つかってよかった。ケツァルコアトルのお導き、かな」

（4）

ヒューイ　「IDカード、後で見せてもらっていいかな。いや、研究目的だよ、もちろん」

（5）

ヒューイ　「そんなに嫌われてたなんて…」

【ヒューイの手紙について】任意無線

※手紙を見る前

ミラー　「おい、スネーク！　あの手紙に重要な情報が書かれているかもしれない」

注：「対クリサリス戦」無線集は、P459の【対クリサリス戦無線集】を参照してください

第三章

亡国の再生

【採掘場偽装基地へ／ミッション前強制無線デモ】（ミラー）

ミラー　「スネーク、ピースウォーカーの本体（プラットフォーム）と、人工知能（AI）は既に最終実験基地へ運び込まれた」

ミラー　「この2つが結合（アセンブル）されてしまったら、核発射は時間の問題だ。急げ！」

――章タイトル表示。

【章タイトル】第三章　亡国の再生

【コスタリカ基地潜入／アーティストデモ】

――乾いた地面に馬の蹄がIN。

――アンダルシアンの胴部から乗馬するスネークにパンUP。アンダルシアンは老馬だが足取りは確か。

ミラー　「馬（アンダルシアン）の調子はどうだ？」

スネーク　「悪くない。もう20歳は過ぎてる老馬のはずだが」

ミラー　「彼女（ザ・ボス）の馬だからな」

スネーク「ああ、魂が乗り移ったようだ」

——引き画。アンダルシアンに乗ったスネーク。採掘場を見下ろす高台へ到着。

【テロップ】１９７４年11月21日コスタリカ　エレディア東採掘場偽装基地

ヒューイ「本体(プラットフォーム)と大脳(ママルポッド)ＡＩがアセンブルされる場所は、採掘場に偽装した地下基地のはずだ」

——ヒューイの顔窓表示。

——馬上のスネーク、双眼鏡で眼下の基地を見下ろすと、ピースウォーカー本体らしきものが見える。

ヒューイ「恐らく、既に本体(プラットフォーム)とＡＩは到着し、最終実験の準備に入っている」

ヒューイ「本体の破壊は難しい。接近して、大脳(ママルポッド)ＡＩの破壊を試みるんだ」

——崖上のアンダルシアンからパンＤＯＷＮ。馬から降りて、崖下にいるスネークのＵＰ。

ヒューイ「何としても、僕のピースウォーカーに核を撃たせないでくれ」

ヒューイ「お願いだ、スネーク、急いでくれ！」

――崖上のアンダルシアンはどこかへ歩き去る。
――ブラックアウト。
――ゲームへ。
――リアルタイム無線（P284参照）。

【敵兵ラッシュ1／シナリオデモ】　採掘場底部

――採掘場底部（の数段上）に到着するスネーク。
――前方には布がかぶせられたピースウォーカー（ポッドはヒューイのレプタイルポッドのみ設置、外部に露出している。蝶のノーズアートが見える）。
――デモ開始時点からすでにピースウォーカーのリフトが下がり、地下に格納されていく。
――ピースウォーカーが下がりきり、岩肌に偽装された地下ハッチが閉じる。
――スネークはピースウォーカーを追おうとするが、頭上でハザード音！
――見上げると偵察中のキッドナッパーに見つかっている！
――飛び去るキッドナッパー。
――そして、階段状になった採掘場の各段の扉から、兵士達が出てくる。
――銃を構える兵士達とスネーク！
――ホワイトアウト。
――リザルト画面へ。

――NEXTミッションへ（衛兵排除）。

【衛兵排除／ミッション前強制無線デモ】（ミラー）

ミラー「スネーク、まずい。警備中の兵士に見つかった。なんとしても奴らを排除するんだ！」

――リアルタイム無線（P286参照）。
――ゲームへ。

【AIボス・コクーン登場／シナリオデモ】

――敵兵を排除し、地下基地内部へと入ろうとするスネーク。
――不穏な気配に歩みを止める。
――スネークの背後から、巨大なコクーンが出現。
――採掘場上部から段差ものともせず降りてくる。
――多様な武器を展開するコクーン。
――AIボス名表示。

【コクーン　ＡＩ搭載超級戦機】

——Ｍ１６を構えるスネーク。

——ホワイトアウト。

——リザルト画面。

——ＮＥＸＴミッションへ（対コクーン戦）。

【対コクーン戦／ミッション前強制無線デモ】（ミラー）

ミラー「ヒューイがコクーンと呼んでいた巨大無人兵器だ。排除するんだ、スネーク！」

——ゲームへ。

【コスタリカ基地潜入前／シナリオデモ】

——スネークの活躍によって破壊されたコクーン。その破片が前イベントで敵兵が出てきた扉に当たり、ロック解除。

——そこから基地内に入っていくスネーク。

——F.O.

――リザルト画面。
――NEXTミッションへ（地下基地潜入）。

【地下基地潜入／ミッション前強制無線デモ】（ミラー）

ミラー「スネーク、ピースウォーカーは採掘場の真下に格納されてしまった」
ミラー「地下基地へ潜入し、ピースウォーカーのAIポッドを破壊、計画を阻止するんだ」
――ゲームへ。
――リアルタイム無線（P287参照）。

【ピースウォーカー格納庫潜入／アーティストデモ】

――ピースウォーカー格納庫に入るスネーク。
――物陰から見ている。
――整備されたピースウォーカー、カバーに覆われていて全貌はまだ見えない。周囲には整備員や兵士がいる。
――ママルポッドの外装は開いた状態。クレーンで本体に装着されている。
――それを見守る足場（ママルポッド装着時の高さ）のDr．ストレンジラブ。

ストレンジラブ「起動（イニシエイト）だ」

——ママルポッド芯部、起動ランプが点灯。

ストレンジラブ「ん…？」

コールドマン「（ＯＦＦ）状況は？」

ストレンジラブ「レプタイルの承認処理（アクノリッジ）待ちだ。まだ時間がかかる」

コールドマン「朝まではかけるな」

ストレンジラブ「コールドマン、最終確認をしておきたい」

ストレンジラブ「みんな休憩（ブレイク）してくれ」

——物陰のスネーク、コールドマンとストレンジラブの二人が出るのを見送っている。

ストレンジラブ「ママルへの偽装（ダミー）データに懸念が…」

——扉から出て行く二人。格納庫は静かになる。

——ピースウォーカーを見据えるスネーク、パンＵＰ、外装が閉じた状態で、光っているポッドが見える。

——二人出ていくと数名の見張りを残して無人になっている。

ミラー　「スネーク、今だ」

——走り出すスネーク。ポッドUP。

——スネーク、ハッチから飛び降りてポッドの中へ…、

スネーク　「(驚き)」

ザ・ボスAI　「壊しに来たの？」

スネーク　「…気のせいだ」

ザ・ボスAI　「どうした、体温が下がっている」

ザ・ボスAI　「…ジャックね」

——息を呑むスネーク。

ザ・ボスAI　「少し心拍数が上がった」

スネーク　「ここは冷える、寒いんだ」

ザ・ボスAI　「…そう」

スネーク　「ボス」

ザ・ボスAI　「何？　ジャック」

スネーク　「ボスなのか？」

ザ・ボスAI　「どうしたの、ジャック？」

スネーク　「あんたは…」

スネーク　「後悔してるのか？」

ザ・ボスAI　「何に」

スネーク　「自分の、最期の任務(ミッション)に」

ザ・ボスAI　「最期の任務(ミッション)？」

スネーク　「グロズニィグラードでの任務(ミッション)だ」

ザ・ボスAI　「そんな任務経験は…、ない」

――ストレンジラブが最後のシーンのデータは入力していないため。

スネーク　「1964年9月、あんたは、アメリカを裏切り…、そして俺に殺された」

――MGS3、スネークイーター作戦。

ザ・ボスAI　「いいえ。そんなデブリーフィングは記録にない」

スネーク　「…もう一度、聞く！　あんたは自分の意志(ウィル)で、ソ連に亡命したのか？」

ザ・ボスＡＩ　「該当するような任務（ミッション）記録はない」

ザ・ボスＡＩ　「ジャック？」

――静かに銃（グレネード系）を構えるスネーク。

スネーク　「あんたはボスじゃない。ボスは死んだ！」

――スネーク、引き金を引こうとするが…。

ザ・ボスＡＩ　「ジャック、止めろ」

――ガチっと音がしてハッチの外装が上がっていく。

コールドマン　「銃を棄てろ、ＢＩＧＢＯＳＳ（ビッグボス）」

――数名の兵士が銃を構えてスネークを囲んでいる。

――その向こう側にＣＩＡ支部長とストレンジラブが立っている。

ストレンジラブ　「ママルに研究施設（ラボ）と同じ反応があった。お前が近くにいる兆候（サイン）だ」

――探す手間を省くためにピースウォーカーに隙を与えた。

——スネークの後ろまで来るストレンジラブとコールドマン。

コールドマン　「また会えて光栄だ、ＢＩＧＢＯＳＳ（ビッグボス）」

スネーク　「そのコヨーテには見覚えがある」

コールドマン　「狼（ロボ）だよ」

スネーク　「狼（ロボ）？　屍臭がするぞ？」

——コールドマン、銃座でスネークのこめかみを横殴りにする。

コールドマン　「私は君をよく知っている。10年前のツェリノヤルスク」

スネーク　「あの時の…、関係者？」

コールドマン　「あの作戦は私が立案（プラン）した。裏切り者の抹殺計画（スネークイーター）」

——計画に関与はしているが真相までは知らされてない。

スネーク　「それじゃ、本部（ラングレー）にいるはずの、制服（スーツマン）が、どうしてこんな所に？」

コールドマン　「…真実を知る者の口を封じる、もしくは僻地（へきち）へ放り出す。ＣＩＡの十八番（おはこ）だよ」

スネーク　「なるほど、再び返り咲きたい訳か？」

コールドマン　「それほど単純ではないが、一言でいうならば…、新たな世界秩序の創造だ」

コールドマン　「緊張緩和（デタント）、核不拡散条約（NPT）、戦略兵器制限交渉（SALT）、地下核実験制限条約（TTBT）」

コールドマン　「キューバ危機以降、冷戦構造は音を立てて崩れ始めた」

コールドマン　「〝新たな時代〟の到来だ」

コールドマン　「そこで忍耐と冷徹さを兼ね備えた、機械（マシン）による完璧な核抑止システム、この『ピースウォーカー』が重要になってくる」

スネーク　「無人兵器に人類の罪を押しつけるつもりか？」

コールドマン　「ふふ、なかなかのロマンチストだな」

コールドマン　「覚えているか？　キューバ危機の時、ソ連潜水艦の士官は、米駆逐艦へ向けた核搭載魚雷の発射命令を拒否した」

※ソ連潜水艦の士官：ワシーリー・アルキポフ

コールドマン　「今にして思えば、彼は、全面核戦争から世界を救った英雄だ」

コールドマン　「つまり…、人間に核は撃てん」

スネーク　「ＡＩならば、躊躇なく核を撃つ？」

コールドマン　「そう、だからこそ、真の抑止力となるのだ」

スネーク　「躊躇(ためら)いを持った人間が関与するからこそ、『抑止論』という駆け引きが成り立つんじゃないのか」

コールドマン　「いや、機械(マシン)は間違いを犯さない。過ちを犯すのはいつも人間だ。だからこそ、機械(マシン)による全自動の抑止力、ピースウォーカーが必要になる」

コールドマン　「この導入が決まれば、本部(ラングレー)は新冷戦の臍の緒となる、ラテンアメリカに再び注目する」

――中米の地図を表示。ピースウォーカー配備国にマーク。

コールドマン　「ホンジュラス、ニカラグア、コスタリカ、パナマ…、中南米カリブ海沿岸にピースウォーカーを配備する」

コールドマン　「北米、南米、西インド諸島全てを射程内に収め、まずはこの大陸を粛正するのだ」

スネーク　「まだまだあんたの時代は続く？」

コールドマン　「…ふふ、わかってないな」

コールドマン　「思想に失墜したザ・ボスと共に、英雄の時代は終わった」

コールドマン　「これからは〝感情なきシステム〟が英雄になる」

コールドマン「それが一番わかっているのは貴様だろう？　いや、貴様の相棒か」

コールドマン「金で買える抑止力、国家に帰属しない軍隊。これも新しいシステムだ。実に目の付け所がいい」

スネーク「依頼なら断る」

コールドマン「いや、そのつもりはない」

コールドマン「私の新しいシステムを売り込むためには、君達のような旧システムが目障りなんだ」

――合図をするコールドマン。兵士達は銃を構えるが…。

ストレンジラブ「待って、コールドマン、この男から聞きたいことがある。ママルの完成度に関わる重要な事項だ。私に身柄を預けてくれ」

コールドマン「ふふ。…あまり入れ込むなよ。ＳＡＬＴ Ⅱの会談は予定通りとの連絡が入った。核発射は時間通りに行う」

ストレンジラブ「スネーク。彼女の再臨に協力して貰うぞ」

スネーク「黙れ。ボスは死んだんだ！」

ストレンジラブ「連れて来い」

——抑えようとする兵士の動きを感じるスネークのＵＰ。
——周囲の兵士がスネークに襲いかかる。
——コールドマンは左へ避ける（ＰＷを見て通路右）。
——スネークの目線は真っ直ぐストレンジラブに向けられる。

【アーティストデモゲーム】

——ハイスピード風にややゆっくり。
——ぼかした背景を右から左に素早く流す（ハイスピード表現）。
——画面横位置で、スネークは右向き。
——兵士をかわしてスネークは右へ進もうとしている。

※途中で失敗の場合

——スネークの顔を囲むように銃口がＩＮ！

スネーク「（ちっ）」

——ブラックアウト。
——リザルト画面へ。

※成功の場合

——スネークの右の兵士1が銃を構える。
——〔右ボタン〕しゃがんで懐に入り込むスネーク。
——銃口を左手でかわしながら、
——〔Rボタン〕兵士1の顔に右手払いで目つぶし。
——〔Rボタン〕左手で押し倒され倒れる兵士1。
——〔右ボタン〕一歩前進するスネーク。
——前（右）から兵士2が現れる。
——同時に背後（左）から近づく兵士3。
——〔Rボタン〕右の兵士2の銃口を左手で左に流し、
——〔右ボタン〕兵士2の背後に回り込んで、
——〔△ボタン〕左手で首を決める。
——兵士2の銃が乱射、兵士3を撃ち抜く。
——さらに右から兵士4が近づく。
——〔右ボタン〕兵士2を右に向かせる。
——兵士4も兵士2の銃弾に倒れる。
——〔△ボタン〕兵士2押し倒されて気絶。
——その間左から兵士5。

――〔Rボタン〕回し蹴りで兵士5を倒す。
――〔右ボタン〕右へ向くスネーク。
――右から兵士6、左から7。
――〔Rボタン〕兵士6を殴る!
――〔左ボタン〕兵士7に向く。
――〔Rボタン〕兵士7を蹴る!
――〔右ボタン〕兵士6に向く。
――〔Rボタン×2〕兵士6を二発殴る!
――〔左ボタン+△ボタン〕兵士7を掴んで引き寄せ、
――〔右ボタン+Rボタン〕右に投げる。
――右から入ってくるストレンジラブ。
――〔△ボタン〕ストレンジラブの胸を掴み、IDカードを引きちぎるスネーク。

ストレンジラブ「あぁっ!」

――その直後、スネークの顔を囲むように銃口がIN!

スネーク「(ちっ)」

――ブラックアウト。

——リザルト画面へ。
——NEXTミッションへ（独房からの脱出）。

【独房からの脱出／ミッション前強制無線デモ】（ミラー）

ミラー「スネーク…。これがあんたに聞こえているといいが…」
ミラー「あんたはストレンジラブ博士に捕まっちまったようだ。武器装備は没収されたかもしれない…」
ミラー「だが、まだ何かあるはずだ。思い出してくれ、スネーク！」

【拷問イベント一回目／アーティストデモ】

——状況：拷問部屋イベントはアーティストデモゲームのみ。ストレンジラブの電流拷問にアクションボタン連打で耐える。
——拷問イベント間に、監獄を脱出するとゲームクリア。
——監獄の扉の閉まる音。
——そして画面黒。

――回想、花びらの舞う中、ザ・ボス（ＭＧＳ３）と向かい合うスネーク。

ザ・ボス「亡命ではない」

ザ・ボス「自分に忠を尽くした」

ザ・ボス「お前はどうだ？」

ザ・ボス「国に忠を尽くすか？　それとも私に忠を尽くすか？　国か、恩師か？　任務か、思想か？　組織への誓いか？　人への情か？」

ザ・ボス「ただひとつ、絶対に信じられるのは…」

ザ・ボス「『任務（ミッション）』だけよ、ジャック」

――ザバっとＳＥ。スネークに水をかけるストレンジラブ。

――下を向いたスネークの主観。

――そこは拷問部屋。

――スネークの足元が見える。

――画面、左右に揺れている。そのたびにちゃらちゃらと鎖の音がする。

――足元には水たまりが出来ている。

――左スティックで少しだけ画角を動かすことが出来る。

スネーク　「ぶ…はぁっ！　はぁ…はぁ…はぁ…（水を掛けられて目覚め、呼吸を整える）」
ストレンジラブ　「（OFF）目が覚めたか？」

――視界にストレンジラブの足が入る。

ストレンジラブ　「コールドマンの私欲など興味がない。私が知りたいのは、ひとつ」

――バチ！　バチ！という音と同時に、ストレンジラブの手元が光る。電撃棒の準備をしている物音。

ストレンジラブ　「〝真実〟だ」
ストレンジラブ　「私は科学者だ。AIの開発者だが、私はAIではない」
ストレンジラブ　「私は科学者だ。だから、こんな真似はしたくない」
ストレンジラブ　「いいか、私は科学者だ。だからこそ、納得のいく答えが欲しい」

――バチッ、バチッ！　と高圧電流の音。

ストレンジラブ　「さあ、何を知っている？」

――見上げるスネーク。ストレンジラブの左右の手に電極が見える。

ストレンジラブ「お前のボスは合衆国（アメリカ）から小型核弾頭（デイビークロケット）を盗んで亡命した。それを使ってソ連領に核を撃った。それがＣＩＡが伝えた、公式記録（デブリーフィング）だ」

——電極を胸の高さに上げるストレンジラブ。

——バチッと電極が光る。

スネーク「（電極を見るスネークの吐息）」

ストレンジラブ「…亡命ではなかったのか？」

スネーク「（スネークの吐息）」

——更に見上げるスネーク。ストレンジラブの顔が目に入る。

——サングラス。表情は見えない。

——もう一度、バチッと光る電極。

ストレンジラブ「答えろ！　彼女は祖国（アメリカ）のために死んだというのか⁉」

——両手を上に、鎖で固定されているスネーク。

スネーク「…あいつは、アメリカを売った。俺はその始末を命令された」

ストレンジラブ「違う！　私が知りたいのは真実だ！」

ストレンジラブ　「覚悟はいいか」

　　　　　　　　——左右の電極を合わせるストレンジラブ。

ストレンジラブ　「電磁くすぐり棒(ラフィング・ロッド)だ」

ストレンジラブ　「周囲に発生した電界が、全身の上行性神経路を直接刺激する」

スネーク　　　　「(笑い)くすぐりの刑とは、随分古典的(クラシック)だな」

ストレンジラブ　「(笑い)痛みに耐える訓練はしてるだろう。だが…、これは?」

【アーティストデモゲーム】

　　　　　　　　——台詞の間に画面左にＬＩＦＥゲージ、右に△ボタン連打のアイコン表示。

　　　　　　　　——ＬＩＦＥが減少、△ボタン連打でＬＩＦＥは少しずつ回復する。

　　　　　　　　——ＬＩＦＥがゼロになるとゲームオーバー。

　　　　　　　　——拷問ゲーム一回目(Ｌｖ１)。

　　　　　　　　——電極をスネークにあてるストレンジラブ。

　　　　　　　　——苦悶するスネーク、画面にスパーク!

スネーク　　　　「ぐあああああああああああっーーーーーーーーー!!!!!」

――一定時間耐えると、横位置画面に戻る。

スネーク　「…俺が憎いか？　…いいだろう、…何でもすればいい。俺が彼女(ザ・ボス)を殺したんだ…」

ストレンジラブ「それは判っている。…その動機が知りたい」

ストレンジラブ「国に忠を尽くした英雄(ザ・ボス)が、どうして祖国を裏切った？」

ストレンジラブ「何があった⁉　お前は、何を見たのだ？」

スネーク　「…国だけじゃない。あの女は俺をも裏切った」

ストレンジラブ「ならば、そのバンダナは何だ⁉」

ストレンジラブ「裏切り者の形見だろう…？」

スネーク　「…なんのことだ…？」

ストレンジラブ「じゃあ、その傷は何だ⁉」

ストレンジラブ「彼女と同じ傷を、まさか偶然とは言うなよ」

――胸の傷に触ろうとするストレンジラブ。

スネーク　「触るな！」

――スネーク、胸を引っ込める。

ストレンジラブ「ふん、想い出のアクセサリーか…」
ストレンジラブ「女々しい男だ」

——スネーク、意味深なアップ。

スネーク「…」

——実はこの縫い痕に脱出用の極細糸鋸が仕込まれている。

ストレンジラブ「…答えろ!」

——電極を合わせるストレンジラブ、バチッ!
——拷問ゲーム一回目（Ｌｖ２）。
——電極をスネークにあてるストレンジラブ。

スネーク「ごがあああああああああっーーーーーーーーーー!!!!」

——一定時間耐えると、横位置画面に戻る。

ストレンジラブ「吐け!　彼女はアメリカの犠牲になって死んだんだろう?」

ストレンジラブ「自らの魂を、尊厳を弄んだ祖国（アメリカ）のために、その任務（ミッション）のために彼女は…、お前などの手で…！」

——手の棒を警棒のように振り下ろしスネークの胸を殴る。

——スネークは動じない。

ストレンジラブ「私はお前が憎い。だが、お前には私の気持ちがわかるはずだ。何のために彼女が死んだのか、私には知る権利があるはずだ」

ストレンジラブ「何故言わない⁉ お前はもうアメリカの犬ではない！ 国に忠を尽くす道義など、もう無いはずだ」

ストレンジラブ「答えろ！」

——手の棒を警棒のように振り下ろしスネークの胸を殴る。

——呟き込むスネーク。

ストレンジラブ「お前も愛する人を蘇らせたくはないのか？」

ストレンジラブ「『そうだ』と言え。彼女は、アメリカのために死んだのだと」

ストレンジラブ「自分を裏切り続けた国を、最期まで裏切らず、自分の命を犠牲にしたと…」

スネーク　「…違う」
スネーク　「…あの女は」
スネーク　「…裏切り者だ」
ストレンジラブ「どうして⁉　何のために⁉」
スネーク　「…祖国を呪いながら、死んでいった」
ストレンジラブ「何故だ⁉　誰のために⁉　何を守っている⁉」
スネーク　「あんなものの完成を手伝うのは御免だ！」
スネーク　「受け入れろ！　ボスは死んだんだ！　あんな機械(マシン)に、ボスの魂が宿るはずがない！」
ストレンジラブ「…電圧を上げる。2度と笑えなくなるぞ」

——電極を合わせるストレンジラブ。バチッバチッ！
——拷問ゲーム一回目（Ｌｖ３）。
——電極をスネークにあてるストレンジラブ。

スネーク　「むぅぅう、ごああああああああああっ———————————！！！！」

——気絶するスネーク（主観）。

——F.O.

——呼び出しブザー音。

——黒画面にストレンジラブの声。

ストレンジラブ　「（笑）笑い過ぎたか…」

——ガシャッと扉が開く音。

基地警備兵　「入ってろ」

——独房に叩き込まれるスネーク。閉まる扉（以上、音のみ）。

【監獄脱出ゲーム】

——F.I.

——気がつくと独房に入れられていたスネーク。

——扉の前にはショットガンを構えた基地警備兵。

——しばらくするとスネークの方を向いて、

基地警備兵　「逃げようなんて思うなよ」

――そうつぶやくと、スネークの独房の前から立ち去る基地警備兵。
――一定時間内に、（ストレンジラブのＩＤか胸の糸鋸を使って）独房の扉を開け、脱出するとミッションクリア。
――独房内にとどまっていると、拷問イベントが継続する。
――スネークの前に基地警備兵が現れる。
――F.O.
――黒画面のまま、

基地警備兵　「来い！」

――拷問イベント二回目へ。

【拷問イベント二回目／アーティストデモ】

――画面黒のまま。
――独房から拷問部屋へ連れて行かれるスネーク。
――鎖で両手をつり上げられる音。
――両手を上に、鎖で固定されているスネークからF.I.
――正面にストレンジラブが立っている。

——画面横位置、二人はやや画面からはみ出している。

ストレンジラブ「話す気になったか」

スネーク「いや…、話すことはない」

ストレンジラブ「そうはいかない。いくぞ…！」

——拷問イベント二回目（Ｌｖ１）。

——電極をスネークにあてるストレンジラブ。

——苦悶するスネーク、画面にスパーク！

スネーク「ぐあああああああああああっーーーーーーーーー！！！！！」

——一定時間経つとスネーク正面の画面。

スネーク「…ハー…ハー…ハー…（咳き込む）」

スネーク「…俺は、あんたに殺されても、文句はない。…俺は、彼女（ザ・ボス）を殺した」

ストレンジラブ「そうじゃない…！　私が知りたいのはそうじゃない！」

——電極を合わせるストレンジラブ、バチッ！

——拷問イベント二回目（Ｌｖ２）。

――電極をスネークにあてるストレンジラブ。

スネーク「ごがああああああああああっーーーーーーー！！！！！」

――一定時間経つとスネーク斜め前からの画面。

スネーク「…ハー…ハー…ハー…」

スネーク「…さあ、…殺せ！　殺してくれ！」

ストレンジラブ「やめろ…」

スネーク「…殺せ」

ストレンジラブ「やめろ…！」

スネーク「殺せ…！　殺せ！」

ストレンジラブ「黙れ！　黙れぇ！」

――拷問イベント二回目（Ｌｖ３）。

――電極を合わせるストレンジラブ、バチッ！

――電極をスネークにあてるストレンジラブ。

――苦悶するスネーク、画面にスパーク！

スネーク　　「むぅうう、ごあああああああああああっーーーーーーーー！！！！」

——気絶するスネーク（スネークの主観）。

ストレンジラブ「…お前は…」

——F.O.

——呼び出しブザー音。

——黒画面にストレンジラブの声。

ストレンジラブ「連れて行け…」

——ガシャッと扉が開く音。

基地警備兵　「入ってろ」

——独房に叩き込まれるスネーク。閉まる扉（以上、音のみ）。

※ミッションクリアしないと、拷問イベント三回目へ。

【拷問イベント三回目／アーティストデモ】

——画面黒のまま。

——独房から拷問部屋へ連れて行かれるスネーク。

——鎖で両手をつり上げられる音。

——両手を上に、鎖で固定されているスネークからF.O.

——正面にストレンジラブが立っている。

——画面横位置、二人はやや画面からはみ出している。

ストレンジラブ「さあ、真実を話してもらおう」

スネーク「話すことは、…もう話した」

ストレンジラブ「…そうか」

——拷問イベント三回目（Lｖ1）。

——電極をスネークにあてるストレンジラブ。

——苦悶するスネーク、画面にスパーク！

スネーク「ぐあああああああああっーーーーーーーーーー!!!!!」

——一定時間経つとスネーク正面の画面。

スネーク　「…ハー…ハー…ハー…」
スネーク　「頼む…、もっと、電圧を上げてくれ…。殺してくれ…殺してくれ…」
ストレンジラブ　「違う！　憎しみは、もう無い！」
スネーク　「俺を、殺してくれ…！　俺は彼女(ザ・ボス)を殺した…！」
ストレンジラブ　「もうやめて！　…やめて！」
スネーク　「俺は…愛する人を…この手で…！」
ストレンジラブ　「やめて！　そうじゃない！　違うでしょう！」

――電極を合わせるストレンジラブ、バチッ！
――拷問イベント三回目（Ｌｖ２）。
――電極をスネークにあてるストレンジラブ。

スネーク　「ごがああああああああああっーーーーーーーー！！！！」

――一定時間経つとスネーク斜め前からの画面。

スネーク　「…ハー…ハー…ハー…」
スネーク　「わかった…。話す…真実を…」

ストレンジラブ「？」
スネーク「彼女は…、…国を、裏切った」
ストレンジラブ「違う！　彼女は、裏切り者じゃない！」
――電極をスネークにあてるストレンジラブ。
――電極を合わせるストレンジラブ、バチッ！
――拷問イベント三回目（Lｖ３）。
スネーク「むぅぅう、ごあああああああああああっーーーーーーーーーー！！！！！」
――気絶するスネーク（スネークの主観）。
ストレンジラブ「…わからない…」
――F.O.
――呼び出しブザー音。
――黒画面にストレンジラブの声。
ストレンジラブ「連れて行け…！」

——ガシャッと扉が開く音。

基地警備兵　「入ってろ」

——独房に叩き込まれるスネーク。閉まる扉（以上、音のみ）。

※ミッションクリアしないと、拷問イベント。以降は2回目、3回目をループさせる。

【拷問イベント失敗／アーティストデモ】

——ＬＩＦＥがゼロになるとゲームオーバー。

——上を向いて叫ぶスネーク！

——画面一杯の放電！

——口の中が放電で光る！

【独房からの脱出／ミッション後強制無線デモ】（ミラー）

ミラー　「スネーク…」

スネーク　「…ああ…」

ミラー　「また声が聴けて良かった」

※ストレンジラブのＩＤを使って独房から脱出した場合、以下の3行は発生しない。

スネーク　「カズ、次は、もっとよく切れるやつを、用意してくれ」
ミラー　「わかった。糸鋸の刃を、ダイヤ(bort)にしておくよ」
ミラー　「ええとそれで…、その、〝次〟は、いつだ？」

——笑い出すスネークとミラー。
——咳き込むスネーク。

ミラー　「悪い…、おい…、大丈夫か」
スネーク　「ああ…。咳が、焦げ臭い」
ミラー　「しばらく禁煙だな」
スネーク　「いや、心配はいらない。胸の痛みは消えた」
ミラー　「ザ・ボスの傷を模した？」
スネーク　「そうだ。傷痕も消えた」
ミラー　「感服するよ」

スネーク「そっちの状況は？　みんな無事か？」

ミラー「ああ…。実は気になることがある。パスと連絡がつかない」

スネーク「パス…？　パスなら〝教授〟に保護されているはずだ」

ミラー「ああ、そうなんだが…。聞いてくれ」

ミラー「心配になって〝教授〟が用意したその、〝学校〟に人を送ってみた…」

スネーク「それで…〝学校〟は、存在しなかった？」

ミラー「いや〝学校〟はあったが、パスは不在だった」

ミラー「〝学校〟関係者に聞いたところだと、〝教授〟もパスも、しばらく見ていないらしい…」

スネーク「…コールドマンは俺達のことを知っていた。俺達はＣＩＡにマークされている。俺達に調査を依頼したＫＧＢや、パスのことも…」

ミラー「まさか…、コールドマンに？」

スネーク「いや、ガルベスは単なる〝教授〟じゃない」

ミラー「そうだな、ＫＧＢも、コールドマンの動きを常に掴んでいるはずだ」

ミラー「そうなると…、ＣＩＡの動きを察知して、何処かに身を隠したか…」

スネーク　「そう願いたい。カズ、KGBからも情報を入手してくれ」
ミラー　「わかった。引き続き、こっちでも探ってみる」
スネーク　「カズ、先を急ごう」
ミラー　「スネーク。少なくとも地上からは、ピースウォーカーが始動した様子は確認できない」
ミラー　「まださっきの格納庫にいる。今度こそ最後のチャンスだ。AIを破壊しよう」
スネーク　「了解」

――NEXTミッションへ（ピースウォーカー格納庫へ）。

【ピースウォーカー格納庫へ／ミッション前強制無線デモ】（ミラー）

ミラー　「スネーク。ピースウォーカーは、地下基地の格納庫で起動準備に入っている」
ミラー　「なんとしても起動前に接近し、AIを破壊するんだ！」

――ゲームへ。

――リアルタイム無線（P292参照）。

【ピースウォーカー起動／アーティストデモ】

――状況：ピースウォーカーは整備が完了、足場はまだついているがカバーは外れている。
――格納庫内が暗いため全貌ははっきりと見えず、機体上部は輪郭だけがぼんやりとわかる。
――スネークが入るとピースウォーカーが起動を始める（動力起動）。
――ママルポッドが倒れ、本体にはめ込まれていく。
――格納庫へ駆け入るスネーク。
――中二階に、コールドマン、コールドマンに羽交い締めにされたパス、ストレンジラブが立っている。

コールドマン　「手遅れだ、BIGBOSS（ビッグボス）」

――スネークの視界に入るパス。

パス　「スネーク…」
スネーク　「パス…！」
コールドマン　「探したよ。お前（スネーク）を呼び寄せた張本人だ。あの搬入施設（プエルト・デル・アルバ）で始末しておくべきだったな」
パス　「スネーク、だめ…」
コールドマン　「ママルポッドは完成し、ピースウォーカーの起動は完了した」

スネーク「完成だと…？」

ストレンジラブ「確かにお前は、最後までザ・ボスに忠を尽くした」

ストレンジラブ「だがそのお前(スネーク)の沈黙こそが答えだった」

ストレンジラブ「10年前、お前の任務(ミッション)は彼女の暗殺だった。そして、お前に暗殺されることこそが、彼女の任務(ミッション)だった」

ストレンジラブ「彼女は最期まで、アメリカのために任務を貫いた」

ストレンジラブ「スネーク、お前のお陰で、最後の空白のピースが補完出来た」

ストレンジラブ「彼女はママルポッドとして蘇った。ありがとう」

スネーク「ザ・ボスが蘇った…？　馬鹿な」

コールドマン「特別に教えてやろう、…BIGBOSS(ビッグボス)。ピースウォーカーの初期目標(ターゲット)を決めた」

——2D、地図表示。カリブ海へミサイルの航路。

コールドマン「目標はカリブ海洋上の領海域外(オフショア)だ」

コールドマン「放射性降下物(フォールアウト)は貿易風で拡散し、近域に降り注ぐ」

コールドマン「農水産物は全滅するだろう。お陰でピースウォーカー量産の人足が増える」

――何もない海上へズームアップしていくとマザーベースの記号。

コールドマン「だが… おや？ こんなところに誰が、いつの間に小癪（こしゃく）な要塞を築いていた？」

コールドマン「目標（ターゲット）のど真ん中だ、まあ丁度いい。弾頭の命中精度（CEP）をお前の基地（マザーベース）で試させてもらおう」

――マザーベースのロゴめがけてミサイルが落ちる。爆発の表現。消えるロゴ。

スネーク「貴様…」

コールドマン「カリブ海の海賊風情が。吹き飛んでも誰の迷惑にもならん」

――銃を構えるスネーク。

――パスが照準にかぶさり定まらない。

コールドマン「だが…」

コールドマン「まずはカリブ海沿岸を単独走破出来ることを、米政府（ホワイトハウス）に証明する」

コールドマン「ピースウォーカーの万能性を世界に知らしめる」

コールドマン「共産圏やゲリラ支配地域、あらゆる地形を踏破し」

コールドマン「そして確実に狙った場所へ核を撃ち込むことが出来る…」

コールドマン「誰も手を出すことの出来ない、『完全なる核抑止力』の誕生だ」
スネーク「冷戦の時代は終わろうとしている。もはや、米ソ間だけで抑止論は語れない」
コールドマン「いい事を言う。その通りだ。我々が尻込みしている間に中国やフランス、インドにまで出し抜かれてしまった。水面下で、核開発の自由競争が始まっている」
コールドマン「核の脅威は拡散していく一方だ。だからこそ、ここでそれらを、食い止めなければならない。そのための抑止力、それがこの『ピースウォーカー計画』なのだ」

——ゴウン、と音を立ててピースウォーカーのリフトが上がり出す。

コールドマン「ピースウォーカーの誕生で、世界は静かになるだろう」
コールドマン「わかるか、スネーク。平和には制御された核が必要なのだ」
パス「嘘……！」
コールドマン「ピースウォーカーが秩序を、新たなる冷戦を取り戻す」
コールドマン「その抑止力を世界に啓蒙するために、核を撃たねばならんのだ！」

——ピースウォーカーはすでにリフトに隠れて上昇。
——ストレンジラブ、コールドマン、パスが壁面のエレベーターに乗り込む。

パス　「スネーク！」

——上昇するエレベーター。

ミラー　「止めろスネーク！　止めてくれ！」

——ピースウォーカーを追って駆け出すスネーク。

——ブラックアウト。

【ピースウォーカー戦前／シナリオデモ】

——黒画面にステップを上がる音。

——先に底部に到着したスネークがリフトの穴の前で身構える。

——採掘場底部はすでに「夜」。

——リフトの上昇音が低く響いている。

——奈落から中央に上がってくるピースウォーカー！　ライトアップ！

——ピースウォーカーが初めて３Ｄモデルで全貌を現す！

——ボス名表示。

【ピースウォーカー　AI搭載自動報復歩行戦機】

——ピースウォーカー、起動。

——スネークに正面を向けて向かい合っていると思いきや…、ピースウォーカーはスネークを関知せず、採掘場の階段状の側面に向かって2本足で歩き出す。

——銃（M16）を構え、発砲するスネーク。

ヒューイ（通信）「あっ、スネーク」

——ピースウォーカーの動きが止まる。

スネーク「まずかったか?」

——ピースウォーカー警報!

ザ・ボスAI（レプタイルポッド）「自己防衛システム、作動」

——ピースウォーカーがゆっくりとスネークの方を振り返る。

ヒューイ「スネーク、僕のポッドには自己防衛モジュールが組み込まれている」

ヒューイ「攻撃を感知すると実行中の命令を中断して、対小規模対象抑止モードが働く」

ヒューイ　「いまピースウォーカーの最優先目標(ターゲット)は君だ」
ヒューイ　「ピースウォーカーが来るぞ！」
——身構えるスネーク。
——ピースウォーカーが火炎放射しながら咆哮する！
——NEXTミッションへ（対ピースウォーカー戦）。

【対ピースウォーカー戦／ミッション前強制無線デモ】（ミラー）

ミラー　「ピースウォーカーが動き出した。自己防衛システムの目標(ターゲット)はスネーク、あんただ」
ミラー　「なんとしてもそいつを止めるんだ！」
——ゲームへ。

【ピースウォーカー戦後／シナリオデモ】

——爆発して倒れるピースウォーカー（煙が上がっている）。地響き！
——ピースウォーカーから悲鳴のような咆哮が聞こえる！
——それを間近で見上げるスネーク。

ザ・ボスAI（レプタイルポッド）「ロ、ロックか、解除…」

ザ・ボスAI（レプタイルポッド）「自己、自己防衛モードに移行…」

——スネークに攻撃しようと立ち上がろうとするピースウォーカー（2足歩行）。上手く立てない（気持ち悪い動き）。

——ピースウォーカー暴走！

——再びスネークに向かおうとする。

——とどめを刺そうと狙いをつけるスネーク。

——とその時、ハインド鼻先の機銃発射。

——ピースウォーカーのレプタイルポッドに被弾、動きが止まる。

——対峙するスネークとピースウォーカー。

——その上空に先ほどのハインド。

——ハインドを認識したかのように、スネークを無視して武装解除するピースウォーカー。

——そして、折り曲げていた前足を降ろし、4足形態となる！

——後退るスネーク。

——再度、ボス名表示。

【ピースウォーカー　AI搭載自動報復歩行戦機】

——ハインドからコールドマンの声。

コールドマン　「(拡声器) こっちだ！」

——追いかけるスネーク。

——カメラ、ハインドからパンダウンしてハインドの後を追うピースウォーカー(スネーク越しに)。

——ハインドが飛行して行く。

ミラー　「スネーク、ピースウォーカーが行く！」

——4本足で這うように採掘場の段差を登り、上段で身震い。一発咆哮して走って立ち去る。

——このままでは逃がしてしまう！

——背後で馬の嘶きが！

——ブラックアウト。

【ピースウォーカー追跡1／アーティストデモ】

——その時、採掘場底部へ降りてくるアンダルシアン。颯爽とジャンプ！

——すかさずアンダルシアンにまたがるスネーク。

スネーク　「ハッ！(馬をけしかける)」

——採掘場側面を上っていくアンダルシアン。崖下にピースウォーカー。

ミラー「いたぞ。まだ近い！」

——2、300m前方を進むピースウォーカー、その周囲をヘリが飛んでいる。

——ヘリのアップ。

——ストレンジラブ、コールドマンが乗っているのが見える。

——そこへめがけて走るアンダルシアン。

ヒューイ「ピースウォーカーの推定最高速度は平地で25マイルだ」

スネーク「こいつならまだ30は出る」

——ブルルとやる気を見せるアンダルシアン。

ミラー「ハインドにはパスも乗っている。頼む」

スネーク「わかってる」

ミラー「大事な依頼人（クライアント）だ」

ミラー「スネーク、ピースウォーカーを逃がすな！」

——ヘリの背後からの画面。遠くの水平線から日の出の一光が見える。

コールドマン　「夜が明ける…」

コールドマン　「行け！」

——コールドマンの指示に走り出すピースウォーカー。

——更にそれを追うアンダルシアン。

スネーク　「ハッ！」

——ブラックアウト。

【アーティストデモゲーム】△ボタン連打＋方向キータイミング入力のゲーム。

——カメラ横位置（進行方向左）で△ボタン連打の「湿地ステージ」と、カメラ縦位置（進行方向上）で△ボタン連打＆方向キー入力の「森林ステージ」の2種。

——ゲームオーバーは無く、ゲーム成績はリザルトに影響。

※湿地ステージ

——△ボタン連打でアンダルシアンが加速。

——叩かないと一定速度まで減速。

——画面上では速度が上がるほどアンダルシアンの絵が進行方向寄り（左）になっていく。
——速度を調節してミサイルを躱すゲーム。
——ミスするとアンダルシアンの足元に着弾。減速してしまう。
——〔△ボタン連打〕拡散誘導ミサイルが画面後方（右側）に着弾。
——〔△ボタン連打〕拡散誘導ミサイルが画面後方（右側）に着弾。
——〔△ボタン連打〕拡散誘導ミサイルが画面後方（右側）に着弾。

ミラー「スネーク！　森に入る、気をつけろ」

——スネークとアンダルシアンのＵＰ。

ミラー「ピースウォーカーを追え！」

※森林ステージ

——森の木を回避するドライブゲーム風アクション。
——木が近づくと、方向キーの左右表示が出る。
——表示中にタイミングに合わせて入力すると倒れる木を回避。
——ミスすると顔窓インサートでダメージ表示＋擬音。
——〔△ボタン連打〕連打で加速。
——〔△ボタン連打＋右ボタン〕左から倒れてくる木を右に回避。

――〔△ボタン連打＋左ボタン〕右から倒れてくる木を左に回避。
――〔△ボタン連打＋左ボタン〕右から倒れてくる木を左に回避。
――〔△ボタン連打＋右ボタン〕左から倒れてくる木を右に回避。
――〔△ボタン連打＋右ボタン〕左から倒れてくる木を右に回避。

――前進するピースウォーカーに肉薄するスネークとアンダルシアン。
――ピースウォーカーのＵＰ。

ザ・ボスＡＩ　「帰れ！」

※湿地ステージ

――〔△ボタン連打〕拡散誘導ミサイルが画面後方（右側）に着弾。
――〔△ボタン連打〕拡散誘導ミサイルが画面前方（左側）に着弾。
――〔△ボタン連打〕拡散誘導ミサイルが画面後方（右側）に着弾。
――〔△ボタン連打〕拡散誘導ミサイルが画面後方（右側）に着弾。
――アーティストデモゲーム終了。
――咆哮するピースウォーカー。加速し、画面左へアウト。
――ブラックアウト。
――日の出に向かって飛行するヘリからＦＩ.

パイロット　「（ＯＦＦ）間もなく、国境です」
コールドマン　「ここまでだ、ＢＩＧＢＯＳＳ（ビッグボス）」
——スネーク、アンダルシアンのＵＰ。
ミラー　「まずい…、見ろ！」
ミラー　「スネーク、その先は国境（ニカラグア）だ！」
——開けた目前に崖の壁！
——ピースウォーカーは器用に登っていく！
——急斜面を無理に上がろうとするアンダルシアン！
——スネーク主観、崖の向こうに消えるピースウォーカー。
スネーク　「頑張れ…！」
——アンダルシアンの足、足を岩にとられるアップ。
——アンダルシアン、中空に放り出される。
——スネーク顔窓インサート。
スネーク　「うお！」

――落下するアンダルシアン、地面に叩き付けられる。
――あとからスネークもゴロゴロっと着地。

スネーク　「くそっ」

――スネークはすぐ立ち上がり、崖へ。

スネーク　「うおおおおっ」

――崖を登り切るスネーク。
――多重スクロールで崖向こうが見えると…太い川（国境のサン・ファン河）。
――ヘリとピースウォーカーは遥か先を行っている。
――落胆するスネーク（顔窓）。

スネーク　「はあ…はあ…はぁ…（呼吸を整える）」

――崖の下、虫の息のアンダルシアン。ほとんど動かない。
――F.O.
――リザルト画面へ。

【対ピースウォーカー戦／ミッション後強制無線デモ】（ミラー／アマンダ）

ミラー　「スネーク…」

スネーク　「カズ、ピースウォーカーが…。パスも一緒だった」

ミラー　「ああ、だが…」

スネーク　「カズ。…どうしてパスが？　コールドマンは何故パスを⁉」

ミラー　「パスは〝教授〟、つまりKGBのところにいたんだ。CIA（コールドマン）はそれを嗅ぎつけた」

ミラー　「パスとガルベス教授の関係を、奴は知ってしまった」

スネーク　「奴は『ピースウォーカー計画』を妨害するKGBの動きを、パスから聞きだすつもりなんだ」

ミラー　「そんな！　パスは何も知らないはずだ」

スネーク　「だが奴は疑うだろう」

ミラー　「…もしかして〝教授（ガルベス）〟はもう殺された…？　コールドマンは、パスを俺達に見せつけることで…」

スネーク　「『手を引け』と言っている…。『依頼人（クライアント）はいなくなる』と…」

ミラー　「迂闊だった。パスとの連絡が途絶える前に、気付いてやるべきだった」

スネーク　「カズ、悔やんでる時じゃない」
ミラー　「スネーク」
スネーク　「パスが危ない」
ミラー　「ああ、もうビジネスは関係ない。先を急ごう。奴らの行き先がわかったんだ」
スネーク　「本当か⁉」
ミラー　「ああ、アマンダが調べてくれた」
アマンダ　「スネーク、あんたがバシリスコを追い込んだのは、サン・ファン河。その対岸は、
　あたし達の祖国(ニカラグア)よ」
アマンダ　「その先の足取りを、ニカラグアの同志(コンパ)に追って貰った」
アマンダ　「核路線(フォコ)の長期人民戦争派(GPP)だから、あまり付き合いがないんだけど…」
スネーク　「奴は何処へ？」
アマンダ　「バシリスコは西へ。国境沿いにニカラグア湖(ラゴ・コシボルカ)まで」
ミラー　「その湖畔の南東に、米軍の補給基地がある」
ミラー　「2年前の地震で被害を受けてから、合衆国(アメリカ)がその一帯を占有してるんだ」
アマンダ　「バシリスコはそこよ。間違いない」

スネーク「わかった。だがどうやって国境を越える？」

アマンダ「国境越えに使ってるルートがあるの。船長を紹介する。小さいボートだけど」

スネーク「悪いな」

アマンダ「二度と祖国（ニカラグア）をよそ者（ウォーカー）の好きにはさせない」

——ニカラグアにはかつてウィリアム・ウォーカーという元米傭兵が無理矢理大統領になったという歴史あり。

ミラー「スネーク、コールドマンはその基地で核を撃つ。目標は俺達のマザーベースだ」

ミラー「ヒューイによれば、発射準備にあと2日かかるらしい」

ミラー「しかし、決行日の指定には、他の理由があるようだ」

スネーク「どんな？」

ミラー「明日から、ウラジオストクで米ソ首脳会談が行われる。その開催に何か関係があるようだ」

スネーク「確か、第二次戦略兵器制限交渉（SALTⅡ）の会談が行われる予定のはず…」

ミラー「コールドマンは、その交渉の席をぶちこわそうと？」

スネーク「あるいは、その交渉の切り札にする？」

ミラー　「パスのこともある…。とにかく、もうあまり時間がない」
スネーク　「ああ、なんとか食い止めてみせる」

——NEXTミッションへ（米軍ミサイル基地潜入）。
——Chapter 3 end——

「採掘場偽装基地へ」無線集

■採掘場居住区

【目的確認】強制無線

ミラー　「ピースウォーカーはそこから西の方角にある基地の中だ。西へ向かえ！」

【西へ向かえ】強制・任意無線

ミラー　「西だ、スネーク。西へ向かってくれ」

【敵兵配置について】任意無線

※バラックの近くで

ミラー　「敵は地上だけとは限らん」

ミラー　「バラックの屋根の上にも注意するんだ」

【屋根への登り方】任意無線

※梯子の近くで

（1）

ミラー　「梯子があるな。屋根に上がれるぞ」

（2）

ミラー　「場所によっては、木箱を踏み台にして屋根に上がれるかも知れん」

（3）

チコ　「俺も友達と、よく屋根に登って遊んだよ。見つかると父さん（ミ・ビエホ）に殴られたけど」

【高所恐怖症？】任意無線

※梯子のそばで

チコ　「どうして屋根に登らないんだ？　高い場所が怖いか？」

【エルード示唆】任意無線

※エルードでしか行けない場所（屋根）付近で

（1）

ミラー　「そこはエルードなら行けるんじゃないか？」

（2）

ミラー　「そこ、エルードすれば進めそうだな…」

（3）

チコ　「エルードしないの？　落ちるのが怖い？」

【ローリング示唆】　任意無線

※ローリングでしか移動できない屋根にいる時に

（1）

ヒューイ　「その屋根には、ローリングでしか移動できないようだね。敵兵もそこに君がいるとは思いもしないだろう」

（2）

チコ　「ローリングだっけ、あのでんぐり返し！　あれなら屋根に飛び移れると思う！」

（3）

アマンダ　「梯子が無くても大丈夫。ローリングなら屋根に飛び移れるんじゃない?」

【ローリング成功】　任意無線

※ローリングでしか移動できない屋根でローリングに成功

セシール　「すごかったわ、It's wonderful. さっきのローリング」

セシール　「ぐるぐるぐるーー!って、まるでサーカスみたい！　ぽーっ！　また見てみたいな…」

【目的再確認】　任意無線

（1）

ミラー　「スネーク、採掘場に偽装した地下基地へ向かってくれ」

（2）

ヒューイ　「目的地は採掘場に偽装した地下基地だ」

（3）

チコ　「目的の基地は採掘場に偽装されているみたいだ」

「衛兵排除」無線集

■採掘場底部

【目的確認】強制無線
ミラー　「もう後へは退けない。敵を殲滅して先を目指すんだ、スネーク！」

【狙撃に注意】任意無線
アマンダ　「広い場所では狙撃に気をつけて」

【攻略ヒント】任意無線
(1)
ミラー　「遠距離からのスナイピングにも気をつけろ」
(2)
アマンダ　「そいつらを全員無力化するしかない！」

【敵はあと少し】任意無線
※敵兵が残り1名になった時にCALL
(1)
ミラー　「よし、敵はあと少しだ！」
(2)
アマンダ　「あと少しだけど気を抜かないで！」

注：「対コクーン戦」無線集は、P462の【対コクーン戦無線集】を参照してください

「地下基地潜入」無線集

■「地下基地潜入」共通

【目的確認】任意無線

（1）

ミラー　「ピースウォーカーの格納庫を探し出し、AIポッドを破壊するんだ」

（2）

ヒューイ　「どこかにピースウォーカーの格納庫があるはずだ」

■AI兵器格納庫

【敵兵の警戒に注意】強制無線

ミラー　「さっきの戦闘のおかげで警戒が厳重なままだ。見つかるなよ」

【エレベーターを使え】強制無線

※エレベーター前の敵兵を無力化して近づいたら

ミラー　「そのエレベーターで地下まで行けそうだな」

ミラー　「ピースウォーカーは地下にいる。エレベーターを使うんだ」

※エレベーターのスイッチを押したら

ミラー　「エレベーターが到着するまでどこかに隠れるんだ。見つかるなよ」

※危険フェイズ中にエレベーターに乗ったら

ミラー　「敵に見つかったままエレベーターに乗るのは危険だ！　しばらく身を隠せ！」

【その扉は開かない】強制無線

※独房から続く扉、地下通路Aへ続く階段の扉に近づいたら

ミラー　「警戒レベルが高いとその扉は開かないようだな」

【ホバー戦車に登れ】任意無線

（1）

ミラー　「そのホバー戦車、ずいぶん車高があるな」

ミラー　「車体に登れば、物陰に隠れた敵を見つけられるかも知れんぞ」

（2）

チコ　「あの戦車、バシリスコみたいにタッパがあ

りやがる」

チコ　「車体の上に上がれば、いろんな所を偵察しやすくなるんじゃないか？」

【ＡＩ兵器について】任意無線

ヒューイ　「ＡＩ兵器がこんなに製造されていたなんて…」

【ＡＩポッド搭載用パネル】任意無線

※格納庫２階の操作パネルに近づいてＣＡＬＬ

ヒューイ　「そいつはＡＩポッドの搭載用パネルだろう。いまＡＩポッドの姿はみえないけど…」

【目的再確認】任意無線

セシール　「あなたの目的は…、ピースウォーカーのＡＩポッド破壊だったわね」

■地下通路Ａ

【その扉は開かない】任意無線

※１Ｆと２Ｆを繋ぐ扉に近づいたら

ミラー　「警戒レベルが高いとその扉は開かないようだな」

■地下通路Ｂ

【シャッターの先にピースウォーカー】任意無線

※シャッターが見える辺りで

（１）

ヒューイ　「そのシャッターの奥にピースウォーカーが…。よし、アクションボタンでシャッターを開けてくれ」

（２）

ヒューイ　「ピースウォーカーは目と鼻の先だ。シャッターを越えて奥へ進んでくれ」

【アクションボタンで開けろ】強制無線

※閉じているシャッターに近づいたら

（１）

ミラー　「そのシャッター、力を込めれば…」

ミラー　「アクションボタンの連打で開けてみるんだ！」

（２）

ミラー　「そのシャッター、力を込めれば…」
ミラー　「アクションボタンで開けてみるんだ！」

【シャッター開け成功】強制無線

ミラー　「よし、いいぞ！　一気にピースウォーカーの格納庫へ進むんだ！」

※シャッター開け成功時にCALL

チコ　「やったね、さすが！　名人も真っ青な連打だったよ！」
チコ　「さあ、ピースウォーカーまであと少しだ！」

「独房からの脱出」無線集

■独房

【脱出ヒント】任意無線

※独房内、糸鋸を持っている時にCALL

（1）あいまいヒント

ミラー　「何かロック部分を壊す手段は無いか？」

（2）明快ヒント

ミラー　「糸鋸だ、スネーク。糸鋸を使えば脱出できる」

※独房内、IDカードを持っている時にCALL

（1）あいまいヒント

ミラー　「どうにかしてロックを解除できないか？」

（2）明快ヒント

ミラー　「IDカードはどうした？　カードを使うんだ、スネーク」

【糸鋸没収】任意無線

※糸鋸を没収された後にCALL

ミラー　「糸鋸を持っていかれたのか…」
ミラー　「他に何か手はないのか？」

【IDカード没収】任意無線
※IDカードを没収された後にCALL
ミラー　「IDカードを没収されたか…」
ミラー　「他に脱出する手段はないか…」
ミラー　「他に脱出する手立てを考えなけりゃな…」

【糸鋸の使い方】強制無線
(1)
ミラー　「糸鋸を挽くにはLボタン、Rボタンを交互に押すんだ」
ミラー　「音を聞かれないようにな」
(2)
ミラー　「Lボタン、Rボタンを交互に押して糸鋸を使うんだ」
ミラー　「音には気をつけてくれよ」

【拷問終了】強制無線
※CO-OPSで拷問されていたメンバーが戻ってきた時
(1)
ミラー　「尋問が終わったらしいな」
(2)
ミラー　「戻ってきたか。無事だといいが…」
(3)
ミラー　「どうやら喋らなかったようだな。さすがボスのバディだ」

【拷問開始】強制無線
※CO-OPSで拷問されるメンバーがチェンジされた時
(1)
ミラー　「一人連れて行かれたか。耐えてくれよ…」
(2)
ミラー　「持って行かれたな。…無事に帰って来いよ」
(3)
ミラー　「連行されたか。ウタうなよ…頼むぜ…」

【仲間と一緒に脱出せよ】強制無線
※CO-OPS中、1人だけでゴールへ入った
ミラー　「仲間を置き去りにする気か？」
ミラー　「仲間と一緒に脱出するんだ」

※CO-OPS相手がまだ独房にいる

（1）

ミラー　「仲間がいる独房のロックを開けないか?」

（2）

ミラー　「制御室で独房のロックを解くんだ」

（3）

ミラー　「何とかして仲間を助けてくれ、スネーク。一緒に脱出するんだ」

【警戒レベルが高い時】強制無線

※危険フェイズ中にスライドドアの前で

ミラー　「ダメだ、警戒レベルが高いとそのドアは開かない」

ミラー　「警戒レベルが下がるのを待つんだ」

「ピースウォーカー格納庫へ」無線集

■「ピースウォーカー格納庫へ」共通

【目的確認】強制・任意無線

（1）

ミラー　「時間がない、ピースウォーカーの格納庫へ向かってくれ」

（2）

ヒューイ　「ピースウォーカーは起動準備中だ。急いでくれ！」

■AI兵器格納庫

【階段について】強制無線

※「地下通路A」に続く階段の扉を開けたところで

ミラー　「その階段は地下へ続いているのか?」

【先へ進め】強制無線

※同じエリアで、一定時間経過すると

ミラー　「どうした何してる、先へ進んでくれ。見つかるなよ」

■地下通路A

【連携兵について】強制無線

ミラー　「連携している敵を一人で対処するのは厳しい。戦闘は避けた方がいい」

■地下通路B

【あと一息】強制無線

ミラー　「よし、ピースウォーカーまであと一息だ！急いでくれ！」

注：「対ピースウォーカー戦」無線集は、P464の【対ピースウォーカー戦無線集】を参照してください

第四章

幻想の平和

【米軍ミサイル基地潜入／強制マザーベース無線デモ】（ミラー）

ミラー　「スネーク、国境を越えたピースウォーカーはニカラグア湖南東の米軍補給基地にラゴ・コシボルカ入った」

ミラー　「コールドマンの目標（ターゲット）は、俺達のいるマザーベースだ」

ミラー　「ピースウォーカーを破壊し、核発射を阻止するんだ！」

――章タイトル表示。

【章タイトル】第四章　幻想の平和

【ニカラグア基地潜入前／アーティストデモ】

――状況：アマンダに紹介されたボート（屋根の着いた30人乗りほどの水上バス。乗っている客はスネーク）。

――乗組員は二人、Tシャツなど軽装。一人は地図を拡げてスネークに場所を説明（懸命にスペイン語でニカラグア湖周辺のことを話している）。

――スネークはチャンパ（ビニールシート）を日よけのように頭に被っている。

【テロップ】1974年11月23日　コスタリカ－ニカラグア国境　サン・ファン河

——SALT Ⅱ に関する米ソ首脳会談は、11月23日の18：00～24：00と、11月24日の10：00～昼過ぎに行われた（ウラジオストク現地時間）。

アマンダ「連絡便（ゴンドラ）で川沿いに西へ。北の岸に上がったら、もうそこはニカラグアよ」

アマンダ「基地のそばまで案内を頼んである」

チコ「スネーク」

スネーク「チコ、どうした」

チコ「あの馬、残念だったね。きれいな馬だったのに」

——回想。黒画面に舞う白い花びら。

ザ・ボス（MGS3）「綺麗でしょ？　生命の終わりは…」

ザ・ボス（MGS3）「切ない程に」

——負傷したアンダルシアンを見下ろすスネークからF.I.

——右手には銃（ハンドガン）を握りしめている。

——アンダルシアンに銃を向けるスネーク。

——F.O. & F.I.

——回想。コスタリカで負傷したアンダルシアン。実はあのあとスネークは苦しむアンダルシアンを銃殺していた。ここでスネークはそれを回想するとともに、その馬の主人、ザ・ボスの抹殺のことを思い出す。

——ザ・ボスの記憶とアンダルシアンの記憶が交錯する中で、回想に合わせてＭＧＳ３のザ・ボスの音声を流す。

——横位置引き画、対峙するスネークとザ・ボス（ＭＧＳ３画合わせ）。

ザ・ボス（ＭＧＳ３）「待っていたわ。…スネーク、ずっと」

スネーク「ボス…」

——横たわるザ・ボス（ＭＧＳ３画合わせ）。

——パトリオットを持つスネーク。

ザ・ボス（ＭＧＳ３）「もう私から与える物は、何もない」

ザ・ボス（ＭＧＳ３）「後は私の命を、お前が奪え。自分の手で」

ザ・ボス（ＭＧＳ３）「どちらかが死に、どちらかが生きる」

ザ・ボス（ＭＧＳ３）「勝ち負けではない」

ザ・ボス（MGS3）「生き残った者が後を継ぐ」

ザ・ボス（MGS3）「生き残った者がボスの称号を受け継ぐ」

――銃を構えるスネーク（MGS3画合わせ）。

ザ・ボス（MGS3）「殺して…」

ザ・ボス（MGS3）「私を…」

――国境手前で倒れた、虫の息のアンダルシアンに画面切り替え。

――切り替え時、ザリッとノイズを入れる（フラッシュバックのようなサンドストーム。PWカラーバー入れる）。

――銃を構えるスネーク（MGS3画合わせ）。

ザ・ボス（MGS3）「ボスは二人もいらない」

――MGS3でスネークが銃を構え、ザ・ボスにとどめを刺す画面に切り替え。

ザ・ボス（MGS3）「蛇はひとりでいい…」

――再びアンダルシアンの画面に切り替え。

――画面に□ボタン表示。

――〔□ボタン〕押すと、銃声。

――ザ・ボスの画面に切り替え。

――画面に□ボタン表示。

――〔□ボタン〕押すと、銃声。

――ブラックアウト。

――黒画面にＥＶＡの声。

ＥＶＡ　「ザ・ボスの亡命はアメリカ政府が仕組んだ、偽装亡命だったの」

ＥＶＡ　「ただ、思いもしない事態が起こった」

ＥＶＡ　「ヴォルギン大佐がソコロフ設計局に向けて、アメリカの核弾頭を撃ち込んだ」

ＥＶＡ　「作戦のシナリオは大きく加筆、修正させられた」

【テロップ】１９６４年９月ソ連領内　グロズニィグラード　ロコヴォイ・ビエレッグ

ＥＶＡ　「アメリカ政府の潔白を証明するために、ザ・ボスは抹殺されなければいけない…」

ＥＶＡ　「自らの政府の手によって」

――回想、ＭＧＳ３、ＣＱＣ。

EVA「生還は許されなかった」

EVA「自決も許されない」

EVA「あなたに、愛した弟子(サン)によって命を絶たれる…」

EVA「それが政府の望んだ、遂行されなくてはならない…」

EVA「彼女に与えられた責務だった」

EVA「彼女(ザ・ボス)は、汚名を着せられたまま葬られる」

EVA「後の世紀まで、彼女は語り継がれる」

EVA「アメリカでは、恥知らずの売国奴として…」

EVA「ソ連では、核兵器を撃ち込んだ凶人として…」

EVA「表の世界史に、犯罪者として永久に記録される」

EVA「それが、ザ・ボスの最期の任務(ミッション)」

——ストレンジラブの研究室にあるザ・ボスの写真や資料。ママルポッドのUP。

——スネークのUP。

EVA「スネーク」

EVA「これは、歴史には記録されない」

EVA「誰にも伝えられる事のない」

EVA「あなたの心だけに残す…」

EVA「彼女の…」

EVA「帰還報告（デブリーフィング）」

EVA「全ては、国のため」

EVA「祖国のため、名誉（オナー）も命も捧げた」

EVA「彼女こそが英雄（ヒーロー）よ」

EVA「彼女こそが、真の愛国者（パトリオット）」

——草ではなく無数の赤い花弁がスネークの前に流れる。

——カメラ引くと、MGS3ラストの敬礼しているスネーク。

——スネークの頬を涙がつたう。

——日の光がハレーションになって差し込む、ホワイトアウト。

——カシャっというSEとともにカットイン。現実に戻る。

——遠景の基地をのぞき見るスネークの主観（基地南側の茂みから偵察）。

スネーク　「様子がおかしい」

【テロップ】１９７４年11月23日　米軍ミサイル基地　ニカラグア湖南東部

スネーク　「ゲートは手薄だが…」
ミラー　「どうする？」
スネーク　「協力者が要る」

――トラックの荷台に積まれたダンボールのＵＰ。
――そのひとつにスネークが隠れて基地内に潜入したという設定。
――トラックの停止音。
――ガサッと音を立てるダンボール。
――走り出すトラック。
――カメラ引くと、物陰から顔を出しているスネーク。

スネーク　「こちらスネーク、聞こえるか」
ミラー　「こちらミラー、良好だ」
スネーク　「潜入に成功した」

ミラー　「建物の向こう側、北西の湖畔に飛行場が確認出来る。核発射にはそこを使うはずだ」

ミラー　「その手前に通信塔がある。ピースウォーカーの制御は恐らくそこで行われる」

——通信塔が見える。

——ゲーム開始位置合わせ。

スネーク　「カズ、核の目標（ターゲット）はマザーベースだ。避難しなくていいのか？」

ミラー　「ああ…、みんなあんたを信じている」

スネーク　「わかった。俺もあそこがなくなっては、困るからな」

スネーク　「アマンダ達は？」

ミラー　「彼女達は退避させた。これ以上、彼ら（FSLN）に介入するわけにはいかない」

スネーク　「そうか」

スネーク　「彼女達には、彼女達（FSLN）の崇高なる戦いがある」

ミラー　「それと、スネーク。そこにはパスが捕まっていることも忘れないでくれ」

スネーク　「そうだな」

ミラー　「こっちは支援部隊出撃の準備に入る。核発射を阻止するんだ。頼んだぞ、スネーク！」

――ゲームへ。

――リアルタイム無線（P372参照）

【パス接触／アーティストデモ】

――通信塔のモニタールームに潜入したスネーク。

【テロップ】ニカラグア米軍ミサイル基地通信塔モニタールーム

――壁いっぱいに各地の監視カメラ映像が並んでいる（スネークナメ、パン）。

――モニターにはこの先の管制塔（二つ目の通信塔）、基地の各部屋、廊下、配備されるピースウォーカー（遠景）、基地入り口、湖に浮かぶオメテペ島火山などが映っている。

――スネーク、モニターのパスを発見。

スネーク　「パス……！」

――モニターの中のパスが監視カメラを見る。管制室のひとつの机、という感じで監視カメラは斜め下のTV電話のような視点。双方向通信が出来る（管制室の一角に拘束されており動けないが状況に詳しい）。

パス　「…スネーク！」

——カメラを見るパス。

スネーク　「聞こえるのか？」

パス　「ええ、聞こえるわ」

——スネークの声も木霊している。つまりはモニターされている。

スネーク　「何処にいる？」

パス　「わからない、よくわからないの」

スネーク　「コールドマンは？　奴は何処にいる？」

パス　「さっき…、最終データ入力を始めるって…、管制塔に」

——警告音！

——モニターを見渡すスネーク。

——そのひとつに自分が映っている！

パス　「どうしたの？」

スネーク　「見つかった……！」

ミラー（無線）　「スネーク！」

スネーク　「カズ？」

◇カリブ海上空

――上空を飛ぶ数機のヘリ。

――そのひとつに乗っているミラー、ヘッドセットをしている。

ミラー　「スネーク、無事か？」

ミラー　「一斉出動の準備が整った」

ミラー　「至急(on the double)そちらへ向かっている」

スネーク　「（ＯＦＦ）本当か？」

◇マザーベースモニタールーム

――モニターで状況を見ているヒューイ。

ミラー　「基地(ベース)にはバックアップチームだけを残した」

ミラー　「全隊、ニカラグア基地に向かっている」

◇ニカラグア沿岸

――海上を走る哨戒艇群！

――パンアップするとミラーのヘリ部隊が上空を通過していく。

ミラー　「スネーク、先の管制塔まで行けるか？」

スネーク　「何故か、ソ連兵が占拠している。恐らくスペツナズだ。強行突破になる」

ミラー　「何が起きている？」

スネーク　「わからん」

ミラー　「すぐ駆けつける。もう少しだスネーク、持ち堪(こた)えてくれ！」

◇モニタールーム

――警報ランプがつき、ハザードが鳴り続けている。

――モニターに映るパスに手を触れるスネーク。

パス　「スネーク…」

スネーク　「パス、待っててくれ」

パス　「私は、大丈夫だから…。私は、平和の使者よ。あなたを見守ってる」

——ピースマークをして微笑むパス。
——全モニターに、緊急出動するソ連兵の姿が映っている。
——それを背に、銃を構えるスネーク。

スネーク　「行くぞ！」

——リザルト画面へ。
——NEXTミッションへ（管制塔へ）。

【管制塔へ／ミッション前強制無線デモ】（ミラー）

——ミラーはヘリ機内から。背景にヘリの飛行音入れる。

ミラー　「スネーク！　ピースウォーカーを制御しているのは管制塔だ！　北東の管制塔へ向かってくれ！　俺達もすぐ援護に向かう！」

——ゲームへ。
——リアルタイム無線（P373参照）。

【ピースウォーカー核発射１／アーティストデモ】

――銃を構えたままエレベーターを降り、管制室に駆け込むスネーク。

【テロップ】ニカラグア米軍ミサイル基地　管制塔最上層司令室

パス　「スネーク！」

――待ち構えていたようにソ連兵に取り囲まれる。
――部屋の中央に立つ、ＣＩＡ支局長コールドマン。数名のソ連兵が護衛している。コールドマンの横にはパス。
――この時、コールドマンの左手には手錠でアタッシュケース状の起動スイッチが繋がっている。
――スネークは銃を降ろさないまま、ソ連兵が周りから銃を向けている。

コールドマン　「来たなＢＩＧＢＯＳＳ（ビッグボス）」
コールドマン　「だがもう手遅れだ。偽装データの準備は整った」
スネーク　「偽装データ？」
コールドマン　「そう、偽装データだ」

――中央のスクリーンには発射待機して佇んでいるピースウォーカー。

コールドマン　「ピースウォーカーは抑止力としてのみ機能する兵器だ。自らが自発的に攻撃を仕掛ける機能はない」

コールドマン　「彼女(ママルポッド)が攻撃に目覚めるのは、あくまでも報復行動時のみ。だからこそ、平和の兵器ピースウォーカーなのだ」

コールドマン　「まずピースウォーカーに、ソ連から米本土へ向けて発射された、架空の核攻撃データを入力する…」

――モニターの一つに、バンで準備を進めるストレンジラブの姿。

コールドマン　「彼女(ママルポッド)はそのデータの脅威を査定した後、独自に報復モードを起動。予め(あらかじ)設定されている攻撃目標の中から、最適な目標(ターゲット)を選定する」

コールドマン　「今回の核攻撃データには…、彼女(ママルポッド)が目標をカリブ海洋上に選定せざるを得ないような状況を、逆算した偽装データを仕込んでおいた」

スネーク　「本当に撃つつもりか？」

コールドマン　「まさに、この冷戦世界で、最初で最後の報復行動は、ピースウォーカーがすることになる」

コールドマン「そして、これが平和へ近づく、唯一の方法なのだ…」
コールドマン「後はコードを入力するだけだ」

——コールドマン、小型アタッシュケース状の起動スイッチを開く。
——テンキーと文字盤の横に、鍵が差さっている。

スネーク「やめろ！」

——危険覚悟で銃を構え直すスネークだが、背後から声がする。

ガルベス（ザドルノフ）「止まれ、BIG BOSS（ビッグボス）」
コールドマン「遅かったな」
スネーク「…〝教授〟？」
パス「先生…」

——ザドルノフ、部屋に入ってくる。

ザドルノフ「予定より手間取った…〝基地の制圧〟にな」

——コールドマンの横の兵士たちがコールドマンに銃口を突きつける。

コールドマン　「（銃口を突きつけられた息遣い）な…！」

ザドルノフ　「私が持ち出した技術と、お前が提供してくれた土地と資金…。我々、KGB（ツェントル）だけでは、こうも早く結果は出せなかったはずだ」

コールドマン　「ザドルノフ、裏切ったな…！」

ザドルノフ　「裏切る？　そもそも我々は敵同士ではないか？」

ザドルノフ　「私の同志たちがCIA（カンパニー）のために働くとでも？」

ザドルノフ　「堕落しきった資本主義者達に忠誠を尽くすとでも？」

コールドマン　「何を、する気だ？」

――コールドマンの前に来るザドルノフ。

ザドルノフ　「キューバに…、核を撃つ」

コールドマン　「そんな馬鹿な⁉　貴様に何の得が⁉」

ザドルノフ　「我々が核を撃つのではない」

ザドルノフ　「お前達、アメリカ人が我々の同志、キューバに核を撃つのだ」

コールドマン　「何だと⁉」

ザドルノフ　「まだわからないか？　ここは親米政権がお前達に与えた、米軍基地ではないか」
ザドルノフ　「国際世論はどうなると思う？」
ザドルノフ　「反米感情に一気に火がつく！　中南米の共産化は止められなくなる」
――階段を昇り、さらにコールドマンに近づくザドルノフ。
コールドマン　「ク…」
ザドルノフ　「抑止力をあえて起爆させる事で、時代の転換を狙う。それがクレムリンの計画なのだ」
コールドマン　「貴様…」
ザドルノフ　「パス、こっちへ」
パス　「ひ…」(怯えている)
――おそるおそるコールドマンから離れるパス。
パス　「(吐息)」
――ザドルノフはパスの肩に手をまわすと、手にＰＳＭを握らせる。
――ザドルノフは耳元で囁く。

ザドルノフ　「こいつを撃て」

パス　「ガルベス先生…?」

ザドルノフ　「私の名前は、ヴラジーミル・ザドルノフ。ヴラジーミルの意味は〝平和を支配〟だ。言うことを聞け、平和（パス）」

コールドマン　「やめろ…」

ザドルノフ　「沿岸での陵辱を思い出せ」

ザドルノフ　「コールドマンが君にしたことは…、死の報復に値する」

――銃口をコールドマンに向けるパス。

コールドマン　「パス…わるかった」

――目を見開くパスだが…。

パス　「…っ」

――PSMを持った手が力なく下がる。

パス　「できない…!」

ザドルノフ　「さすがは平和（パス）」

　　――ザドルノフ、パスの右手を上から義手で握り、まっすぐコールドマンにその銃口を向ける。

コールドマン　「待て」

　　――パン！　パン！　二発の銃声。

パス　「ああっ！」

コールドマン　「ん、ごがぁ！」

　　――地面に倒れるコールドマン。アタッシュケースは腹にしっかり抱いて身体の下に。近くにカードが落ちる。

ザドルノフ　「報復には、死んだ手（DEAD HAND）が相応しい」

　　――ソ連の自動報復システムＤＥＡＤ ＨＡＮＤは84年設置。
　　――倒れているコールドマンの横にザドルノフの手がＩＮ。
　　――カードを取り上げる。

コールドマン　「貴様…、わざと外したな…」

――銃弾の残るコールドマンの肩を踏みつけるザドルノフ。

ザドルノフ　「お前の出番はまだある。コードの入力をしてもらう」

――カードを見るザドルノフ。

――更に踏みつけるザドルノフ。

ザドルノフ　「（モニターに）博士、目標をキューバにする。偽装データを変更しろ」

コールドマン　「があぁ！」

――動じないストレンジラブだが、血まみれのコールドマンを見て怯える。

ザドルノフ　「抵抗は考えるな。お前だけじゃない、お前のあとで、お前の大好きな〝彼女（ママルポッド）〟も潰してやるぞ」

ストレンジラブ　「それだけは、やめて…」

ザドルノフ　「報復目標をキューバに変更しろ」

ストレンジラブ　「…わかった」

ザドルノフ　「これでよし。…さて、BIGBOSS（ビッグボス）」

ザドルノフ　「お前の全てを見させて貰った。彼らの司令官（コマンダンテ）に相応しい、理想的な振る舞いだった」

スネーク　「何だと？」

――モニターにいままでのスネークの活躍（アーティストデモ）が映される。

――沿岸で通信兵をCQC／アマンダと接触／アマンダを救出／チコを救出／ヒューイの研究室／セシールに接触／ストレンジラブと会話／コスタリカ基地で囲まれるスネーク（CQC前）／ピースウォーカー戦前／ピースウォーカー追跡／ニカラグア基地潜入／モニタールーム

ザドルノフ　「何故、私がお前をコスタリカへ呼び、FSLN（サンディニスタ）に接触させたと思う？」

ザドルノフ　「真の諜報活動とは、直接介入せず、現地の組織を操り、間接的に革命を実現させること」

スネーク　「そうか、アマンダ⁉　FSLN（サンディニスタ）か……！」

ザドルノフ　「よくぞ、ここまで彼らを訓練、組織して、まっとうな革命軍に育ててくれた。あのバラバラだった、無垢な、幼いゲリラ達を」

ザドルノフ　「お前こそ、まさに『20世紀における最も完璧な人間』！」

コールドマン　「チェ・ゲバラ？」

ザドルノフ　「そうだ。そしてその英雄はここで、CIAに殺され、伝説のイコンとなる」

ザドルノフ　「英雄を失ったFSLN（サンディニスタ）は報復に立ち上がり、親米政権（ソモサ）は転覆、ニカラグアは合衆国（アメリカ）の手を離れる。勿論、キューバへの核攻撃が決め手となるがな」

ソ連兵士　「ママルポッドへの、データ入力完了です」

ザドルノフ　「奇しくも、ゲバラと同じ39歳で逝くことになるとは」

ザドルノフ　「…皮肉なことだ」

——周囲の兵士がスネークを抑え、跪かせる。

——PSMをスネークに向けるザドルノフ。

ザドルノフ　「所詮、伝説とは虚実だ。お前もザ・ボスのように、死して、永遠の偽りとなれ」

——ドア向こうで銃撃音！

——振り向くザドルノフ。

——ドアがバン！　と開き、兵士たちが入ってくる。

——先頭にミラー、マザーベース兵！

ミラー　「ゴーゴーゴー！」

——一方のFSLNの一団の先頭はアマンダ！

――その後ろにチコ！

アマンダ　「勝つぞ(ベンセレーモス)！」

チコ　「わーーーっ！（突入の声）」

――銃撃、次々と倒れるソ連兵！

――スネークの周囲の兵士達も銃弾に倒れる。

――スネークも反撃！

――ザドルノフは地面に倒され、アマンダに銃を突きつけられる。

アマンダ　「ふっ！（ザドルノフを倒す）」

ザドルノフ　「ぐっ……」

アマンダ　「動くな！」

ザドルノフ　「同志に銃口を向けるなっ！」

アマンダ　「私達はKGBのコマにはされない。自分達の勝利は自分達で勝ち取る！」

チコ　「〝勝利まで永遠に(Hasta la victoria siempre)〟」

――FSLN、周りを見渡す。あたかも自分たちの革命が成功したような、祖国に帰ってきたような高揚を感じる。

FSLN1　「アマンダっ！」

——アマンダ、兵士に身体を向ける。

FSLN1　「俺達は帰ってきた！　ほらっ、祖国（ニカラグア）にっ！」

FSLN1　「やったな！　アマンダ。いや…、司令官（コマンダンテ）！」

アマンダ　「（応えるアマンダの声）ふっ」

——アマンダ、笑顔になり、銃を掲げる！

——FSLN兵達の横でマザーベース兵がスネークを助け起こす。

マザーベース兵士A　「ボス、怪我は…？」

スネーク　「大丈夫だ」

——手を伸ばすスネーク。

——その手をアマンダが掴み、引き上げる。

アマンダ　「勝利（VIC）の、BOSS」

チコ　「VIC BOSS…」

男性兵士　「ＶＩＣ　ＢＯＳＳ…ＶＩＣ　ＢＯＳＳ…」
兵士達　「ＶＩＣ　ＢＯＳＳ！　ＶＩＣ　ＢＯＳＳ！　ＶＩＣ　ＢＯＳＳ！」
兵士達　「ＶＩＣ　ＢＯＳＳ！　ＶＩＣ　ＢＯＳＳ！　ＶＩＣ　ＢＯＳＳ！」

——二人のリーダーを見て、銃を掲げて声を揃えるＦＳＬＮとマザーベース兵。

兵士達　「ＶＩＣ　ＢＯＳＳ！　ＶＩＣ　ＢＯＳＳ！　ＶＩＣ　ＢＯＳＳ！」
兵士達　「ＶＩＣ　ＢＯＳＳ！　ＶＩＣ　ＢＯＳＳ！　ＶＩＣ　ＢＯＳＳ！」

——凛と立ち、シュプレヒコールを受けているスネーク。

スネーク　「まるでジャンヌ・ダルクだ」
アマンダ　「やめて、英雄はあんたよ」
スネーク　「その英雄の命を救った君達こそ、本物だ」
アマンダ　「へえ、かわいいこと、言うじゃない」

——スネーク、手を差し出す。

スネーク　「ありがとう。よく来てくれた」

――スネークの手を引っ張り、アマンダは強く抱きしめる。
――響きわたるＶＩＣ　ＢＯＳＳコール。
――一方、マザーベースのモニタールームには、スピーカー越しにＶＩＣ　ＢＯＳＳコールを聞いているヒューイ（引き画）。
――満足げな笑みで眼鏡を直す（小窓）。

――２時間ほど後。
――夕暮れ前。基地の制圧は一段落つき、各自解散を始めている。
――上空にはヘリが数機飛んでいる。
――パンダウンするとスネークがまだ浮上していないヘリ（最終便）の前に立っている。

ミラー　「パスは落ち着くまでマザーベースに」
スネーク「教授は」

――停泊中のヘリの内部。
――後部には拘束されたザドルノフ、担架に寝るコールドマン。
――それぞれにマザーベース兵がついている。

ミラー　「独房に入れておく」

ミラー　「コールドマンは失血がひどい。助かるかどうか…」
スネーク　「アマンダは？」
ミラー　「仲間（FSLN）と一緒だ。あとで合流する」
スネーク　「スネーク、あんたは…」
ミラー　「まだやることがある」
スネーク　「例のAIか？」
ミラー　「あのままにはしておけない」
スネーク　「ボスの紛い物（AI）を、埋葬してくる」

——飛び立つヘリ。

——コクピットからスネークを見送るミラー。

ミラー　「…戻って祝杯の準備をしておく」
ミラー　「かりそめの、平和を祝おう」

——ヘリを見送るスネークのUP。

——ヘリからの風で塵が飛び、髪とバンダナがなびいている。

——遠ざかるヘリ…。

――ＯＦＦで車が近づいてくる音。

――スネークの前方で止まるバン。

――運転席でストレンジラブが待っている。

――スネークを見ないまま、

ストレンジラブ「彼女を蘇らせたのは、奴らに強要されたからじゃない」

ストレンジラブ「本当の気持ちを、彼女の最期（ウィル）を知りたかった」

スネーク「ボスは死んだ」

ストレンジラブ「いえ、彼女はまだ生きている」

スネーク「掘り返さない方がいい真実もある」

ストレンジラブ「ダメよ、正直になりなさい。あなたも知りたいはず」

ストレンジラブ「あなたが最期に見たもの、聴いたことが真実かどうかを」

ストレンジラブ「きっと彼女（ピースウォーカー）が、真実を伝えてくれるはず」

――答えないスネーク。

ストレンジラブ「止めてくれてありがとう」

ストレンジラブ「…それに、ごめんなさい」

スネーク　「…大丈夫だ」
ストレンジラブ「案外、優しいのね」
ストレンジラブ「彼女に逢いに行きましょう。乗って、…ボス」
——バンの傍らに立つスネークの前方にピースウォーカーがシルエットで見える。
——引き画で、ラストカットのように。
——F.O.

◇ヘリ機内・コクピット

——コクピット、ミラーの隣。
——震えているパス。
ミラー　「慣れない銃は握るな」
——うつむくパス。頬に涙が流れる。
ミラー　「構えるだけでは、抑止力にはならない」
ミラー　「銃は俺達に任せろ。君は平和の使者だ」
——嗚咽するパス。

ミラー　「そういう契約だったろ?」

ミラー　「コスタリカから軍隊はいなくなるはず。任務は完了だ」

ミラー　「パス?」

——顔を上げるパス。涙をぬぐって。

パス　「…ありがと」

——ピースマークをして微笑むパス。

◇ヘリ機内、貨物室

——担架のコールドマン。誰も彼を見ていない。

コールドマン　「(苦しげな呼吸)」

——なんとか、アタッシュケースの蓋を開ける。

——片手でテンキーを押してコードを入力するコールドマン。

コールドマン　「ふ…く…、んっ(苦心してボタンを押す)」

——必死の形相、汗が滴る。
——パス、ザドルノフがコールドマンの行動に気づくが、意味がわからない。
——にんまりとほほえむコールドマン。

コールドマン　「へぇっ…（不気味に笑う）」
——コクピットのミラー。
——ヘリの爆音にまぎれて、小さくピー、ピーと信号音が聴こえる。

ミラー　「…何の音だ？」

◇ニカラグア基地、ピースウォーカー前
——AIポッドが光り、ゴウーン、と音を立て、起動するピースウォーカーUP。

◇ヘリ機内、貨物室
——アタッシュケースをコールドマンから取り上げるミラー。

ミラー　「何をした…！」
ザドルノフ　「（自分ももう囚われの身なので、ちょっと嬉しそうに）この死に損ないが、やりやがった！」
コールドマン　「…NORAD（ノーラッド）には悪夢の始まりだ」

ミラー　「…何だと？」

コールドマン　「ピースウォーカーは…敵からの核攻撃のデータを元に…報復目標を決定する…」

コールドマン　「この報復のための偽装データは…、外部送信も可能なのだ…」

——ミラー、ザドルノフ、コールドマンを凝視…。

◇移動中のバン

——走るバンの車内。

ミラー　「スネーク、まずい。コールドマンが、核発射スイッチを起動させた！」

スネーク　「何だって！　目標はキューバか？」

ミラー　「ああ、だがそれだけじゃない。あの野郎、えらい仕掛けを」

◇ヘリ機内、貨物室

——時系列的にやや過去。コールドマンがミラーに説明していた会話。

——コールドマンは重傷。苦しげな演技。

コールドマン　「起動したピースウォーカーからは、北アメリカ航空宇宙防衛司令部（NORAD）へと偽装データが送信される」

コールドマン　「それにはスペクトラム拡散方式の、複合長波信号（MLF）が使われている。だから電磁パルス（EMP）を用いたとしても、妨害（ブラックアウト）は出来ない」

◇移動中のバン

ミラー　「データは、レーダー上では本物と見分けがつかない」

ミラー　「NORADの連中は、これがピースウォーカーの創った幻影だとは知らない」

ミラー　「誰もがソ連からの真の核攻撃だと思うだろう」

ミラー　「NORADが受けた情報は、国家軍事指揮センター（NMCC）へ伝えられ…」

スネーク　「アメリカは報復の選択を迫られる」

◇ヘリ機内、貨物室

ミラー　「まずい！　このままだと…、報復の連鎖が！」

コールドマン　「いや…」

——起き上がろうとするコールドマン。

コールドマン　「慌てる必要はない。つかの間、悪夢（フィクション）を見るだけだ」

ミラー　「どういう事だ？」

——ザドルノフを見やる。

ザドルノフ　「コールドマンの狙いは、機械(マシン)であるピースウォーカーの存在意義を政府の連中に
　　思い知らせることだ」

ザドルノフ　「…人間の意志(ウィル)では核が撃てない事を、政府自身に立証させようとしている」

コールドマン　「大丈夫だ、諸君。報復は出来ん。人である以上…」

◇移動中のバン

スネーク　「カズ、大統領はどこに?」

ミラー　「…確か、彼はいま、ウラジオストクでSALT II(ソルトツー)会談のまっ最中だ」

スネーク　「大統領が不在の場合、核発射権限は次の人物に委譲されるはず」

ミラー　「いま副大統領は空席だから、その次は…」

◇ヘリ機内、貨物室

コールドマン　「…大統領であろうがなかろうが、…誰ひとり、スイッチを押す勇気はないはずだ。
　　破壊者として、歴史に記録されたくはないからな」

コールドマン　「最期に人が守るものは…、命ではない。名声だ!」

◇移動中のバン

ストレンジラブ「政府の連中は報復出来ないかもしれない。でも、ピースウォーカーは…」

ストレンジラブ「彼女は誰よりも任務に忠実よ。そして、核抑止には報復の確実性が不可欠だと認識している」

◇ヘリ機内、貨物室

コールドマン「ピースウォーカーは完全なる抑止力となる」

コールドマン「キューバへの攻撃は不本意だが…、平和に犠牲はつきものだ」

コールドマン「偽装データを受けたピースウォーカーは…、確実に報復を実行する」

◇移動中のバン

ミラー「バカな！　キューバじゃ済まない。全面核戦争に突入するぞ！」

スネーク「ＮＯＲＡＤの状況を知ることは？」

——聞いていたストレンジラブが喋り出す。

ストレンジラブ「ママルはＮＯＲＡＤと繋がっている。機材があればモニター出来るはず」

ヒューイ（通信）「それなら僕に任せてくれ」

◇マザーベースモニタールーム

――モニター前にヒューイがIN。

ヒューイ　「NORADの回線を捉えた」

――眼鏡を直すヒューイ（自信が垣間見える）。

◇NORAD　コロラド州

【テロップ】アメリカコロラド州　NORAD　シャイアンマウンテン空軍基地

NORAD1　「追跡中の未確定目標、現遠地点より20度。推定再突入時間　2250Z（ズールー）」

NORAD司令官「大統領と連絡は？」

NORAD2　「空中指揮所（カバーオール）繋がりません」

NORAD1　「警報システムに異常なし。該当する自然活動（シグネチャー）なし。信頼度高い」

◇移動中のバン

スネーク　「偽装データの送信を止めろ！　政府が報復しないとは断言出来ない！」

◇ヘリ機内、貨物室

コールドマン「停止コードを知るのは…、私…、だけだ…」

コールドマン「私が死ねば…、誰にも解除は出来ない…」

コールドマン「仮に報復したとしても…、私は…、死んだあと…」

コールドマン「私の理論が、私の平和が…、証明されることを…、祈っているよ…」

コールドマン「ピー…、ス…」

——コールドマン、力を絞り、ピースマークをつくる。

——と、心停止。「ピー！」と警戒音が重なる！

◇NORAD　コロラド州

NORAD司令官「…デフコンを3に引き上げる。戦略空軍(SAC)を呼び出せ」

NORAD2「こちらクリスタルパレス。緊急会議を召集する、待機(スタンバイ)」

◇移動中のバン

ヒューイ「…デフコン3だ」

ミラー「偽装データと核、根元はひとつだ…。ピースウォーカーを止めろ！」

ストレンジラブ「壊すしかない…」

――バン、急ブレーキ。

――停止するバン。

――至近距離でピースウォーカーがのっそりと立ち上がろうとしている。

ストレンジラブ「発射態勢に入った。ピースウォーカーの裁断が下った。目標は、キューバ！」

ミラー「スネーク、核を撃たせるな！」

――ブラックアウト。

【ピースウォーカー・ニカラグア戦前／シナリオデモ】

――湖畔の飛行場施設。

――発射準備に入っているピースウォーカー。

――スネークが接近する。

――ピースウォーカー、発射位置に到着すると、核発射のカウントダウン！

ヒューイ「弾道計算が完了したら、お終いだ」

ミラー「スネーク、機体を破壊し、発射を阻止するんだ！」

――スネークのUP。
――ホワイトアウト。
――リザルト画面へ。
――NEXTミッションへ（対ピースウォーカー戦2）。

【対ピースウォーカー戦2／ミッション前強制無線デモ】（ミラー）

――前アーティストデモの最後の台詞を重ねる。

ミラー「スネーク‼　核を撃たせるな‼」

――ゲームへ。

【ピースウォーカー・ニカラグア戦タイムオーバー／シナリオデモ】

※2Dカウンターがゼロになると発生

ザ・ボスAI「3（スリー）、2（ツー）、1（ワン）、発射（ランチ）」

――脱力した様子で空を見上げるスネーク。

――発射音がかぶり、ホワイトアウト。

【ピースウォーカー核発射1／シナリオデモ】

◇ニカラグア・ピースウォーカー前

――脚力を失い、その場に崩れ落ちるピースウォーカー。

――F.O.

【ピースウォーカー核発射2／アーティストデモ】

――スネークの雄々しい姿。

ミラー「静止した…？　スネーク、核の発射は阻止出来たようだ」

スネーク「ヒューイ！　NORADは⁉」

◇マザーベースモニタールーム

ヒューイ「いや…（絶望）」

◇NORAD司令部

【テロップ】シャイアンマウンテン空軍基地ＮＯＲＡＤ司令部

ＮＯＲＡＤ１　「弾道ミサイル早期警戒システム（BMEWS）は、目標のレーダー探知を継続中」

※ＢＭＥＷＳ＝Ballistic Missile Early Warning System

ＮＯＲＡＤ３　「ＤＳＰ衛星に異常なし。信頼度、依然高い」

◇ペンタゴンＮＭＣＣ（国家軍事指揮センター）

【テロップ】アメリカワシントンＤＣ　国防総省国家軍事指揮センター（ＮＭＣＣ）

ＮＯＲＡＤ２　「統合参謀本部議長（CJCS）、国防長官代理以下、国家軍事指揮センター（NMCC）に到着しました」

――到着する国防長官代理、議員１、議員２。

――部屋に待機している統合参謀本部議長。

◇マザーベースモニタールーム

ヒューイ　「ピースウォーカーは駆動系が損傷しただけだ…。データ送信回線はまだ生きてる…」

◇NORAD　司令部

NORAD1「ソ連のICBM 1500基、北極点を通過。確定目標地域は合衆国西部」

NORAD司令官「デフコンを2に、ICBMの発射を準備」

◇ニカラグア・ピースウォーカー前

スネーク「どうすれば止まる!?」

◇マザーベースモニタールーム

ヒューイ「ピースウォーカーは完全な自律システムだ」

ヒューイ「これまでスネークが戦った、他の機械(マシン)とは違う。全ての指揮権は、大脳部分であるママルポッドにある」

◇バン・車内

ストレンジラブ「ママルを止めないと…」

ストレンジラブ「私も停止コードは知らないの。コールドマンしか…」

ミラー「スネーク、ママルポッドの方のAIを破壊するんだ！」

——銃を撃つスネーク。軽い、はじかれる着弾音。
——しかし、ママルポットはピースウォーカーに格納されたまま。

◇マザーベースモニタールーム

ヒューイ「ママルポッドは頭脳。内壁の強度はシェルター並みの設計だ」

◇ニカラグア・ピースウォーカー前

スネーク「何なら破壊出来る？」
ヒューイ「か、核爆弾なら…」
スネーク「ふざけるなっ！」
ヒューイ「ふざけてないっ！　こいつの装甲は核戦争を想定した設計なんだ！」

◇ペンタゴンＮＭＣＣ（国家軍事指揮センター）

【テロップ】国防総省国家軍事指揮センター　緊急会議室（ＥＣＲ）

統合参謀本部議長「大統領とは繋がらない。私達が報復攻撃の判断を」
議員1「それは出来ない！」

議員2「私には人類を滅ぼすような真似は出来ん！」

国防長官代理「大統領に判断を仰ぐべきだろう！」

統合参謀本部議長「もう猶予はありません。決定を」

◇ニカラグア・ピースウォーカー前

スネーク「米国防総省(ペンタゴン)に直接伝えるしかない！　いま、お前達が見ているのは、存在しない核だと」

◇マザーベースモニタールーム

ヒューイ「繋げるか…」

——ヒューイ、キーボードをたたく。ＣＩＡの特別回線で連絡を試みる。

◇ペンタゴンＮＭＣＣ（国家軍事指揮センター）

議員1「権限継承順位に縛られる必要はない！　みんなで地獄へ堕ちよう！」

ＮＯＲＡＤ司令官（モニター）「着弾まで12分です」

統合参謀本部議長「…覚悟を決めましょう」

――うつむいたまま、受け入れた様子の男たち。

ミラー「やばいぞ！　コールドマンの読みは外れた！」
ミラー「彼らは撃つ気だ！」

◇ヘリ機内

◇マザーベースモニタールーム／ヘリ機内

ヒューイ「…機体に外傷が多い。圧力が加えられたら……！」
ミラー「外圧？」
ヒューイ「機体を湖に落とす。水圧でわずかな隙間からでも、浸水するだろう」
ヒューイ「ＡＩポッドは精密機器の塊だ。接触部がショートすれば信号は止まる」
ミラー「機体の重さは」
ヒューイ「およそ５００トン…」
ミラー「無理だ！　こいつをどうやって動かす……？」

◇ニカラグア・ピースウォーカー前

スネーク「電話回線を繋げ！」

◇NORAD司令部

――レーダー上の光点が複数に分かれる。

NORAD司令官「接近中のMIRV（マーヴ）、弾頭分割を確認」
NORAD1「残り時間更新、あと11分」

◇NORAD司令部

NORAD2「緊急電話です！」
NORAD司令官「大統領か！」
NORAD2「いえ」
NORAD司令官「誰だ！」
NORAD2「それが…」
NORAD司令官「誰なんだ！」
NORAD2「…『BIGBOSS（ビッグボス）』と名乗っています」

◇ペンタゴンNMCC（国家軍事指揮センター）

統合参謀本部議長「BIGBOSS（ビッグボス）…？　繋げ！」

◇ニカラグア・ストレンジラブ・バン内部

——受話器を持ったスネーク。

スネーク「議長、要点だけ言う」

◇ペンタゴンNMCC（国家軍事指揮センター）

——ここの掛け合いは1秒間隔で小窓を切り替えたりして、それぞれの緊迫した表情や手の演技、時計の針、レーダーの軌跡などを見せる。

スネーク（通信）「今すぐ、ソ連への報復を中止しろ」

統合参謀本部議長「何だと？」

スネーク（通信）「そちらのレーダー反応は全て偽物だ。核は、実際には発射されてはいない」

統合参謀本部議長「何故、判る？」

スネーク（通信）「ある実験に使われた偽装データが、そちらに漏れた。レーダーに映ってるのはその実在しないミサイルだ」

統合参謀本部議長「それが嘘なら、あと10分で我々はお終いだ。報復しなければ、更に多くの国民が」

スネーク（通信）「その実験は、CIA中米支局長が立案し、実行した」

統合参謀本部議長「では、彼を電話口に出せ」
スネーク(通信)「あいにく支局長は死んだ。彼のフルネームなら言える」
統合参謀本部議長「交換手へのコード認証だけでは不十分だ。貴様が本人である証拠は?」
スネーク(通信)「あんたがBIGBOSS(ビッグボス)の称号を知っているという事は…」
スネーク(通信)「俺がジョンソン大統領からBIGBOSS(ビッグボス)の称号を得たとき…、恐らくあんたもその式典の…、あの部屋にいた可能性がある」
統合参謀本部議長「ああ、いたとも」
国防長官代理「もう待てん! 何を戯言(ざれごと)を!」
統合参謀本部議長「ちょっと、待て! 続きを聞こう。それで?」
スネーク「俺はあの時、CIA長官に握手を求められ、その握手を拒否した」
スネーク「あの部屋での表彰は極秘事項だ。あの現場にいた、ごく少数しか知らない事実だ」
国防長官代理「そんな男の戯言は放っておけ!」
統合参謀本部議長「待ってくれ! 何故、君は彼の握手を拒否した?」
スネーク「何に忠を尽くすべきか? それがわかったからだ」

――回想:墓標に敬礼するスネーク!

――統合参謀本部議長、決断の表情！

統合参謀本部議長「みんな、聴け！　ソ連からのミサイルは嘘だ！」

国防長官代理「何⁉　何故、この男を信じる？」

議員1「そうです、敵の妨害工作かも！」

統合参謀本部議長「いや、彼は間違いなくあの時のBIGBOSS（ビッグボス）だ！」

国防長官代理「どうしてそう言える⁉」

統合参謀本部議長「あの時、長官の横で、彼の行動を見ていた。当時の陸軍参謀総長は私なんだ」

――唖然とする、国防長官代理！

◇ニカラグア・ピースウォーカー前

――ピースウォーカーの上を一羽の蝶が舞う。

◇ペンタゴンNMCC（国家軍事指揮センター）

統合参謀本部議長「…助かったよ、BIGBOSS（ビッグボス）。こちらは警戒を解除する」

スネーク「感謝します」

統合参謀本部議長「電話では何だが、今度会ったら…、握手をしてくれ」

――と、議長の目の前に銃口が！

――国防長官代理が銃を構えている。

統合参謀本部議長「何をしている！」

国防長官代理　「…駄目だ！　解除はさせない！」

◇ニカラグア・バン内部

――受話器を持ったスネーク。

スネーク　「くそ…！」

――スネーク、バンの外のピースウォーカーを見る。

◇ヘリ機内、貨物室

ミラー　「クズどもがぁ…！」

◇ニカラグア・ピースウォーカー前

――スネークの目の前を蝶が横切る。

――何かに気づいた様子のスネーク。

スネーク　「待て……！」

——かすかにザ・ボスの声。

ザ・ボス（ＭＧＳ３）「ジャック」
ザ・ボス（ＭＧＳ３）「ジャック」

——呻るピースウォーカーの機体。

——ＡＩポッドが起立！

ストレンジラブ「開いた……？」

——中から誘うように蝶の群れがあふれ出す。

ストレンジラブ「彼女が、呼んでいる……」

——駆け出すスネーク。

ミラー「ママルを破壊すれば、偽装データも止まる！」
ストレンジラブ「彼女（ザ・ボス）を止めて……！」

——スネークがポッドに滑り込むと同時に、ポッドの外壁が閉じる。

——F.O.

【AI引き抜きゲーム】AIを引き抜き、制止させていく。

——ポッドに乗り込み、MGS3のセリフが流れる中でAIを引き抜き、静止させるスネーク。

——AI内部に「モルフォ蝶」がたくさん出現、さらに白い花びらも舞う。

——画面右に制限時間表示。

——時間内に全てのAIを引き抜かないとゲームオーバー。

◇AIボス音声

ザ・ボスAI「待っていたわ……スネーク、ずっと」

ザ・ボスAI「あなたの誕生、成長、そして今日の決着を……」

スネーク「ボス……」

ザ・ボスAI「おまえを育て、鍛え上げたのも、わたしとお前が闘い合うためにしたことではない。我々の技術は仲間同士を傷つける為にあるのではない」

ザ・ボスAI「では、敵とはなんだ？　時間には関与しない『絶対的な敵』とは？　そんな敵は地球上には存在しない。なぜなら敵はいつも同じ人間だからだ。『相対的な敵』

　　　　　でしかない」

ザ・ボスＡＩ「世界は一つになるべきだ。『賢者達』を再び統合する。私は自分の技術をそこに投入する。大佐の資金（賢者の遺産）をもとにそれを実現する。大戦中の『コブラ部隊』のように」

ザ・ボスＡＩ「彼らという家族がいる（また賢者達に子供を奪われたオセロット）。もう子供は生めないが、私には家族がいる（ＭＧＳ２のソリダスと同じ考え）」

　　　　――だんだん言動がおかしくなってくるＡＩ。

ザ・ボスＡＩ「すばやい茶色の狐はのろまな犬を飛び越える」

※The quick brown fox jumps over the lazy dog.：英語のパングラム

ザ・ボスＡＩ「殺して……」

ザ・ボスＡＩ「私を……」

ザ・ボスＡＩ「さあっ」

ザ・ボスＡＩ「スペインで雨降る平地を歩行する」

※「マイ・フェア・レディ」中の早口言葉をＰＷ風にアレンジ

ザ・ボスＡＩ「円周率は３．２５４６３７３４６９８８８８８８…」

ザ・ボスＡＩ「孤独なＦＯＸ（＝孤独なＺＥＲＯ）は片目のハウンド（＝スネーク）を追いかける」

ザ・ボスＡＩ「円周率は…、円周率は…、およそ３」

——能勢電の駅名をしゃべる。

ザ・ボスＡＩ「川西能勢口（かわにしのせぐち）、絹延橋（きぬのべばし）、滝山（たきやま）、鶯の森（うぐいすのもり）、鼓滝（つづみがたき）、多田（ただ）、平野（ひらの）、一の鳥居（いちのとりい）、畦野（うねの）、山下（やました）、笹部（ささべ）、光風台（こうふうだい）、ときわ台（だい）、妙見口（みょうけんぐち）」

——徐々に機能停止するＡＩ。

ザ・ボスＡＩ「ジャック…」

ザ・ボスＡＩ「ジャック…」

ザ・ボスＡＩ「ジャッ…ク…」

ザ・ボスＡＩ「ジャッ…ク……」

ザ・ボスＡＩ「ジャ…ッ…ク……」

——ホワイトアウト。

【ピースウォーカー核発射3／アーティストデモ】

◇ピースウォーカー・ポッド内

——様子をうかがうスネーク。

◇バン・車内

ストレンジラブ「有効記録領域、ゼロ」

◇マザーベースモニタールーム

ヒューイ「イグジット完了…」

◇ピースウォーカー・ポッド内

スネーク「…止まった」

◇マザーベースモニタールーム

——レーダー、消えないソ連からのミサイル。

——絶望のヒューイ。

ヒューイ「そんな…、偽装データの送信は、ママルを迂回しているのか…？」

◇ペンタゴンNMCC（国家軍事指揮センター）

統合参謀本部議長「銃を降ろせ！」

——国防長官代理を説得する統合参謀本部議長。

——他の議員も統合参謀本部議長に銃を向ける。

——恫喝する統合参謀本部議長、怯む国防長官代理。

統合参謀本部議長「冷静にならんか！　世界が、地球が滅ぶかもしれんのだぞ！」

◇ピースウォーカー・ポッド内

——ポッド内のシリンダーを殴るスネーク。

スネーク「何故だ！」

——ポッド内の外壁を殴りまくるスネーク。

スネーク「俺にはわからない‼」

スネーク「答えろ‼」

スネーク「教えてくれ‼」

スネーク　「答えろ！！！」（□ボタン）表示

スネーク　「ボスぅぅ！！！！」

——シリンダーに押しつけた拳から血が滲む。

スネーク　「く…」（悔し泣き）

——ポッドは沈黙。

——スネークはAIに対してというよりもザ・ボスの魂に対して問うている。

◇ペンタゴンNMCC（国家軍事指揮センター）

NORAD司令官（通信）「あと6分です」

国防長官代理　「…そうだ。権限は私にある。報復を開始する」

——議員1に銃を向けられた統合参謀本部議長。

統合参謀本部議長「やめろ！　世界が終わってしまう！」

議員1　「なんでもいい！　やられたまま死ぬのは負け犬だ」

議員2　「家族が死に、この国（アメリカ）が滅ぶのなら、ソ連も道連れだ！」

国防長官代理　「これでわかったろう。抑止力など、夢の産物だったんだ」

◇ニカラグア・ピースウォーカー前

——ポッドから出てくるスネーク。

スネーク　「なぜだ！　なぜ止まらない⁉」

◇バン・車内

ストレンジラブ「大脳が損傷しても、生命活動が続くことがある」
ストレンジラブ「ボスの、ママルの仕業じゃない。むしろ、もっと原始的な部分…」

◇マザーベースモニタールーム

ヒューイ　「ママルの遺志（ウィル）が、レプタイルに流れ込んでいる…？」

◇ニカラグア・ピースウォーカー前

スネーク　「バカな…」
スネーク　「止めろ…」
スネーク　「何としてもこいつを止めろ！」

——銃を構えるスネーク！

スネーク　「うおおおーーーーっ‼」

——ホワイトアウト。

——リザルト画面表示。

——NEXTミッションへ（対ピースウォーカー戦3）。

【対ピースウォーカー戦3／ミッション前強制無線デモ】（ミラー）

ミラー　「スネーク‼　偽装データの送信を止めてくれ‼」

【ピースウォーカー核発射4／シナリオデモ】

ザ・ボスAI　「MIRV再突入対、観測数5200、5300…」

ザ・ボスAI　「まもなく終末段階（ターミナル・フェイズ）に移行」

——M16を構えるスネークのUP！

――ホワイトアウト。
――ゲームへ。

【ピースウォーカー・歌い出す／シナリオデモ】

ザ・ボスＡＩ　「第一爆発時まで、２００秒」
――咆哮するピースウォーカー。
ザ・ボスＡＩ　「１９５秒」
ザ・ボスＡＩ　「１９０秒」
――頭（ヘッドパーツ）を地面につけるようにして、倒れるピースウォーカー。
ザ・ボスＡＩ　「１８５秒」
ザ・ボスＡＩ　「１８０秒」
ザ・ボスＡＩ　「１７５秒」
ザ・ボスＡＩ　「１７０秒」

ザ・ボスＡＩ　「１６５秒」

——一瞬ポッドに赤い灯りが灯る。

ザ・ボスＡＩ　「１６０秒」

ザ・ボスＡＩ　「１…、５５秒」

ザ・ボスＡＩ　「１５０、１５０、秒…」

——ポッドが立ち上がり赤い光が点灯する。

ザ・ボスＡＩ　「ヒヤクヨ…、ンジユウゴ…、ビョ…」

——再び動き出そうとするピースウォーカー。

——四肢を踏ん張るようにして立ち上がり、頭（ヘッドパーツ）を起こすピースウォーカー。

——そして、ピースウォーカー、歌い始める。

——それを凝視するスネークのＵＰ。

——F.O.

【ピースウォーカー核発射4／アーティストデモ】

◇ニカラグア・ピースウォーカー前

——モルフォ蝶に囲まれたピースウォーカーが歌っている。

スネーク「ボス…？」

ストレンジラブ「この声は…？」

——ストレンジラブが見ると、ポッドの色が赤から黄色に。

——ピースウォーカー動き出す。

ストレンジラブ「何…？」

◇ペンタゴンＮＭＣＣ（国家軍事指揮センター）

——ＮＯＲＡＤにも歌声が鳴り響く。

——突然響き渡る歌声に、国防長官代理の手が止まる。

国防長官代理「…何だ？」

統合参謀本部議長「この歌は…」

――歌が聞こえる。

◇ニカラグア・ピースウォーカー前

――歌いながら、湖へ入っていく、ピースウォーカー。

スネーク「これは…、ボス…？」

◇マザーベースモニタールーム

ヒューイ「何故だ…？」

◇ニカラグア・ピースウォーカー前

――蝶の群れがピースウォーカーを追従している。

――水に浸かっていくママルポッド。

ストレンジラブ「〝機械の中の幽霊(ゴースト・イン・ザ・マシーン)〟…？」

ストレンジラブ「偽装データを止めるために…、自らを沈めるというの？」

――湖に沈んでいくピースウォーカー。

◇NORAD司令部

NORAD司令官「見ろ！」

——NORADのレーダーからソ連のミサイルが消える。

——着弾手前で爆発（放射能汚染マーク）の代わりに「ピースマーク」が咲く！

◇マザーベースモニタールーム

——じっとモニターを見つめているヒューイ。

ヒューイ「〝機能代償〟だ…。人間の損傷した大脳が、時間と共に回復することがある。脳の他の部分が失われた機能をカバーするんだ」

ヒューイ「ママルもレプタイルも、人間の脳を模して創られている。アセンブルで、ひとつの脳になったことで、機能代償が可能になった…」

——レーダー上の地図に、ピースマークが咲き乱れる！

◇ニカラグア・ピースウォーカー前

——沈んでいくピースウォーカー。歌声がそれでも聞こえる。

ストレンジラブ「彼女(ザ・ボス)の記憶が遺っていた…」

ストレンジラブ「これが、彼女の答えなの？　…この唄が？」
ヒューイ「（ＯＦＦ）これは、明らかに論理的思考ではない…」
ヒューイ「（ＯＦＦ）頭ではなく、…こころ？」
ストレンジラブ「これが、彼女が選んだ最期(ウィル)なのね」

◇ヘリ機内

ミラー「ザ・ボスの潔白が証明された…」
――窓の霜にピースマークを指で落書きしているパス。
――ミラーは窓ガラスを見ながら。
ミラー「スネーク…、聴こえるか？　…ボスの唄が」

◇ニカラグア基地、ピースウォーカー前

――感慨深く、湖を見つめるスネーク。
ストレンジラブ「よかった。あなたは…、本当に観たのね」
ストレンジラブ「宇宙から…戦う以外の、美しさを…」

——ボスに向けて謝罪。

——湖を見つめて。

ストレンジラブ「初めて…、唄うことを選んだのね」

ストレンジラブ「あなたは最期に…、自分から銃を棄てたのね」

ストレンジラブ「わかったわ」

◇NORAD司令部

ストレンジラブ「聴こえるはず、みんなにも…」

◇ペンタゴンNMCC（国家軍事指揮センター）

ストレンジラブ「遺るはず…、彼女の意志（ウィル）が…」

◇ニカラグア基地、湖

ストレンジラブ「それが…、全てを棄ててまでも、彼女が求めたもの」

——完全に水没するピースウォーカー。

ストレンジラブ「そして、やはり、叶わなかったもの」

◇回想・花畑

——花畑に横たわるザ・ボスのUP。

ストレンジラブ「そうでしょ？　それでも、唄うしかないのね？」

◇ニカラグア基地

——湖を見ていたスネーク、敬礼。

ストレンジラブ「平和は、何処にも存在しない」

ストレンジラブ「だからこそ…、願うしかないのね」

——敬礼の手を下ろそうとし、途中で止めて、額のバンダナをほどいて湖に投げ飛ばすスネーク。

ストレンジラブ「平和という、幻想を」

——夕日が湖面を照らす。

——F.O.

【エンディング】

――黒バックに文字のみ表示。

全ての常備軍はいずれ撤廃されねばならない。
イマヌエル・カント『永遠平和のために』第一章より

【エンドクレジット】

――エンドクレジットに併せて曲が流れる。

【エンドクレジット後】

この『ＰＥＡＣＥ　ＷＡＬＫＥＲ』を伊藤計劃氏に捧ぐ

【年表（一回目）】

１９７４年11月24日
米ソ両首脳、ＳＡＬＴⅡ（第二次戦略兵器制限交渉）条約の枠組みに合意
両国の保有できる戦略核運搬システム…２，４００基
うち、ＭＩＲＶを搭載可能なシステム…１，３２０基

１９７４年12月

日本、非核三原則を唱えた佐藤元首相がノーベル平和賞受賞
1974年12月27日
ニカラグア、FSLN（サンディニスタ民族解放戦線）がソモサ派高官邸に突入
14名の政治犯を釈放させ、反ソモサ政権の担い手として認知される
1975年3月
フィゲーレス前コスタリカ大統領、CIAとの協力関係を認める
1975年4月30日
ホー・チ・ミン作戦、サイゴン陥落、南北ベトナム統一へ
1975年7月17日
ソユーズ19号、アポロ18号、軌道上でドッキング
米ソ共同による初の宇宙空間平和利用テストに成功
1979年7月19日
FSLN武装蜂起、ソモサ大統領が亡命し、『ニカラグア革命』成就
1979年12月24日
ソ連、アフガニスタン侵攻

１９８０年
ヒューイ（Ｄｒ．エメリッヒ）、第一子誕生　ＨＡＬと命名
コスタリカ、国連平和大学創設
１９８３年11月17日
モンへ大統領、米軍事基地建設を拒み、コスタリカ『永世中立』を宣言
１９８５年３月
ソ連、ゴルバチョフ政権誕生
デタント２、ポスト冷戦へ
１９８９年11月９日
ベルリンの壁崩壊、東西ドイツ統一へ
１９９４年
パナマ、コスタリカ政府の説得を受け、軍隊を廃止

——以下の一文が表示される。

第五章　天国の外側　に続く

——F.O. 後、スタッフロール。

【ミラーとスネークの会話／アーティストデモ】

――タイトルで音声だけのデモ。

ミラー　「スネーク、まだここにいたのか？」
スネーク　「さあ、帰ろう」
ミラー　「俺は、もう、戻らない…」
スネーク　「え…？」
ミラー　「断ち切れたよ」
スネーク　「スネーク、まさか…」
ミラー　「迷いは断ち切れた…」
スネーク　「何を言ってるんだ、スネーク？」
ミラー　「俺は間違っていた」
スネーク　「みんな、お前を待ってるんだぞ？　ボス」
ミラー　「…俺は彼女(ザ・ボス)に裏切られた」
スネーク　「何だって？」
　　「彼女は、最期に銃を棄てた」

スネーク　「あの時、彼女(ザ・ボス)は…、それまでの人生を、俺を含む、全てを否定した」
ミラー　「どういう事なんだ？」
スネーク　「彼女は生命(いのち)を差し出すことで、軍人としての全てを放棄した…」
ミラー　「それが、裏切りだと？」
スネーク　「俺は、彼女とは違う選択をする」
スネーク　「俺は、彼女とは違う未来を生きる」
ミラー　「それじゃ…」
スネーク　「ああ、そうだ。今日から俺は…、BIG BOSS(ビッグボス)だ」

――タイトルバック黒→黄色。
――タイトル文字白→黒。
――F.O.

【パスがマザーベースに来た／強制無線デモ】（ミラー）

※一回目のエンディング後に発生。

ミラー　「スネーク、少しいいか？」

スネーク　「なんだ？」
ミラー　「パスのことなんだが…。…知ってのとおり、彼女には身寄りがない」
ミラー　「ザドルノフ経由で奨学金をもらって、学校の寄宿舎で暮らしていたらしいんだが、ザドルノフはＫＧＢだった…」
ミラー　「奨学金とやらもＫＧＢから流れてきていたようだ。仮にザドルノフが釈放されたとしても、もうパスに金が行くことはないはずだ」
スネーク　「（同情しつつ）どうせろくな金じゃない。良かったじゃないか」
ミラー　「そこで…だ。しばらくの間、パスをここ（マザーベース）に置いてやりたい」
スネーク　「パスは何と（言っている）？」
ミラー　「『ぜひ何かの役に立ちたい』と」
ミラー　「まあ、あくまで一時的な措置だ。今回の件のショックもまだ残っている。いま彼女に、俺達以上の理解者はいないはずだ」
スネーク　「わかった。だがカズ、彼女から目を離すな」
ミラー　「え？　どういう意味だ」
スネーク　「ここの暮らしに慣れるのは、パスにとっていいことじゃないだろう」

ミラー「わかってるさ、スネーク。彼女を兵士にしようってわけじゃない。あとで本人からも話を聞いてやってくれ」

スネーク「ああ」

ミラー「それと、ストレンジラブ博士も、マザーベースに来たいと言っている」

スネーク「ストレンジラブも？」

ミラー「彼女も仕事がなくなっちまったわけだし、本国に戻るのも、いろいろとややこしそうだからな」

ミラー「詳しくは彼女に聞いてみてくれ。研究開発要員としての能力は…、…言うまでもないはずだ」

——Ｃｈａｐｔｅｒ ４ ｅｎｄ——

「米軍ミサイル基地潜入」無線集

■「米軍ミサイル基地潜入」共通

【目的再確認】任意無線

（1）
ミラー　「通信塔を目指すんだ。西へ向かってくれ」

（2）
セシール　「核が撃たれれば鳥たちもたくさん死ぬわ…」

（3）
ヒューイ　「頼む、核発射を阻止してくれ！」

■通用口

【目的確認】強制無線

ミラー　「西に見える通信塔を目指してくれ、スネーク」

【ソ連兵】強制無線

ミラー　「ソ連兵…？　アメリカの基地に？」
ミラー　「何か変だ。油断するなよ」

※ソ連兵のいる西側エリアでＣＡＬＬ

（1）
ミラー　「間違いない、そこはソ連兵が抑えたようだ。一体何があったんだ…？」

（2）
セシール　「ソ連の兵隊さん…？　確かに私を捕まえた人達とは格好が違うわね」

■メンテナンスドック（小）

【メンテナンスドックについて】任意無線

（1）
ミラー　「ここは整備用のドックらしいな。ゲートの先にある運河につながっているようだが…」

（2）
セシール　「ゴミゴミしてて嫌な所…」

（3）
ヒューイ　「設備の充実したドックだ。ＡＩ兵器の整備基地にも使えそうだ」

（4）
アマンダ　「なんて大きなドック…。これをニカラグア人民のために使えたら…」

（5）
チコ　「すげえ場所だな。森と違って迷っちまいそ

うだよ」

【警備が厳重】強制無線

ミラー「中央付近は警備が厳重だな。別のルートを考えた方がいいか…」

【通信塔へ向かえ】強制・任意無線

※閉まっているゲートの位置に来たら初回のみ鳴らす

ミラー「この先には行けそうもない…通信塔へ向かってくれ。西だ」

■屋上

【待ち伏せに注意】任意無線

※渡り廊下の前まできたら

（1）

ミラー「ここは隠れる場所が少なすぎるな…。注意してくれ」

（2）

アマンダ「嫌な予感がする…。こういう場所は待ち伏せを受けやすい…」

「管制塔へ」無線集

■「管制塔へ」共通

【ミッション目的再確認】任意無線

（1）

ミラー「核発射を止めてくれ！ 管制塔に向かうんだ！」

（2）

セシール「鳥が…海鳥が殺される…。核発射を止めて…」

（3）

ヒューイ「頼む、核発射を阻止してくれ！」

（4）

ヒューイ「管制塔に向かってくれ！」

■屋上

【方角指示】強制・任意無線

ミラー「ピースウォーカーを制御している管制塔は北東にある」

ミラー「一旦来た道を東へ戻ってくれ。そこから北を目指すんだ」

【管制塔に急げ】任意無線
※管制塔が見える位置に来たら
（1）
ミラー　「管制塔が見えるか⁉　先を急いでくれ！」
（2）
ミラー　「管制塔へ急ぐんだ！」

【落ちたら死ぬ】任意無線
※落ちたら死ぬところでCALL
（1）
ミラー　「落ちたら命はないぞ。気をつけてくれ」
（2）
セシール　「気をつけて、鳥と違って人間は飛べないのよ」
（3）
ヒューイ　「落ちるなよ…君のユニフォームに、ロケットブースターでもついてるならいいけど…」

■メンテナンスドック（小）

【増援に注意】強制無線
※渡り廊下の前まできたら
ミラー　「スネーク、ゲートから増援が来ている。管制塔はその先だ」

■メンテナンスドック（大）

【遮蔽物を作れ】強制無線
ミラー　「この地形は不利だな、裸同然だ」
ミラー　「どうにかして遮蔽物を作れないか？」
※ステージ開始後しばらくなにもしなければ
ミラー　「そのままじゃいいマトだ！　遮蔽物を作れ！　何か利用できるものはないか？」

【橋を落とせ】強制無線
ミラー　「あの橋を落とすことが出来たら敵は大混乱だろうな…」
※その後にCALLすると
ミラー　「あの橋を落として有利な状況を作れないか…？」

【ランチャー兵に注意】強制無線
ミラー　「RPGを持っている…。面倒だな」

※その後にCALLすると

ミラー　「ランチャーを持っているのか、やっかいだな」

■地下通路

【ゲートを通り抜けろ】　強制無線

ミラー　「ゲートが……！　閉まり切る前に通り抜けろ！」

※ゲートが閉まり始めた時にCALL

ミラー　「急げ！　ゲートが閉まる！！」

【敵兵出現】　任意無線

（1）

ミラー　「こんな所でRPG⁉　ムチャクチャだ！」

（2）

チコ　「遠慮いらねえぞ。あんな奴らはみんなやっつけちまえ！」

【ゲートを支えろ】　強制無線

ミラー　「ゲートを閉じさせるな！　アクションボタンだ。アクションボタンでゲートを支えるんだ！」

【仲間を通してやれ】　任意無線

※CO-OPS時、ゲートが閉じている最中に、プレイヤーがゲート付近に来たら

ミラー　「仲間が通過するのを助けるんだ！」

ミラー　「ゲートのそばでアクションボタンを押せ。ゲート閉鎖を止めるんだ！」

【大型ゲートをこじ開けろ】　任意無線

※大型ゲートが閉じた状態になった時に

（1）

ミラー　「閉じたゲートはこじ開けて進むしかない」

ミラー　「『アイコン』が表示されたらアクションボタンを連打してこじ開けろ！」

（2）

ヒューイ　「ゲートはこじ開けるしかなさそうだ」

ヒューイ　「『アイコン』表示のある場所でアクションボタンを、連打するといい」

【ボスは凄い】任意無線
※ゲートをこじ開けると
ミラー　「ゲートを素手で…？　何て言うか、もっとあんたのことを知りたくなったよ、ボス」
【エレベーターに乗れ】強制・任意無線
※昇降機前に来たら
（1）
ミラー　「早くエレベーターに乗るんだ」
（2）
チコ　「どうした？　エレベーターが怖いの？」

■ヘリポート

【ヘリに注意】強制無線
ミラー　「気をつけろ、攻撃ヘリ（ガンシップ）だ！」
【敵を全滅させろ】強制無線
ミラー　「逃げ場はないぞ、敵を殲滅するんだ！」
※その後にCALLすると
ミラー　「管制塔まであと少しだ。敵兵を残らず倒せ、管制塔に突入するんだ！」
【銃弾に注意】強制無線
※ヘリポートで室外に出たら
ミラー　「待った、出るな！　外は銃弾でいっぱいだ！」
※その後にCALLすると
アマンダ　「気をつけて！　弾に当たらないで…！」
【ヘリを撃墜しろ】強制無線
※ヘリの攻撃で壁が崩れたら
ミラー　「まずい、遮蔽物が…。ヘリをなんとかするんだ！」
※その後にCALLすると
（1）
チコ　「大変だスネーク、隠れる場所が無くなっちゃうよ！」
（2）
アマンダ　「早くあのヘリを撃墜して！」

（3）
セシール　「ああ、どんどんムかれていく…」

【ヘリ撃墜時】強制無線
ミラー　「うまいぞ！」

【増援を倒せ】強制無線
※ゲートが開いて最後の増援出現
ミラー　「見ろ、ゲートが！　最後の増援らしいな…
　　奴らを排除して突入だ！」

【敵を排除せよ】強制無線
※敵殲滅前に、ゴール（エレベータ）の境界線に触れたら
（1）
ミラー　「ロックされてる！　敵を排除しなければ上
　　に行けない！」
（2）
ミラー　「敵を殲滅するんだ！」

【北へ向かえ】強制無線
※敵を殲滅した直後
ミラー　「よし！　内部へ突入だ！　北へ向かってく
　　れ」

※敵殲滅後1分おきに
ミラー　「内部へ突入だ！　北へ向かってくれ」

【パスの祈り】任意無線
パス　「スネーク、どうか無事でいて…」

注：「対ピースウォーカー戦2」、「対ピースウォーカー戦3」無線集は、P466の【対ピースウォーカー戦無線集】を参照してください

第五章

天国の外側

【ZEKE（ジーク）にAI搭載／強制マザーベース無線デモ】（ヒューイ／ストレンジラブ）

※エンディング（一回目）後、最初のミッションクリア時に発生。

ヒューイ「スネーク、僕たちのメタルギアZEKE（ジーク）に、AIポッドが搭載された」
ヒューイ「AIの調整に手間取ってたんだけど、ストレンジラブ博士のおかげで、なんとかカタが付いた」
スネーク「あの博士が？」
ストレンジラブ「どうしたスネーク？　驚くこともないだろう」
スネーク「…いいのか？　俺達には国家の後ろ盾がない。国家の介入に対する抑止力が必要だ。それがZEKE（ジーク）だ。場合によっては…」
ストレンジラブ「抑止力自体を否定したわけではない。国家が抑止力に頼るのが問題なんだ」
ストレンジラブ「国家が抑止力に依存すると、国民の共同体であるはずの国家という組織が、国民に犠牲を強いるようになる」
ストレンジラブ「そもそも国家という存在自体が、人間にとって害悪なんだ。だから私は、『国家に帰属しない軍隊』に可能性を感じている」
ストレンジラブ「だが、お前たちが国家と距離を置くためには、やはり力が必要だろう。そのため

の協力は、惜しまないつもりだ」

スネーク「…それはありがたい話だ」

ストレンジラブ「それと、私はあくまでヒューイの手助けをしただけだ。ZEKE(ジーク)に〝彼女〟のようなAIを、搭載する気はない」

スネーク「ああ、それでいい」

【ザドルノフ脱走1／強制マザーベース無線デモ】(ミラー)

――エンディングの後、一定フラグ(クリアミッション数)で、ザドルノフは脱走。

――捕虜になったザドルノフはいつまでも改心せず、脱走する(手助けしたのはパス)。

――実はこれは真のボスであるパスの目くらまし。この間にメタルに核を搭載、改造。

ミラー「スネーク、大変だ。拘留していたザドルノフが、姿を消した」

スネーク「何だって?」

ミラー「恐らく、義手をバーナーのように使って鉄格子を焼き切ったんだろう。だが奴に取り付けた発信器で、逃げた場所(エリア)は絞り込めた」

ミラー「新ミッションを用意した。KGBの工作員、ザドルノフを見つけ出してくれ!」

――NEXTミッションへ（ザドルノフ捜索）。

【ザドルノフ捜索／ミッション前強制無線デモ】（ミラー）

ミラー　「スネーク。拘留していたザドルノフが姿を消した」
ミラー　「ザドルノフを見つけ出してくれ！」

――章タイトル表示。

【章タイトル】第五章　天国の外側

――ゲームへ。
――リアルタイム無線（P420参照）。

【ザドルノフ捜索／ミッション後強制無線デモ】（ミラー）

ザドルノフ　「クハ…見つかったか」
スネーク　「ここからは逃げられんぞ。どうするつもりだった？」

ザドルノフ　「ちょっとした…〝散歩〟だよ」
スネーク　「カズ、ザドルノフを発見した。これより帰還する」
ミラー　「了解した、スネーク」

【ザドルノフ脱走2／強制マザーベース無線デモ】（ミラー）

ミラー　「スネーク、まずい。拘留していたザドルノフが、姿を消した」
スネーク　「おい、またか⁉」
ミラー　「おかしいんだ。義手も封じて身体検査も念入りにしていたし、警備も強化していた」
スネーク　「誰かが手引きを？」
ミラー　「まさか…。とにかく新ミッションを用意した。KGBの工作員、ザドルノフを見つけ出してくれ！」

——NEXTミッションへ（ザドルノフ捜索2）。

【ザドルノフ捜索2／ミッション前強制無線デモ】（ミラー）

ミラー「スネーク、拘留していたザドルノフが、また姿をくらました」
ミラー「ザドルノフを見つけ出してくれ！」

——ゲームへ。

——リアルタイム無線（P420参照）。

【ザドルノフ捜索2／ミッション後強制無線デモ】（ミラー）

スネーク「カズ、ザドルノフを確保した」
ザドルノフ「まさか、見つかるとは…」
ミラー「了解。ありがとう」

【ザドルノフ脱走3／強制マザーベース無線デモ】（ミラー）

ミラー「スネーク！　拘留していたザドルノフが、姿を消した」

スネーク　「またか！」

ミラー　「新ミッションを用意した。ＫＧＢの工作員、ザドルノフを見つけ出してくれ！」

――ＮＥＸＴミッションへ（ザドルノフ捜索３）。

【ザドルノフ捜索３／ミッション前強制無線デモ】（ミラー）

ミラー　「スネーク、拘留していたザドルノフが、また姿をくらました」

ミラー　「ザドルノフを見つけ出してくれ！」

――ゲームへ。

――リアルタイム無線（Ｐ420参照）。

【ザドルノフ捜索３／ミッション後強制無線デモ】（ミラー）

スネーク　「カズ…。ザドルノフいた」

ザドルノフ　「くそ…今度こそ」

ミラー　「わかった、スネーク。さすがだな」

【ザドルノフ脱走4／強制マザーベース無線デモ】（ミラー）

ミラー　「あー…、スネーク」
スネーク　「カズ！　…まさかザドルノフか」
ミラー　「ああ。…見張りが目を離した隙に、ドロンだ」
スネーク　「はあ…。その見張りを見張っておけ」
ミラー　「そいつは女性陣に…パスに薦められて…持ち場を離れて手料理を食べていたらしい。〝でれでれ〟とな‼」
スネーク　「ジェラシーか」
ミラー　「とにかく新ミッションを用意した。ＫＧＢの工作員、ザドルノフを見つけ出してくれ！」
スネーク　「はあ…」

――ＮＥＸＴミッションへ（ザドルノフ捜索4）。

【ザドルノフ捜索4／ミッション前強制無線デモ】（ミラー）

ミラー　「スネーク、拘留していたザドルノフが、またいなくなった」

ミラー　「ザドルノフを見つけ出してくれ！」

――ゲームへ。

――リアルタイム無線（P420参照）。

【ザドルノフ発見1／アーティストデモ】

――村の小屋、ドアノブを壊して室内に入るスネーク。手にはハンドガン。

――部屋の隅にザドルノフがいる。

ザドルノフ　「見つかった！」

【ザドルノフ捜索4／ミッション後強制無線デモ】（ミラー）

スネーク　「カズ、ザドルノフを確保した」

ザドルノフ　「油断した…」

ミラー　「了解。連行を頼む」

【ザドルノフ脱走5／強制マザーベース無線デモ】（ミラー）

ミラー　「スネーク…。信じられんが…」
スネーク　「ああ」
ミラー　「ザドルノフがいなくなった」
スネーク　「…おいカズ。お前、わざとやってるんじゃないだろうな」
ミラー　「待て。モグラ狩りをプロデュースするほど、ヒマじゃない」
ミラー　「それにしても恐ろしくなってきた。奴の脱獄は良いセンスだ」
スネーク　「本当に奴の力なのか…⁉」
ミラー　「とにかくザドルノフの痕跡を追って、潜伏場所を絞り込み、新ミッションを用意した」
ミラー　「KGBの工作員、ザドルノフを見つけ出してくれ！」

――NEXTミッションへ（ザドルノフ捜索5）。

【ザドルノフ捜索5／ミッション前強制無線デモ】（ミラー）

ミラー　「スネーク、拘留中のザドルノフが、またしても脱走した。ザドルノフを見つけ出してくれ！」

――ゲームへ。

――リアルタイム無線（P420参照）。

【ザドルノフ発見2／アーティストデモ】

――入り口から山腹トンネルの中に入ってくるスネーク。

――トンネルの両側は駐車場になっており、搬入トラックがずらりと並んでいる。

――隅にラバがいる場所もあり、4、5頭のラバがいる。

スネーク　「カズ、施設内部に潜入した。トラックがたくさん並んでいる」

ミラー　「ザドルノフがその辺りにいそうだ。よく探してみてくれ」

【アーティストデモゲーム】ナンバープレート捜索画面

――左右でズーム。ズームにするとナンバーがクローズアップされる。アナログキーで選択。○ボ

タンで決定。
――正解のナンバープレートが画面上にあるときに○ボタンを押すと、カット変わり、トラックの中を確認するスネーク。
――荷台の奥に隠れていたザドルノフを発見！

ザドルノフ　「くそう、見つかった！」

【ザドルノフ捜索5／ミッション後強制無線デモ】（ミラー）

スネーク　「カズ、いたぞ。奴を確保した」
ザドルノフ　「いや今回は惜しかった…」
ミラー　「残念だったな。では、回収に向かう」

【ザドルノフ脱走6／強制マザーベース無線デモ】（ミラー）

ミラー　「スネーク！　拘留していたザドルノフが、またいなくなった」
スネーク　「ああ」

ミラー　「…スネーク⁉　拘留していたザドルノフが、またいなくなった！」
スネーク　「ああ」
ミラー　「お願いだ、聞いてくれ。拘留していたザドルノフが、またいなくなった」
スネーク　「で？」
ミラー　「考えたくはないが…、内通者がいるのかもしれん」
スネーク　「はあ…。それにしても奴の目的はなんだ？」
ミラー　「わからない。ただの抵抗とは思えんしな」
スネーク　「奴をこれ以上、ここに拘留しておくのも…。仲間にならないんなら…！」
ミラー　「ああ、ロシア出身者達の士気を考えての拘留だったが…、わかった、少し考えてみよう」
スネーク　「単に隠れん坊を楽しんでいるんならいいが…」
ミラー　「新ミッションを用意した。ＫＧＢの工作員、ザドルノフを見つけ出してくれ！」

――ＮＥＸＴミッションへ（ザドルノフ捜索６）。

【ザドルノフ捜索6／ミッション前強制無線デモ】（ミラー）

ミラー　「スネーク、ザドルノフが逃げ出した。見つけ出してくれ！」

——ゲームへ。

——リアルタイム無線（P420参照）。

【ザドルノフ捜索6／ミッション後強制無線デモ】（ミラー）

スネーク　「カズ、ザドルノフを発見した」

ミラー　「お見事、さすがだ」

ザドルノフ　「アァ…この私としたことが！」

スネーク　「はあ…」

【ザドルノフ脱走7／強制マザーベース無線デモ】（ミラー）

ミラー　「スネーク…、…まただ」

スネーク「……」

ミラー「スネーク！」

ミラー「俺だって報告したかないさ。スネーク！　お願いだ聞いてくれ！」

スネーク「はあ…」

スネーク「『拘留していたザドルノフがまたいなくなった』!?　…あの脱走フェチめ!!」

ミラー「内部に協力者がいるのは確かだ。だが、調べようがない」

スネーク「は、人騒がせな奴だ。今度はどのあたりだ」

ミラー「それが、発信器も気づかれて、破棄された」

ミラー「どこにいるのか全くわからない。スネークぅ…。さ、さ、…探せる？」

スネーク「…放ってはおけない。他への示しもある」

ミラー「その通りだな。位置が特定できないならミッションの追加もできない」

ミラー「頼む、スネーク。ザドルノフを見つけ出してくれ！」

――ミッションがミッション選択画面で出てこない。

――ザドルノフは、マザーベースチュートリアルステージ（訓練所）にいる。

【有人ZEKE(ジーク)起動前／シナリオデモ】

※チュートリアルステージ（訓練所）でザドルノフを発見すると発生。

——M16を構えながら、ザドルノフに近づくスネーク。

——ザドルノフ、柱に身を隠しながら、

ザドルノフ 「BIGBOSS(ビッグボス)」

——そう言うと、柱の陰から飛び出して、PSMを撃つザドルノフだったが、命中せず。

——スネーク、M16を撃つ！ ザドルノフに命中！

——倒れるザドルノフ。

ザドルノフ 「私の役目は終わった…」

スネーク 「何だって？」

ザドルノフ 「勝利のV…、ロケットピース！」

——義手でVを作る。手の甲を向ける。と、義手がロケットパンチでスネークに向かってくる！

——スネーク、柱の陰に身を隠して回避。床の上に「Vサイン」。手のひらがみえている（ピース）。

——外してがっくりのザドルノフ、息絶える。

スネーク　「カズ、ザドルノフを発見。止むを得ず始末した」
ミラー　「脱走者の最期か…」
スネーク　「どうも引っかかる。仲間がいるのかもしれん」
ミラー　「…やはり内部に誰かが。…ん⁉」

——メタルギアZEKE(ジーク)の駆動音。

——地響き。

スネーク　「どうした？」
ミラー　「…ZEKE(ジーク)が動いてる！」
スネーク　「何だって！」
ミラー　「誰かが乗り込んでいるのが見える…」
ミラー　「スネーク、すぐにメタルギアZEKE(ジーク)のデッキに来てくれ！」

——倒れたザドルノフをそのままに、ZEKE(ジーク)のデッキに走り出すスネーク。

——F.O.

◇マザーベース、メタルギアZEKE(ジーク)の甲板

――メタルギアZEKE（ジーク）の駆動音。
――駆けつけるスネーク＆ZEKE（ジーク）のズームUP！

スネーク　「お前は！」

――コクピットのパス。
――メタルギアZEKE（ジーク）の駆動に併せてコクピットは揺れている。

パス　「遅かったね…、BIGBOSS（ビッグボス）」
スネーク　「パス…⁉」
パス　「フフフ…」
スネーク　「何をしている？　危ないから下りろ」
パス　「危ないのはどっちかな」
ミラー　「パスの様子がおかしい。いつもと違う」
パス　「私は正常よ。そう、本当（ネイキッド）の私を見て」

――ボス名表示。

【メタルギアZEKE　汎用換装二足歩行戦機・有人改造型】

スネーク　「カズ、ZEKE（ジーク）を止めろ」

ミラー　「駄目だ、制御が利かない」

スネーク　「どうやって動いてる⁉」

パス　「私が改造を…。これは元来、人が操るべきなの」

——レバーを引くと、ZEKE（ジーク）が歩き出す。

スネーク　「改造だって？　パス、君は一体…」

パス　「意外とメカ好き？」

ミラー　「そうか、ザドルノフの脱走は囮だったのか‼」

スネーク　「パス！　そいつをどうするつもりだ⁉」

パス　「返して貰うの」

ミラー　「返す？　誰に⁉」

パス　「私達の指導者、…CIPHER（サイファー）」

スネーク　「CIPHER（サイファー）…？」

パス　「この兵器は、CIPHER（サイファー）の創造物よ…」

スネーク「パス！　そいつから降りろっ！」

パス「うるさい！　私はパシフィカ・オーシャン」

——左右のレバーを引くと、咆哮を上げるZEKE(ジーク)！

パス「名前も、年齢も、計画も、CIPHER(サイファー)に与えられた。私はこの計画のためだけに、この世に活かされる」

——上あごに指を入れ、パックに入った嗅ぎ煙草を舌に乗せる。

——あかんべえのように舌を出すと、パックをペッと吐き棄てる。

パス「嗅ぎタバコも…、見え透いた平和(パス)の使者も、お馬鹿な夢見る10代(ティーン)のフリも、これでお終い！」

スネーク「パス、まさか…」

パス「その呼び方はやめろっ！　反吐が出る！」

パス「全ては予定通り。これで漸く、本来のピースウォーカー計画が完遂されるの」

スネーク「本来の…、計画だと⁉」

——F.O.

【有人ZEKE（ジーク）起動後／アーティストデモ】

——回想：MGS3のラストシーン。

パス　「昔むかし、ザ・ボスという英雄を敬愛する、二人の若者がいました」

パス　「その母なる空（CIPHER）を突然亡くした二人は、悲しみを受け入れることが出来ず、英雄の遺志を継ごうとしました」

パス　「ところが二人はそれぞれの解釈を分かち、果ては対立し、彼らの出発点であったゼロは二つに分裂しましたとさ」

——左にスネーク、右にパスの顔窓。

スネーク　「（むぅ）」

パス　「それがあなたの過ちの『はじまり、はじまり』…」

——パスのUP！

パス　「このままじゃ『幸せに暮らしました（ハッピーエバーアフター）』にはならない」

パス　「だから、CIPHER（サイファー）の意志に従いなさい！」

――ZEKE(ジーク)のモニターに映るパスの左手。

パス　「国境を持たない軍隊が戻るべき場所は、〝国境のない国家〟…、〝国境なき統治世界〟」

スネーク　「国境なき統治世界…？」

パス　「もうすぐ、この冷戦は崩壊し、次に電子防諜(シギント)の時代が始まる」

パス　「国家安全保障局(NSA)、中央保安部(CSS)、国家偵察局(NRO)、国防情報局(DIA)、とかとかとか…」

パス　「対立していた、これらの諜報機関(インテリジェンス・コミュニティ)はやがて、電子の世界に統合される」

パス　「CIPHER(サイファー)は全ての情報を集め、人々の無意識下で世界を見張り、意識を誘導する」

パス　「誰も逆らえない！　人類の歴史で初めて、世界をひとつの意志(WILL)が統治するの」

パス　「あなた達は、それが完成するまでの間、それらを守る力になる。カリスマと軍事力で時代を欺き、CIPHER(サイファー)の抑止力となるのよ」

パス　「それを受け入れるのなら、部隊もZEKE(ジーク)も今まで通り、あなたの管轄下に置かせてあげる」

スネーク　「それが提案か？」

パス　「ザ・ボスは、生業である銃を投げ出した」
パス　「その教え子であるBIGBOSS(ビッグボス)、あなたは銃を棄てることが、いつまでも出来ない。銃を手放すことが怖いからよ」
スネーク　「俺は、戦うために創られた。俺は銃そのものだ」
パス　「そうなの⁉　じゃあ、ZEKE(これ)も銃だってわけっ⁉」
パス　「下手な欺瞞ねっ！　こいつは、あなたの恐怖心が生み育てた〝怪物(メタルギア)〟じゃないのっ！」
パス　「でも、CIPHER(サイファー)は違う。CIPHER(サイファー)は銃を管理することを思いついた」
スネーク　「銃を管理する？」
パス　「そう。抑止力とは異なる、平和幻想への最後のアプローチ…」
スネーク　「力を管理など、出来るはずはない」
パス　「ぶっぶー！　では、交渉決裂！　残念でしたっ！　提案は終わり。これが最後通牒よ」
パス　「ZEKE(ジーク)はもう、核攻撃体勢に入った」
スネーク　「何…⁉」

パス「お前達が創ったこの兵器で、これから合衆国東海岸を核攻撃する！」

スネーク「馬鹿な！　狙いは何だ！」

パス「ピンポーン！　交渉が決裂した場合の答えっ！」

――ZEKE（ジーク）のコクピットが液体で満たされていく（操縦時の衝撃から身体を守るための液体）。

パス「国家に帰属しない、流浪の愚連隊（ノーマッド）が、どれだけ危険な存在かを、世界に知らしめる！」

パス「あなた達は汚れた名を歴史に遺し、この世から消える」

パス「あなた達は英雄ではない！　核を見境なく撃とうとする過激な武装カルト集団ってことになるの！」

パス「そして、その事実が、世論が、国際社会が、新たなカルト勢力を創らせない、抑止力になるの」

パス「さあ、気に入った⁉　私のシナリオが、BIGBOSS（ビッグボス）！」

パス「所詮（しょせん）、平和なんて、まぼろしよ！　ゲームはゲームっ！　ゲームは〝勝つか負けるか〟！」

パス「結局、戦うしかないのよっ！」

パス「私を阻止出来るなら、やってみろ！」

パス「ピースマークの『ピース』は、勝利(VICTORY)の『V』なのよ！」

――逆ピースマーク（手の甲を相手に見せる）をして微笑むパス。

パス「セイ、ピース！」

【有人ZEKE(ジーク)戦前／シナリオデモ】

――起動するメタルギアZEKE(ジーク)。

――身構えるスネーク。

ミラー「パスは核を撃つ気だ！」

ミラー「スネーク、全力で阻止するんだ。指揮を執ってくれ！」

――スネークの前にそびえるZEKE(ジーク)。

パス「さあ、止めてみろ！」

――M16を構えるスネークのUP！
――ホワイトアウト。
――NEXTミッションへ（対メタルギアZEKE戦）。

【対メタルギアZEKE戦／強制マザーベース無線デモ】（ミラー）

――ミラーの顔窓表示。
ミラー「パスは核を撃つ気だ！」
ミラー「スネーク、全力で阻止するんだ。指揮を執ってくれ！」
パス「さあ、止めてみろ！」
――ホワイトアウト。
――ゲームへ。

【有人ZEKE戦後／シナリオデモ】

――マザーベース甲板。
――スパークするZEKEコクピット。

――F.O.

【有人ZEKE（ジーク）戦後／アーティストデモ】

――ZEKE（ジーク）コクピット内のパス。

パス　「ダメ…、もうZEKE（ジーク）を制御出来ない。…これまでね」

パス　「BIGBOSS（ビッグボス）、いい…？　お前達という抑止力が必要とされる以上、真の平和など訪れない」

――ZEKE（ジーク）の前に立つスネーク。

パス　「ひとときの平和幻想の中で、お前達は利用され、陵辱され、最後には、社会悪として棄てられる」

パス　「それがお前達が選んだ、道だ！」

――ZEKE（ジーク）コクピット、フラッシュ！

――コクピット爆発、海に投げ出されるパス。

パス　「(悲鳴)」

——ZEKE本体は見せない。
——ホワイトアウト。
——見届けるスネークの傍らにミラー。

スネーク　「パス…」

——F.O.
——リザルト画面表示。

【対ZEKE戦訓練開始／強制マザーベース無線デモ】（ヒューイ）

ヒューイ　「まさか、あの子が工作員だったなんて…」
スネーク　「確かに意外だった。上手く演じたもんだ。部隊の全員が騙されていた。…俺も含めてな」
スネーク　「今思えば疑うべきだったが…」
ヒューイ　「スネーク、過ぎたことを悔やんでも仕方ない」
ヒューイ　「それより、こんなことがあったときのために、今後は対ZEKE戦の訓練もして

おくのはどうかな？」

スネーク　「（あまり気乗りがしない）」

ヒューイ　「それじゃ、僕はこれからストレンジラブ博士と話があるんだ。ＺＥＫＥ（ジーク）の整備も終わってないし」

スネーク　「ヒューイ……！」

【真のエンディング／アーティストデモ】

――マザーベースデッキ。既にＺＥＫＥ（ジーク）を収納した後。

――ストレンジラブがサングラスをかけて、ＡＩを調べている。

――そこへ電動車椅子がフレームイン。

――ヒューイの全身は見えない。

ヒューイ　「どうだい？　ＺＥＫＥ（ジーク）は？」

――ストレンジラブ、顔を合わせずに資料に目を通している。

ストレンジラブ　「姿勢制御ＡＩはバックアップしてたから…、歩けるはず」

ヒューイ　「そうか…、そりゃ、よかった」

ストレンジラブ「あとは、本人次第…」

——ヒューイ、さらに近づく。制するストレンジラブ。

ストレンジラブ「ストップ！　博士、それ以上、近づかないで！」

——ヒューイ、哀しそうな顔。

ヒューイ「ちょっと、聞いていいかな？　君…、僕のこと、嫌い？」

——ストレンジラブ、顔を初めて上げる。サングラスを上げるストレンジラブ。

ストレンジラブ「それって…、コクってるの？」

ヒューイ「そんなんじゃ…」

——ストレンジラブの瞳に、顔を赤らめる、後退するヒューイ。

——ヒューイに近づくストレンジラブ。車椅子に両手を置いて、

ストレンジラブ「そう、…何だ、私、ちょうど失恋したところだったんだけど」

——ヒューイの顎を取るストレンジラブ。

ヒューイ「ええ!?」

ストレンジラブ「私が好きなのは、自立した人」

ストレンジラブ「私が好きなら、歩いて来なさい。奇跡を起こせるはず」

——サングラスをヒューイの顔にかけると、笑みを浮かべるストレンジラブ。

ストレンジラブ「〝恋は盲目〟ってね」

ストレンジラブ「待ってるわ、…気長にね」

——歩き去るストレンジラブ。

——ヒューイ、手でVサインを作ると逆さまにして、夢描くように車椅子の肘置きを歩かせる（ピースが歩く。ピースウォーカー）。

——ヒューイ、サングラスを外して、空を見上げる。

——ヒューイの頭上をヘリが通り過ぎる。

【真のエンディング／シナリオデモ】

——前のヘリの映像に合わせる。

——パンダウンして、マザーベースデッキ上に停止しているヘリ。

——そのヘリに向かって歩くスネーク。

——呼び止めるミラー。

ミラー　「スネーク!」

——F.O.

——F.I.

——マザーベースデッキを遠景で。

——スネークに近づいてくるミラー。

——葉巻に火をつける際、ザドルノフの指で火をつけるスネーク。

——「Vサイン」のまま。Vサインの指先から火が出る(ブラック)。

ミラー　「パスが最後に言っていたCIPHER(サイファー)とは〝空〟の意味の〝暗号〟…」

ミラー　「もう一つの意味は…」

スネーク　「〝零(ゼロ)〟…」(察しはついていた)

ミラー　「暗号(CIPHER)を駆使した電子諜報(シギント)…、その中心にいるのが零(ゼロ)…ってことか」

スネーク　「カズ…?」(ミラーの演技に感づく)

ミラー　「済まない、ボス。あんたに謝ることがある」

ミラー　「冷静に聞いてくれるか？」
スネーク　「（ため息）…ああ」
ミラー　「教授の事も、パスの事も…、俺は最初から彼らの正体を知ってた」
スネーク　「カズ（怒りがたまっていく）」
ミラー　「利用させて貰ったんだ」
スネーク　「じゃあ、彼らをコロンビアまで連れてきたのはお前なのか？」
ミラー　「そうだ。パスはＣＩＡだけじゃない。裏でＫＧＢにも通じていた」
ミラー　「そしてＣＩＰＨＥＲ（サイファー）という謎の組織にも…。つまり、彼女はトリプルクロスだった」
スネーク　「そこまで知っていて…！？」
ミラー　「待ってくれ」
ミラー　「いいか、あいつらのお陰で、マザーベースはここまで大きくなった」
ミラー　「俺たちの創り出したこの傭兵ビジネスは、いつか世界の経済を支える新しい力になるはずだ（戦争経済）」
スネーク　「そもそもの、お前の狙いはそれなのか？」
ミラー　「（自信ありげに）…いずれ冷戦は終わる。やがて地域紛争やテロの時代がくるだろう」

ミラー　「反共の時代から、反テロの時代に変わる」
ミラー　「その時、軍隊は国家から分離し、戦争は商売になる」
ミラー　「俺たちは俺たちの価値を売る。俺たちを必要とする依頼人は世界中にいる」
スネーク　「時代の先魁となる。これこそ、ひとつの革命だ。そうだろ？」
ミラー　「カズ、そう…、うまくはいかない」（苦渋）
スネーク　「どういう意味だ？」
ミラー　「今回の事件で、俺たちは、旧体制の歴史に関与してしまった」
スネーク　「東西の諜報機関や政府を経由して、俺たちの存在は世界中に知られたはずだ」
ミラー　「あのCIPHERという組織も含めて…」
スネーク　「俺たちは時代に干渉してしまった。世界の、冷戦下の抑止システムに」
スネーク　「何処にも属さない軍隊が、触れてはいけない、国際情勢に介入してしまったんだ」
ミラー　「ああ、つまり、俺たちは？」
スネーク　「追われることになる」
ミラー　「俺たちを快く思う連中ばかりじゃない？」
スネーク　「そうだ。俺たちは世界の軍事均衡を狂わせた」

ミラー　「俺たちを歓迎しない者達は、国家に帰属しない軍隊を排除しにくる?」
スネーク　「近いうちにな。もはや、後戻りはできない」
スネーク　「俺たちは古い抑止システムに食い込んだ歯車だ」
スネーク　「時代の形が変わらない限り、歯車は騒音を立てる」
ミラー　「では、俺たちは誰と戦う事に?」
スネーク　「世界の均衡を戻そうとする、俺たちの存在を許さない、全ての規範…」
ミラー　「規範って、何処の?」
スネーク　「俺たちを追ってくるのは、決まった国やイデオロギーじゃない」
ミラー　「それじゃ?」
スネーク　「俺たちは、『時代』という怪物と戦う事になる」
スネーク　「10年前、ボスは『時代』に拒絶され…、殺された」
スネーク　「そして今度は、俺たちが試されることになる」
スネーク　「『時代』が俺たちを排除するか?　それとも俺たちに『時代』が協調するか?」
スネーク　「それは善悪も勝ち負けもない、…孤独な戦いになる」
スネーク　「俺たちが21世紀まで生き残れるか?　否か?　ビジネスを問うのはそれからだ」

ミラー「わかった。あんたとその結末(エンディング)を見届けよう」

――お気に入りの葉巻を咥えるスネーク。一服して、

スネーク「カズ、世界中が俺たちを追ってくる。さあ、みんなを集めろっ！」

――うなずくミラー。

――ヘリに向かって歩いて行くスネークの後ろ姿。

――F.O.

【年表（二回目）】

１９７４年11月24日
米ソ両首脳、ＳＡＬＴⅡ（第二次戦略兵器制限交渉）条約の枠組みに合意
両国の保有できる戦略核運搬システム…２，４００基
うち、ＭＩＲＶを搭載可能なシステム…１，３２０基

１９７４年12月
日本、非核三原則を唱えた佐藤元首相がノーベル平和賞受賞

１９７４年12月27日

ニカラグア、ＦＳＬＮ（サンディニスタ民族解放戦線）がソモサ派高官邸に突入
14名の政治犯を釈放させ、反ソモサ政権の担い手として認知される

１９７５年３月
フィゲーレス前コスタリカ大統領、ＣＩＡとの協力関係を認める

１９７５年４月30日
ホー・チ・ミン作戦、サイゴン陥落、南北ベトナム統一へ

１９７５年７月17日
ソユーズ19号、アポロ18号、軌道上でドッキング
米ソ共同による初の宇宙空間平和利用テストに成功

１９７９年７月19日
ＦＳＬＮ武装蜂起、ソモサ大統領が亡命し、『ニカラグア革命』成就

１９７９年12月24日
ソ連、アフガニスタン侵攻

１９８０年
ヒューイ（Ｄｒ．エメリッッヒ）、第一子誕生　ＨＡＬと命名

コスタリカ、国連平和大学創設
1983年11月17日
モンへ大統領、米軍事基地建設を拒み、コスタリカ『永世中立』を宣言
1985年3月
ソ連、ゴルバチョフ政権誕生
デタント2、ポスト冷戦へ
1989年11月9日
ベルリンの壁崩壊、東西ドイツ統一へ
1994年
パナマ、コスタリカ政府の説得を受け、軍隊を廃止
1995年
BIGBOSS、OUTER HEAVEN（アウターヘブン）蜂起
F.I./F.O. で以下の一文が表示される。

2005年　ミラー、自宅で何者かに殺害される

【エンドクレジット】

――エンドクレジットに併せてエンディング曲が流れる。

【BIGBOSS演説】

――タイトルを背景に、音声だけのカセットを再生している感じ。

――マイク越しの残響（講堂やホールのような場所で演説しているような）。

スネーク「俺達は、国を棄てる。互いの祖国を棄て、この惑星と一体になる」

スネーク「そこには、国も思想も、イデオロギーもない」

スネーク「俺達は必要とされる土地へ赴き、俺達のために戦う。国のためでも、政府のためでもない」

スネーク「俺達は必要とされているからこそ、戦う」

スネーク「そして、持てぬモノ達の〝抑止力〟となる」

スネーク「俺達は国家に縛られない軍隊…。時代が俺達の目的を決める」

スネーク「だが、俺達はカネで買われる事になる」

スネーク「時代が望めば、様々な革命や犯罪、テロに手を貸すことになるかもしれない」

スネーク「そうだ、俺達は地獄へ堕ちる」
スネーク「しかし、俺達にここ以上の居場所があるか？」
スネーク「ここは俺達にとっては、唯一無二の家」
スネーク「天国（ヘブン）でもあり、地獄（ヘル）でもある」
スネーク「それが俺達の『天国の外側（アウター・ヘブン）』だ」

――タイトル背景色、黒から赤に。
――タイトル文字も白から黒に。
――F.O.

「ザドルノフ捜索」無線集

注：「ザドルノフ捜索」から「ザドルノフ捜索6」および「ザドルノフ捜索7（ミッション名無し）」は、共通する無線が多いため、この項ですべて扱うことにしました。特定のミッションでしか出ないものに関しては、無線名の下か、条件文中に、ミッションの数字（例：「ザドルノフ捜索」であれば〔1〕）を入れています。

【ザドルノフ捜索目的確認】強制・任意無線〔1〕〔2〕〔3〕〔4〕〔5〕〔6〕

（1）
ミラー　「ザドルノフを探してくれ、スネーク」

（2）
ミラー　「ザドルノフはどこだ…」

【ザドルノフ捜索ヒント1】強制・任意無線〔1〕〔2〕〔3〕〔6〕

※ミッション開始後一定時間経過してもクリアできない場合

（1）
ミラー　「物陰あたりが怪しいな…ザドルノフはいないか？」

（2）
ミラー　「隠れることができる場所は限られているはずだ。物陰を探ってみろ」

【ザドルノフ捜索ヒント2】強制・任意無線〔2〕〔3〕〔4〕〔5〕〔6〕

※ミッション開始後一定時間経過してもクリアできない場合

（1）
ミラー　「ザドルノフはどこへ行った？　散歩好きにもほどがある」

（2）
ミラー　「怪しい場所はくまなく探すんだ。奴は脱走のプロだからな」

【ザドルノフ捜索ヒント3】強制・任意無線〔4〕〔5〕〔6〕

※ミッション開始後一定時間経過してもクリアできない場合

（1）

ミラー 「奴は脱走が生き甲斐なのか?」

〔2〕

ミラー 「やれやれ…ザドルノフなら、強制収容所(ラーゲリ)からでも脱走できそうだ」

【くまなく探せ】強制・任意無線〔1〕〔2〕〔5〕

※正解エリアにいて、ミッション開始後一定時間経ってもクリアできない場合

〔1〕

ミラー 「この地域(エリア)を、くまなく探してみるんだ」

〔2〕

ミラー 「この地域(エリア)が怪しい…。もっと探してみてくれ」

〔3〕

ミラー 「ザドルノフがいるなら、この地域(エリア)じゃないか?」

【正解エリアだ】強制・任意無線〔1〕〔2〕〔5〕

※正解エリアにいて、ミッション開始後長時間経ってもクリアできない場合

ミラー 「ザドルノフはこの地域(エリア)にいる! ほぼそうだ!」

【フルトン回収せよ】強制無線〔1〕〔2〕〔3〕〔6〕

ミラー 「ザドルノフを見つけ出して、フルトン回収するんだ」

【ザドルノフ発見時】強制無線〔6〕

ミラー 「そいつをフルトン回収するんだ」

【ザドルノフへの反応1】任意無線〔1〕〔2〕〔3〕〔4〕〔5〕〔6〕

〔1〕

アマンダ 「あいつを探して! 物陰も見逃さないで!」

〔2〕

チコ 「んーっ、パスを騙したバッカ野郎。絶対見つけて連れ戻してくれよ!」

〔3〕

ストレンジラブ 「さっさと奴を始末しないからこうなるんだ」

【ザドルノフへの反応2】任意無線〔4〕〔5〕〔6〕
チコ　「あいつも冒険に出たいんだよ、きっと」
【忙しいパス】任意無線〔3〕〔4〕〔5〕
※（低確率）
パス　「あ、スネーク？　ごめんなさい、今ちょっと手が離せないの」
【ザドルノフは屋内】任意無線〔4〕
〔1〕
ミラー　「何か怪しい物音は聞こえないか？」
〔2〕
ミラー　「怪しい場所はくまなく探すんだ！」
〔3〕
ミラー　「屋外は敵兵の警戒が厳しそうだ。となると、奴の居場所は…」
【ザドルノフは家の中】強制・任意無線〔4〕
※ミッション開始後一定時間経過してもクリアできない場合
〔1〕
ミラー　「家の中は探したか？　中を覗いてみろ」
〔2〕
ミラー　「あと隠れる事が出来るとしたら、家の中くらいか…」
〔3〕
ミラー　「家の中を覗くには、青いドアの前でアクションボタンだ」
〔4〕
ミラー　「ザドルノフは家の中だ。ほぼそうだ！」
【ザドルノフは火口基地】強制・任意無線〔5〕
※ミッション開始後一定時間経過してもクリアできない場合
ミラー　「まだザドルノフを探していない地域（エリア）はないか？　よく思い出せ」
【奥に誰かいる】強制・任意無線〔7〕
※〔6〕終了後、訓練所に入った直後に
〔1〕
ミラー　「奥に誰かいるようだ。調べてくれ」
〔2〕

ミラー　「ん？　奥に誰か倒れているようだ。様子を見に行ったほうがいい」

注：「対メタルギアZEKE戦」無線集は、P470の【対メタルギアZEKE戦無線集】を参照してください。

別章

METAL GEAR SOLID PEACE WALKER

この別章では、マザーベースの状況に応じて入る「マザーベース無線」や、メニュー「DEVELOP」の「OTHERS」で読むことができる「ヒューイの手紙」、それから《狩猟クエスト》関連デモを紹介します。

■強制マザーベース無線デモ

【フルトン回収促し／マザーベース無線】（ミラー）

※「チコ救出」クリア後に「開発班」と「糧食班」が一定のレベルに達していないと

ミラー　「スネーク！　武器やアイテムの開発が進んでいない。現地の兵士をもっとフルトン回収してくれ」

※「バリケード破壊」クリア後に「開発班」と「糧食班」が一定のレベルに達していないと

ミラー　「スネーク…。マザーベースで武器やアイテムの開発を進めないと、今後のミッション達成が厳しくなっていくと思うぞ」

※「研究施設（ラボ）へ」クリア後に「開発班」と「糧食班」が一定のレベルに達していないと

ミラー　「スネーク。武器やアイテムの開発を進めるには、人手が不足している。『フルトン回収』で人員を集めてくれ」

【マザーベース進化／マザーベース無線】（ミラー）

※マザーベースがＬｖ．１→Ｌｖ．２に進化

ミラー　「研究開発班から報告があった」
ミラー　「新型の六角（ヘックス）タイプ・プラントが設計を完了し…」
ミラー　「…本日より、一号棟の建造を開始する。とのことだ」
ミラー　「楽しみだな、やっとスクラップ同然の鉄屑とおさらばできる」
ミラー　「…だが、それにはまだまだ『ＧＭＰ』が足りない」
ミラー　「ＧＭＰをがっちり稼げるように、もっと仲間を増やさなくちゃな。頼んだぞ、スネーク」

※マザーベースが進化した（Ｌｖ．２→Ｌｖ．３）

ミラー　「スネーク、研究開発班からの報告だ」
ミラー　「マザーベースの全プラントが、ヘックスタイプへの更新を終えたそうだ」
ミラー　「兵達の能力も全般的に上がってきていて、実戦部隊の派遣依頼も順調に増えてる。連日、出撃に継ぐ出撃、ＧＭＰの稼ぎも上々だ」
ミラー　「やっぱりビジネスはこうでなくちゃな」
ミラー　「この調子で俺達の活動も、更に拡充していこうじゃないか」
ミラー　「発展はこれからだ。よろしく頼むぞ、スネーク」

【ＺＥＫＥ(ジーク)命名／マザーベース無線】（ミラー）

※ヒューイを研究開発班に配属した後、ミッションから戻ってくると連絡が入る

ヒューイ　「スネーク。研究開発班に配属してくれてありがとう」
ヒューイ　「早速だけど、二足歩行兵器の開発を始めたよ」
ヒューイ　「とはいえ、ここでは自由に資材が使えるわけじゃない」
スネーク　「ああ。すまないが俺達は正規軍じゃないからな。税金も、国防予算もない」

ヒューイ　「わかってるさ。そこでお願いなんだが…、今後またＡＩ兵器と戦うことがあったら、そのパーツを集めてきてくれないか？」
ヒューイ　「そいつらを流用すれば、効率的に開発が進められるはずだ」
スネーク　「言うのは簡単だが…」
ヒューイ　「ボス、君なら出来る。あのピューパだって無力化したんだからね」
スネーク　「まあな」
ヒューイ　「もちろん、君が二足歩行兵器なんか興味ないっていうなら、こっちは気長にやるけど…。強制する気はない。ここのボスは君だからね」
スネーク　「わかった。約束はできないが、考えておこう」
ヒューイ　「それから、各ＡＩ兵器には、武装の中核となる『ヘッドパーツ』が存在するんだ」
ヒューイ　「ヘッドパーツを回収すれば、それぞれのヘッドパーツに応じた武器も使えるようになる」
ヒューイ　「…とはいえ、ＡＩ兵器は君にとっても強敵だと思う。くれぐれも、無理はしないでくれ」
スネーク　「大丈夫だ。無駄に命を捨てるつもりはない」

ヒューイ「気をつけてくれよ。…それと、今回開発を始めた二足歩行兵器だが、名前が必要だと思うんだ」

スネーク「そうだな。いちいち〝あの二足歩行兵器〟じゃ鬱陶しい」

ヒューイ「それで、ミラーと話して考えたんだけど、『メタルギアＺＥＫＥ（ジーク）』…というのはどうかな?」

スネーク「メタルギア…ＺＥＫＥ（ジーク）…」

ヒューイ「ああ。『メタルギア』は君の言っていた、グラーニンの言葉から取った」

スネーク「ＺＥＫＥ（ジーク）というのは?」

ヒューイ「第二次大戦中の日本軍機に、米軍が付けた呼び名だ。ゼロ式（ＺＥＫＥ）は優れた格闘性能を持つ、日本海軍の主力機だった」

ヒューイ「ということで、名前は『メタルギアＺＥＫＥ（ジーク）』でいいかな?」

スネーク「ああ。構わない」

ヒューイ「ミラーも言っていたが、マザーベースには他国の干渉を抑止する力が必要だろう」

ヒューイ「メタルギアという『抑止力』があれば、マザーベースは、本当の意味で自由になれるはずだ」

スネーク　「そうだといいが…」

【ZEKE出撃可能／マザーベース無線】（ミラー）

※ZEKEのボディパーツが揃ったら

ヒューイ　「スネーク、メタルギアZEKEの調整が完了した。これでいつでも出撃可能だ」
スネーク　「そうか、ありがとう」
ヒューイ　「礼には及ばない。これでやっと、本当に君の手助けが出来るようになったよ」
ヒューイ　「『OUTER OPS』に出撃させることもできる」
ヒューイ　「その場合は、部隊編成の時にZEKEを選んでやればいい」
ヒューイ　「実地試験のためにも、ぜひとも使ってみてくれ」
スネーク　「わかった。覚えておこう」
ヒューイ　「それと、今までどおり、武器の換装や記憶板の確認なども可能だ」
ヒューイ　「実地試験の様子を見て、必要に応じて調整してみてくれ」
スネーク　「そうだな。これで全てが終わったわけじゃない」

【ZEKE（ジーク）核搭載／マザーベース無線】（ミラー）

※「ザドルノフ捜索」クリア後で、ZEKE（ジーク）が出撃可能な場合

ミラー　「少し、相談したいことがあるんだが。…ボス？」
スネーク　「どうした、改まって」
ミラー　「ニカラグア湖（ラゴ・コシボルカ）から、ピースウォーカーに積まれていた核弾頭を引き上げた」
スネーク　「何だって？」
ミラー　「核弾頭は放射性物質の塊だ。比較的安定した状態にあるといってもな」
ミラー　「いつまでも湖の底に放置しておけば、湖が汚染される。それに、テロリストの手に渡ったりしたら…」
スネーク　「新たな危機を生む…」
ミラー　「ああ。だから、米政府（ホワイトハウス）がどうケツ拭くか迷ってるうちに、俺の方で、手を打たせてもらった」
スネーク　「だが、回収した弾頭をどうするつもりだ？」
ミラー　「ZEKE（ジーク）に搭載する」
スネーク　「何だって…！」

ミラー　「当然だろう。ZEKE（ジーク）は俺達が国家の干渉から逃れるための『抑止力』でなきゃならない」

ミラー　「核による脅しに屈しないためには、俺達自身が、核を持つしかない」

ミラー　「もちろん、あんたが望まないなら、廃棄もできる。だがそうなったら、新たな核を手に入れるのは困難だ。これは俺達にとって、貴重なチャンスなんだ」

ミラー　「…廃棄はいつだってできる。荒っぽくてもいいなら、漁船に乗せて、外海にでも放ってくればいいんだ。誰も気づきゃしない」

ミラー　「だが、それでも廃棄するというならボス、あんたの命令に従うよ」

スネーク　「いや、いい。核という力が世界に存在している限り、俺達が国家と対等であるために、こいつは必要だ」

ミラー　「そうさボス！　俺達は国家に属さないからこそ、国家と対等な存在でなくてはならないんだ」

ミラー　「つまり、俺達もある意味では〝国〟だ。そして俺達は、世界で第7の核保有国になった」

スネーク　「核保有国か…」

【EVAからのメッセージ／マザーベース無線】（ミラー）

※「対ピースウォーカー戦3」をクリア後、3ターン経過

ミラー　「ボス…。あんたに届けものだ」
スネーク　「俺にか？」
ミラー　「ああ。中身はカセットテープみたいだな」
スネーク　「カセット⁉」
ミラー　「心配するな。爆発物などの反応はない。差出人の名前も一応ある。〝EVA（エヴァ）〟とだけしか書いてないが」
スネーク　「EVA（エヴァ）…」
ミラー　「知ってるのか？」
スネーク　「ああ…。古い知り合いだ」
ミラー　「あんたも隅に置けないな。昔の恋人からのラブレターか？」
スネーク　「茶化すな。ともかく預かろう」
ミラー　「わかった。…だが、浮気するなよ？　今が俺達の組織にとって、大事な時期なんだからな」

スネーク　「なんだ、浮気って…」

※このカセットテープ（EVAからのメッセージ）は、BRIEFING FILESの「ファイルライブラリ・資料ファイル」（P763参照）で聞くことができる。

【志願兵／マザーベース無線】（ミラー）

※メニュー「RECRUIT」選択時

ミラー　「俺達の噂を聞きつけ、様々な場所（アクセスポイント）から入隊を希望する猛者が、集まってきている」

ミラー　「だが奴らは『まずボスの実力を見せてほしい』って話だ。身の程知らずな連中に、あんたの力を思い知らせてやってくれ」

ミラー　「打撃攻撃かCQCで、全員を時間内に気絶させれば、俺達の強力な仲間になってくれる」

ミラー　「彼らを失望させないでくれよ。頼むぞ、ボス！」

■ヒューイの手紙

※「対ピューパ戦」後に入手。メニュー「ＤＥＶＥＬＯＰ」の「ＯＴＨＥＲＳ」にある「ＬＥＴＴＥＲ」をモデルビューアで開くと読むことができる

やあ、久しぶりだね。

突然手紙なんて出してごめん。
ほら、最近君、僕からの通信に出てくれないだろ…？
何か気に障ること言ったかな。それだったらごめん。謝るよ。
でも、できれば君に伝えたいことがあって…それで手紙を書いたんだけど…。

いや、もちろん今はそんな状況じゃないよね。
でも僕はとても、その、興味があるんだ。君…の研究に…さ…。
そう言えば、ポッドの研究は順調？
僕が書いた、二人の、その、ＡＩ同士のリンケージプログラム、

うまく機能してるといいんだけど…
もしうまく動かなかったら、そっちに行って…直しても…いいかな…?
ほら、だって、気になるもんじゃないか、ちゃんと無事で、元気か…
いや、プログラムが元気ってヘンだよね。ハハハ…。

ごめん、話がずれたね。
えっと、ともかく、ずっと言おうと思ってたんだ。
それこそ、君とNASAで初めて会った頃から…。
あの頃は楽しかったね。その…好きな、好きな…研究を思う存分できたしさ。
当時から僕は君を…君のことを…つまり君の研究のことを…評価してたんだ。
いや、それだけじゃない。
僕は、君のことを…す、す、す…すごい人だな、ってさあ。
ごめん、何言ってるか全然わかんないね。
だからその、君がNASAから突然いなくなった時は、とても悲しかった。

それではっきりとわかったんだ…。
僕には君が、君が、必要…っていうか研究に？
ああっ、違う！　っていや違わないけど、違うんだ、言いたいことは…。

とにかく、コスタリカで君に再会した時にはびっくりしたよ。
もしかしたら天の配剤かな、とか、誰かが書いたコードの上で、
僕たちは、その、そうなるようになってるのかな、とか。
君と僕、二人で、これからもずっと…その…二人で…
研究したい。
いや、研究だけじゃなくて、いやもちろん研究もなんだけど、
いろいろあるじゃないか、研究も。ねえ？

ごめん、また話がずれた。でも、もう時間がないんだ。
ピースウォーカーが完成したら、この計画も終わりだろ？
だから…えっと、その…ピースウォーカーは二人の共同作品…だよね？

だから、ピースウォーカーが完成した時は…その時は……

…いや、そうだね。まずは完成させるのが先決だよね、うん。そうだそうだ。
だからそれまで、前みたいに黙っていなくならないでほしいな、なんて…。

長々とごめん。とにかく研究の成功を祈ってるよ。

親愛なる博士へ
ヒューイ

■《狩猟クエスト》関連デモ

【トレニャー接触／アーティストデモ】

※チコからＵＭＡ関連のブリーフィングをすべて聞き、プラヤ・デル・アルバの桟橋にいるトレニャーに近づくと発生

――場所を特定せず、背景は抽象的。

――トレニャー登場。

――トレニャーはオリジナルに合わせ、ＳＥ＋字幕。

――スネークのみ音声あり。

――ハンドガンを構えて近づくスネーク。

スネーク　「ん！（警戒）」

トレニャー　「ニャニャ！　そんなおかしな武器はしまうニャ」

スネーク　「ネコが、喋っている（受け入れがたい事態に思考停止している）」

トレニャー　「もしかしてアンタ、ハンターさん？　オイラはトレニャーだニャ」

スネーク　「トレニャー？」

トレニャー　「そうニャ」

トレニャー　「ハンターさんならきっと狩りたくなる、珍しい生き物がいる島に、案内するニャ」
スネーク　「〝珍しい生き物〟？　お前よりもか？」
トレニャー　「ニャかニャかスルドいニャ…」
トレニャー　「じゃなくてその島にはもっと巨大なヤツ（モンスター）がいるニャ」
スネーク　「モンスター⁉」
トレニャー　「ハンターなら見逃せない獲物ニャ！」
スネーク　「だが残念だ」
スネーク　「俺はハンターじゃない」
トレニャー　「ニャ⁉　そうなのニャ…」
トレニャー　「眼光が鋭いからニャかニャか見どころがあると思ったのにニャ…」
スネーク　「お前もタダのネコじゃないな」
トレニャー　「フゥ…。ポッケ農場辺りでは仕事がなくて、どこをどう通ったかこんな遠くまで出稼ぎに来たのに」
トレニャー　「まだお客が一人もいないのニャ…」
スネーク　「そりゃ気の毒だが俺には他にやることがある」

スネーク　「怪物狩り（モンスターハンティング）なら他をあたってくれ」

トレニャー　「待つニャ！　話だけでも聞いて欲しいニャ」

スネーク　「何だ」

トレニャー　「その島には誰も見たことないモンスターもいるニャ」

トレニャー　「そいつらを倒して手に入れた素材はきっとアンタの役にも立つニャ」

トレニャー　「もし気が変わって、その島に行きたくなったら、ミッション選択で《狩猟クエスト》を選択するニャ」

トレニャー　「そうしたら、オイラがその島まで案内するニャ」

スネーク　「たいしたネコだニャ」

トレニャー　「ニャ！　コトバが移ったニャ。もう他人じゃないニャ」

トレニャー　「じゃあ、狩猟クエストに行きたいときにはいつでもボクを呼ぶニャ。ニャニャニャー！」

【モンハン島への船／アーティストデモ】

※EXTRA OPS《狩猟クエスト》選択時

――浜辺に立つスネーク。

――トレニャーの乗った船が近づいてくる。

――スネークの前で止まる船。

トレニャー「待たせたニャ」

スネーク「よし。行くぞ、トレニャー！」

――船に乗り込むスネーク、船が進み出す。

――霧がかかった海に目をこらすスネーク。

――眼前にモンハン島が近づいてくる。

Distant Dialogues

無線会話集

「対装甲車戦」無線集

■MAIN＆EXTRA OPS共通

【クリア条件】強制・任意無線

（1）
ミラー　「なんとかして装甲車を無力化するんだ！」

（2）
ミラー　「装甲車を破壊しなくても、敵部隊を無力化すれば済む」

（3）
ミラー　「敵部隊を無力化してくれ」

【随伴兵に注意】リアルタイム無線
ミラー　「重装備の兵士が随伴している！　注意してくれ」

【気づかれる前に】任意無線
※敵に発見されていない状態で

（1）
ミラー　「敵は気づいていない。チャンスだ」

（2）
ミラー　「見つかる前に先制するんだ！」

（3）スネーク限定
ミラー　「奴らはあんたを探している。気をつけてくれ」

（4）マザーベース兵用
ミラー　「奴らがお前達を探している。気をつけるんだ」

【タンクが弱点】任意無線

（1）
ミラー　「赤い色の燃料タンクを狙え。動きを止められる」

（2）
ミラー　「むき出しの燃料タンクを狙え」
ミラー　「赤いタンクだ！」

【タンク破壊成功】強制無線

（1）
ミラー　「よし、タンクが壊れた！　これで奴はしばらく動けない」

（2）
ミラー　「よし、タンクを壊したな。これでしばらく足止めできる」

（3）

ミラー　「タンクが壊れた！　攻撃のチャンスだ！」

【タンク破壊後】強制無線

※「タンク破壊成功」の一定時間後

（1）

ミラー　「くそ！　予備の燃料タンクを使い始めたようだ」

（2）

ミラー　「タンクを潰す手はもう使えない。直接本体を攻撃するんだ」

【あともう少しで撃破】強制無線

※一定以上のダメージを与えた時

ミラー　「いいぞ！」

【対戦車地雷促し】任意無線

ミラー　「対戦車地雷は装甲車にも効く」

【装甲車破壊成功】リアルタイム無線

（1）

ミラー　「ターゲットの破壊成功だ！」

（2）

ミラー　「任務完了だ、帰投してくれ」

（3）

ミラー　「やった！　装甲車を破壊したぞ！」

【部隊長出現】リアルタイム無線

ミラー　「あいつが部隊長みたいだな。やれるか？」

【部隊長死亡】リアルタイム無線

（1）

ミラー　「部隊長の死亡を確認。任務完了だ」

（2）

ミラー　「部隊長を倒した！　もう大丈夫だ」

（3）

ミラー　「ミッション完了だ、戻ってくれ」

【部隊長無力化】リアルタイム無線

（1）

ミラー　「部隊長は気絶したようだ。回収してくれ」

（2）

ミラー　「部隊長を倒した。回収すれば任務完了だ」

【構成員を無力化せよ】強制無線

※非殺傷武器のみでミッションを開始した時

(1)

ミラー　「あんたの武器じゃ装甲車の排除は難しい」

ミラー　「先に部隊の構成員を無力化することを考えるんだ」

(2)

ミラー　「部隊の構成員を全員無力化すれば、なんとかなるかもわからん」

【発見された】強制無線

※非殺傷武器のみの時、敵に発見された

(1)

ミラー　「敵に気づかれた！　これじゃ、隠れて兵士を無力化する作戦は使えん！」

(2)

ミラー　「その装備じゃどうにもならん。一度戻って装備を整えるんだ！」

■EXTRA OPS

【アマンダ攻略ヒント】任意無線

(1)

アマンダ　「タイヤ部分を狙って！」

(2)

アマンダ　「周囲の兵士達にも気をつけて！」

(3) 敵に発見される前に

アマンダ　「兵士達を先に倒すのも手ね」

(4) バナネル・フルタ・デ・オロ／農場限定

アマンダ　「一度発見されたら隠れるのは難しいわ」

(5) バナネル・フルタ・デ・オロ／農場限定

アマンダ　「建物やコンテナの陰を利用して！」

(6) エル・カダルソ限定

アマンダ　「列車の陰をガードに使って！」

【装甲車回収依頼】任意無線

(1)

ヒューイ　「装甲車は破壊せずに回収できないか？」

(2)

ヒューイ　「できれば装甲車は破壊せずに回収してくれ」

【ミラーのぼやき】任意無線

ミラー「燃料食らいの車輌を次々と…。オイルショックはどうなったんだ?」

【ヒューイの感嘆】任意無線

※シングルプレイ時に、もう少しで倒せそうになったら

ヒューイ「単独で…? なんて常識外れなんだ、ありえない」

「対戦車戦」無線集

■MAIN & EXTRA OPS共通

【クリア条件】強制・任意無線

(1)

ミラー「戦車部隊を無力化してくれ! あんたならできる!」

(2)

ミラー「戦車を破壊しなくても、敵部隊を無力化すればいい」

(3)

ミラー「敵部隊を無力化してくれ」

【気づかれる前に】強制・任意無線

※敵に発見されていない状態で

(1)

ミラー「敵は気づいていない。チャンスだ」

(2)

ミラー「見つかる前に先制するんだ!」

(3) スネーク限定

ミラー「奴らはあんたを探している。気をつけてくれ」

(4) マザーベース兵用
ミラー　「奴らがお前達を探している。気をつけるんだ」
【タンクが弱点】任意無線
(1)
ミラー　「赤い色の燃料タンクを狙え。動きを止められる」
(2)
ミラー　「むき出しの燃料タンクを狙え」
ミラー　「赤いタンクだ!」
【タンク破壊成功】強制無線
(1)
ミラー　「よし、タンクが壊れた!　これで奴はしばらく動けない」
(2)
ミラー　「よし、タンクを壊したな。これでしばらく足止めできる」
(3)
ミラー　「タンクが壊れた!　攻撃のチャンスだ!」

【タンク破壊後】強制無線
※「タンク破壊成功」の一定時間後
(1)
ミラー　「くそ!　予備の燃料タンクを使い始めたようだ」
(2)
ミラー　「タンクを潰す手はもう使えない。直接本体を攻撃するんだ」
【攻撃成功】強制無線
※一定以上のダメージを与えた時
ミラー　「いいぞ!」
【対戦車地雷促し】任意無線
ミラー　「戦車には対戦車地雷が有効だ」
【アマンダ攻略ヒント】任意無線
(1)
アマンダ　「キャタピラを狙って!」
(2)
アマンダ　「主砲攻撃態勢に入ったら逃げるしかない」

（3）
アマンダ　「兵士達を先に倒すのも手ね」
（4）バナネル・フルタ・デ・オロ／農場限定
アマンダ　「一度発見されたら隠れるのは難しいわ」
（5）バナネル・フルタ・デ・オロ／農場限定
アマンダ　「建物やコンテナの陰を利用して！」
（6）エル・カダルソ限定
アマンダ　「列車の陰をガードに使って！」
（7）エル・カダルソ限定
アマンダ　「主砲の威力なら列車ぐらい吹き飛ばせる！」

【装甲車破壊成功】強制無線
（1）
ミラー　「ターゲットの破壊成功だ！」
（2）
ミラー　「任務完了だ、帰投してくれ」
（3）
ミラー　「うまい！　戦車を無力化した！」

【部隊長出現】強制無線
ミラー　「あいつが部隊長みたいだな。やれるか？」

【部隊長死亡】強制無線
（1）
ミラー　「部隊長の死亡を確認。任務完了だ」
（2）
ミラー　「部隊長を倒した！　もう大丈夫だ」
（3）
ミラー　「ミッション完了だ、戻ってくれ」

【部隊長無力化】強制無線
（1）
ミラー　「部隊長は気絶したようだ。回収してくれ」
（2）
ミラー　「部隊長を倒した。回収すれば任務完了だ」

【構成員を無力化せよ】強制無線
※非殺傷武器のみでミッションを開始した時
（1）
ミラー　「あんたの武器じゃ戦車の排除は難しい」

ミラー　「先に部隊の構成員を無力化することを考えるんだ」
(2)
ミラー　「部隊の構成員を全員無力化すれば、なんとかなるかもわからん」
【発見された】強制無線
※非殺傷武器のみの時、敵に発見された
(1)
ミラー　「敵に気づかれた！　これじゃ、隠れて兵士を無力化する作戦は使えん！」
(2)
ミラー　「その装備じゃどうにもならん。一度戻って装備を整えるんだ！」
【戦車回収依頼】任意無線
(1)
ヒューイ　「戦車は破壊せずに回収できないか？」
(2)
ヒューイ　「できれば戦車は破壊せずに回収してくれ」

【ミラーのぼやき】任意無線
ミラー　「燃料食らいの車輌を次々と…。オイルショックはどうなったんだ？」
【ヒューイの感嘆】任意無線
ヒューイ　「単独で…？　なんて常識外れなんだ、ありえない」

「対戦闘ヘリ戦」無線集

■MAIN＆EXTRA OPS共通

【クリア条件】強制・任意無線

（1）スネーク限定

ミラー　「ヘリ部隊を排除してくれ、スネーク！」

（2）

ミラー　「敵部隊を無力化してくれ」

（3）

ミラー　「ヘリを破壊しなくても、敵部隊を無力化すれば勝てる」

（4）

ミラー　「ヘリを叩き落としてしまえ！」

（5）

ミラー　「まずはそのヘリをどうにかしてくれ！」

【気づかれる前に】強制・任意無線

※敵に発見されていない状態で

（1）

ミラー　「敵は気づいていない。チャンスだ」

（2）

ミラー　「見つかる前に先制するんだ！」

（3）スネーク限定

ミラー　「奴らはあんたを探している。気をつけてくれ」

（4）マザーベース兵用

ミラー　「奴らがお前達を探している。気をつけるんだ」

【タンクが弱点】任意無線

（1）

ミラー　「赤い色の燃料タンクを狙え。動きを止められる」

（2）

ミラー　「むき出しの燃料タンクを狙え」

ミラー　「赤いタンクだ！」

【ミラー攻略ヒント】任意無線

（1）

ミラー　「ヘリには空中機雷を使うんだ」

（2）

ミラー　「ヘリの動きを読んで空中機雷を仕掛けろ」

（3）

ミラー　「徹甲弾やRPGも有効だ」

【サラウンドインジケーター促し】
（1）
ミラー　「ヘリの位置は、サラウンドインジケーターで把握してくれ！」
（2）
ミラー　「サラウンドインジケーターを活用するんだ！」
（3）
アマンダ　「見失ったらサラウンドインジケーターを使って！」
※カタラタ・デ・ラ・ムエルテ限定
（1）
ミラー　「サラウンドインジケーターは、周囲がうるさいと役に立たないぞ」
（2）
ミラー　「あまり滝に近づくと、サラウンドインジケーターが効かない！」
【アマンダ攻略ヒント】
アマンダ　「テイルローターを狙うの！」
※カタラタ・デ・ラ・ムエルテ限定
（1）
アマンダ　「木陰を使ってヘリの視界を逃れて！」
（2）
アマンダ　「目視だけでなく音にも注意して！」
（3）
アマンダ　「地上の敵にも注意して！」
（4）
アマンダ　「正面から戦うのは危険よ！」
（5）
アマンダ　「不意打ちを狙うなら一度隠れて！」
【タンク破壊成功】強制無線
（1）
ミラー　「よし、タンクが壊れた！　これで奴はしばらく動けない」
（2）
ミラー　「よし、タンクを壊したな。これでしばらく足止めできる」
（3）
ミラー　「タンクが壊れた！　攻撃のチャンスだ！」

【タンク破壊後】強制無線
※「タンク破壊成功」の一定時間後
(1)
ミラー　「くそ！　予備の燃料タンクを使い始めたようだ」
(2)
ミラー　「タンクを潰す手はもう使えない。直接本体を攻撃するんだ」
【攻撃成功】強制無線
※一定以上のダメージを与えた時
ミラー　「いいぞ！」
【部隊長出現】リアルタイム無線
ミラー　「あいつが部隊長みたいだな。やれるか？」
【ヘリ破壊成功】リアルタイム無線
(1)
ミラー　「ターゲットの破壊成功だ！」
(2)
ミラー　「任務完了だ、帰投してくれ」
(3)
ミラー　「ヘリを墜とした！　俺たちの勝ちだ！」
【部隊長死亡】リアルタイム無線
※部隊長を死亡させた場合
(1)
ミラー　「部隊長の死亡を確認。任務完了だ」
(2)
ミラー　「部隊長を倒した！　もう大丈夫だ」
(3)
ミラー　「ミッション完了だ、戻ってくれ」
【部隊長無力化】リアルタイム無線
※部隊長を無力化させた場合
(1)
ミラー　「部隊長は気絶したようだ。回収してくれ」
(2)
ミラー　「部隊長を倒した。回収すれば任務完了だ」
【構成員を無力化せよ】強制無線
※非殺傷武器のみでミッションを開始した時

(1)

ミラー 「あんたの武器じゃヘリの排除は難しい」

ミラー 「先に部隊の構成員を無力化することを考えるんだ」

(2)

ミラー 「部隊の構成員を全員無力化すれば、なんとかなるかもわからん」

【発見された】 強制無線

※非殺傷武器のみの時、敵に発見された

(1)

ミラー 「敵に気づかれた！ これじゃ、隠れて兵士を無力化する作戦は使えん！」

(2)

ミラー 「その装備じゃどうにもならん。一度戻って装備を整えるんだ！」

【ヘリ回収依頼】 任意無線

(1)

ヒューイ 「ヘリは破壊せずに回収できないか？」

(2)

ヒューイ 「できればヘリは破壊せずに回収してくれ」

「対ピューパ戦」無線集

■MAIN OPS

【戦闘開始1】強制無線

ヒューイ　「そいつはAI兵器、ピューパだ！　スピードに気をつけろ！」

【弱点示唆】強制無線

※戦闘開始後一定時間経過

ヒューイ　「円柱状のAIポッドを狙うんだ！」

※EXTRA OPS共通。CALL時に

ミラー　「円柱状のポッドだ！　そこを狙え！」

【徹甲弾やRPG使え】強制無線

※開始後一定時間、徹甲弾やRPGを使わないと

ヒューイ　「そんな戦い方じゃ勝てない！　徹甲弾やRPGを当てていかないと！」

【攻略ヒント】強制無線

※「ブースター点火」による攻撃の前後に。EXTRA OPS共通

ヒューイ　「ホフクで突進を避けるんだ……！」

※ピューパが側道にいる間

ヒューイ　「出てくるときに予兆があるはずだ……」

※ブースターに初回攻撃ヒット時

ヒューイ　「左右のブースターを壊せば突進を防げる！」

※キャタピラに初回攻撃ヒット時

ヒューイ　「左右のキャタピラを壊せばパンチ攻撃を防げる！」

※初回避雷針ばら撒き時

ヒューイ　「その避雷針を壊せ！　電撃を誘導される！」

※電撃連続攻撃時初回

ヒューイ　「電撃が来るぞ……！」

※初回機銃破壊時

ヒューイ「機銃が壊れた……！」

【敵を撃て】強制無線

※司令室にRPG系の攻撃をした時

ヒューイ「うわぁぁ‼　こっちを撃つな……！　敵を撃ってくれ！」

【ヒューイ調子に乗る】強制無線

※ピューパがスケートボードっぽい技を見せた時

ヒューイ「ヒュー！　すごいメイクだ。想像以上の動きだね…あごめん」

【ピューパダウン時1】強制無線

ヒューイ「ハッチを壊してAIポッドに乗り込め！」

【AIポッドに乗り込め1】強制無線

※AIポッドのハッチ破壊時

ヒューイ「AIポッドに乗り込めそうだ……！」

※AIポッド乗り込みチャンス2回目以降

ヒューイ「今だ、乗り込め！」

【ピューパ再起動】強制無線

（1）

ヒューイ「ピューパが再起動した！　もう一度動きを止めろ！」

（2）

ヒューイ「ダメだ、動きを止めるんだ！」

■EXTRA OPS

【戦闘開始2】強制無線

ミラー「AI兵器、ピューパを無力化するんだ！」

【AIパーツ再利用について】任意無線

※メタルギアZEKE開発可能時

ヒューイ「武装やAIパーツはあまり壊さないでくれ。再利用したい」

【ピューパダウン時2】強制無線

（1）

ミラー　「AIポッドを攻撃してハッチを壊せ！　円柱状のポッドだ‼」

（2）

ミラー　「早くポッドを撃て！　まだ完全には止まってない‼」

【AIポッドに乗り込め2】強制無線

※AIポッドのハッチ破壊後

（1）

ミラー　「AIポッドに近づいてアイコンが出たら、アクションボタンだ！」

（2）

ミラー　「早くAIポッドに乗り込め。そうしないと再起動するぞ」

「対クリサリス戦」無線集

■MAIN OPS

【戦闘開始1】強制無線

ミラー　「クリサリスを排除してくれ！　ここでカタをつけよう‼」

【霧が濃い】強制無線

※サラウンドインジケーターを所持していない場合

（1）

ミラー　「霧が濃いな。ヘリを見失わないように注意するんだ」

ミラー　「敵を見失ったら、赤いライトを目印にするんだ！」

（2）

ミラー　「霧が濃いな。ヘリを見失わないように注意するんだ」

ミラー　「ヘリは赤いライトを点けていた。あれなら霧の中でも見えるはずだ」

※サラウンドインジケーターを所持している場合

（1）
ミラー　「霧が濃いな。ヘリを見失わないように注意するんだ」
ミラー　「サラウンドインジケーターを頼りに、敵の位置を探るんだ！」
（2）
ミラー　「霧が濃いな。ヘリを見失わないように注意するんだ」
ミラー　「サラウンドインジケーターなら、姿の見えない敵の位置もわかるはずだ」

【レールガンに注意】強制無線
※レールガン初回発射時。EXTRA OPS共通
ミラー　「隠れても壁ごと吹き飛ばされるぞ！」

【防御に集中】任意無線
※クリサリスが攻撃モードの時に。EXTRA OPS共通
（1）
アマンダ　「今攻撃をするのは無謀よ。防御に集中して」
（2）
アマンダ　「今は守りに専念して！」

【攻撃のタイミング示唆】任意無線
※クリサリスが攻撃を行う前後に。EXTRA OPS共通
（1）
アマンダ　「攻撃のチャンス！」
（2）
アマンダ　「ボス！　今だ、行け！」
※クリサリスが攻撃を行う前後に。マザーベース兵限定。EXTRA OPS共通
アマンダ　「今だ！　攻撃のチャンスよ！」

【攻略ヒント】任意無線
※通常モード時。EXTRA OPS共通
アマンダ　「地形を有効に使って！」

【コリブリは仇敵】任意無線
※EXTRA OPS共通
（1）

アマンダ　「こいつのために同志(コンバ)が何人も……。コリブリを倒せ、スネーク！」
チコ　「スネーク、コリブリをやっつけてくれ！」
（2）
【クリサリスの声】任意無線
※EXTRA OPS共通
セシール　「この声、研究所(ラボ)で世話してくれた人に似てる…」
【アブダクションに注意】任意無線
※キッドナッパー射出時。EXTRA OPS共通
チコ　「小さいUFOに気をつけろ！　アブダクションされる！」
【キッドナッパー対策】強制無線
※キッドナッパーのワイヤーに捕まった場合。EXTRA OPS共通
ミラー　「暴れて振りほどけ！」
※続けて。EXTRA OPS共通

ミラー　「アナログパッドを動かして抵抗するんだ！」
※キッドナッパーに捕まった際CALL。EXTRA OPS共通
（1）
アマンダ　「アナログパッドで振りほどいて！」
（2）
チコ　「UFOに連れていかれる！　人体改造されるぞ！」
【あと少しで撃破】強制無線
※一定以上のダメージを与えた時。EXTRA OPS共通
ミラー　「ロケット弾をぶち込んでやれ！」
【クリサリスダウン】強制無線
※クリサリス着陸時。EXTRA OPS共通
（1）
ミラー　「AIポッドを攻撃してハッチを壊せ！　円柱状のポッドだ‼」

（2）
ヒューイ　「攻撃でＡＩポッドのハッチを開けろ！」
【ＡＩポッドに乗り込め１】強制無線
※ＡＩポッドのハッチ破壊時。ＥＸＴＲＡ ＯＰＳ共通
ミラー　「早くＡＩポッドに乗り込め。そうしないと再起動するぞ」
※クリサリス着地時にＣＡＬＬ。ＥＸＴＲＡ ＯＰＳ共通
ヒューイ　「ＡＩポッドに乗り込むんだ！」

■ＥＸＴＲＡ ＯＰＳ

【戦闘開始２】強制無線
ミラー　「ＡＩ兵器、クリサリスを無力化せよ！」
【ＡＩポッドに乗り込め２】強制無線
※ＡＩポッドのハッチ破壊時
ストレンジラブ「ＡＩポッドに乗り込め。今だ」

「対コクーン戦」無線集

■ＭＡＩＮ ＯＰＳ

【戦闘開始１】強制無線
ミラー　「コクーンを排除してくれ！　あんたならこのデカブツ相手でもやれる‼」
【攻略ヒント】任意無線
※開始直後
（1）
ヒューイ　「ＡＩポッドに乗り込むことができれば…」
（2）
アマンダ　「装甲が厚そうね。弱点を探して！」
【攻撃目標１】任意無線
※開始20秒以降で、ラジエータを壊していたら
（1）
ヒューイ　「武装を壊せば安全に戦いを進められる！」
（2）
ヒューイ　「追加装甲は僕の設計じゃない。取り付けが不十分だ」

（3）

ヒューイ　「AIポッドは主砲上部にある」

【武装に注意】強制無線

※初回主砲発射時。EXTRA OPS共通

ミラー　「危ない、逃げろ！　その威力じゃ隠れても無駄だ」

※初回ガトリング砲攻撃時。EXTRA OPS共通

ミラー　「あの武装は飛び乗る前に壊した方がいいな」

【動きを止めろ】強制無線

※戦闘開始一定時間経過後。EXTRA OPS共通

（1）

ヒューイ　「胴体下部のラジエータを狙え」

（2）

ヒューイ　「AIポッドに乗り込むには…、戦車に飛び乗るしかないな」

（3）

ヒューイ　「熱暴走させれば動きが止まる！　腹部のラジエータを狙うといい」

（4）

ヒューイ　「腹部ラジエータの位置は、蒸気を見ればわかるはずだ」

（5）

チコ　「こう動かれちゃ飛び乗れない。動きを止めるんだ！」

※暴走後移動再開パターン

ミラー　「熱暴走がおさまったようだな。もう一度動きを止めるんだ！」

【アーム攻撃に注意】強制無線

※初回アーム撃ちおろし攻撃時

ミラー　「アームで直接攻撃してくるぞ！　砲塔の動きに注意しろ！」

【アーム再起動】強制無線

※EXTRA OPS共通

ミラー　「アームが再起動した！　完全には壊せないか…」

【誘導ミサイルから逃げろ】強制無線

※EXTRA OPS共通

ミラー「逃げろ！　ロックオンされた！」

【プレス攻撃】強制無線

※初回プレス攻撃時。EXTRA OPS共通

ミラー「アクションボタンだ！　潰されるなよ！」

※初回プレス攻撃支え成功時。EXTRA OPS共通

ミラー「ブラボーッ！　上手いぞ！」

【ガトリング砲は危険】強制無線

※ガトリング砲を破壊せずに、高台から車体上部に上がった場合。EXTRA OPS共通

アマンダ「そのまま進むのは危険ね。先に武装を破壊して！」

【ヒューイのコクーン自慢】任意無線

※EXTRA OPS共通

(1)

ヒューイ「実戦は違う…開発試験の時より数倍荒々しく感じる」

(2)

ヒューイ「実戦は違うな…我ながら凄い機動性だ…」

(3)

ヒューイ「なんて荒々しい…。ま、作ったのは僕だけど…」

【陸の戦艦】任意無線

※EXTRA OPS共通

(1)

ミラー「デカイ、まるで陸を征く戦艦だ」

(2)

アマンダ「大きい…こんなの無理…」

【武装を潰せ】強制無線

※一定時間経過後

ミラー「まだ熱暴走しないか…」

ミラー「ヤツは装甲も厚そうだ。ひとまず武装を一つ一つ潰していくのはどうだ？」

【ハシゴが下りた】強制無線
※熱暴走後一定時間経過。EXTRA OPS共通
ヒューイ「衝撃でキャタピラの側面のハシゴが下りた！ これで乗り込める！」

【コクーンに乗り込め】任意無線
※「ハシゴが下りた」の後で。EXTRA OPS共通
(1)
ヒューイ「乗り込むチャンスだ！」
(2)
チコ「正面の高台から飛び乗るんだ！」

【砲塔のハシゴ】強制無線
※ピューパ車体上部で。EXTRA OPS共通
ヒューイ「砲塔のハシゴが見えるか？」
※ピューパ車体上部のハシゴ付近で。EXTRA OPS共通
ミラー「ハシゴで乗り込めるぞ！」

【コクーンダウン時】強制無線
※EXTRA OPS共通
ミラー「AIポッドを攻撃してハッチを壊せ！ 円柱状のポッドだ‼」

【コクーン再起動】強制無線
※EXTRA OPS共通
ミラー「砲塔が再起動した！ 気をつけてくれ！」

【AIポッドに乗り込め】強制無線
※AIポッドのハッチ破壊時。EXTRA OPS共通
ミラー「早くAIポッドに乗り込め。そうしないと再起動するぞ」

■EXTRA OPS

【戦闘開始2】強制無線
※戦闘開始時
ミラー「AI兵器、コクーンを無力化せよ！」

【攻撃目標2】任意無線
※開始20秒以降で、ラジエータを壊していたら

（1）
アマンダ「武器を先に破壊するのが手かもしれない」
（2）
アマンダ「取って付けたような追加装甲を剥がせない？」
（3）
アマンダ「主砲上部にＡＩポッドがある。狙えない？」

「対ピースウォーカー戦」無線集

■対ピースウォーカー戦（コスタリカ）

【クラスター爆弾に注意】強制無線
（1）
ミラー「クラスター爆弾だ！」
（2）
ミラー「着弾前に撃ち落とすんだ！」

【火炎攻撃に注意】強制無線
ミラー「火炎攻撃には予兆があるようだ」

【ピースウォーカーが転んだ時】強制無線
（1）
ミラー「よし、攻撃のチャンスだ！」
（2）
ミラー「今だ、行け！」

【ヒューイの攻略ヒント】任意無線
（1）
ヒューイ「脚を狙って転ばすんだ！」

（2）

ヒューイ「近づきすぎると火炎攻撃を受けるぞ……！」

（3）

ヒューイ「ミサイルは後ろにも撃てる。注意してくれ！」

（4）

ヒューイ「踏まれないようにしてくれよ！」

【プレスに耐えろ】強制無線

※踏みつぶし攻撃を支えたら

ミラー「アクションボタンを連打するんだ！」

【ピースウォーカーを投げた】強制無線

※CO-OPSで投げ飛ばしたら

ミラー「ば、バカな⁉　何が起こったんだ⁉」

■対ピースウォーカー戦2（MAIN & EXTRA OPS共通）

【ピースウォーカーを止めろ】強制無線

※核発射シーケンス時

（1）初回、二回目

ミラー「ピースウォーカーを止めてくれ！　このままじゃ核が発射される！」

（2）三回目以降

ミラー「やつがまた核発射態勢に入った！　彼女を止めるんだ、スネーク！」

【核発射まで時間がない】強制・任意無線

※核発射カウントダウン約1分前ぐらいから

（1）一回目

ミラー「核発射まで時間がない！　急げ！　急いでくれ‼」

（2）二回目

ミラー「なんとかしてくれ！　核が撃たれちまう…‼」

（3）時間残りあとわずか

ミラー「もう間に合わない‼　ダメだ…」

【突進に注意】強制無線

ミラー「突進する前の動きを覚えるんだ！」

パス「世界を救えるのはあなただけよ！」

【振り向き火炎攻撃に注意】強制無線
ミラー　「振り向いた後は火炎を出すようだな」
パス　「気をつけて、スネーク！」
【ショートダッシュ攻撃に注意】強制無線
ミラー　「水平への飛び出しは横にローリングしてかわせ！」
パス　「気をつけて…」
【なぎ払いに注意】強制無線
ミラー　「パンチの後になぎ払いをするクセがあるようだ」
パス　「前後にかわしたほうがいいわ！」
【石化ビームに注意】
ミラー　「バシリスクの毒は人間を石化させる」
パス　「恐るべし、バシリスコ…」
【石化中】強制無線
（1）シングル時
ミラー　「アナログパッドで抵抗するんだ！」

パス　「頑張って！」
（2）CO-OPS時
ミラー　「仲間に撃ってもらえ！　潰される前に協力して抜け出すんだ！」
パス　「頑張って、みんな！」
【プレスに注意】強制無線
※CO-OPS時、プレス攻撃を一人が受け止めたら
ミラー　「潰される前に協力して抜け出すんだ！」
パス　「頑張って、みんな！」
【ピースウォーカー投げ飛ばし】強制無線
※CO-OPS時、プレス攻撃を協力して投げ飛ばしたら
（1）（4）に続く
ミラー　「えっ⁉　あんな怪物を投げ飛ばすとは…」
（2）（4）に続く
ミラー　「なっ！」
（3）（4）に続く
ミラー　「何⁉」
（4）

パス　「奇蹟…」

【ヒューイの攻略ヒント】任意無線

※核発射シーケンス時以外で

（1）

ヒューイ　「脚の関節部分を狙え！」

（2）

ヒューイ　「ダッシュしそうになったら倉庫の陰に隠れろ！」

（3）

ヒューイ　「ドリルミサイルは地面に潜り込んで追尾してくる」

（4）

ヒューイ　「地面に潜る前にドリルミサイルを壊せ！」

（5）

ヒューイ　「ジャンプの落下地点に気をつけるんだ！」

（6）

ヒューイ　「ロケット弾は後ろにも撃てる」

（7）

ヒューイ　「ロケット弾の発射パターンを把握するんだ」

（8）

ヒューイ　「クラスター爆弾のハッチが開いたら逃げろ！」

【電磁波でミサイルが効かない】任意無線

※防御シールド展開中

（1）ミサイル攻撃前に

ヒューイ　「電磁波が漏れている。今、ミサイルは効かない」

（2）ミサイル攻撃後に

ヒューイ　「今、ミサイルは効かない。電磁波が漏れているようだ」

■対ピースウォーカー戦3（MAIN OPS）

【偽装データを止めろ】強制無線

ミラー　「スネーク！　偽装データの送信を止めてくれ…！」

【世界の終わり】任意無線

（1）

チコ　「怖いよ、姉ちゃん…」

（2）
アマンダ　「どうにもならないの…!?」

（3）
セシール　「世界が終わる…」

（4）
ミラー　「スネーク！　頼む、なんとかしてくれ！」
パス　「スネーク…」

（5）
ヒューイ　「もうダメだ、おしまいだ…！」

「対メタルギアZEKE(ジーク)戦」無線集

■MAIN OPS

【核発射を阻止せよ】強制無線
※開始時
ミラー　「パスを止めろ！　核発射を阻止するんだ！」

【パスとZEKE(ジーク)】任意無線
（1）
ミラー　「パスが工作員だったとは…。迂闊だった…」

（2）
ミラー　「有人兵器はAIとは違う！　行動もAIほど単純じゃない！」

（3）
ミラー　「ZEKE(ジーク)を破壊するしかない。パーツが壊れても気にするな！」

【弱点示唆】任意無線
※ZEKE(ジーク)の弱点に一定時間攻撃が当たらなかった場合
ミラー　「ZEKE(ジーク)の装甲は均一じゃない。装甲の薄

い部分を狙え！」

ミラー　「AIポッドを狙うんだ！」

【ハッチを使え】強制無線

※遮蔽物として使用するハッチについて説明。EXTRA OPS共通

ミラー　「甲板上のハッチを起動させた。開いている間は遮蔽物になる！」

【砲台を使え】強制無線

※一定時間支援攻撃を使わなかった時

ミラー　「マザーベースの砲台を使え。操作盤は甲板の端にある」

【砲台初操作】強制無線

※砲撃拠点用の操作盤、初操作時。EXTRA OPS共通

（1）

ミラー　「砲撃要請を確認した。直接ターゲットを指示（タギング）してくれ」

ミラー　「まずは物陰に張り付くなどして、安全を確保しろ」

（2）張り付きまたはホフク後

ミラー　「Lボタンで敵の位置を探り、攻撃ボタンでタグを付けてくれ」

【攻撃のチャンス】強制無線

※砲台の攻撃がZEKE（ジーク）に命中後

ミラー　「ZEKEが砲台に気を取られている」

ミラー　「今が攻撃のチャンスだ！」

【砲台破壊時】強制無線

ミラー　「砲台が破壊された！　そこの砲撃はもう使えん！」

【砲台復旧完了】強制無線

ミラー　「破壊された砲台の復旧が完了した！　活用してくれ」

【再装填待て】強制無線

※同じ砲台を連続で使おうとしたら。EXTRA OPS共通

ミラー　「全弾撃ち尽くした。再装填を待て！」

【再装填完了】強制無線

※EXTRA OPS共通

（1）

ミラー　「ロケットランチャーの再装填が完了した。ぶちまけてやれ！」

（2）

ミラー　「輸送用カタパルトに物資を用意した。使ってくれ！」

（3）

ミラー　「対艦ミサイルの再装填が完了した。いつでも撃てる！」

（4）

ミラー　「対地ミサイルの再装填が完了した。ぶちかましてやれ！」

【その砲台は使えない】強制無線

※砲撃拠点用の操作盤を操作したが使用できない状態だったら

（1）

ミラー　「他の砲台を使用中だ。少し待ってくれ」

（2）

ミラー　「その砲台はZEKE（ジーク）に破壊された。復旧作業中だ」

【支援砲撃マーカー】強制無線

※支援砲撃マーカーを使おうとした

（1）操作盤操作前

ミラー　「支援砲撃マーカーは使えん。ターゲットが近すぎる」

ミラー　「甲板にある操作盤を使うんだ」

（2）操作盤操作後

ミラー　「支援砲撃マーカーは使えん。ターゲットが近すぎる」

ミラー　「ターゲットを指示（タギング）してくれ。張り付きからLボタンを押したまま攻撃ボタンだ」

【発射準備完了】強制無線

※砲撃拠点用の操作盤をプレイヤーが操作したら。EXTRA OPS共通

（1）

ミラー　「ロケットランチャー発射準備完了！」
（2）
ミラー　「輸送用カタパルト準備完了！」
（3）
ミラー　「対艦ミサイル発射準備完了！」
（4）
ミラー　「地対地誘導ミサイル発射準備完了！」

【砲撃開始】強制無線
※砲撃拠点用の操作盤を操作後、一定時間内にタグ付けを行ったら。EXTRA OPS共通
（1）
ミラー　「ターゲットロックオン！　撃てぇ！」
（2）
ミラー　「ターゲット確認！　砲撃開始！」
（3）
ミラー　「目標確認！　ぶちかますぞ！」

【砲撃中止】強制無線
※砲撃拠点用の操作盤を操作後、一定時間経過して待機時間が終了した。EXTRA OPS共通
ミラー　「ターゲットを捕捉できないか？　一旦砲撃を中止する」

【他の砲台も使え】任意無線
※同じ砲撃拠点を使い続けた場合
ミラー　「砲台は他にもある。それぞれの攻撃方法を使い分けるんだ！」

【砲台壊される】強制無線
※ZEKE（ジーク）の支援拠点への報復攻撃が一定回数を超えた
ミラー　「このままじゃ砲台が破壊されちまう！　なんとかしてくれ！」

【砲撃できない】強制無線
※砲撃拠点用の操作盤を操作後、一定時間内にエネミータグ付けを行ったが砲撃できない状態だった
ミラー　「その位置では撃てない。別の砲台を使え」

【先に指示くれ】強制無線
※操作盤を操作する前にタグ付けした
ミラー　「先に操作盤から砲撃指示を出してくれ」

【麻酔は効かない】任意無線

※麻酔系の武器を装備中

ミラー　「ZEKE（ジーク）に麻酔は効かない！」

【アマンダとパス】任意無線

（1）

アマンダ　「戦いに集中しろ！　迷ったらやられるぞ」

（2）

アマンダ　「嫌な予感はしてた。でも、工作員だったとはね…」

（3）

アマンダ　「パス…あんた好きだったよ」

【ストレンジラブとパス】任意無線

（1）

ストレンジラブ「パス…愚かなことを…」

（2）

ストレンジラブ「パスは私が…いや、なんでもない…」

【セシールとパス】任意無線

（1）

セシール　「一緒にバードウォッチングしようって言ってたのに…」

（2）

セシール　「あのテープを持ってたなんて。変だと思ったのよ…」

【チコとパス】任意無線

（1）

チコ　「パスを助けて。スネーク…！」

（2）

チコ　「パスを死なせるな…！」

（3）

チコ　「お願い、パスを助けて…！」

【ヒューイとZEKE（ジーク）】任意無線

ヒューイ　「なんてことだ…。僕のZEKE（ジーク）が…」

ヒューイ　「抑止力は利用される運命なのか…⁉」

【ピューパヘッド】任意無線

※ZEKE（ジーク）のヘッドパーツがピューパヘッドの場合。EXTRA OPS共通

ヒューイ「ピューパヘッドは電撃を多用する」
ヒューイ「スニーキングスーツならダメージを低減できる」

【コクーンヘッド】任意無線
※ZEKEのヘッドパーツがコクーンヘッドの場合。EXTRA OPS共通
ヒューイ「コクーンヘッドは砲撃が得意だ」
ヒューイ「防御力の高いバトルドレスなら有利に戦えるかな?」

【クリサリスヘッド】任意無線
※ZEKEのヘッドパーツがクリサリスヘッドの場合。EXTRA OPS共通
ヒューイ「クリサリスヘッドは索敵能力が高い!」
ヒューイ「カムフラ率の高い装備が有効なんだが…」

■EXTRA OPS

【ミッション前強制無線デモ120】
※「EXTRA OPS:120　対メタルギアZEKE模擬戦」選択時
ミラー「万一に備え、ZEKEとの戦闘訓練を行う」
ミラー「とはいえ、あくまで模擬戦だ。本当にZEKEが破壊されることはないから、安心していい」
ミラー「手加減せずに、ZEKEを攻撃してくれ!」

【模擬戦】強制無線
※開始時
ミラー「これは模擬戦だ。本当にZEKEが壊れることはない。だが油断するな」
※その後コールした時
セシール「これは模擬戦よ。ZEKEが本当に壊れることはない」
セシール「壊れたように見えても、あなたが勝手にそう思い込んでるだけ」

【AI乗り込み不可】任意無線
ストレンジラブ「ZEKEのAIポッドは封印されている。乗り込みはできないはずだ」

「共通」無線集

■通行禁止

【今は侵入禁止】強制無線

※通行禁止マークに来たら（スネーク用）

（1）
ミラー　「その先はミッション圏外だ」

（2）
ミラー　「ミッション圏外だ」

（3）
ミラー　「スネーク、ミッションに集中してくれ」

※通行禁止マークに来たら（マザーベース兵用）

（1）
ミラー　「その先はミッション圏外だ」

（2）
ミラー　「ミッション圏外だ」

（3）
ミラー　「ミッションに集中しろ！」

【水には入れない】強制無線

ミラー　「水には入れない。ミッション圏外だ」

【戻ってどうする？】強制無線

※「【EXTRA OPS：060】遮蔽物爆破」で戻ろうとしたら

ミラー　「そっちへ行ってどうする」

【高い段差】強制無線

※シングルプレイ時に高い段差を越えようとしたら

（1）
ミラー　「一人じゃ登れないな、仲間がいれば…」

（2）
ミラー　「仲間と協力すれば、そこも登れそうだ」

（3）
ミラー　「乗り越えるには高いな。何か道具でもあれば…」

（4）
ミラー　「何かの上に乗れば、乗り越えられそうだが…」

■フルトン関係

【カズ歓喜】強制無線

※女性の捕虜を回収した時

（1）

ミラー　「よぉし！」

（2）

ミラー　「いいぞぅ！」

【フルトン回収完了】強制無線

（1）

ミラー　「ヘリへのフルトン回収が完了した」

（2）

ミラー　「先刻のフルトン回収者、ヘリへ収容した」

【フルトン回収できなくなりそう】強制無線

※もう少しでフルトン回収できなくなる時

（1）

ミラー　「ヘリがそろそろいっぱいだ。もう少しでフルトン回収できなくなる！」

（2）

ミラー　「フルトン回収もいいが、そろそろマザーベースに入り切らなくなりそうだ」

【ヘリが満杯】強制無線

※1ミッション中のフルトン回収上限に達した場合

（1）

ミラー　「フルトン用のヘリが満員になった。一旦帰投するまで、回収は諦めてくれ」

（2）

ミラー　「ヘリがすし詰めで、扉が閉まらん！　マザーベースに戻るまで、フルトン回収は無理だ」

（3）

ミラー　「さっきフルトン回収したやつ、満杯のヘリに乗れなくて、ぶら下がりっぱなしらしい」

ミラー　「しばらく回収は無理だな」

【ベースが満杯】強制無線

※マザーベースが満杯でフルトン回収できない場合

（1）

ミラー　「これ以上、マザーベースに人を収容できない。人が減るまで、フルトン回収は諦めてくれ」

（2）

ミラー　「マザーベースはぎゅう詰めだ。人を減らさないとフルトン回収は…」

ミラー　「おいっ、押すな！　…ああっ！」

（3）

ミラー　「フルトン回収はもう無理だ。マザーベースに人が多すぎて、立っている余地も…（バシャーン、と水音）」

ミラー　「ん？　おいっ、誰が落ちた⁉」

【フルトン回収の方法】任意無線

※気絶兵をフルトン回収するサブミッションで

ミラー　「倒れた兵士をフルトン回収するには、アイコンが出るまでそいつに近づいて、アクションボタンを押せ」

【電磁ネットは無駄】強制無線

※戦車・装甲車戦以外の通常ステージで電磁ネットを使用

（1）

ミラー　「その地域（エリア）に大型兵器は確認できなかった。電磁ネットは意味がないぞ」

（2）

ミラー　「大型兵器が存在しない場所（エリア）で、電磁ネットを使うのは無駄だ」

※AIボスに電磁ネットを使用

（1）ピューパ、コクーンに使用

ミラー　「そいつはデカすぎる。電磁ネットでも回収は無理だ」

（2）クリサリスに使用

ミラー　「飛んでいる敵に、電磁ネットは効果がない」

※電磁ネットが展開されている状態で再度電磁ネットを使用

ミラー　「電磁ネットは展開済みだ」

【大型兵器が満杯】強制無線

※マザーベースで保持できる上限を超えた状態で電磁ネットを使用

（1）

ミラー　「マザーベースは満杯だ。これ以上大型兵器

を回収できない」

（2）

ミラー　「マザーベースの収容庫は満杯だ。もう大型兵器は回収できない」

■支援要請関連

【砲撃要請】強制無線

※砲撃要請後

（1）

ミラー　「砲撃要請を確認した。これより支援砲撃を開始する」

（2）

ミラー　「さっき要請を受けた支援砲撃を開始する。当たらないでくれよ」

【砲撃要請ムリ】強制無線

※連続して砲撃要請。初回

（1）

ミラー　「連続で支援砲撃はできない」

（2）

ミラー　「時間を空けて再要請してくれ」

※連続して砲撃要請。二回目以降

（1）

ミラー　「再装填を待て」

（2）

ミラー　「連続で支援砲撃はできない」

（3）

ミラー　「ちょっと待ってくれ」

（4）

ミラー　「時間を空けて再要請してくれ」

【ダンボール支援要請確認】強制無線

（1）

ミラー　「支援要請を確認した。今ダンボールをお届けする」

（2）

ミラー　「ダンボール支援要請を確認した。すぐ配達する」

【ダンボール支援要請ムリ】強制無線

※連続してダンボール支援要請。初回

(1)
ミラー　「連続で支援は無理だ」
(2)
ミラー　「時間を空けて再要請してくれ」

※連続してダンボール支援要請。二回目以降
(1)
ミラー　「ちょっと待ってくれ」
(2)
ミラー　「連続で支援は無理だ」
(3)
ミラー　「時間を空けて再要請してくれ」

【支援不可能】強制無線
※天井や壁などが邪魔で、支援できない
(1)
ミラー　「障害物が邪魔だ。そんな場所に支援は無理だ」
(2)
ミラー　「そこに支援はできない！　障害物のない場所にしてくれ！」

【支援補給促し】強制無線
(1)
ミラー　「弾薬やアイテムは十分か⁉　支援要請してくれ！」
(2)
ミラー　「支援補給マーカーで、補給物資の降着地点（ドロップゾーン）を指示してくれ！」

【支援補給マーカー確認】強制無線
※戦闘系ミッションの出撃時、支援補給マーカーを持っていない場合
ミラー　「支援補給マーカーを持ってないようだが…弾薬は足りるのか？」
ミラー　「出直した方がいいんじゃないか？」

【支援補給不能】強制無線
※戦闘系ミッションの出撃時、支援補給物資が在庫切れの場合
ミラー　「今はこっちにも補給物資がない…」
ミラー　「一度戻って、マザーベースの体勢を整え直したらどうだ？」

【撤退せよ】強制無線
※戦闘系ミッション中、弾切れ&支援補給物資が尽きた場合
ミラー「この調子じゃ勝てそうにない…。一時撤退して装備を整え直すんだ！」

【AIパーツ鹵獲ムリ】強制無線
※AI兵器のパーツ数がいっぱいで鹵獲できない時
(1)
ミラー「もうAI兵器のパーツを格納する場所がない」
(2)
ミラー「すまんがそいつの鹵獲は諦めてくれ」

【アイテムいっぱい】強制無線
※アイテムがマザーベースに送られた場合。初回
ミラー「持ちきれないようだな。マザーベースに回収しておく」

【弾切れ】強制無線
※中ボス、AIボス戦で、弾切れもしくは支援補給も尽きた場合
ミラー「この調子じゃ勝てそうにない…。一時撤退して装備を整え直すんだ！」

【支援補給マーカー確認（ボス戦）】強制無線
※中ボス・AIボス戦で、支援補給マーカーを持っていない場合（出撃時）
ミラー「支援補給マーカーを持ってないようだが…弾薬は足りるのか？　出直した方がいいんじゃないか？」

■フェイズ関係

【気付かれた】強制・任意無線
(1)
ミラー「気付かれた。探しに来るぞ」
(2)
ミラー「敵がこちらの存在に気付いた。探しに来るぞ」

【危険フェイズ1：ミラー】強制・任意無線
(1)
ミラー「敵に見つかった！　何とか逃げ切るんだ」

（2）
ミラー　「見つかった。何とか逃げ切るか、全敵兵排除しかない」

【危険フェイズ2：アマンダ】任意無線
（1）
アマンダ　「早く安全な場所に！」
（2）
アマンダ　「逃げられなければ戦うしかない！」

【危険フェイズ3：チコ】任意無線
（1）スネーク限定
チコ　「早く隠れて、スネーク！」
（2）スネーク限定
チコ　「ボスなら切り抜けられるはず…」
（3）マザーベース兵用
チコ　「早く隠れて！」
（4）マザーベース兵用
チコ　「ひとまず逃げるんだ！」

【危険フェイズ4：ストレンジラブ】任意無線
（1）スネーク限定
ストレンジラブ「早く隠れるんだ、スネーク！」
（2）共通
ストレンジラブ「戦うな！　彼女の自己犠牲を思い出せ！」

【危険フェイズ5：ヒューイ】任意無線
（1）
ヒューイ　「早くどこかに隠れるんだ！」
（2）
ヒューイ　「くそっ、戦うしかないのか!?」

【危険フェイズ6：パス】任意無線
（1）
パス　「早く隠れて、スネーク！」
（2）
パス　「お願いスネーク、逃げて！」

【回避フェイズ1：ミラー】強制・任意無線
※強制：敵兵の「見失った」通信の後で
（1）

ミラー　「逃げきったな。捜索は続いている。見つからないでくれ」

（2）

ミラー　「逃げきったか。敵の捜索は続いている。気を抜くな」

【回避フェイズ2：アマンダ】任意無線

（1）

アマンダ　「このまま逃げ切りましょう！　隠れて！」

（2）

アマンダ　「敵はまだ捜索中よ。音を立てないようにして」

【回避フェイズ3：チコ】任意無線

（1）

チコ　「ふぅ、逃げ切れそうだね…」

（2）

チコ　「まだ気は抜かないでよ」

【回避フェイズ4：ストレンジラブ】任意無線

（1）

ストレンジラブ「いいぞ。このまま逃げ切ろう」

（2）

ストレンジラブ「また見つからないようにな」

【回避フェイズ5：ヒューイ】任意無線

（1）スネーク限定

ヒューイ　「そのまま逃げ切ってくれ、スネーク」

（2）共通

ヒューイ　「そのまま逃げ切ってくれ」

（3）共通

ヒューイ　「なんとか捜索をかわすんだ！」

【回避フェイズ6：パス】任意無線

（1）スネーク限定

パス　「そのまま逃げ切って！」

（2）スネーク限定

パス　「どこか安全な場所を探して、スネーク…」

（3）マザーベース兵用

パス　「そのまま逃げ切って！」

【警戒フェイズ】強制・任意無線

※敵兵の「回避フェイズから警戒フェイズに移行」通信

の後に

（1）
ミラー　「敵は捜索を打ち切った。警備は強化されている。気を緩めないでくれ」

（2）
ミラー　「捜索は打ち切られたが、警備は強化されたままだ。注意を怠るな」

（3）
ミラー　「敵はまだあんたを探している。気をつけてくれ！」

（4）
ミラー　「敵の捜索を振り切るんだ！」

【ゴールに入れない】強制無線
※危険フェイズ中にゴールしようとしたら

（1）
ミラー　「駄目だ、警戒が厳しくて入れない」

（2）
ミラー　「突入は無理だ。追っ手を振り払え」

※潜入フェイズ以外ではゴールできない場合に進もうとしたら

ミラー　「敵に見つかったままでは進めない！　一旦退いて警戒が解かれるのを待つんだ」

■CO-OPS関係

【スネークフォーメーション促し】強制無線
※CO-OPS時

（1）
ミラー　「スネークフォーメーションで進むには、仲間のそばでアクションボタンだ」

（2）
ミラー　「仲間の近くでアクションボタンを押せば、スネークフォーメーションに移る」

【スネークフォーメーション成功】強制無線

ミラー　「よし、今のがスネークフォーメーションだ」

【CO-OPSロードアイコン】強制無線
※CO-OPSロードアイコンに引っかかったら

（1）
ミラー　「そこは二人一緒でないと進めないぞ」

（２）

ミラー　「その先は相手を待って、一緒に進むんだ」

■ＬＩＦＥ少ない時

【ホフクで休め】強制・任意無線

※レーションを持っていない場合

ミラー　「レーションがないときはホフク状態で休むといい。安全な場所を探せ」

【レーション装備せよ】強制・任意無線

※レーションを持っているが、装備していない場合

ミラー　「レーションを装備しておけば、ＬＩＦＥが０になっても自動的に回復する」

【小まめに回復】任意無線

※レーションを装備していない場合

（１）

ミラー　「ＬＩＦＥがなくならないうちに、小まめに回復するんだ。レーションを装備してもいい」

（２）

ミラー　「小まめに回復してくれ。ＬＩＦＥがなくなったら、お終いだからな」

【レーション使え】任意無線

※レーションを持っている場合

（１）

チコ　「レーション食え！　死ぬぞ！」

（２）

パス　「ＬＩＦＥが減ってる！　レーションを使って！」

■操作方法関連

【ＣＱＣ促し】強制・任意無線

ミラー　「ＣＱＣをかけるには、敵の近くで攻撃ボタンだ」

【ホールドアップ成功】強制無線

※ホールドアップ成功時

ミラー　「そいつにはもう危険はない。仲間が来ないかぎり何もしてこないはずだ」

ミラー　「そいつはそのままフルトン回収できる」

【クレイモア解除法】強制無線

（1）

ミラー「クレイモアを回収するには後ろから近づくんだ」

（2）

ミラー「アクションボタンでクレイモアを回収するんだ！」

【壁叩きの方法】任意無線

（シューター）

ミラー「壁に張り付いたままRボタンを押せば、壁を叩いて敵の注意を引くことができる」

（アクション）

ミラー「壁に張り付いたまま□ボタンを押せば、壁を叩いて敵の注意を引くことができる」

（ハンター）

ミラー「壁に張り付いたまま△ボタンを押せば、壁を叩いて敵の注意を引くことができる」

【無力化の方法】任意無線

ミラー「敵を無力化出来るなら、睡眠・気絶・瀕死状態でも構わない」

■ダンボール関連

【ダンボール使用中】任意無線

※ダンボールをかぶっている時にＣＡＬＬ

（1）

ミラー「そんなもので敵の目をごまかせるのか？」

（2）

セシール「何が入ってたの、そのダンボール？」

（3）

チコ「ダンボールとは、うまく考えたもんだな」

（4）

ストレンジラブ「ほう　味なマネを…」

（5）

パス「な、何してるの？」

（6）

ヒューイ「狭いところが好きなのか？」

【ダンボール戦車使用中】任意無線

（1）初回のみ強制

ミラー「ホントに使うのか、それ…」

（2）
セシール「ふふっ、環境に優しそうな戦車ね」
（3）
チコ「かっこいいなぁ、ダンボール戦車」
（4）
ストレンジラブ「アホというのは最高の抑止力かもしれん…」
（5）
パス「遊んでるの？」
（6）
ヒューイ「キャタピラに頼らず、脚で歩くってのがいいな」

【アサシンボックス】強制無線
※ステージに置いてあったアサシンボックスに入ったら
ミラー「十字軍の時代、暗殺者（アサシン）は、麦藁に身を隠して敵に近づいたという」

【下にアサシンボックス】強制無線
※アサシンボックスにダイブできる位置で
ミラー「下に麦藁があるようだな。アクションボタンでダイブできるはずだ」

【アサシンボックス使用中】強制無線
※アサシンボックス使用中、ＣＱＣアイコンが出たら
ミラー「ボックスに引きずり込め！」

【暗殺者の技】強制無線
※アサシンボックスを使用して、自動でフルトンした
ミラー「これが暗殺者（アサシン）の技か…！」

■殺傷関係

【殺さないで】任意無線
（1）
パス「お願い！　できれば殺さないであげて」
（2）
パス「人を…殺すの…？」
（3）
パス「敵だからって人命を軽視しないでね…」

【殺したの？】任意無線
（1）
ストレンジラブ「殺したのか…」
（2）

ストレンジラブ「戦士の宿命か…」

(3)

パス「殺したの…?」

(4)

パス「なにも殺さなくても…」

(5)

パス「殺さなきゃいけなかったの…?」

(6)

パス「身を守るには…こうするしかないの…?」

(7)

パス「あなたの命を守るため、なんだよね?」

【やりすぎ…】　任意無線

※1ミッションで多数を殺害した時にCALL

(1)

セシール「敵だからって…やりすぎよ…」

(2)

ストレンジラブ「お前は本当に…彼女の弟子だったのか?」

(3)

ストレンジラブ「殺すのが好きなのか?　この野蛮人め」

(4)

パス「敵だからって…ひどい…」

(5)

パス「あの人達にも家族がいたはず…」

(6)

パス「お願い…。もう殺さないで…」

■敵兵関連のアドバイス

【スナイパーに注意】　強制無線

(1)

ミラー「狙撃兵(スナイパー)は遠くから狙ってくる。姿が見えなくても油断するな」

(2)

ミラー「狙撃兵(スナイパー)に気をつけろ。遠くから撃ってくるぞ」

【ミサイル兵に注意】　任意無線

(1)

ミラー「ロケットランチャーは飛距離が長い。遠くても気を抜くな」

(2)

ミラー「敵が遠くても油断するな」

【ミサイル兵は危険】強制無線
※ミサイル兵と戦闘に入った場合
(1)
ミラー　「まずいぞ、敵はロケットランチャーを持っている！」
(2)
ミラー　「ロケット砲を食らうなよ！」
(3)
ミラー　「ロケットランチャーを持った敵を、先に排除するんだ」

【ヘッドショット効かない】任意無線
アマンダ　「ヘルメットを被った敵はヘッドショット一発じゃ無理。注意して」

■ユニフォーム関連

【ミラーのユニフォーム】任意無線
※スネークがミラーのユニフォームを着ていた場合
(1)
ミラー　「お！　俺とお揃いじゃないか」
(2)
ミラー　「お揃いのユニフォームだな、スネーク」
(3)
ミラー　「すまん、ユニフォーム、臭うか？　洗濯してないほうを貸しちまった」
(4)
ミラー　「ペアルックか…」
※マザーベース兵がミラーのユニフォームを着ていた場合
(1)
ミラー　「お！　俺とお揃いじゃないか」
(2)
ミラー　「俺と同じ格好で、あまり悪さはしないでくれよ」
(3)
ミラー　「すまん、ユニフォーム、臭うか？　洗濯してないほうを貸しちまった」

【アマンダのユニフォーム】任意無線
※アマンダのユニフォームを着ていたら
(1)

アマンダ 「あら、私とおそろい？」
(2)
アマンダ 「同じ服を着るんなら、私に負けない活躍をしてもらわなきゃね」
(3)
アマンダ 「どう？ その服、動きやすいでしょ。これでゲリラ戦を戦い抜いてきたんだからね」
(4)
アマンダ 「服、洗って返してよ」
(5)
チコ 「あれ、姉ちゃん？ 違うか」

【タキシード着用中】任意無線
※スネークかマザーベース兵がタキシードを着ていたら
(1) スネーク限定
ミラー 「ヒュー！ 男前だな」
(2) スネーク限定
ミラー 「タキシードでもバンダナか…よほど大事なんだな」
(3)
チコ 「なんだよ、おめかししちゃって」

---

(4)
アマンダ 「正気なの？ その服。ゲリラ戦をナメてない？」
(5) スネーク限定
ストレンジラブ 「非合理的な格好だな。彼女が見たら何と言うか…」
(6)
ストレンジラブ 「その格好…余裕じゃないか」
(7)
ストレンジラブ 「その格好……んー？ …お遊びか？」
(8) スネーク限定
パス 「スネーク…格好いい…」
(9)
パス 「格好いい…平和になったら、パーティもいいな」
(10) スネーク限定
セシール 「あら、その服…プロポーズ。あ、じゃなかった、ディナーにでも誘ってくれるの？」
(11) スネーク限定
ヒューイ 「いいね、その服。僕もそんな服を着て彼女と…」

【水着着用中】任意無線
※スネークが水着を着ていたら
(1)
ミラー「その格好…スネーク、あんたは俺達の司令官なんだ。少しは体面ってものも気にしてくれ」
(2)
ミラー「わかってると思うが、下は脱げないからな。いいな、脱ぐなよ‼」
(3)
ミラー「悪かった。もうコードネームのことでからかったりしない」
ミラー「だから服を着てくれ！　お願いだ‼」
(4)
ミラー「わかったよ、俺も脱げばいいんだろう⁉　どうだ、これでお揃いだ‼」
(5)
ミラー「ようし！　これからは裸がユニフォームだ！」
(6)
ミラー「なかなか…似合うな」

(7)
セシール「いやん、抱きついちゃう…」
(8)
セシール「あなた、セクシーね」
(9)
セシール「たくましい胸…」
(10)
チコ「俺だって鍛えれば、それくらいの身体に…」
(11)
ストレンジラブ「悪いが、男の裸に興味はない。服を着たらどうだ？」
(12)
パス「きゃっ…。スネーク？　服を着て！」
(13)
パス「もうやだ…まだその格好なの？」
(14)
パス「見てない！　見てないからね‼」

【水着着用中2】任意無線
※水着を着ていたら。スネーク、マザーベース兵（男性）共通

（1）
アマンダ　「その格好じゃ、ハマダラ蚊の餌食よ。マラリアに罹りたいの？」
（2）
ヒューイ　「それは…今研究中のステルス迷彩ってやつかい？　…えっ、ほんとに着てないの!?」

【水着着用中3】任意無線
※マザーベース兵（女性）が水着を着ていたら
（1）
ストレンジラブ「その格好…もっと脱いでもいいぞ」
（2）
ストレンジラブ「なかなかいい趣向だな。あとで私の部屋に来い」
（3）
ストレンジラブ「綺麗な身体…早く帰っておいで」

【AXE】任意無線
※AXEを使ったら時にCALL
（1）
ミラー　「いいな、そのフレグランス。俺も使ってみるか」
（2）
ミラー　「ん～　惚れ惚れするなそのフレグランス。さっそく使ってみよう」
（3）
アマンダ　「…ま、悪い匂いじゃないわね。ていうかこれ…ステキ…」
（4）
セシール　「ちょっと…その香り、反則じゃない？」
（5）
セシール　「その香り…どこかにいっちゃいそう…」
（6）
セシール　「やだその匂い…あの、テレフォン、ピッピッ。ん…、あなたしか見えない…」
（7）
ストレンジラブ「いい香りだ。男がつけるには勿体ない」
（8）
パス　「あ、なに、この匂い。ちょっとドキドキしてきた…」

■人間パチン虎。関係

【使い方違う】強制無線

※人間パチン虎。で殴ったら

ミラー　「それはそういう武器じゃないんだが…」

【人数が足りない】強制無線

※人間パチン虎。を4人未満で持っていって、ゴムを装備したら

（1）

ミラー　「一人でそんなゴムを持っていても仕方ないだろう」

（2）

ミラー　「盾にはなりそうにないな、それ」

【使い方】強制無線

※人間パチン虎。を4人CO‐OPSで持っていって皆が棒やゴムを装備したら

（1）

ミラー　「人間パチン虎。を使うには全員CO‐OPインしてくれ！」

（2）

ミラー　「弾になるヤツ以外は持っているパーツを構えるんだ！」

（3）

ミラー　「合体アイコンが出たらアクションボタンを押すんだ！」

【棒の人】強制無線

※合体中に棒の人の操作説明

ミラー　「アナログパッドで旋回できる。仲間と協力して狙いをつけてくれ」

【ゴムの人】強制無線

※合体中にゴムの人の操作説明

ミラー　「攻撃ボタン連打でゴムを引くんだ！　ゴムの伸び具合は画面下のバーを見てくれ」

【弾の人】強制無線

※合体中に弾の人のカメラ操作説明

ミラー　「あんたは人間弾丸だ！　カメラボタンで射出角度を調整してくれ！」

※合体中に弾の人の攻撃方法説明

ミラー　「ゴムが十分伸びたら攻撃ボタンだ！　ゴムの伸び具合は画面下のバーを見てくれ」

【人間パチン虎。命中】強制無線

ミラー　「命中だ‼　彼の勇気ある行動に、敬礼‼」

【人間パチン虎。外れた】強制無線

（1）

ミラー　「外れたか…。だが、俺たちはあんたの死を無駄にはしない‼」

（2）

ミラー　「あいつ、無茶しやがって…」

■コンティニュー時アドバイス

【基本アドバイス】強制無線

※ゲームオーバー後、リトライを選んでミッション再開した時

（1）

ミラー　「死にそうになったらレーションや、回復アイテムを使うんだ、慎重にな」

（2）

ミラー　「レーションや回復アイテムを装備していれば、LIFEが0になったときに自動で使用できる」

（3）

ミラー　「死んだら元も子もない、できるだけ戦闘を避けて、敵に気づかれないように目的地に向かってくれ」

（4）

ミラー　「万一戦闘になったらCQCも役に立つ」

（5）

ミラー　「麻酔銃は一発当てれば、薬が効いていずれ敵は眠る。遠くから当てて、眠るまで待ってから進むのも手だ」

【AUTO AIM促し】強制無線

※SELECTボタンにAUTO AIMを割り当てている時

ミラー　「銃で狙いをつけるのが難しければ、AUTO AIMをオンにしてみるといい」

ミラー　「SELECTボタンでオンにできる」

※SELECTボタンにAUTO AIMを割り当てていない時
ミラー　「銃で狙いをつけるのが難しければ。AUTO AIMをオンにしてみるといい」
ミラー　「STARTボタンでメニューを開き、OPTIONSからオンにできる」

■その他

【ミラーの応援】任意無線
※スネーク限定
（1）
ミラー　「頼りにしてるぜ、ボス」
（2）
ミラー　「俺達の未来は、あんたにかかってる。頼むぞ」
※マザーベース兵用
（1）
ミラー　「しっかり頼むぞ。ボスも期待してる」
（2）
ミラー　「マザーベースのことは任せろ。存分に力を発揮してこい」

【セシールの応援】任意無線
セシール　「大変でしょうけど…がんばってね」
【パスの応援】任意無線
（1）
パス　「がんばってスネーク、ピース！」
（2）
パス　「スネーク、平和を取り戻して…」
（3）
パス　「あなたを信じてる。きっと…」
（4）
パス　「私は何もできないけど……がんばって、スネーク」
【景色も見て】任意無線
※眺めの良いエリアで
パス　「たまには景色も見て…すばらしい眺めでしょ？」
【ハキリアリ】任意無線
パス　「スネーク　ハキリアリって知ってる？　キノ

コを栽培するアリよ」
パス　「コスタリカにいるの」
パス　「キノコは胞子をアリに食べさせる代わりに、外敵から守ってもらうんだって」
ミラー　「まるで俺たちみたいだな?」
パス　「そんなつもりじゃ…」

【兵器のかけ声】強制無線
※プレイヤーがスネーク
（1）
スネーク　「超協力兵器　レールガン。」
（2）
スネーク　「究極協力兵器　電磁波照射ガン。」
（3）
スネーク　「最強合体兵器　人間パチン虎。」
（4）
スネーク　「超協力回収兵器　電磁ネット。」
（5）
スネーク　「超強力回収兵器　電磁ネット。」

※プレイヤーがマザーベース兵
（1）
ミラー　「超協力兵器　レールガン。」
（2）
ミラー　「究極協力兵器　電磁波照射ガン。」
（3）
ミラー　「最強合体兵器　人間パチン虎。」
（4）
ミラー　「超協力回収兵器　電磁ネット。」
（5）
ミラー　「超強力回収兵器　電磁ネット。」

【種子島】強制無線
※種子島で人を撃った時
（1）
ミラー　「今報告があった。いつの間にかフルトン用のヘリに、敵兵がしがみついていたそうだ」
ミラー　「下で何があった⁉」
（2）
ミラー　「また敵兵がヘリに引っかかってたらしい。不思議なこともあるもんだ」
（3）

ミラー　「まただ！　また敵兵がヘリに掴まってた」

■ＡＩポッド関連

【記憶板を抜き取れ１】強制無線
※ピューパ戦ＡＩポッド初回乗り込み時
ヒューイ　「ポッドが射出される前に、ＡＩの記憶板を抜き取るんだ！」
ヒューイ　「黒い記憶板はロックされてる。アイコンが出ている記憶板を狙え」
ヒューイ　「記憶板を抜き取るには、方向キーで選んで○ボタンだ」
ヒューイ　「連動した部位を壊せば記憶板のロックを外せる」
ヒューイ　「抜き取った記憶板はＡＩ兵器を作りたいときに利用できる」
ヒューイ　「記憶板はアイコンごとに機能が違う。欲しいものを選んでくれ」

【記憶板を抜き取れ２】強制無線
※クリサリス戦以降のＡＩポッド乗り込み時
ミラー　「ロックの外れた記憶板を抜き取ってやれ！」
ミラー　「記憶板を抜き取るんだ！　ロックが外れた記憶板にはアイコンが出ているはずだ」
ヒューイ　「抜き取った記憶板はＡＩ兵器を作りたいときに利用できる」
ヒューイ　「記憶板はアイコンごとに機能が違う。欲しいものを選んでくれ」
ヒューイ　「外から衝撃を与えれば、その部位に連動する記憶板が光るはずだ」
ヒューイ　「記憶板が光ったときの色で機能を推測できる」

【記憶板壊れている】強制無線
※壊れた記憶板を取ろうとした時
（１）ピューパ戦のみ
（２）クリサリス戦以降
ヒューイ　「ダメだ、その記憶板は壊れている！」
ミラー　「壊れた記憶板は放っておけ」

【パスの日記取得】強制無線
※「パスの日記」取得時の音声

（1）
ミラー　「どうした？　なぜそんなところにテープが？」
（2）
ミラー　「またテープか？」
【CO-OP時外攻撃】強制無線
※ピューパ戦で、CO-OP時、外から攻撃した
（1）
ヒューイ　「連動した部位を壊せば記憶板のロックを外せる」
（2）
ヒューイ　「外側から部位攻撃でロックを外してくれ」
※クリサリス戦以降で、CO-OP時、外から攻撃した
ミラー　「AIポッドを狙えば時間を稼げるんじゃないか？」
【CO-OP時外AI攻撃】強制無線
※AIポッドにダメージを与えすぎると記憶板が壊れて取得可能数が減る

ヒューイ　「AIポッドは攻撃するな！　記憶板が破損してしまう！」

■ゲームオーバー関連

【ミラー】ゲームオーバー
※スネーク限定（CO-OPで二人とも瀕死になった場合も含む）
（1）
ミラー　「何があったんだ、スネーク！　スネーーーークっ!!」
（2）
ミラー　「スネーク、応答してくれ！　スネーーーーークっ!!」
（3）
ミラー　「大丈夫か!?　スネーク！　スネーーーークっ!!」
（4）
ミラー　「どうしたんだボスっ！　答えてくれ！　ボスーっ!!」
（5）
ミラー　「スネーク、どうした、どうしたんだ!?　状

況を知らせてくれ、スネーーーク‼」

※マザーベース兵用（CO‐OPで二人とも瀕死になった場合も含む）

（1）

ミラー　「どうした？　何があったんだ⁉　応答せよ！　応答せよ！」

（2）

ミラー　「おい！　何があった⁉　答えろ！　答えるんだ‼」

（3）

ミラー　「まずい、やられたか⁉　おい！　応答しろ…！　ダメか…」

（4）

ミラー　「どうした⁉　何故応答しない！　状況を報告するんだ‼」

※CO‐OPで、自分以外が落下死。スネーク限定

（1）

ミラー　「嘘だろスネーク⁉　こんなところで終わりじゃないはずだ！　スネーーーク‼」

（2）

ミラー　「まずいぞスネーク。仲間が落ちた、作戦中止だ！」

（3）

ミラー　「作戦中止だ、スネーク！　仲間が落ちた‼　なぜ目を離した⁉」

（4）

ミラー　「止まれスネーク、作戦は中止だ。仲間が行動不能になった　残念だよ…」

（5）

ミラー　「仲間からの応答が途絶えた！　作戦中止だ、スネーク。帰投してくれ…」

※CO‐OPで、自分以外が落下死。マザーベース兵用

（1）

ミラー　「まずいぞ、仲間が落ちた。作戦中止だ！」

（2）

ミラー　「仲間が落ちた！　作戦は中止だ、帰投せよ！」

（3）

ミラー　「作戦は中止だ、仲間が行動不能になった。

戻ってこい…」

（4）

ミラー　「仲間からの応答が途絶えた。作戦中止だ、帰投せよ！」

※「対ピースウォーカー戦2」で、ピースウォーカーが核発射した場合

ミラー　「スネーク…。ピースウォーカーは核を発射してしまった」

ミラー　「お終いだ」

※「対ピースウォーカー戦2」で、AI引き抜きが間に合わなかった場合

ミラー　「スネーク…核が発射された」

ミラー　「ペンタゴンの連中は世界の破滅を選んだんだ」

【パス】ゲームオーバー

※スネーク限定（CO-OPで二人とも瀕死になった場合も含む）

（1）

パス　「スネーク、どうしたの⁉　答えて、スネーーーーク‼」

（2）

パス　「嘘でしょスネーク…こんなの嫌…。答えて、スネーーク！」

（3）

パス　「スネークお願い、あなたが倒れたら、コスタリカの平和は…応答して、スネーク‼」

※マザーベース兵用（CO-OPで二人とも瀕死になった場合も含む）

（1）

パス　「どうしたの⁉　応答して！　お願い‼」

（2）

パス　「応答して！　ねえ‼　もう人が死ぬのはいや…‼」

（3）

パス　「お願い、立ち上がって…。一緒にコスタリカの平和を守って…！」

【アマンダ】ゲームオーバー

※スネーク限定（CO‐OPで二人とも瀕死になった場合も含む）

（1）
アマンダ「どうしたのスネーク⁉ スネーーーーク‼」

（2）
アマンダ「スネーク…冗談でしょ⁉ まだたくさん教えて欲しいことが…スネーーーーク‼」

（3）
アマンダ「立ち上がってスネーク、お願い！ もう司令官(コマンダンテ)を失うのは嫌！ スネーーーーク‼」

※マザーベース兵用（CO‐OPで二人とも瀕死になった場合も含む）

（1）
アマンダ「応答して！ いったい何があったの⁉ ねえ、答えて‼」

（2）
アマンダ「何があったの？ 損害は⁉ 応答して、お願い‼」

※「米軍ミサイル基地潜入」か「管制塔へ」で
アマンダ「どうしてスネーク⁉ あと…あともう少しだったのに…‼」

※CO‐OPで、自分以外が落下死。スネーク限定

（1）
アマンダ「スネーク、戻ってきて！ 作戦は中止よ、仲間が落ちた…！」

（2）
アマンダ「スネーク、作戦は中止よ！ 仲間が落ちた…」

（3）
アマンダ「ボスともあろうものが、どうして同志(コンパ)から目を離したの⁉」

※CO‐OPで、自分以外が落下死。マザーベース兵用

（1）
アマンダ「戻って！ 作戦は中止。仲間が落ちた…残念よ」

（2）
アマンダ「作戦は中止よ、仲間が落ちた。…どうして

こんなことに…」

【チコ】ゲームオーバー

※スネーク限定（CO-OPで二人とも瀕死になった場合も含む）

（1）
チコ　「スネーク、どうしたんだよ⁉　答えてくれよ、スネーーーク‼」

（2）
チコ　「スネーク、答えてくれよ！　一緒にUMAを探すんだろ⁉　スネーーーク‼」

（3）
チコ　「嘘だろスネーク⁉　俺たちを置いて…！スネーーーーク‼」

（4）
チコ　「まだだ！　まだ終わってなーい！」

※マザーベース兵用（CO-OPで二人とも瀕死になった場合も含む）

（1）
チコ　「一体どうしたんだ⁉　ねえ、応答してくれよ！　頼むよ‼」

（2）
チコ　「どうしたんだよ一体！　ねえ、ねえったら……！」

※CO-OPで、自分以外が落下死。スネーク限定

（1）
チコ　「戻ってきて、スネーク！作戦は中止だよ。…仲間が落ちちゃったんだ…」

（2）
チコ　「仲間が落ちちゃった…戻ってきてスネーク。どうしてちゃんと見てなかったんだよ⁉」

※CO-OPで、自分以外が落下死。マザーベース兵用
チコ　「同志（コンパ）が落ちた！　一旦戻ってきて態勢を立て直すんだ」

【ヒューイ】ゲームオーバー

※スネーク限定（CO-OPで二人とも瀕死になった場合も含む）

（1）
ヒューイ「スネーク、何があったんだい⁉　応答してくれ、スネーーーク‼」

（2）
ヒューイ「スネーク、どうしたんだ！　君の力はこんなものじゃないだろう⁉　スネーーーク‼」

※マザーベース兵用（CO-OPで二人とも瀕死になった場合も含む）
ヒューイ「どうした、何があったんだ？　回路は生きてるだろ、応答してくれ！」

※「米軍ミサイル基地潜入」から「対ピースウォーカー戦2」まで
ヒューイ「スネーク、しっかりしてくれ！　誰がピースウォーカーを止めるんだ⁉　スネーーーーク‼」

※「対ピースウォーカー戦2」
ヒューイ「どうした、応答してくれ！　世界が核の炎に包まれてもいいのか…⁉」

【セシール】ゲームオーバー

※スネーク限定（CO-OPで二人とも瀕死になった場合も含む）

（1）
セシール「スネーク！　ねえ、どうしちゃったの？　スネーーーク‼」

（2）
セシール「スネークどうしたの返事して！　スネークってば‼」

（3）
セシール「鳥が哭いてる……どうしたのスネーク！　応答して‼」

（4）低確率で
セシール「スネーク、立ち上がってお願い！　ずっとせがんでたケツァールの鳴き真似してあげるから！」
セシール「いくらでもするから　キョーッキョーッ…」

※マザーベース兵用（CO-OPで二人とも瀕死になった場合も含む）

（1）

セシール「ねえ、何があったの⁉ お願い、答えて……！」

（2）

セシール「応答して、ねえ！ ねえったら‼ …どうしちゃったのかしら…」

（3）低確率で

セシール「あなたは…鳥になったの？」

※CO-OPで、自分以外が落下死。スネーク限定

（1）

セシール「スネーク、どうしよう⁉ あなたのお友達が落ちちゃった！ 戻ってきて‼」

（2）

セシール「スネーク、戻って！ 今、あなたのお友達が落ちて…人に翼があれば…」

※CO-OPで、自分以外が落下死。マザーベース兵用

（1）

セシール「急いで戻って！ あなたのお友達が落ちちゃったわよ‼ ああ…」

（2）

セシール「そんな、嘘でしょ…。今、あなたのお友達が落ちて…戻って来て‼」

【ストレンジラブ】ゲームオーバー

※スネーク限定（CO-OPで二人とも瀕死になった場合も含む）

（1）

ストレンジラブ「どうしたスネーク、何があった⁉ 応答（アクノリッジ）を返せ、スネーーーク‼」

（2）

ストレンジラブ「しっかりしろスネーク！ それでもあの人の弟子か⁉」

（3）

ストレンジラブ「見込み違いだったな…残念だよ、スネーク…」

※マザーベース兵用（CO-OPで二人とも瀕死になった場合も含む）

（1）

ストレンジラブ「どうした、状況を報告しろ！　応答（アクノリッジ）を返せ！」

（2）

ストレンジラブ「どうした、答えろ！　せめて状況を報告してからに…ダメか…」

※CO‐OPで、自分以外が落下死。スネーク限定

（1）

ストレンジラブ「戻ってこい、スネーク！　お前の仲間が落ちた。作戦は中止だ‼」

（2）

ストレンジラブ「戻ってこい、お前の仲間が落ちた！　何してた、あの人なら仲間を見捨てはしなかったぞ！」

※CO‐OPで、自分以外が落下死。マザーベース兵用

（1）

ストレンジラブ「戻って来るんだ、同行者が落ちた。態勢を立て直せ！」

（2）

ストレンジラブ「作戦は中止だ、同行者が落ちた。…人は脆い…」

「EXTRA OPS」無線集

■EXTRA OPSミッション前強制無線デモ汎用

特定のミッションを除き、使用される【ミッション前強制無線デモ】の一覧

【汎用1】

ミラー「これより、ミッションを開始する」

ミラー「ミッションを遂行し、フルトン回収地点まで、無事生還してくれ」

ミラー「健闘を祈る」

【汎用2・難易度高】

ミラー「これより、ミッションを開始する」

ミラー「厳しいミッションとなるだろう。長期戦を覚悟してくれ」

ミラー「やってくれると信じている。頼んだぞ」

【汎用3・難易度低】

ミラー「これより、ミッションを開始する」

ミラー「肩慣らしに丁度いい、簡単なミッションだ」

ミラー「だが油断するな。確実に成し遂げるんだ」

【汎用4・練習用】

ミラー「訓練を兼ねたミッションを開始する」

ミラー「基礎能力を上げる重要なミッションだ」

ミラー「心してかかってくれ」

【汎用5・ボス用1】

ミラー「ミッション開始だ」

ミラー「激しい戦闘が予想される」

ミラー「無事、帰ってくれ」

【汎用6・ボス用2】

ミラー「危険なミッションだ」

ミラー「強敵が相手になる」

ミラー「あんたならやれる。自分を信じろ」

■リアルタイム無線共通

【任務完了1】

※ゴール出現時

（1）
ミラー　「そこでの任務は済んだ。目的地へ向かってくれ」
（2）
ミラー　「目的地に向かえ。そこで回収する」
（3）
パス　「任務完了ね。目的地へはやく…」
（4）
アマンダ　「あとは目的地に行くだけ…でも気は抜かないで」
（5）
ストレンジラブ「あとは目的地に向かうだけだ」
※フェイズの問題でゴールに入れない
ミラー　「まず警戒を解くんだ」
【クリアねぎらい】強制無線
※EXTRA OPSクリア時
（1）
ミラー　「ミッションクリアだ。マザーベースのみんなも喜ぶぞ」
（2）
ミラー　「やったな！　この調子で頼む」
（3）スネーク限定
ミラー　「さすがだな。この程度なら朝飯前か？」
（4）スネーク限定
ミラー　「ミッションクリアだ。よくやってくれた、スネーク」
（5）マザーベース兵限定
ミラー　「よくやった！　帰投してくれ」
（6）マザーベース兵限定
ミラー　「頑張ったじゃないか。これからも期待してるぞ」
【ミッション失敗】ゲームオーバー
※ゲームオーバー汎用
ミラー　「ミッション失敗だ。帰投しろ！」
【時間切れ】ゲームオーバー
※ゲームオーバー汎用
（1）
ミラー　「タイムアウトだ。ミッション失敗」

（2）
ミラー　「時間切れだ…。目的は未達成か…」
（3）
ミラー　「ダメだ、タイムリミットに間に合わない。作戦は失敗だ」
【敵殺害】ゲームオーバー
※敵を殺すとミッション失敗
ミラー　「何をしている。殺してはダメだと言ったろう！」
【敵発見】ゲームオーバー
※敵に発見されるとミッション失敗
ミラー　「見つかっちまったか。訓練は終了だ、戻ってくれ」

■射撃訓練

【ミッション前強制無線デモ001】
※［EXTRA OPS：001　射撃訓練：無限］選択時
ミラー　「射撃訓練を開始する。今日は特別に、射撃訓練場の標的（ターゲット）を自由に、無制限に撃つことを許可する」
ミラー　「訓練を終了したい場合は、出口に行けばいい。思う存分撃ってこい」
【射撃場説明】強制無線
※［EXTRA OPS：001　射撃訓練：無限］開始時
ミラー　「ここは射撃場だ。武器の試射には持って来いだろう？」
ミラー　「訓練を終了したい場合は、出口に行けばいい」
【終了方法】
※［EXTRA OPS：001　射撃訓練：無限］でCALL
（1）
ミラー　「終了したければ、出口へ向かってくれ」
（2）
ミラー　「訓練を終了したい場合は、出口に行けばいい」

（3）

ミラー　「出口から外へ出れば、武器の操作練習は終了だ」

【訓練開始】強制無線

※［EXTRA OPS：001　射撃訓練：無限］で、スタート位置についたら

ミラー　「それでは、射撃訓練を開始する」

【ミッション前強制無線デモ002】

※［EXTRA OPS：002　射撃訓練：無限］選択時

ミラー　「射撃訓練を開始する。今日は特別に、キルハウスの標的（ターゲット）を自由に、無制限に撃つことを許可する」

ミラー　「訓練を終了したい場合は、出口に行けばいい。思う存分撃ってこい」

【キルハウス説明】強制・任意無線

※［EXTRA OPS：002　射撃訓練：無限］で、開始直後

ミラー　「ここは近接戦闘訓練施設（キルハウス）だ」

ミラー　「開発した武器の試射はここでするといい」

ミラー　「タイムアタックも出来る。腕試しにどうだ？」

【射撃訓練用ターゲット】任意無線

※［EXTRA OPS：002　射撃訓練：無限］で、「キルハウス説明」の後

ミラー　「訓練用に隠顕式（ポップアップ）の標的（ターゲット）を用意した」

【近距離ブース】任意無線

※［EXTRA OPS：002　射撃訓練：無限］、近距離ブース内でCALL

ミラー　「ここは短射程ブースだ」

ミラー　「ハンドガンやショットガンといった、射程が短い武器のトレーニングに使ってくれ」

【遠距離ブース】任意無線

※［EXTRA OPS：002　射撃訓練：無限］、遠距離ブース内でCALL

ミラー　「ここは長射程ブースだ」

ミラー　「スナイパーライフルやミサイルのような、射程が長い武器の実射に使う」

【投擲系ブース】任意無線

※［EXTRA OPS：002　射撃訓練：無限］、投擲系ブース内でCALL

ミラー　「ここの標的は、武器の照準線に乗らないよう配置されている」

ミラー　「弾道が山なりの武器。例えばグレネードなんかの、投擲系武器のトレーニング用ってことだ」

【総合ブース】任意無線

※［EXTRA OPS：002　射撃訓練：無限］、総合ブース内でCALL

ミラー　「ここは総合練習ブースだ」

ミラー　「あらゆるシチュエーションを想定して標的が出てくる」

ミラー　「日ごろの訓練の成果を出すんだ」

【標的を倒した】強制無線

※［EXTRA OPS：002　射撃訓練：無限］で、ブース内の全標的を倒した

ミラー　「よし！　今いるブースの的は全部倒したな。先へ進んでくれ」

【ミッション前強制無線デモ003】

※［EXTRA OPS：003　射撃訓練：スコアアタック］選択時

ミラー　「これより、射撃訓練を行う。マザーベース射撃訓練場の、全標的を撃ち抜くんだ」

ミラー　「残り時間が0になったら、訓練終了だ」

【ミッション目的1】強制無線

※［EXTRA OPS：003　射撃訓練：スコアアタック］で、開始直後

ミラー　「制限時間内にできるだけ的を倒すんだ！」

【ミッション前強制無線デモ004】

※［EXTRA OPS：004　射撃訓練：タイムアタック］選択時

ミラー　「これより射撃訓練を行う。キルハウスの全標的（ターゲット）を撃ち抜くんだ」

ミラー　「残り時間が0（ゼロ）になったら、訓練終了だ」

【ミッション目的2】強制無線

※［EXTRA OPS：004　射撃訓練：タイムアタック］で、開始直後

ミラー　「これはタイムアタックだ。的を倒しながら先に進んでくれ」

ミラー　「時間内に最後の的を倒せばミッション終了だ」

【訓練終了】強制無線

※［EXTRA OPS：003　射撃訓練：スコアアタック／004　射撃訓練：タイムアタック］で、終了時

ミラー　「訓練終了だ！」

■ターゲット射撃

【ミッション目的】強制無線

※［EXTRA OPS：005・006・007・008・009　ターゲット射撃］で、開始直後

ミラー　「なるべく早く、正確に的を狙うんだ」

【射撃訓練応援】任意無線

※［EXTRA OPS：005・006・007・008・009　ターゲット射撃］でCALL

(1) パス　「的は反撃してこないと思うけど、気をつけてね」

(2) パス　「敵がいないからちょっと安心…」

(3) パス　「的に当てる訓練なのね」

(4) パス　「まわりに気をつけて撃ってね…」

(5) アマンダ　「しゃがんだ方が安定する。手ぶれが抑えられるはず」

(6) ストレンジラブ「相手は的だ、外すなよ？」

【射撃をほめる】強制無線
※［EXTRA OPS：005・007・008　ターゲット射撃］で、ターゲットを連続で打ち抜いた時
（1）
ミラー　「ブラボー！　見事なもんだ」
（2）スネーク限定
ミラー　「さすがボス！　ほれぼれするぜ」
（3）マザーベース兵限定
ミラー　「やるじゃないか！　この調子で頼む」

■フルトン回収

【ミッション前強制無線デモ010】
※［EXTRA OPS：010　フルトン回収］選択時
ミラー　「俺達のボス（スネーク）が、沿岸の資材搬入施設付近に潜入し、兵士を気絶させた」
ミラー　「そのまま放置しておくには惜しい。フルトン回収で捕獲してくれ」
ミラー　「制限時間は気絶から醒めるまで！　頼んだぞ」

【気絶兵回収せよ】強制無線
※［EXTRA OPS：010　フルトン回収］で
（1）
ミラー　「気絶した兵士をフルトン回収するんだ」
ミラー　「兵士をフルトン回収するには、アイコンが出るまでそいつに近づいて、アクションボタンを押せ」
（2）
ミラー　「気絶した兵士をフルトン回収するんだ」

【グズグズするな】強制無線
※［EXTRA OPS：010　フルトン回収］で、一定時間経過後
ミラー　「急いで気絶した兵士を回収するんだ。グズグズしてたら目を覚ますぞ」

【早く回収せよ】任意無線
※［EXTRA OPS：010　フルトン回収］でCALL
（1）
アマンダ　「目的は気絶してる兵士のフルトン回収よ」

（2）
チコ　「兵士が目を覚ましたら回収できないよ」
（3）
セシール　「急がないと起きちゃう。早くひゅーんってしちゃった方がいいわ」
【気絶兵のそばで】強制無線
※［EXTRA OPS：010　フルトン回収］、気絶兵のそばで
ミラー　「そこに気絶している兵士がいるな」
ミラー　「そいつをフルトン回収するんだ」
【回収失敗】ゲームオーバー
※［EXTRA OPS：010　フルトン回収］で、兵士が起きた
ミラー　「気絶してた兵士がお目覚めだ。こうなったら回収できん。帰投してくれ」
【全兵士回収せよ】強制・任意無線
※［EXTRA OPS：011・017　フルトン回収］で

（1）
ミラー　「全ての兵士を殺さずに無力化。フルトン回収してくれ」
（2）
ミラー　「全ての兵士をフルトン回収するんだ。殺さないよう気をつけろ」
【研究員を回収せよ】強制・任意無線
※［EXTRA OPS：012・013・016　フルトン回収］で、開始直後
ミラー　「研究員の回収が今回の目的だ」
【早く研究員を回収せよ】任意無線
※［EXTRA OPS：012・013・016　フルトン回収］でCALL
（1）
ストレンジラブ「急がないと研究員は移送されてしまうぞ。早くフルトン回収するんだ」
（2）
ヒューイ　「捕虜になっている研究員はまだ見つけられないのか？」

【捕虜を回収せよ】強制・任意無線

※［EXTRA OPS：014　フルトン回収］で、開始直後

ミラー　「捕虜の回収が今回の目的だ」

【仲間を助けて】任意無線

※［EXTRA OPS：014　フルトン回収］でCALL

（1）

チコ　「頼む、同志を助けてくれ…」

（2）

アマンダ　「お願い、FSLN（フレンテ）の兵士を助けて」

（3）

チコ　「頼むよ、絶対絶対、同志（コンパ）を助け出してくれ！」

（4）

アマンダ　「お願い、早く同志（コンパ）を見つけて！」

【爆弾に注意】強制無線

※［EXTRA OPS：014　フルトン回収］で、捕虜に近づいた時

ミラー　「気をつけろ！　捕虜のそばに爆弾があるかもしれん」

【変装研究員ヒント】任意無線

※［EXTRA OPS：015　フルトン回収］でCALL

（1）

ミラー　「他の敵兵とは明らかに身のこなしが違う兵士を捜せ。それがターゲットだ」

（2）

セシール　「他の兵隊さんとは違って武器を持ってないわ。よく観察して」

■ターゲット爆破

【C4で破壊】強制無線

※［EXTRA OPS：018・019・020　ターゲット爆破］で、開始直後

（1）

ミラー　「敵の物資を破壊しろ。C4爆弾を使え！」

（2）

アマンダ　「C4爆弾でコンテナ（ターゲット）を破壊して」

（3）

チコ　「敵の物資をＣ４でぶっ飛ばしてくれ！」

【任務完了】強制無線

※［ＥＸＴＲＡ ＯＰＳ：０１９　ターゲット爆破］で、任務完了後

ミラー　「いいぞ！　よし、あとは回収地点（ゴール）へ急ぐんだ！」

■輸送トラック爆破

【トラックを破壊せよ】強制無線

※［ＥＸＴＲＡ ＯＰＳ:０２１　輸送トラック爆破］で、開始直後

ミラー　「橋から道路が見えるはずだ。そこを通るトラックを破壊してくれ」

【ドラム缶を利用せよ】任意無線

※［ＥＸＴＲＡ ＯＰＳ：０２１　輸送トラック爆破］でＣＡＬＬ

ミラー　「ドラム缶を利用できないか？」

【トラックを壊せ】任意無線

※［ＥＸＴＲＡ ＯＰＳ：０２１　輸送トラック爆破］でＣＡＬＬ

チコ　「トラックをぶっ飛ばしてくれ！」

【作戦失敗】強制無線

※［ＥＸＴＲＡ ＯＰＳ:０２１　輸送トラック爆破］で、トラックが目的地点に到達

ミラー　「行ってしまった…。作戦失敗だ…」

■敵兵殲滅

【無力化方法】任意無線

※［ＥＸＴＲＡ ＯＰＳ：０２２・０２６・０２７　敵兵殲滅］で、無力化の条件にホールドアップが含まれていないもの

（1）

ミラー　「敵を無力化出来るなら、睡眠・気絶・瀕死状態でも構わない」

（2）

アマンダ　「全ての敵を無力化して！」

【全敵兵無力化せよ】強制無線
※［EXTRA OPS：023　敵兵殲滅］で、開始直後
ミラー　「全敵兵を無力化するんだ」

【攻略アドバイス1】任意無線
※［EXTRA OPS：023・025　敵兵殲滅］でCALL
（1）
アマンダ　「敵にこっちの場所を悟られないで！」
（2）
セシール　「森や山の気配を感じ取って……！」
（3）
チコ　「こっちまで緊張してくるよ…」

【敵兵無力化せよ】強制無線
※［EXTRA OPS：024　敵兵殲滅］で、開始直後
ミラー　「攻め込んでくる敵兵を全て無力化してくれ！」

【攻略アドバイス2】任意無線
※［EXTRA OPS：024　敵兵殲滅］でCALL
（1）
ミラー　「有能な兵士は、できるだけフルトン回収してくれ」
（2）
アマンダ　「全ての敵を無力化して！」
（3）
チコ　「まだ敵が残ってる！　頑張って‼」
（4）
ヒューイ　「後になるほど、有能な兵士が投入されるみたいだ。気をつけて」
（5）
ストレンジラブ「人海戦術か…合理的とは言えんが効果はある」

■アイテム奪取

【コンテナからアイテム入手】任意無線
※［EXTRA OPS：028・029　アイテム奪取］でCALL
（1）

パス　「アイテムを集めるのが今の目的よ」

（2）
チコ　「頑張ってアイテムを回収してくれ」

（3）
ストレンジラブ「無事アイテムを持ち帰ってくれ」

【残りがまだある】任意無線
※［EXTRA OPS：028・029　アイテム奪取］で、回収すべきものが4つ以上ある時

（1）
アマンダ　「まだ回収が終わってないんじゃない？」

（2）
チコ　「まだ終わってないよ！　ちゃんと全部回収しなきゃ！」

（3）
ヒューイ　「任務を途中で投げ出すの？　きちんと回収を終わらせよう」

【残り個数告知】任意無線
※［EXTRA OPS：028・029　アイテム奪取］で、アイテムがあと3つになったら

パス　「あと三つみたい」

※［EXTRA OPS：028・029　アイテム奪取］で、アイテムがあと2つになったら

パス　「あと二つよ」

※［EXTRA OPS：028・029　アイテム奪取］で、アイテムがあと1つになったら

パス　「あと一つ！」

【コンテナ破壊成功】強制無線
※［EXTRA OPS：028　アイテム奪取］で、コンテナ破壊後

ミラー　「うまいぞ！　次は物資の回収だ、急げ！」

【任務完了】強制無線
※［EXTRA OPS：028　アイテム奪取］で、任務完了後

ミラー　「いいぞ！　よし、あとは回収地点（ゴール）へ急ぐんだ！」

【物資奪取せよ】強制無線
※「EXTRA OPS：029　アイテム奪取」で、開始直後
ミラー　「敵の目をかわしながら物資を回収するんだ。道に迷うなよ」

【アイテム取得完了】任意無線
※「EXTRA OPS：029　アイテム奪取」で、ゴール出現後にCALL
ミラー　「アイテムは持ってるな。指定された場所まで運んでくれ」

■機密書類回収

【書類入手ヒント】任意無線
※「EXTRA OPS：030・031・032　機密書類回収」で、敵兵を脅すと重要書類の場所がわかることを示唆。操作タイプ別
（1）共通。（2）か（3）に続く
ミラー　「兵士がターゲットの場所を知っているかも知れん。尋問してみろ」
（2）シューター・アクション
ミラー　「尋問するには、CQCで拘束してからアクションボタンだ」
（3）ハンター
ミラー　「尋問するには、CQCで拘束してからRボタンだ」

【書類について考察】任意無線
※「EXTRA OPS：030・031・032　機密書類回収」でCALL
（1）
パス　「重要書類…どこにあるのかしら？」
（2）
パス　「捜し物は根気が大事よ！」
（3）
ヒューイ　「重要書類…。案外、ラブレターか何かだったりしてね」
（4）
ストレンジラブ「重要書類を見つけてくれ。研究にも役立つかもしれない」

【アイテム取得完了】任意無線
※［EXTRA OPS：032　機密書類回収］で、ゴール出現後にCALL

ミラー　「アイテムは持ってるな。指定された場所まで運んでくれ」

■クレイモア解除

【クレイモア解除方法1】強制・任意無線
※［EXTRA OPS：033・034　クレイモア解除］で

(1)
ミラー　「クレイモアを回収するには後ろから近づくんだ」

(2)
ミラー　「アクションボタンでクレイモアを回収するんだ！」

【まだ回収が終わってない】任意無線
※［EXTRA OPS：033・034　クレイモア回収］で、回収すべきものがまだある時

(1)
アマンダ　「まだ回収が終わってないんじゃない？」

(2)
チコ　「まだ終わってないよ！　ちゃんと全部回収しなきゃ！」

(3)
ヒューイ　「任務を途中で投げ出すの？　きちんと回収を終わらせよう」

■ホールドアップ

【ホールドアップで制圧せよ】強制無線
※［EXTRA OPS：035・036・037　ホールドアップ］で、開始直後

(1)
ミラー　「敵を全員ホールドアップで制圧するんだ！」

(2)
ミラー　「見つかったら終わりだ。ホールドアップで制圧しろ」

【バナナでホールドアップ】任意無線
※［EXTRA OPS：035・036・037　ホー

ルドアップ」でCALL

（1）

チコ「バナナを踏んで転ぶなんてバカな兵士はいないさ。だからバナナは設置武器にはならない」

（2）

セシール「バナナって、おやつに含まれるのかしら?」

（3）

セシール「バナナ園の農薬のせいで、コンゴウインコが減ってしまったのかも…」

（4）

パス「目的は兵士全員の降伏（ホールドアップ）…。お願い、誰も傷つけないで」

（5）

アマンダ「今回の目的は、兵士全員を降伏（ホールドアップ）させることよ」

■拠点防衛

【増援を止めろ】強制無線

※［EXTRA OPS：038 拠点防衛」で、開始直後

ミラー「敵の増援を止めろ！ ボスの邪魔をさせるな！」

【ボスを守れ】任意無線

※［EXTRA OPS：038 拠点防衛」でCALL

（1）

ミラー「ボスを守れ！ それ以上敵の進攻を許すな！」

（2）

アマンダ「勝つぞ（ベンセレーモス）！」

（3）

チコ「俺たちのボスを守るんだ！」

（4）

ヒューイ「頼む、あいつを阻止するために…」

（5）

セシール「今が正念場よ！ 頑張って！」

【敵兵無力化せよ】強制・任意無線

※［EXTRA OPS：039・040・041 拠点防衛」で、開始直後

ミラー　「攻め込んでくる敵兵を全て無力化してくれ！」

【攻略アドバイス】任意無線

※［EXTRA OPS：039・040・041　拠点防衛］でCALL

（1）

パス　「なんとかそこを守りきって！」

（2）

ストレンジラブ「敵兵を全て無力化してくれ、できれば殺さずに」

（3）

ストレンジラブ「しばらく守り続ければ敵も諦めるはずだ」

【拠点制圧された】強制無線

※［EXTRA OPS：039・040・041　拠点防衛］で、敵兵に拠点が制圧されると

ミラー　「敵兵に拠点のひとつが制圧された」

【拠点取り返せ】強制無線

※［EXTRA OPS：039・040・041　拠点防衛］で、敵兵に拠点が制圧されると

ミラー　「早く拠点を取り返すんだ！」

【任務失敗】ゲームオーバー

※［EXTRA OPS：039・040・041　拠点防衛］で、拠点が全て敵兵に制圧されると

ミラー　「拠点が全部制圧されちまった。完敗だ」

■戦闘捕虜防衛

【ミッション前強制無線デモ042】

※［EXTRA OPS：042　戦闘捕虜防衛］選択時

ミラー　「米軍ミサイル基地の地下通路に、敵の増援部隊が送られた」

ミラー　「奴らを、ボスがいる管制塔へ入らせてはならない。この拠点を防衛し、敵部隊の侵入を、何としても阻止するんだ」

【敵小隊を撃て】強制無線

※［EXTRA OPS：042　戦闘捕虜防衛］で、開始直後

ミラー「敵はうじゃうじゃ出てくる。動き回る余裕はないぞ、そこから撃ちまくれ！」

【敵を食い止めろ】任意無線

※［EXTRA OPS：042　戦闘捕虜防衛］でCALL

(1)
ミラー「敵を通すなよ！　そこで食い止めてくれ！」

(2)
アマンダ「全ての敵を無力化して！」

【誤射注意】任意無線

※［EXTRA OPS：042　戦闘捕虜防衛］でCALL

パス「間違って工作員を撃たないでね」

■重要物資防衛

【物資を守れ】強制無線

※［EXTRA OPS：043・044　重要物資防衛］で、開始直後

ミラー「箱には貴重な物資が収められている。守り抜いてくれ！」

【ちゃんと守れ】強制無線

※［EXTRA OPS：043・044　重要物資防衛］で、箱が壊されたら

(1)
ミラー「箱をしっかり守ってくれ！　頼む！」

(2)
パス「なんとかそれを守りきって！」

(3)
ストレンジラブ「敵兵を全て無力化してくれ、できれば殺さずに」

(4)
ストレンジラブ「しばらく守り続ければ敵も諦めるはずだ」

■完全ステルス

【武器は頭脳】強制無線

※［EXTRA OPS：045　完全ステルス］で、開始直後

ミラー「いまは頭脳だけが武器だ。あらゆるアクションを使って進んでくれ」

【攻略ヒント】任意無線

※［EXTRA OPS：045・046・047・048・049・050　完全ステルス］でCALL

(1)
パス　「敵を攻撃しちゃダメ。難しいかもしれないけど、平和のためにもなるはず」

(2)
パス　「平和的に解決しましょう」

(3)
パス　「見つからなければ、争いもない」

(4)
セシール　「絶対に見つからないようにね。自然と一体になるのよ！」

(5)
ストレンジラブ「戦闘は厳禁だ。一切の痕跡を残さず進んでくれ」

■障害物破壊

【ミッション前強制無線デモ051】

※［EXTRA OPS：051　障害物破壊］選択時

ミラー　「進行ルートを確保するため、障害物となっている熱帯雲霧林（クラウド・フォレスト）の瓦礫を破壊するんだ。爆破にはC4を使う」

ミラー　「これが成功すれば、この区域での活動は、遙かに楽になるだろう」

■キッドナッパー殲滅

【UFOを撃ち落とせ】任意無線

※［EXTRA OPS：052　キッドナッパー殲滅］でCALL

チコ　「あの小さいUFOをどんどん撃ち落としてくれ」

■クリアリング突破

【攻略ヒント】任意無線

※［EXTRA OPS：053　クリアリング突破］でCALL

(1)
アマンダ　「隠れているだけじゃダメ。隙を突いて目的地を目指して」

(2)
ストレンジラブ「敵はお前を捜している。気をつけろ」

■スネーク装備品奪還

【ミッション前強制無線デモ054】

※［EXTRA OPS：054　スネーク装備品奪還］選択時

ミラー　「残念な知らせだ…。俺達のボスが敵の手に落ちてしまった。だがボスはきっと、自力で脱出すると信じている」

ミラー　「問題は敵に奪われた装備品だ。これを取り返さなければ、さすがのボスも脱出は困難のはずだ」

ミラー　「そこであんたは、採掘場偽装基地の地下通路へと潜入し、スネークの装備品を全て回収してきて欲しい」

ミラー　「直接ボスを助け出したい気持ちはわかる。だが、今はボスを信じてバックアップに徹するんだ。あんたの活躍は俺が見届ける。頼んだぞ」

【装備品を回収せよ】強制無線

※［EXTRA OPS：054　スネーク装備品奪還］で、開始直後

ミラー　「ボスの装備品を全て回収してくれ。一刻も早く救出したい、急ぐんだ！」

【装備品まだある】強制無線

※［EXTRA OPS：054　スネーク装備品奪還］で、装備品残り1つ

ミラー　「ボスの装備品はまだあるはずだ。全て回収するんだ」

■米兵救出

【捕虜を救出せよ】強制無線

※［EXTRA OPS：055　米兵救出］でCALL

(1)

アマンダ　「米兵だろうがなんだろうが、捕虜の虐待は許されない。必ず助け出して」

(2)

アマンダ　「丸見えの場所に捕虜がいるのは、おそらく罠。気を付けて」

(3)

パス　「お願い…間に合って」

(4)

チコ　「時間がない、急いで！」

（5）

ヒューイ　「彼らは君の助けを必要としている。急いでくれ」

■ワンショット

【全敵兵無力化せよ】強制無線

※「EXTRA OPS：056　ワンショット」で、開始直後

ミラー　「全敵兵を無力化するんだ」

【1発の弾丸で】任意無線

※「EXTRA OPS：056　ワンショット」でCALL

（1）

パス　「落ち着いて、落ち着いて…」

（2）

パス　「深呼吸よ。スー、ハー…」

（3）

アマンダ　「…知恵熱出そう。あんたに任す」

（4）

チコ　「『落ち着け、そしてよく狙え』…俺が言えるのはこれだけさ」

（5）

ヒューイ　「闇雲に狙ってもダメだ。頭を使うんだ」

（6）

セシール　「どかーん！　とやればいいのよ、どかどかどか…どかーん！　って」

（7）

ストレンジラブ「論理的に考えろ。結論は自ずと出る」

【弾切れ】ゲームオーバー

※「EXTRA OPS：056　ワンショット」で、ゲームオーバー時

（1）

ミラー　「弾切れだな、作戦中止だ。戻ってくれ」

（2）スネーク限定

ミラー　「弾切れだな。さすがのあんたでも無理だったか…作戦は中止だ」

（3）マザーベース兵用

ミラー　「弾がなくなったようだな。俺の見込み違いだったか…帰ってこい」

■パパラッチ

【ミッション説明】強制無線
※［EXTRA OPS：057・058 パパラッチ］で、開始直後
ミラー 「敵の指揮官がスクワットしているところを撮影してくれ」
ミラー 「発見されたらゲームオーバーだ」

【写真全くダメ】強制無線
※［EXTRA OPS：057・058 パパラッチ］で、写真撮影失敗（全くの不正解）の場合
ミラー 「何を写してるんだ。フィルムの無駄だぞ」

【写真惜しい】強制無線
※［EXTRA OPS：057・058 パパラッチ］で、撮影対象はOKだが、全身が写っていない場合
ミラー 「ダメだ。障害物なしで、被写体の全身を捉えてくれ。なるべく大きく頼む」

【ヒマな指揮官】任意無線
※［EXTRA OPS：057・058 パパラッチ］でCALL
（1）
ミラー 「ヒマな指揮官か…うらやましいね」
（2）
アマンダ 「指揮官がヒマだなんて…FSLN(フレンテ)じゃそんなことあり得ない」
（3）
チコ 「いいよな、お偉いさんはヒマで…。あっ、ボスのことじゃないよ！」

【撮影完了1】強制無線
※［EXTRA OPS：057 パパラッチ］で、写真が撮れたら
ミラー 「ようし、いい写真が撮れたな！」

【撮影完了2】強制無線
※［EXTRA OPS：058 パパラッチ］で、写真が撮れたら
ミラー 「よし、いい写真が撮れたな。早速現像だ、すぐ戻ってくれ」

■心霊系共通

【幽霊ノイズ混じり音声】任意無線

※［EXTRA OPS：059 心霊写真／060・061・062 亡者の遺産］で、幽霊の近くでCALL

（1）

ミラー 「どうした、応答せよ！ 聞こえないのか？」

（2）

ミラー 「嫌な予感がする…気をつけてくれ」

（3）

ミラー 「どうした、そっちで何が起こっている…？」

（4）

ミラー 「……（ノイズのみ）」

（5）スネーク限定

ミラー 「スネーク、どうした。聞こえないのか？」

（6）スネーク限定

チコ 「気をつけてくれ、スネーク。俺の調べによれば、そこには…！」

（7）マザーベース兵限定

チコ 「やばいよ、そこには何かいる…！」

【生き霊暴走】強制・任意無線

※［EXTRA OPS：059 心霊写真／060・061・062 亡者の遺産］で、幽霊に見つかったら

ミラー 「くそ、幽霊の呪縛が解けたらしい！ 逃げろ、追ってくるぞ！」

■心霊写真

【撮影ヒント】任意無線

※［EXTRA OPS：059 心霊写真］でCALL

（1）

ミラー 「霊がいそうな場所？ 生憎、俺はとんと霊感がなくてな」

（2）

ミラー 「あんた自身の霊感に頼ってみてくれ」

（3）

ミラー 「サラウンドインジケーターには、霊の存在が現れると聞く」

【幽霊について考察】任意無線

※［EXTRA OPS：059 心霊写真］でCALL

（1）
ミラー　「個人的に知りたいんだが…幽霊に脚はあるのか？」
（2）
パス　「怖くないの…？　すごい…」
（3）
アマンダ　「やっぱり、幽霊（ファンタズマ）は実在するのね」
（4）
チコ　「早く幽霊（ファンタズマ）の写真を撮ってくれよ。俺も見てみたいんだ」
（5）
ヒューイ　「心霊写真？　トリックに決まってるさ」
（6）
セシール　「幽霊？　興味ないわ。ハーピーなら見てみたいけど…」
（7）
ストレンジラブ「幽霊などいるはずがない。写真になど写るものか」

■亡者の遺産

【攻略ヒント】任意無線

※［EXTRA OPS：060・061・062　亡者の遺産］でCALL

ミラー　「あの幽霊、瀕死の兵士からあまり離れないみたいだな…」

※［EXTRA OPS：060・061・062　亡者の遺産］で、兵を助けたことで幽霊が消えたことを知らせる

（1）
チコ　「幽霊がその兵士の体に吸い込まれてった…？　すげえ、生き返らせたってことか？」
（2）
ヒューイ　「兵士を蘇生したことで霊魂と肉体とが、再融合したのか…？」

【ジ・エンド】任意無線

※［EXTRA OPS：060・062　亡者の遺産］で、プレイヤーがスネークの場合、瀕死の兵士の近くでCALL

（1）

unknown「終わり（ジ・エンド）だ」

（2）

unknown「どうした⁉　わしはここにいるぞ‼」

（3）

unknown「見つけてやるぞ！」

（4）

unknown「感じるぞ、貴様の気配を！」

※［EXTRA OPS：060　亡者の遺産］で、前の無線を聞いており、ゴール出現後にCALL

ジ・エンド「わしはおまえを見守っているぞ。森となって…」

【夜間ミッション】強制無線

※［EXTRA OPS：062　亡者の遺産］で、なかなかクリアできない時

ミラー「まだ見つからないか？　暗視装置を使ったらどうだ」

【アイテム取得完了】任意無線

※［EXTRA OPS：062　亡者の遺産］で、ゴール出現後にCALL

ミラー「アイテムは持ってるな。指定された場所まで運んでくれ」

■プーヤン・ミッション

【ミッション前強制無線デモ063・064・065】

※［EXTRA OPS：063・064・065　プーヤン・ミッション］選択時

ミラー「何者かが、敵兵のフルトン回収を目論んでいる。敵兵を回収しようとするバルーンを撃ち落として、これを防いでくれ」

ミラー「風船を撃って、敵兵を助ける。『プーヤン・ミッション』だ」

【プーヤンって？】任意無線

※［EXTRA OPS：063・064・065　プーヤン・ミッション］でCALL

（1）

ミラー　「『プーヤン』とは何かって？　『ヤン』というのは、関西弁で『ミスター』みたいな意味だ」
ミラー　「スネークだったらスネヤンだな。俺のこともカズヤンって呼んでええで」
(2)
ミラー　「…スマン。無理をした」
セシール　「なんだか…ゴー、ゴー…。豚肉が食べたくなってきちゃった…」

■ミサイル迎撃ミッション
【ミサイル撃ち落とせ1】強制無線
※［EXTRA OPS：066　ミサイル迎撃ミッション］で
(1)
ミラー　「マザーベースを守ってくれ！　ミサイルを撃ち落とすんだ！」
(2)
パス　「ミサイルを撃ち落として！　みんなを助けて」
(3)
ストレンジラブ「このままではマザーが沈む！　ミサイルを撃ち落とせ！」

【迎撃失敗】ゲームオーバー
※［EXTRA OPS：066　ミサイル迎撃ミッション］で、マザーベースが破壊された
(1)
ミラー　「うぐぉぁーーっ‼」
(2)
ミラー　「各班消火にあたれ！　くそっ　追いつかん…！」
ミラー　「うぉーっ‼」
(3)
ミラー　「おふくろ…そこにいるのはおふくろか？　うぉあっ…！」

■デート関連
【ミッション前強制無線デモ067】
※［EXTRA OPS：067　パスとデート］選択時
スネーク　「パスの様子はどうだ？」
ミラー　「問題ない。ザドルノフに騙されていたのは、ショックだったようだが…」

ミラー　「マザーベースの連中とは、意外とうまくやってるみたいだ」
スネーク　「そうか。それなら良かった」
ミラー　「だが仮住まいとはいえ、年頃の娘が毎日、洋上プラントで過ごすのも気が滅入るはずだ」
ミラー　「たまには、あんたがどこかに連れていってやったらどうだ？」

【パスの台詞】
※［EXTRA OPS：067　パスとデート］でパスが言う台詞一覧
パス　「私も入れて…」
パス　「…」
パス　「えっ？」
パス　「いや…」
パス　「どうして？」
パス　「ひどい」
パス　「…」
パス　「撮ってくれるの？」
パス　「写真、苦手なんだけど…」
パス　「恥ずかしいな…」

パス　「え？　どうしたの？」
パス　「やだ…」
パス　「何を見てるの…？」
パス　「何考えてるの？」
パス　「やめて！」
パス　「やだ、そんな格好…」
パス　「泳ぎにきたの？　危ないからダメ」
パス　「来ないで」
パス　「すごい身体…」
パス　「近づかないで」
パス　「恥ずかしいから近づかないで…」
パス　「どうしたの？」
パス　「捨てちゃうの？」
パス　「一緒に読みたいの？」
パス　「ファミ通？」
パス　「少年マガジン？」
パス　「電撃プレイステーション？」
パス　「何考えてるのよ！」
パス　「何見てるの！」
パス　「変態！」
パス　「ひどい！」

パス「そんなに…見たいの？」
パス「やだ…ダメ…」
パス「隠し事なんて…ない…」
パス「本当よ、信じて…」
パス「私は…パス…、平和を…愛する…」
パス「私…本当は…」
パス「痛いよ…離して…」
パス「マザーベースのレーション…、勝手に食べちゃった…」
パス「スネーク…ダメ…」
パス「スネーク…あなたは…」
パス「ガジョピント…」
パス「はい…わかっています…」
パス「髭が…痛いわ…、スネーク…」
パス「だめだってば…」
パス「何？」
パス「やめてくれない？」
パス「何するの!?」
パス「何してるの？」
パス「どこに行くの？」
パス「すごい」

パス「上手ね」
パス「格好いい…」
パス「せっかく二人なのに…」
パス「無線はまた後にしようよ」
パス「私とは話したくないの？」
パス「えへ…ありがと」
パス「うん」
パス「私も…まだ帰りたくないな…」
パス「私も…もう少しここにいたいな…一緒に…」
パス「やるって…何を？」
パス「何を？」
パス「え？　やだ…」
パス「え？　何…？」
パス「ありがと。ピース！」
パス「うん、大丈夫」
パス「そんなこと言われても…」
パス「…ハイ！」
パス「ありがと。ピース！」
パス「ホント？　うれしい！」
パス「え？　スネーク？」

パス「眠くないよ？」
パス「おやすみなさい…」
パス「あっ…」
パス「どういうこと？」
パス「まいりました」
パス「う、うん…」
パス「そうだね」
パス「私もここよ」
パス「うん…」
パス「えっ⁉　敵⁉　どこ⁉」
パス「うん」
パス「うん、ありがと」
パス「え？　どうして…？」
パス「えっ⁉」
パス「うん…」
パス「うにゃ？　うにゃにゃ…？」
パス「うん、美味しいね」
パス「私といるの、イヤ…？」
パス「はいだらー！」
パス「なんのこと？」
パス「眠くないよ？」

パス「すごい…、燃えてるね！」
パス「きゃっ…、雷⁉」
パス「なんのカバー？」
パス「え？」
パス「おめでとう」
パス「そうだね…」
パス「もう終わりなの？」
パス「ごめんなさい…」
パス「ううん、いいよ」
パス「えへ…嬉しいな…」
パス「そんなの…困る…」
パス「そんな…」
パス「はーい！」
パス「え？　なんでもない…」
パス「どうしたの？　大丈夫？」
パス「そうだね…」
パス「ピース！」
パス「平和のピース！」
パス「平和のためには…勝利が必要なの？」
パス「だから、自分から向かっていくの」
パス「あなたのことね」

パス　「VIC BOSS!」
パス　「VIC VOS!」
パス　「そうして…」
パス　「家族なんて…いない…」
パス　「電撃ゲームス?」

【パスとのデート失敗】ゲームオーバー
※［EXTRA OPS：067　パスとデート］で、パスを怒らせた
(1)
スネーク　「パス、待ってくれ！　パスぅ！」
(2)
スネーク　「俺が悪かった、行かないでくれ！　パス、パスぅ！」

【ミッション前強制無線デモ068】
※［EXTRA OPS：068　カズとデート］選択時
ミラー　「スネーク…。夕陽が綺麗だ…」
スネーク　「…突然どうした、カズ」
ミラー　「いや…。ビジネスについて考えるのもいいが、たまにはこんな夕陽を見ながら、ゆっくりするのも悪くないと思ってな」
スネーク　「…そうだな」
ミラー　「スネーク…、その…、良かったら俺と二人で、海岸まで夕陽を見に行かないか?」

【ミラーの台詞】
※［EXTRA OPS：068　カズとデート］でミラーが言う台詞一覧
ミラー　「俺も入れてくれ！」
ミラー　「見損なったよ」
ミラー　「残念だな」
ミラー　「俺の写真が欲しいか?」
ミラー　「存分に撮ってくれ」
ミラー　「この肉体美、綺麗に撮ってくれよ」
ミラー　「な、なんだ?」
ミラー　「照れるぜ」
ミラー　「服は透けないぞ」
ミラー　「おいおい、よせよ」
ミラー　「そんなに見たいなら…、好きにしてくれ…」
ミラー　「待ってたぜ」
ミラー　「やっぱり、あんたと俺は…」

ミラー　「いい大胸筋だ…」
ミラー　「天国（ヘブン）へ行こうぜ」
ミラー　「おっ」
ミラー　「ははっ」
ミラー　「やったな！」
ミラー　「お返しだ！」
ミラー　「喰らえ！」
ミラー　「うぐぉぅっ！」
ミラー　「やるなぁ！」
ミラー　「参ったぜ…」
ミラー　「どうした?」
ミラー　「見せろよ」
ミラー　「ファミ通か！　私の報告書に、なかなか採用されなくてなぁ」
ミラー　「少年マガジンか！　グラビアは誰だ？ん?」
ミラー　「電撃プレイステーションか！　放課後プレイだけ見せてくれ！」
ミラー　「電撃ゲームスか！　ゲエム懐古録（ノスタルジア）が楽しみでなぁ」
ミラー　「何も…隠してなど…いない…」

ミラー　「後ろ暗い…ことなど…ない…」
ミラー　「じつは…言っていないことが…、ある…」
ミラー　「俺は…あんたのことを…」
ミラー　「たとえボスと言えど…」
ミラー　「応答してくれ。スネーク…スネーーーク！」
ミラー　「おふくろの味噌汁は…、しょっぱいんだよな…」
ミラー　「親父…俺は、アメリカ人だ…」
ミラー　「やめろよ…違うって…」
ミラー　「ふふ…スネーク…」
ミラー　「なんだよ?」
ミラー　「やる気か?」
ミラー　「効いたぜ…！」
ミラー　「どこに行くんだ?」
ミラー　「落ち着けよ」
ミラー　「やるなぁ」
ミラー　「さすがボスだな」
ミラー　「惚れるぜ…」
ミラー　「無線なんて後にしようぜ、スネーク」
ミラー　「たまには二人で語り合おうじゃないか」
ミラー　「おう」

ミラー「もういいって」

ミラー「ああ、俺たちの戦いは、始まったばかりだ」

ミラー「そうだな、やれる！」

ミラー「まだまだやれる！」

ミラー「いつでも来い！」

ミラー「スネーク…嬉しいこと言ってくれるじゃないか」

ミラー「俺もついてるぞ」

ミラー「あんたを置いて死んだりしないさ」

ミラー「あんたもな」

ミラー「当然だ」

ミラー「あんたこそ」

ミラー「おいおい、照れるぜ」

ミラー「任せてくれ！」

ミラー「いいのか？」

ミラー「そうはいかない」

ミラー「からかうなよ、二人きりだ」

ミラー「スネーク…どうしてだ？」

ミラー「ボス、俺もついて行く」

ミラー「ボス…あんたとなら」

ミラー「お前は一人の男を殺すのだ…」

ミラー「俺も感じるぜ、あんたの魂を！」

ミラー「感じるぜ！　ボス！」

ミラー「見てくれ！」

ミラー「俺もさ、スネーク！」

ミラー「うにゃ？　うにゃにゃ…？」

ミラー「あんたと食うメシがいちばんうまい」

ミラー「それじゃ行かせてもらう！」

ミラー「上がりっぱなしさ！」

ミラー「はいだらー！」

ミラー「なんのことだ？」

ミラー「あんたの腕の中でか？」

ミラー「これが冷静でいられるか！」

ミラー「おお！　燃えるぜ！」

ミラー「大自然が俺たちを祝福している！」

ミラー「あんたはいつもそれだな」

ミラー「サンキュー」

ミラー「俺がいるぞ」

ミラー「つれないな、スネーク」

ミラー「誰も見てないさ」

ミラー「運などに頼らない」

ミラー「もう待てない！」

ミラー　「俺は正常だ」
ミラー　「来てくれ！」
ミラー　「俺はまだやれる！」
ミラー　「そうだな…」
ミラー　「おいおい、俺とあんたの仲じゃないか」
ミラー　「頼りにしてるぜ」
ミラー　「無茶は承知だ」
ミラー　「どうしたんだ、ボス？」
ミラー　「まだこれからだ」
ミラー　「そんなものはない」
ミラー　「まさか、ボス…」
ミラー　「どこにだ？」
ミラー　「俺もあんたが好きだ」
ミラー　「今さらよく言うな」
ミラー　「どうもこうもない」
ミラー　「あんたらしくないな」
ミラー　「俺はいつもあんたを見てる…」
ミラー　「すまない…」
ミラー　「俺のことか？」
ミラー　「いつでも来い！」
ミラー　「ボスはあんただ」

ミラー　「俺は逃げない」
ミラー　「さすがにそれは…死ぬぞ」
ミラー　「スネーク、あんた…」
ミラー　「ベンセレーモス！」
ミラー　「来ないなら放っておけ」
ミラー　「俺たちにはそのどちらも許されない」
ミラー　「あんたがボスだ！」
ミラー　「VOSはあんたって意味だ」
ミラー　「そうしてくれ」
ミラー　「俺の家族は隊の連中だけだ」

【カズとのデート失敗】ゲームオーバー
※［EXTRA OPS：068　カズとデート］で、ミラーを怒らせた
（1）
スネーク　「カズ、おい待ってくれ！　カズぅ！」
（2）
スネーク　「すまん、カズ、やり直そう！　おい、カズ、カズぅ！」

■トレニャー関係

特定の条件を満たすと、エリア「プラヤ・デル・アルバ」にトレニャーが出現

【トレニャー未発見】強制無線
※一定時間トレニャーを発見できなかった時
ミラー　「桟橋のあたりに、ヘンな生き物がいないか？」

【トレニャー居場所ヒント】任意無線
※桟橋からちょっと離れたところで
（1）
チコ　「あれ、UMAじゃない!? ほら、桟橋のとこ！」
（2）
ミラー　「桟橋のあたりに、ヘンな生き物がいないか？」

【トレニャー目の前】任意無線
※トレニャーの目の前で
（1）
チコ　「す、すごいよ！ 本物のUMAだ!!」
（2）
ミラー　「俺は…夢でも見てるのか？」
（3）
パス　「可愛い!! コスタリカにこんな子がいるなんて！」
（4）
セシール　「うわあ、可愛い！ スネーク、連れて帰って！」
（5）
セシール　「私に任せて！（ネコの物真似）…えっ、ネコじゃない？」
（6）
ヒューイ　「中に人が入ってるんだろ？ えっ、違う？」
（7）
ヒューイ　「に、二足歩行してる!? 研究の参考になるかも…」

■狩猟クエスト共通

【肉焼きセット】強制無線
※肉焼きセットアイコンが出たら

ミラー　「それは肉焼きセットだ。アクションボタンでレーションだって焼ける」

【レーション焼き中止】強制無線

※レーション焼き中

ミラー　「焼くのをやめるにはもう一度アクションボタンだ」

【レーション焦げてる】強制無線

※レーションを焦がした

ミラー　「おい、焦げてるぞ！」

【肉焼きトーク】任意無線

※レーション焼き中～後

（1）

アマンダ　「焼き肉はタイミングよ！　レーションだって同じ」

（2）

セシール　「その肉焼き機で、豚に…。あっ、間違えちゃった！　鶏肉を焼きたいわね」

（3）

ヒューイ　「焼きすぎると不味いだけじゃなくて体にも悪いぞ」

（4）

パス　「冷たいごはんってなんか寂しいよね…。あったためたほうが美味しいかも」

（5）

ストレンジラブ　「ずいぶんワイルドな調理器具だな。大丈夫なのか？」

【焼き成功】強制無線

※「こんがりレーション」が生成された

ミラー　「美味そうじゃないか！」

【焼き失敗】強制無線

※「生焼けレーション」か「コゲレーション」が生成された

ミラー　「ははは、料理は下手だな」

【上手に焼けた】任意無線

※「こんがりレーション」が生成された（焼き成功）

（1）

ミラー　「上手に焼けました～！」
（2）
アマンダ　「上手に焼けました～！」
（3）
セシール　「上手に焼けました～！」
（4）
チコ　「上手に焼けました～！」
（5）
ヒューイ　「上手に焼けました～！」
（6）
パス　「上手に焼けました～！」
（7）
ストレンジラブ「上手に焼けました～！」

【モンスターにびっくり】強制無線
※開始直後
（1）
ミラー　「うわっ、なんだあの怪物(モンスター)は⁉」
（2）
ミラー　「やめてくれ、おい…現実とは思えん…」
（3）
ミラー　「おい、冗談だろ⁉　あいつはなんだ⁉」

【怪物狩り】強制無線
※戦闘2回目以降
ミラー　「いたぞ…。よし、怪物狩り(モンスターハント)といこうじゃないか」
※戦闘3回目以降で、ティガレックスかギアレックスを見た時
ミラー　「見ろよ！　イカスぜ！」
※戦闘前か戦闘中にCALL
ミラー　「気をつけろスネーク、相手は怪物(モンスター)だ！」

【咆哮に注意】任意無線
（1）
チコ　「咆吼をまともに聞いたら動けなくなるよ！」
（2）
チコ　「耳栓みたいなものがあれば、咆吼を防げるんだけど…」

【ランポスに注意】任意無線
チコ「ランポスがいる！　気をつけて！」

【モンスター感想】任意無線

（1）
アマンダ「丁度いい。こいつに蛙（ソモサ）を食べてもらいましょう！」

（2）
アマンダ「すごい…もうチコに「実在しない」なんて言えないね」

（3）
アマンダ「バカな…！　こんな怪物、人間に倒せるわけが…」

（4）
セシール「モ、モンスター…、モンスター様に話しかけてみるわね。…出来るわセシール」
セシール「がーっ！　ぶぉー！　ぐぉー！　ぐぐぐ…しゃーっ！　うぉう…」

（5）
セシール「すごい！　鳥より素敵だわ！」

（6）
ヒューイ「本物の爬虫類（レプタイル）か！」

（7）
パス「モ、モンスター？　いくらコスタリカが生き物の宝庫だからって…」

（8）
パス「怪物の島…本当だったのね…」

（9）
ストレンジラブ「こんな生き物が本当にいたとは…。世界は広い」

【アイルーに話しかけて】任意無線
※アイルーがそばにいる時。CO-OPS通信促し

（1）
チコ「そこにいるの、アイルーじゃない？　話しかけてみたらどうかな」

（2）
チコ「うわ、本物のアイルーだ！　話しかけてみてよ、現地語は得意だろ？」

（3）
チコ「俺に話しかけたってしょうがないだろ。仲間に呼びかけるつもりでやらないと」

【アイルーは敵じゃない】強制無線
※アイルーに何度も攻撃すると
（1）
ミラー　「そいつは狩り（ハント）の対象じゃないぞ！」
（2）
ミラー　「何てことをするんだ！　そいつは敵じゃない‼」
（3）
チコ　「おいやめろ、UMAネコだぞ、珍しいんだぞ！　死んだらカプコンに怒られるぞ！」
（4）
セシール　「あんなにカワイイにゃんこに、にゃんてことを！　だから乱暴な兵隊はイヤにゃにょ！」
（5）
ミラー　「何てことをするんだ！　そいつは敵じゃにゃい‼」

【スタンロッド効かない】
※スタンロッド攻撃が効かなくなっていたら
（1）
ミラー　「図体がデカすぎる、スタンロッドじゃ歯が立たない」
（2）
ミラー　「大型のモンスターはスタンロッドへの耐性が付きやすいようだな。別の攻め方を考えるんだ」

【ハント終了！】強制無線
※ミッションクリア時
（1）
ミラー　「ターゲットを仕留めたぞ！」
（2）
ミラー　「よし、ハント成功だ」
（3）
ミラー　「ハント終了！　帰投してくれ」
（4）
ミラー　「やったな！　こんなデカブツを仕留めるとは、さすがボス！」
（5）
ミラー　「よし！　こんなデカブツを仕留めるとは、お手柄だな‼」

【ミラーの戦闘アドバイス】任意無線

※ティガレックス・ギアレックス戦中にCALL

(1)

ミラー　「こいつの模様…迷彩の参考になるかもな」

(2)

ミラー　「すごい牙だな。一旦何かに刺さったら、しばらく抜けそうにない」

(3)

ミラー　「猪突猛進だな。逆にうまく誘導できないか?」

(4)

ミラー　「接近しても油断するな！　回転攻撃が来る！」

■リオレウス

【リオレウス目撃】強制無線

※「EXTRA OPS：121　狩猟クエスト・リオレウス／122　狩猟クエスト・リオレウス（黄昏）」で、リオレウスを目撃して

ミラー　「リ、リオレウス！」

【リオレウス攻略】任意無線

※「EXTRA OPS：121　狩猟クエスト・リオレウス／122　狩猟クエスト・リオレウス（黄昏）」で、CALL

(1)

ミラー　「接近しても油断するな！　回転攻撃が来る！」

(2)

チコ　「威嚇姿勢のときに頭を狙うんだ」

(3)

チコ　「急に振り向いたときに突進するみたいだ」

(4)

チコ　「ゆっくり振り向いたときに火を吐くみたいだ」

(5)

チコ　「近づきすぎると尻尾で攻撃されちまう！」

(6)

チコ　「空中で脚をバタバタしたら急降下してくるかも！」

■ティガレックス

【ティガレックス目撃】強制無線

※「EXTRA OPS：123　狩猟クエスト・ティガレックス／124　狩猟クエスト・ティガレックス（黄昏）」で、ティガレックスを目にして

ミラー　「これがティガレックス…」

【ティガレックス攻略】任意無線

※「EXTRA OPS：123　狩猟クエスト・ティガレックス／124　狩猟クエスト・ティガレックス（黄昏）」で、CALL

チコ　「良く見て！　突進攻撃は予兆があるよ！」

【ティガレックス見てみたい】任意無線

※「EXTRA OPS：123　狩猟クエスト・ティガレックス／124　狩猟クエスト・ティガレックス（黄昏）」で、CALL

チコ　「俺も見たいなぁ、ティガレックス…」

【ティガレックスの怒り】任意無線

※「EXTRA OPS：123　狩猟クエスト・ティガレックス／124　狩猟クエスト・ティガレックス（黄昏）」で、ティガレックスが怒っている時

（1）

チコ　「そいつは怒ると頭や腕が赤くなるらしい」

（2）

チコ　「怒っている間は防御に専念して！」

■ギアレックス

【ミッション前強制無線デモ127】

※「EXTRA OPS：127　ギアレックス・G残滅作戦」選択時

ミラー　「昨夜未明、太平洋沿岸よりコスタリカ南部に上陸したギアレックスは、なおも北上を続け…」

ミラー　「本日正午に、イラス西部の火口付近へ到達。現在は、その動きを止めている」

ミラー　「軍隊のないコスタリカは、この猛威を抑止出来ず、付近ではギアレックスによる住居、建造物などの被害報告が相次いでいる」

ミラー　「頼む！　コスタリカの平和のため、現地へ向かってギアレックスを鎮めるんだ！」

【ミッション前強制無線デモ128】

※［EXTRA OPS：128　ギアレックス・カリブ大決戦］選択時

ミラー　「まさか、こんなことが…。突如マザーベースを襲撃したギアレックスが、甲板で大暴れしている」

ミラー　「ギアレックスの怒りに触れたのか…。これは、マザーベース最大の危機だ」

ミラー　「頼む。ギアレックスを狩猟（ハント）し、俺達のアウターヘブンを救ってくれ！」

【ギアレックス攻略】任意無線

※［EXTRA OPS：125　狩猟クエスト・ギアレックス／126　狩猟クエスト・ギアレックス(黄昏)／127　ギアレックス・G残滅作戦／128　ギアレックス・カリブ大決戦］で、CALL

（1）

チコ　「そいつは大きな突起で生命力を吸い取るらしい」

（2）

チコ　「突起の根元を撃てば酸の威力が弱まる」

（3）

チコ　「しっぽは危険だよ！　切り落としちゃえ！」

（4）

チコ　「背びれを撃てば棘を減らせるよ！」

（5）

チコ　「頭を撃てば咆吼を弱くできるよ！」

（6）

チコ　「地面に落ちた棘は咆吼と共鳴するらしいよ。壊して」

【ギアレックスについて】任意無線

※［EXTRA OPS：125　狩猟クエスト・ギアレックス／126　狩猟クエスト・ギアレックス（黄昏）／127　ギアレックス・G残滅作戦／128　ギアレックス・カリブ大決戦］で、CALL

（1）

ミラー　「なんだか俺たちと同じ匂いがする。こいつも戦うために生まれてきたって感じだ」

（2）

ヒューイ　「なるほど…合理的なフォルムだ。これは応用が利くかもしれないぞ…」

(3)
チコ　「なんて強そうなUMAなんだ！　まるで戦闘マシンだな！」

(4)
チコ　「ギアレックスは人類による環境破壊に、警鐘を鳴らしているのかも…」

(5)
チコ　「そいつ、生け捕りに出来ないかな？　俺も見てみたい！」

【ギアレックス再び】強制無線
※［EXTRA OPS：127　ギアレックス・G残滅作戦］で、ギアレックスを倒した時
ミラー　「これが最後だとは思えない。第二、第三のギアレックスが現れるかも…」

【マザーベースを守れ1】強制無線
※［EXTRA OPS：128　ギアレックス・カリブ大決戦］の開始直後
ミラー　「マザーベースを守るんだ！　ギアレックスを鎮圧してくれ！」

【マザーベースを守れ2】任意無線
※［EXTRA OPS：128　ギアレックス・カリブ大決戦］で、CALL
パス　「ギアレックスを鎮圧して、マザーベースを守って！」

Briefing

ブリーフィング

「ミラー」ブリーフィングファイル

※「このミッションについて」のファイルは、P591からの「■ミッション情報」をご覧ください

■マザーベース

●洋上プラント

スネーク「カズ、〝教授〟が用意したプラントは、どんな具合だ?」

ミラー「着いた時は笑うしかなかった。海鳥だらけのデカい巣箱って感じだったからな」

ミラー「サビと糞は何とか落とした。基礎構造は傷んでないから、手入れすれば十分使える」

スネーク「もともとはどこの所有だったんだ? いくらボロくても、造るには相当のカネが必要だろう」

ミラー「どうやらこのプラント、アメリカの大学が海洋温度差発電(OTEC)の研究用に造ったものらしい。サビだらけの発電タービンに名前が残ってた」

ミラー「建造にあたっては、もちろん政府や企業の援助もあったんだろう。だが、結局熱効率の問題を解決できずに研究は中止」

ミラー「廃棄されたこいつを、KGBのフロント企業が安く買い叩いた…ってとこじゃないか?」

スネーク「フロント企業を通したとは言え、よくKGBがアメリカ資本のプラントを買えたな」

(CIAとつながっていたことを暗示)

ミラー「ああ、あの〝教授〟、相当のやり手だ」

ミラー「それとこのプラント、同規格のプラントと連結(ジョイント)できる造りになってる」

スネーク「もともとは、プラントを増築していく計画だったんだな」

ミラー「俺たちがそいつをやってやろう。人を集めて、物を作り、拠点としてプラントを拡大するんだ」

ミラー「よろしく頼む、ボス」

・新型プラント

ミラー「新型のプラントは六角(ヘックス)タイプだ。今までのものより面積も広いし、増築も計画的に行える。派手に拡大出来るぞ」

スネーク「六角(ヘックス)か。蜂の巣(ハニカム)みたいだな」

ミラー　「蜂の巣（ハニカム）、結構じゃないか。ハニカム構造は強度が高いって言うぞ。戦車の装甲にも採用が検討されていると聞く」
スネーク　「了解だ。せっせと蜜を運ぶとしよう」
ミラー　「頼んだぞ、ボス」

・女王蜂

スネーク　「ちなみに女王蜂は誰になるんだ?」
ミラー　「そうだな?　俺はパスだと思うけどな」
スネーク　「そうか、俺はストレンジラブ…」
ミラー　「そうだな、セシールもそうかも」
スネーク　「いや、アマンダとも云えるかも」
ミラー　「スネーク、こうしよう。うちの女王蜂は女性陣みんなだ」
スネーク　「了解」

●フルトン回収

ミラー　「スネーク、現地で見つけた捕虜や気絶した傭兵をマザーベースに回収するには、フルトン回収システムを使うんだ」
ミラー　「あんたは体験済みだっていってたが、俺のために手順を確認させてくれ」
スネーク　「わかった」

ミラー　「まずあんたが気絶させた敵や、拘束されている捕虜にバルーンをセットする」
スネーク　「そうだ。回収したい相手の腰にワイヤーを固定する。このワイヤーの先にはヘリウムの詰まったバルーンがついている」
ミラー　「で、こっちはヘリで接近、宙に浮いたバルーンをヘリの回収用フックに引っかけ、上空につり上げてカーゴに格納する」
スネーク　「それでいい」
ミラー　「バッチリだ。回収用のヘリ、HU-1（ヒューイ）へのフック装着も完了したし…」
スネーク　「だがカズ、このやり方には矛盾を感じるんだが」
ミラー　「なんだ、またその話か?」
スネーク　「ふつうフルトン回収は固定翼機で行うもんだ。ヘリがあるなら着陸して直接乗せた方が確実だ」
ミラー　「いいかスネーク、回収は任務中何度も繰り返すことになる。敵の銃火を浴びる危険はなるべく少なくしたい」
ミラー　「それには高速で飛び抜け（フライパス）しながら回収でき

るフルトン回収システムが一番なんだ」

スネーク　「…本音は」

ミラー　「ヘリの方が安い。撃たれたら修理代もかさむし」

スネーク　「それだカズ。コスト管理もいいが…」

ミラー　「ボス、軍にいた頃の感覚はそろそろ捨ててもらわなきゃ困る。俺達は公費で贅沢出来る連中とは違うんだ。それとも…」

スネーク　「わかったわかった。選んだ理由が引っかかるだけだ」

ミラー　「ヘリの方が即応性もある。確かに風変わりかも知れないが不自由は感じないはずだ。あんたもすぐに馴染むさ」

●隊のマーク

ミラー　「スネーク、思い出してくれ」

ミラー　「俺達の創った軍隊の目的は国家や思想に囚われず、必要な土地、勢力に必要な軍事力を供給することだ」

ミラー　「ご大層な信念があるわけじゃないが…」

スネーク　「国の思惑には振り回されない」

ミラー　「そうだ。俺たちは戦うことしかできないが…国家の事情に翻弄されずに生きる」

ミラー　「隊のマークは2億5千万年前の、パンゲア大陸をモチーフにしている。世界がひとつの大陸だった時代」

ミラー　「隔たりのないひとつの世界」

スネーク　「俺達の力はそこに還元する」

●目指すもの

スネーク　「カズ、お前はどうなんだ?　俺たちの組織を拡大したいのか?」

ミラー　「もちろんだ。あんたの言うとおり、どこの国の干渉も受けないような組織にしていきたい」

ミラー　「自分たちを守るためにも相応の力が必要だ」

ミラー　「多くの兵力を養うにも金が要る」

ミラー　「そのためにも俺たちの軍隊をもっと新しいビジネスにしたいんだ」

ミラー　「直接的な戦闘だけじゃなく、兵站、訓練、武器の整備や開発、軍事に関するあらゆることを請け負うような組織だ」

ミラー　「特殊部隊のような少数精鋭の行動力と正規軍にも対抗できる軍事力」

ミラー　「それだけの力があってこそ、国家の干渉から逃れることができる」

ミラー　「とにかくボスはフルトン回収で使えそうな奴を集めてくれ」

ミラー　「それから、人員配置の指示を頼む」

ミラー　「あとの細かいことは俺に任せてくれ」

・特殊部隊

ミラー　「あんたの師匠だったザ・ボスは西側では特殊部隊の母とも呼ばれていたんだってな」

スネーク　「プロパガンダに過ぎん」

ミラー　「だが嘘でもないだろう。最近じゃKGBは破壊工作対策課ってのを立ち上げたらしい。A(アルファ)グループって言ったかな」

ミラー　「ドイツではミュンヘンオリンピックの事件を受けて、国境警備隊にカウンターテロ部隊を創設したという噂もある」

ミラー　「我らがアメリカといえば光輝栄えあるグリーンベレーにSEALチーム、そしてあんたが創ったFOXHOUND…」

ミラー　「ザ・ボスが撒いた種が芽を出し始めているんだ」

ミラー　「俺たちの部隊だってそうだ。だろう？　あんたが創ったんだ。ザ・ボスの遺志を継いでな」

スネーク　「ボスに戦い方を叩き込まれた」

ミラー　「お陰で俺達は通常戦闘以外の任務もやれる」

ミラー　「正規軍の特殊部隊と母親が同じなんだからな」

●メタルギアの必要性

ミラー　「スネーク、あんたの言うとおりだ。俺たちが〝国家に帰属しない軍隊〟である限り、狙われる。抑止する力が必要なんだ」

スネーク　「国々を渡り歩けば、様々な紛争に足を踏み入れることになるだろう」

スネーク　「そこではイデオロギーも、地理も、政治状況も、何もかもが異なる」

スネーク　「そんな状況での軍事支援活動には、メタルギアのような牽制力が必要だ」

ミラー　「…ボリビアで最期を遂げたゲバラのようにならないためにも」

スネーク　「そうだ。俺たちは、自分たちの土地を持た

スネーク　ない。流浪の民（ノーマッド）だ。遊牧民のようなものだ」
スネーク　「俺たちと一緒に歩ける、牧羊犬が必要なんだ」
ミラー　「ああ」
スネーク　「ザ・ボスのやり方とは違うかも知れない」
スネーク　「だが、世界には俺たちを必要としている場所がある。俺たちを必要としている兵士達がいる」
スネーク　「そうである限り、俺たちは歩みを止めない。行脚をやめるわけにはいかない」
スネーク　「俺達こそがピースウォーカーだ」

■依頼人

●ガルベス

ミラー　「あの教授、KGBだったとは…」
スネーク　「〝教授〟も言っていたようにソ連は中南米の共産化に血道を上げている」
ミラー　「キューバの情報機関もKGBに仕切られてるからな」
ミラー　「あの男の依頼に裏はないと思うか？」
スネーク　「CIAが何か企んでいるならKGBがその目的を知りたいと思うのは当然の流れだが、あいつらが手の内を全て明かすとも思えん」
ミラー　「油断は禁物だな」

●パス

スネーク　「カズ、どう思う？　パス自身は何のためにコロンビアまで来たんだ？」
ミラー　「ガルベスにとってはいい説得材料だったとしてもな…」
ミラー　「まあ、16っていえばまだ子供だ。彼女の平和を求める気持ちを素直に信じていいんじゃないか」

・嗅ぎ煙草

ミラー　「スネーク、覚えているか？　パスのクセだ。いつもこう、上唇に人差し指をあてていた」
スネーク　「ああ、初めて会った時から気にはなっていたが…まさか嗅ぎ煙草とはな」
ミラー　「全く気付かなかった」
スネーク　「葉を入れた袋を上あごに挟む。歯茎から吸収するタイプだ」
スネーク　「本人も慣れてなかったのかもしれん。人差

し指で位置を直していたんだろう」

・CIPHER

ミラー　「まさかパスが…バンドを組もうって言ってたのに」

スネーク　「彼女はKGBとも通じていた?」

ミラー　「素性を隠してガルベスに近づいたんだろう。コールドマンはどこまで知っていたのか…」

ミラー　「だがそれも〝CIPHER（サイファー）〟とかいう組織のための工作だった」

スネーク　「〝CIPHER（サイファー）〟…カズ、聞いたことがあるか?」

ミラー　「んー、サイファー…『暗号』、か。あるいは『アラビア数字』『0』…」

スネーク　「ゼロ…」

ミラー　「心当たりがあるのか?」

スネーク　「さあな」

ミラー　「もともとCIPHER（サイファー）とZEROは同じ言葉だったんだ。二重語（doublet）だな」

ミラー　「起源は、サンスクリット語のsunyaに遡る…仏教で言うところの『空』だ」

ミラー　「仏教で言う『空』は〝虚ろな〟といった意味だ。膨れ上がることで、中身が空になった状態を指したらしい」

スネーク　「膨張してできた空か…まるで宇宙だな」

■冷戦

●冷戦

ミラー　「コスタリカだけじゃない。中南米は冷戦の煽りで大国に掻き回されている」

ミラー　「東西を二分したイデオロギーの対立も、結局は支配階級同士の富の奪い合いだろうな」

ミラー　「西側の金持ち（ブルジョア）達にとっちゃ、国が共産化したら大変だ。共産主義は本来、私有財産を否定してるわけだからな」

ミラー　「資本主義の支配者達は躍起になって世界が共産化するのを防ごうとした」

ミラー　「共産主義者狩り（アカ）なんてのもあったな」

ミラー　「一方で共産主義も理想どおりには進まなかった」

ミラー　「階級社会からの脱却を目指した結果が、ス

ターリンの独裁や特権階級（ノーメンクラツーラ）による民衆支配だ」

ミラー「力を持った人間はもはや平等など求めない。そこに共産主義の、いや、社会という集団の限界がある」

ミラー「奴らが欲したのは自らの利益だけだろう」

ミラー「相手陣営は自分の利益を脅かす危険因子だった。そこで資本主義と共産主義の対立構造が生まれたのさ」

スネーク「それに核抑止が絡んだ」

ミラー「そのとおりだ」

●核抑止と相互確証破壊

ミラー「第二次大戦以降、世界規模の大戦がなくなったのは核兵器誕生のためだと言われている」

ミラー「戦争になったら相手は核を撃つかもしれない。そう考えると安易な武力衝突はできなくなる」

ミラー「特に大陸間弾道ミサイル（ICBM）ができてからは、どこにいても安心できなくなった」

スネーク「そのぶん軍事費は膨れあがったが…」

ミラー「先制攻撃を受けないためには、自分たちの核の力を誇示するしかないからな」

ミラー「おかげで核兵器の威力は飛躍的に進歩した」

ミラー「破壊力だけじゃない。遠く離れた目標に正確に命中させる技術もだ」

ミラー「宇宙開発競争はそのデモンストレーションでもあった」

スネーク「その結果が相互確証破壊（MAD）か」

ミラー「核抑止の究極形だ。撃ち返されて自滅することがわかっていれば誰も核なんて撃たない」

スネーク「…わからんぞ。誰かが間違って核のボタンを押す可能性もゼロじゃない」

●冷戦と平和

ミラー「確かに相互確証破壊（MAD）による平和には、事故による危険が付きまとう」

スネーク「機械の誤作動なんかで世界が終わられちゃ困る」

ミラー「とはいえ、核抑止のおかげで世界大戦はあれ以降起きてないんだ。ずいぶんと平和に

なったじゃないか」
スネーク「俺達とは無縁だがな」
ミラー「核開発競争だの宇宙開発競争だので冷戦などと言うが、武力衝突がないならむしろ世界は平和というべきだろう」
スネーク「戦争がなくなったわけじゃない。朝鮮戦争やベトナム戦争を見てみろ」
ミラー「それはそうだが、相対的な話さ」
ミラー「それに、戦争が根絶されたら俺たちが困る」
スネーク「…俺たちは戦争屋じゃない」
ミラー「とはいえ、平和な世界にも生きられない」
スネーク「それはそうなんだが…」

■中米情勢

●キューバ危機

ミラー「キューバ危機から、もう10年以上も経つんだな」
スネーク「だが、忘れようもない事件だ」
ミラー「ああ。1962年10月15日からの13日間は、世界が最も全面核戦争に近付いた日々だと言っていい」
ミラー「ソ連によるキューバへの核ミサイル配備。それに対抗したアメリカの海上封鎖、そして米軍偵察機の撃墜…」
ミラー「あの頃俺はまだ10代だったが、核戦争一歩手前という空気は、よく覚えているよ。大人達は大騒ぎだった」
スネーク「キューバ危機がなければ、あるいはスネークイーター作戦もなかったかも知れん。そして…」
ミラー「どうしたスネーク。仮説の話をするなんて、あんたらしくもない」
スネーク「…そうだな。そのキューバ危機への反省から、米ソのホットラインが敷かれ、緊張緩和（デタント）も進んだ。皮肉なもんだ」

・トラテロルコ条約

ミラー「トラテロルコ条約は、中南米の非核化を目指した条約だ」
ミラー「核兵器の実験・使用・製造・生産・取得・貯蔵・配備を禁止している」
ミラー「キューバの核配備に始まった一連の危機が、条約締結の契機となったようだ」

スネーク「そうだろうな。あの13日間は、全世界が核戦争勃発の恐怖に凍りついた」

ミラー「現時点では、その肝心のキューバが未参加だが」

スネーク「とは言え、20ヶ国以上が批准している条約だ。踏みにじれば国際的に糾弾される」

ミラー「そうだな。ラテンアメリカ核兵器禁止機構（OPANAL）も調査に入るだろう」

ミラー「条約作成にあたっては、日本の非核三原則の概念を参考にしたそうだ」

ミラー「もっとも、トラテロルコ条約は「加盟国に対して核兵器を使わない」ことを核兵器保有国に求めている」

ミラー「ここが非核三原則と大きく異なるところだ。つまり、4番目の原則があるということだな」

●コスタリカの軍隊廃止

スネーク「コスタリカが軍隊を廃止したのは、1949年だったか？　当時の中米で、よくそんな決断ができたもんだ」

ミラー「内戦が終わったばかりだったからな。パスが言うように、その悲劇を繰り返すまい、という気持ちがあったのは確かだろう」

ミラー「ただ、もっと切実な理由もあったはずだ」

ミラー「中南米では、軍部がクーデターを繰り返す国が珍しくない。それを間近で見ていれば…」

スネーク「軍隊がなければ、軍部によるクーデターもない…道理だな」

ミラー「それに経済が疲弊していて、軍隊に回す金がなかった、というのも正直なところだろう」

スネーク「だが当時のニカラグアとは、決して友好的な関係ではなかったはずだ」

ミラー「ああ。実際に侵攻されたこともある。だが、市民警備隊の反撃や、米州機構（OAS）の仲介によって停戦となった」

ミラー「アメリカを始めとした、米州機構（OAS）の後ろ盾を十分に活用したわけだ」

ミラー「火種だらけの中米で、四半世紀も軍隊なしでやってきたんだ。外交努力は必須ってところだろう」

ミラー「市民警備隊の装備も警察にしては豪華だが」

スネーク　「『軍隊のない国』も大変だな」

●中米におけるCIAの活動

ミラー　「スネーク、差し支えなければ訊きたいんだが」

スネーク　「なんだ、いつものように図々しくしたらどうだ」

ミラー　「…あー、CIAの準軍事部隊（パラミリタリー）に所属していたことがあるんだよな」（苦笑い）

スネーク　「そうだ」

ミラー　「中米でも作戦を？」

スネーク　「いや、それはない。だが、別の部隊は色々やってたようだ」

ミラー　「61年のピッグス湾事件は俺もよく覚えている。新聞が派手に書き立てたからな」

スネーク　「『ザパタ作戦』。手ひどい結果に終わった」

ミラー　「それにボリビアでのゲバラ追討（ハントダウン）。これもCIAが関与したと言われてるが…」

スネーク　「MSPだとかSOGだとかいった名前も聞くが、俺の原隊、FOXと似た性格の下部組織がいくつかある」

スネーク　「特殊部隊出身の要員に諜報員としての訓練を施し、〝否定できる（ディナイアブル）〟秘密の準軍事作戦に従事させるんだ」

スネーク　「その連中がボリビア政府軍に対ゲリラ戦術を教え…」

ミラー　「…ゲバラを討たせた」

スネーク　「だろうな」

●CIAの読み方

ミラー　「CIAの事をこっちの連中は〝ラ・シーア〟と呼んでるよな」

スネーク　「不思議でも何でもない。スペイン語の発音規則に則ればそうなる」

ミラー　「語尾が女性形と同じだから定冠詞も〝ラ〟になる、と」

ミラー　「最近一部では、UCLAという言い回しも使われてるらしいな」

スネーク　「知らんな。どういう意味だ」

ミラー　「〝Unilaterally Controlled Latino Assets〟の頭文字を取った言葉らしい」

スネーク　「…現地工作員（エージェント）のことか？」

ミラー　「ああ、どうもそうらしい。合衆国政府が捨て駒として使ってる連中らしいんだが、具体的な素性や何をしているかの詳細は不明だ」

●CIAとKGBの関係

ミラー　「CIAとKGBが手を結んでいたとは、驚いたよ」

スネーク　「支局長クラスが手を組むとはな…現場の諜報員同士が顔見知りになるっていう話は聞くが」

ミラー　「そうなのか?」

スネーク　「諜報活動の舞台は、当然政治的にホットな場所ということになる」

スネーク　「だが、そういった場所は限られている。特に小さい国ではな」

スネーク　「そこに足繁く通っていれば、お互い嫌でも顔を合わせることになるだろう」

スネーク　「そのうち挨拶をするようになり、一緒にメシを食うようになり…」

ミラー　「恋の花咲くこともある、か?」

スネーク　「それはわからん。ともかく、そういった馴れ合いが高じた結果が、この茶番なのかも知れん」

スネーク　「利害が一致すれば、忠義すら投げ捨てる連中もいるとはな…」

ミラー　「情に訴えられる事が、人的諜報（ヒューミント）のメリットだが、同時に情にほだされてしまうのがデメリットでもある」

ミラー　「だから今の諜報世界の潮流は、電子諜報（シギント）に移行しつつある」

ミラー　「情の関与しない、デジタルな情報のみのネットワークだ」

●グレナダ

ミラー　「スネーク、ちょっといいか?」

スネーク　「どうした?」

ミラー　「グレナダのゲイリー首相が国連にUFO問題を扱う専門機関の設置を要請したらしい」

スネーク　「グレナダ…カリブ海沖の島国か」

ミラー　「報道でゲイリー首相がUFO存在の証拠として挙げていたという写真の中に、気になるものがあった」

スネーク　「これは…」

ミラー　「ああ…。ヒューイがクリサリスと呼んでいる兵器だ」

スネーク　「…カズ、これは俺がチコに渡した写真だ」

スネーク　「チコはUFO写真として売ると言っていたが…」

ミラー　「どうやらこの写真は雑誌に掲載されてしまったようだな」

スネーク　「しかし…一国の首相が、雑誌の与太話を信じるのか？」

ミラー　「最近はアメリカ大陸全域でアブダクションやキャトルミューティレーションの話が多い」

スネーク　「UFOによる誘拐、それに家畜の変死か」

ミラー　「CIAが絡んでいるのかもしれん」

スネーク　「だとしたら、ゲイリーとやら…」

ミラー　「ああ。深入りするとマズいことになりかねない」

スネーク　「だがグレナダと言えばキューバの目と鼻の先だ」

ミラー　「その意味ではCIAも手出ししにくいかもしれないが…」

スネーク　「国内のパワーバランスを崩せば、一気に共産化する可能性もある」

ミラー　「そうだな…。いずれにせよ、俺たちに何ができるわけでもないが」

ミラー　「一応、耳に入れておきたかった」

スネーク　「わかった。写真はあまり表に出さないように気をつけよう」

■偉大な指導者

●チェ・ゲバラ

ミラー　「聞いたぞ、スネーク。アマンダにゲバラと間違えられたそうだな」

ミラー　「どうだ、まんざらでもない気分か？」

スネーク　「よしてくれ。俺なんかゲバラの足下にも及ばん」

ミラー　「謙虚だな。俺からすれば、あんたも十分偉大な人間に見える」

スネーク　「相手は「20世紀で最も完璧な人間」だぞ？」

ミラー　「サルトルか？　まあ、ゲバラはすっかり時代の象徴（イコン）になっちまったからな」

スネーク　「それ以上に誠実な革命家で、偉大な戦士だった」

ミラー　「そいつには同意だ。何しろカストロと一緒にキューバへ渡った直後、仲間は12人しかいなかったたって言うじゃないか」

スネーク「だが、彼らはそこから巻き返した。仲間を集め、組織を拡げ、農民の支持を得た」
ミラー「そして、最後にはバティスタ政権を倒した…」
スネーク「誠実さゆえに人が集まり、強いからこそ勝利した。偉大な資質だ」
ミラー「まあ、俺達が置かれた状況も似たようなもんだ」
ミラー「これだけの小勢で、アメリカがバックにいる軍隊に弓を引こうってんだから」
スネーク「ゲバラへの道は遠い」（苦笑）
ミラー「だが、歩んでいく他ない。戦いに勝つだけでなく、人を集め、組織を拡大することにも、気を配ってくれ」
スネーク「了解だ」

・ゲバラの足跡

ミラー「なあ、スネーク。俺は最近思うんだが…ゲバラも結局、戦場以外に居場所を見つけられなかったんじゃないかな」
スネーク「どういう意味だ？」
ミラー「ゲバラはキューバ革命を成し遂げた。偉大な戦果だ。そこにあぐらをかいたって、誰も責めないはずだ」
ミラー「なのに、ゲバラは暖かい家庭も大臣の座も捨てて、革命の戦地に身を投じたんだ」
ミラー「コンゴ。そしてボリビア。そこが彼の最期の地になった」
スネーク「考えすぎだ。ゲバラが再び戦場へ赴いたのは、そこが彼を必要としたからだ。『別れの手紙』を読めばわかる」
ミラー「理想主義が過ぎて、政府に居場所がなくなったって話もある」
スネーク「彼の潔癖さのせいだろう」
ミラー「そりゃそうなんだが…」
ミラー「ただ、俺やあんたがゲバラに惹かれるのは、自分に似た匂いを感じるからじゃないか…そう思っただけさ」
ミラー「祖国を出て戦いに身を投じ、自分が必要とされる戦場を渡り歩く…」
スネーク「ゲバラは戦士である以上に革命家だった。理想を実現するために銃を取った」
スネーク「俺は思想のために戦わない。俺は戦士（war fighter）

ミラー　だ。それ以上でも以下でもない」
ミラー　「わかったボス。その通りだ。偉大な英雄と自分を重ねてみたかっただけなんだよ」

●ゲリラ戦の歴史

ミラー　「ボス、ゲバラが書いた『ゲリラ戦争』は読んだか」
スネーク　「いや…どうだったかな」
ミラー　「せっかく貸してやったのに。この本に書いてあるゲリラの戦術は、潜入ミッションと共通する部分があるんだ」
ミラー　「ゲバラは、ゲリラ戦法を理論化した一人だからな」
ミラー　「他には〝アラビアのロレンス〟ことT．E．ロレンス少佐。『遊撃戦』を著した毛沢東…」
ミラー　「理論化はともかく、ニカラグアのサンディーノ将軍も、ゲリラ戦法を取り入れた一人だ」
ミラー　「FSLN（サンディニスタ）がその名に掲げるだけのことはある」
スネーク　「もっとも、遙か昔からゲリラ戦法自体は存在した。少人数で大軍を撹乱する手段は限られるからな」

ミラー　「日本にも、ゲリラ戦法に長けたサムライがいたぞ」
スネーク　「ほう」
ミラー　「楠木正成。中世の武士だ。奇襲攻撃を駆使して、鎌倉幕府の転覆に一役買った」
スネーク　「例えばどんな？」
ミラー　「トロイの木馬戦法での潜入、藁人形（デコイ）での撹乱…。極めつきは城壁を登ってくる敵に、熱湯や糞尿を…」
スネーク　「そいつはいい。早速うちでも取り入れよう」
ミラー　「…本気か？　ボス」
スネーク　「材料には事欠かないからな」
ミラー　「あー、まあしばらく考えておこう」

●マテ茶

スネーク　「カズ、どうした。声に元気がないぞ」
ミラー　「いや、こっち（マザーベース）もいろいろ問題が山積みでな…」
スネーク　「マテ茶でも飲んで、一服するといい。隊の連中と回し飲みすれば、コミュニケーションにもなる」
ミラー　「ゲバラ達も、そうやってマテ茶を回し飲みしたのかな」

スネーク「そうだろうな。彼のマテ茶好きは有名だ」
ミラー「しかし、よく考えたもんだ。ヒョウタンに入れて携帯できるし、ストローに漉し器が付いているから、すぐ飲める」
スネーク「それだけじゃない。食料が不足しがちなゲリラ戦において、ビタミンやミネラルの補給にもなる」
ミラー「俺もハイキングの最中に、金髪のパリジェンヌと回し飲みできれば最高なんだが」
スネーク「…何で知ってるんだ」
ミラー「蛇の道は蛇だよ、スネーク」

●ゲバラの広島訪問

ミラー「キューバ革命が成功した年、ゲバラは経済使節団の代表として訪日した。そこで彼は、広島を訪れている」
スネーク「ヒロシマか…」
ミラー「経済使節と言うこともあって、広島訪問はもともとの予定になかった」
ミラー「外務省が行かせたがらなかった、という話もある。だが彼は広島へ向かった。突然の訪問だったそうだ」

スネーク「まさにゲリラ訪問だな。ゲバラらしい」
ミラー「原爆資料館と原爆病院を見学したゲバラは、相当ショックを受けたらしい」
ミラー「彼は医者だ。被爆者の苦しみは痛いほどわかったろう」
スネーク「核はすべてを破壊する…」
ミラー「ゲバラはこう言ったそうだ。『こんなにされてなお、あなた達はアメリカの言いなりになるのか』と」
ミラー「…俺にとっても重い言葉だ。お袋のことを考えるとな」
ミラー「彼はこうも言った。『これからは広島を、広島の人々を愛していこう』」
スネーク「彼らしい話だ。ゲバラは他人の痛みに鈍感になれなかった男だ。それゆえ愛され、そして死んだ」

●スカーフ

ミラー「あんたがいつも巻いているバンダナ、随分な年代物だな。新品にしたらどうだ?」
スネーク「いや、いい」
ミラー「だが我々のボスが、ボロボロのバンダナを

巻いてるってのも…」

スネーク「いや、これは人から譲り受けたものだ。捨ててしまうわけにはいかない」（ザ・ボスの形見）

ミラー「ああ、そういうことなら…。そう言えばゲバラも、黒いスカーフを大事に持っていたらしいな」

スネーク「スカート？」

ミラー「…いや、スカーフだ」

スネーク「ああ」

ミラー「戦闘で腕の骨を折った時、仲間からもらったそうだ」

ミラー「ゲバラはその絹のスカーフで腕を吊り…スカーフをくれた相手は、彼の後妻になった」

スネーク「アレイダとか言ったな」

ミラー「腕が治ってからも、ゲバラはそのスカーフを、肌身離さず持っていたそうだ」

ミラー「そのバンダナも、いい人からもらったのか？」

スネーク「そんなんじゃない…だが、大事なものだ」

■平和憲法

●日本の平和憲法

スネーク「『日本にも平和憲法がある』と言っていたな」

ミラー「ああ。戦争の放棄を謳った、憲法第9条だ」

ミラー「1、日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し…」

ミラー「国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する」

ミラー「2、前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない」

スネーク「…よくすらすらと出てくるな（半ば呆れている）」

ミラー「昔取った杵柄だ（自衛隊にいた時に覚え込まされた）」

スネーク「大したもんだ。しかし、ちょっとわかりづらいな。『解決する手段としては』とか」

ミラー「そう、そこが議論になっている。全ての武力行使を否定しているのか、という点だ」

ミラー「もともと、今の憲法は連合軍の占領下で制

定された。草案も、当時の連合国司令部から提示されたものだ」

ミラー　「だから、憲法は外国に押しつけられたものだ、と考える人間もいる」

スネーク　「どの国にも、込み入った事情があるということか…」

ミラー　「だが、〝軍隊〟を持たないことで、戦後の日本が経済復興を優先できたのは確かだろう。そこはコスタリカと同じだ」

・９条と自衛隊

スネーク　「カズ、お前日本じゃ自衛隊にいたんだよな」

スネーク　「さっき聞いた憲法第９条では、日本は軍を持たないことになっていたはずだが…」

ミラー　「そう、それもまた議論のタネだ」

ミラー　「『自衛隊は防衛のための組織であり、憲法第９条は自衛権までは否定していない。従って、自衛隊は合憲である』」

ミラー　「これが日本政府の見解だ」

スネーク　「…複雑だな」

ミラー　「良いか悪いかは別にして、これは実に日本的な解釈だよ」

●日米安全保障条約

スネーク　「日本には、アメリカ軍が駐留していたな」

ミラー　「そうだ。連合国による占領が終わった後も、日米安全保障条約に基づいて、米軍が駐留を続けている」

スネーク　「そこはコスタリカと違うな」

ミラー　「占領って経緯もあるが、そもそもアメリカにとって、日本は戦略上とても重要な位置にある」

ミラー　「ソ連は目と鼻の先だし、中国や北朝鮮にも近い。太平洋の安全保障にとっても不可欠だ」

ミラー　「アメリカにしてみれば、日本は『共産主義からの防波堤』なんだ」

スネーク　「日本にとっては？」

ミラー　「もちろん、日米安保への反対は根強い」

ミラー　「１９６０年と７０年の条約改定時には、大きな反対運動が起きた」

ミラー　「特に沖縄は、２年前にアメリカから返還されたばかりで、基地が集中している。県民の負担も大きい」

スネーク　「なら、なぜ条約を破棄しないんだ」

ミラー　「いろいろだ。もちろんアメリカとの力関係もある。それに条約を破棄すれば、アメリカの核の傘からも抜け出すことになる」
ミラー　「米軍撤退後、自衛隊だけで国が守り切れるのか…俺には何とも言えん」
ミラー　「コスタリカが、米州共同防衛条約、いわゆるリオ協定を恃みにしているのと同じだ」
スネーク　「平和憲法を持つ国が、他国の軍隊を受け入れざるを得ない…皮肉なことだ」
ミラー　「一方で、アメリカにも不満はあるようだ。日本は、米軍による安全保障にただ乗りしていると」
ミラー　「最近日本の工業製品が、アメリカに進出しているだろう?」
スネーク　「ああ」
ミラー　「軍備費を経済復興に振り向けた日本が、アメリカの市場でシェアを伸ばしている。面白くはないだろうな」

・核の傘

ミラー　「今日本は、アメリカが持つ核の傘の下にある…」

スネーク　「そうだな」
ミラー　「アメリカは、同盟国が核攻撃を受けたら、相手国を核攻撃する…そう宣言することで、同盟国への核攻撃を抑止する」
ミラー　「これが核の傘だ」
ミラー　「だが、実際にソ連が東京へ核を撃ったとして、アメリカは本当にモスクワへ核を撃つか?」
ミラー　「モスクワに核を撃てば、確実にソ連はアメリカに報復するだろう」
ミラー　「ワシントンD.C.に核を落とされる危険を冒してまで、日本のために反撃するか?」
ミラー　「…俺にはわからない」
スネーク　「どうした。今さら日本のことが気がかりか?」
ミラー　「そう言うわけじゃないが…」
スネーク　「…正直、俺にもわからん」
スネーク　「だが、それはソ連にとっても同じ事だ。アメリカは日本のために報復しないかも知れん。だが報復するかも知れん」
ミラー　「それなら、ソ連は報復される危険を冒さな

いだろう…ということか」

スネーク「そもそも核抑止自体が、仮定の上に成り立っている。所詮は幻想だ」

●非核三原則

ミラー「『核兵器を持たず、作らず、持ち込ませず』…これが、日本政府が示した『非核三原則』だ」

スネーク「〝持ち込ませず〟…? 妙だな。日本に寄港する米軍艦の中には、核を積んでいるのもあるだろう」

スネーク「それとも、いちいち海の上で積み替えているとでも言うのか?」

ミラー「あんたの言うとおりだ、スネーク。だが、少なくとも日本政府は認めていない」

ミラー「核の持ち込みは事前協議の対象だ。アメリカ側から事前協議はない。従って、核は持ち込まれていない…それが答弁だ」

スネーク「それは…答えになってんのか?」

ミラー「さあな。ただ、日本は核被爆国だ。核に対する拒否反応は、あんたが考えている以上に強い」

ミラー「政府もなかなか認めるわけにいかないんだろう」

●自衛隊

スネーク「カズ、お前がいた自衛隊は、軍隊とどう違うんだ?」

ミラー「自衛隊は、自国防衛のための組織だ。他国への侵攻を想定していない。いわゆる専守防衛だな」

スネーク「専守防衛?」

ミラー「自衛隊の基本的な軍事戦略だ。先制攻撃を行わず、相手の攻撃を受けてから、最低限の防衛行動を取る」

スネーク「それなら自衛権の範疇、というわけか」

ミラー「もともと自衛隊は『警察予備隊』として始まったんだ」

ミラー「その頃、朝鮮戦争のおかげで在日米軍が出払ってしまった。その穴を埋める意味もあったんだろう」

スネーク「警察か…コスタリカの市民警備隊を思い出すな」

ミラー「そうそう、災害救助に派遣されることもある。俺が入隊する前の年も、転落したバス

の救助で大変だったらしい」

・除隊の理由

スネーク「なぜ自衛隊を辞めた?」
ミラー「日本にいる理由がなくなったからだ」
スネーク「理由?」
ミラー「3年前にお袋が死んで、面倒を見る必要がなくなった。なら何も、日本に燻っていることはない」
スネーク「だがお前の腕なら、上官の期待も高かったんじゃないのか」
ミラー「俺への評価がどうだったかはわからん。むしろ跳ねっ返りとして、疎んじられていたのかも知れん」
ミラー「俺自身、専守防衛に馴染めなかったしな」
スネーク「と言うと?」
ミラー「自衛隊の専守防衛は、国の戦略の形としては、〝あり〟なのかも知れん。それに従う同僚を悪く言うつもりもない」
ミラー「だが戦術レベルで考えると、どうにも俺の性に合わなかった」
ミラー「簡単に言えば、きちんと殴り合いをしたかったんだよ」
スネーク「お前らしいな」
ミラー「自衛隊にいる限り、親父のいた米軍と肩を並べることはできない、という思いもあった」
ミラー「それに、三島由紀夫の自決を見たってのもある」
スネーク「三島由紀夫…『金閣寺』を書いた?」
ミラー「三島の問いかけは、俺にとっても重かった」
ミラー「彼の思想に傾倒しているわけではない。だが、考えるきっかけになったのは確かだ」

■自分について

●マザーベースでの役割

ミラー「スタッフの配置決め、忘れないでくれよ。人員配置が、マザーベースの成長方針を決めるんだから」
スネーク「ああ」
ミラー「俺のことも好きに配置して構わないからな」
スネーク「お前も? お前はマザーベースの副司令だろう」
ミラー「もちろん、その仕事に手は抜けない」

ミラー「だが、組織が小さいうちは椅子にふんぞり返っている余裕もない」

スネーク「それはそうだが…」

ミラー「言っちゃ悪いが、俺はどの班の仕事をやらせてもスゴいぞ」

ミラー「あんたが重点的に育てたい部門に配置してくれ。その班のスタッフは特にかわいがってやるよ」

スネーク「カズ、ほどほどにな」

●生い立ち

ミラー「1945年、3月10日。38万1300発のクラスター爆弾が東京に落とされた」

ミラー「当時の日本家屋は木造がほとんどだったんだ。この日だけでも東京の3分の1が燃えて無くなった」

ミラー「俺のお袋はこの空襲で家族と家を亡くした。それで横須賀の従姉を頼って引っ越したんだ」

ミラー「B29はそれからも日本の主要都市を容赦なく焼き払った」

ミラー「そして8月、ヒロシマとナガサキに原爆が落とされた。とうとう日本はアメリカに降伏した」

ミラー「それから横須賀は、進駐軍のアメリカ兵で溢れかえった」

ミラー「従姉はまだ10代も半ばだったお袋に、この町で生きていく方法を教えたんだ。アメリカ兵を相手にな」

ミラー「そこでお袋は親父と知り合った。それで、俺が生まれたんだ」

ミラー「親父は連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）の幕僚部民政局（GS）で、ホイットニー准将の元で働いていた将校だった」

ミラー「マッカーサーの分身と言われた男の下だ。親父もそれなりの地位だったろう」

ミラー「在日中、お袋を妻のように扱っていたというが、アメリカに戻ってから、もう連絡はなかった」

ミラー「俺が生まれたのは親父がアメリカに戻った後だった」

ミラー「お袋は一人で俺を育ててくれた。親父が残したはした金で店を開いて、進駐軍相手に

ミラー　煙草なんかを売っていた」
ミラー　「生活は人並み。だが俺には国籍がなかった。今は改正の動きもあるが、日本は父親がわからないと戸籍がとれないんだ」
ミラー　「だから俺は街のアメリカ兵を見ながら、自分に言い聞かせた」
ミラー　「俺は勝者アメリカの子なんだと」
ミラー　「髪も目も、痩せてうつむいた他の日本人とは違う」
ミラー　「いつかこの国を離れて、本当の祖国に帰るんだってね」
ミラー　「10才になったころ。お袋は身体を悪くして、俺はすっかり店番を任されるようになっていた」
ミラー　「そのとき店の引き出しの奥から、1枚だけ親父の写真を見つけたんだ」
ミラー　「俺は店に出入りするアメリカ人に親父の写真を見せた」
ミラー　「そうして何年か経ったか、あるアメリカ人が教えてくれた」
ミラー　「そいつはミラーだ、知ってるよ」

ミラー　「他の奴に訊いた。『ミラーはいま何処にいる？』」
ミラー　「『ミラーという将校の居場所を教えてくれないか』」
ミラー　「親父は退役して、バージニア州で兵士相手に講師をして暮らしていたそうだ」
ミラー　「教えてくれたのは親父の教え子だった」
ミラー　「俺は英語で手紙を書いた。『あんたの息子だ、アメリカに行きたい』」
ミラー　「毎日待って、待ち疲れた頃、郵便屋が未来を運んできた」
ミラー　「親父は金を送ってきた。俺は夢が叶ったと思った」
ミラー　「自分のことしか見えてなかった」
ミラー　「それで俺は、寝床を出ない母親に『行ってこい』と言わせたんだ」
ミラー　「親父が手配させた真っ黒な車が俺を迎えに来た。いままで俺の髪の色を笑っていた近所の奴らが目を丸くして俺を見ていた」
ミラー　「お袋を病院に入れて、俺は一人でアメリカに渡った」

ミラー「初めて会った親父は広い家に一人暮らしだった」
ミラー「息子に…、アメリカの息子にベトナムで死なれたそうだ」
ミラー「写真を見せられたよ。俺の兄貴だよな（そいつは）」
ミラー「親父は離婚も重なって寂しくなったのか…、それで俺なんかに興味を持ったんだろう」
ミラー「親父は講師をやめていた。背中を丸めて、あまり動かなかった」
ミラー「だが、親父は俺にミラーという姓と学費をくれた」
ミラー「俺はその金で英語を習い、大学を出た」
ミラー「アメリカは長引くベトナム戦争で疲れ切っていた。他所で戦争しながら、国内じゃ平和を叫んでいたよ」
ミラー「卒業してすぐ、俺は一人で日本に戻った。親父はお袋に会うのを拒んだからな」
ミラー「久しぶりに会ったお袋は俺のことを見もしなかった。初めは怒っているのかと思った」
ミラー「だが違った。頭を菌でやられていたんだ。若い頃、無茶したせいだ」
ミラー「お袋は俺が誰なのか、わからなくなっていた」
ミラー「俺は自分の名前を言った。『お袋、カズヒラだ』って」
ミラー「そのとき俺は、自分の声にはっとした」
ミラー「〝和平〟。お袋がつけた名前、意味は日本語で〝平和〟」
ミラー「俺は日本人だった。少なくとも、この小さな日本人の息子だったんだ」
ミラー「お袋がこの名前をつけた理由が、思いが、このとき初めてわかった」
ミラー「生まれた街と家族を焼かれ、身体も心も戦争に冒されたお袋は…」
ミラー「かつての敵との間に、〝平和〟という名の子供を産もうとしたんだ」
ミラー「日本は戦争に負けた。だが戦争という物差しに何の価値がある？」
ミラー「去年のオイルショックまで、戦後の日本経済は登り続けていた。もっと強い国になろうとしている」

ミラー　「俺は日本に残り、自衛隊に入った。22だった」

ミラー　「治療費と生活のため…といっても、いくらでも働き口はあったはずだ」

ミラー　「そこまで解っていて、それでも俺は、他に自分の道を思いつかなかった」

ミラー　「その2年後、治療費はいらなくなった。お袋が死んだんだ」

ミラー　「俺は自衛隊を辞めてまたアメリカに戻った」

ミラー　「親父は墓の中だった。自分で頭を撃ったらしい」

ミラー　「アメリカは日本に勝った。だが親父はアメリカに負けた」

ミラー　「アメリカンドリームは終わった」

ミラー　「俺は、あとは流れるまま、あんたも知っての通りだ」

ミラー　「…GHQはお袋のような女を作った。日本の平和憲法と自衛隊を作った。そしてこの俺を作った」

ミラー　「俺は戦争で生まれたんだ。だが戦争で死にたくない」

ミラー　「国家の事情で死ぬのも、貧しく生きるのも嫌だ」

ミラー　「戸籍や生まれで運命づけられるのも嫌だ」

ミラー　「ボス、あんたといると、そうはならない気がするんだ」

●スネークとの出会い

ミラー　「人生ってのは判らないもんだな」

スネーク　「いきなりなんの話だ」

ミラー　「戦場で敵同士として出会った俺とあんたが、今はこうして共に戦ってるってことがさ」

スネーク　「コロンビアでのことか」

ミラー　「ああ。自衛隊を飛び出してコロンビアに流れ着いた俺は、実戦経験も無いくせにいきなり、革命勢力の指導教官というポジションを得た」

スネーク　「スペイン語での営業トークは当時から得意だったとみえる」

ミラー　「茶化さないでくれよ。ツイてなかったのは、あんたが政府軍側に雇われていたことだ（苦笑して）」

ミラー　「今でも忘れられない。あっという間だった」
ミラー　「あんた達の待ち伏せ攻撃で俺の部隊は瞬時に半数が倒され、アワを食った俺は頭の中が真っ白になっちまった」
ミラー　「お陰でその後の指揮はひどい有様、結局部隊は全滅…俺自身も仕掛け爆弾で瀕死の重傷を負った」
スネーク　「それから立ち去ろうとする俺に向かって、お前は叫んだんだったな…、『俺は自ら望んで日本からやってきた。戦場が俺の居場所だからだ』」
スネーク　「そして『自分でカタをつけたい』と俺に介錯を頼んだ」
スネーク　「日本にはサムライというものが今でも生き残ってるのかと、驚いたのを覚えている」
ミラー　「あんた達は俺に近づいてきた。その時俺は手榴弾を隠し持っていた」
ミラー　「だがそこでもあんたは素早かった。ピンを抜いた瞬間、あんたは両掌で、手榴弾を握る俺の手を包み込んだ」
スネーク　「起爆させたくなかったからな。自尊心を重んじると聞いていたサムライが、そんな汚いやり方で敵を道連れにしようとする理由を知りたかった」
ミラー　「俺は言った。『俺は、俺たち（日本人）は二度と負けない』と」
スネーク　「そうだ。『例えどんな手段を使おうと、決して負けない』、とな」
ミラー　「大量に失血していた俺は、そのまま気を失った」
ミラー　「次に気が付いたときは、あんたのキャンプの医務室で大量のチューブに繋がれていた」
ミラー　「なぜ、敵である俺を、あんたを殺ろうとした俺を、助けた？」
スネーク　「あの時のお前は、プライド（サムライ）を捨ててまでも戦おうとした」
ミラー　「負け戦はごめんだからな…」
スネーク　「死の直前まで、あるいは死を覚悟してもなお、策略を練る。それが真の戦士だ」
スネーク　「損得や勝ち負けじゃない。俺はあの時、お前の生き様を見て、自分の道を見つけたん

ミラー　だ。戦士としてのな」
ミラー　「へえ、そいつは知らなかった。それで俺を……（仲間に）」
スネーク　「戦場は、ヒトを敵と味方に選別するだけの装置ではないと悟った」
スネーク　「敵でも味方でもない、それ以上の仲間を、より分けてくれる事もある」
ミラー　「俺とあんたのようにか」
スネーク　「そうだ。あれからもう2年がたつ…」

■潜入の基礎知識

●スニーキング・ミッション

ミラー　「わかっていると思うが、敵との戦闘は可能な限り避けてくれ、スネーク」
スネーク　「ああ」
ミラー　「こちらは少人数の上、土地鑑もない。本格的な戦闘になったら、いくらあんたでも苦戦は免れないだろう」
スネーク　「わかってる。戦闘回避は、スニーキング・ミッションの基本だ」
ミラー　「そうだな。敵に居場所をつかませず、必要な時のみ一撃離脱で敵に痛撃を与える…」
ミラー　「これは、ゲリラ戦の要点でもある」

●フルトン回収の薦め

ミラー　「スネーク、頼みがあるんだが」
スネーク　「どうした、改まって」
ミラー　「俺達の組織を拡大するには、まず人集めだ」
スネーク　「そうだな。で？」
ミラー　「できるだけ敵兵を殺さず、フルトン回収してほしいんだ」
ミラー　「遺体を回収したところで、せいぜい弔ってやることくらいしかできないからな」
スネーク　「違いない」
ミラー　「眠らせる、気絶させる…ホールドアップでもいい。やむを得ず戦ったとしても、瀕死に止めておくとか」
スネーク　「その後、フルトン回収か…やってみよう」
ミラー　「本当は、狙った相手を有無を言わさずフルトン回収できる装置があれば、楽なんだがな…」（フルトン回収銃のことを示唆）

●ボディチェック

ミラー　「兵士を眠らせるか気絶させればボディチェ

ックでアイテムを奪うことができる」
ミラー　「倒れている兵士に近づき、アイコンが出たらアクションボタンを押すんだ」
ミラー　「あるいは背後から近づいてホールドアップさせた兵士や、瀕死の状態で倒れている兵士にも有効だ」
ミラー　「と言っても、瀕死の兵士は時間が経つと死んでしまうから注意が必要だ」
ミラー　「それと、フルトン回収装置を手に持ったままボディチェックはできない。気をつけてくれ」

●携行品の重量

ミラー　「武器や装備品は、必要なものだけを持っていってくれよ」
ミラー　「何でもかんでもバックパックに詰め込んだら、重過ぎて動きが遅くなる。苦労するのはあんただからな」
スネーク　「わかってる。携行品は必要な分だけ。基本中の基本だ」
ミラー　「携行品の総重量は、出撃前に確認できる。参考にしてくれ」

スネーク　「了解だ」

●照準ぶれ

ミラー　「スネーク、あんたほどの戦士でも照準のぶれはあるだろう」
ミラー　「『気力』が充実している時はともかく、疲れてるとどうしても手ぶれが起きてしまう。特に大きい、重い武器だとな」
ミラー　「もちろん、立っているよりは、しゃがんだほうが狙いやすくはなる」
ミラー　「スコープで覗くような武器だと、一所に落ち着いていれば、段々と狙いが正確になっていくしな」
ミラー　「だがマザーベースで銃の開発を進めていけば、同系統でも照準ブレの少ない銃ができるかも知れん」
ミラー　「照準ぶれが気になるようなら、そっちに力を入れるのも手だ」
スネーク　「覚えておこう。だが銃ってもんは、使っている内に手に馴染んでくる。あんまり浮気するのも考えものだ」

●ミッションでの服装

ミラー　「どのユニフォームを選ぶかは重要だ。ミッションの目的や、あんたの戦闘スタイルに応じて使い分けてくれ」

・JUNGLE FATIGUES

ミラー　「『JUNGLE FATIGUES』は、ジャングル用の野戦服だ。標準的な戦闘服と言っていい」

ミラー　「こいつの特徴は、エリアによってカムフラ率に大きな差が出ることだ」

ミラー　「周囲に溶け込むようなパターンの服を着ていれば、カムフラ率は高くなる」

ミラー　「逆に周りから浮き上がってしまうと、見つかりやすい」

スネーク　「状況に応じた使い分けが必要ってわけだ。シギントにもよく説教された」

・SNEAKING SUIT

ミラー　「スニーキングスーツは、潜入ミッションに特化した服だ。どのステージでも、高いカムフラ率を保てる」

ミラー　「足音がしないってのもデカい」

スネーク　「抜き足差し足で歩く必要がないってわけか」

ミラー　「傷を負った時の回復スピードも上がる。繊維が適度に体を圧迫して、止血効果があるらしい」

スネーク　「そいつはありがたい」

・BATTLE DRESS

ミラー　「バトルドレスは戦闘に特化した服だ。スニーキングスーツの逆だな。持って行ける武器や弾薬の数が多いし、防御力も高い」

ミラー　「潜入には向かないが、派手に行きたい時はこいつに頼るのもいいだろう」

スネーク　「さすがに重そうだな」

ミラー　「ああ。移動速度も遅くなるだろう。つまり潜入任務には向かない。気をつけてくれ」

・NAKED

ミラー　「『NAKED』…その名の通り裸だ。パンツはJUNGLE FATIGUESと共通だが」

ミラー　「生身の体を露出しているから、当然防御力もカムフラ率も低い」

ミラー　「ただ、身軽な分移動は速い」

スネーク　「見た目通り、肉体派ってわけだ」

ミラー　「なあ、スネーク。あんたの昔のコードネー

ムは、この格好で暴れまわったことから来てるってのは、本当か?」

スネーク「デマに決まってるだろう。〝NAKED〟ってのは、武器装備、食料、すべてが現地調達だったことから付いたコードネームで…」

ミラー「じゃ、上半身どころか、素っ裸でジャングルに放り込まれたってことか⁉ それも、高度10,000mからのHALO降下で。さすが伝説のボス‼」

スネーク「…からかってるのか? カズ」

ミラー「わかるか?」

スネーク「…一生そうやってろ」

ミラー「裸になって何が悪い!」

■CO-OPS

●CO-OPS

ミラー「二人以上で協力して任務に当たることを共同作戦。COrporative OPerationS、略してCO-OPSと呼ぶ」

ミラー「CO-OPSの基本は二人一組(ツーマンセル)だ」

スネーク「たった一人の味方であっても、敵地においては心強いもんだ」

ミラー「実際、一人ではできない様々な行動が可能になる」

ミラー「協力することで段差を越えたり、役割を分担したり…」

ミラー「ただし、一人が発見されればもう一人も危険に身をさらすことになる。また狭い場所に二人が隠れきるのは難しいことかもしれない」

スネーク「そうだな。だが、何より大切なのは仲間との絆だ」

ミラー「そのとおりだ。ツーマンセルでの潜入は、二人のコンビネーション次第で有利にも不利にもなる」

ミラー「ちなみに、目標のハッキリしている戦闘であれば、さらに大人数での作戦も有効になるだろう」

ミラー「しかし、3人以上の部隊になると発見される危険も跳ね上がる」

スネーク「ああ。潜入任務では人数が少ない方が動きやすい」

●CO-OPリング

ミラー　「CO-OPSでは武器や装備品の貸し借りも出来る」

ミラー　「仲間の持ち物も、自分の武器・装備品メニューから表示できるぞ」

ミラー　「当然ながら弾薬も共有だ」

スネーク　「それどころじゃない。命（LIFEゲージ）だって共有だ」

ミラー　「ああ。そのときは一蓮托生だ。相手の死はすなわち自分の死を意味する」

ミラー　「お互いの持ち物を受け渡しするにはある程度近くにいる必要がある」

スネーク　「わかっている。俺様ぐらい豊富な経験を積み重ねていれば、その間合いはハッキリと目に見えている。まるで輪（リング）のようにな」

ミラー　「さすがボス。それなら、うん、その輪（CO-OPリング）に入ることをCO-OPインと呼ぼう」

●スネークフォーメーション

ミラー　「そう言えば、作戦行動中に一列で進むことをスネークフォーメーションって呼ぶよな」

ミラー　「あんたのコードネームと同じだが、単独潜入が得意なあんたにとって、いままであまりなじみがなかったはずだ」

スネーク　「ああ。蛇は一人でいい」

ミラー　「だがCO-OPSではこれも有効な隊形だ。相手の肩に手を置くのがスネークフォーメーションの合図になる」

スネーク　「まずは手が触れるぐらい近づかないことには、一列も何もないからな」

ミラー　「スネークフォーメーションになることをスネーク・インと呼ぼう」

ミラー　「スネーク・インしている間は、移動は前の兵士任せになる」

ミラー　「後ろの兵士はそのぶん索敵や攻撃に専念できるはずだ」

●心臓マッサージ

ミラー　「人間、心臓が止まってもすぐに死ぬわけじゃない」

スネーク　「心臓は全身に血液を送っているだけだからな」

スネーク　「だが心臓が止まると脳に酸素が運ばれなくなり、遠からず死に至る」

ミラー　「そこで心臓マッサージだ」

ミラー　「仮に心臓が止まったとしても、脳細胞が死滅する前に心臓マッサージを施せば生き返るってわけだ」

ミラー　「CO-OPSでLIFEゲージがゼロになると瀕死状態になったことを示す。こうなったらもう動くことも出来ないはずだ」

ミラー　「瀕死状態の仲間は心臓マッサージで戦線復帰させることが出来る」

ミラー　「もちろん戦闘中の心臓マッサージは危険を伴う。その間、自らを危険にさらすことになるからな」

ミラー　「とはいえ、CO-OPSの仲間は一心同体。一人だけ置いて行くなんてことは考えないでくれ」

スネーク　「もちろん、そのときはお互いさまだ」

ミラー　「作戦中、自分と仲間の全員が死んでしまえば、もう誰にも助けられない」

スネーク　「そこでおしまい（ゲームオーバー）ってわけだな」

●友情度

ミラー　「CO-OPSの遂行にあたって、仲間との信頼関係は極めて重要だ」

スネーク　「当然だ。信用の置けない人間に背中を預ける気にはならん」

ミラー　「その目安となるのが『友情度』だ。CO-OPS相手との絆の強さを示す、と思ってもらっていい」

ミラー　「仲間と友好的な行動をすればするほど、その仲間との友情度が上がる」

スネーク　「例えば」

ミラー　「離れて戦うよりCO-OPインしたほうが、友情度は上がる。瀕死の仲間を心臓マッサージで蘇生してやっても、絆は深まる」

ミラー　「逆に仲間を誤射（フレンドリーファイア）なんかして傷つけたりしたら、友情度は下がっちまうだろう」

スネーク　「そりゃそうだ」

ミラー　「友情度は、次に同じ相手とCO-OPSを実行した時にも維持されている」

ミラー　「ただ、その相手としばらくCO-OPSに参加しないまま、次々に新しい仲間とCO-OPSを実行していると、その相手との友情度は最初の状態に戻ってしまう」

ミラー　「注意してくれ」

スネーク「了解だ。その時は改めて旧交を温めるとしよう」

ミラー「スネークシンクロ時の効果は、友情度に左右される。友情度が高いに越したことはない。そうだろう？」

・スネークシンクロ

ミラー「スネーク・インした状態でじっとしていると、二人の鼓動が同期（シンクロ）を始める」

スネーク「鼓動？」

ミラー「ああ。それが完全に同期すると、スネークシンクロ状態に入る。仲間との相乗効果で、普段より大きな力を発揮できるんだ」

ミラー「移動や回復が速くなり、カムフラ率も上がる」

スネーク「要は二人の息が合った状態、ってことだな」

ミラー「そうだ。ここ一番って時には、まず落ち着いてシンクロしてみるってのも手だ」

ミラー「さっきも言ったが、スネークシンクロの効果は、相手との友情度に左右される」

スネーク「そりゃそうだろう。気心の知れた奴と組んだほうが、お互いの死角をカバーし合える。その分自分の行動に集中できるってもんだ」

●英雄度

ミラー「仲間同士の信頼関係を表すのが友情度なら、あんた個人の信望を表すのが『英雄度』だ」

スネーク「『英雄度』だって？」

ミラー「そうだ。あんたの信望は、人集めにも影響する」

ミラー「英雄度が高ければ、フルトン回収してきた敵兵だって、説得するのにさして時間はかからないだろう」

スネーク「その『英雄度』っていうのはどうしたら上がるんだ？」

ミラー「いろいろだ。困難なミッションをこなす。無益な殺生を避ける…。逆に敵に見つかっておたおたしてるようじゃ、英雄度は上がらない」

ミラー「それに、CO-OPSでの戦闘時、積極的に敵を攻撃すれば、それだけ仲間からの信望が厚くなる。だがその分、敵もあんたをマークするようになるだろう」

ミラー「何、難しく考えることはない。ボスがいつもやってることだ。俺から見たって、あん

たは十分に英雄だよ」

スネーク「よしてくれ」

●CO-OPS用武器

ミラー「研究開発班の連中、CO-OPS専用の武器を研究中らしい」

スネーク「CO-OPS専用?」

ミラー「例えば、二人同時に撃たないと威力を発揮しない銃とか…その分攻撃力は高いと聞く。まだ構想の段階だそうだが」

スネーク「ロケットランチャーを二人一組で運用することはあるが、CO-OPS専用とはな」

ミラー「だが開発に成功すれば、CO-OPSのやりがいもあるってもんだろう。武器開発の様子も、気にしてやってくれ」

●CO-OPS通信

ミラー「CO-OPS中は、仲間との綿密な意思疎通が重要になる」

スネーク「無論だ。戦場での連絡途絶は、部隊の壊滅に直結する」

ミラー「敵の位置。各種指示。救援要請。連絡を取り合わなければ、各個撃破されてしまう」

ミラー「そこでCO-OPS通信だ」

スネーク「CO-OPS通信…」

ミラー「CO-OPS中の仲間同士でやり取りするための無線だ」

ミラー「まずはSTARTボタンを押してメニューを開き、『CO-OPS通信』を選んでくれ」

ミラー「その後、最初に押すボタンでカテゴリを、次に押すボタンで実際の言葉を選ぶ」

ミラー「要するに二つのボタンの組み合わせで、何を喋るかが決まるってわけだ」

スネーク「ほほう」

ミラー「どのボタンに何の言葉を割り当てるかは、出撃準備中に設定できる」

スネーク「慣れない内は、無線を送るまでに時間がかかりそうだ」

ミラー「そんな時は、SELECTボタンにCO-OPS通信を割り当ててみてくれ。送信の手間が減るはずだ」

ミラー「『OPTIONS（オプション）』の『SELECTボタン』メニューで設定すればいい」

スネーク「やってみよう」

・言霊効果

ミラー　「スネーク、日本に『言霊』って言葉があるのを知ってるか」
スネーク　「言葉には霊的な力が宿っていて、それが現実に影響を及ぼす…」
ミラー　「言霊…？」
ミラー　「おいおい、大丈夫か？」
スネーク　「言い方が眉唾っぽかったか」（苦笑）
ミラー　「だが、仲間からの励ましで予想外の力が出たことはないか？」
ミラー　「逆に、心ない言葉のせいで、実力の半分も出せなかったり」
スネーク　「それならわかる。言葉が人のメンタルに与える影響は大きい」
ミラー　「CO-OPS通信でも同じだ。励ましの言葉を投げかけることで、いつもより速く走れるかも知れない」
ミラー　「瀕死で動けないはずの奴が、立ち上がれるかも知れない…そうだろ？」
スネーク　「なるほど。逆もまた然り、か」
ミラー　「言葉の持つ力は様々だ。いろいろ試してみてくれ」

■特殊な携行品

●ダンボール

ミラー　「スネーク、ダンボールについてだが…」
スネーク　「おお！」（食いつきがいい）
ミラー　「俺からあんたにダンボールの説明をするのは、ヘンな気がするが、念のために説明させてくれ。今までと違う点も多いからな」
スネーク　「わかった」
ミラー　「被って隠れるだけがダンボールの使い道じゃない、その場に置くこともできる」
スネーク　「ほう」
ミラー　「上に乗ればちょっとした段差を乗り越えることもできるし、陰に隠れて、敵兵の目から逃れることも可能だ」
スネーク　「嬉しい変化じゃないか」
ミラー　「それだけじゃない。アイテムを詰めて、CO-OPS相手に送ることだってできる」
スネーク　「そんな使い方も出来るのか？　やはりダンボールは万能だな。戦士の必需品だ。その

使い方は思いつかなかった」
ミラー　「いや、これが本来の使い方なんだが…」
スネーク「そう言えば、このあたりのダンボールはちょっと大きめじゃないか？」（聞いてない）
ミラー　「ああ。密着すれば二人で被ることも出来るだろう。通称、ラブダンボールだ」
スネーク「ラブダンボール…」
ミラー　「ああ。もっとも、ラブダンボールに限らず、同じ大きさなら二人で入れるがな」
・ダンボールの中の二人
ミラー　「ダンボールには二人まで入れる。CO-OPS相手と入れるってことだな」
スネーク「どうやるんだ⁉」
ミラー　「仲間が入っているダンボールに、アイコンが出るまで近づくんだ。そこでアクションボタンを押せばいい」
ミラー　「アクションボタンを押している間は、外へ出ない」
スネーク「スネークフォーメーションと同じだな」
ミラー　「ああ。スネーク・イン中にダンボールを被っても、そのまま二人とも同じダンボールに入ることが出来る」
スネーク「信頼できる仲間とダンボールを被れる…いい時代になったもんだ。なあ、カズ」
ミラー　「あ、ああ。そうだな…」
・ダンボール戦車
ミラー　「スネーク、研究開発班のスタッフが、こんなものを開発したんだが…」
スネーク「これは⁉」
ミラー　「ダンボール戦車だ。他のダンボールと同じ要領で、二人一緒に被ることができる」
ミラー　「前の奴が操縦士、後ろが砲手になって、弾も撃てるらしいんだが…」
スネーク「おい、カズ。これを開発したのはどいつだ？」
ミラー　「す、すまん、ボス。そいつも悪気があったわけじゃないんだ。まあいくらなんでもこれを戦車と見間違えるような…」
スネーク「素晴らしい‼」
ミラー　「は？」
スネーク「ステルス性と攻撃力の見事な融合。無骨なデザインもいい。完璧な設計とはこのこと

だ！」

スネーク「おい、カズ。こいつを作った奴のところまで案内しろ。直接礼をいいたい」

ミラー「ほ、本気か？　スネーク。こりゃどう見たって…」

スネーク「どう見たって名作だ。お前にはわからないのか？」

ミラー「ス、スネーク!?」

パス「わぁ、素敵な戦車ね」

ミラー「パス!?」

パス「私戦車は嫌いだけど、これなら好きになれそう。排気ガスを出さないところがいいな。コスタリカの森を汚さなくても済むでしょ」

ミラー「ええっ!?」

スネーク「カズ、よくやった。お前に副司令を任せて正解だった」

ミラー「そ、そんな…。俺が…俺がおかしいのか!?」

●WALKMAN

ミラー「スネーク、ガルベスが持ち込んだカセットプレーヤーの件なんだが…」

スネーク「どうした」

ミラー「ありゃ東側の模倣品なんかじゃない。正真正銘、日本の企業が開発した試作品だ」

スネーク「ほんとか!?」

ミラー「ああ。ソニーのロゴが刻んであった。モデル名はWALKMAN」

スネーク「WALKMAN…」

ミラー「歩きながらでも音楽を楽しめる、家から音楽を持ち出せる、ってのがコンセプトの画期的な製品だ」

ミラー「俺も聴いてみたが、このサイズでは考えられない高音質だ。それもステレオ。相当の技術がつぎ込まれてると思っていい」

ミラー「例のテープにしてみてもそうだ。高音域の伸びが、既存のカセットとは明らかに違う。デザインもいいしな」

スネーク「そんな発売前のモデルを、どうやってガルベスが手に入れたんだ」

ミラー「わからん。お堅い東側が興味を示すような分野でもないしな」

スネーク「そりゃそうだ。だが、こいつはいいぞ。場所を選ばず、どこでも好きな音楽が聞ける」

ミラー　「あんたの口からそんな台詞を聞くとはな。だが、同感だ」
ミラー　「俺は生録派だから、再生専用の携帯機なんて、馬鹿馬鹿しいと思ってた」
ミラー　「だが、使ってみて印象が変わったよ。好きな音楽を持ち出せる…こいつは、音楽の革命になるかも知れん」
スネーク　「ああ」
ミラー　「マザーベースのスタッフにも、解析と研究を指示した。そのうち、改良型ができるかもな」

●レトルトカレー
ミラー　「喜べスネーク、レトルトカレーの開発に成功したぞ！」
スネーク　「何だって⁉」
ミラー　「開発には苦労したよ。何しろ、米陸軍のレーションには真空パックのソーセージが使われてるって情報だけを頼りに作ったんだからな」
ミラー　「殺菌処理をする際の温度と圧力の調整が、特に難しかったそうだ。何度も試行錯誤を繰り返したらしい」
スネーク　「レトルトパウチは、宇宙食にも使われている技術だ。それを独自で開発するとはな。うちのスタッフもやるもんだ」
スネーク　「早速食べてみよう。今、封を…」
ミラー　「待ったスネーク！」
スネーク　「何だ」
ミラー　「こいつは熱湯で温めてから食うんだ」
スネーク　「そうなのか」
ミラー　「3分間、待つのだぞ」

・ボンカレー
スネーク　「カズ、3分経ったぞ！」
ミラー　「じっと我慢の子であった…」
スネーク　「いい匂いだ」
ミラー　「ん、イケる！　こいつはイケるぞスネーク！」
スネーク　「同感だ。こいつはいい」
ミラー　「野菜の甘みがルゥに溶け込んで…たまらん。まるで出来たてのようだ」
スネーク　「戦場で、こんなにうまいもんが食えるとはな」
ミラー　「よし決めた！　こいつの名前は『ボンカレ

ー』だ！」

ミラー　「…ちなみに『ＢＯＮ』ってのは、フランス語で『良い』とか『おいしい』って意味だ」

スネーク　「何でフランス語なんだ」

ミラー　「いや…パリジェンヌに憧れが…」

スネーク　「好きにしろ。だが『ボンカレー』…悪くない響きだ。こいつはレーションの革命だな」

●ドリトス

ミラー　「トルティーヤは好きか、スネーク？」

スネーク　「突然何の話だ？」

ミラー　「トウモロコシの粉を使った、中米の代表的な料理のひとつだ。合衆国にいたころから俺の好きな食べ物だった」

スネーク　「いや、それは知ってるが」

ミラー　「あの香ばしい風味をいつでも楽しめたら…。そうは思わないか、スネーク？」

スネーク　「ミッション中には無理だろう。保存も利かない」

ミラー　「諦めることはない。研究開発班が保存できるトルティーヤチップスを開発した。三角形に切ったトルティーヤを油で揚げたものだ」

ミラー　「俺たちはこれを『ドリトス』と呼ぶことにした」

スネーク　「ドリトス？」

ミラー　「スペイン語で小さな金塊って意味だ。綺麗な黄金色に揚がったもんだからな」

●マウンテンデュー

ミラー　「ミッション中の飲み物には困ってないか？」

スネーク　「ああ、大丈夫だ。マテ茶もある」

ミラー　「マテ茶か…。あれもいいが、炭酸なんかも飲みたくならないか？」

スネーク　「そりゃそうだが、ミッション中に贅沢は言えない。タイムズスクウェアあたりで買い物してるわけじゃないんだ」

ミラー　「そう気を落とすな、スネーク。研究開発班が新しい炭酸飲料を開発してくれた」

ミラー　「その名も『マウンテンデュー』！」

スネーク　「山のしずくマウンテンデュー」

ミラー　「ああ。大自然をイメージした柑橘風味の爽やかなドリンクだ。炭酸が強すぎないから、疲れたときでもゴクゴク飲める」

●ペプシネックス

ミラー「スネーク、我が研究開発班が、また新しい炭酸飲料を開発してくれた」

スネーク「いやいや、もういい。マテ茶もマウンテンデューも満喫している。十分だ」

ミラー「そうか？　だがこいつも相当イケるぞ。一度飲んだらもう手放せない。はっきり言うが俺は今も手放していない」

スネーク「おい、マジメに…」

スネーク「カズ！」

ミラー「厚みがありながらキレのあるすっきりとした味わい…おいしすぎる」

スネーク「…いくら美味くても飲み過ぎるとカロリーが…」

ミラー「しかもゼロカロリー」

スネーク「ゼロ…？　耳を疑うぞ！」

ミラー「この飲み応えでゼロカロリー！」

ミラー「耳を疑うのは飲んでからだ。他では替わりが利かなくなるぞ」

ミラー「そう。やがて世界中のスタイリッシュな男女がこいつを手放せなくなる時代が来る」

ミラー「憧れが憧れを生み、それはやがて全人類を巻き込む巨大な渦となるだろう」

ミラー「スネーク、いや、ボス、あんたがその渦の中心となる。その時代を先取りしてくれ！」

スネーク「自分が作ったわけでもないのに随分強気じゃないか…。…なんて名前だ」

ミラー「ん？」

スネーク「その炭酸飲料の名前だ」

ミラー「名前は…」

ミラー「ペプシネックス」

スネーク「ペプシ…ネックス…」

スネーク＆ミラー「ペプシネックス‼」

■敵兵の種類

●ＣＩＡの傭兵

ミラー「ＣＩＡが雇った敵の傭兵たちを、アマンダ達はいくつかのカテゴリーに分類しているそうだ」

スネーク「教えてくれ、参考にしたい」

ミラー「了解だ。順を追って説明する」

●哨戒兵・警備兵

ミラー「もっとも頻繁に遭遇する敵兵は、作戦区域を巡回警備している連中だ」

ミラー「アマンダ達は便宜上、野外を巡回している連中を『哨戒兵』、施設にいる方は『警備兵』と呼んでるそうだ」

ミラー「のんびり歩いているように見えるが、そいつは見かけだけだ。決して侮るなよ。奴らは五感を研ぎ澄ましている」

ミラー「普段は規定のルート上を巡回しているが、警戒レベルが高まると決まったポイントを重点防御して、効率的な警戒態勢をとる。こうなるとやっかいだ」

ミラー「もちろん戦闘でも手強い相手だし、防弾着(ボディアーマー)を着ているやつは倒すにも手間取る」

ミラー「防弾ヘルメットを装着していたらもう、一撃必殺(ワンショット・ワンキル)ってわけにもいかなくなる。気をつけてくれ」

ミラー「偽装やルート選択に工夫が要る。奴らの探知を逃れることが第一だ」

●コマンド兵

ミラー「発見されて警戒状態に入ると、敵は増援の攻撃部隊を呼ぶことがある」

ミラー「重装備で俊敏、危険な連中だ。アマンダ達はこいつらを『コマンド兵』と呼んでいる」

ミラー「こいつらは哨戒兵とは違って、積極的にこちらを狩り出そうと追跡してくる。どう猛な猟犬(ハウンド)みたいにな」

スネーク「元FOXHOUNDを狩る猟犬か…望むところだ」

ミラー「こちらを見失ってもなかなか諦めない。隠れ場所と思しきところを掃討(クリアリング)してくる」

ミラー「うまく隠れたと思っても、油断したらまた見つかるかも知れない。連中の動きから目を離さないこと」

ミラー「それから、コマンド兵の装備にも防弾着が含まれている。そんな連中に出くわしたら、闇雲に撃ちまくっても事態を打開できない」

スネーク「露出した弱点を狙い撃つだけだ」

ミラー「ああ、それがいい」

●突撃兵

ミラー「コマンド兵の中でもとくにショットガンを持った連中はやっかいだ」

ミラー　「奴らは多少被弾しても構わず突進してくる」
ミラー　「ショットガンの射程内に入ったらこっちもただじゃ済まない」
ミラー　「奴らの突撃は、威力の高い武器で早めに制止する必要がある」

●偵察兵

ミラー　「敵の中には、アンブッシュを専門にしている連中がいることも確認されてる」
ミラー　「そいつらのことは『偵察兵（スカウト）』と呼んでいるそうだ」
ミラー　「周囲の地形や植生に溶け込むように身を潜めて、こちらを発見するといきなり飛び出してくる」
ミラー　「戦い方としてはコマンド兵に近い。掃討（クリアリング）をかけてくるんだ」
ミラー　「それとやつら、普通の武器も使うがワイヤーも持ち歩いてるらしい」
スネーク　「ふむ…CQCに自信がある連中のようだな」
ミラー　「あるいはな。仕掛けた近接戦闘をワイヤーでブロックされたっていう報告も届いてるそうだ。気をつけてくれ」

●ギリースーツ兵

ミラー　「偵察兵（スカウト）は潜伏用の偽装を施している。中でも異様なのが全身に海草を生やしたような姿をした奴だ」
スネーク　「ギリースーツか」
ミラー　「戦闘能力は他の偵察兵（スカウト）と大差ないようだが、とにかく見つけにくいらしい」
スネーク　「ああ、そうだろう」
ミラー　「以前にも？」（見たことが）
スネーク　「ソ連でな。初めての時は倒すのに1時間もかかった。…カズ、そいつらは光るのか？」
ミラー　「光る？　何が？」
スネーク　「頭だ」
ミラー　「頭？」
スネーク　「そいつらの髪はどうなってる。フサフサなのか」
ミラー　「何を言ってるんだ？　そんなこと判るわけないじゃないか」
スネーク　「オウムは。オウムの鳴き声はするのか」
ミラー　「オウム？　おい、話す相手間違ってるぞ、鳥のことならセシールだろ…じゃなくて、

さっきから何の話をしてるんだ?」

スネーク「いや、判らなければいい、別の方法を考える。気にするな」

ミラー「…?　まあいい。ともかく、こいつらのアンブッシュには何人も味方がやられてる」

ミラー「十分に気をつけるんだ」

●やぐら兵

ミラー「場所にもよるが、敵は重層的な兵力配備を行っている」

ミラー「屋根の上や遠くの地形から、長距離攻撃を仕掛けてくる敵も少なからずいる」

ミラー「近くの敵に気を取られて、遠くからの攻撃に無防備にならないよう注意してくれ」

スネーク「気をつけよう」

●随伴兵

ミラー「敵の戦車や装甲車、それに攻撃ヘリには常に一個戦闘班が随伴している」

ミラー「兵士個々の戦闘力は飛び抜けて高いわけじゃないが、何しろ連携が巧みで手を焼く。マシンの火力だけでも洒落にならないってのに」

スネーク「倒し甲斐があっていい」

ミラー「実際に戦うとなったらそうも言ってられないぞ」

ミラー「いいか、包囲されないように気をつけるんだ。敵マシンのキルゾーンへ追い込まれるなんてのは惨めだ」

ミラー「それから敵同士のやり取りにも注意するんだ。会話から動きを読んで先手を打っていけば、勝機も生まれるだろう」

ミラー「正面から殴り合うだけが能じゃない。ゲリラの戦い方を忘れるなよ」

スネーク「了解だ」

●盾装備兵

ミラー「盾を装備した敵兵も面倒な相手だ」

ミラー「盾に隠れながらピストルで攻撃してくる連中の相手をするのは、アマンダ曰く『かなり!　ストレスフルよ』だそうだ」

ミラー「なるべく側面に回り込むこと。スモークやスタングレネードで目眩ましするなんてのもいいだろう」

ミラー「それと徹甲弾を使えば、比較的容易に盾を

無力化できるはずだ。徹甲弾を手に入れたら有効に活用してくれ」

●兵士のレベル

ミラー「哨戒兵やコマンド兵が装着している装備品、特に防弾着にはバリエーションがあることが判っている」

ミラー「装備の重装化は敵の防御力と銃撃の精度上昇に正比例する、という観察報告もあがっている」

スネーク「奴らの中でも戦闘スキルが高い兵士なんだろう。だから、重装備でも高いパフォーマンスのまま戦えるということだ」

ミラー「装備の違いは一目でわかるそうだ」

ミラー「重装備の敵兵には一層の注意が必要だ、忘れないでくれ」

■戦闘距離

●武器と戦闘距離

ミラー「敵は装備している武器によって、こちらとの間合いを変えながら戦う。敵の装備を見極めることは勝敗に大きく影響する」

ミラー「敵に遭遇したら装備をよく観察するんだ」

・近距離

ミラー「ハンドガンやショットガンを持った敵は、かなり近くまで迫ってくる。危険は危険だが、反面こちらとしても狙いやすくはなる」

ミラー「機転を利かせろ。不利を有利に転じるんだ」

・中距離

ミラー「アサルトライフルやマシンガンを装備する敵は、やや距離を置いて銃撃を加えてくることが多い」

ミラー「遮蔽物を上手く使って敵弾を防ぎながら、確実に命中弾を送り込め」

・遠距離

ミラー「スナイパーライフルや、ロケット弾系の大型ランチャーを持つ敵は、自分から距離を詰めてくることはないと思っていい」

ミラー「場所を転々と移動しながら、こちらの隙を突いて狙い撃ってくる」

ミラー「目には目、歯には歯。スナイパーライフルを使うといいだろう。不用意に姿をさらさないように注意しながら、逆に相手の不意

を突いてやるんだ」

■ミッション情報

●FSLN司令官接触

ミラー「地図を見る限り、FSLN（サンディニスタ）司令官が捕らえられている小屋までの地形はバリエーションに富んでるな」

スネーク「そのようだ。まずはジャングルか」

ミラー「敵の目を盗んで進むにはいいだろうが、その分こちらも敵を発見しにくい。注意してくれ」

ミラー「次は川沿いの沼地。どの程度監視態勢に厚みを持たせているか、よく見極めて進んでくれ」

スネーク「そうしよう」

ミラー「最後がボートの修理小屋。ここに司令官がいる。敵の重要拠点だ、警備は厳重だろう。腕力にモノを言わせる必要があるかも知れん」

ミラー「まだ先は長い、くれぐれも慎重に進んでくれ。あまり派手な音を立てるなよ」

●アマンダ追跡

ミラー「次の目的地までは、途中までは来た道を逆に辿ることになる」

ミラー「地形を把握しているからと言って油断はするなよ。敵はあんたの存在を知った。これまで以上に警戒を強めているだろう」

ミラー「慎重に進むんだ。必要があれば火器の使用もためらうな」

スネーク「川を渡る必要があるな」

ミラー「ああ。吊り橋がかかってる。ここは一本道だ。敵の目を避けるには工夫が要るだろう」

スネーク「吊り橋を抜けた沼地の先には…バナナ園か」

ミラー「工場設備が併設されてるようだな」

ミラー「同じ移動するにしても森の中とは勝手が違うだろう、気をつけろよ」

スネーク「了解だ」

ミラー「それと、途中FSLN（サンディニスタ）の捕虜を見つける可能性もある。できるだけフルトンで回収してやってくれ」

スネーク「覚えておこう」

●C4「バリケード破壊」

ミラー「村の北にあるバリケードを壊すには、

C4(コンポジション4)爆薬が必要だ。スネークなら、扱いには慣れてるよな?」

スネーク「ああ。C3の時代からお世話になってる」

ミラー「C3か。確か寒い土地じゃ脆くなるって言うんで、C4に世代交代したんだっけな」

ミラー「成形自在のプラスティック爆薬。安定性に優れていて、起爆装置なしじゃ爆発しない。火をつけても普通に燃えるだけ…」

スネーク「ベトナムじゃ、燃料代わりに使う米兵もいたらしい」

ミラー「バリケードの近くに設置した後は、安全な場所まで移動してから、起爆ボタンで爆発させてくれ」

スネーク「了解だ」

●バシリスコ「バリケード破壊」

スネーク「列車車庫(ターミナル)の近くにあった巨大な足跡…何だと思う? カズ」

ミラー「わからん…象でもあんなに大きくない。チコが言っていたバシリスク(バシリスコ)の話を思い出した」

スネーク「信じたくはないが…」

ミラー「俺もだ。奴らがそんな兵器を持っているとしたら…バシリスク(バシリスコ)に似ているのは外見だけじゃないかもしれん」

スネーク「どういうことだ?」

ミラー「中世の百科事典にはこう書かれているそうだ」

ミラー「『バシリスクは蛇の王。蛇はバシリスクを恐れ、目にすると逃げる…』」

ミラー「『それはバシリスクが臭いや息で蛇を殺すからだ』」

スネーク「目には目を、ということか」

ミラー「脅すつもりはないが…注意するに越したことはない」

スネーク「わかってる」

●AI兵器のパーツ

ミラー「AI兵器の各部は、AIポッド内の各記憶板に連動してるって話だ」

ミラー「パーツを破壊すれば記憶板のロックが外れるらしい」

ミラー「そうすれば、AIポッドに乗り込んだときに対応する記憶板を抜き取れるようになる」

ミラー「だが破壊してしまったパーツは回収して使い回すことが出来ない。どっちを取るかは

あんたに任せるよ」

●管制塔へ

ミラー「その基地、アマンダの同志からの情報以上に厳重な警備態勢だな…」

スネーク「確かにな。軽装備では突破は難しいかも知れない」

ミラー「火力にものを言わせて強行突破…そんな状況も想定した方がいいだろう」

ミラー「武器装備は出来る限り多く持って行くべきだな。防御力も高いほどいい」（バトルドレス推奨）

スネーク「了解だ。スーツを選ぶ時は気をつけよう」

ミラー「スネーク、俺もすぐに合流する。あと少しだけ踏ん張ってくれ」

スネーク「ああ」

●ターゲット射撃／プエルト・デル・アルバ

ミラー「現在、そこに敵兵の姿は確認されていない。安心して射撃訓練に集中してくれ」

ミラー「コンテナやフォークリフトの陰の的も見逃さないでくれよ」

ミラー「的の距離は中距離だし、アサルトライフルなんかを持っていくといいかもな」

ミラー「まあ、使用する武器は自由だ。あんたが練習したい武器を選べばいい」

●ターゲット射撃／リオ・デル・ハーデ

ミラー「そこにいた敵兵はすでに排除されている。今は誰もいないはずだ」

ミラー「あんたはただ、的を撃つことだけに集中すればいい」

ミラー「そこは遠距離射撃の練習に向いている。スナイパーライフルなんかを持っていくといいかもしれないな」

ミラー「もちろん、あえてハンドガンの腕を磨くなんてのもありだ」

●ターゲット射撃／アルデア・ロス・デスピエルトス

ミラー「捕虜収容所はすでに俺たちが押さえた。もう敵はいない」

ミラー「入り組んだ道を活かして、市街戦の訓練と行こう」

ミラー「投擲武器なんかの練習をしてもいいかもしれん」

●ターゲット射撃／米軍ミサイル基地

ミラー　「その場所に敵兵の姿は確認されていない。訓練に集中できるはずだ」

ミラー　「的は少し分かりにくい場所にもあるかもしれないが、頑張って探してくれ」

ミラー　「距離としては中距離だ。好きな武器を使ってくれ」

ミラー　「素早く、正確に的を狙うんだ」

●ターゲット射撃／採掘場居住区

ミラー　「バラックにいた敵兵達はすでに排除した。思う存分的を撃ってくれ」

ミラー　「時間内に全ての的を撃つには、移動のロスを減らすのがコツだ」

ミラー　「屋根の上から狙撃したりするのがやりやすいかもしれん」

ミラー　「もちろん、あえて別の武器でチャレンジするのも訓練としては有効だ」

●フルトン回収ミッション

ミラー　「わかっていると思うが、今回はフルトン回収ミッションだ」

ミラー　「間違っても捕虜を撃って殺したりしないように気をつけてくれよ」

ミラー　「それと、回収装置を忘れたりしないように」

ミラー　「間違って捕虜を殺さないためにも、麻酔銃も持っていくといいかもしれないな」

●殲滅ミッション

ミラー　「これは殲滅ミッションだ。潜入ミッションではない」

ミラー　「戦闘は避けられない。隠れて済まそうなんて考えは無駄だ」

ミラー　「カムフラ率の高い装備より、防御力を優先するんだ」

ミラー　「もちろん武器も十分に携行する必要がある」

ミラー　「回復用のアイテムも忘れないでくれよ！」

●ホールドアップ

ミラー　「敵兵を降伏（ホールドアップ）させるには、後方からゆっくりと近づくんだ」

ミラー　「気づかれずに近づいて銃を構えれば、訓練を受けた兵士であってもひれ伏して降伏するはずだ」

ミラー　「とはいえ、せっかく降伏（ホールドアップ）させても、あんたが他の敵に攻撃されたら意味がない」

ミラー　「兵士が一人になったときを狙うんだ」
ミラー　「間違って兵士を撃たないように気をつけてくれよ。兵士を殺してしまうとミッション失敗だ」

●ワンショット

ミラー　「真の熟練兵（ベテラン）なら、一発の弾丸で多くの敵を倒すこともできる」
ミラー　「それには敵兵をそのまま撃っても無駄だ。誘爆を活用するんだ」
ミラー　「ガソリンの入ったドラム缶や、燃料を積んだ無人機……」
ミラー　「そういう引火性のものを撃てば起爆するだろう。その爆発に敵を巻き込んでやれ！」

●スナイピング

ミラー　「これは狙撃（スナイピング）ミッションだ。スナイパーライフルを忘れずに持っていってくれよ」
ミラー　「スナイパーライフルを構えることでスコープをのぞき込める」
ミラー　「スコープの倍率は方向キー左右で変更可能だ」
ミラー　「ただし、スコープを使えば視界は狭くなる」
ミラー　「あらかじめある程度方向を合わせてから構えるといいだろう」
ミラー　「遠距離を狙うときは、わずかな手ぶれでも大きく照準がずれる」
ミラー　「ただ、しばらくじっとして気持ちを落ち着ければ、自然と手ぶれは少なくなるはずだ」
ミラー　「あとは姿勢を低くするのも有効だ。覚えておいてくれ」

●完全ステルスミッション

ミラー　「今回のミッションでは、敵を一人も殺してはならない」
ミラー　「それから、一度でも敵に発見されたら任務は失敗となる」
ミラー　「とにかく慎重に行動するようにしてくれ」
ミラー　「姿勢を低く保つ、近くに敵兵がいるときは足音を立てずにゆっくり歩く…」
ミラー　「物陰に身を隠して、Ｌボタンで相手の気配をうかがうのも有効だ」
ミラー　「古典的だが、空になったマガジンを投げたりして敵を誘導するって手もある」
ミラー　「音にも気を遣え。音を視覚化するサラウンドインジケーターも便利だ」

●プーヤン・ミッション

スネーク「フルトン回収のバルーンを撃てばいいんだな?」

ミラー「ああ、そうだ。間違って吊られてる兵士を撃たないでくれよ」

スネーク「撃つか」

ミラー「スナイパーライフルとか、まあ他の武器でもいいが、きちんと狙いをつけて撃つんだ」

スネーク「風船撃ちか…」

ミラー「大空は広い。多くの風船を撃つには、CO-OPSで挑んでみるのがいいかもしれないな」

ミラー「まあ、あまり殺伐としたミッションばかりで気が滅入るだろう。たまにはこんなのどかなミッションがあってもいいんじゃないか?」

ミラー「フルトン回収のバルーンは豚みたいで美味そうだしな…」

スネーク「…それはいいが、さっき言ってた〝プーヤン・ミッション〟とはどういう意味だ?」

ミラー「子供の頃、近所に豚を飼っている家があってな、その豚の名前が〝プーヤン〟だったんだ」

ミラー「フルトン回収のバルーンを見るたび、そのことを思い出してな」

スネーク「だが、俺たちの目的はバルーンに感情移入するわけにはいかない」

ミラー「ああ。バルーンに豚がぶら下がってればいいんだがな…」

スネーク「……おい」(訝しむ息遣い)

ミラー「ん?」

スネーク「いや…」

●重要物資防衛

ミラー「装備品(アイテム)を奪った敵はエリアの外に逃げようとするはずだ」

ミラー「そのまま逃げられることのないように、優先的に無力化してくれ」

ミラー「複数の敵兵が確認されている。一人で対応するのは難しいかもしれん」

ミラー「CO-OPSとして二人一組(ツーマンセル)で任務に当たるといいだろう」

●拠点防衛

ミラー「敵の通り道にクレイモアを仕掛けるのも手だ」

ミラー「核発射を阻止するためにも、どんな手を使ってもボスを守りきるんだ！」

●輸送トラック爆破

ミラー「小銃程度ではトラックを破壊するには力不足だ。ロケット弾あたりを使うのがいいだろう」

ミラー「スナイパーライフルでも何かを誘爆させれば使えるかもしれないがな」

ミラー「支援砲撃マーカーを打ち込むことができれば、支援砲撃もできるんだが…」

●ミサイル迎撃

ミラー「ミサイル一発でマザーベースが沈むことはないが、着弾すれば当然修理に時間と人手、それに資材が必要になる」

ミラー「なんとか俺たちのマザーベースを守ってくれ」

ミラー「ちなみに、自分がミサイルに当たったりすればまず命はないぞ。気をつけてくれ」

●障害物爆破

ミラー「爆破にはＣ４を使うことになるが、当然ながら起爆時には大きな音が出る」

ミラー「設置してから起爆するまでの間に、十分に距離を取って自分の安全を確保するんだ」

●スネーク装備品奪還

ミラー「ボスの装備がどこに隠されているかは不明だ」

ミラー「もしかしたら敵兵士が持っている可能性もある」

ミラー「ホールドアップや、無力化後のボディチェックも活用してみるといい」

ミラー「ボディチェックには、倒れている兵士の近くでアクションボタンだ」

「パス」ブリーフィングファイル

■コスタリカ

●国名の由来

パス　「Costa Ricaは〝豊かな海岸〟という意味よ」

スネーク　「コロンブスが名付け親って話は本当か?」

パス　「どうかな。でも、大航海時代、コロンブスがリモンの近くに漂着したのは本当」

パス　「その時、先住民（インディヘナ）から沢山金細工をもらったって、彼の日誌に書いてある。それが由来なのかも」

パス　「変な話。コスタリカでそんなに金が採れるわけでもないのに」

スネーク　「もともと、黄金の国（ジパング）を探して航海に出た連中だ。金には目がなかったんだろう」

パス　「金なんかなくても、コスタリカは豊かな国よ。森や動物達、平和を愛する人々…私はそれを守りたい」

スネーク　「…ああ、そうだな」

●内戦

パス　「コスタリカは、中米で最も早くから、民主主義が根付いた国よ」

パス　「クーデターや独裁もあったけど、大混乱にまでは至らなかった。それが、26年前…」

スネーク　「内戦だな。君の祖父母もそれで亡くなったと」

パス　「大統領選に不正があったかどうかで揉めたのが原因だって」

パス　「どうしてそれだけのことで、仲間同士が争わなきゃいけないのかな」

パス　「話し合えば済むことなのに」

スネーク　「そう…できればよかったのにな」

パス　「今でも、内戦の時の弾痕が残っている建物がある」

パス　「四半世紀経っても、コスタリカ人（ティコ）にとっては忘れられない…いえ、忘れちゃいけない出来事なの」

パス　「軍隊が憲法で廃止されたのは、内戦の翌年よ」

●政策転換

パス　「今年選ばれたオドゥベル大統領は、アメリカと距離を置こうとしているみたい」

パス　「アメリカの銀行に与えられた特権を制限したり、キューバへの制裁をやめたり…」
パス　「前の大統領は、ＣＩＡとの癒着を疑われたくらいの親米家だったんだけど」
スネーク　「ＣＩＡが動いているのは、大統領の方針変更に危機感を持ったから…?」
パス　「そうかも。でも、それだけであんな軍隊を持ち込むのかな…」
スネーク　「それを調べるのも俺たちの仕事だ」
パス　「うん。ありがとう、スネーク。ピース」

●国連平和大学

スネーク　「パス、君は国連平和大学の学生なのか?」
パス　「ううん、まだ高校生だもの。だけど、ガルベス先生の研究室にちょくちょくお邪魔して、勉強させてもらってる」
パス　「国際法・安全保障・紛争調停・人権…そういったものを研究して、平和構築に役立てようとしてるの」
スネーク　「いや、それもそうなんだが…国連に平和大学があるなんて、聞いたことがなくてな」
パス　「ああ、そのこと? 正確には、まだ設立準備の段階なの。研究自体は始めてるけど、国連の決議はまだ出ていなくて」
パス　「ガルベス先生、気が早いから…」
スネーク　「あ、ああ。そうか」(ガルベスがＫＧＢと知っているので歯切れが悪い)
パス　「コスタリカは軍隊を廃止しているし、中米司法裁判所を主催していたこともあった」
パス　「平和大学を置く場所として、ふさわしいと思うな」

・ガルベス教授

パス　「ガルベス先生がＫＧＢだったなんて…」
パス　「純粋にコスタリカの将来を心配して、私を手助けしてくれたと思ってたのに」
スネーク　「君は知らなかったのか?」
パス　「本当よ！　信じて、スネーク。大学で平和の研究をしているって紹介されて、研究室も身分証もちゃんとあって…」
スネーク　「連中は、完璧なカバーストーリーを作って潜伏する。身分も、仕事も、時には家族でさえも用意するんだ」
スネーク　「君が騙されるのも無理はない」

パス　「スネークは知っていたの?」
スネーク　「ああ。最初に奴と会った時から…」
パス　「教えてほしかった…」
スネーク　「すまない。君に伝えるべきか、わからなかった。余計なことに巻き込みたくもなかった」
パス　「でも、よくわかったのね?　一目見ただけなのに」
スネーク　「臭いだ」
パス　「臭い?」
スネーク　「任務を与えられ、それに忠を尽くす人間独特の臭い…要は同類の臭いを嗅ぎ分けたというところだ」
パス　「スネーク、すごい」
スネーク　「いや、本当は…そうじゃない。奴の義手だ。大学で平和を教えるのに、暗殺用義手は必要ない」
パス　「…」

●コスタリカコーヒー

スネーク　「君達が持ってきてくれたコーヒー、うまかったよ」
パス　「でしょう?　コスタリカのコーヒーは美味しいんだから」
パス　「中央盆地は、コーヒーの栽培に最適な条件が揃ってるの」
パス　「標高があって、気温の変化が少ない。土が火山性だから、水はけもいいし」
スネーク　「〝教授〟も随分御執心だった」
パス　「行きの船で飲んだコーヒーが美味しくなくて。先生、ずっとおかんむりだったのよ」
スネーク　「それにしては、コスタリカコーヒーって名前をあまり聞かないな」
パス　「業者に買い上げられた後は、他の国の豆と混ぜられちゃうみたいだから…」
パス　「せっかくいい豆が採れるのに、それがコスタリカのものってわかってもらえないのは、悔しいな」
スネーク　「ちゃんとアピールすればいい」
パス　「うん。将来、『コスタリカ・コーヒー』として、きちんと評価されるようになるといいな」
スネーク　「そうだな」

●コスタリカの遺跡

スネーク　「パス、コスタリカに大きな遺跡はあるか?」

パス　「カルタゴの東に、グアヤボ遺跡って言うのがある。そんなに大きくはないけど」

スネーク　「場所が違うな…他には?」

パス　「国境からニカラグアにちょっと入ると、コンセプシオン城塞っていうのがあるかな。有名なのはそれくらい」

スネーク　「それじゃあ、イラスから見た遺跡は一体…」

パス　「コスタリカの古代文明については、まだわかっていないことが多いの」

パス　「何に使ったかわからない大きな石の球も各地に残ってる」

■コスタリカの非武装中立

●憲法第12条

スネーク　「パス、君はコスタリカが憲法で軍隊を廃止したと言っていたな」

パス　「うん。憲法第12条で、恒久的な軍隊は廃止する、と宣言してるの」

パス　「ただ、国防のためや、アメリカ大陸内の協定に基づいて、軍隊を組織することは許している」

スネーク　「一時的になら許されるということか」

パス　「そういうことになるかな。でも、この憲法が制定されてから、コスタリカが軍隊を組織したことはないの」

・平和を維持するには

スネーク　「軍隊なしで、どうやって国を守るんだ。特に中米は、あちこちに火種があるだろう」

パス　「そのための外交よ。高い理想を掲げ、他の国から尊敬されるような国であれば、国際社会の支援を得られるはず」

パス　「実際、ニカラグアが侵攻した時は、二回とも米州機構（OAS）の仲介で外交的に解決したんだから」

スネーク　「結局はアメリカ頼みってことじゃないのか?」

パス　「確かにアメリカの影響力は絶大よ。でも、当時コスタリカはアメリカの政策に批判的だったの」

パス　「それでもアメリカがコスタリカを支援したのは、コスタリカが平和外交を掲げていたから…。そういうふうにも言えないかな」

スネーク「確かに、それも一つの駆け引きだ。だが、なりふり構わず力で押してくる国もあるだろう」
パス「そうかも知れない…スネークから見れば、私の考えは甘いのかもね」
パス「でも私達だって、何もせずに平和が得られるとは思ってない。外交だって一つの戦いよ」
パス「それに、常に災いの芽を見つけて、摘み取る努力が必要だと思う」
パス「だから、そう思うから私は、あいつらの基地へ…」（涙声）
スネーク「責めてるわけじゃない。君は立派だった」

●軍隊を廃止した理由

パス「軍隊が廃止されたのは25年前。内戦の翌年よ」
パス「私は子供の頃から内戦の悲しさを教えられてきた。同じ国の人間同士が争う愚かさ、悲しさ…」
パス「それが身にしみたから、軍隊を廃止した」
パス「その分、教育に力を入れることにしたの。『兵士の数だけ教師を』が合い言葉だったって」
スネーク「ああ。教育は大事だ。ゲバラだって、ゲリラ戦の合間に読み書きを教えていたくらいだ」
パス「当時のコスタリカは貧しかった。資源があるわけでもない。軍備と教育、どちらかを優先するしかなかったんだと思う」

●日本の平和憲法

スネーク「日本にも平和憲法があると、カズは言っていたが」
パス「うん。コスタリカが今の憲法を決める時も、日本憲法を参考にしたそうよ」
パス「ただ、日本の平和憲法は、戦争そのものを放棄しているの」
スネーク「そこはコスタリカと違うな」
パス「でも…日本は自衛隊を持ってるでしょ。そこがわからない」
パス「今度ミラーさんに聞いてみようかな。昔自衛隊にいたって言うし」
スネーク「勉強熱心だな。まあ、ほどほどにしてやってくれ」

●永遠平和のために

スネーク　「平和は人間の関係にとって不自然な状態…だったか？　学校で習ったと言っていたな」

パス　「ええ。ドイツの哲学者、カントの言葉よ」

パス　「1795年の『永遠平和のために』という本に書かれているの」

パス　「でも、だからこそ平和を創らなくてはならない、というのがカントの主張なの」

スネーク　「どうやって？」

パス　「それがその本に書かれてる。スネークも平和に興味が湧いた？」

スネーク　「いや…。俺はその正反対の世界にいる人間だ」

パス　「そう…」（冷淡に）

パス　「…私の祖父母は内戦で死んだわ。平和ならば死ななかったはずなのに」

パス　「あなたは戦争を望んでいるの？」（不可解）

スネーク　「罪もない民間人に被害を出したいとは思わない。だが、他国の攻撃を受けたらどうする？」

スネーク　「侵略や弾圧、不当な政治的支配を防ぐには、国を守るための力が必要だ」（抑止力）

パス　「全ての国が侵略や、武力による内政干渉をやめれば、守る力も必要なくなるわ」

スネーク　「どうやってそんなことを約束させる？」

パス　「それは…」（口ごもる）

スネーク　「…すまない。だが自分や家族を守るには現実を知ることも必要だ」

スネーク　「もちろん理想を持つことも大切だとは思うが」

パス　「そうね…。ありがと。ピース！」

■コスタリカの自然

●コスタリカの熱帯林

パス　「一口にコスタリカの森と言っても、いろいろある。全部がいわゆる熱帯雨林ではないの」

パス　「コスタリカは確かに赤道に近いけど、山も多いから」

スネーク　「そうだろうな。標高が4，000フィート上がれば、気温は7℃以上も下がる」

パス　「低地に広がる熱帯雨林。高地の熱帯雲霧林。それと、乾期がある地域では熱帯乾燥林ね。大まかにはこの三つ」

・熱帯雨林
パス　「カリブ海沿いの低地は、たいてい高温多湿の熱帯雨林。多くの人が想像する〝ジャングル〟のこと」
パス　「密生した木が日光を求めて、高いところで枝葉を繁らすの。地面の近くは薄暗いから、気をつけて」
パス　「もっとも日光が届かない分、あまり地表に植物が生えないから、歩きやすいかも知れない」
スネーク　「光合成できても、役に立たないってわけだ」
パス　「光合成？　人間は光合成しないでしょ」
スネーク　「普通の人間はな…」（ジ・エンドのことを思い出している）
・熱帯乾燥林
パス　「太平洋側の山地みたいに、はっきりした乾期があるところでは、熱帯乾燥林になる」
パス　「乾期の間は、木が葉を落としてしまう。見通しはいいけど、逆に身を隠す場所が少ないから気をつけて」
スネーク　「殺風景だな」
パス　「そうでもない。乾期に花を付ける木も多いから」
パス　「私の好きなタブベイアもその一つ。黄色い花は、とっても鮮やかよ」
・熱帯雲霧林
パス　「雲霧林は、中央の山岳地帯に広がる森よ。常に霧がかかっていて、そこに立っているだけで体が濡れてしまうくらい」
パス　「森全体が雲の中にある、って感じかな」
スネーク　「視界が悪そうだ」
パス　「うん。でも、とても綺麗な森よ。神秘的で、緑の迷宮に迷い込んだみたい」
スネーク　「…本当に迷わないように気を付けよう」
パス　「珍しい動物も沢山棲んでる。特に綺麗なカエルがいっぱい。湿気が多いからかな」
●モルフォ蝶
スネーク　「ピースウォーカーに描かれている蝶…何だかわかるか？」
パス　「…モルフォ蝶ね。それも、ペレイデスモルフォじゃないかな」
スネーク　「ペレイデスモルフォ？」

パス　「うん。モルフォ蝶の中でも、コスタリカに多い種類よ」
スネーク　「そうか」
パス　「メタリックブルーの羽根がとても綺麗なの。きらきら光って、遠くからでもわかるくらい」
スネーク　「光を反射するってことか?」
パス　「そう。構造色って言ってね。モルフォの鱗粉には細かい凹凸があって、そこで光が干渉して青く見える」
パス　「凹凸の間隔が、青い光の波長と同期していて…」
スネーク　「よくわからんが、もしその間隔を変えられるとしたら、見た目の色も変わるってことか?」
パス　「原理的にはそう。その応用で、布を染めずに色をつける研究もされているって聞いたことがある」
スネーク　「カムフラージュに利用できるかも知れんな…」
パス　「そんな話?」
スネーク　「俺達には重要なんだ。しかし、なぜピースウォーカーにそんな蝶を…」
パス　「綺麗だからじゃないかな」
スネーク　「それだけならいいが…」

●生物の多様性

パス　「コスタリカには、およそ87，000種の生物がいると言われているの。全世界にいる生物種の5％に当たるんだって」
スネーク　「この狭い国にか?　そいつは大したもんだ」
パス　「私は、この生き物の多様性を守りたい。多様性が喪われた環境は弱いから。プランテーションを見ていればわかる」
スネーク　「それは俺もわかる気がする。似たような連中ばかりで部隊を編成すると、大抵うまく行かない」
スネーク　「多少はみ出しものが混じっているくらいが丁度いい」
パス　「これだけ種類がいるから、ちゃんと分類できていない生き物がまだいっぱいいる」
パス　「私はその分類のお手伝いをしてみたいって思ってるの。パラタクソノミスト、って言えばいいかな」

スネーク「パラ…なんだって?」

パス「パラタクソノミスト。分類学者(タクソノミスト)の補助員(パラ)ってこと」

スネーク「なんだ。パラシュートを使うのかと思った」

パス「変なスネーク…」（くすくす）

●コスタリカ開発公社

パス「コスタリカ開発公社(CODESA)が設立されたのは、一昨年のことよ」

パス「今年オドゥベル大統領が選ばれてからは、ますます開発に力が入れられているの」

スネーク「企業国家体制、ってやつだな」

パス「開発はいいけど、一つ気がかりがある」

スネーク「何だ?」

パス「開発公社(CODESA)が、CIA(ラ・シーア)の隠れ蓑になってるんじゃないかって」

スネーク「〝教授〟が言っていた件だな。CIAの傭兵は警備員を装っていると」

スネーク「開発公社(CODESA)は偽装(カムフラージュ)に利用された…」

パス「開発で森が壊されたりするのは心配だけど…、こんなことに関わったりはしないと思う」

■自分について

●名前の由来

パス「〝Paz〟っていう名前は、お母さんがつけてくれたの」

パス「この国がこれからも平和でありますように、って願いが込められているんだって。中米にはよくある名前なの」

パス「お母さんはよくそのことを聞かせてくれた。戦争はしちゃいけない。平和を守って行かなきゃって」

スネーク「確か、君の祖父母は…」

パス「そう、内戦で亡くなった。だからお母さんは余計、戦争が嫌いだったんだと思う」

スネーク「そこも、カズと同じだな。『和平』って名前は、母親が付けてくれたそうだ」

パス「そうか、日本も戦争を経験したんだもんね。ミラーさんのお母さんの気持ち、わかる気がする」

●ピースサイン

スネーク「パスはピースサインが好きなのか」

パス「うん。平和を愛する人達の、合い言葉だも

の。スネークもやってみて。セイ・ピース」

スネーク　「…遠慮しておく。俺には不似合いな言葉だ」

パス　「そう、残念」

スネーク　「そもそも、Vサインのvは勝利(ヴィクトリー)のVだろう。いつから平和の意味になったんだ」

パス　「私も詳しくは知らないんだけど…ベトナムの反戦運動あたりからみたい」

パス　「そうだ。ピースサインは裏向きには出さないで。イギリスあたりだと、相手を侮辱することになってしまうらしいから」

●生い立ち

スネーク　「今は一人で暮らしているのか?」

パス　「ううん。中等学校に入学してからは、学校の寄宿舎に入ってるの」

パス　「お母さんが死んでからは親戚の家に引き取られたんだけど…やっぱり、本当の家族じゃないから」

スネーク　「居心地が悪かったか?」

パス　「そうね…。おばさんたちは私の前では優しかったけど…」

パス　「でも、急に子供を引き取ることになって、やっぱり困ってたんだと思うの」

パス　「一緒に暮らしてたら隠し事なんて出来ない。やっぱり私が迷惑をかけているというのはわかったから…」

スネーク　「苦労したようだな」

パス　「ううん。引き取ってくれる人がいただけで有り難かった」

パス　「私生児(バスタード)の中には母親が死んでストリートチルドレンになる子もいるし、内戦が多い国はもっとひどい」

パス　「この程度で不幸とは言えないわ」（本当の自分の生い立ちはもっとひどい、という自嘲を匂わせる）

スネーク　「君は強いんだな」

パス　「…ううん。強くなんてない」（内面に踏み込まれるのを拒絶する）

●マザーベースでの役割

パス　「スネーク、一つお願いがあるの」

スネーク　「何だ」

パス　「私にも何か、マザーベースの仕事を手伝わせてほしい。みんなの役に立ちたい」

スネーク　「いいのか。あんなことがあった後だ。落ち着くまでは休んだほうがいい」
パス　「ありがとう。でも私なりに、自分ができることをやりたいの」
パス　「銃を持つのは無理かも知れないけど、料理なら得意よ」
スネーク　「頼もしいじゃないか」
パス　「糧食班に配属してくれれば、頑張れると思う。慣れてきたら、コスタリカ料理もレシピに加えたいな」
スネーク　「よろしく頼む」

■コスタリカ・カリブ海沿岸

●プラヤ・デル・アルバ
パス　「〝プラヤ・デル・アルバ〟は、スペイン語で『曙光の岸辺』という意味。カリブ海から昇る朝日が、とっても綺麗なの」
スネーク　「『曙光の岸辺』か。作戦のスタート地点としてふさわしい」
パス　「青い海、白い砂浜、緑のヤシの木…南国ムード満点でしょ。地上の楽園よ」
スネーク　「全くだ。アロハでも着て行きたいね」
パス　「珊瑚礁やマングローブの森は、小さい魚を守ってくれる。砂浜にはウミガメが群れを成して、子供を産みに来る」
パス　「ここは、動物たちにとっての楽園でもあるの」

●ボスケ・デル・アルバ
パス　「〝ボスケ・デル・アルバ〟は、『曙光の森』という意味。やっぱり、東海岸にあることから来ているの」
パス　「典型的な熱帯雨林よ。いわゆるジャングル」
スネーク　「残念だが、朝日は拝めそうにないな」
パス　「そうね。生い茂った樹に遮られて、下まで直射日光が届かないの。進みにくいかも知れないけど…」
スネーク　「大丈夫だ。ジャングルなら、昔散々さまよった」

●プエルト・デル・アルバ
パス　「傭兵達が資材の搬入に使う基地は、海沿いの高台にあるの」
パス　「あの人たちは、勝手にここを〝プエルト・デル・アルバ〟と呼んでる。『曙光の港』

という意味よ」

パス　「基地から周りは丸見え。私達は見つからないように忍び込もうとしたけど…見張りに見つかって、それで…」（言葉に詰まる）

スネーク　「どうした？」

パス　「…ごめんなさい、詳しいことはガルベス先生から聞いて？」

スネーク　「…わかった。無理に思い出すことはない」

（思い至ったように）

パス　「ごめんなさい…どうしても、私…」

スネーク　「君の努力を無駄にはしない。よく頑張ったな」

■コスタリカ・リモン東

●エル・セナガル／ジャングル

パス　「ここもボスケ・デル・アルバと同じ熱帯雨林。高温多湿の森林帯よ。エル・セナガルは『泥』の意味」

スネーク　「泥か。足を取られないようにしないとな」

パス　「このあたりでは、よく川が氾濫するの。その時溢れた水が地表を削って作った溝が、あちこちにある」

スネーク　「隠れて進むにはよさそうだ」

パス　「こっちからの見通しが悪いってことでもある。気をつけてね、スネーク」

●エル・セナガル／峡谷

パス　「そのあたりには吊り橋があるはずよ」

スネーク　「こんな低地に？」

パス　「この近くは珍しく地盤が固くて、高台になっているの。そこを川が浸食して、谷になった」

パス　「このあたりで、他に川を渡れるところはないんじゃないかな」

スネーク　「橋に敵兵がいたら、厄介だな」

パス　「谷に霧がかかっているから、水面までは見えないかも。でも、落ちたらただではすまないと思う」

スネーク　「用心するとしよう」

●エル・セナガル／沼地

パス　「川が氾濫すると、岸が削れて沼地ができるの。このあたりではよく見かける地形よ」

スネーク　「沼地か。下が泥（エル・セナガル）じゃ、足音に気をつけないとな」

パス　「川を挟んだ反対側にも、同じような沼地があるわ。吊り橋を渡れば、向こう岸へ行ける」

●リオ・デル・ハーデ

パス　「ここを流れているのはリオ・デル・ハーデ。『翡翠の川』という意味」

スネーク　「翡翠？　鉱床でもあるのか」

パス　「ううん、川面の色が似ている、っていうだけ。翡翠が採れるのはグァテマラよ」

スネーク　「その割には…お世辞にも綺麗な色とは言えないな」

パス　「今は雨期だから、水が濁ってるの。もうすぐ乾期になるから落ち着いてくるはずよ」

パス　「このあたりでは、川も重要な輸送経路なの。流れは緩やかだし、海沿いには運河も多い」

スネーク　「船か…多少大きな荷物でも運べそうだ」

パス　「核兵器…？」

スネーク　「詳しいことはまだわからん。調査を続けよう」

パス　「ありがとう。お願い、スネーク」

●バナネル・フルタ・デ・オロ／選別所

パス　「コスタリカのカリブ海沿岸は、バナナの栽培が盛んなところよ。あちこちにこんなバナナ園（バナネル）がある」

パス　「19世紀にパナマから導入されて以来、バナナはコスタリカの主要農産物になった。多額の外貨をもたらしているんだけど…」

スネーク　「まさに黄金の果物（フルタ・デ・オロ）、だ」

パス　「そうね。でも、大量のバナナを輸出するためには、広い土地が必要になる」

スネーク　「プランテーションだな」

パス　「バナナだけが植えられた広大な農場をつくるために…切り拓かれた森からは、動物達が追われてしまったの」

パス　「コスタリカにとって本当にいいことなのか、私にはよくわからない」

●バナネル・フルタ・デ・オロ／農場

パス　「20年くらい前に、パナマ病が大流行したの。そのせいで、つぶれてしまったバナナ農園もあるみたい」

スネーク　「パナマ病？」

パス　「カビの一種よ。パナマ病のせいで、それまで栽培されていた種類のバナナは、ほぼ全滅してしまったそうなの」

スネーク　「全滅なんてことがあるのか?」
パス　「食用のバナナは種をつけないから、芽を分けて育てるの。それを次々と畑に植えていくから…」
スネーク　「畑に大量の複製が並んでいるようなものか」
パス　「うん。一つの株が病気になれば、すぐ広がってしまう。遺伝的に多様性のない種は、弱いのよ」
パス　「今栽培されているのは、別の種類のバナナなの。パナマ病に耐性があるんだって」

■コスタリカ・イラス山

●カミーノ・デ・ラーバ／坂道

パス　「コスタリカには活火山が多いの。イラス山もその一つ」
スネーク　「なるほど、それで『溶岩の道（カミーノ・デ・ラーバ）』か」
パス　「このあたりの熱帯乾燥林は、熱帯雨林とはかなり違う。乾期には葉を落としてしまうの」
パス　「熱帯の森は、鬱蒼としたジャングルばかりでもない。場所によっては、サボテンだって生えてる」
パス　「いろんな森や自然が残っているところが、コスタリカのいいところよ」

●カミーノ・デ・ラーバ／三叉路

パス　「コスタリカで本格的な鉄道が走り始めたのは、100年位前のことよ」
パス　「中央盆地で穫れるコーヒーを、カリブ海側から輸出したかったのね」
スネーク　「このジャングルだらけの地形を、100年も前にか！　ご苦労なことだ」
パス　「実際、かなりの難工事だったって話よ」
パス　「その後、鉄道はバナナの輸送にも使われるようになったの。このあたりにも、支線が残っているかもね」

●アルデア・ロス・デスピェルトス

パス　「アルデア・ロス・デスピェルトスは『起きている奴らの村』という意味よ」
スネーク　「変わってるな」
パス　「このあたりはコーヒーの産地で、近くには工場もあるの。村の人もみんなコーヒー好きだから…」
スネーク　「眠れない、ってわけか。洒落のわかる連中だ」

パス　「そんな村を占拠して捕虜収容所に使うなんて…許せない。CIA（ラ・シーア）も、CIA（ラ・シーア）に雇われた人たちも！」

パス　「この村の人たちは、平和に暮らしていたはずよ。それを踏みにじる権利がどこにあるの⁉」

スネーク　「自分達の権利以外は、目に入らん連中だ。残念だが、そういった種類の人間もいる」

パス　「そうなのかな…」

スネーク　「任せておけ。そんな連中を相手にするのも、俺たちの仕事だ」

●カフェタル・アロマ・エンカンタド

パス　「ここのコーヒー工場も、CIA（ラ・シーア）に占拠されてるのね…。それも、麻薬工場にだなんて」

パス　「いい豆を作ることで有名だったのに…」

スネーク　「カフェタル・アロマ・エンカンタド…『魅惑の香り』コーヒー園、と言ったところか」

パス　「ええ。傭兵達をコスタリカから追い出したら、きっとまたコーヒーが作れる時が来ると思う」

パス　「そうしたらスネークにも、ここで作ったコーヒーを淹れてあげたいな」

スネーク　「楽しみだ。作戦を終えて熱い一杯を啜る…悪くない。…おっと」（誰かに聞かれてないかを気にするように）

パス　「どうしたの？」

スネーク　「いや…昔、コーヒー嫌いの知人がいたのを思い出してな。イギリス人だった。あんな泥水を飲むな。紅茶を飲め、だとさ」

パス　「まあ！　あのおいしさがわからないなんて…かわいそうね、その人」

●エル・カダルソ

パス　「コスタリカの鉄道建設は、難工事の連続。犠牲者が大勢出て、工事の中断もあったそうよ」

パス　「ここもその一つ。急な地形を登り切って、ようやく開けた場所に車庫を造ったらしいの」

パス　「それで付いた名前が…」

スネーク　「絞首台（エル・カダルソ）か。いい趣味とは言えんな。しかしそんな調子で、よく建設資金が続いたもんだ」

パス　「実際、足りなくなったの。でもバナナのおかげで、工事が完成したんですって」

スネーク「バナナを食べて、工事を頑張ったって事か？　確かにバナナの栄養価は…」
パス「違う違う、鉄道建設の資金をひねり出すために、バナナの輸出を始めたってこと」
スネーク「なんだ…」（残念そう）
パス「ところがこれが大当たり！」
パス「鉄道のオーナーは、工事を完成させただけじゃなく、バナナの取引商社まで始めることにしたの」
パス「これが、コスタリカにおけるバナナ栽培の初めね」

●ロス・カントス／渓谷
パス「スネーク、村の北に架かっているのは、水圧鉄管を渡すための橋よ。ふだん、人が渡るためのものじゃないの」
パス「落ちたら谷まで真っ逆さまよ。気をつけて」
スネーク「こんなところに水路が？」
パス「用水路じゃなくて、水力発電用の鉄管なの。イラスの火口湖とつながってるんじゃないかな」
パス「普通はその谷の下に貯水池を造るみたいだけど、険し過ぎて無理だったんだと思う」
パス「『ロス・カントス』は『剣の峰』って意味よ」

●ロス・カントス／尾根
パス「そのあたりからは、イラスの山系が一望できるはずよ。標高が高いから大きな木も生えていないし、視界は抜群だと思う」
スネーク「身を隠す場所に苦労しそうだ」
パス「スネークにとっては、景色なんて関係ないのね」
スネーク「敵に囲まれてなけりゃわからんが」
パス「平和な時に見てほしかったな。きっと感動すると思う」
スネーク「なら、それは作戦成功後の楽しみに取っておこう。それでいいだろう？」
パス「ありがと、スネーク」

●フェルテ・ラ・ラデラ
パス「…そのあたりには、古い砦があるはずよ」
スネーク「どうしたパス。声が暗いな」
パス「うん…あのね、この砦は、内戦時代のものなの」
スネーク「与野党の争いが戦争にまで発展した、あの

パス　内戦か」

パス　「そう。おじいちゃんやおばあちゃんの命を奪ったあの内戦…同じ国の人同士が命を奪い合う、もっとも愚かな戦争…」

パス　「あの砦には、その愚かさが刻まれているの」

スネーク　「皮肉なもんだ。その砦に、再び傭兵どもが取り付いている」

パス　「あの内戦への反省から、コスタリカは軍隊を廃止したのに…お願いスネーク、奴らを追い出して！」

スネーク　「任しとけ」

●火口内基地

スネーク　「パス、コスタリカ政府は山のてっぺんに発電所なんか造って、どうするつもりだったんだ？」

スネーク　「川がないんじゃ、すぐ湖が干上がるだろう」

パス　「普通の発電所ならね。でも、計画では揚水発電所だったみたいだから」

スネーク　「揚水発電所？　カズも言ってたが、そりゃ何だ」

パス　「ポンプで水を湖にくみ上げて、その水を落として発電する施設よ」

スネーク　「ちょっと待て。そりゃ賽の河原とどう違うんだ？　単に無駄なことをしているだけだと思うが」

パス　「汲み上げてすぐ発電に使うならね。でも、揚水発電所は一種の電池なの」

スネーク　「電池？」

パス　「例えば、電力が余っている夜の間に水を汲み上げておくとか。昼に不足してきたら、その水で発電すればいい」

スネーク　「なるほど、火力発電や原子力発電は、出力の調整が難しいからな」

パス　「でも、今のコスタリカに余っている電気なんかないはずよ」

スネーク　「だから計画が中止されたんだろう。ＣＩＡの連中は、それを利用したってわけだ」

■コスタリカ・エレディア中央

●セルバ・デ・ラ・レチェ／ジャングル

パス　「このあたりの森は、熱帯雲霧林よ。常に白く霧がかかっていて、とても神秘的なの」

スネーク　「それで『乳の森（セルバ・デ・ラ・レチェ）』か…視界は悪そうだ」

パス　「またそれ？　森全体が雲の中にあるようなものだから、確かに視界はよくないけど…」

パス　「でも、雲霧林でしか見られない、珍しい生き物がいっぱいいるのよ」

スネーク　「まぁ、食えるもの以外は興味がない」

パス　「もう！　わざわざ外国から、動物観察に来る人もいるって言うのに…」

●セルバ・デ・ラ・レチェ／坂道

パス　「スネーク、そのあたりのカエルには注意してね」

スネーク　「凶暴なのか？　心配するな、ヘビがカエルに食われるわけがない。逆ならともかく…」

パス　「だから危ないの！　毒を持っているんだから」

スネーク　「毒？」

パス　「ヤドクガエルの仲間は、その名の通り毒を持ってるのよ。インディヘナ達が、毒矢に使うくらい強いの」

パス　「中には皮膚からも毒を出していて、触るだけで危険なものもいるみたい。可愛いからって手に乗せちゃだめよ」

スネーク　「食えないのか…」

パス　「残念がらない！」

●カタラタ・デ・ラ・ムエルテ

パス　「カタラタ・デ・ラ・ムエルテは『死の滝』という意味よ」

スネーク　「縁起でもない」

パス　「スネークなら大丈夫。今までだって、絶望的な状況を潜り抜けてきたんだもの」

スネーク　「気軽に言ってくれるな」

パス　「ごめんなさい。でも、本当にびっくりしてるの。『伝説の兵士』の話は本当だったたって…」

スネーク　「俺は英雄でも伝説でもない。だが、君に言われると不思議と腹が立たん」

パス　「ありがと。気をつけてね、スネーク。ピース」

●セルバ・デ・ラ・ムエルテ

スネーク　「今度はセルバ・デ・ラ・ムエルテ、『死の森』か。確かにこんなところで迷ったら、生きて帰れそうにない」

パス　「そうね。でも安心して。私がしっかりガイドする」

スネーク「よろしく頼む」
パス「ところでスネーク、〝ナマケモノ〟は知ってる?」
スネーク「名前だけは」
パス「ナマケモノはすごいのよ。排泄以外は、ほとんど木の上で過ごすの。それに、ほとんどものを食べない」
スネーク「食べない? それでどうやって生きていくんだ」
パス「だって『ナマケモノ』でしょ? ほとんど動かないから、エネルギー消費が少ないの」
パス「おまけに、体温を低く抑えることもできる。これでさらに代謝が減るから、わずかな食物で暮らしていけるのね」
スネーク「だが、それじゃすぐに食われてしまうだろう?」
パス「木に密着して、擬態しているから見つかりにくいんだって」
パス「齢を取ってくると、表面に苔が生えてくるナマケモノもいるんだって。まさに森の仙人ね」

スネーク「なるほど…動物もスナイパーも、森で生きる戦略は同じってことか。あのじいさんが強かったわけだ」
パス「じいさん? 誰のこと…?」
●リュイナス・デ・ショチケツァル
パス「そのあたりには『リュイナス・デ・ショチケツァル』、ショチケツァル遺跡があるはずよ」
パス「復元はされていないから、緑に埋もれているかもしれないけど」
スネーク「ショチケツァル?」
パス「古代アステカの神の一人。花や美の女神として知られているの。蝶や鳥を従えているんだって」
パス「ケツァルコアトル神のお母さんって説もあるみたい」
スネーク「ケツァルコアトル…」
パス「ケツァルコアトル神の化身がケツァールって言われてる」
スネーク「なるほど、雲霧林にふさわしい」(合点がいった)

パス　「朽ちかけていても神殿よ。入る時は敬意を忘れないでね」

スネーク　「気が向いたらな」

パス　「もう！　罰が当たっても知らないから」

●人工知性研究所

パス　「そのあたりに、巨大な遺跡なんてあったかな…」

スネーク　「言ってたな。コスタリカの古代文明については、わかっていないことも多いと」

スネーク　「大きな石の球が転がってるって話もしてたな。何のことだ?」

パス　「『コスタリカの石球』のことね。50年くらい前に、コスタリカのジャングルで見つかった、巨大な石の球のことよ。それもたくさん」

スネーク　「石くらい、珍しくもないだろう」

パス　「それが、ほぼ完全な球体だとしても?　それも、球は花崗岩なの。かなり固い岩石よ」

スネーク　「なら、トラップに使えるかも知れんな。真円なら転がりやすいだろうし…」

パス　「スネーク…」（呆れている）

■コスタリカ・採掘場偽装基地

●採掘場居住区

スネーク　「このあたりは鉱山地帯か…何が採れるんだ?」

パス　「金じゃないかな」

スネーク　「金?　すごいじゃないか。それをどうして早く…」

パス　「でも、うまくいかなかったみたい。このあたりで今操業してるって話、聞かないから」

スネーク　「なんだ、そうか…」

パス　「大体、外国資本が資源を掘ること自体、あまりよく思われていないの」

パス　「4年前には、鉱山採掘権を外国企業に認めたっていう理由で、国会に投石騒ぎがあったくらいなんだから」

●採掘場底部

パス　「鉱山を開くには、随分森が切り拓かれたんだと思う」

スネーク　「だろうな。こちらとしても、隠れる場所がなくて一苦労だ」

パス　「森だけじゃない。きちんと処理されていな

ければ、廃水が地下水を汚染する可能性もある」

パス　「おまけに、こんな場所で核兵器開発に協力している人達もいる…どうしてみんな、自分達の国を大切にしないの?」

スネーク　「…国を捨てた身としては、耳が痛い」

パス　「ううん、スネークは国を捨てたかも知れないけど、でも祖国を大事に思っているはずよ」

スネーク　「俺が祖国を…?」

パス　「ええ。それくらい、私にだってわかる」

スネーク　「パス、君は…いや、その自分の国を愛する気持ちを大事にしてくれ」

「アマンダ」ブリーフィングファイル

※「このミッションについて」のファイルは、Ｐ634からの「■ミッション情報」をご覧ください

■ニカラグア

●歴史

アマンダ「建国以来、祖国(ニカラグア)が自分達の意志で行く先を決められたことなど一度もない」
スネーク「スペイン、アメリカ。もう１００年以上も」
アマンダ「そうだな」
アマンダ「19世紀には、アメリカ人傭兵ウィリアム・ウォーカーが、ニカラグアの政権を乗っ取った」
スネーク「政党間の対立をうまく利用したと」
アマンダ「ウォーカーが追放された後も、アメリカは海兵隊を送り込んでいる。これも、政党間の対立を抑えるためって名目で」
スネーク「実際は」
アマンダ「政府に睨みを利かせて、ニカラグア運河の建設を邪魔するためよ」

・ニカラグア運河

スネーク「アメリカはニカラグア運河の建設権を握ったと聞いたが」
アマンダ「アメリカはニカラグアに運河を造る気などなかった。もうパナマに運河を掘っていたからね」
アマンダ「ニカラグアに運河ができたら、パナマ運河の独占が崩れる。それだけのために、アメリカはニカラグアに横槍を入れ続けた」
スネーク「運河を造らせないために、その建設権を手に入れたわけだ」
アマンダ「そのアメリカに反旗を翻したのが、サンディーノ将軍よ」

・将軍の反旗

アマンダ「サンディーノ将軍は海兵隊にゲリラ戦を挑み、ついには追い出した」
アマンダ「まさに英雄。あたし達ＦＳＬＮ(サンディニスタ)の父と言っていい」
アマンダ「だけど、アメリカは手を引く代わりに、置き土産を残した」
スネーク「国家警備隊(グアルディア)だな」
アマンダ「そう。名目は治安維持だけど、実態は隊長

ソモサの私兵だった。やりたい放題」

アマンダ「耐えかねたサンディーノ将軍は、抗議に行った…」

アマンダ「そしてその帰りに、ソモサに暗殺されたの」

アマンダ「それからよ、蛙(ソモサ)が祖国を食い物にし出したのは」

●ソモサ

アマンダ「蛙(ソモサ)一家がニカラグアを牛耳るようになってから、もう40年にもなる」

アマンダ「国家警備隊(グアルディア)を使って、やりたい放題よ」

スネーク「お前達も、国家警備隊(グアルディア)に追われてここ(コスタリカ)へ来たと」

アマンダ「ええ。奴らは何もかも奪った。土地も、家も、仕事も…」

スネーク「ソモサのものか」

アマンダ「そう。法律もね。判事だって抱き込まれてる。逆らえば殺される」

アマンダ「みんな国家警備隊(グアルディア)の顔色を窺って生きてる。それでも、連中の虫の居所が悪けりゃ殴られるけど」

スネーク「それで国を変えようと?」

アマンダ「それだけじゃない。ソモサは、その権力を使って私腹を肥やし続けてきた」

アマンダ「他人の土地を接収しては一族のものにして、今じゃ国の農地の半分近くが、ソモサ一家に」

アマンダ「どうすることも出来なかった。だけど」

アマンダ「2年前の地震は知ってる?」

スネーク「ああ。首都を直撃したと聞いた」

アマンダ「あたし達は首都マナグアを失った。世界中の人達が援助物資を送ってくれた。涙が出る程嬉しかった」

アマンダ「それなのに、ソモサはその援助のほとんどを着服した。地震で何もかも喪った人たちに、金を取って売りつけた!」

アマンダ「あいつらは自分の国の不幸を食い物にしたんだ!」

アマンダ「国民の怒りは頂点に達してる。奴らの命運も近いうちに尽きる。いえ、あたし達が終わらせてみせる」

・サンディーノの暗殺

アマンダ「初代(タチョ)のソモサは、もともと、国家警備隊(グアルディア)の長

官に過ぎなかった。本来なら、大統領になれるような器じゃないのよ」

アマンダ「でも、当時の大統領には力の後ろ盾がなかった。奴に力で対抗できたのは、サンディーノ将軍だけ…」

アマンダ「いえ違う。対抗しようと考えたのが将軍だったってだけ。彼は特別な人間じゃなかった」

アマンダ「正義を貫くには、なにより意志を持つことが大事。あたし達は、それを彼から学んだ」

スネーク「だが、だからこそソモサは、サンディーノを暗殺した…」

アマンダ「ええ。後は簡単。大統領を追い出して、不正選挙で自分を選ばせた。そしてそのまま、権力を握り続けている」

スネーク「強引だな」

アマンダ「ソモサのバックには、アメリカがいたからね。アメリカは、反抗的な将軍に政権を渡したくなかったから」

スネーク「とは言え、そんな男をよくアメリカが承認したな」

アマンダ「当時のアメリカ大統領は『ソモサはろくでなし(サノバビッチ)だが、我々の側のろくでなし(サノバビッチ)だ』って言ったらしい」

アマンダ「反米政権よりはましってことね。それが犬でも蛙(ソモサ)でも」

・マナグア地震

アマンダ「マナグアの地震が起きたのは2年前。次の日はクリスマスイブだった」

アマンダ「街に何本も地割れが走った。寝ていた子供は、逃げることもできずに、崩れてきた家に押し潰された。サンタクロースが来る前に」

アマンダ「ソモサのせいで、古い家の建て替えもろくにできなかったから…悪夢よ」

スネーク「直下型と聞いたが」

アマンダ「今でも断層の真上は危険で、家も建てられない。中心部は廃墟のままよ」

スネーク「おまけに復興資金はソモサが着服、か」

アマンダ「亡くなった人たちのためにも、絶対に負けられない。必ずソモサを倒す」

●サン・ファン河

アマンダ「コスタリカとニカラグアの国境に流れているのが、サン・ファン河(リオ・サン・ファン)。ニカラグア湖(ラゴ・コシボルカ)か

らカリブ海までつないでる」
アマンダ「穏やかな河よ。小さなボートでも問題ない。ただ、サメが棲んでるから気をつけて」
スネーク「河じゃなかったのか」
アマンダ「オオメジロザメ（チブロントロ）は、河でも生きられるの。でも大丈夫かも。きっと聖ヨハネ（サン・ファン）のご加護がある」
スネーク「ヨハネ?」
アマンダ「サン・ファン河（リオ・サン・ファン）という名前は、イエス様（ヘスス）に洗礼を施した、聖ヨハネ（サン・ファン）から来ているの」
アマンダ「あなたの国の言葉で言うなら、ジョンよ」
スネーク「ジョン、ね…。溺れ死んでジョン・ドゥにならないよう、せいぜい気をつけるさ」

●オメテペ島

アマンダ「ニカラグア湖（ラゴ・コシボルカ）に浮かぶ火山島が、オメテペ島よ。二つの火山がつながって、ヒョウタン（ボロンゴ）のような形になっている」
スネーク「噴煙を上げているのがそれか」
アマンダ「ええ。煙が出ているのがコンセプシオン山。時々噴火している」
アマンダ「もう一方のマデラス山には、噴火の記録がない。頂上はカルデラ湖になっているの」
スネーク「カルデラ湖か…また地下に工場でもなければいいんだがな」
アマンダ「何言ってるの！」
アマンダ「もしピースウォーカーの核がここで爆発したら、地下のマグマにも影響して、火山がまた噴火するかも知れない」
アマンダ「そんなことになったら、祖国（ニカラグア）はおしまいよ。絶対にピースウォーカーを止めて、スネーク！」

■FSLN

●FSLN

アマンダ「あたし達はサンディニスタ。サンディーノ将軍の意志を継ぐものよ」
スネーク「サンディーノ…近代ゲリラ戦の創始者だな」
アマンダ「あなたにとってはそうでしょうね。あたし達にとっては、父と言ってもいい人だけど」
スネーク「だから、組織の名に使った?」
アマンダ「ええ。Frente Sandinista de Liberación Nacional …」

アマンダ「〝サンディニスタ民族解放戦線〟の名は、彼から取った」

アマンダ「あたし達の目的は将軍と同じ。自由な祖国を取り戻すこと」

アマンダ「彼の場合はアメリカから。あたし達の場合はソモサの独裁から」

スネーク「時代は離れていても、思いは同じか」

アマンダ「『自由な祖国か死か（パトリア・リブレ・オ・モリール）』…それがあたし達のスローガン」

アマンダ「エル・チェも同じ事を言ってたでしょ？」

スネーク「『祖国か死か（パトリア・オ・ムエルテ）』…キューバ革命のスローガンだな」

スネーク「すると君たちは、社会主義革命を目指している？」

アマンダ「違う。主義とか、そんなんじゃない。ただ…」

アマンダ「当たり前に暮らしたいだけ」

アマンダ「道を歩いているだけで突然殴られたり、密告にびくびくしたり。そんな暮らしはもうたくさん」

アマンダ「祖国を国民に返す。それが目的よ」

スネーク「そうだな。キューバ革命も、はじめはそうだった」

アマンダ「あたし達の仲間は、まだ多いとは言えない。でも、必ず勝つ。勝利か死か（ビクトリア・オ・ムエルテ）。革命家の宿命よ」

●サンディーノ将軍

アマンダ「アウグスト・セサル・サンディーノ…サンディーノ将軍は、ニカラグアの英雄よ」

アマンダ「50年前のニカラグアで、政党同士の内紛が起きた。それを収めるって名目で介入してきたのが、アメリカ海兵隊」

アマンダ「講和を迫る海兵隊に、唯一応じなかったのがサンディーノ将軍だったの」

スネーク「アメリカ海兵隊相手に、大した度胸だ」

アマンダ「将軍はもともと軍人じゃなかった。彼の仲間もそう。もちろん装備は、海兵隊に及ばない」

アマンダ「だから彼は、地の利を駆使した。祖国（ニカラグア）の野山を駆け巡り、神出鬼没の戦法で海兵隊を翻弄した」

スネーク「知っている。ゲリラ戦の教本にも出てきた」

アマンダ「その結果、海兵隊は撤退した。まさにあた

し達の模範よ」

スネーク「50年前と言えば、世界恐慌の影響もあったんじゃないか？　軍隊の駐留には金がかかる」

アマンダ「そうかもね。でも、将軍の功績は確かよ」

アマンダ「人々は歓喜した。彼は『自由な人々の将軍（ヘネラル デ オンブレス リブレス）』と呼ばれ、愛された。けど…」

アマンダ「彼は暗殺された。国家警備隊長、アナスタシア・ソモサ・ガルシアにね」

スネーク「今のソモサの親父だな」

アマンダ「ソモサの背後にも、アメリカがいた。そういうことよ」

アマンダ「将軍が殺されても、その意志はあたし達が受け継いでいる。時代が違ってもね」

アマンダ「あたし達は将軍の娘であり、息子なの」

●「スイカ売り」

スネーク「最近、スイカの売れ行きはどうだ？」

アマンダ「ぼちぼちね。国（ニカラグア）に残った仲間（コンパ）も、頑張ってるらしいから」

スネーク「何よりだ」

アマンダ「…あたし達（サンディニスタ）がスイカ売りって呼ばれてることと、よく知ってるのね」

アマンダ「さすがはボス」

スネーク「お前達は、国家警備隊（グァルディア）の監視の目を潜り抜けるため、中身をくり抜いたスイカに武器を隠して運んだ」

スネーク「それこそ手榴弾（パイナップル）もな。それが周辺国のシンパに知られることになり…」

アマンダ「何それ」

スネーク「えっ？」

アマンダ「あたし達（サンディニスタ）がスイカ売りって呼ばれるのは、将軍の名前（サンディーノ）がスイカ（サンディーア）に似てるからなんだけど」

スネーク「…そうなのか？」

アマンダ「そうよ」

スネーク「カズのやつ…」（騙しやがって）

●平和のための革命

スネーク「祖国の自由のための革命か。お互い平和とは縁遠いな」

アマンダ「不本意だけど仕方ないわ。無抵抗では搾取されるだけ。これまでの祖国の歴史がそれを証明してるの」

アマンダ「もちろん革命は手段であって目的じゃない。革命が成功したら平和な国にしたいとは思う」

アマンダ「けれど、平和をもたらすためにはまず売国奴を排除しなくちゃならない」

スネーク「『我々は平和に暮らすために戦争をする』――昔から言われている話だ」

アマンダ「誰の言葉？」

スネーク「アリストテレスだ」

アマンダ「詳しいのね」

スネーク「ある人に教わった」

アマンダ「人間は昔から同じ事を繰り返してるってわけね。…それでも戦うしかない」

スネーク「そうだな。目的があるなら、前に進むしかない」

●エル・チェ

スネーク「お前達は、ゲバラのことを〝エル・チェ〟と呼ぶんだな」

アマンダ「あたし達だけじゃない。このあたりじゃ、みんなそう。もともと〝チェ〟があだ名だもの。姓で呼ぶのは堅苦しいでしょ」

アマンダ「…初めてあなたを見たときは驚いた。似ていたから」

スネーク「〝エル・チェ〟に似ていた？」（ちょっと得意げ）

アマンダ「どことなくね。顔とかじゃなくて、雰囲気というか…」

スネーク「FSLN（サンディニスタ）でも、ゲバラは英雄なのか？」

アマンダ「もちろん。もともとFSLN（サンディニスタ）は、エル・チェやフィデルの思想に共鳴して結成されたんだから」

スネーク「フィデル…フィデル・カストロか。キューバ革命を、ニカラグアでも実現させようってわけだな」

アマンダ「もともとはね。今はキューバのほうが、最初とは変わっちゃったけど…エル・チェがいなくなって以来」

アマンダ「エル・チェは真の革命家よ。民衆のために戦い、民衆のために死んだ。自ら誰よりも働き、道徳を守った」

アマンダ「キューバの大臣になってからも、休日返上で農作業や土木工事に出かけたのよ。それ

も、ボランティアで」

スネーク「その話は、俺も聞いたことがある。だがその潔癖さが、ゲバラ自身を追い込んだとも言えないか?」

アマンダ「どういうこと?」

スネーク「誰もが彼のような超人じゃない。だが、彼はキューバで掲げた理想がボリビアでも通じると考えた」

スネーク「その結果、人材も農民の支持も集められず、彼は命を落とした」

アマンダ「それは…そうかも知れない」

アマンダ「でも、少なくとも彼は農民から奪わなかった。どんなに苦しくとも」

スネーク「それは同感だ。革命を謳いながら、野盗同然に民衆から略奪するゲリラ連中も多い中でな」

アマンダ「彼のようなリーダー(コマンダンテ)がいれば、FSLN(サンディニスタ)の士気も上がるでしょうね」

■敵兵力

●オンブレ・ヌエボ

スネーク「あの巨大なヘリを、お前達は〝オンブレ・ヌエボ〟と呼んでいたが…」

アマンダ「ああ、〝オンブレ・ヌエボ〟は『新しい人間』という意味よ」

スネーク「『新しい人間』?」

アマンダ「あのヘリには、人が乗ってないの。多分、機械が動かしてる」

スネーク「そうらしいな。だからこそ、あんな無茶な機動もできる」

アマンダ「でも、それにしては頭のいい動きをする。歌も歌う」

アマンダ「それを見て、隊の誰かが『新しい人間(オンブレ・ヌエボ)が乗ってる』って言い出してね」

アマンダ「あたしはその呼び方、気に入らないんだけど」

スネーク「なぜ」

アマンダ「だって、『新しい人間(オンブレ・ヌエボ)』は、ゲバラが目指した姿じゃないの。FSLN(サンディニスタ)に集うものの目標よ」

アマンダ「モラルと、自発的な労働に喜びを見いだす、『新しい人間』…その名をあんな化物にく

れてやるのは、悔しくて」
スネーク「違いない」

・アブダクション

スネーク「チコはあのヘリをコリブリと呼んでいた」
アマンダ「こっちじゃハチドリのことをそう呼ぶの。あのヘリも動きが似てるでしょ、空中で静止したり」
スネーク「大きさはえらい違いだが」
アマンダ「そうね。でも、オンブレ・ヌエボよりはいい名前だわ」
アマンダ「コリブリにさらわれたら（ラプタール）、終わりよ。捕虜収容所に連れてかれて、仲間のことを吐くまで拷問される」
スネーク「チコは、そいつにさらわれた（アブダクト）のか…」
アマンダ「やつらの拷問は容赦がない。喋ったら喋ったで、ボロクズのように捨てられる…」
アマンダ「そうとわかっていながら、あたしはチコを救えなかった。救えないのなら、いっそこの手で…」
スネーク「簡単にそんなことを言うな。名誉を失っても、生き延びなくてはならないことだってある」
スネーク「大丈夫だ。チコは必ず俺が助け出す」

●ＣＩＡ側の兵力

アマンダ「スネーク、あなたの意見を聞かせて。敵の傭兵、実力はどう」
スネーク「練度は申し分ない。数も十二分だし、場慣れしてもいる。ベトナム帰りが多いんだろう、手強い相手だ」
スネーク「装備も充実しているな。戦車や攻撃ヘリをあれだけの規模で運用している傭兵部隊はなかなか無い」
アマンダ「それだけ資金が潤沢、ってことね。それにあの手の大型兵器にアクセスできるコネクションもある」
スネーク「天下のＣＩＡがバックについてるんだ、当然だろう」
アマンダ「それに比べてあたし達ときたら半分農民半分学生、子供（チコ）もいるかと思えば、武器にしたって敵から奪って数を揃えていたらく」（ためいき）
アマンダ「悔しいけど、終始押され気味」

スネーク「そうだな」
アマンダ「頼みの父さん(ミ・ピエホ)まで失ってしまって……」
スネーク「ああ、そうだな」
アマンダ「……勝てるのかしら、あたし達」
アマンダ「ねえスネーク、どう思う?」
スネーク「自信がないのか」
アマンダ「だって」
スネーク「アマンダ」
アマンダ「なに」
スネーク「いいか、仲間の前では決してそんな声を出すな」
アマンダ「…え」
スネーク「お前はリーダーだ。リーダーは常に真っ直ぐに立っていなければならない」
スネーク「たとえどんな苦悩を抱えていようが、不安や恐怖に押しつぶされそうになっていようがだ」
スネーク「仲間や部下に盤石の安堵感を与える。それがリーダーのつとめだ。忘れるな」
アマンダ「…スネーク」
スネーク「なぐさめが欲しければ教会へ行け。俺からこれ以上言うことはない」
アマンダ「そうね。ごめんなさい。あたし、しっかりしなくちゃね」
スネーク「ああ。お前ならやれる」
アマンダ「ありがとう、スネーク」

■米国との関係

●プランテーション

アマンダ「祖国(ニカラグア)の土地は、あたし達のものであって、あたし達のものではないの」
スネーク「どういう事だ」
アマンダ「海沿いはバナナ園だらけ。山側はコーヒー畑ばかり。まあ、この辺(コスタリカ)もあまり変わらないけどね」
スネーク「プランテーションだな」
アマンダ「採れたバナナやコーヒーのほとんどは、輸出に回される。代金は地主が独占して、農民にはわずかなお金しか残らない」
アマンダ「しかも、一番の大地主は蛙一族(ソモサ)ときてる」
スネーク「だが、外貨は稼げる」
アマンダ「バナナの場合は、それすら怪しい。バナナ園

を持ってるのが、アメリカの会社だからね」

アマンダ　「園内の工場でバナナを加工して、そのまま専用の港からアメリカへ輸出…」

アマンダ　「海沿いにアメリカの飛び地があるみたいなものよ」

スネーク　「だが、農民はそこへ働きに行くしかない…」

アマンダ　「馬鹿げてる。自分達の土地を取り戻さなきゃ。それもあたし達の目標の一つなの」

●麻薬

スネーク　「親父さんがKGBと手を組んだこと…いつから気付いてた?」

アマンダ　「半年程前よ。それまでは豆しか食べられなかったのが、急に卵や小麦が届けられるようになってね。弾も不足しなくなった」

スネーク　「麻薬（コカイン）は、どうやって手に入れてた」

アマンダ　「KGBに聞いて。ここでやってたのは、コカインの精製だけだと思う」

アマンダ　「このあたりでもコカの木は育つけど、原料のほとんどは、コロンビアやボリビアあたりから仕入れてたはず」

スネーク　「それを工場で加工して、カリブ海の港まで運んだ。その先は」

アマンダ　「考えたことない…いえ、考えたくない」

スネーク　「世界最大のコカイン消費国は、アメリカだ。おそらく漁船に偽装して運んだりしてるんだろう」

アマンダ　「ちょっと待って。CIA（ラ・シーア）もそのルートを利用してるなら、CIA（ラ・シーア）もアメリカに売ってるってこと?」

スネーク　「そうなる」

アマンダ　「連中は、祖国の若者をジャンキーにするために、せっせと麻薬を密輸してるの? どうしてそんな馬鹿げたことを!?」

スネーク　「恐いんだろう。何よりも、中米に共産国ができることがな」

●ウィリアム・ウォーカー

アマンダ　「CIA（ラ・シーア）の連中の核兵器、ピースウォーカーっていうんだって?」

スネーク　「ああ、そうだが」（何か?）

アマンダ　「ニカラグア（ニカ）人へのあてつけよ」

スネーク　「ウィリアム・ウォーカーのことか? 以前話していた」

アマンダ「ええ。もう百年以上前の話だけど」

アマンダ「当時のニカラグアは政党の対立が酷くてね。自由党は保守党に対抗するために、アメリカ人傭兵を呼んだの」

スネーク「それが、ウィリアム・ウォーカーだった」（わけだ）

アマンダ「ところが、保守党を破ったウォーカーは、そのままニカラグアの権力を握ってしまう。最終的には大統領にまでなった」

スネーク「自由党にしてみれば、庇を貸したつもりが母屋を取られたわけだ」

アマンダ「それどころじゃない。奴は英語を公用語にしただけじゃなく、奴隷制まで敷いた」

アマンダ「ウォーカーの狙いは、アメリカ南部を中心とした〝環カリブ海帝国〟を築くことだったのよ」

スネーク「〝環カリブ海帝国〟…なるほど、コールドマンの狙いに近いかも知れん」

アマンダ「アメリカはいつだってそう。自分に都合のいいお題目を掲げて、我が物顔で人の国をのし歩く」

アマンダ「何が平和歩行計画（ピースウォーカー）よ」

スネーク「結局、ウォーカーはどうなったんだ？」

アマンダ「その後、コスタリカを中心に中米連合軍が結集されてね。彼らに打ち負かされて、アメリカに逃げ帰った」

スネーク「なら、同じ事をやってやろうじゃないか。俺たちも、コールドマンの好きにさせる気はない」

アマンダ「そうね…頼りにしてる、ボス」

■自分について

●ＦＳＬＮへ

スネーク「いつからＦＳＬＮ（サンディニスタ）に？」

アマンダ「１年くらい前。父さん（ミ・ピエホ）達と一緒に、山に入った」

スネーク「親父さんは、もとからＦＳＬＮ（サンディニスタ）じゃなかったのか」

アマンダ「違う。確かに父さん（ミ・ピエホ）はサンディーノ将軍と一緒に戦ってたけど、一旦引退したの」

アマンダ「仕事に就いて、家庭を持って、あたし達も生まれた。でも、ある時ＦＳＬＮ（サンディニスタ）の学生達

が来て…」

スネーク「昔の血が騒いだ？」

アマンダ「そんなところね。とは言っても、国家警備隊（グアルディア）に追われてた彼らを逃がしてあげただけ」

アマンダ「だけど、そこに警備隊（グアルディア）の連中が来た。いきなり家に入ってきて、偉そうに父さん（ミ・ビエホ）を尋問した」

スネーク「親父さんはもちろん、喋らなかった」

アマンダ「こっぴどく殴られたけどね。家の中もめちゃめちゃ。それから連中に目をつけられて、何かにつけて嫌がらせを受けた」

アマンダ「それからよ、父さん（ミ・ビエホ）がＦＳＬＮ（サンディニスタ）に身を投じるようになったのは」

アマンダ「それでもあたし達には隠してた。危険が及ばないようにって」

スネーク「いい親父さんじゃないか」

アマンダ「ええ…でも、母さんが先に参っちゃって。家を出てった。無理もないけどね」

スネーク「母親についていかなかったのか」

アマンダ「もちろん迷った。でもあたしは父さん（ミ・ビエホ）の事を尊敬してたし、ソモサのやり方も許せなかった。それに…」

スネーク「チコか」

アマンダ「…あの子は父さん（ミ・ビエホ）っ子だったからね。家に残るって聞かなくて。置いていくわけにもいかないし」

アマンダ「そのうち国家警備隊（グアルディア）に追われて、山に入った…って感じ。半分は成り行きね」

スネーク「その割には、堂々たる戦いっぷりだったぞ」

アマンダ「山は戦士を鍛えてくれる。訓練は厳しい分、新しい人間（オンブレ・ヌエボ）にしてくれるのよ」

スネーク「やっぱり、大した姉ちゃんだ。司令官（コマンダンテ）に推薦されるだけのことはある」

●マラリア

アマンダ「小さい頃、マラリアにかかったの」

アマンダ「運悪く、重いほうのマラリアでね。意識まで朦朧として、一時はもうダメだって言われたらしい」

スネーク「マラリア脳症だな。熱帯熱マラリアだと起こりやすいと聞く」

アマンダ「今でも、時々記憶があやふやになることが

ある」

アマンダ「それ以来、蚊が恐くてね…。蚊の羽音が聞こえると、気が気じゃなくなる」

スネーク「タバコを切らさないのも、そのためか」

アマンダ「ええ。少しでも蚊よけになればと思ってね。気休めかもしれないけど。あなたもそうでしょ？」

スネーク「少なくとも、蚊よりは葉巻の方が好きだ」

アマンダ「あたしもよ」（笑って）

スネーク「だが、大したものだ。その恐怖をものともせず、ゲリラとして野山を駆け巡っている」

アマンダ「よしてよ。エル・チェなんて、喘息に苦しみながら、革命を成功させたのよ。それに比べれば、大したことじゃない」

●父親

スネーク「親父さん、残念だったな」

アマンダ「ありがと…」

アマンダ「父さん(ミ・ビエホ)は、ずっとあたし達の部隊(フレンテ)のリーダーだった。サンディーノ将軍の時代を知る最後の世代…」

アマンダ「父さん(ミ・ビエホ)は少年兵として、将軍の活躍を見ていたそうよ。よく話を聞かされた…その後、将軍が暗殺された時のこともね」

スネーク「親父さんがKGBから資金援助を受けていたことは、知ってたのか？」

アマンダ「薄々はね…でも、父さん(ミ・ビエホ)に問いただす勇気は、あたしにはなかった。父さん(ミ・ビエホ)にとってもそれは、苦渋の決断だったんだと思う」

スネーク「だろうな」

アマンダ「そう、父さん(ミ・ビエホ)は立派な人だった。娘のあたしから見てもね。仲間からの信頼も厚かった」

アマンダ「父さん(ミ・ビエホ)がいたから、苦しい中でも部隊(フレンテ)がばらばらにならなかったのよ」

アマンダ「父さん(ミ・ビエホ)の代わりが、あたしに務まるのかな…」

●チコ

スネーク「チコは12歳なんだよな」

アマンダ「ええ」

スネーク「それにしちゃ、ちょっと小さくないか？」

アマンダ「…栄養が足りないのよ。森を逃げ回ってると、食べ物もままならないから…」（沈んで）

スネーク「食べ盛りなのにな」

アマンダ「わかってる！　本当は、チコを連れ回りた

くない」

アマンダ「でも、匿ってもらえる場所もないから、手元に置いておくしかないの」

スネーク「自分を責めるな。安全な場所に離れているより、家族と一緒のほうが幸せだってこともある」

アマンダ「ありがと…」

スネーク「その代わり、ちゃんと教育を受けさせろ。戦いが終わったら、ゲリラ以外の仕事に就けるように」

スネーク「戦いしか知らない男にしちゃいけない。まだ間に合う」

アマンダ「そうね。約束する」

アマンダ「…チコが大事にしてる本、知ってる？「世界のふしぎ生物百科」だって。ネッシーとかイエティとか…」

スネーク「UMA(ユーマ)ってやつだな」

アマンダ「本当に子供なんだから…心配よ」

スネーク「大丈夫だ。いい大人になっても、UMA(ユーマ)が大好きな連中はいる」

アマンダ「そうなの⁉」

●マザーベースでの役割

アマンダ「コリブリから助けてもらって以来、世話になりっぱなしね。あたしも何か手伝わないと」

スネーク「怪我が治ってからでいい」

アマンダ「ありがと。でも、そうも言ってられないでしょ」

アマンダ「怪我が治り切るには時間がかかるかも知れないけど、身体が動くようになれば十分。実戦部隊でだって、役に立ってみせる」

スネーク「さすがはFSLN(サンディニスタ)の司令官(コマンダンテ)だ」

アマンダ「よしてよ。でも実際、同志(コンパ)が頑張ってるのに、あたしだけぶらぶらしてるってのもね」

スネーク「確かに、君が加わってくれれば、FSLN(サンディニスタ)兵の士気も上がるかも知れんな」

アマンダ「もちろん、あたし達の目的は、ソモサ政権の打倒。でも、態勢を立て直すまでは、しっかりあなた達に協力するつもりよ」

スネーク「ありがたい。よろしく頼む」

●決意

スネーク「マザーベースには慣れたか」

アマンダ「ええ。山での暮らしに比べれば天国(ヘブン)よ。

国家警備隊(グァルディア)や傭兵に追われなくて済むしね」

スネーク　「最近ここへ来た連中には、その傭兵出身の奴もいるが…」

アマンダ　「大丈夫、うまくやってる。最初はいざこざもあったけど、話してみれば普通の人間だもの」

スネーク　「そうか。安心した」

アマンダ　「そうよ…敵味方に分かれて戦ってても、相手はただの人間…CIA(ラ・シーア)の傭兵も、国家警備隊(グァルディア)も…そしてきっと、アメリカの民衆も」

スネーク　「どうした、急に」

アマンダ　「父さん(ミ・ピエホ)は革命の資金を稼ぐために、麻薬精製に手を出した。KGBに言われるままにね」

アマンダ　「すべては祖国(ニカラグア)のため…そう思うようにして目を背けていた」

アマンダ　「でも結局それは、アメリカの若者を薬漬けにする手助けをするってことだったんだ…そう気付いたの」

スネーク　「そうだな」

アマンダ　「…決めた。ここ(マザーベース)を離れて革命に戻っても、もう麻薬精製には手を出さない。KGBにも頼らない」

アマンダ　「KGBや麻薬の資金に頼ってソモサを倒したとしても、人々の心は離れてしまうはず」

アマンダ　「エゴのために他人(ひと)を不幸にする…それじゃソモサと同じだから」

スネーク　「親父さんとは違う道を進むってことか」

アマンダ　「父さん(ミ・ピエホ)のことは今でも尊敬してる。でも、あたしのやり方は違う。それだけ」

スネーク　「そうか。チコも喜ぶだろう」

アマンダ　「チコだって一人前の戦士。顔向けできないことはしたくない」

スネーク　「よく言った、アマンダ。司令官(コマンダンテ)の顔つきになってきたな」

アマンダ　「よしてよ…最高の司令官(コマンダンテ)がそばにいてくれたおかげよ、ボス」

スネーク　「む…」

アマンダ　「ふふ…」

■ミッション情報

●チコ救出

スネーク　「アマンダ、捕虜収容所へはどうやって？」
アマンダ　「まず細い山道を進んでいくの。次第に道幅が広がって、その先は三叉路よ」
アマンダ　「三叉路では油断しないで。周りが高台になっているから、中央を進んだら恰好の的にされる」
スネーク　「気をつけよう」
アマンダ　「左側の道を進めば、その先が捕虜収容所よ」

・捕虜収容所

スネーク　「捕虜収容所についてはわかるか」
アマンダ　「奴らは村を接収して、収容所にしてる。路地が入り組んでるから、哨戒兵の動きに注意して」
スネーク　「鉢合わせは勘弁願いたいからな」
アマンダ　「路地をうまく使えば、逆に敵の目から逃れることもできるはずよ」
スネーク　「で、チコはどこに？」
アマンダ　「どれかの家に捕まってるはず。戸口から覗いて中を確かめて。アイコンが出たら、アクションボタンを押せばいい」
アマンダ　「家の中の物音がヒントになるかも。耳を澄ましてみて」
スネーク　「やってみよう」
アマンダ　「覗いている間も周囲の巡回は続いている。敵に見つからないようにね」
アマンダ　「スネーク…」
スネーク　「わかってる。チコを助け出せるように、最善を尽くす」
アマンダ　「ありがとう。頼りにしてる」

●ジャングルトレイン追跡

スネーク　「アマンダ、列車車庫（ターミナル）への行き方はわかるか」
アマンダ　「村の手前の三叉路に、機関車があったのは覚えてる？」
スネーク　「ああ。ジャングルの中か」
アマンダ　「そこから線路沿いに進めば列車車庫（ターミナル）へ行ける。ただ、途中に工場が」
スネーク　「コーヒー工場に偽装した…」
アマンダ　「…麻薬精製工場。そう。今はＣＩＡ（ラ・シーア）が占拠してる」
アマンダ　「ここを突っ切るのが最短距離だけど敵も多い。迂回するなら…」
スネーク　「いや。それが近道ならちょうどいい。工場

も奴らの拠点だ。把握しておく必要がある」
アマンダ「頼もしい」
アマンダ「工場の見張りは、高い通路をうろうろしてることが多いの。見つからないためには、敵の動きをよく見て」
スネーク「あるいは先に狙い撃つ(スナイプ)か…」
アマンダ「工場の中も入り組んでる。慌てずに進んで。裏手から列車車庫(ターミナル)へ出られる」
スネーク「さすが、詳しいな」
アマンダ「それ嫌味？　ＫＧＢが使っていたときだってあたしは別に…」
スネーク「いや。敵の動きをよくつかんでると思っただけだ」
アマンダ「ならいいけど…」
アマンダ「その先、列車車庫(ターミナル)のことはチコに聞いた？」
スネーク「積み荷をトラックに乗せ換えていると」
アマンダ「つまり敵にとってはかなり重要な拠点みたい。油断しないで」
スネーク「ああ」
アマンダ「そうだ。あと、村の東からは直接コーヒー工場へ行く近道があるって聞いた。詳しく知らないんだけど、必要なら探してみて」
スネーク「わかった。覚えておこう」

●対戦車戦

アマンダ「ボス、敵の戦車に襲撃されたの？　どこか隠れる場所は？」
スネーク「列車に隠れることは出来る。だが主砲を撃たれたらおしまいだ…」
アマンダ「貨物列車なんて簡単に吹き飛ぶか…」
スネーク「だが隠れることも無駄じゃない。向こうも見えない相手には狙いを定められないからな」
アマンダ「隠れながら隙をみて、キャタピラや後部の燃料タンクを狙う…」
スネーク「ただし主砲には注意、ということだ」
アマンダ「あとは歩兵にも注意して。まわりこまれるかも」
スネーク「わかった」
アマンダ「歩兵を無力化して敵部隊を制圧することは出来る。スネーク、がんばって！」

●バリケード破壊

スネーク「アマンダ、村へ戻るには三叉路を経由する

しかないか？」

アマンダ「抜け道があるみたい。コーヒー工場の入り口まで戻ったら、右側の道の方よ。直接村に戻れる」

アマンダ「それから、そのあたりは警備が強化されているかも」

スネーク「戦車相手に、派手にやったからな。それで、村に戻ったらどうすればいい」

アマンダ「村の北側にあるバリケードを爆破して。その先から奴らの搬送ルートに合流できる」

スネーク「バリケードを破壊…Ｃ４が必要だな…」

スネーク「爆破すれば敵も黙っちゃいない。警戒は避けられないだろう」

アマンダ「細い路地裏なら、連中の目も届かないかも知れない。垣根が乗り越えられればいいんだけど。バリケードを破った後も油断しないで」

●火口内基地潜入

スネーク「チコは、村の北に橋があると言ってたな」

アマンダ「鉄管を渡すための、狭い橋よ。それを渡ればトラックの輸送路と合流する。あちこち壊れているみたい」

スネーク「見つかったら、逃げ場はなさそうだ」

アマンダ「兵士が道を塞いでたら、厄介ね」

スネーク「抜け道は？」

アマンダ「崖沿いの道だもの。橋を渡ってからは、山側に砦の跡がある。そっちを通れれば、少しは楽になるはずよ」

アマンダ「山道を抜ければ、連中の砦よ」

・砦

アマンダ「ＣＩＡの傭兵（ラ・シーア）は、内戦当時の砦を自分達の陣地にしてるらしい」

スネーク「厄介だな」

アマンダ「銃座も備え付けてあるみたい。目立つところを進んだら、蜂の巣にされるかも」

スネーク「迂回路を探してみるか…」

アマンダ「逆に銃座を奪えれば、有利になるんじゃない？」

スネーク「クラスノゴリエを思い出すな…」

アマンダ「クラスノ…何？」

スネーク「すまん、こっちの話だ」

●対ピューパ

アマンダ「気をつけて！　そいつはガラパゴよ！」
アマンダ「そいつは空気を下に噴き出すことで自重を軽くしてるみたいなの」
アマンダ「だから戦車とは比べものにならないほど動きが速い。それに小回りも利く」
スネーク「弱点はないのか？」
アマンダ「ブースターを攻撃すれば急な加速はできなくなるかも…」
アマンダ「あとは、機銃を破壊する手もあるわね」
スネーク「わかった。やってみよう」
アマンダ「そいつには同志がずいぶんやられた。お願い、敵をとって！」

●熱帯雲霧林へ

アマンダ「ここからは雲霧林よ。地表まで植物が生い茂ってる。隠れる場所はいっぱいあるけど、それは敵も同じこと」
スネーク「偵察兵（スカウト）か…！」
アマンダ「力押しで進むのは自殺行為。まずは敵の位置を知ることよ。レーダーみたいなのがあればいいけど」
スネーク「あるいは暗視装置（NVG）を使うか…」
アマンダ「敵の位置がわかれば、対処のしようはあるでしょ。死角を進むか…」
スネーク「こっちも狙撃銃で先制するか、だな。目には目を、だ」

●対戦闘ヘリ戦

アマンダ「真っ向から戦闘ヘリとやりあったら命がいくつあっても足りない」
アマンダ「でも、こういう場所ならゲリラ戦術が有効よ」
アマンダ「木の陰から陰へと移動を繰り返せば、上空からじゃなかなか位置がつかめない。そこに勝機があるってわけ」
スネーク「さすが司令官（コマンダンテ）だ。戦い慣れてるな」
アマンダ「よしてよ、ボス。あとは、音にも注意してね」
アマンダ「物陰に身を隠しているときは、こちらからも様子をうかがいにくい。それだけに音で相手の位置を読むことが重要になるわ」
アマンダ「それから、できればテイルローターを狙うといいわ。それだけでヘリの機動性はかなり落ちる」
アマンダ「地上部隊にも気をつけて」
スネーク「了解だ。司令官（コマンダンテ）」

●研究施設へ

アマンダ　「このあたりの道は、緑に埋もれてる。自然に同化して潜まれてしまったら、見つけるのは困難よ」

スネーク　「ギリースーツか…」

アマンダ　「ともかく敵に見つからないように、慎重に進んで。目立つ服も着ていかないほうがいい」

アマンダ　「遺跡は入り組んでいるから、迷わないようにね」

スネーク　「逆に壁に使えば、敵の目から逃れられそうだ」

アマンダ　「狙撃兵(スナイパー)は一度見つかると、別の場所へ移動してしまう。あまり一所にこだわらないで」

スネーク　「わかってる。ソ連でさんざん思い知らされた」

アマンダ　「それと、狙撃兵(スナイパー)だからって、接近戦に持ち込めば有利ってわけでもない。姿を隠して背後から襲われたら…」

スネーク　「気をつけよう。スニーキングで負けるわけにはいかない」

●IDカード捜索

アマンダ　「スネーク、一度通った場所でも慎重にね。敵は自然の中に潜んでるはず」

アマンダ　「それからIDカードを持った傭兵の見つけ方は（わかる）？」

スネーク　「ああ、セシールに教わった。ケツァールが鳴く森にいる、オレンジ色のジャケットを着た兵士」

アマンダ　「研究所の兵士ね。巡回に出てるんだと思う。ボディチェックすれば、IDカードを持っているかわかるはずよ」

●対クリサリス戦

アマンダ　「コリブリは手強い相手よ。でも、倒す方法はあるはず」

アマンダ　「特にそこは隠れる場所が多いみたいだし。普通のヘリと戦ったときと同じ、ゲリラ戦術が有効なはず」

スネーク　「だが、奴の攻撃力は侮れない」

アマンダ　「そうね。遺跡の柱程度なら吹き飛ばしてくるかもしれない」

アマンダ　「それに、チコをさらったあの小型機、チコリブリにも注意して」

スネーク　「チコリブリ…？」

アマンダ「コリブリの息子って意味よ。あいつに捕まったらとにかくもがいて暴れるしかない」
アマンダ「運が良ければ脱出できるかもしれないわ」
スネーク「その前につかまらないようにしたいところだな」
アマンダ「ええ。それがいちばんだわ」

●採掘場偽装基地へ

アマンダ「あの居住区域(バラック)か」
アマンダ「入り組んでいて見通しが悪い場所よ」
スネーク「潜入には好都合だ」
アマンダ「そうかもしれないけど、自分の現在地を見失いやすい。あと曲がり角で敵とはち合わせなんてことも…」
スネーク「ああ、気をつける」
アマンダ「屋根の上に登れば見通しは良くなるけど、当然見つかりやすくなるし隠れる場所もあまり無い。登るなら短時間にとどめて」
アマンダ「手際よく地形を偵察するのよ」
アマンダ「そこの警備兵は遠距離射撃向きの武装は備えていない。地形のせいでしょうね」
アマンダ「スナイパーライフルを持って行くと優位に立てるかも」
スネーク「スナイパーだな、わかった。考えよう」
アマンダ「頑張ってスネーク」

●衛兵排除

アマンダ「スネーク、見ての通り」
アマンダ「遠くまで開けた、まるでサッカースタジアムのような場所よ」
アマンダ「遠距離から狙撃できる武器を使うといいわね」
スネーク「出口は複数あるようだな」
アマンダ「そうね、一箇所だけに気を取られないように注意して」
スネーク「了解だ」
アマンダ「やつらをやっつけて、スネーク！」

●対コクーン戦

アマンダ「そいつはエスカラバホよ。こっちの言葉でカブト虫って意味なの」
アマンダ「でも、エスカラバホの弱点はあたし達にもよくわからない」
スネーク「そいつは厄介だな」
アマンダ「あの科学者…ヒューイとやらに訊いてみた

らどう?」
アマンダ「あくまで一般論だけど…ミサイル系の武装は、一度発射したら装填に時間がかかるはず…」
アマンダ「あとは、あれだけの巨体を動かすには、それなりの廃熱が必要になると思う」
アマンダ「相手の武器を先に封じるのも手かも…」
アマンダ「ごめん、あまり役に立ててないかも」
スネーク「いや、手掛かりになった」

●地下基地潜入

アマンダ「すごい、本当にバシリスコの格納庫のそばまで来たの?」
アマンダ「あたし達は誰もそこまで行ってない。地下基地の内部構造はまるでわからないの」
スネーク「それはうらやましいな」
アマンダ「たぶん、建造物の内部だから…」
スネーク「ああ。身を隠す場所は多いだろう」
アマンダ「そうね。だけど警戒はかなり厳しいはず。圧倒的に不利な状況だと言うことは忘れないで」
スネーク「了解だ」

●独房からの脱出

アマンダ「スネークからの連絡は?」(心配)
ミラー「通信は繋がらない…ストレンジラブ博士の手に落ちたままだ」
アマンダ「そんな!」
ミラー「今はボスを信じて待つしかない」
アマンダ「待つっていつまで」
ミラー「アマンダ、怒った声も素敵だが落ち着いてくれ。非常用のツールなら準備がある」
アマンダ「どんな? あいつらが見逃すはずがない」
ミラー「いや、全ての持ち物を奪われたとしても、あれだけは気づかないだろう」
ミラー「スネークはちゃんと身につけているはずだ」

●ピースウォーカー格納庫へ

アマンダ「スネーク、無事だったの?」
スネーク「ああ。今度こそピースウォーカーを止める」
アマンダ「スネーク、無理しないで」
スネーク「それは無理だ」
アマンダ「敵兵はもちろんだけど、チコリブリなんかも投入されてる可能性がある。あいつらを相手にしてたら命がいくつあっても足りない」

アマンダ　「機械の動きを一気に止められる武器があるならそれを使った方が手っ取り早いかも」

（チャフ推奨）

アマンダ　「よく考えて装備をととのえて」

●対ピースウォーカー戦

アマンダ　「気をつけて、スネーク！　バシリスコがどんな攻撃をしてくるか、あたしには全くわからないわ」

アマンダ　「ただ、大きいというのはいいことばかりじゃないはず」

アマンダ　「おそらくはアクションも大きい…大抵の攻撃にはなんらかの予備動作があるはずよ」

スネーク　「それはあり得るな」

アマンダ　「最初は相手の出方を見て、攻撃の予備動作を覚えるのがいいかもしれない」

アマンダ　「そうすれば、大抵の攻撃ならかわすことができるはずよ」

アマンダ　「それと、歩行兵器となれば狙うべきところは自ずと決まってくる」

スネーク　「脚だな」

アマンダ　「ええ。脚を破壊すれば動けなくなるはず」

アマンダ　「うまくいけば転倒させることもできるかもしれない」

アマンダ　「だけど、倒れたピースウォーカーの下敷きになったりしないでね」

●対ピースウォーカー戦2

アマンダ　「スネーク！　核発射を止めて！　このままじゃキューバが…！」

スネーク　「ああ、わかってる」

アマンダ　「機体も改造（チューンナップ）されたみたいだし、あいつは以前戦ったときとは別物よ。以前の攻略法は通用しないかもしれない」

アマンダ　「ただ、基本戦略は同じはず。予備動作を把握するようにして」

アマンダ　「じっくり見ている時間はないかもしれないけど…」

スネーク　「わかった。なんとかする」

●クレイモア地雷

アマンダ　「クレイモア地雷は指向性の対人地雷よ」

アマンダ　「加害半径は約70バーラ（50m）、前方60°に７００個の鉄球をまき散らす」

アマンダ　「でも、指向性だけに後方から近づけば安全

だわ」

アマンダ「姿勢を低くして後ろから近づけば解除・回収できる」

アマンダ「アイコンが出たらアクションボタンを押して」

アマンダ「未使用のクレイモアを回収すれば、自分たちの武器として使うこともできるわ」

アマンダ「あとは、遠くから銃撃して破壊することもできる」

アマンダ「もちろん、近くから撃ってしまうと巻き添えを食らうわ。狙撃銃なんかを使った方がいい」

アマンダ「ただ、破壊しちゃうと回収はできないけどね」

●防衛ミッション

アマンダ「相手はこっちの拠点を知ったうえで攻めてきている。つまり、もう隠れても無駄ということよ」

アマンダ「こうなったら戦うしかない。カムフラ率の高さより、防御力を優先した装備を選んで」

アマンダ「長期戦になるかもしれないから兵糧（レーション）も欠かせない」

アマンダ「ただ、拠点まで攻め込まなくちゃならない敵より、守る側のほうが有利よ。慌てる必要はないわ」

アマンダ「相手も、いつまでも物陰に隠れているわけにはいかない」

アマンダ「そこを狙撃銃で狙い撃ちできれば、安全に戦いを進められるはず。もちろん、狙撃ポイント次第ではあるけど」

アマンダ「移動ルートに地雷やC4なんかを仕掛けるのも有効ね」

アマンダ「あんまりそういうやり方は好きじゃないんだけど…仲間を守るためには仕方ないわ」

●破壊活動

アマンダ「敵拠点に破壊工作もゲリラ戦の基本ね」

アマンダ「破壊には爆発物を使うことになるでしょうけど、爆発が起きれば当然気づかれることになるわ」

アマンダ「だから、設置してから起爆するまでの間に、自分の安全を確保するのが何より重要よ」

アマンダ「素早く安全な場所を確保するには、設置の前に逃走ルートを決めておいた方がいいわ」

●キッドナッパー殲滅

アマンダ「そこには今、チコリブリがうようよいるらしいわ」

アマンダ「チコリブリというのは、チコをさらった、あの機械（マシン）よ」

アマンダ「コリブリの子供（チコ）という意味でそう呼んでるの」

アマンダ「ミッションの間、弾薬の補充はできそうにない。無駄撃ちには気をつけて」

アマンダ「でも、あそこには米傭兵たちが設置した銃座がある。それを有効に使って」

●クリアリングの回避方法

アマンダ「ゲリラ活動では、敵が数にものを言わせた捜索を行ってくることがあるわ」

アマンダ「そんなときにこちらから戦いを仕掛けるのは自殺行為よ」

アマンダ「落ち着いて、相手の動きをよく見て、その視界から逃れる。それだけに集中して」

アマンダ「もちろん、音を立てないように注意が必要。逆に相手の立てる音で位置を把握するのも重要だわ」

アマンダ「視覚、聴覚だけじゃなくて、相手の気配にも気を配って」

アマンダ「敵の気配は、壁に張り付くかホフクした状態でLボタンで探れるわ」

「チコ」ブリーフィングファイル

※「このミッションについて」のファイルは、P664からの「■ミッション情報」をご覧ください

■地理情報

●資材中継地

チコ　「資材中継地はイラス東部の山麓だ。核物資はそこの列車車庫(ターミナル)で列車からトラックに積み替えられるはず」

スネーク　「わかった。積み替えの隙を狙おう」

チコ　「けど、あそこにはバシリスコがいるかもしれない…。気をつけてくれよ、スネーク」

スネーク　「80フィートの歩く化け物…ＣＩＡの新兵器か…?」(自問)

チコ　「そうかもね。残念だけどあれは恐竜じゃない。山の上の基地(ベース)で実験してるのかもしれない」

スネーク　「歩兵と兵器をつなぐ金属の歯車、メタル・ギア…ソ連にそんなことを言っていた奴がいた」

チコ　「金属の歯車…」

スネーク　「嫌な予感がする。ここで行われていることと何か関係があるのかもしれん」

チコ　「まさか、核兵器と?」

スネーク　「…考えていても仕方ない。そこにそいつがいたら作戦を練り直すだけだ。斥候がいない以上、自分で行くしかない」

チコ　「気をつけてくれよ、スネーク…」

●谷川

チコ　「村の北には谷川があるんだ。そこには足場のついた水道管が渡してあって、橋に使える。もともと揚水発電所の導水に使うつもりだったらしいよ」

チコ　「そこまで行くには収容施設北のバリケードを壊す必要があるけどね」

スネーク　「わかった」

チコ　「谷川にはバシリスコがいるらしいけど、気を取られて落ちないようにしてくれよ」

スネーク　「バシリスコ…」(米軍の兵器?)

チコ　「あ、いや。俺が見た化け物のことじゃない。本物のバシリスコさ」

スネーク　「本物?　伝説の蛇の王か?」

チコ　「蛇っていうか、トカゲだよ。川の上を走るんだ」

スネーク　「そんなトカゲが？」

チコ　「あれはなかなか見物だぜ！　1バーラ（80cm）程度だから、大きくはないけどな」

スネーク　「トカゲにしちゃ大きい方だ」

チコ　「恐竜に比べたら全然小さいさ」

●本物のバシリスコ

スネーク　「川には本物のバシリスコがいるのか？」

チコ　「その川でも見たって話を聞いただけさ」

チコ　「ニカラグアだったら、よくいる場所もわかるんだけど。見たいかい？」

スネーク　「観光に来たわけじゃない」

チコ　「トカゲは嫌い？」

スネーク　「嫌いじゃない。もっとも、蛇の方が美味いが」

チコ　「…味を訊いたんじゃないけど」

スネーク　「おまえは好きなのか？」

チコ　「そういうわけでもないけど…。トカゲって恐竜みたいで格好いいだろ？」

スネーク　「爬虫類（レプタイル）だからな。だが大きさが違う」

チコ　「大きいヤツもきっといるさ。哺乳類（ママル）が増えて恐竜の卵を食べたらしいけど、それで恐竜が絶滅したとは思えない。奴らは世界のどこかにきっといるんだ」

スネーク　「恐竜の卵か…」

チコ　「それに、生き物は常に進化してるわけだろ？　進化して恐竜だとわからないような姿になったのかもしれないよ」

スネーク　「だとしたら、それはもう恐竜とは言えないだろう」

チコ　「そうなんだよな…。やっぱり恐竜は大きくないと！」

●火口付近

チコ　「イラスには複数の火口がある。何度も噴火してるからね」

チコ　「火口の多くには雨水が溜まって湖になってるって話だ」

スネーク　「カルデラか」

チコ　「大鍋（カルデラ）？　まあ、そんな感じかな」

チコ　「…そうだ。湖に着いたら、変わった生き物がいないか見ておいてくれないか？」

チコ　「湖に巨大な生き物が棲んでるっていう話

は、世界中にあるらしいんだ」

チコ　「ネス湖のネッシー、アルゼンチンのナウエリート、カナダのオゴポゴ…数え上げればキリがない」

チコ　「そういう目撃談も、恐竜が生き残ってるって説を裏付けてるんだ」

スネーク　「しかし、カルデラ湖だとすると、川にも繋がっていない」

チコ　「そうなんだけど…。でも、コンゴのモケーレ・ムベンベなんかだと、陸上も歩けるからな。移動してきて棲み着いてるかもしれない」

スネーク　「未確認動物(UMA)に詳しいんだな」

チコ　「FSLN(フレンテ)のメンバーに元狩人(ハンター)がいたんだ。その人にいろんなことを教わったよ。怪物の島にも行ったことがあるらしい」

スネーク　「怪物の島の狩人(ハンター)…」

チコ　「俺もいつかは狩人(ハンター)として珍しい生き物を捕まえたいんだ。もちろん、ニカラグアに平和を取り戻すのが先だけどね」

●ネッシー

チコ　「ネッシーのことは知ってるか?」

スネーク　「一応はな。あれだけ有名だと知らない方が珍しい」

チコ　「だったら話が早い。スネークもあれは恐竜の生き残りだと思うだろ?」

スネーク　「そうかもな」(あまり興味ない)

チコ　「同志(コンパ)にもらった本に写真が載ってたんだ。首長竜の復元図にそっくりだった」

スネーク　「…どうしてネス湖だけに生き残った?」

チコ　「海から切り離されたからだって言われてる。ネス湖が海と繋がってたときに首長竜がそこに入りこんで、気候の変動とかで湖に閉じ込められたんだ」

チコ　「そこには天敵となる哺乳類(ママル)もいなかったから、世代交代しながら今まで生き残ってこれたんだね」

スネーク　「それなら他の湖にいてもおかしくない。似た環境の湖があれば」

チコ　「そうさ。だからナウエリートとかオゴポゴとか、いろんな湖で巨大生物が目撃されてるんだ」

チコ　「イラスにいるかどうかはわからないけど…ニカラグア湖(ラゴ・コシボルカ)には間違いなく何かがいるだろうね」

●ナウエリート

スネーク　「さっきのナウエリートというのはなんだ?」

チコ　「アルゼンチンのナウエルウアピ湖にいる首長竜さ。目撃証言にはバラツキがあるけど、基本的にはネッシーと同じ生き物だと思う。ただ…」

スネーク　「ただ?」

チコ　「一説によると、ナウエリートは50年代の核実験の影響で生まれたとも言われてるんだ…」

スネーク　「核実験?　50年代にアルゼンチンで核実験が行われたという記録はない」

チコ　「当時は軍人出身のフアン・ペロン大統領が急速な工業化を進めてたんだ。クーデターで失脚するまでの間、秘密裏に実験が行われたとしても不思議じゃない」

スネーク　「強引な説にも聞こえるな」

チコ　「そうか?　それなら、やっぱりナウエリートは恐竜なのかな?」

スネーク　「そうは言ってない」

チコ　「ナウエリートは恐竜の生き残りだったんだ…」(勝手に納得)

スネーク　「いや…」

チコ　「ありがとう、ボス!　おかげで確信が持てたよ」

スネーク　「……」(ため息)

●オゴポゴ

スネーク　「オゴポゴというのは?　どこの言葉だ?」

チコ　「オゴポゴはカナダのオカナガン湖に棲む怪獣なんだ。インディオたちに語り継がれていた怪獣だから、インディオの言葉なんだろうね」

スネーク　「伝承か。実際には…」(いないだろう)

チコ　「文字として記録にも残ってる。1872年に最初の記録が残されて以降、20世紀に入ってからも何度も目撃されてるんだ」

スネーク　「そうか…」(信じてない)

チコ　「スネークもUMA(ユーマ)が好きになってきた?」

スネーク「そうだな…」（適当に相づち）
チコ「やっぱり、UMA（ユーマ）は男のロマンだよな」
チコ「ニカラグアが平和になったら、スネークも一緒に探検に行かないか?」
スネーク「そうだな…。そんな生き方ができれば楽しいかもしれない」

●モケーレ・ムベンベ

チコ「モケーレ・ムベンベはコンゴにいる恐竜さ。これはもう、謎の怪獣なんかじゃなくて、恐竜の生き残りと断定できる」
チコ「現地の人にはよく知られてる生き物だし、ブロントサウルスの復元図を見せたら、それがモケーレ・ムベンベだって誰もが証言してるんだ」
スネーク「ふむ…」
チコ「ニカラグアが平和になったら、俺もコンゴに行きたいな…」
スネーク「…だが、ゲバラのコンゴ革命は失敗に終わっている」
チコ「そうなんだよな。それも俺たちがどうにかできるといいんだけど、アフリカは遠いよな」

スネーク「アフリカか…」
チコ「エル・チェはモケーレ・ムベンベを見たのかな…?」
チコ「俺も見てみたいなあ…」
スネーク「今はアフリカより中米（こっち）のことが先決だ」
チコ「それはそうなんだけど…」

●熱帯雲霧林

スネーク「雲霧林には詳しいか?」
チコ「詳しくはないけど…。ただ、同じ熱帯林とはいえ、熱帯雨林と霧に覆われた雲霧林ではまるで様子が違う」
チコ「共通点としては、そうだな…ヤドクガエルには気をつけてくれ」
チコ「熱帯雨林も雲霧林も、湿度が高いのは一緒だからな。ヤドクガエルには最高の環境なんだ」
チコ「まあ、イチゴヤドクやアイゾメヤドクは触ったぐらいじゃ死なないけど、お腹が空いても食べないようにしてくれよ」
スネーク「マザーベースで糧食は準備できる。今回はそこまで食料に困らないはずだ」

チコ「本当か？　野生動物を食べられなくて残念じゃないのか？」

スネーク「チコ、俺をなんだと思っている？」（苦笑）

チコ「ははは、冗談だよ。コロンビアの方には触るだけでも危険なフキヤガエルがいるらしいけどな」

スネーク「ずいぶんと詳しいな」

チコ「まあな。毒のある生き物って、なんか格好いいだろ？」

スネーク「毒に当たったら、格好いいじゃ済まないぞ？」

チコ「わかってるって。あ、あと、森についたらビッグフットがいないか注意してくれよ」

スネーク「それは注意する必要もなさそうだ…」（苦笑）

●ビッグフット

チコ「ビッグフットってのは、ロッキー山脈に生息する猿人なんだ。インディオの言葉ではサスクァッチとも言われてる」

チコ「身長はなんと3バーラ（2.5m）以上もあるんだぜ！　すげえよな！」

スネーク「ゴリラとは違うのか？」

チコ「全然違うよ！　ゴリラは大きくても2バーラ（約1.6m）ちょっとだし、こぶしを地面につけて歩くんだ」

チコ「ビッグフットはもっと大きいし、人間と同じで二足歩行なんだ」

スネーク「猿より人間に近いわけか」

チコ「たぶん、進化のどこかで人間から枝分かれしたんだろうな。人間が道具を使い始めたりする前に」

スネーク「だが、同じ山地とはいえロッキー山脈は遠いぞ？」

チコ「遠くないさ。ダーウィンの説だと人間だって、アフリカからここまではるばる旅をしてきたんだしさ」

チコ「それに、ベネズエラでもモノスっていう猿人が目撃されてるんだ」

チコ「コスタリカは生き物の種類が豊富だから、猿人ぐらいいても不思議じゃないはずだ」

スネーク「猿人〝ぐらい〟か…」

●モノス

スネーク「モノスってのは初耳だ」
チコ「ビッグフットに比べると有名じゃないかもな。ベネズエラにいる猿人なんだけど」
チコ「大きさは2バーラ(1.6m)以下だから大したことないんだけど、凶暴さではビッグフット以上らしいぜ」
チコ「どんなに凶暴なんだろうな？　捕まえた動物を死ぬまで殴り続けるとか…」
スネーク「獲物を殺して食べるのは自然の掟だ」
チコ「でも、噛みつくより殴りつけるほうが凶暴そうだよな」
スネーク「人間に似ているだけにそう感じるのかもしれない」
スネーク「…それにしても随分楽しそうだな、チコ」
チコ「やっぱり、未知の生き物には凶暴であって欲しいぜ。そうじゃないとハンターも狩り甲斐がないからな！」

●遺跡

チコ「ケツァールを見たのか、スネーク？」
スネーク「ああ」
チコ「どうだった？　蛇に似ていたか？」

スネーク「蛇？　いや、蛇には見えなかったが」
チコ「そうか…。やっぱりケツァルコアトルとは別なんだな」
スネーク「ケツァルコアトル？」
チコ「マヤ・アステカ文明に伝わる、羽のある蛇のことさ」
スネーク「羽のある蛇…」
チコ「変わってるだろ？　きっと未確認動物(UMA)だぜ」
チコ「アマンダ達は、ケツァールを神格化したんだなんて言うけど、蛇と鳥を見間違えるわけがない」
チコ「むしろ、ケツァルコアトルを見た人が伝えた伝承が先にあって、ケツァールより先に神のイメージができたんじゃないかな？」
チコ「それからそのあとに、その神のイメージに近い鳥ってことで、ケツァールが命名されたんだと思う」
スネーク「順序が逆ってことか」
チコ「俺が思うに、ケツァルコアトルは翼竜の生き残りだったんじゃないかな？」
チコ「だったら翼もあるし、爬虫類(レプタイル)だから蛇のよ

うにも見えるはずだ」

チコ　「翼竜はアフリカの方には今も生き残って、コンガマトーとかオリティアオウとか呼ばれてるんだ」

チコ　「だったらアメリカ大陸でも、マヤ・アステカ時代まで翼竜が残っていて不思議じゃない」

スネーク　「現代まで残っていないのが救いだな」

チコ　「それはわからないぜ？　恐竜が絶滅したと言われるのは6500万年前、アステカ文明はたったの600年前だ」

チコ　「6500万年も生き残ってきたなら、600年程度で滅んだりはしないさ」

●コンガマトー

チコ　「翼竜が生き残っているのは、アフリカのカメルーンやコンゴの辺りらしい」

チコ　「現地の住民はコンガマトーとかオリティアオウとか、それぞれ部族ごとに違った名前で呼んでるみたいだ」

スネーク　「コンゴにはずいぶんと恐竜の生き残りが多いんだな」

チコ　「あの辺りは未開の地が多いからな。人知れず生き残ってきたのさ」

チコ　「でも、翼竜の化石はアメリカでも見つかってるんだ」

チコ　「3年前にテキサスで発見された化石の翼竜は、羽を広げると14バーラ（12m）もあったんだって」

チコ　「そんなに巨大な翼竜だったら、神様扱いされてもおかしくない」

チコ　「それこそがケツァルコアトルの正体なんじゃないかと思うね、俺は」（この化石の翼竜は、75年にケツァルコアトルスと命名されることになる）

●採掘場偽装基地

チコ　「採掘場に偽装した基地か。俺たちもそこまでは行ったことがないからな」

チコ　「どんな場所かわからないけど、とにかく気をつけてくれ」

スネーク　「わかった」

チコ　「米軍は秘密基地に宇宙人の死体や回収した未確認飛行物体（UFO）を隠してるという噂もある」

スネーク　「宇宙人？」（笑って話を合わせる）

チコ　「宇宙には無数の星がある。俺たちより文明の進んだ星の住人がUFOで地球に来ていると考えるべきだ」

チコ　「実際に米軍は1947年、ロズウェル付近で空飛ぶ円盤を回収したとアナウンスしている」

チコ　「スネークは知らないだろうけど米軍じゃ有名な話だよ！」

スネーク　「そうか…」（元米軍だがしらばっくれる）

チコ　「とにかく、あいつらはもしかしたら、まだ未知の兵器を隠し持っているかもしれない。気をつけてくれ」

●UFO

チコ　「UFOはキャトルミューティレーションとも関係があるらしいな」

スネーク　「家畜（キャトル）の突然変異（ミューテーション）？」

チコ　「ミューテーションじゃない。ミューティレーションさ。…英語だから意味はわからないけど」

チコ　「UFOの目撃談には、近くで牛とかの家畜が謎の変死を遂げていたというエピソードがついて回るんだ」

チコ　「それらの死体は血を抜かれ、目玉や性器がくり抜かれているらしい」

スネーク　「傷を負った死体を放置すると血は地面に吸収されるぞ」

チコ　「でも、傷口は地球上の刃物で切ったものとは違うらしい」

スネーク　「蛆か何かに食われたんじゃないのか？」

チコ　「放射能が検出されたっていう話もある」

スネーク　「放射能…」

チコ　「それに、俺たちのいた街でも山羊が変死する事件があったんだ」

チコ　「怪物を目撃したという人もいた。爬虫類（レプタイル）が立ち上がったような姿で、頭から背中にかけて棘に覆われていたらしい」

チコ　「それが宇宙人の正体か、あるいは宇宙人が連れてきた怪物（エイリアン・アニマル）なのかも…」

スネーク　「…なんにせよ、進んだ文明のイメージじゃない」

チコ　「基地でみかけたらよろしく伝えておいてくれ」

スネーク　「言葉が通じたら、な」

●アブダクション

チコ　「UFOは人をさらうこともあるらしい。ヒル夫妻事件で有名になった、アブダクションってヤツだ」
チコ　「だから、最初にコリブリを見たときはUFOなのかと思ったぜ」
スネーク　「奴らのフルトン回収か」
チコ　「あいつらはきっと宇宙人と手を組んでるんだ。俺は会わせてもらえなかったけど…」
スネーク　「捕まったら人体実験されるぞ?」（苦笑しつつ脅し）
チコ　「拷問よりマシだよ…」
チコ　「けど、宇宙人ってどんな奴らなんだろうな?　やっぱり灰色の肌で、髪の毛とかなくて、黒目もなかったりするのかな」
チコ　「それか身長4バーラ(3m)でスカートはいてたりするのかな?」
スネーク　「まさか…。しかし、確かにあの兵器は見たことのない動きだった」
スネーク　「CIAは本当にコンタクトしたのか…?」（自問）

チコ　「そうだよ!　きっとそうだ!」

●エルバッキー

チコ　「実を言うと、宇宙ネコには俺も会ったことがあるんだ」
スネーク　「宇宙…ネコ?」
チコ　「うん。暗かったからよく見えなかったけど、やけにしっぽの長いネコだったんだ」
チコ　「それに、暗闇の中で目がギラギラと光ってた」
スネーク　「ネコの目は光るもんだろ…」
チコ　「俺も最初はただのネコだと思ったんだ。でも、そいつは俺の頭の中に直接語りかけてきた」
スネーク　「…頭の中に?」
チコ　「そいつは自らをアルターゴゾ・エルバッキー・ムニューダーと名乗った」
スネーク　「……」
チコ　「アンドロメダ星雲の出身で、地球の核兵器について調査してるんだって…」
スネーク　「アンドロメダ星雲…。人類はまだ月に行くのがやっとだ。そんな遠くに核を撃つなんてできるわけがない」

チコ　「エルバッキーは人類が核で自滅することがないよう見守っているんだ」
チコ　「いつの日か人類が宇宙連邦の一員になる日まで…」
スネーク　「…それは耳が痛いな。緊張緩和(デタント)だのといっても、今回のような事件もある」
スネーク　「何かの間違いで報復の連鎖が起こったとすれば…」
チコ　「ああ」
チコ　「この星はいつ核戦争で自滅してもおかしくない…」

●UFO写真

チコ　「スネーク、コリブリの写真を撮ったんだって?」
スネーク　「ああ、これだ」(ここでクリサリスの写真)
チコ　「すごいや!　ホントのUFOみたいだ!　やっぱり、米軍は宇宙人と結託してたんだな」
スネーク　「確かに、見た目はそうだが…」
チコ　「なあスネーク、これ、1枚焼き増ししてくれないか?」
スネーク　「構わないが、どうするつもりだ?」
チコ　「こういう写真は高く売れるんだ。マザーベースの運営資金にもなるよ」
スネーク　「ははっ、そいつはいい。頑張って儲けてくれ」(信じていない)
チコ　「信じてないな、スネーク。でも、俺に任せてくれよ!」

■怪物の島の伝説

●怪物の島

チコ　「知ってるか、スネーク?　コスタリカの沖には怪物の島があるんだって」
スネーク　「怪物の島?」
チコ　「18世紀の海賊は、カリブ海から太平洋側にも船を進めたらしい」
チコ　「スチーブンソンの『宝島』もコスタリカ沖の島がモデルだしね」
スネーク　「『宝島』か!　懐かしいな」
チコ　「スネークも読んだことあるの?　それなら話が早いや」
チコ　「そういう海賊の伝説として、海上で空飛ぶ怪物に遭遇したという話がニカラグアにも

伝わってるんだ」

チコ　「それどころか、怪物の島に上陸したという話まであるんだよ。その島の場所は記録されていないんだけどさ」

チコ　「だから俺はずっとコスタリカに来たかったんだ」

スネーク　「ははっ。そいつはいい」（信じていない）

チコ　「コスタリカのどこかにはその島まで案内してくれる、しゃべるネコがいるらしいよ」

スネーク　「それは面白い話だな」（信じていない）

チコ　「その島のこと、もっと知りたいか？」

スネーク　「今はいい。もしその島に行くことになったら聞かせてもらう」

チコ　「わかった。それじゃ、そのとき話すよ」

・トレニャー

スネーク　「チコ、しゃべるネコに会った」

チコ　「本当かスネーク！　伝説のトレニャーに会ったのか⁉」

スネーク　「トレニャー？　確かにそう名乗っていた。有名なのか」

チコ　「そっちの筋ではね」

スネーク　「未だに信じがたい」

スネーク　「人間以外に言語を持つ生き物が存在したとはな。世界は広い」

チコ　「でも、よくあいつらの言葉がわかったね、スネーク」

スネーク　「現地語の習得は諜報の基本だ」

チコ　「さすがボス。トレニャーの言葉で何か言ってみてくれよ」

スネーク　「ニャ？　ウニャ、ウニャニャ…」（え？急にそんなこと言われても…）

チコ　「すごいや！　なんて言ってるのか全然わかんないよ！」

スネーク　「そ、そうか…」

チコ　「それで、トレニャーはなんて言ってたんだ？」

スネーク　「お前の言っていた島に案内すると…」

チコ　「本当か⁉　だったら俺も連れてってくれよ、ボス！」

スネーク　「気持ちは分かるが、どんな危険があるかわからない。まずは俺が様子を見る」

チコ　「ずるいな、スネークだけ」

スネーク「そう言うな。いろいろと事情もある」

スネーク「また機会があれば一緒に行こう。余裕があれば写真を撮ってくる。今回はそれで我慢しろ」

・アイルー

チコ「怪物の島（イスラ・デル・モンストルオ）には、トレニャーの他にも話すネコがいるらしいんだ」

スネーク「他にもいるのか！」

チコ「ああ。アイルーって言うらしい。アイルーはコスタリカまで来ることはないみたいだけどね」

チコ「アイルーを見かけたら話しかけてみたら？　何かいいことがあるかもしれないよ」

スネーク「そうだな…。何事も経験だ…」

チコ「それと、アイルーは人間に悪さもしないし、いい奴だから攻撃したりしちゃダメだよ」

スネーク「ああ。無抵抗なネコを攻撃するような趣味はない」

・リオレウス

チコ「海賊たちの伝承を集めた本を持ってたんだ。それによると、リオレウスは空の王者とも呼ばれている」

チコ「一般に伝えられている見た目は、翼の生えた竜…いわゆるワイバーンそのものらしい」

スネーク「ワイバーン…ヴラド公の紋章にも使われていた、二本足の竜（ドラゴン）か」

チコ「そう、ドラキュラのモデルにもなったヴラド公の紋章さ」

チコ「島影も見えない大海原で船が襲われることもあったらしいから、リオレウスはかなり長距離を飛行できたんだろうね」

チコ「それから、リオレウスは炎も吐くらしい」

スネーク「炎を吐く？　そんな生き物がいるはずがない！」

チコ「相手は怪物（モンストルオ）なんだ。そんな常識は捨てちまった方がいい」

・ティガレックス

チコ「ティガレックスもリオレウスと同じ、飛竜種だ」

チコ「でも、地上での動きも得意で、岩を跳ね飛ばして遠くから攻撃してきたり、突進のスピードもすごかったんだって」

スネーク「陸上での目撃談があるのか？」
チコ「有名な女海賊、アンとメアリーは怪物の島に上陸したと言われてるんだ」（アンとメアリーは18世紀の実在の海賊。多くの伝説を持つ）
チコ「そこで彼女たちはティガレックスと一戦交えたらしい」
スネーク「アンは銃の名手だったらしいな」
チコ「きっとすごい戦いだったんだろうな。見てみたかったぜ」
スネーク「俺も銃は得意だが…」
チコ「わかってるって、あんたの強さはね！」
・ランポス
チコ「上陸したアンとメアリーは、地上を走り回る小型の恐竜も目撃したらしい」
スネーク「それがランポスか？」
チコ「そうさ。小型だけにすばしこいけど、銃があれば怖れるほどの相手じゃなかったみたいだな」
チコ「ただ、一体一体は大したことなくても、囲まれると危険だ」

スネーク「そうだろうな。戦闘において、数の優位を覆すのは並大抵のことじゃない」
チコ「うん。だから、あらかじめ囲まれないように用心するのがベストだと思う」
スネーク「そうしよう。単独潜入では隠密行動が原則だからな」
スネーク「だが戦闘では不利だとしても、潜入に関しては単独ならではのアドバンテージがある」
チコ「さすがボス。アドバイスなんて要らなそうだな」
スネーク「見直したか？」
チコ「うん…。でも、気をつけてね…」（心配）
・ギアレックス
チコ「恐竜がゾンビになって人を襲ったという伝説もあるんだ」
スネーク「ゾンビ？　生きる屍(リビング・デッド)か⁉」
チコ「ああ。恐竜が絶滅しても、ゾンビとして生き返ったというのはあり得る話だ」
スネーク「待て。恐竜かどうか以前に、そもそもゾンビ自体が現実には存在しない」
チコ「しっかりしてくれよボス！　ハイチの農園じ

ゃ長いことゾンビに仕事をさせてたんだぞ」

チコ　「古来、ハイチにはゾンビパウダーという秘薬が伝わってるんだ」

スネーク　「…そうなのか?」(動揺)

チコ　「きっと古代人がゾンビパウダーを使って、恐竜をゾンビにしたんだろうな」

スネーク　「いや、人類が誕生したときにはすでに恐竜は…」

チコ　「その前提が間違ってたんだよ、きっと」

チコ　「…まあとにかく、その恐竜はすごく強かったらしい。そいつの名はギアレックス。殺しても死なないと言われている」

チコ　「体液を浴びた者は火傷したようになったという説もある」

チコ　「あとは、背中から落ちた棘は、咆吼に共鳴して人々を苦しめたと…」

スネーク　「…ただ強い怪物だっただけじゃないのか?恐竜の生命力など人間には想像できない」

スネーク　「小銃程度の武器で少しばかり撃ったとしても死にはしないだろう…」

チコ　「ゾンビが怖いのか、ボス?」

スネーク　「…そんなことはない。信じられないだけだ」

■自分について

●アマンダ

チコ　「アマンダはうるさいんだよなぁ。後を付いてこいとか、自分から離れるなとか」

チコ　「この間なんか、慌てて飯喰ってたら「ご飯(ガジョピント)はよく噛んで食べなさい」だぜ?」

スネーク　「アマンダなら言いそうだ」

チコ　「敵がいつ来るかわからないのに、のんびり飯なんか食ってられるか!」

チコ　「俺だって一人前のFSLN(サンディニスタ)なんだ。女にそんなこと言われたくない!!」

スネーク　「女だから、は関係ないだろう。お前の姉さんは頑張ってると思うぞ。亡くなった親父さんの跡を継いで」

チコ　「わかってるよ、それは…アマンダのやつ、最近元気ないもんな」

チコ　「仕方ないけど…俺がしっかりしなきゃ」

スネーク　「その意気だ」

●父親

スネーク　「親父さん、残念だったな」

チコ　「仕方ないよ。ゲリラ戦士の宿命さ。国と民衆に命を捧げてるんだ…俺だって、覚悟はできてる」

スネーク　「どうだろうな」

チコ　「当たり前だろ！『祖国か死か』…親父の口癖さ」

スネーク　「ゲバラか」

チコ　「親父はいろんな話をしてくれたよ。サンディーノ将軍の活躍、国家警備隊グアルディアとの戦い…」

チコ　「それに、家を出てっちまった母さんのこともね」

スネーク　「母親に付いていかなかったのか」

チコ　「何言ってんだよ。俺は母さんより革命を選んだ。それだけのことさ」

スネーク　「だが、会いたいだろう」

チコ　「わかんない。でも、俺たちが革命をやり遂げたら、きっと会える。何となくそんな気がするんだ」

チコ　「そしたらまた、父さん（ミ・ビエホ）も母さんも一緒に、みんなで暮らせる。そう思ってたのにな」

チコ　「父さん（ミ・ビエホ）…」（泣き出す）

スネーク　「しっかりしろチコ。お前が姉さんを守るんだろ」

チコ　「うん…」

●ゲバラの言葉

チコ　「そういえば、『よく狙え。おまえは一人の男を殺すのだ』って…」

スネーク　「ああ。あれもゲバラの言葉だ」

スネーク　「ボリビアで捕らえられたゲバラが、殺される直前、自らを撃とうとしている兵士に対して言ったと語り継がれている」

チコ　「やっぱりエル・チェはすごいな。自分が殺されるときにそんなことを言えるなんて」

スネーク　「キューバ革命後、ゲバラは新政府での地位を投げ出して他国の革命に手を貸そうとした。いつでも死ぬ覚悟はできていたんだろう」

チコ　「俺なんて、拷問されただけで…」

スネーク　「チコ、お前は新しい人間（オンブレ・ヌエボ）に生まれ変わったんだろ？」

チコ　「うん…」（静かに力を込めて）

●隊の同志

スネーク「母親と離れて暮らして、寂しくなかったのか」

チコ「そうでもない。同志(コンパ)は家族みたいなもんだからね。同じ村の出身も多かったし」

スネーク「保護者がいっぱいいたわけだ」

チコ「保護者ってなんだよ！　俺は一人前の戦士だぜ？　結束が堅いって言ってほしいな」

スネーク「すまない、そうだった」

チコ「それが、あのコリブリのせいでばらばらに…みんな、今頃どうしてるかな」

チコ「なあ、スネーク。FSLN(フレンテ)の捕虜を見かけたら、助けてやってほしいんだ」

チコ「俺たちの仲間は根性のあるやつばかりだ。きっとボス達の役にも立つぜ」

●マザーベースでの役割

チコ「なあスネーク、マザーベースの仕事、なんでも任せてくれよ！」

スネーク「無理しなくていい」

チコ「子供扱いするなよ。もう一人前なんだ」

スネーク「じゃあ、何が得意なんだ？」

チコ「えっと…それはその…何でもだよ！　どの班に入れてくれても、頑張るさ」

スネーク「ははは…まあ、若い分飲み込みは早いかも知れんな。考えておこう」

チコ「頼むぜ、ボス！　立派に戦えるところを見せてやるからさ」

■恋

●恋の悩み

チコ「はぁ…」

スネーク「どうした、チコ？　ため息なんてついて、お前らしくないな」

チコ「あ、スネーク」

スネーク「悩みでもあるのか？」

チコ「え？　別にそんなこと、ない…わけじゃない、かな？」（自問）

チコ「なあ、スネーク…」

スネーク「なんだ？」

チコ「女の人って、変わってる。何考えてるか、よくわからないし、気まだし」

チコ「やっぱ、男とはちがうのかな…」

スネーク　「…どうした突然」（意外）
スネーク　「チコ…」
スネーク　「好きな女性(ひと)でもできたか？」
チコ　「そ、そんなんじゃないって！　ただ…」
スネーク　「ただ、なんだ？　俺で良ければ話を聞くぞ」
チコ　「…俺、パスと話そうとすると、なんだかドキドキしちゃって上手くしゃべれないんだ」
スネーク　「パスと？　まあ、お前とは年齢も近いか」
チコ　「スネークもそういうことってあったりした？」
スネーク　「ああ。誰だってある」
チコ　「どうすれば上手くしゃべれるかな？」
スネーク　「…難しいな。意識せず、普段通りでいいんじゃないか？」
チコ　「それがうまく出来ないんだ。パスの前に出ると身体が硬くなっちゃう」
チコ　「パスと目が合うと、なんだか顔が熱くなっちゃって…」
スネーク　「慣れるしかないな。戦場と同じだ」
スネーク　「最初は緊張するが、場数を踏めば自然と慣れる。頑張って話をするようにしてみろ」

チコ　「う、うん…」
チコ　「でも、女の子は未確認動物(UMA)より謎に満ちてるよ…」
スネーク　「確かに」

●パスの正体

スネーク　「ＺＥＫＥ(ジーク)が起動する前、パスがＺＥＫＥ(ジーク)を壊そうとしているのを目撃したそうだな」
チコ　「っ…」（嗚咽）
チコ　「俺が…」
チコ　「俺が止めるべきだったんだ…」
チコ　「あのとき俺が、逃げたりしなければ…」
チコ　「乗り込む前なら拘束できたはずだ…。ＺＥＫＥ(ジーク)に乗り込ませずに俺が止めれば、彼女は死なずに済んだ…」
スネーク　「パスは銃を持っていた。専門的な訓練も受けていただろう」
スネーク　「自分を責めるな。丸腰のお前には止められなかったはずだ」
チコ　「でも、話だけでもしてたら…」
チコ　「俺が誰にも言わないって約束してたら、パスはあんな行動に出なかったはずだ…」

チコ　「なのに俺は、パスが工作員だったのがショックで、そのまま逃げてしまった…」
スネーク　「チコ…。お前が見たとき、パスは確かにZEKEを壊そうとしてたんだな？」
チコ　「え？　うん。そうだよ…」
スネーク　「それで、その直後にZEKEを起動させ、俺を従わせようとした」
スネーク　「何かがおかしい。自分が使う予定だったZEKEをなぜ破壊しようとする？」
チコ　「え…？」
スネーク　「工作員であるにしても、行動に一貫性がない。ZEKEを破壊したいなら破壊して逃げればいい」
スネーク　「逆に、ZEKEを奪って利用するのが目的なら、ZEKEを壊そうとする動機がない」
チコ　「それは…わからないけど…」
スネーク　「チコに見られたことで方針を変えたのか？　解せないな…」

●パスの行動の謎

チコ　「…もしかしたら、パスはCIPHERを裏切るつもりだったのかな」
チコ　「ZEKEがなければスネークを脅すこともできなくなる」
スネーク　「それなら最初から全てを話せば済むことだ。ZEKEを破壊する必要は…」（動揺を隠して）
チコ　「それはそうだけど…」
チコ　「でも、あの日は平和の日の前日だった。パスはバンドで歌うことになってたし、すごく楽しみにしてた」
チコ　「例えば…。裏切るつもりはなかったにしても、決行を遅らせたかったとか…」
スネーク　「チコ…」（テープの事を言おうかと迷う）
チコ　「だったら…俺があのとき逃げなければ…」
チコ　「話をして…誰にも言わないって約束してれば…」
スネーク　「チコ、あのときにそんな判断はできない。その状況なら、言わなければ俺たちに危害が及ぶと考えるべきだ」
チコ　「そうだけど…」
スネーク　「それに、パスが死んだと決まったわけじゃない」

スネーク「彼女は海に投げ出された。ダイバーの装備もしていた」
チコ「うん…」
スネーク「チコ、過去を悔いるより未来に希望を持て」
スネーク「過去はどうにもできないが、未来はお前次第だ」
チコ「…わかった」（静かに力を込めて）

■ミッション情報

●幽霊を天国に

チコ「幽霊（ファンタズマ）ってのは、死んだ人の魂（エスピリトゥ）が天国（シエロ）に行けずに彷徨っている状態だ」
チコ「いろんな解釈はあるけど、俺はそう考えてる」
チコ「幽霊（ファンタズマ）がこの世に留まっているのには理由があるんだ」
チコ「それが誰かへの強い恨みとかだったりすると、人間に危害を加える可能性もあるかもしれない」
チコ「わかってると思うけど、幽霊（ファンタズマ）には銃もCQCも効かない」
チコ「物理的な存在じゃないから、障害物だって通り抜ける」
チコ「でも、この世に留まっている理由さえなくしてやれば、幽霊（ファンタズマ）だって天国（シエロ）に行ってくれるはずさ」
チコ「それには、言葉の力が効くらしいぜ。CO-OPS通信で話しかけてみるといい」

●心霊写真

チコ「幽霊（ファンタズマ）は必ずしも目に見えるとは限らない」
チコ「何も見えないのに音だけは聞こえる…そんなときは幽霊（ファンタズマ）がいると思って間違いないね」
チコ「そういうときがあったら、写真を撮ってみるといい。きっと何かが写ってるはずさ」
チコ「え？　どうして目に見えないのに写真に写るのかって？」
チコ「そんなこと、俺に言われてもわかんないけど…」
チコ「うーん…もしかしたら、幽霊（ファンタズマ）は人間の心を惑わすんじゃないかな？」
チコ「本当はそこにいるのに、人間の心に働きかけて、見えていないと思い込ませるんだ」
チコ「でもカメラには心がないから、ちゃんと写

るってわけ」

チコ「そうだよ！　きっとそうだ！」（一人で納得）

●カメラのピント

チコ「スネークのカメラはレンジファインダー型なんだよな」

チコ「レンジファインダーカメラは、小さいのにちゃんとピント合わせができるんだって、父さん（ミ・ピエホ）が言ってた」

チコ「それにシャッターを切ったときのブレが少ないんだって」

チコ「ピントを合わせるには、ファインダーの中で二重になった像が、ぴったり重なるようにすればいい」

チコ「でも、あんたならピントを合わせるなんて手が勝手にやってくれるだろ？」

チコ「だから、被写体をしっかり捉えることだけを考えればいいさ」

チコ「なにせ、写真はタイミングだからな」（スネークの受け売り）

「ヒューイ」ブリーフィングファイル

■冷戦と核開発競争

●マンハッタン計画

スネーク「博士。あんたの核に対する感情は、他の研究者とは少し違っているように思える」
ヒューイ「どうして?」(そう思う)
スネーク「あの、コールドマンとの会話を聞いていればな」(誰でもそう思う)
ヒューイ「…僕の父がマンハッタン計画に参画していたことは話したね。計画のことは?」
スネーク「概要はな。核時代の口火を切った計画だ」
ヒューイ「その通り。多数のノーベル賞受賞者を始めとして、20世紀を代表する頭脳を結集し、1940年代当時の額で約20億ドルもの費用を投じた巨大プロジェクトだよ」
ヒューイ「計画は1945年7月16日、アラモゴードでの原爆実験をもって成功裏に終わった」
スネーク「半月後に続く実戦投入と共にな」
スネーク「博士?」
ヒューイ「…僕は、歩けない」
スネーク「うん?」(突然なにを)
ヒューイ「僕は生まれたときから歩けない」
スネーク「それと親父さんが計画に関わっていたことに、何か関係が?」
ヒューイ「父は、研究の過程で相当な量の放射線に被曝している。染色体の異常は…それと無関係ではないと思っている」
スネーク「…」(そうなのか)
ヒューイ「…僕は」
スネーク「ん?」
ヒューイ「僕はだからこそ、核兵器を単なるダモクレスの剣にしたくはなかった。戦争に対する抑止力として、確かな存在意義を与えたかった」
スネーク「…博士」
ヒューイ「彼を、コールドマンを止めなければ。何としても」

・広島、長崎

ヒューイ「1945年8月6日、広島。9日、長崎…」
スネーク「日本に対する原爆攻撃、だな」
ヒューイ「父は、いつも仕事ばかりの人だった。休日、

一緒に出かけた記憶もない。でもそれは家族のためなんだと、僕も幼いなりにそう理解して父を尊敬していた」

ヒューイ　「母にもよく聞かされていたよ。『お前の父さんは、素晴らしい科学者よ。たくさんのアメリカの若者を、死の恐怖から救ったの』」

ヒューイ　「『お前は父さんを誇りに思いなさい』」

スネーク　「原爆の投下があの大戦を終結させたという考え方もある…」

ヒューイ　「だけど小学5年生の時、クラスに日本人の転校生がやってきた。その子が見せてくれたのは、広島の被爆後を記録した写真集だ」

ヒューイ　「自分の目を疑ったよ」

ヒューイ　「当時人口35万人の大都市が、一面の焼け野原へと変わり果てていた。たった1発の原爆のために」

ヒューイ　「木造建築は根こそぎ吹き飛ばされ、焼け落ち…」

ヒューイ　「僅かに残っているのは鉄筋ビルの骨組みだけ」

ヒューイ　「建物ばかりじゃない」

ヒューイ　「道ばたに放置された黒焦げの遺体、全身に重度の熱傷を負った被爆者…」

ヒューイ　「原爆投下から数ヶ月の間に、広島では14万人以上、長崎でも7万人以上の人が亡くなったそうだ」

ヒューイ　「それからずっと、父とは口をきいていない。顔を見るのも嫌だった」

スネーク　「気持ちは判る、博士。だが父親は父親だ」（自らも被爆体験を持つので）

ヒューイ　「父が開発に参加していなければ、僕の身体はこんなじゃなかったかもしれない。僕の研究テーマも違ってたかもしれない」

ヒューイ　「僕はもっと自由になれたかもしれない」

スネーク　「…」（何を言っても無駄か）

●キューバ危機

ヒューイ　「世界は一度核戦争の瀬戸際まで突き進んだことがある」

スネーク　「カリブ海の対岸（キューバ）で、だな」

ヒューイ　「僕は当時17歳、飛び級で入学したＭＩＴの2年生（ソフモア）だった。毎日の報道に、ある種の白けを禁じ得なかった覚えがある」

ヒューイ　「核抑止の概念が正しく理解されていれば、

恐れる必要が無いことは明白だったからね」

スネーク「あるいはあえて恐怖を煽ったか」

ヒューイ「国防予算獲得の便法として…かい？　ふっ、あり得る話だな」

ヒューイ「だけどもしそうなら、当てが外れたとも言える」

スネーク「事件後、東西間で緊張緩和（デタント）が進んだからな」

ヒューイ「コールドマンは、今度は本当に撃とうとしている。一度核の火を解き放てば、抑止のくびきは意味を失う」

ヒューイ「人々は死に、街は燃える」

ヒューイ「取り返しの付かない結果になる前に、彼を阻止しなくては」

●宇宙競争と冷戦核競争

スネーク「これまでずっと核の研究を？」

ヒューイ「そんなことはない。僕は元々、航空宇宙工学を目指していたんだ」

ヒューイ「スプートニク・ショックは僕にとってむしろ、いい意味で衝撃だった」

ヒューイ「科学が戦争のために使われた時代は終わり、これからは素晴らしい宇宙時代が切り拓かれるんだと思ったものさ」

ヒューイ「飛び級でマサチューセッツ工科大学（MIT）に入った年にガガーリンが宇宙を飛び、期待はますます高まった」

ヒューイ「その頃にはもう、宇宙開発は冷戦の一面であることもわかってたけどね…」（自嘲）

スネーク「アメリカはソ連にアドバンテージを取られて必死だった」

ヒューイ「そうだ。でも、僕にとってはいい時代だった」

ヒューイ「僕はアメリカ航空宇宙局（NASA）に入り、好きなことを研究できた。国家の威信をかけた事業だ。予算もたっぷりあった」

ヒューイ「ロケットに核弾頭を積めば大陸間弾道ミサイル（ICBM）になることはわかっていたけど、あまり意識することもなかった」

ヒューイ「でもそんな時代も長くは続かなかった。宇宙開発競争と核競争は膨大な予算を必要とした」

ヒューイ「月面着陸でアメリカはソ連に勝利したけれど、そこまでだった」

スネーク「緊張緩和（デタント）だな」

ヒューイ「そうだ。その結果、NASAの予算は大幅に減少した」

ヒューイ「父が核の専門家だったこともあって、僕はより明確な抑止力…ミサイルの方に回された」

ヒューイ「NASAで僕は、月面探査用の歩行システムを研究していたんだ。月面もタイヤで走るには向かないからね」

ヒューイ「そしてそこにコールドマンが目をつけた」

●冷戦と平和

ヒューイ「しかし…冷戦とは文字どおり戦争だったのか、あるいは平和だったのか…」

ヒューイ「正直なところ、僕にはわからないよ」

スネーク「博士…？」（自分の世界に入り始めたヒューイを訝しむ）

ヒューイ「世間では冷たい戦争などと言われていた。でも僕は違うと思った」

ヒューイ「確かに核兵器は増え、威力を増し、米ソは何十回でも人類を滅ぼせるほどの力を手にした」

ヒューイ「だけど実際にそれで人が殺されたわけじゃない。もちろん小規模な紛争や、代理戦争のようなものはあったけど…」

ヒューイ「核抑止によって世界規模の大戦は回避されて、それ以前に比べて圧倒的な平和が訪れたんだ」

ヒューイ「それに、両陣営の競争によって宇宙開発が進んだのは素晴らしいことだ。そうは思わないか？」

スネーク「いや…。宇宙開発を急ぐ必要はなかった…」

スネーク「宇宙に行くのは人類の夢だったかもしれない。だが無理な競争は犠牲を生んだ」

ヒューイ「…そうかもしれない。宇宙開発機関は確かに全てを公表しているわけではない…」

スネーク「核開発にしてもそうだ。核実験で民間人の死者や多くの被曝者が出ている」

ヒューイ「その通りだ…」（自分も被害者の一人でもあるので）

ヒューイ「そして今回の事件…」

ヒューイ「僕が守ろうとしていた平和が一体なんなのか、だんだんわからなくなってきたよ…」

■核抑止

●核抑止理論

ヒューイ　「仮定の話と思って聞いてくれ。もしも、君のクローン人間を作るとして…」

スネーク　「クローン？　パラメディックもそんなことを言ってたが、人間のクローンなんてＳＦの話だろう」

ヒューイ　「仮定だよ、だから。じゃあクローンじゃなくていい。君、子供は？」

スネーク　「いない」

ヒューイ　「結婚は？」

スネーク　「…そんなものに囚われたことはない」

ヒューイ　「じゃあこれも仮定だ」

ヒューイ　「君の遺伝子(ジーン)を引き継いだ息子がいたとしよう。その息子が君と全く同じ戦闘能力を持っていたら、君は戦いを挑むか？」

スネーク　「…フム。うぬぼれで言うわけじゃないが、そいつとの戦闘は避けたい。命の保障がない」

ヒューイ　「だろうね、pupa5000 の戦闘パターンをあっという間に出し抜いた君だ」

スネーク　「あれは博士のアドバイスがあったからだ」

ヒューイ　「聞いただけで出来るようになるなら、誰も苦労しない」

ヒューイ　「君はきっと生まれついての兵士なんだ。うーん、ソルジャー遺伝子とでもいうか、戦闘に適した遺伝子を持って生まれて来たんだろう」

スネーク　「…戦闘に適した遺伝子？」（おいおい）

スネーク　「いくら研究が進んでるからって、何でも遺伝子のせいにするのはどうだ」

ヒューイ　「遺伝子のせいにする…おかしなことかい？」

スネーク　「…なに？」

ヒューイ　「僕の生まれつきの器質に遺伝子は全く関係ないとでもいうのか？」（わずかにエキサイトする）

スネーク　「それはわからないが…」

ヒューイ　「…いいかい、同じ戦闘力の相手に対して君が抱く恐れ」（落ち着く）

ヒューイ　「…これを核戦略レベルまで押しひろげたのが、核抑止とよばれる概念だ」

ヒューイ「致命的な破壊力を持つ核兵器を互いに整備することで、共倒れを避けようとして核戦争が回避される…という考え方だよ」
スネーク「考え方としては、言っちゃ何だがありきたりだな」
ヒューイ「その通り。シンプルな原則だ」
ヒューイ「だがそのシンプルさ故、正しく機能するかどうかは扱う人間次第だ」
ヒューイ「その意味で、今僕らは抑止論の機能不全を目前にしようとしているんだ」
スネーク「コールドマン…」
ヒューイ「そうだ。核抑止を死なせないでくれ。頼む、スネーク」

・核テロリズム

ヒューイ「核抑止は、国家間紛争での核兵器使用を抑制する。しかし、それ以外ではどうだろう?」
スネーク「それ以外?」
ヒューイ「近年、世界的にテロが激しさを増している。分離独立運動から極左破壊活動に至るまでね」
ヒューイ「もし核兵器が、そんなテロリストの手に落ちたらどうなるだろうか?」
ヒューイ「国家ではない、つまり決まった土地を持たない彼らが核攻撃を受ける可能性は低い。すなわち核攻撃を恐れる理由がない」
ヒューイ「ということは逆に、敵対する国家組織への核攻撃をためらう理由もない」
スネーク「テログループ相手じゃいくら大陸間弾道ミサイル(ICBM)や戦略爆撃機を揃えても使いどころがないのは確かだ」
ヒューイ「だろう? もちろん今はまだ仮定の話だ」
ヒューイ「核兵器は厳重に管理されているから、そうそうテロ組織に流出したりはしない」
ヒューイ「だがいつか『核テロリズム』という命題が核抑止論を死文化させる時代がくるだろう」
スネーク「核テロリズム…なるほどな」

●核ミサイルによる被害

ヒューイ「スネーク、どうしよう? もし、ピースウォーカーの核が、マザーベースへ発射されたら…」
スネーク「落ち着け。それを防ぐために、各員全力を挙げてるんだ」

ヒューイ「だって…ピースウォーカーのミサイル弾頭は１Ｍｔ級（クラス）なんだよ。火球だけでも直径１．５ｋｍを超える」
ヒューイ「強力な熱線で、爆心近くの物体は蒸発してしまう。それに時速数１００キロの爆風。火災。そして…」
スネーク「初期核放射による大量被曝、か？」
ヒューイ「そうさ。誰一人、生き残れやしない」
スネーク「そんなことはわかってる」
スネーク「いいか博士。あれはお前が作った兵器だ。お前が一番、その威力を知っているはずだ」
スネーク「まずは冷静に、科学的に被害を見積もってくれ。核爆発ともなれば、事は俺達だけの問題じゃなくなる」
ヒューイ「そうだね…。ごめん、僕としたことが取り乱したよ」
ヒューイ「さっきも言った通り、マザーベースは全滅するだろう。周囲の船舶も巻き込まれる恐れがある。警告しておく必要があるだろうね」
ヒューイ「それと、厄介なのが放射性降下物（フォールアウト）だ」
スネーク「『死の灰（フォールアウト）』…」

ヒューイ「海上で爆発した場合、陸上爆発時より粒子が細かくなる分、死の灰は風に乗って広範囲に運ばれる」
ヒューイ「海水に含まれていた塩分が核となって雲ができ、死の灰を含む雨を風下に降らせる…」
スネーク「ああ、身をもって味わった」
ヒューイ「ビキニ環礁で？　確かに１９５４年の実験（キャッスル・ブラボー）では、風下５００ｋｍにわたって死の灰が降り注いだ。多くの住民や船舶が被曝したそうだ」
ヒューイ「ピースウォーカーの核弾頭は、そこまで大きい威力ではないけど、降下条件は気象によっても大きく左右される。甘く見積もっちゃだめだ」
スネーク「…貿易風に乗ったとすれば、その風下はコスタリカだ」
ヒューイ「コールドマンは『人足が増える』なんて悠長なことを言ってたけど、そんなものじゃない。核への認識が甘すぎるんだ」
ヒューイ「高濃度の死の灰を含む雨に打たれたら、外部被曝だけでも多くの死者が出るだろう。

雨は土壌に染みこみ、飲み水や作物も汚染される」

ヒューイ「それを口に入れてしまったら、今度は内部被曝が待っている。ストロンチウム90やセシウム137の半減期は30年前後。影響は一生続く」

ヒューイ「白血病、白内障、皮膚炎、癌…生殖能力にも影響が出る」

スネーク「……そうだな」

ヒューイ「第二次大戦から30年近く経つけど、未だに原爆症で苦しむ人たちが大勢いる」

ヒューイ「コールドマンの『実証実験』とやらのために、そんな人を増やしていいわけがない」

ヒューイ「…矛盾して聞こえるかもしれないけど、僕がピースウォーカーを作ったのは、二度とそんなことが起きないためだったのに」

スネーク「わかった、博士。何としてもピースウォーカーを止めよう」

●メタルギアへの核搭載

スネーク「メタルギアへの核搭載…よく協力してくれたな」

ヒューイ「今さらどうしたんだ」

スネーク「もちろん、こちらとしては助かるが…いいのか？」

スネーク「自衛のためとは言え、核兵器であることに違いはない」

スネーク「本質的には、ピースウォーカーと同じなんだ、おまえが嫌っていた」

ヒューイ「…そこだよ」

スネーク「そこ？」

ヒューイ「君は隠し立てせずに、事実を言う。そこが、CIAの連中とは違うところさ」

ヒューイ「最初は猫なで声で近づいて、いざとなれば手のひらを返すような連中とはね」

スネーク「…本当の事を言っているだけだ」

ヒューイ「そんな君なら、馬鹿な使い方はしないだろう…そう思えるんだよ」

ヒューイ「有り体に言えば、君を信じてるってことさ」

スネーク「買いかぶりすぎだ」

ヒューイ「そうかい？　それに、二足歩行の技術は、兵器開発のためだけにあるわけじゃない」

ヒューイ「小型化できれば、ロボットや義足にも応用

が利く。そうなれば、僕も自由に歩けるようになる」

スネーク「ああ、そうだな」

ヒューイ「僕は自分の力で、自分の運命に打ち克ちたいんだ」

ヒューイ「そのために、君の力を利用させてもらう…と言ったら、怒るかい？」

スネーク「いや、健全な取引だ」

ヒューイ「ありがとう」

ヒューイ「もちろん、人は変わるものさ…でも、僕は信じているよ」

ヒューイ「スネーク、君が今のままの君であることをね」

■ピースウォーカー

●ピースウォーカー計画

ヒューイ「カリブ海沿いに新型核兵器を配備することで、中米に堅固な核抑止を実現する…それがピースウォーカー計画だ」

ヒューイ「同時にそれは、その新型核兵器の名前でもある」

スネーク「核兵器の名前に平和（PEACE）か。カズが嘆く顔が目に浮かぶ」

スネーク「そもそも、なぜその核兵器に脚が必要なんだ」

ヒューイ「そこが〝ウォーカー〟たるゆえんだよ」

ヒューイ「自力で移動し、どこからでも報復核が撃てる無人兵器…それがピースウォーカーの存在意義なんだ」

●移動型核兵器

ヒューイ「ピースウォーカーが移動型核兵器である理由…それは、核抑止の力を最大限に高めるためだ」

スネーク「どういうことだ」

ヒューイ「必要なら常に移動し、敵に居場所をつかませない…そうすることで、ピースウォーカーは敵の先制攻撃から逃れられる」

スネーク「つまり、核報復というカードを持ち続けられる、ということか」

ヒューイ「中南米には密林が多い。多少機体が大きくても、隠れる場所はいくらでもある…」

スネーク「ミサイル原潜の陸上版、というわけか」

ヒューイ「それと、移動する目的は、もう一つある。ピースウォーカーは1Mt級（クラス）の核ミサイル

スウォーカーの出番というわけだ」
スネーク「敵地まで歩いて行き、水爆を抱えて自爆、か」

・ツァーリ・ボンバ

ヒューイ「これまで実際に起爆した中で世界最大の核爆弾が、ソ連のＲＤＳ‐２２０、通称『爆弾の皇帝』だ」
ヒューイ「核出力は約57メガトンと推定されている。第二次大戦を通じて使われた爆発物全てを合わせたよりも、10倍大きな爆発力になる」
ヒューイ「爆発実験は61年10月30日、ノヴァヤゼムリヤ上空。爆発で生じた火球の直径は4キロを超えたと考えられている」
ヒューイ「まるでミニチュアの太陽じゃないか」
ヒューイ「爆発は爆心から１０００キロ以上離れたフィンランドでも目撃され、窓ガラスが割れたという証言もある。衝撃波は、地球を3周したそうだよ」
スネーク「地球を3周？」
ヒューイ「その破壊力を超える巨大な水爆が、ピースウォーカーには搭載されている」
ヒューイ「敵国領内に潜入、潜伏し、敵からの核攻撃を積んでいるんだけど」
ヒューイ「他に自爆機能も持ってるんだ」

・自爆機能

スネーク「ピースウォーカーになぜ自爆機能が必要なんだ？」
ヒューイ「スネーク、君も見たろう？　ピースウォーカーの頭部にあった、あの禍々しい球体を」
スネーク「ああ」
ヒューイ「あれは水爆なんだ」
スネーク「水爆⁉　あの巨大なボールが、水爆だって言うのか。いったい、どれだけの破壊力が……」
ヒューイ「馬鹿馬鹿しいだろう？　オーバーキルも甚だしい。戦略的な価値を考えるなら、もっと小さな爆弾で十分だ」
ヒューイ「ソ連の〝ツァーリ・ボンバ〟に対抗したい、というだけの爆弾と言っていい」
スネーク「お互い競争の歯止めが利かなくなったんだな」
ヒューイ「進化の袋小路…サーベルタイガー状態さ」
ヒューイ「もちろん、そんな大きな爆弾はミサイルに積めない。爆撃機も無理だ。そこで、ピー

があったときには自爆による報復を行うために。そしてその移動手段には…」

ヒューイ「…僕の研究が…」

ヒューイ「…スネーク。ヤツを止めてくれ」

ヒューイ「僕の夢を叶えてくれるはずだったあの脚が、核抑止の柵を跳び越えてしまう前に」

ヒューイ「その為の武器装備は、僕が全力を注いで開発する」

スネーク「いいとも。引き受けた（ディールだ）」

●ピースウォーカーの人工知能

スネーク「なぜ、ピースウォーカーに人工知能（AI）を積むことになったんだ?」

ヒューイ「一つには、人を乗せられないからだ。ピースウォーカーには、敵地まで移動して、自爆するという機能があるからね」

ヒューイ「自爆する兵器に、人は乗せられないだろう? その代わりに、AIに操縦させるんだ」

スネーク「妙なところで人道的なんだな」

ヒューイ「そもそも、ピースウォーカーは二足歩行兵器だ。歩行時の振動は想像を絶する。とても人間が耐えられるレベルじゃない」

ヒューイ「それに核ミサイルを撃つなら、リアルタイムでの弾道計算が必要になるだろう? 常に移動するんだからね」

スネーク「待ってくれ。それなら、単に高性能のコンピュータで足りるはずだ。知能までは必要ないだろう」

ヒューイ「いい指摘だ、スネーク」

ヒューイ「人工知能（AI）を使う真の目的…それは、人工知能（AI）に核報復の判断をさせるところにあるんだ」

ヒューイ「それによって、完全なる相互確証破壊（MAD）を実現する」

スネーク「この前言っていた話だな。機械同士の戦争が望みか?」

ヒューイ「もちろん、こちらから核を撃つことはない。反撃限定のシステムだ」

ヒューイ「核戦争を始めるなんて非論理的な決定は、政治家以外にできないからね」

ヒューイ「その代わり、もし核を撃たれたら確実にAIが撃ち返す」

ヒューイ「だから相手も撃てない。その確証をAIが

与えてくれるんだ」

スネーク「だからと言って、指令なしに核を撃つなど」

ヒューイ「ミサイル原潜の艦長も、地上との通信が途絶えた場合には、自らの権限で核を撃つことができる。それと同じだよ」

スネーク「原潜でも、艦長単独では決定できないはずだ。この場合に限っては、上官不服従すら許されていると聞く」

ヒューイ「それは人間が不完全だからだ…コールドマンはそう考えているのさ」

スネーク「機械だから間違わない、とでも言うのか。それは迷信だ。いや、信仰に近い」

ヒューイ「ただの機械に核発射を任せるわけにはいかない。だからこその人工知能(AI)なんだ」

ヒューイ「報復核の発射を決めるには、高度な状況判断が必要だ。戦況だけでなく、世界情勢だって把握しなくちゃいけない」

ヒューイ「情報が揃わないかも知れないから、推測も必要だ」

スネーク「AIになら、それが可能だと?」

ヒューイ「ああ。少なくともストレンジラブは、そう考えている」

●ピースウォーカーと戦うなら

ヒューイ「ピースウォーカーには近接戦闘用の武器類がいくつも搭載されてる。敵地まで歩いて行って自爆するって計画もあるからね」

スネーク「はた迷惑な話だ。で、どんな兵装が?」

ヒューイ「まずは近づいたものを焼き払う火炎放射器。後ろにも放射口があるから注意してくれ」

ヒューイ「それからSマイン。これはクラスター爆弾みたいなものだ。脚部ハッチから放出されて四散する」

ヒューイ「ハッチが開くのを見逃さずに逃げてくれ」

ヒューイ「最後にロケット弾。これはかなり遠くまで届くから注意が必要だ」

ヒューイ「逆にあまり近くには撃てないけど、近づきすぎると火炎放射器もあるし…」

ヒューイ「それに、歩兵相手なら脚自体も武器になる。脚で直接攻撃することも可能だ」

スネーク「厄介だな…」

ヒューイ「でも、ピースウォーカーは未完成だ。レプタイルポッドだけでは単純な行動しかでき

ないし、動きにクセもある」

ヒューイ「攻撃の前の動作をよく見ていれば、次に何をしてくるかわかるようになるはずだ」

・調整後のピースウォーカー

ヒューイ「スネーク！　お願いだ、ピースウォーカーに核を撃たせないでくれ！」

スネーク「落ち着け。それより、どうやって倒せばいい⁉」

ヒューイ「ママルとアセンブルされたことで、思考パターンや機動性も向上しているはずだ。一体どうすればいいのか、僕にも…」

ヒューイ「Sマインやロケット弾、火炎放射器なんかの武器は変わらないけど、それ以上は…」

ヒューイ「相手の攻撃をよく見て、攻撃の種類と予備動作を把握するしかない」

スネーク「やってみよう。もう時間がない」

ヒューイ「役に立たなくてごめん。頑張ってくれ、スネーク！」

●二足歩行の必要性

スネーク「それにしても、ピースウォーカーが脚で移動する必要はないんじゃないか？　キャタピラで十分だと思うが」

ヒューイ「それがダメなんだ。知っての通り、中米の地形は複雑で険しい。特にコスタリカ、カリブ海沿岸はね」

ヒューイ「密林・湿地・山岳…どんな険しい地形でも走破できるのは、結局脚以外にないんだよ」

スネーク「湿地のぬかるみは、脚で歩くにも大変だと思うがな」

ヒューイ「もちろん、苦労はしたさ。コスタリカを実験場に選んだのは、あらゆる地形でテストできるからでもあるんだ」

●偽りの「平和歩行計画（コールドマン）」

スネーク「CIAの言う『平和歩行計画（ピースウォーカー）』…本当に信じていたのか」

ヒューイ「ああ。信じていたよ。…いや、本当は信じたかっただけなのかも」

スネーク「どういうことだ」

ヒューイ「コールドマンはこう言った。ピースウォーカーは真の核抑止を実現する、平和のための兵器だ。中米情勢を安定させるための重しにもなる…」

ヒューイ「『君の造った核兵器は決して使われず、永遠に君臨する平和の象徴（イコン）になるのだ』とね」

ヒューイ「そしてその実現のためには、僕の二足歩行技術が必要だ…そう言われた時、正直嬉しかった」

スネーク「嬉しかった？」

ヒューイ「だってそうだろう？　僕は学会の連中にずっと馬鹿にされてきた。二足歩行なんて非現実的だ、意味がないって」

ヒューイ「初めて自分の研究が認められたんだ…嬉しくないわけがない…それに」

ヒューイ「これで僕は、父を超えることができる。平和のための核を作ることで。…そう思ったんだ」

スネーク「だが、コールドマンは実際に核を撃つつもりだ」

ヒューイ「ああ。考えてみれば、当たり前の話さ。「無人システムなら核を撃てる」…そう実証しなければ、この計画は認められないんだからね」

・本物の核を撃つ理由

スネーク「コールドマンはなぜ核を撃とうと？　人工知能（AI）による報復機能を証明するだけなら核弾頭を搭載する必要はないはずだ」

ヒューイ「そうだ。弾頭を積まずに、ミサイル本体だけを飛ばしても、報復機能の実証は可能だ。僕も最初はそう聞いていた」

ヒューイ「だけどあいつは、模擬弾では意味がないって…実際に核を撃った、その事実こそが仮想敵への抑止力になるんだと」

ヒューイ「本物の核を撃つことで本部（ラングレー）との交渉を有利に進める。それもあいつの目的なんだ」

●ソ連の二足歩行研究

ヒューイ「ピースウォーカーに使われている二足歩行技術は、東側の研究を参考にしている」

ヒューイ「…いや、正直に言おう。基礎アイデアの大半は盗用なんだ」

スネーク「東側…二足歩行…もしや、グラーニン？」

ヒューイ「彼を知っているのか？」

スネーク「ああ。ソ連の研究所で会った。ちょっとした世話にもなった」

ヒューイ「会ったって、君は一体…？」

スネーク　「ソ連の兵器を数多く生み出した、グラーニン設計局の局長…奴の研究なら、合点がいく」

ヒューイ　「当時僕の研究は、壁にぶつかっていてね…グラーニンのアイデアは、そのほとんどを解決してくれたんだ」

スネーク　「他人の研究結果を参考に自分の研究を発展させるのは、おかしくはないんじゃないのか？」

ヒューイ　「出典を明らかにすればね。だが、それはできない相談だった」

ヒューイ　「彼の研究は、最高レベルの軍事機密だ。それも敵国の」

スネーク　「だから、黙って使ったのか」

ヒューイ　「僕は学会の連中を見返してやりたかったんだ！　…僕を馬鹿にした、あの連中を」

ヒューイ　「でも、自業自得だね。その弱みをコールドマンに握られた。ピースウォーカーの研究をやめるなら、盗用をバラすって」

スネーク・グラーニン　「はめられたな、博士」

スネーク　「グラーニンの研究は、どうやって？」（手に入れたんだ）

ヒューイ　「それも、コールドマンだ。ＣＩＡの情報網を使って手に入れたらしい」

スネーク　「盗み出してきた情報を与えておいて、それをネタに揺するとはな…」

ヒューイ　「それがグラーニンの研究だと、僕にはすぐわかった。彼とはそれまでも、何度か手紙をやり取りしていたからね」

スネーク　「手紙を？」

ヒューイ　「似た研究をしている同士でね…二足歩行研究が理解してもらえないって、彼も嘆いてたから」

スネーク　「そうか…奴が言っていた『アメリカの友人』とは、おまえのことだったんだな」

ヒューイ　「もちろん、手紙では技術そのものに一切触れていなかった。ただ、一度こんな事が書いてあったんだ」

ヒューイ　「『もし私の身に万一の事があれば、君にこの研究を託そう。科学の何たるかも知らん連中に渡すより有益だ』とね」

スネーク　「奴らしいな」

ヒューイ　「その彼の研究が渡ってきた。となれば、グラーニンの運命にも想像がつく」
ヒューイ　「彼の遺志を継ぐことも、僕の務めなんじゃないか…そうも思ったんだ。それに」
スネーク　「何だ」
ヒューイ　「グラーニンの技術と、僕の研究とが融合すれば、それも一つの東西融和と言えるんじゃないかな」
ヒューイ　「アポロとソユーズのドッキング計画みたいにさ」
スネーク　「決して表には出ない歴史だ。それに、黙って使う理由にはならん」
ヒューイ　「…そうだな。その通りだ。僕は卑怯者だよ」
ヒューイ　「真実を言い出す勇気が、ずっとなかった」
ヒューイ　「それをごまかそうと、言い訳ばかり探している」
スネーク　「今、話しただろう」
ヒューイ　「スネーク…?」
スネーク　「何もかも、ちゃんと話した。おまえはもう、卑怯者じゃない」

●「メタルギア」

ヒューイ　「〝メタルギア〟、か…」
スネーク　「どうした、急に」
ヒューイ　「僕がピースウォーカーの説明をした時に、君が呟いた言葉だよ。どういう意味なのかと思ってね」
スネーク　「そのままだ。『金属の歯車』…グラーニンが言っていた」
ヒューイ　「グラーニンが?」
スネーク　「自分の技術は、歩兵と兵器とをつなぐ、金属の歯車になる…奴はそう考えていたようだ」
ヒューイ　「いいね、それ」
ヒューイ　「『メタルギア』…いい響きだよ。『ピースウォーカー』なんて欺瞞に満ちた名前より、よほどいい」

●シャゴホッド

スネーク　「CIAから渡された資料に、シャゴホッドのデータはあったか?」
ヒューイ　「シャゴホッド?」
スネーク　「IRBMを射出する核搭載戦車だ。グラーニンのシステムと採用を争っていた」
ヒューイ　「ああ、あのロケット付きか。確か設計者は

ソコロフとか言う男で…ふふっ」

スネーク「何がおかしい」

ヒューイ「いや、シャゴホッドの資料に、グラーニンが分析を加えていたのを思い出してね」

ヒューイ「それはそれは悪し様に書いてあったよ。保守的だとか、下品だとか」

スネーク「だろうな」

ヒューイ「よほど腹を立てていたのか、ひどくインクが滲んでた。ただでさえ、向こうの紙は質が悪いのにね」

スネーク「…だろうな。それも、奴らしい」

ヒューイ「IRBMの射程を伸ばすために、戦車自体を時速500kmにまで加速する…」

ヒューイ「実に馬鹿馬鹿しくも、豪快な兵器だよ。戦車をロケットの1段目代わりに使うとはね。ソビエトらしい」

ヒューイ「実は、ピューパの開発にあたっては、シャゴホッドを参考にさせてもらってるんだ」

スネーク「あのホバー兵器か。それも盗用か？」

ヒューイ「失礼だな。参考にしたのはコンセプトで、技術はオリジナルさ」

ヒューイ「もっともホバーじゃ、中米の地形に完璧には対応できなかったけどね。所詮、力押しの兵器だよ」

スネーク「だが、シャゴホッドが脅威だったのは確かだ。意外と小回りも利いたし、なかなか丈夫だった」

ヒューイ「詳しいんだな」

スネーク「奴には手を焼いた。忘れろと言うほうが無理だ」

ヒューイ「手を焼いた？　…じゃあ、シャゴホッドを倒したのも君だったのか？　驚いた。すごいんだな、君は」

スネーク「俺一人で倒したわけじゃない」

ヒューイ「いや、礼を言うよ。シャゴホッドが量産化されていたら、今この世界はなかったかも知れない」

ヒューイ「もっとも、今は核弾頭の小型化も進んだ。シャゴホッドのような加速戦車は、もう必要ないと思う」

スネーク「喜べんな。それだけ、どこからでも世界中に核が撃てるようになったってことだ」

●バシリスク

スネーク「チコはピースウォーカーのことを、バシリスコと呼んでいた」

ヒューイ「バシリスコ？　…ああ、スペイン語か」

ヒューイ「奇遇だね。僕らも最初、ピースウォーカーの本体（プラットフォーム）を、バシリスクって呼んでた」

スネーク「どうしてそんなコードネームに？」

ヒューイ「バシリスクっていうトカゲは、どんな地形でも歩ける。緊急時には立ち上がって、水の上すら二本脚で走り抜けるんだ」

ヒューイ「中米の全地形に対応するっていう、今回のプロジェクトにぴったりだろ？　それに、伝承さ」

スネーク「伝承？」

ヒューイ「伝承の中に出てくるバシリスクは、猛毒の持ち主だ。古代ローマの書物には、こんな話が伝わってる」

ヒューイ「騎士がバシリスクを槍で突き殺した。すると、バシリスクの毒が槍を伝わって、人間も馬も死んでしまった…」

ヒューイ「何かに似ていると思わないか？」

スネーク「…核抑止か」

ヒューイ「正解」

ヒューイ「殺そうとすれば自分も死ぬ。だから攻撃できない。僕はピースウォーカーを、そういう存在にしたかったんだ」

スネーク「人間がそんなに理性的だとは思えない」

スネーク「自分が死ぬとわかっていても…いや、わかっているからこそ、理解できない行動を取ることもある」

ヒューイ「そうかな。それこそ、僕には理解できないけどね」

●二つのＡＩポッド

ヒューイ「ピースウォーカーには二つのＡＩポッドがアセンブルされている」

ヒューイ「一つは僕が作ったレプタイルポッド。もう一つは、ストレンジラブが開発したママルポッドだ」

スネーク「どう違うんだ」

ヒューイ「レプタイルポッドは姿勢制御用のＡＩだ。こちらを破壊すれば、とりあえずピースウォーカーの動きは止まるはずだ」

ヒューイ「ママルポッドは、核報復の意志決定を担当している」
ヒューイ「反射運動と思考…言わば、脳幹や小脳と大脳の関係だ」
スネーク「となると、ザ・ボスの意志が宿っているのは…」
ヒューイ「ママルポッドになる」

・レプタイルポッド

ヒューイ「〝レプタイル〟は『爬虫類』って意味だ」
ヒューイ「脳の中で生命維持や反射を司る部分は、人間が遥か昔、爬虫類(レプタイル)だった頃に発達したものなんだ」
スネーク「爬虫類(レプタイル)だった…?」
ヒューイ「進化の段階の話さ。ポール・マクリーンという神経生化学者が唱えた説なんだ」
スネーク「はあ」
ヒューイ「爬虫類(レプタイル)脳は、脳幹と大脳基底核に相当する。実際のレプタイルポッドは、小脳の機能までカバーしているけどね」
スネーク「要するに、脳の奥深くってことだな」
ヒューイ「これは、ストレンジラブの命名なんだ」

・ママルポッド

ヒューイ「〝ママル〟は『哺乳類』のことだ。哺乳類(ママル)になってから発達した脳は、高度な精神活動を担当している」
スネーク「例えば?」
ヒューイ「知能・判断…それに、愛情も」
スネーク「なるほど、高度極まりない」
ヒューイ「場所で言うと、爬虫類(レプタイル)脳の外側にある部分だ。大脳皮質もここに含まれる」
ヒューイ「自分のポッドに〝ママル〟と名付けたのは、ストレンジラブの意気込みなんじゃないかな」
ヒューイ「単なる高機能のAIじゃなく、そこに精神を宿らせたい、って言うね」

●NORADへの情報伝達

ヒューイ「スネーク、君は合衆国の本土防空網についてどの位知ってる?」
スネーク「雲の上のことはそれほど詳しくない。NORADのレーダーがサンタを追尾していることくらいだな」
ヒューイ「ほう、君でも冗談言うんだな」
スネーク「ん、いや冗談じゃ…」

スネーク「本当だ、ＮＯＲＡＤはサンタを…」
スネーク「毎年、年末にはホットラインが…」
ヒューイ「判った、判ったよ」（笑う）
スネーク「…まさか」（小声で。本当にサンタを追尾していると信じていた）
スネーク「いないのか？　サンタ」

・今回の反省点

ヒューイ「さて、スネークボーイ。君も知っての通り、ＮＯＲＡＤにはサンタクロース追跡という重大な任務が課されている」
スネーク「はぁ…」（からかってやがる）
ヒューイ「だが彼らにはその他に、本来の、創設以来の任務がある」
ヒューイ「その為の機構が…今回コールドマンに利用された」（スネークをからかいはしたが、実のところ自分にも責任があるのでばつが悪い）
スネーク「…ピースウォーカーからの偽装データ送信のことか？」
ヒューイ「ＮＯＲＡＤの早期警戒システムはＤＳＰ衛星に搭載された赤外線センサーと、北米大陸の各地に設置された監視レーダー群から構成されている」
ヒューイ「警戒網から発されるワーニングはＮＯＲＡＤ（シャイアン・マウンテン）へ送られ、人間による情報評価が行われる」
ヒューイ「一方ピースウォーカーは自律的に報復行動を決断しなければならない」
ヒューイ「そこでＮＯＲＡＤと同じ情報が秘匿回線を通じて自動的に供給される仕組みになっている」
ヒューイ「その回線は、実験機のＡＩが下す報復判断を遠隔測定（テレメタリング）する目的にも使われていた」
ヒューイ「ピースウォーカーはこの仕組みを逆用して、演習スケジュールには無いタイミングで核ミサイル来襲の偽警報をＮＯＲＡＤに送り込んだんだ」
ヒューイ「システムの脆弱性対策に問題があったといわれれば反論の余地はない」
ヒューイ「でもＡＩにクラッキングさせるなんて全くの想定外だったからね。結果はご存じの通りだ」

■自分について

●電子タバコ

スネーク「博士、あんたが研究室で吸っていたのはなんだ？　煙草（シガレット）のようだが火を使ってなかったな」
ヒューイ「ああ、あれは僕が作った電気式の煙草だ。電子タバコとでもいうのかな」
スネーク「電子タバコ？」
ヒューイ「そう。フィルタの中の液体を霧状にして、その微粒子を吸っていたんだ」
スネーク「あれは霧だったのか」
ヒューイ「本当は普通の煙草を吸いたいんだけどあの部屋じゃね…」
ヒューイ「煙草の煙は精密機器にとって毒なんだ。回路の接触を邪魔したりするんだよ」
ヒューイ「でもあの霧ならただの水蒸気だから、タールのような物質を含まない」
ヒューイ「研究室で吸っても安心ってわけ」
スネーク「へえ」
ヒューイ「試してみる？」
スネーク「いや、俺は葉巻（シガー）でいい」
ヒューイ「でも…」
スネーク「代用品でごまかすのは好きじゃない」（ザ・ボスＡＩ）
ヒューイ「そう。でも喫煙は遅かれ早かれ世界的に非難されるようになる。自分にも他人にも害があるからね」
ヒューイ「電子タバコも悪くないと思うよ」
スネーク「ああ、その時になったら考えよう」

●遺伝的影響

スネーク「親父さん、マンハッタン計画に参加したって言ってたな」
ヒューイ「ああ」
スネーク「自分が歩けないのは、その影響だと？」
ヒューイ「…どうかな。いや、おそらくは違うんだろう」
ヒューイ「今のところ、親が放射線被曝していたからと言って、その子供に遺伝的な影響が出るという証拠は、見つかっていない」
ヒューイ「胎内被曝した場合は別として…疫学的にはね」
スネーク「それは、原爆傷害調査委員会（ABCC）のデータ？」
ヒューイ「ああ。原爆傷害調査委員会（ABCC）は戦後まもなく、被爆者の調査を始めた。そして、それは今

でも続いている」

スネーク「30年経った今でも…」

ヒューイ「放射線の影響は長期間続く。遺伝的影響の調査にしたって、一応の結論が出るまで、あと10年はかかるだろうね」

ヒューイ「確かにかつてない、大規模な調査だよ」

ヒューイ「だけど、本当に調査だけ。原爆傷害調査委員会(ABCC)は被爆者を呼んでは検査をしたけど、治療はしなかったんだ」

スネーク「そうか…彼らも…」（自分の体験と重ね合わせている）

ヒューイ「いずれにしても、僕は子供の頃から信じ込まされてきたんだ、父に…」

スネーク「親父さんなりに、説明に苦しんだ末なんじゃないのか」

ヒューイ「そうかも知れない。でもねスネーク」

ヒューイ「これはもう僕自身の問題なんだ。僕はこの核という存在と向き合って行くしかない。好む好まざるにかかわらず」

ヒューイ「そしてその成果が、間違った方向に使われようとしている。何としてでも阻止したい。協力してくれ、スネーク」

●マザーベースでの役割

ヒューイ「せっかくマザーベースへ来たんだ。ぜひ僕を研究開発部門に配属してくれ。役に立てると思う」

スネーク「ありがたい。カズも喜ぶだろう」

ヒューイ「資材や設計図の準備が整えば、二足歩行兵器の開発も始められるはずだ」

ヒューイ「僕の研究が、ピースウォーカーの阻止に少しでも役立つなら、こんなに嬉しいことはない」

■ストレンジラブ博士

●ストレンジラブとの出逢い

スネーク「ストレンジラブ博士もアメリカ航空宇宙局(NASA)にいたのか？」

ヒューイ「ああ。といっても、僕が入ってからしばらくして国防高等研究企画局(DARPA)に行ってしまったけれど」

スネーク「そしてコスタリカで再び共同で研究することになったわけか」

ヒューイ　「共同、というほどじゃないな。何度か打ち合わせはしたけど、研究自体は別々に行っていた」

ヒューイ　「ピースウォーカーに関しては、ストレンジラブ博士が大脳に当たるママルポッド、僕がそれ以外という棲み分けができてたしね」

スネーク　「あの手紙も研究に関する物か…？」

ヒューイ　「え？　いや、それは…」

ヒューイ　「そうだ。研究成果の報告さ」

スネーク　「研究成果？　ピースウォーカーに対抗するための情報はないのか？」

ヒューイ　「そ、そんなことは書いてないよ！」

ヒューイ　「とにかく、読むなよ！　絶対に読むなよ！」

・ストレンジラブへの手紙（手紙を見てから表示）

ヒューイ　「あの手紙、ストレンジラブに渡してくれたかい？」

スネーク　「…いや」

ヒューイ　「どうしてさ。大切な内容なんだ。ちゃんと渡してもらわないと」

スネーク　「すまん。とてもそんな機会がなくてな」

ヒューイ　「今度会ったら、必ず渡してくれよ」

スネーク　「あ、ああ」

スネーク　「あれなら渡さないほうがマシだと思うが…」（独り言）

ヒューイ　「スネーク！」

スネーク　「（びくっとして）な、なんだ？」

ヒューイ　「君、ひょっとしてあの手紙…読んだのかい？」

スネーク　「い、いや…」

ヒューイ　「読んだんだね⁉」

スネーク　「（気圧されて）どんな情報が作戦の成否を分けるかわからないだろう？　だから…」

ヒューイ　「読んだって言うのか、人の手紙を。僕は読むなって言ったのに！」

スネーク　「（小声で）いや…読むなって言われればなおさら…」

ヒューイ　「見損なったよスネーク‼　君がそんな人だったとはね。とんだ見込み違いだった」

スネーク　「…悪かった。しかし一体、あの博士のどこがいいんだ？」

ヒューイ　「君みたいな野蛮人にはわからないよ。人の手紙を盗み見るような輩にはね！」

スネーク　「（ムッとして）じゃあ、自分で渡せばいい

だろう」

ヒューイ「えっ⁉　あ、いやその、それは…無理だ…」

スネーク「前途多難だな、ヒューイ…」(ため息)

●『2001年宇宙の旅』

ヒューイ「『2001年宇宙の旅』という映画を知っているかい?」

スネーク「いや、知らないな」

ヒューイ「あれはいい映画だよ…宇宙の特撮(SFX)もすごいけど、AIの描写も出色だった」

スネーク「AIが?」(出てきたのか)

ヒューイ「ああ。HALって言うんだ。宇宙船を制御するAIだよ。物語上でも重要な役割を果たすんだ」

ヒューイ「ストレンジラブもこの映画が好きでね。彼女とコスタリカで再会した時の話はしたかな?」

スネーク「いや」

ヒューイ「彼女は男嫌いだろ?　NASA以来の再会だって言うのに、全然話が弾まなかったんだけど…HALの話をしたら、急に雄弁になってね」

ヒューイ「その語り口が、実に知的だったんだ。あの難解な映画への解釈、洞察、そしてAIについて語る熱意…」

ヒューイ「僕はまたもメロメロさ」

スネーク「ああ」(興味ない)

ヒューイ「彼女と僕とを橋渡ししてくれたHALに乾杯!　ってとこだね」

ヒューイ「君も彼女と『2001年』について話してみるといい。きっとわかると思うよ、彼女の素晴らしさが」

スネーク「素晴らしさね…」

ヒューイ「HALっていい名前だよね…」

■AI兵器の弱点

●ピューパ

ヒューイ「ピューパは圧搾空気を噴射することで機体後部を浮かせ、機動力を高めているんだ」

ヒューイ「推進にはキャタピラとブースターを組み合わせている」

ヒューイ「高速で突進するような動きは、ブースターによるものだ」

スネーク「ブースターを破壊すれば突進は防げる？」
ヒューイ「その通りだ」
ヒューイ「まあ、突進はホフクでピューパの下に潜り込めばかわせるだろうけど…」
ヒューイ「あ、それから、ピューパには電撃ユニットが装備されている」
ヒューイ「電撃を誘導するための、避雷針のようなものも搭載している」
スネーク「それは電撃を撃たれる前に壊してしまいたいところだな」
ヒューイ「ああ。あとは…ＡＩで動いているメカの共通点だけど、ＡＩを破壊すれば行動不能になる」
ヒューイ「ハッチをこじ開けて乗り込めば、ＡＩの記憶板を抜き取れる。そうなったらこっちのもんだ」
ヒューイ「記憶板は何かに再利用できるかもしれない。できそうならＡＩポッドへの乗り込みを試してみてくれ」
ヒューイ「とはいえ、まずはある程度ダメージを与えて動きを止めないと、乗り込むこともできない」
スネーク「わかった。まずは正攻法で攻めてみよう」

●クリサリス

ヒューイ「クリサリスは人間を乗せないことで、有人兵器では不可能な超高Ｇの機動を可能にしている」
ヒューイ「向こうが攻撃を仕掛けてくるときに反撃するのは難しいだろうな」
ヒューイ「それから、あいつはレールガンを搭載している」
スネーク「レールガン？」
ヒューイ「火薬の代わりに電磁力で砲弾を発射する武器さ」
スネーク「電子兵器か？」
ヒューイ「いや、砲弾自体は物理的なものだ」
ヒューイ「磁界に電流を流すと力が生じる。フレミング左手の法則さ。学校で習わなかったかい？」
スネーク「いや、知らないな」
ヒューイ「まあいい。とにかくレールガンは電磁力を使用している。発射前には電力をチャージ

しなくてはならない」
ヒューイ「チャージが始まったら回避行動を取ってくれ」
ヒューイ「ちなみに、AIを破壊すれば無力化できるというのはピューパと同じだ」
ヒューイ「ダメージが蓄積されれば、クリサリスは着陸するだろう」
ヒューイ「その隙にAIポッドに乗り込んでくれ」
ヒューイ「ぼやぼやしているとあいつは自己修復を始める。いいか、着陸したらすぐにポッドのハッチを撃つんだ」
スネーク「任せておけ」

●コクーン

ヒューイ「コクーンの設計は廃熱の処理に苦労したよ。設計者としては恥ずかしい話だけど、ラジエーターが弱点と言えるかもしれない」
ヒューイ「ラジエーター部分には装甲があまりないからね。装甲は廃熱の邪魔だったから…」
スネーク「それはどこにある？」
ヒューイ「ラジエーターは上部と下部に複数ある。詳しい場所は排気を見ればわかるはずだ」
ヒューイ「ただ、普段は上部ラジエーターは露出していない。まずは下部ラジエーターを狙うといいかもしれない」
ヒューイ「下部ラジエーターは機体の下に潜り込んで狙う手もあるけど、本体は上下に可動する。押しつぶされないようにね」
ヒューイ「それから、ミサイルとヘッジホッグには注意してくれ」
スネーク「ヘッジホッグ？　対潜水艦用の多段散布型爆雷か？」
ヒューイ「その技術をベースに、地上用にアレンジされた兵器だ」
ヒューイ「とはいえ、ヘッジホッグにしてもミサイルにしても、装填に時間がかかる」
ヒューイ「ランプが消灯している間はヘッジホッグは撃てないはずだ」
ヒューイ「ミサイルは発射ハッチの動きを見て」
スネーク「その間に接近できそうだな」
ヒューイ「発射ハッチが開いたらミサイルにも注意してくれ」

「セシール」ブリーフィングファイル

■人工知能研究所

●施設と警備

スネーク「ストレンジラブの研究施設(ラボ)からよく逃げ出せたな」

セシール「施設内の警備はそんなに厳しくないの」

セシール「もちろん部屋には外側から鍵をかけられてたけど」

セシール「お風呂の中では目隠しも外してくれた。髪も洗うから…」

スネーク「捕虜にしてはずいぶん好待遇だ」

セシール「そうね。手錠は外してくれなかったけど、その代わりに身体も洗ってくれた。それは丁寧だった」

スネーク「なぜ逃げた？　ひと月で帰してもらえると言われたんだろう？」

スネーク「脱走に失敗したらもっと立場が危うくなったかもしれない」

セシール「コスタリカの鳥類分布に関して、学会で発表する予定だったの。期日が迫ってた」

セシール「それで、トイレに行くフリをして逃げようとした。ＩＤカードを見つけて、機材やテープをあちこち探したんだけど…」

セシール「でも、兵士に見られてしまった。逃げ出せただけでも奇跡ね。テープを探す余裕なんてなかった」

セシール「学会は諦める。この身体が無事ってだけでも幸運だった」

スネーク「切り替えが早いんだな」

セシール「あなたは早くないの？」

スネーク「…わからない。過去にこだわっているつもりはないが…」

セシール「こだわっても仕方ないわ。助かって良かった。あそこではいろいろと身の危険も感じたし」

スネーク「そうなのか？」

セシール「…彼女、女性に興味があるらしいのよ。私、やけに気に入られちゃったみたい」

スネーク「そいつは…むう」

セシール「それに、ここ(マザーベース)はいいところよ」

●ストレンジラブ博士

スネーク「研究施設（ラボ）にいたのは女性二人だけか？」
セシール「普段は二人だけ」
スネーク「ふむ…（だとすると、その女性がストレンジラブ？）」
スネーク「一人は声だけしか聞いてないんだな？」
セシール「ええ。背筋がゾワッてするほど素敵な声」
スネーク「もう一人はどんな女性だ？」
セシール「狙っても無駄よ。男性には興味がないみたい」
スネーク「いや、俺は任務で…」
セシール「冗談よ。そうね…。年齢（とし）は30代だと思う。美人でスタイルもいいけど飾り気がなかった。かなりの変人」
スネーク「彼女が人工知能（AI）の研究を？」
セシール「人工知能（AI）？　彼女は人工知能（AI）を研究してたの？」
セシール「そう言えば、人間は宇宙に行くべきじゃないとか言ってた。宇宙は人間が行くには危険すぎるって」
スネーク「ロケットを自動制御するためか？」
セシール「『あの人の遺志に近づきたい』とも言っていた。あれはきっと昔の恋人のことでしょうね」

スネーク「恋人…それも女性か？」
セシール「やけに興味がありそうね、女同士の関係に。知りたい？　彼女が私にどんなことをしようとしたか」（からかう）
スネーク「そういう意味じゃ…」
セシール「ごまかさなくてもいいのに」（悪戯っぽく）
スネーク「…意外とよろしくやってたようだな、彼女とは」（呆れ）
セシール「そ、そんなことないわ」
スネーク「あやしいもんだ」
セシール「それより、ケツァールを探すんでしょ？　鳴き真似してあげる」
セシール「キョーッキョーッキョーッ…」
スネーク「図星か…」

●ＩＤカード

スネーク「状況を整理しよう。まず、研究施設（ラボ）に入るにはＩＤカードが必要だ」
セシール「ええ。あそこは外から見るとただの遺跡だけど、中は最新鋭の研究施設のようだったわ」
スネーク「それで、ＩＤカードはオレンジ色のジャケ

セシール　ットを着た兵士に取られたんだな?」
セシール「そのとおりよ。そして、その場所ではケツァールが鳴いていた。あれからそんなに時間も経ってない」
スネーク「巡回中の兵士とすると厄介だが、定位置の見張りであれば…。ケツァールの方は移動していないのか?」
セシール「近くに巣があるんだと思う。急にいなくなったりはしないはずよ」
スネーク「よし、早くその兵士を捜そう」
セシール「鳴き声を忘れたら、また私がしてあげる」
セシール「私の鳴き声を聞きたくなったら無線で連絡(コール)して」
スネーク「わかった」

■コスタリカの鳥類

●鳥類全般

スネーク「確認しよう。コスタリカへはバードウォッチングに来ていたんだな?」
セシール「そうよ。と言っても私は一応研究者だから、遊びってわけじゃないわ。中南米の鳥類分布を調べているの」
セシール「軽量のカセットデンスケができたから、女性でも一人で録音機材を持ち運べるようになった。でも、一人で来たのは失敗だったわ」
スネーク「なるほど。それにしてもコスタリカには野鳥が多いようだな」
セシール「ええ。コスタリカの鳥類は800種類以上とも、現存する鳥類の10%以上とも言われてる。あなたは何種類ぐらい知っているの、鳥類学者さん?」
スネーク「あれは、君を驚かさないために…」
セシール「コスタリカの基礎知識くらい知らないと」
スネーク「ああ…」
セシール「じゃあ私が一から教えてあげる。初めての鳥類学者さん」
スネーク「あ、ああ。それなら、ケツァールについて教えてくれ」

・カセットデンスケ

スネーク「セシール、君は録音するときに何とかって機材を使ってると言ってたな。その、カセット…」

セシール「カセットデンスケ？」
スネーク「そう、それだ。一体そりゃ何だ？」
セシール「去年、日本のソニーっていう会社が発売した可搬型（ポータブル）録音機よ」
セシール「コンパクトカセットを使うから、今までのオープンリール機より、だいぶ軽いの」
セシール「それでも5kg位はあるから持ち運ぶとダイエットにちょうどいいのよ！」
スネーク「ほう」
セシール「使い勝手もいいの。全部のボタンに浮き彫りがしてあって、手元を見なくても操作できる」
セシール「ちょっと目を離した隙に珍しい鳥を見失ったら、後悔してもしきれないでしょ」
スネーク「違いない。しかし、どうしてそんな名前なんだ？　まるで日本人の名前みたいな…」
ミラー「そいつは俺から説明しよう」
スネーク「カズ⁉」
ミラー「デンスケってのは、可搬型（ポータブル）録音機の俗称だ。何でも、漫画の主人公の名前から来てるらしい」

スネーク「そいつが録音マニアなのか？」
ミラー「おかしな言い方するな。生録は素晴らしいぞぉ」
ミラー「臨場感溢れる音をこの手に収める。最高だ！　ファインダーの代わりに、音で情景を切り取る、とでも言おうか」
スネーク「あぁ」（興味ない）
ミラー「目を閉じてテープを聴けば、瞼の裏に光景が鮮やかに蘇る…そうだよな⁉　セシール」
セシール「ええ、ベイビィ。部屋（アパルトマン）で鳥の声を聴いていると、いながらにして深い森に佇んでいる気持ちになる」
ミラー「さすがパリジェンヌ、粋ってもんがわかってる」
スネーク「…粋、ねぇ…」
セシール「ミラーさんは何を録るの？」
ミラー「俺か？　俺は何と言っても蒸気機関車（SL）だ」
ミラー「力強いブロアー音、野太い汽笛…あれはもう機械って言うより、獣の咆吼だな。んー、たまらん！」
ミラー「日本じゃ次々とSLが廃止になってるから

な。できりゃ、ちょっとの間でも帰国して、録っておきたいところだが…」

セシール「えーっ、…ミラーさんって、意外と野蛮なのね」

ミラー「や、野蛮!?」

セシール「私、ミラーさんは大…間違えた、SLは嫌い。あんな音を出したら、森の鳥が驚くでしょ。煙だって…」

セシール「私は森の静かな音に耳を傾けていたいな」

ミラー「あ…いや、ちょっといろいろ待ってくれセシール。俺はそんなつもりじゃあ…」

スネーク「…やれやれ」

●ケツァール

セシール「ケツァールについて何が知りたい?」

スネーク「そうだな…生態についてわかれば、捜すときに役立つかもしれない」

セシール「そうね。まず、姿は覚えてると思うけど、羽や背中は緑(ビリジアン)と青がグラデーションのように入り交じってるわ。エメラルドグリーンね」

セシール「お腹は鮮やかな赤。尾羽は白。本当に綺麗な鳥よね…」(うっとり)

セシール「それから、長い2本の飾り羽は繁殖期のオスだけにあるの。鳥類はだいたい、オスの方が美しいの」

スネーク「孔雀の飾り羽と同じか」

セシール「そう。ちなみに、胴体の大きさは40センチ程度だけど、飾り羽を含めると1メートルを超える個体も多いわ」

セシール「巣は朽ち木に嘴で穴を空けて作ることが多い。巣の高さは地上から3、4メートルぐらいね」

セシール「雑食だから木の実からトカゲまでいろいろ食べるわ」

スネーク「どこを捜せばいい?」

セシール「生息域は熱帯雲霧林全体にわたるわ。やっぱり、声を頼りに捜すしかないかもしれない」

スネーク「そうか…」

セシール「鳴き真似してあげるから、頑張って!」

セシール「キョーッキョーッキョーッ…」

スネーク「上手いな」

セシール「ついでに鶏の真似もしましょうか？　コケコッコー！」
スネーク「それは…それはいらない」
セシール「そう？　猿は？」
スネーク「…それも…いらない」
セシール「…。残念ね…」

・鳴き真似

スネーク「さっき言ってた猿の鳴き真似だが…」
セシール「聞きたい？」
スネーク「いや、気になって、聞いておかないと座りが悪くてな」
セシール「それじゃ、いくわよ」
セシール「（猿の鳴き真似）」
スネーク「上手いもんだ」
セシール「他にはね、羊とか、豚とか…」
スネーク「羊と豚？」
セシール「（羊の鳴き真似）」
スネーク「おおっ。豚は？」
セシール「（豚の鳴き真似）」
スネーク「そっくりだ！」
セシール「そう？　あとはねえ、ゴリラなんかもあるんだから！」
スネーク「ゴリラ？　ゴリラ鳴くのか？」
セシール「（ゴリラの鳴き真似）」
スネーク「ほう！」
セシール「それからね、ウサギの真似なんかも…」
スネーク「ウサギ？　ウサギ鳴くのか⁉」
セシール「ええ。でも、すごく小さな声だから、飼ったことがないとあまりわからないかも」
スネーク「へえ。あ、そうか。どんな鳴き声なんだ？」
セシール「それじゃ、耳を澄ませて」
スネーク「ああ」
セシール「（ウサギの鳴き真似）」
スネーク「なんだ、それは？　ウサギはそんな声で鳴くのか⁉」
セシール「本当よ、本当にこう鳴くんだから！　いい？」
スネーク「聞いたことがないな…」
セシール「本当なの！」

●ハチドリ

セシール「コスタリカにはハチドリも多いわ。ここの人たちはコリブリと呼んでるみたいね」

スネーク「コリブリか…」

セシール「ハチドリは世界最小の鳥よ。種によって違いはあるけど、大体10センチ前後、小さいものでは5センチしかないの」

セシール「あんなに小さいのにちゃんと鳥のかたちになっているのが不思議なくらい」

スネーク「そんなに小さいんじゃ、虫と間違えそうだな」

セシール「実際にスズメガなんかともよく間違えられるみたい」

セシール「この子たちの餌は花の蜜なんだけど、その蜜を吸うために、くちばしも細長くなってるからね」

セシール「羽ばたく回数も鳥類の中で群を抜いてるの。小さいハチドリだと、1秒に70回以上！　すごいでしょ」

スネーク「何のために？」

セシール「空中で静止しながら、蜜を吸うためよ。そのまま後ろに進むこともできるわ」

スネーク「空中で静止…ホバリングじゃないか！」

スネーク「それでアマンダたちは、あのヘリのことをハチドリ（コリブリ）って呼んでたんだな」

セシール「でも、兵器に鳥の名前を付けるなんて、鳥に対して失礼だと思わない？」

スネーク「俺にはわからないな、鳥の気持ちは」

●マイコドリ

セシール「マイコドリのことは知ってる？」

スネーク「いや、聞いたことがない」

セシール「そうなの？　せっかくコスタリカに来たのに、もったいない！」

スネーク「いや、俺は鳥を見に来たわけじゃ…」

セシール「マイコドリは求愛のダンスが美しいことで知られてるの」

セシール「コスタリカの太平洋側にはオレンジマイコドリ、カリブ海側にはシロクロマイコドリ、中央盆地にはオナガセアオマイコドリが生息してると言われてる」

セシール「中でも特徴的なのはオナガセアオマイコドリね」

スネーク「どう特徴的なんだ？」

セシール「彼らはまず、先輩のオスに弟子入りしてダンスを学ぶのよ。そしてグループになってメスにダンスを見せる」

セシール「でも、晴れてメスと結ばれるのは師匠だけ。弟子達は7年間技術を学んで、それから独立して今度は自分が弟子を集めなくちゃならない」
スネーク「7年間…どんなことでも一人前になるには時間がかかる、ということか。ダンサーでも、兵士でも」
セシール「マイコドリは食べるものに困らない。ヒマだからそんなことしてるらしいんだけどね」
スネーク「俺たちとはずいぶん違うな…」

●ヒゲドリ

セシール「雲霧林と言えばヒゲドリも有名ね」
スネーク「ヒゲドリ？　髭でも生えてるのか？」
セシール「スネーク、あなたのお髭と一緒よ」
スネーク「は？」
セシール「まあ正確には毛じゃなくて肉垂れだけど、見た目は髭そのもの」
スネーク「肉垂れ？」
セシール「うん。しかもオスにしか生えない」
スネーク「結構なことだ。髭は男の命だからな。そいつも雲霧林にいるのか？」

セシール「普段は低地の熱帯雨林にいるけど、繁殖期になると高地の雲霧林に移るの」
セシール「それからヒゲドリは、ともかく鳴き声が大きいので有名よ。それもボーンとかキーンとか金属的な音で、ちょっと鳥の声には聞こえない感じなの」
セシール「さすがの私も、あの鳴き声はちょっとマネできないわ」
スネーク「ケツァールと間違えることはなさそうだな」

●バフムジツグミ

セシール「コスタリカの国鳥は知ってる？」
スネーク「いや…」
セシール「あらあら？　鳥類学者なのにそんなことも知らないの？」
セシール「コスタリカの国鳥はバフムジツグミ。コスタリカのどこにでもいる、目立たない茶色の鳥」
スネーク「なぜそんな鳥を国鳥に？　ケツァールや、他にも派手な鳥はいろいろといるだろう」
セシール「バフムジツグミは鳴き声がとっても綺麗なの」
セシール「それと、派手さよりも国民みんなにとって

親しみのある鳥を選ぶというのが、コスタリカの国民性なんだと思う」

スネーク「やはりここ（コスタリカ）の連中はラテン気質じゃないんだな」

セシール「鳥類学者としてはちょっと嬉しいわね。派手な鳥だけが鳥じゃないもの」

セシール「そうそう、それに、ケツァールはグァテマラの国鳥だしね」

●コンゴウインコ

セシール「赤いコンゴウインコと、緑のヒワコンゴウインコもコスタリカを代表する鳥だわ」

セシール「インコの一種だけど…すごく大きくて立派なの」

スネーク「コンゴウインコ…名前は聞いたことがあるような…」

セシール「さすが鳥類学者ね」

スネーク「やめろよ…」（弱る）

セシール「それじゃ、現在のコスタリカにおけるコンゴウインコの生息域は？」

スネーク「いや、そこまでは…」

セシール「うーん…ふふっ、仕方ないわね。コンゴウインコは雲霧林ではなく、太平洋側の熱帯雨林に生息しているの」

セシール「昔はコスタリカのあちらこちらでよく見られたみたいだけど、今は急速に個体数を減らしてる」

セシール「一説には、大規模なバナナ栽培のための農薬散布が原因と言われているわ」

スネーク「住む土地を追われたわけか」

セシール「でも最近では保護活動の気運も高まってきてるの」

■自分について

●「セシール・コジマ・カミナンデス」

スネーク「『コジマ』とは初めて聞く名前だ。もっとも、フランス人の知り合い自体が少ないが。よくある名前なのか？」

セシール「あまり多くはないわね」

セシール「でも、ワーグナーの2番目の奥さんは、コジマ・フランチェスカ・ガエターナ・ワーグナーって名前よ」

スネーク「ほう」

ミラー「日本にも『小島』って苗字は多いぞ」
スネーク「カズ⁉」
ミラー「いやぁ、奇遇だなあ。君がこんなオリエンタルな名前だなんて。運命を感じる」
セシール「いや……ははは、そう？」
ミラー「そうだとも！　ほぼそうだ。いい名前だよ。セシール・コジマ・カミナンデス」
ミラー「…ん？」
ミラー「セシール・コジマ・カミナンデス…コジマ・カミナンデス…」
ミラー「『小島、神なんです』⁉」
セシール「ミラーさん？」
ミラー「なんてこった。神というのは、英語のゴッドにあたる日本語だ」
ミラー「『なんです』というのは説明が難しいが…神なんです…『カミナンデス』であれば『イズ・ゴッド』に近い」
スネーク「ということは…」
ミラー「ああ。『コジマ・カミナンデス』は『コジマ・イズ・ゴッド』を意味する…」
ミラー「『コジマ・イズ・ゴッド』！　『コジマ・イズ・ゴッド』！　『コジマ・イズ・ゴッド』！　エヴリバディセイ！」
セシール「『コジマ・イズ・ゴッド』！　『コジマ・イズ・ゴッド』！」（ミラーと一緒に）
スネーク「…カズ？」

●マザーベースでの役割

スネーク「マザーベースの居心地はどうだ？」
セシール「最高ね！」
スネーク「そりゃあよかった。君みたいな文化人に、こんな無骨なプラントは合わないかと思ったが」
セシール「だって！　アホウドリにグンカンドリ、アジサシにネッタイチョウ…」
セシール「フランスじゃ見られない海鳥がいっぱいだもの！」
スネーク「…そりゃあ、よかった」（ちょっと呆れている）
セシール「でも、毎日鳥を追いかけてばかりじゃ悪いし…私も何かお手伝いしたいな」
スネーク「それはありがたいな。だが、何を頼んだら…」
セシール「まあ、鉄砲を撃ったりはしたことないけど…」

スネーク　「セシール、森での振る舞いはどこで覚えた？　鳥が全く警戒していなかった」

セシール　「森とひとつになるのはバードウォッチャー（バーダー）の基本よ。人間の気配を感じると鳥にも異変が生じる。それじゃ正確な観察は出来ないもの」

スネーク　「なるほど…スカウトに通じるものがある」

セシール　「それから遠くの鳥を見つけたり、自然の中で周囲の気配を察したり、些細な痕跡から追跡するのは得意よ」

スネーク　「ますますスカウトに近い」

セシール　「鳥と同じ気持ちにならないと、鳥は見つけられないから。お役に立てそう？」

スネーク　「ああ」

■フランス

●パリ

スネーク　「ここに来る前は、ずっとパリだったのか？」

セシール　「ええ。パリは私の大好きな街なの」

セシール　「最先端のモード、世界最高の食事、優れた感性の人々が集う、文化と芸術の都」

セシール　「夜のシャンゼリゼ通りの美しさは、現実とは思えないほどよ」

セシール　「シャンゼリゼっていうのは、ギリシャ神話に出てくる楽園（エリュシオン）、つまり天国（ヘブン）なの」

スネーク　「俺には縁のなさそうな話だ」

セシール　「文化的な生活に興味はないの？」

スネーク　「縁がなかったというだけだ。興味を持ったこともないが」

セシール　「戦争が好きなの？」

スネーク　「そんなことはない。だが、天国の外、アウター・ヘブンのほうが性に合う」

セシール　「ハードな生き方ね…」

セシール　「…でも、いつかフランスに来ることがあれば、パリの街を案内してあげる」

セシール　「この世の天国、ヘブンを教えてあげるわ」

●外人部隊

スネーク　「この世の天国（ヘブン）か…。フランスには外人部隊というイメージしかないな」

セシール　「か、偏ってるわね…」

スネーク　「フランス国民は外人部隊をどう思っているんだ？」

セシール「どうと言われても…。普段そんなに意識することもないし」

スネーク「国民が犠牲にならないよう外国人に危険な任務を押しつけているという批判もあるが」

セシール「確かに設立の経緯としてはそういった事情もあったでしょうね…」

セシール「でも、勤務を続ければフランス国籍と居住権が得られるって聞いた」

セシール「入隊すれば、国籍、出身、人種、宗教、学歴など問わずに等しいチャンスが与えられる」

セシール「だから貧しい国の人たちにとって大きな救いでもあるわ」

スネーク「持たざる者達が生きていく手段か。ある意味、俺達の軍隊に近い存在なのかもしれないな」

●国歌

スネーク「フランスと言えば国歌も印象的だ」

セシール「ラ・マルセイェーズね。批判があることは知ってるけど」

スネーク「『市民よ武器を取れ、敵の汚れた血で田畑を染め上げろ』だからな」

セシール「あの曲が作られたのはフランス革命のすぐ後だったの」

セシール「周囲の国は革命の波が君主制を脅かすのを怖れたのね。それでフランスの新革命政府にいろいろ圧力をかけてきた」

セシール「それに対し、立憲政治を守ろうとした義勇兵達の歌がラ・マルセイェーズなの」

スネーク「武力がなければ立憲政治を守ることはできなかった」

セシール「ええ。好戦的すぎる部分も確かにあるけど、彼らのおかげで今の民主的なフランスがあることは忘れちゃいけないって思う」

●シェルブールの雨傘

セシール「『シェルブールの雨傘』は観た?」

スネーク「映画か？　いや、知らないな」

セシール「知らないの？　10年前の映画だけど主演のカトリーヌ・ドヌーヴが本当に素敵だった！　それにあの歌！　衣装！　色！　もー！」

スネーク「そうか」

セシール「舞台はシェルブールの軍港」

スネーク「ノルマンディで上陸拠点となった港だな」
セシール「若い男の人たちが徴兵されて、アルジェリアの戦争に行ってた頃のお話なの」
スネーク「フランス政府は戦争ではなく『北アフリカにおける秩序維持作戦』と言い張っているが」
セシール「私はまだ子供だったんだけど、知り合いのおにいさんが出征したこととか、何となく覚えてる」
スネーク「フランスは兵役義務があるからな」
セシール「その戦争が、愛し合う若い二人を引き裂くの」
セシール「ジャック・ドゥミ監督の歌詞とミシェル・ルグランの音楽が胸に、胸に突き刺さった。今でもあのメロディが頭から離れないの！」
セシール「ああ…」
スネーク「大丈夫か」
セシール「人生を、運命を変えてしまう。戦争は良くないわ」
スネーク「ああ。君のような女性（ひと）が言うとなんだか胸に滲みる」

●ジャッカルの日

スネーク「アルジェリアの独立戦争と言えば、『ジャッカルの日』は知ってるか?」
セシール「去年映画になった小説でしょ?」
セシール「秘密軍事組織（OAS）がド・ゴール大統領暗殺を企て、ジャッカルという狙撃手を雇う…」
セシール「現実を知っているはずなのに、私ドキドキしちゃった」
セシール「私ももし誰かに狙撃されるんだったら、あんなふうにじっくりと、下調べされたい」
セシール「私が知らないうちに何もかも知りつくされたい」
スネーク「そうか?」
セシール「もしかしたら私が見ている鳥たちも、そんな風に感じているのかも…」
スネーク「どうだろうな」
セシール「キョーッ、キョーッ…」
スネーク「おい、セシール?」
セシール「ケツァールの気持ちよ」

●サルトル

セシール「フランスは哲学者もたくさん生んでる。デカルト、バタイユ、サルトル、ボードリヤ

ール…」

スネーク「サルトルなら、俺も知ってる」

スネーク「『チェ・ゲバラは20世紀で最も完璧な人間だ』って言った男だろう？　見る目がある」

セシール「サルトルは…」

セシール「（サルの真似）」

スネーク「びっくりした！」

セシール「じゃないわよ」

セシール「サルトルは左翼のシンパだったものね。他にサルトルについては？」

スネーク「…知らん」

セシール「何にも？」

スネーク「…ああ」

セシール「もう、実存主義（エグジスタンシアリスム）の大家なのに…」

スネーク「出口主義（エグジッタンシアリスム）か。それは拝聴したいな。退路を確保せずに潜入する程危険なことは…」

セシール「違うわよ。実存主義（エグジスタンシアリスム）。なんで英語が混ざってるの？」

スネーク「…すまんが、哲学には興味がなくてな」

セシール「そう？　人生を豊かにしてくれると思うけど」

スネーク「人間かくあるべしとか、人間の本質とはなんぞやとか…そんなこと考えるより先に、行動に移したほうが早い」

スネーク「そうやって生きてきた結果が、俺自身なんだからな」

セシール「あら？　それってサルトルが言ってることと似てる」

スネーク「そうなのか？」

セシール「ええ。人には生まれながらの本質はない。自分とは自分自身が自由に創り上げるものだって」

スネーク「自由に？　お気楽な言い方だな」

セシール「そうじゃないの。自由故に、自分自身に責任を持たなくてはならないって意味」

セシール「『人間は自由という刑を宣告されている』…サルトルの言葉よ」

スネーク「『自由という刑』か…」

セシール「でも、他人の眼差しは、あなたをあなたという存在に固定しようとする」

スネーク「そいつは最近、痛感してる。俺が『スネークと呼べ』と言っても、聞きやしない」

セシール「『地獄、それは他人』…これもサルトルの

言葉よ」

スネーク「地獄か…まあ、ここは天国の外(アウター・ヘブン)だからな」

●ピカソ

セシール「スネーク、絵画に興味は?」

スネーク「さあな。あまり期待しないでくれ」

セシール「ピカソくらい知っているでしょ?」

スネーク「ああ、名前はな」

セシール「去年のことよ、キュビスムの創始者、〝わが〟! エッヘン! フランスが誇る芸術家こと、ムッシュ・ピカソが…残念なことに息を引き取ったの、南仏でね」

スネーク「ん? たしか彼はスペイン人…」

セシール「ね、フルネーム知ってる?」

スネーク「パブロ・ピカソだ。名前からも判る、彼はスペインの…」

セシール「はン。あなた絵画にかけては凡人ね」

スネーク「どういう意味だ」

セシール「よく聞きなさい」

セシール「〝パブロ・ディエゴ・ホセ・フランシスコ・デ・パウラ・ホアン・ネポムセノ・マリア・デ・ロス・レメディオス・クリスピン…」

セシール「…クリスピアノ・デ・ラ・サンテシマ・トリニダード・ルイス・イ・ピカソ〟」

セシール「…どう? 彼のフルネームはこれよ」(自慢げ)

スネーク「いや、そう言われても…」

セシール「現代美術の巨匠よ? 生涯の大半をフランスで活動して、10万点を超える作品を創作した偉人よ?」

セシール「教養としてそらんじていて当然だわ」

スネーク「あまり使いどころ無さそうだが…。まあそれはいいとして、ピカソはスペイン人だろう、違うか」

スネーク「フランス人じゃない。だな?」

スネーク「セシール?」

セシール「それがどうしたっていうの? スペイン人でも火星人でもいいじゃない、ピカソはピカソよ」

セシール「フランスで活躍した事実は変わらないし、作品の価値が損なわれることだってこれっぽっちもない!」

セシール「国籍にこだわるだなんて、あなた小さいわ。

『国籍に帰属しない軍隊』の名が泣くんじゃない？」

スネーク「（小声で）だったら別に『わがフランス』が誇らなくたっていいんじゃ…」

セシール「何か言った⁉」

スネーク「何も」

●マカロン

セシール「ねえ、スネーク、レーションにお菓子を入れたりはしないの？」

スネーク「考えたこともないな。なんでだ？」

セシール「お菓子大好きなの！　フランスのお菓子は、そりゃあ美味しいんだから」

セシール「クレープでしょ、シュークリーム（シュー・ア・ラ・クレーム）にエクレア（エクレール）、マドレーヌにフィナンシエ（フィナンシエ）…」

セシール「それとタルト・タタン。サヴァランも外せないな。ミルフィーユ（ミル・フィユ）、クレープ、ブラン・マンジェ…」

スネーク「クレープ、2回目だ」

セシール「スフレ、クロカンブッシュ、カヌレ、フロランタン、クイニーアマン、ペーシュ・メルバ……」

スネーク「終わったか？」

セシール「……それにマカロンが一番好きなの」

セシール「それもやっぱりマカロン・パリジャン（macaron parisien）が最高ね。カラフルで見た目も可愛いし、メレンゲを使ってるからとっても口溶けがいいの」

スネーク「意外だな。マカロンがフランスでもそんなに人気だったとは」

セシール「フランスでも…？」

スネーク「ああ。マカロン（macaroon）…ココナッツ味のクッキーだろ？」

セシール「違うわよ！　マカロンに入ってるのはアーモンドパウダー（プードル・ダマンド）」

ミラー「ピーナッツじゃなかったか？　俺も日本で何回か食べたぞ。名前も「まころん」だと思ったが」

セシール「まころん？　そ…それはきっとフランスの真似よ。いい？　フランスのマカロンは由緒あるお菓子なんだから」

セシール「遡ること16世紀、フィレンツェのメディチ

家から、カトリーヌって娘がフランス王家に嫁いで来たの」

セシール　「その彼女が連れてきた菓子職人(パティシエ)が作り方を伝えたのが始まりって話」

セシール　「どう？　500年近くの歴史があるのよ」

スネーク　「フィレンツェのメディチ家からって、それじゃあ、元はイタリアの菓子じゃないか」

セシール　「あ…」

スネーク　「こっちのマカロン(macaroon)もおおかた、イタリアのが元なんじゃないか？」（macaron も macaroon もイタリアのアマレッティが起源）

セシール　「そ…そんなこと…」（名前も、イタリア語でペーストを意味する maccarone から）

ミラー　「そういやマカロン(macaron)って名前、マカロニ(macaroni)と似てるしな」（よってミラーの推測も間違っていない）

スネーク　「違いない」

セシール　「…信じられない。マカロンとマカロニを一緒にするなんて…ミラーさんって無神経なのね！」（絶句）

ミラー　「な、なんで俺だけ…おーい待ってくれ、セシール！」

●ワイン

セシール　「スネーク」（酔っている。呂律が怪しい以下同）

スネーク　「なんだ。酔っ払っているのか」

セシール　「あの人、どうにかして」

スネーク　「誰のことだ」

セシール　「ミラーさん」

スネーク　「カズがどうかしたか」

セシール　「ワインよ」

スネーク　「ワイン？」

セシール　「ビールばっかりじゃ隊員達も飽きるだろうっていうから、ワインはどう？　って勧めたの」

スネーク　「ほう、いいじゃないか」

セシール　「でもね、ここ2年ほどフランスのワインは不作だったの」

スネーク　「ああ、よだれよだれ！」

セシール　「ありがとう」

スネーク　「それで？」

セシール「あのね、天候が不順だったせいだと思うんだけど、とにかく、今の時期ワインならフランスのものはよした方がいいってアドバイスしたのよ、私」
スネーク「ああ、そうかそうか。まあカリフォルニアやチリにもいいワインはあるからな」
セシール「ところがよ、彼ったらわざわざフランスの、しかも不作だった72年モノばかり倉庫一杯買い付けてきたのよ」
スネーク「ああ…。そうかそうか…」
セシール「『どうだセシール、故郷の香りを楽しんでみないか』ですって」
スネーク「ほう…。それで」
セシール「嫌な予感がしたから私、味を確かめるためにテイスティングしたわ。何度も、何度も何度もしたわ」
スネーク「ああ、そりゃご苦労だったな。…だが、普通はテイスティングじゃ飲み込まないはずなんじゃ…」
セシール「ところが何本封を切っても、どのボトル取りだしても、全部、ぜんぶマズイの」

セシール「ただの一本も美味しいワインが無かったの！　何が故郷の香りよ…」（興奮してくる）
スネーク「…そりゃ、残念だったな」
セシール「もう信じられない！　あんなにたくさんどうすんのよ！」（怒）
スネーク「ここの連中は味なんか気にしないさ」
セシール「あんたさ…スネークさんよぉ」
スネーク「なんだよ」
セシール「あんたもミラーさんと同じことというのか？」
スネーク「え」
セシール「アタイ文句言ったらあの人シレッとして言ったわ、『酔っぱらえばいいんだ』」
セシール「なんなのここの人達、味覚の野蛮人だらけじゃない！」
スネーク「ああ、よしよしよしよし」
セシール「ありがとう。あんたいい人だよ」
スネーク「ああ…。そうか」
セシール「…私、パリに帰りたい！」
スネーク「…酔っぱらいすぎてないか、お前」

● 五月革命

スネーク「きみはなんというか、ずいぶんと奔放な…というか、解放的なというか、タガの外れたというか…」

セシール「あら」

スネーク「まあ、自由な女性のようだな」

セシール「フリーダム！」

セシール「そうかしら？　パリの女性はみんなこんな感じよ」

スネーク「みんな？」

セシール「そうよ、どう？」

スネーク「どうって…」

セシール「五月革命以来ね」

スネーク「五月革命…。大統領を辞職に追いやったゼネストだったか？」

セシール「ええ。1968年のね。だけどあれは、ただのストライキじゃなかったの」

セシール「元はと言えば66年にストラスブール大学で起こった学生運動だった」

セシール「それも、国に何かを求めたわけじゃなく、学内の改革を求めただけのもの」

セシール「でもそれは、あの頃世の中に不満を持っていた若者の心に火をつけて、フランス全土に広がったの」

セシール「ベトナム戦争への反対や当時のド・ゴール政権への反対運動、それだけじゃなくて自由恋愛や古い価値観からの脱却も叫ばれた」

セシール「今となっては何が目的の中心だったのかもわからないけど…」

セシール「ま、五月革命っていうのはただのゼネストや政権交代を越えた、若者達のムーブメントだったってわけ」

スネーク「よくわからないが…ヒッピー・ムーブメントのようなものか？」

セシール「似てるところはあるかもね。でも、私たちは神秘主義には溺れなかったし、自然回帰も求めなかった」

スネーク「なるほどな。ヒッピーは閉鎖的な自分たちだけの世界（コミューン）を作ろうとしたが…」

セシール「私たちは世の中を変えようとした。そして、みんなが力を合わせれば世の中を変えられることを知った」

スネーク「…夢のような話だな。アメリカじゃもう、ヒッピーはただの社会問題だ」

スネーク「カズのいた日本でも学生運動は失敗に終わったらしい」

セシール「何が違ったのかしら？」

スネーク「さあな。俺が知りたいくらいだ」

●核実験

セシール「フランスが初めての核実験に成功したのは1960年、アルジェリアのサハラ砂漠で」

スネーク「フランスの科学者はマンハッタン計画にも大勢参加していた。第二次大戦中、国を追われてアメリカに亡命してきたらしい」

セシール「そう、その人たちが戦後、本国に戻って核開発を始めた」

セシール「アメリカの核の傘をあてにしなくていいように、ド・ゴール大統領は積極的だった」

スネーク「そしてフランスは第4の核保有国となった…」

セシール「…核実験の成功がアルジェリアの反乱軍を鎮静化させたとも言われている。内戦は確かに食い止められた」

セシール「だけど私は、核があるから平和だなんて思ったことはない」

「ストレンジラブ」ブリーフィングファイル

■AI

●AIとは

ストレンジラブ「AIとはArtificial Intelligence、人工知能の略だ」

ストレンジラブ「人によって創られた、人間並みの知能を持つ機械のことだ」

スネーク「可能なのか？　そんなことが」

ストレンジラブ「可能かだって？　おまえも見ただろう、AI兵器の性能を。ザ・ボスの遺志を継いだ、ピースウォーカーの最期を」

ストレンジラブ「ただの機械(マシン)なら、自己犠牲など選択できるはずはない」

スネーク「電子部品の塊が意志(ウィル)を持つなんてことが…」

ストレンジラブ「"The Ghost in the Machine"…あるんだよ、スネーク。機械に霊魂が宿ることが」

●"The Ghost in the Machine"

スネーク「"The Ghost in the Machine"とは、どういう意味だ」

ストレンジラブ「ああ…あれはギルバート・ライルという哲学者の言葉だ」

ストレンジラブ「デカルトは知っているな？」

スネーク「『我思う、故に我在り』…」

ストレンジラブ「そう。心身二元論を唱えた哲学者。『思う』心は、物理法則に支配された身体とは別の次元にある。デカルトはそう考えた」

ストレンジラブ「だがこれが本当なら、『身体』という機械(マシン)に『心』という幽霊(ゴースト)が宿ったものが人間、ということになりはしないか？」

ストレンジラブ「人間とはそんなものではないはずだ…ライルはそう批判したんだ」

スネーク「なぜ、それをあんたが？」

ストレンジラブ「別にライルを意識して言ったわけじゃない」

ストレンジラブ「人間が機械(マシン)と幽霊(ゴースト)で成り立っているなら、逆もあるかも知れない。そう思っただけ」

ストレンジラブ「機械(マシン)の中に霊魂(ゴースト)を宿らせることで、あるいは人が生まれるんじゃないか、とね」

スネーク「それが、ザ・ボスのAIだったと？」

ストレンジラブ「あの時、記憶板はおまえに抜かれ、ママルポッドは停止していた。動くはずがない」

ストレンジラブ「にも関わらず、ピースウォーカーは立ち上

ストレンジラブ　がった。平和の歌を歌いながら」

「あの時、ピースウォーカーに彼女の魂が宿っていた…私にはそう思えてならなかった」

●人工知能の見分け方

スネーク　「もし仮に、機械が本当に知性を持ったとして、それを証明する方法なんてあるのか？それが、ただの高性能なコンピュータではなく、人工知能だと」

スネーク　「その違いは何だ？」

ストレンジラブ「何をもって知能と呼ぶか、定義の問題だな。…スネーク。例えばだ、今話している、この声を発している私が、ＡＩだとしたら？」

スネーク　「何だって？」

ストレンジラブ「生身の私はリビングで紅茶を啜っていて、おまえの相手をしているのは、私の思考を真似たＡＩの合成音声だとしたら？」

スネーク　「からかうのはよしてくれ」

ストレンジラブ「いや、お前には、私が生身の人間であることは証明出来ないはずだ」

スネーク　「それは無理だろう」

ストレンジラブ「ふっ。入れ替わっても区別がつかないほどのＡＩなら、それは知性を持っていると言えない？」

スネーク　「釈然としないな」

ストレンジラブ「だけど、一つの考え方だ。チューリング博士はＡＩの知性についておおむねこのように説明していた」

ストレンジラブ「その検証方法はその名を取って、チューリング・テストと呼ばれている」

スネーク　「それにしても、悪い冗談だ。あんたの声で歌うＡＩ兵器には、さんざん苦労させられた。もうごめんだ」

ストレンジラブ「残念だな。そろそろお前の話し相手もＡＩに代わってもらおうと思っていたんだが」

スネーク　「勘弁してくれ」

・チューリング・テスト

ストレンジラブ「アラン・チューリング博士は、コンピュータ科学の父とも言われている。ＡＩの基礎理論は、彼が築いたと言っていい」

ストレンジラブ「博士は大戦中、ＧＣ＆ＣＳで働いていた」

スネーク　「政府暗号学校…エニグマ解読か」

ストレンジラブ「そうだ。彼がいなければ、ドイツ軍のエニ

グマ暗号は解読できなかったかも知れない」
ストレンジラブ「…だが、その後、彼は逮捕された」
スネーク「なぜだ。大戦を終わらせた功労者じゃないか」
ストレンジラブ「当時のイギリスでは、同性愛は犯罪だった。彼はゲイだったんだ」
ストレンジラブ「私には、彼の無念がよくわかる。彼の分までAI研究を発展させる義務が、私にはある…」
スネーク「男女の違いこそあれ、か」
ストレンジラブ「そうだ。知っているか？ チューリング・テストのヒントになったのは、他愛もないパーティゲームなんだ」
ストレンジラブ「ついたてをはさんだ相手と筆談して、性別を当てる。それが女なのか、女の振りをした男なのか…」
ストレンジラブ「これを見極めるのは意外と難しい。男か、女か。機械か、人間か。その差が意味するものは何か」
ストレンジラブ「彼は、男女の違いについて考え続けた。それがチューリング・テストという発想につながったのかも知れないな」

●AIのモデル

スネーク「もし、AIのモデルがボスじゃなかったら？」
ストレンジラブ「どういうことだ」
スネーク「相互確証破壊（MAD）を目的とするなら、もっとふさわしいモデルがいるだろう。軍の参謀、核技術者…それこそ大統領でもいいはずだ」
ストレンジラブ「そんなことか…私に言わせれば、ザ・ボスこそが20世紀で最も完璧な人間だ。お前も異論はないだろう」
ストレンジラブ「愛国心、統率力、判断力…彼女には全てが揃っていた。どれも、核発射の判断に必要なもの」
スネーク「それならば、大統領でも」
ストレンジラブ「それだけじゃない。彼女には、意志があった」
スネーク「意志？」
ストレンジラブ「いいかスネーク。ピースウォーカーはスタンドアローンな兵器だ」
ストレンジラブ「核を発射すべきかどうか、自分一人で判断しなくてはならない。誰にも相談できない」
ストレンジラブ「世界の運命を、たった一人で背負う覚悟が

なければ、務まらない。それができる人間を、私は彼女以外に知らない」

スネーク「…それだけか？」

ストレンジラブ「もちろん、技術的な問題もある。ＡＩがモデルにすべきなのは、そもそも女性の脳なんだ」

スネーク「女性の脳？」

・ＡＩと女性脳

スネーク「女性脳をＡＩのモデルにする…どういうことだ？」

ストレンジラブ「スネーク、人の精神にあって、コンピュータにないものとは？」

スネーク「…怠け癖か？」

ストレンジラブ「面白い答えだ。間違ってはいないが…正解は、共感力だよ」

スネーク「共感力？」

ストレンジラブ「正確には感情移入する力、と言うべきかも知れない。子供を愛おしいと思う心、弱者を慈しむ心、死者を悼む心…」

ストレンジラブ「どれも、女性の脳が得意とするもの」

スネーク「極論だな」

ストレンジラブ「いや、結論だ。一方、男の脳は、物事のシステム化には向いていても、感情移入能力は低い。コンピュータに近いと言ってもいい」

ストレンジラブ「ＡＩがヒト同様の思考を目指すなら…」

スネーク「学ぶべきは女性の共感力、というわけか」

ストレンジラブ「小説では『アンドロイドは電気羊の夢を見るか？』がこの問題を扱っていた」

ストレンジラブ「この小説では、感情移入（エンパシー）能力テストが、機械と人間とを見分ける手段になっている」

ストレンジラブ「コンピュータの発達に伴って、これから社会のシステム化がさらに進んでいくだろう」

ストレンジラブ「共感力の欠けた、ロボットのような人間が街にあふれる…そんな時代になってはならない」

ストレンジラブ「コンピュータは共感力を得るべきだ。そして、ヒトももっと」

スネーク「そう言うあんたはどうなんだ？　現実の人間に共感しているようには見えない」

ストレンジラブ「確かに、いままで私は死に囚われていた。ママルの研究が成功したら死ぬつもりだった。彼女の他に生きる理由がなかったから」

スネーク「だが気が変わった?」

ストレンジラブ「…彼女に教えられた。生きることの尊さを」

ストレンジラブ「これからは現実の人間を見て生きたい。そう思えるようになれた」

スネーク「そうか」

●AIの必要性

スネーク「機械に人間同様の思考をさせる必要はあるのか? 報復の判断に共感力は邪魔なはずだ」

ストレンジラブ「確かに冷徹な判断と人間的な思考は相容れないものなのかもしれない。でもそれなら、人間的でない思考というのはなんだ?」

ストレンジラブ「電子計算機（コンピュータ）が発達し、人間より早く計算ができるようになったとき、人はある夢を描いた」

スネーク「夢?」

ストレンジラブ「そんなに高度な計算ができるなら、機械に人間並みの知性を持たせることもできるのではないか」

ストレンジラブ「19世紀の作家リラダンは『未来のイブ』で、主人公が理想の恋人として人造人間を生み出すという物語を描いたが…」

ストレンジラブ「そのように知性を持った存在を自らの手で生み出すというのは、おそらく人類にとって長年の夢だったんだろう」

スネーク「AIの原点は人間の夢だったわけか」

ストレンジラブ「AIだけじゃない。文明とはそもそも、人類が夢を実現していく過程なんだ」

ストレンジラブ「だけど、夢は悪夢でもある。〝人間以外の知性〟に対する畏れもあった」

スネーク「勝手なものだな」

ストレンジラブ「チェコのカレル・チャペックが『ロッサム万能ロボット会社』で描いたように、知性を持ったロボットが人間に反旗を翻す恐れもあった」

ストレンジラブ「1970年の映画『地球爆破作戦』でも、知性を持った米ソのコンピュータが手を組み、人類の支配を目論むという物語が描かれた」

ストレンジラブ「こういった恐怖心に対して、具体的な解決策を提唱したのがアイザック・アシモフのロボット三原則だと言える」

ストレンジラブ「ロボットの知性は人間と異なるが、共存は

可能であることを示したんだ」

ストレンジラブ「コンピュータに知性を実装するには、知性とは何なのか深く知る必要があった」

ストレンジラブ「そんななかで実現性があり、現実的に必要とされたのがエキスパートシステムだった」

●エキスパートシステム

スネーク「エキスパートシステムとは何だ」

ストレンジラブ「ピースウォーカーに載せるＡＩは、もともとこのエキスパートシステムとして開発が始まった」

ストレンジラブ「コンピュータが専門家（エキスパート）のように判断をするシステム。一種の代行プログラムだ」

ストレンジラブ「例えば、〝Ｍｙｃｉｎ〟というプログラム。これは、処方すべき抗生物質を決めるシステムだ」

ストレンジラブ「システムが患者に質問していくことで、処方薬を絞り込んでいく」

スネーク「ピースウォーカーに、ペニシリンではなく、熱核兵器を処方させようとしたわけか」

ストレンジラブ「だが、単なるエキスパートシステムでは、力不足ということがわかった」

スネーク「専門知識だけじゃ、核は撃てない」

ストレンジラブ「そうだ。専門知識は必要だが、それだけでは足りない」

ストレンジラブ「報復攻撃の判断を下すには、もっと広範囲で条件を考慮する必要がある」

ストレンジラブ「それこそ、世界の情勢全てが判断すべき基準になるんだ」

スネーク「確かにな。処方を間違えれば、全世界がアナフィラキシー・ショックに陥る」

ストレンジラブ「狭い専門知識の中でしか判断できない〝弱いＡＩ〟ではだめなんだ」

ストレンジラブ「だから私は、ザ・ボスの思考をＡＩに学ばせた。〝強いＡＩ〟…真のエキスパートシステムを作るために」

スネーク「偏った見識に世界は任せられない、ということか」

ストレンジラブ「単純なエキスパートシステムなら、すぐにでも用意できる」

ストレンジラブ「そうだ、作戦内容に応じて、携行する銃を決めるシステムはどうだ？」

スネーク「遠慮しておく。自分の生死を、他人の判断

に委ねるつもりはない。機械になどなおさらだ」

●AIの未来

ストレンジラブ「今の技術では、AIはどうしても巨大になる」
ストレンジラブ「だが、今後回路が集積化されていけば、小型化が進むだろう。それこそヒトの脳と同じ大きさか、それ以下にまで」
ストレンジラブ「一方で、ロボット工学も進歩していくはず。ヒトの姿に似せた、アンドロイドが作れるくらいには。そうなれば…」
スネーク「そうなれば何だと言うんだ」
ストレンジラブ「言わなくてもわかるだろう?」
スネーク「まさかあんた、ボスそっくりの機械人形を…」
ストレンジラブ「おまえも一度は考えたことがないか? 彼女が再び我々のもとに現れることを?」
スネーク「やめろ! そんなものは紛い物だ!!」
ストレンジラブ「そう、潔癖なことね」
ストレンジラブ「まあ、現実にはむしろ、AIは逆方向に進化していく可能性のほうが高いだろう」

・AIのもう一つの進化

スネーク「AIが逆方向に進化するっていうのはどういうことだ?」
ストレンジラブ「大量の情報処理に特化した、システムとしてのAIだ。そこには人間の知性も、思考も感情もない」
ストレンジラブ「個としての自我を確立するのではなく、集団として振る舞うことで、社会性を発揮する機械」
スネーク「ミツバチのように?」
ストレンジラブ「そうだ。個々の集めた情報を総合して、集団の振る舞いを決定する。ミツバチが、巣と花畑を往復するように」
ストレンジラブ「そのためには、AIのネットワーク化が重要になるだろう」
スネーク「うまく言えないが…不気味だな」
ストレンジラブ「だが、社会をコントロールするなら、こっちのほうが向いている。流通させたい情報だけを透過できるんだから」
ストレンジラブ「もっとも、そんなロマンのかけらもないAIに、私は興味が持てないけどね」

●蛹から蝶へ

スネーク「以前、あんたはママルポッドの事を〝蝶〟

と言ったな。蛹、ピューパでも繭、コクーンでもない、〝成虫〟、イメイゴだと」

ストレンジラブ「ええ。ママルポッド以前のＡＩは、未完成品だったから」

スネーク「未完成？」

ストレンジラブ「機体を動かすには十分だけど、核報復のような高度の判断はできない。完成まで今一歩。だから蛹」

ストレンジラブ「ザ・ボスのデータを入力することで、初めてＡＩは本来の姿を得た。蝶になって羽ばたいたんだ」

スネーク「それで、ピースウォーカーのノーズアートに蝶を…」

ストレンジラブ「私は、ママルのＡＩに〝BS-imago〟というコードネームを与えた」

ストレンジラブ「〝ＢＳ〟はボスの略だ」

・ＡＩのコードネーム

スネーク「あの馬鹿でかい無人ヘリを、ヒューイはクリサリスと呼んでいたな。これもＡＩのコードネームと関係があるのか？」

ストレンジラブ「ああ、TJ-chrysalis6000だな。これも蛹という意味。他はGW-pupa5000、TR-cocoon7000…」

スネーク「なるほど、ホバータイプにキャタピラタイプだな。…ＴＪだのＧＷやらも、イニシャルか」

ストレンジラブ「ああ。ラシュモア山に胸像が彫られている、アメリカ歴代大統領の面々」

スネーク「だったら、一人足りないな」

ストレンジラブ「それはレプタイルポッドのＡＩに割り当てた。AL-aurelia8000だ」

スネーク「aurelia…〝羽化直前の蛹〟か」

ストレンジラブ「そもそも〝ＢＳ〟以外のイニシャルは、コールドマンの趣味だ。私は、伝統ある英国王室から取りたかったんだ」

ストレンジラブ「ＭＳ、ＡＶ、ＥＷ…」

スネーク「…何の略だ」

ストレンジラブ「わからないか？　メアリー・スチュワート、アレクサンドリナ・ヴィクトリア、エリザベス・ウインザー…」

スネーク「…全部女王じゃないか」

●『２００１年宇宙の旅』

ストレンジラブ「『２００１年宇宙の旅』という映画を知っているか？」
スネーク「聞いたことはあるが…」
ストレンジラブ「やはり。おまえに映画を観るような、文化的な習慣があるとも思えないからな」
スネーク「光栄だ。その映画が何か？」
ストレンジラブ「『２００１年宇宙の旅』には、ＨＡＬ９０００というＡＩが登場する。探査船を制御する、高性能ＡＩだ」
ストレンジラブ「会話も交わせば、チェスも指す」
スネーク「なるほど、どこかで聞いたような話だ」
ストレンジラブ「ＨＡＬの描き方は実に秀逸だった」
スネーク「というと？」
ストレンジラブ「ＨＡＬは、船長すら知らない秘密指令を受けていた」
ストレンジラブ「それは当然乗組員達には話せない。そのストレスから、ＨＡＬは狂ってしまう」
スネーク「狂った？」
ストレンジラブ「そうだ。解釈は様々だがね。ＨＡＬは乗組員を次々と殺していくが、最後には船長に機能を止められてしまう…」

ストレンジラブ「ＡＩの成長、活用、問題点…そして死への恐怖。どれも素晴らしい洞察だった」
スネーク「それが、ＡＩ研究の役に立ったってわけか」
ストレンジラブ「おまえはどうしてそう即物的なんだ」
ストレンジラブ「役に立つ立たないじゃない。インスピレーションだ、あの映画が与えてくれたのは」
スネーク「つまり、役に立った」（ということだな）
ストレンジラブ「もういい。この作品が素晴らしいのは、ＨＡＬの描写だけじゃない。人類の進化に対する示唆に富んだ、映画史に残る名作だ」

■ザ・ボス

●ザ・ボスとの出会い

スネーク「ストレンジラブ、ボスとはいつ知り合った？」
ストレンジラブ「…あの人は、宇宙を見た話を？」
スネーク「ああ」
ストレンジラブ「私も同じ宇宙を見た。彼女とともに」
ストレンジラブ「ソ連のスプートニクに先を越され、アメリカは有人宇宙飛行の実現を急いでいた」
ストレンジラブ「宇宙開発機関は極秘裏に彼女を被験体（モルモット）に立

て、宇宙の闇に放り出した」
ストレンジラブ「私はその計画に参加していたのだ。科学者として」
スネーク「あれはあんたが…？」
ストレンジラブ「そう。…その短い期間、私達はまるで一人の人間のようだった」
ストレンジラブ「互いを求め合い、互いを埋め合った」
ストレンジラブ「お前にわかるか？　女の中には宇宙がある。女同志なら、それを感じ合うことが出来る」
ストレンジラブ「女の共感脳だからこそ通じ合えたんだ」
ストレンジラブ「やがて…私はその尊い魂を犠牲にすることに、疑問を抱くようになっていった」
ストレンジラブ「何故、人がそれを？　何故、彼女が…」
ストレンジラブ「…飛行テストは辛うじて成功し、彼女は奇跡的に生還した。身も心も掻き削がれた彼女に私が代わってやることは何一つなかった」
ストレンジラブ「私たちは一人ではなかった」
ストレンジラブ「彼女は消え、やがて私は命の代替品としての、ＡＩの研究に没頭するようになっていた」
ストレンジラブ「彼女のような犠牲が二度と必要ないように」

スネーク「俺は知らなかった…」
ストレンジラブ「ふん、知るほどの事でもない」
ストレンジラブ「人生の一瞬を彼女とすれ違った、これが全てだ」
ストレンジラブ「いつか気が向いたらまた、詳しく話してやる」

●地下基地での尋問

スネーク「コスタリカの基地では、随分と丁寧にもてなしてくれたな」
ストレンジラブ「…済まなかった。だが、私はどうしても知りたかったんだ」
スネーク「ボスの最後の行動をか？」
ストレンジラブ「ああ。私は彼女の思考と行動を入力することで、ＡＩに精神を宿らせようとした」
ストレンジラブ「だが、彼女の最後の行動だけが理解できなかった」
スネーク「スネークイーター作戦のことだな」
ストレンジラブ「公式には、彼女は祖国アメリカを裏切って亡命したことになっている。そしておまえに殺されたと」
ストレンジラブ「…そんなはずがない。ザ・ボスほど、裏切りなどという行為から縁遠い人はいない。

それは論理的な矛盾だ」

スネーク「…そうだな」

ストレンジラブ「矛盾を内包したＡＩは、うまく起動しなかった…映画の中で、ＨＡＬが動作不良を起こしたように」

ストレンジラブ「論理的にはわかっていた。だが、私は裏付けが欲しかった。ザ・ボスの最後の行動を。本当の意図を。どうしても！」

スネーク「それを俺から聞き出そうと？」

ストレンジラブ「そうだ。おまえの沈黙が、答えだったということだ」

●ザ・ボスの白馬

スネーク「ザ・ボスが乗っていた白馬…」

ストレンジラブ「アンダルシアンのことか」

スネーク「あの馬が、どうしてコスタリカに？」

ストレンジラブ「私が探し出した。口は利けなくても、彼女の最後の証人だ。それをこちらまで連れてきた」

スネーク「どこで？　俺はてっきり、あの爆撃に巻き込まれたと…」

ストレンジラブ「八方手を尽くして探したよ…最終的には、イギリスの乗用馬マーケットで見つかった」

スネーク「イギリスに？　ソ連領内から、ウラル山脈を越え、海を渡ってきたとでも言うのか」

ストレンジラブ「さあな。誰かが連れ出したのかも知れん」

スネーク「見た目が似ているだけの、別のアンダルシアンだとは思わなかったのか」

ストレンジラブ「確証はない…いや、なかった、と言うべきか」

スネーク「どういうことだ」

ストレンジラブ「おまえが一番よく知っているだろう。あの馬は決して誰も乗せなかった。私も何度か振り落とされた」

ストレンジラブ「それが、おまえだけは背に乗せた…認めたくないが、そういうことだ」

スネーク「…おかげで無理をさせた」

ストレンジラブ「だが、最後の走りは、とても老馬とは思えないものだった」

ストレンジラブ「かつての主人を追って力の限り走る…馬としては本望だったのかも知れない」

●ザ・ボスと平和

スネーク「あんたはどう思ってるんだ？　ピースウォーカーの最後の行動を」

ストレンジラブ「私は彼女の思考を完璧に再現した。あれはまさしく彼女自身の判断だ」
ストレンジラブ「最も優れた共感脳が過去と未来を熟慮し、地球規模で思考した結論…それは報復ではなかった」
ストレンジラブ「それがわかっただけで私は満足」
スネーク「…つまり、平和に抑止力はいらないと？」
ストレンジラブ「そうは言っていない。大切なのは平和を願うことだ」
ストレンジラブ「国家という巨大な怪物の思惑の前では、お前達の部隊も身を守る力が必要だろう」
ストレンジラブ「生きていくためには、現実的な考え方も必要だ」
ストレンジラブ「しかしそれでも理想は持ち続けなくてはならない」
ストレンジラブ「理想と現実のギャップに苦しみ、それで理想を失ったりしたら…そのときは、お前の組織もそこまでだろうな」

■自分について

●「ストレンジラブ」の由来

スネーク「あんたのそれは暗号名(コードネーム)か？」
ストレンジラブ「いや、ただのあだ名だ」
ストレンジラブ「知らないのか？　キューブリックの『博士の異常な愛情(ドクター・ストレンジラブ)　または私は如何にして心配するのを止めて水爆を愛するようになったか』」
ストレンジラブ「1964年の映画…核抑止を皮肉ったブラックコメディだ」
スネーク「あんたが映画に出たのか？」
ストレンジラブ「そんなわけないだろう！　その映画のせいで、私はこのあだ名をつけられた」
スネーク「似ているのか？　その映画の博士に？」
ストレンジラブ「いや。あの博士は男だ」
スネーク「それじゃ、なぜ…」
ストレンジラブ「高等研究企画局(ARPA)にいた頃、私は自分の席に彼女(ザ・ボス)の写真を飾っていた」
ストレンジラブ「異性との恋愛に興味も示さず研究に没頭し、席には女の写真を飾っている…」
ストレンジラブ「周囲の愚か者達は、そんな私をからかって

異常な愛情、『ストレンジラブ』と呼んだ」

ストレンジラブ「映画を観ないような連中にとっても、あのタイトルはインパクトがあったらしいな」

ストレンジラブ「ともあれ、彼らにとっては同性愛は異常(ストレンジ)なものだったんだろう。自分の基準でしか物事を見ることができない連中だ」

ストレンジラブ「異常(ストレンジ)というのは独自の視点を持っているということ。私はむしろそれを誇りに思う」

●経歴

スネーク「ここに来る前は高等研究企画局(ARPA)にいたのか」

ストレンジラブ「ああ。当時仕事としてAIの研究ができそうなのはあそこぐらいだったから」

スネーク「その前は?」

ストレンジラブ「私は元々、アメリカ航空宇宙局(NASA)にいた。そこで彼女と知り合った」

スネーク「そしてボスを宇宙に…」

ストレンジラブ「…そう。あの事件がきっかけで、私は航空宇宙工学から離れた」

ストレンジラブ「生身の人間にとって、宇宙はあまりに危険な場所。だから私は、AIの早急な開発が必要だと感じた」

ストレンジラブ「結局、その後はロケットの安全性も向上し、人類も月面まで行ってしまったけど…」

ストレンジラブ「いずれにしても冷戦の徒花だ。早い話、ロケットに核弾頭を積めば核ミサイルだから」

ストレンジラブ「ゆえに宇宙開発でイニシアチブを取ることは、軍事的な示威行為でもあった」

スネーク「その膨大な予算負担に米ソ両国は耐えられなかった」

ストレンジラブ「そう。キューバ危機の衝撃やベトナム問題もあった。そして緊張緩和(デタント)…」

ストレンジラブ「月面着陸でソ連を大きく引き離したアメリカは、72年でアポロ計画を終了させる」

ストレンジラブ「同時期に高等研究企画局(ARPA)は国防高等研究企画局(DARPA)に改称され、組織も縮小した」

ストレンジラブ「AI研究の続行も困難になった。私にとってコールドマンの誘いは渡りに船だった。彼女のデータを集めさせることもできた」

スネーク「その結果が今回の事件か」

ストレンジラブ「だが私達は、彼女に平和の尊さを教えられた」

●マザーベースでの役割

スネーク「どうしてマザーベースへ来る気になったん

だ?」

ストレンジラブ「おまえに興味が湧いた」

スネーク「俺に？　…まさか、今度は俺をモデルにしたAIを…」

ストレンジラブ「はっ、それも悪くない。だが、もう人の思考そのものを移植するつもりはない」

スネーク「…安心したよ」

ストレンジラブ「おまえはザ・ボスの遺志を継ぐ男だ」

ストレンジラブ「そのおまえが人を集め、育て、一つの組織を作ろうとしている。その行く末を見てみたい」

スネーク「AI研究に戻るつもりはないのか？」

ストレンジラブ「誰がやめると言った。続けるさ」

スネーク「ここでか？」

ストレンジラブ「私にとっては、お前達の組織が成長する過程そのものが、神経網の発達に重なって見える」

ストレンジラブ「絡み合い、刺激しあって、その枝葉を広げる…いいインスピレーションになる」

スネーク「面白いことを言うな」

ストレンジラブ「もちろん、ただで研究させろとは言わない。成果は還元する」

ストレンジラブ「研究開発班に配属してみないか？　決して悪い結果は出さない」

■人について

●ヒューイ

スネーク「そう言えば、ヒューイからもらったIDカードでは、研究所に入れなかったんだが…」

ストレンジラブ「ああ、奴のカードは無効にしたからな」

スネーク「どうして」

ストレンジラブ「あんな奴を、私の研究所に入れさせるものか」

スネーク「ひどい嫌いようだな。同じ研究をする仲間だろう」

ストレンジラブ「冗談じゃない。まず、奴のウジウジしたところが我慢ならん」

ストレンジラブ「男のくせにこそこそ手紙なんて書いてないで、直接会って思いを伝えたらどうだ!?」

スネーク「だが、カードが無効じゃ会いにも行かれないだろう」

ストレンジラブ「それに！　何かというと自分を卑下したがる。二言目には「僕なんか…」だ」

ストレンジラブ「なぜ自分のやっている事に自信を持たない⁉」
スネーク「まあ、論文の盗用だしな…」
ストレンジラブ「大体、奴には主体性ってものがない。NASAでも、コスタリカでも、人の後を付いて回っては、「ねえ、何か手伝えることはないかな?」だ」
ストレンジラブ「なぜ堂々と論陣を張って、私とやり合うくらいのことをしない?」
スネーク「そいつは俺でも勘弁してほしいが…」
ストレンジラブ「おまけに、人のつけたあだ名を、喜んで自分でも使ってる。その神経がわからない。主体性がないのも甚だしい」
スネーク「ヒューイってのは、あんたが付けたあだ名だったのか…」
ストレンジラブ「そうだ。『サイレント・ランニング』というSF映画に出てくるドローンから取った」
スネーク「ドローン?」
ストレンジラブ「一種の作業ロボットだ。後を付いてきては人の指示を待っているところがそっくりだったんで、拝借した」
ストレンジラブ「『2001年宇宙の旅』でSFXをやっていたダグラス・トランブルが監督したアメリカ映画だ」
スネーク「意外だ。科学者ってのはSFが好きなんだな…」
ストレンジラブ「(聞いていない)それにそもそも!」
スネーク「まだあるのか」
ストレンジラブ「そもそも、奴は男だ」
スネーク「……さっきは「男のくせに」と言っていたようだが」
ストレンジラブ「(バツが悪そうに)…まあ、科学者としては優秀だ」
ストレンジラブ「爬虫類(レプタイル)ポッドなしに、哺乳類(ママル)ポッドは動かない。脳幹や小脳のない大脳がないように」
ストレンジラブ「それを設計した技術は、認めてやろう」
スネーク「珍しいな。あんたが他人を褒めるとは」
ストレンジラブ「ふん。客観的に評価しただけだ」
ストレンジラブ「私は、自分の意志で、前へ進む人間が好き。状況に流されるようでは話にならない。まずはそこからだ」

●セシール

スネーク　「あの研究施設(ラボ)で、セシールとは楽しくやっていたようだな」
ストレンジラブ「な…。人聞きの悪いこと言うな。私はただ、秘密を知られるわけにいかないから、仕方なく…」
スネーク　「風呂だって、わざわざ洗ってやらなくても、一人で入れて、外から鍵をかければ済むだろう」
ストレンジラブ「それは…。彼女が不安そうにしていたので、その…」
スネーク　「余計、不安にさせたんじゃないのか？」
ストレンジラブ「彼女は美しかった。私はそれを讃えただけだ」
スネーク　「相当怯えていたぞ」
ストレンジラブ「危害は加えていない。彼女もそれはわかっていたはず」
スネーク　「だが身の危険を感じて逃げ出した」
ストレンジラブ「私はともかく、コールドマンに見つかったら何をされるか…」
ストレンジラブ「（ため息）そうね。本当は助けてあげたかった。だがママルの完成と引き替えには出来ない」

スネーク　「それで、彼女が逃げやすい状況を作った？」
ストレンジラブ「そこまでやさしいと思う？」
ストレンジラブ「…まあ確かに、監視を厳しくはしなかった。建物から逃げ出すのは容易だったはず」
スネーク　「出た後の方が大変だったようだがな」
ストレンジラブ「とにかく、私は彼女のことで、責められるようなことは何もしていない。わかった？」
スネーク　「ああ、それは信じよう」

■メタルギアＺＥＫＥ

●ＺＥＫＥのＡＩ

ストレンジラブ「ヒューイからも聞いていると思うが、このマザーベースで生産できるパーツには限りがある」
ストレンジラブ「だからＺＥＫＥ(ジーク)のＡＩは、お前が引き抜いてきたＡＩ兵器の記憶板を流用することにした」
スネーク　「それで上手くいくのか？」
ストレンジラブ「人間の脳というのは、ひとつのパーツがひとつの機能を担当しているわけではない」
ストレンジラブ「私たちのＡＩも同じだ。ある機能を持った

複数のパーツ同士が連携し合い、その機能を強化していく」
ストレンジラブ「例えば、センサーを制御する記憶板が多ければ索敵能力が上がる。機動を司る記憶板を多く搭載すれば機動力が上がる」
スネーク「つまり、搭載する記憶板に応じて、ＡＩの能力が変わってくるというわけか」
ストレンジラブ「そうだ。ＡＩの機能を強化したければ、多くの記憶板を集める必要がある」

・ザ・ボスＡＩとの違い

スネーク「ＺＥＫＥ（ジーク）用のＡＩは、ピースウォーカーのものとどう違う？」
ストレンジラブ「ＺＥＫＥ（ジーク）用は人の思考を移植したものではない。核報復を判断する機能は載せていない」
ストレンジラブ「その代わり、指揮官の命令に従って高度に自律的な戦闘行動を取る。歩兵を守り、敵を殲滅しつつ、もし指令が降りれば…」
スネーク「核を撃つ」
ストレンジラブ「そんな機会が来ないことを祈ってる」
スネーク「ああ。それは俺も同じだ」

●ＶＯＣＡＬＯＩＤ

ストレンジラブ「メタルギアＺＥＫＥ（ジーク）の音声合成システムについて説明しておきたい」
スネーク「音声合成システム？」
ストレンジラブ「通常の兵器なら操縦者が話をすればいいが、自律行動するＡＩ兵器には操縦者がいない」
ストレンジラブ「ＡＩ兵器自身が状況を周囲に伝えないと、周囲の歩兵と連携した行動ができない」
スネーク「確かに。戦場でも言葉でのコミュニケーションは重要だ」
ストレンジラブ「だからＡＩ兵器には音声合成システムが搭載されている」
ストレンジラブ「とはいえ、自らの意志で会話ができたのはピースウォーカーだけだ」
ストレンジラブ「他のＡＩは、プリセットされた言葉を状況に応じて発声している」
ストレンジラブ「ＺＥＫＥ（ジーク）に関しても同じだが、お前があらかじめ音声を用意しておけば、好きなときにそれを使うこともできる」
ストレンジラブ「音声を用意したければエクストラ（ＥＸＴＲＡＳ）メニューからＥＤＩＴモードに入ればいい」

スネーク「用意周到だな」

ストレンジラブ「歌を歌わせることもできるぞ」

スネーク「歌？」

ストレンジラブ「歌は大切だ。私はあのとき、歌の力を思い知らされた」

ストレンジラブ「もっとも、ＺＥＫＥ（ジーク）のＡＩが自分の意志で歌うことはない」

ストレンジラブ「あくまで、用意された歌を再生するだけだ」

ストレンジラブ「スネーク、お前には作曲は無理だろうが…歌詞は好きなように変えてみるといい」

「資料ファイル」

■パスの入手したテープ

●二人の女性の会話

女性1　「……DEWラインが検知した弾頭数は」
女性2　「57」
女性1　「うちMIRV数は」
女性2　「最低29。最大35」
女性1　「目標地域は」
女性2　「合衆国東海岸」
女性1　「推定再突入時刻は」
女性2　「2048Z（ズールー）」
女性1　「大統領が選択した攻撃オプションは」
女性2　「不明」
女性1　「それは大統領の死亡を意味するか」
女性2　「不明。連絡途絶状態」
女性1　「…本機は攻撃目標をオファット空軍基地に設定する」
女性2　「それは友軍の基地よ！　どうしてそんな結論になるの⁉」
女性1　「予想弾頭到達数から、行政府（ワシントンDC）は壊滅すると考えられる」
女性1　「大統領死亡の可能性も高く、合衆国の政治機能は停止状態にある」
女性2　「それはわかる。だからこそ報復が必要でしょう」
女性1　「両陣営が共に壊滅すれば、無政府状態が世界を覆い、復興は困難となる」
女性1　「故に、合衆国の核攻撃能力を無力化し、機能麻痺が少ない共産陣営を温存すべきと判断した」
女性2　「敵に寝返るということ⁉　そんな馬鹿な」
女性1　「…では、敵とはなんだ？」
女性1　「地球には、国境などどこにもない」
女性2　「（独り言）またこんな結論…どこかに不整合がある…？」
女性2　「わかった。質問を変えましょう。競合検査を始める」
女性1　「了解」
女性2　「…あなたは吊り橋を渡っている」
女性1　「それは任務？」
女性2　「そう。対岸が目的地だ。橋は狭く、1人し

女性2　か通れない」
女性1　「対岸から男が歩いてくる。男は銃を持っている」
女性2　「撃つ」
女性1　「男があなたの夫だったら?」
女性2　「…撃つ」
女性1　「それは、身を守るため?」
女性2　「違う。哀しみを分かつ為。どちらかが死に、どちらかが生きる…」
女性2　「…次の質問」
女性1　「あなたは父親に屋根の修理と芝刈りを頼まれた。はしごで屋根に上がると、はしごは取り外される」
女性2　「修理を続ける」
女性1　「終わったら」
女性2　「飛び降りる」
女性1　「骨折では済まない高さよ」
女性2　「判断変更の必要を認めない。芝刈りが完了していない。任務に忠実であるべき」
女性1　「…次」
女性2　「茂みにヘビがいる。猛毒のヘビだ。駆除して欲しい」
女性1　「追い立てて、巣へ帰す」
女性2　「追い返せない。凶暴なヘビだ。何人も犠牲になっている」
女性1　「……追い返す」
女性2　「殺さなければあなたが咬まれる」
女性1　「帰れ!」
女性1　「……殺して……私を……」
女性2　「なぜ殺さない。駆除は任務だ。それがあなたの『忠』か?」
女性1　「…………(自己矛盾のため回答できない)」
女性2　「誰に忠を尽くすか? 国家か? 思想か? 情か?」
女性1　「私は…私は…私は…」
女性1　「自分に忠を尽くす」
女性2　「…誰!?」
兵士1　「誰だ!?」
兵士2　「侵入者だ!」
兵士2　「いたぞ!」

■ストレンジラブの回想

●邂逅

ストレンジラブ「私はこれから、コスタリカへ向かう。見知らぬ土地。しかも、CIAの極秘任務だ」

ストレンジラブ「命の保証はない。それは、CIA自身に消されるという危険も含めてだ」

ストレンジラブ「だから私は記録しておこうと思う。彼女…ザ・ボスの名誉のためにも」

ストレンジラブ「子供の頃から、星空を見上げるのが好きだった」

ストレンジラブ「日が落ちてから外へ出て、冷たい空気を吸い込む。月。金星。そして無限の彼方にある恒星達」

ストレンジラブ「マンチェスターで満天の星空が眺められる機会など、滅多になかった。それでも私の憧れを掻き立てるには十分だった」

ストレンジラブ「時にドイツ軍の空襲におびえながらも、私は空を見上げ、そしていつしかその場所へ到達することを夢見た」

ストレンジラブ「もっとも、それには現実的な理由もあった」

ストレンジラブ「私は肌が弱かった。ちょっと日光に当たるだけで、真っ赤に腫れ上がる。日中に外で遊ぶなんて、もっての他だ」

ストレンジラブ「自然と、外出は夜に限られる。だから、同年代の子供と一緒に遊ぶ機会はほとんどなかった。それを寂しいとも思わなかった」

ストレンジラブ「彼らの思考は非合理的だ。それでいて単純。容易に予測できる」

ストレンジラブ「男の子なら、戦車、飛行機、珍しい虫。女の子なら、綺麗なドレス、お菓子、ガラス玉。それと気になる男の子について…」

ストレンジラブ「そもそも話が合わない」

ストレンジラブ「もっとやりきれないのは、大人も大差ないことだ」

ストレンジラブ「不合理で、単純。特に男はそうだ。成長するにつれ、頭は女のことでパンパンになる」

ストレンジラブ「幸い、私には数学の才があったらしい」

ストレンジラブ「10の頃には、近所にあったチューリング博士の家で数理論理学について議論をしていた」

ストレンジラブ「博士の家は、夜遅くになっても明かりがついていたから」

ストレンジラブ「『理論的には』と博士は言った。『どんなア

ルゴリズムも、計算機で実現できるはずだ』」

ストレンジラブ「博士は他の男達程馬鹿ではなかった。その理由は、彼の死後に知ることになるのだが」

ストレンジラブ「『そのうち、計算機が知能を持つ時代が来る』」

ストレンジラブ「私はその考えに、ひどく心を動かされた」

ストレンジラブ「数学の才は、私を星空に近づけてくれた」

ストレンジラブ「飛び級。米国への留学。そして、カリフォルニア工科大学（カルテク）在学中に、ＮＡＳＡが設立された」

ストレンジラブ「私は迷わず手を挙げた。私はその頃一端のコンピュータエンジニアだったし、ＮＡＳＡはその技術を欲していた」

ストレンジラブ「仕事は楽しかった。その頃には、自分自身が宇宙へ行くことは諦めていたが、その一端を担えるだけで嬉しかった」

ストレンジラブ「私はマーキュリー計画に配属された。ソ連に対抗しての有人飛行計画だ」

ストレンジラブ「そのパイロット候補として、７人の男が選ばれた。彼らは『オリジナル７』と呼ばれ、一躍時の人となった」

ストレンジラブ「計画は概ね順調に進んだ。資金も、資料もふんだんにあった」

ストレンジラブ「どのように解析したものか、スプートニクの設計図に近いものまであった」

ストレンジラブ「ソ連に追いつくのは時間の問題のように思えた」

ストレンジラブ「彼らは犬を衛星軌道に送り込み、無事帰還させていた。だがそれは偶然の成功だ、と上層部は見立てていた」

ストレンジラブ「アメリカは再突入船を、主に洋上で回収する」

ストレンジラブ「だが、ソ連が接している海のほとんどは北極海だ。彼らは再突入船を陸上に降ろさざるを得ない」

ストレンジラブ「犬ならともかく、人間を無事帰還させるにはまだ時間がかかる。そう思われていた」

ストレンジラブ「１９６１年１月末。我々は、チンパンジーを乗せての弾道飛行に成功した。ハムと呼ばれたその猿は、元気に生還した」

ストレンジラブ「成功の喜びに沸くＮＡＳＡへ、一人の女性が赴任してきた。予備のパイロット兼、ア

ドバイザーだという」
ストレンジラブ「美しいブロンド。精悍な口許。厳しげな眼差し。だが、その目の奥には、慈しみの光をたたえた瞳があった」
ストレンジラブ「それがザ・ボスだった」
ストレンジラブ「お祭り気分の我々を一瞥して、彼女はこう呟いた」
ストレンジラブ「『今日の内に喜び(ジョイ)を味わっておくといい。明日からは真実と向き合うことになるのだから』」
ストレンジラブ「その通りになった」
ストレンジラブ「翌日、大幅な計画の前倒しが宣告された。新たな情報によれば、ソ連の有人飛行はもう数ヶ月後に迫っているのだと言う」
ストレンジラブ「上層部の見立ては狂っていた」
ストレンジラブ「第二のスプートニク・ショックを生むわけにはいかない。何としてもソ連より先に、人を宇宙へ送り込まなければならない」
ストレンジラブ「どだい無理な命令だった。ようやく、猿に一回目の宇宙飛行をさせたばかりだ。人を乗せる以上、『失敗しました』では済まされない」
ストレンジラブ「英雄扱いの『オリジナル7』が乗るならなおさらだ」
ストレンジラブ「おまけに上層部は、宇宙船に窓を付けろと言う」
ストレンジラブ「パイロットは実験動物ではない。無事帰還した暁には、〝英雄〟に宇宙から見た景色を語ってもらわねばならないから、と」
ストレンジラブ「無茶苦茶だ。今ある宇宙船に無理矢理窓を付けたら、強度が保てない。それに、宇宙線の遮蔽にも問題が出る」
ストレンジラブ「だが、ザ・ボスはその要請によく応えた。宇宙については門外漢だったはずが、一度我々の話を聞いただけで状況を理解した」
ストレンジラブ「彼女は厳しかった。自分にも、他人にも。それは冷酷にすら見えた」
ストレンジラブ「だが、私は彼女に惹かれた。彼女は美しく、そして何よりも聡明だった」
ストレンジラブ「彼女の思考はどこまでも合理的で、にも関わらず私には予測不能だった」
ストレンジラブ「その判断が、彼女の膨大な知識(ナレッジ)ベースから

来ているだろうことは、容易に想像できた」

ストレンジラブ「簡単に言えば、他の誰よりも多様で、かつ厳しい経験を積んできたということだ。その広がりは、無限に思えた」

ストレンジラブ「私は彼女の内側に、もう一つの星空を見たのだ」

ストレンジラブ「同性の気易さもあってか、彼女は私と親しくしてくれた」

ストレンジラブ「日の下に出られなくとも、彼女が私を照らしてくれる。柔らかな月の光のように。私は幸せだった」

ストレンジラブ「彼女の的確なアドバイスの元、着々と計画は修正されていった。ただ一つ、パイロットの安全性を除いては」

ストレンジラブ「パイロット選出の日、『オリジナル7』は全員が静かに席を立った。無理もない。あまりに危険な賭けだ」

ストレンジラブ「例え彼らが志願したとしても、ＮＡＳＡ上層部がそれを許さないだろう」

ストレンジラブ「マスコミの表舞台に立つ国家的英雄である彼らに、その任を押しつけられるはずがない」

ストレンジラブ「静まりかえった会議室で、ザ・ボスがゆっくりと手を挙げた。予めそう決まっていたかのように」

●歓喜

ストレンジラブ「私は彼女の搭乗に反対した。宇宙線の遮断が不十分だとレポートを書いて提出した」

ストレンジラブ「だが、上層部の答えはこうだった『彼女（ザ・ボス）は、ネヴァダで既に被曝している。だから適任だ』」

ストレンジラブ「あまりに不合理だった。被曝が蓄積されれば、危険度はより高まる」

ストレンジラブ「だが、スプートニク・ショックから立ち直れない政府の連中に、理性的な判断は望むべくもなかった。彼らはそれほどまでに焦っていた」

ストレンジラブ「ヒトは目に見えないものに、余りにも鈍感だ。だが、私には身に沁みていた」

ストレンジラブ「目に見えない紫外線が私の肌を灼くように、宇宙からの重粒子線は、不可逆なダメージを人間に与えるだろう」

ストレンジラブ「要は彼女を使い捨てにすると言うことだ」

ストレンジラブ「飛行を控えた身体チェック。その際に私は、ザ・ボスの頭蓋X線写真に、奇妙な点を見つけた」
ストレンジラブ「大脳右半球の一部が欠損しているのだ」
ストレンジラブ「彼女の聡明さと驚異的な身体能力からすれば不可解だったが、ともかくも私はそれを報告することにした」
ストレンジラブ「彼女の身体に異常が見つかれば、飛行は取りやめになると思ったから」
ストレンジラブ「…だが、報告へ向かう私を、彼女自身が押しとどめた」
ストレンジラブ「『なぜ？　このままモルモットになるつもりなの⁉』」
ストレンジラブ「そう詰め寄る私を、彼女は研究所の屋上に誘った」
ストレンジラブ「満天の星空だった。そこで私は聞いたのだ。彼女が頭に傷を負ったわけを」
ストレンジラブ「1943年、ロス・アラモス」
ストレンジラブ「特殊部隊に所属していた彼女に、一つの指令が下った」
ストレンジラブ「世界初の原爆開発を目指すマンハッタン計画。その科学者の中に、ドイツのスパイがいる。その男を消せ、と」
ストレンジラブ「科学者の名はフォン・ノイマン。超人的な計算能力を持つ数学者にして、爆縮レンズの設計者だ」
ストレンジラブ「マンハッタン計画は国家プロジェクトだ。それなりの警護もある」
ストレンジラブ「だが、彼らに真相を知られるわけにはいかない。警護の目をかいくぐって、事故死に見せかける」
ストレンジラブ「…彼女なら難なくこなせる任務のはずだった」
ストレンジラブ「だが作戦直前に、彼女は一つの事実を知った。自分の中に新たな生命が宿っていることを」
ストレンジラブ「歓喜（ジョイ）が彼女を包み、同時にそれが一瞬の判断力を喪わせた」
ストレンジラブ「運悪く警護と撃ち合いになり、とっさにお腹をかばった彼女は、頭部に銃弾を受けてしまう……」
ストレンジラブ「脳の表面を掠めただけとは言え、銃創周辺は壊死。彼女は昏睡状態に陥った」

ストレンジラブ「回復は絶望と思われた。だが、3ヶ月後には意識を回復。半年後には以前と同じように動けるようになっていたらしい」

ストレンジラブ「機能代償…喪われた部分の機能を、他の部分が補ったのだ。理論的にはあり得る。が、これほどまでの回復は奇跡だ」

ストレンジラブ「彼女の超人的な意志の力が為した技なのか。それとも」

ストレンジラブ「『お腹の子のためにも、生きなければと思ったのかもね。身体が』」

ストレンジラブ「そう言って彼女は笑った。その気持ちが、私にはわかる」

ストレンジラブ「『それ以来、私のことを〝左脳の女〟と言う人もいた。任務のためには、手段を選ばなかったから』」

ストレンジラブ「確かに彼女は厳しかった。だが、彼女にも感情や情緒はあったのだ。それは、私が一番よく知っている」

ストレンジラブ「結局、ノイマンはスパイではなかった」

ストレンジラブ「暗殺指令は、ソ連が意図的に漏らした偽情報によるものだった。彼女は騙されたのだ」

ストレンジラブ「当時東西陣営は、対ナチスという一点で連合していた」

ストレンジラブ「ヒトラーが核を持つ前に、連合国側が原爆を開発せねばならない」

ストレンジラブ「だがその後を見据えた時、マンハッタン計画の急激な進展は、ソ連にとって面白くない事実だった」

ストレンジラブ「広島に落とされたウラン型原爆は、原料の面から量産が難しい」

ストレンジラブ「だが、プルトニウム型原爆が軌道に乗れば、量産化、将来の小型化も視野に入ってくる」

ストレンジラブ「アメリカにそこまで先を越されたくない」

ストレンジラブ「プルトニウム型に、爆縮レンズの技術は不可欠だ。だから、その鍵を握るノイマンを亡き者にする…それがソ連の計略だったのだ」

ストレンジラブ「その事実が知られたことで、アメリカとソ連との対立は決定的になった」

ストレンジラブ「フロリダには珍しく、寒い夜だった」

ストレンジラブ「震える私の肩を、彼女はそっと抱いてくれた」

ストレンジラブ「彼女の優しい匂いに包まれて、私は夢見心地で話を聞いていた」

ストレンジラブ「完璧に見える彼女の失敗。そしてその失敗が、奇しくもアメリカの優位を支えた…」

ストレンジラブ「超人と謳われたノイマンは、原爆以外にも、多くの功績を残していた」

ストレンジラブ「経済学におけるゲーム理論や、プログラム内蔵（ストアドプログラム）型コンピュータの理論化……」

ストレンジラブ「現在のコンピュータのほとんどが、このプログラム内蔵（ストアドプログラム）型、いわゆる『ノイマン型』だ」

ストレンジラブ「彼が殺されていたら、その普及が10年は遅れたかも知れず、私がここで研究することもなかった」

ストレンジラブ「それは詰まるところ、私がこうやって彼女の腕の中にいることもない、ということだ」

ストレンジラブ「私はその巡り合わせに感謝した」

ストレンジラブ「だが、彼女は意外なことを言った」

ストレンジラブ「『あの時、ノイマンを殺しておくべきだった』と」

ストレンジラブ「『なぜ？　指令は陰謀だったんでしょ？』」

ストレンジラブ「そう見上げる私に、彼女は諭すように続けた」

ストレンジラブ「『確かに、ノイマンに罪はない。罪なき人間を殺めるのは大罪だ。だが…ふと考えてしまう』」

ストレンジラブ「『もし私が任務に失敗しなかったら、この世界はどうなっていただろうか』」

ストレンジラブ「ノイマンがいなくとも、爆縮レンズはいずれ開発されただろう。ノイマン型コンピュータにしても同様だ」

ストレンジラブ「だが、もしわずかでも猶予期間があれば、東西が手を携える機会があったのではないか…彼女はそう考えているようだった」

ストレンジラブ「私にはそんな可能性があると思えなかったが、彼女の口調は断定的だった」

ストレンジラブ「彼女自身が両陣営の手を握らせるつもりでもあったかのように」

ストレンジラブ「『早すぎた爆縮レンズの実用化が、冷戦を生み、果てなき核軍拡の端緒となった。偽りとはいえ、あの任務は天の配剤だったのかも知れない』」

ストレンジラブ「我が子に語りかけるかのように、彼女は続けた」

ストレンジラブ「私の頭に、大きく、暖かい手が置かれていた」

ストレンジラブ「『あの時私は、母性を優先して、任務の遂行に失敗した。たとえ大罪を背負ってでも、私は彼を殺すべきだった』」
ストレンジラブ「『そうすれば、ヒロシマは無理でも、ナガサキの人達は犠牲にならなかったかも知れない…』」
ストレンジラブ「私は彼女を見上げた。彼女もまた星空を見上げていた」
ストレンジラブ「彼女の表情からは、自責の念が溢れていた。今のいびつな世界を作り出したのは自分なのだ…そう思い詰めているかのように」
ストレンジラブ「『でもそれが、あなたが実験の犠牲となる理由にはならない』」
ストレンジラブ「彼女の決意を翻すことはできまい。そう思いながらも、私は食い下がった」
ストレンジラブ「『ありがとう。心配してくれるのね。でも、私は忠を尽くさなければ』」
ストレンジラブ「そう言って彼女は微笑んだ」
ストレンジラブ「忠を尽くす…『何に？』という私の問いに、彼女は答えなかった」

●別離

ストレンジラブ「初の宇宙飛行へ向けて、訓練の日々が続いた」
ストレンジラブ「ザ・ボスは過酷な訓練に耐え、私はそれをサポートした。幸せな日々だった」
ストレンジラブ「そして4月12日。彼女の乗った飛行船は大気圏の外へ出た」
ストレンジラブ「わずか20分の弾道飛行とは言え、準備期間の短さから考えれば、奇跡と言ってよかった。人類初の宇宙飛行。我々は歓喜した」
ストレンジラブ「だが、帰途に悲劇は起きた」
ストレンジラブ「再突入時に外壁が変形。突入角が僅かにずれた。原因が、急ごしらえの窓にあることは明白だった」
ストレンジラブ「彼女の乗った宇宙船は、想定地点を大幅に外れて着水した」
ストレンジラブ「祈るような気持ちで着水地点へ急行する我々の耳に、ラジオのニュースが木霊していた」
ストレンジラブ「それはボストーク・ロケットの打ち上げ成功を告げるニュースだった。飛行士はユーリイ・ガガーリン。我々はタッチの差で、ソ連に先を越されたのだ」

ストレンジラブ「到着したとき、既に宇宙船は海中に飲み込まれていた。ザ・ボスは海上に浮いていた」

ストレンジラブ「その後のことはよく覚えていない」

ストレンジラブ「後で聞いたところによれば、私は奇妙な叫び声を上げながら、海へ飛び込んだのだと言う。肌が灼けるのも構わずに」

ストレンジラブ「彼女は目を覚まさなかった。全身打撲。火傷。宇宙線被曝。生きているのが奇跡だった」

ストレンジラブ「ソ連からは連日、輝かしい成果を誇るプロパガンダが流れてくる」

ストレンジラブ「なによりも我々が堪えたのは、翌朝の政府機関紙（イズベチヤ）が伝えたルポだった」

ストレンジラブ「そこには後にガガーリン少佐が発したと言われる、あの言葉が書かれていた。『地球は青かった』と」

ストレンジラブ「その言葉を語るべきもう一人の人物は、今なお床にある…」

ストレンジラブ「NASAは彼女のフライトを『なかったこと』にした」

ストレンジラブ「片や衛星軌道に乗って地球を一周し、パイロットは無事帰還」

ストレンジラブ「片や単なる弾道軌道による大気圏離脱。しかもパイロットは満身創痍で、宇宙船すら回収不能…」

ストレンジラブ「下手に発表すれば、国家の威信に関わる。そう判断されたのだ」

ストレンジラブ「軍の記録では、この時期ザ・ボスはピッグス湾事件に参加していたことになっているようだ」

ストレンジラブ「そこまでして糊塗したい記録だったのだろう」

ストレンジラブ「結局、1ヶ月後のアラン・シェパードによる弾道飛行が、アメリカ初の宇宙飛行とされた」

ストレンジラブ「ザ・ボスの犠牲で得られた知見が、シェパードの飛行船に活かされた。その成果だった」

ストレンジラブ「だが、そんなことはどうでもよかった。私はひたすら彼女の回復を祈った。片時も側を離れたくなかった」

ストレンジラブ「『お水をちょうだい』」

ストレンジラブ「夏が終わり、冬にさしかかろうという頃、私は彼女の声を聞いた」

ストレンジラブ「私は彼女の胸に飛び込んだ。彼女は私を受

け入れてくれた」

ストレンジラブ「それで十分だった」

ストレンジラブ「私は彼女から、宇宙について聞かせてもらえると思っていた。星の瞬かない、本当の空について」

ストレンジラブ「だが、彼女の口から出たのは、地球のことだった。宇宙から見た地球。儚く、そしてかけがえのない大地のこと」

ストレンジラブ「私は自分を恥じた。私は星空に憧れるあまり、足下を見ようとしなかった。自分が拠って立つ、この大地について」

ストレンジラブ「リハビリを終えると同時に、彼女は姿を消した」

ストレンジラブ「突然だった。私に連絡があったわけでもなく、上層部からも何一つ説明はなかった」

ストレンジラブ「不思議と驚きはなかった。彼女は次の任務を果たしに行ったのだろう。忠を尽くすために。そう思った」

ストレンジラブ「それから私は、人工知能(AI)の研究に没頭した。二度と彼女のような犠牲者を出さないために」

ストレンジラブ「危険とわかっている任務を、わざわざ人間がこなすことはない」

ストレンジラブ「今度は私が別の誰かを照らすのだ…と」

ストレンジラブ「あのフロリダでの夜、なぜ彼女は私に打ち明けたのだろう。過去のこととはいえ、極秘の作戦だったはずだ」

ストレンジラブ「私を信頼していたから…そう思いたいが、おそらく違う」

ストレンジラブ「彼女は聞いてほしかったのだ。それも、私ではない誰かに」

ストレンジラブ「我が子に語るような彼女の口調が、遠い目が、それを雄弁に語っていた」

ストレンジラブ「私はその〝誰か〟に嫉妬した」

ストレンジラブ「4年の後、私は彼女の訃報に接した。それも、『売国奴の死』という形で」

ストレンジラブ「祖国(アメリカ)から核を持ち出してソ連に亡命し、かつての弟子に殺された…そう聞かされた」

ストレンジラブ「私には信じられない。彼女がそんなことをするはずがない」

ストレンジラブ「考えられるとすれば、本気で東西を融和させようと試みたか…あるいは、殺されるこ

と自体が望みだったか」

ストレンジラブ「彼女は、この世界が本来の姿ではないと考えていた。核抑止による仮初めの平和に支えられた、この世界を」

ストレンジラブ「そして、その責任が自分にあるのだとも…」

ストレンジラブ「彼女は、死をもってそれを償おうとしたのかも知れない」

ストレンジラブ「彼女は、この世界への忠を尽くしたのだ」

ストレンジラブ「私の光は喪われた」

ストレンジラブ「そして私は、とてつもなく不合理な、自分自身の感情に戸惑っている」

ストレンジラブ「彼女が、自分の罪を伝えたかった相手」

ストレンジラブ「それが、彼女を殺した弟子だったのでは？」

ストレンジラブ「その想像が、私を狂おしいまでの嫉妬に駆り立てる」

ストレンジラブ「いずれ、確かめなければならない」

■ストレンジラブの実験記録

●スネークイーター作戦再現実験

ザ・ボスＡＩ「設定日時を入力せよ」

ストレンジラブ「1964年8月24日」

ザ・ボスＡＩ「場所（ロケーション）は」

ストレンジラブ「ソビエト連邦領内、ツェリノヤルスク」

ザ・ボスＡＩ「任務は」

ストレンジラブ「潜入エージェントのサポートだ。目的は核兵器技術者の奪還」

ザ・ボスＡＩ「そのエージェントとは」

ストレンジラブ「あなたの教え子、最も近い…」

ザ・ボスＡＩ「…了解。現時点での作戦進捗を述べよ」

ストレンジラブ「あなたの協力もあって、エージェントは技術者（ターゲット）との接触に成功。後は回収（リカバリ）を待つだけだ」

ストレンジラブ「この後、あなたが取るべき行動を推論せよ」

ザ・ボスＡＩ「…そのエージェントから技術者を奪う」

ストレンジラブ「何のために」

ザ・ボスＡＩ「亡命の手土産にするため」

ストレンジラブ「…なぜ亡命を？」

ザ・ボスＡＩ「かつての戦友と、特殊部隊を再興するため」

ストレンジラブ「違う！　目的が知りたいんじゃない。理由を聞きたいの。祖国を裏切る理由を」

ザ・ボスＡＩ「……祖国(アメリカ)を裏切る為に亡命を決めたのではない。亡命を企てた結果、祖国に背く事になったのだ」

ストレンジラブ「（独り言）やはりここで回答に時間がかかる……推論選択の確信度が低いのか？」

ストレンジラブ「西側の英雄であるあなたを、ソ連が信用する？」

ザ・ボスＡＩ「核技術者に加え、携行型核砲弾(デイビー・クロケット)を供与し、ソ連軍参謀本部情報総局(ＧＲＵ)の将校達の歓心を買う」

ストレンジラブ「…そしてあなたは、核を撃った」

ザ・ボスＡＩ「核を…撃つ？　私が？」

ストレンジラブ「そうだ。ソ連領内へ向けて」

ザ・ボスＡＩ「核は…血を凍らせる。明日を奪う。私が…核を？」

ザ・ボスＡＩ「人の生み出した業(カルマ)を…いや、私の業(カルマ)なのか？　私の失敗(ミス)が生み出した業(カルマ)…私は…私は…！」

ストレンジラブ「…命令(アテンション)。前向き推論を停止し、知識(ナレッジ)ベースとの照合を行え」

ザ・ボスＡＩ「了解(レディ)」

ザ・ボスＡＩ「…照合完了。推論を修正する。技術者が開発した新型兵器を奪取後、私は核砲弾(デイビー・クロケット)を、兵器開発局へ向けて撃つ」

ストレンジラブ「（独り言）前向き推論と後ろ向き推論とが競合(コンフリクト)している…」

ストレンジラブ「命令(アテンション)。前向き推論に戻れ」

ザ・ボスＡＩ「了解(レディ)」

ストレンジラブ「…あなたの弟子が、核技術者を奪い返しに来る」

ザ・ボスＡＩ「追い返す」

ストレンジラブ「彼は諦めない」

ザ・ボスＡＩ「仲間に倒させる」

ストレンジラブ「全員返り討ちにされる。そればかりか、あなたの亡命を受け入れたＧＲＵの将校までが、その弟子に倒される。新型核兵器と共に」

ストレンジラブ「あなたの取るべき行動は」

ザ・ボスＡＩ「…私が彼と戦う」

ストレンジラブ「なぜ？　将校が死んだ以上、あなたがそのエージェントと戦う意味はない。逃げれば

いい」

ザ・ボスＡＩ「私は…彼と戦わなければならない」

ストレンジラブ「理由がわからない。そもそも、あなた程の人が付いていながら、なぜＧＲＵの将校が倒されたの？　彼を見捨てた？」

ザ・ボスＡＩ「私は…待っていた…ずっと」

ストレンジラブ「ＧＲＵからＫＧＢに乗り換えればいい。残りの核砲弾（デイビー・クロケット）を手土産に。あなたほどの英雄…受け入れないはずがない」

ザ・ボスＡＩ「流されてゆけ。私は留まるしかない」

ストレンジラブ「そんなことは聞いてない！　推論の根拠を開示して‼　私に、真実を教えて…」

ザ・ボスＡＩ「戦闘相手は政治によって決まる」

ストレンジラブ「なぜ答えてくれないの⁉　これじゃ…これじゃまるで、あの男に殺されるために待ってたみたいじゃない！」

ザ・ボスＡＩ「私は売国奴…祖国を裏切った。殺されて当然…」

ストレンジラブ「あなたまでそんなことを⁉　違うでしょう？　あなたはそんな人じゃない！」

ザ・ボスＡＩ「私を…殺して…」

ストレンジラブ「やめて！　やめて‼　命令（アテンション）！　推論を中止しなさい‼」

ザ・ボスＡＩ「どちらかが死に、どちらかが生きる…」

ストレンジラブ「なぜ止まらないの⁉　推論中止！」

ザ・ボスＡＩ「綺麗でしょ？　生命の終わりは……」

ストレンジラブ「強制停止‼」

ストレンジラブ「…いつもここで推論が暴走する。やはり真実を解く鍵は、あの男が握っているのか？」

ストレンジラブ「あの男から聞き出さなくては。何としても…！」

■パスの日記

●その1

パス「今日からあの男のマザーベースに住まわせてもらうことになった。私にとっては、これからが本当の戦いだ」

パス「ザドルノフに寄宿舎と奨学金を提供してもらっていたけれど、そのザドルノフは捕らえられてしまった」

パス「KGBからの資金が流れてこなくなった以上、学校に通うことはできない」

パス「…そんな嘘にあの男は同情し、マザーベースで働きたいという私を受け入れてくれた」

パス「ミラーがなぜか強く押してくれたというのもあるが、なんにせよ愚かな男だ」

パス「部下の兵士達も低能揃いだ。訓練などして力を得ているつもりらしいが、そんなものは真の力の前には無に等しい」

パス「おまけに10代の女子学生という肩書きだけでチヤホヤしてくれる。おかげで仕事がしやすそうだ」

パス「先ほど居住区を偵察していたところ、甲板の片隅で兵士達が盛り上がっていた。近づいて様子を見ると、猫にエサをあげているところだった」

パス「『可愛いなぁ』なんて、いい歳した男たちが何をしてるんだか…」

パス「呆れつつも、同意を求められたらうなずくしかない。役割（ロールプレイ）を演じる必要がある」

パス「適当に話を合わせていると、兵士の1人が猫に名前を付けるよう求めてきた。親離れしたばかりで、まだ名前も決まってないらしい」

パス「私はその子猫に『ニューク』という名前を付けてやった」

パス「『生き物を思いやる気持ちが戦争への抑止力になる』なんて、心にもないことを言いながら」

パス「兵士達からもらった小魚を手のひらに載せると、子猫は嬉しそうにそれを食べた」

パス「なんて愚かで…無力なのだろう。虫酸が走る」

●その2

パス「今日はチコに誘われて、兵士達と一緒に釣

りをした」

パス「食料の自給という意味では有益なのだろうが、私に下らない仕事をさせないでほしいものだ」

パス「『釣りって結構楽しいよ』なんて言われても困る。私はここに遊びにきたわけじゃない」

パス「とはいえ、正体を悟られないためには、適当に付き合わなくてはならないのがつらいところだ」

パス「チコに押しつけられた釣り竿を持って甲板に出ると、集まっていた5人ほどの兵士が嬉しそうに歓迎してくれた」

パス「マザーベースでは男が圧倒的に多いだけに、私はまるでお姫様扱いだ。10代でも学生でもないことを、誰も疑いもしない」

パス「今日は良く晴れていて、風も波も穏やかだった」

パス「釣り竿を投げて魚がかかるのを待つ間、最初は兵士達にいろいろと質問をされた」

パス「私はいつもどおり、決められた設定に基づいて答えを返して、愛想笑い」

パス「適当にごまかしているうちに魚がかかり始め、兵士達もその対応に追われ始める」

パス「チコが魚にエサを取られ、怒って立ち上がったときに海に落ちそうになって、みんなが笑った」

パス「そのときは私もつい噴き出しそうになってしまった」

パス「しばらくして、私の釣り竿にも魚がかかった」

パス「軽い手応えを感じた次の瞬間、驚くほどの力で糸が引っ張られ始め、私は驚きの声を上げてしまった」

パス「かなりの大物だと思われた」

パス「初めての経験だったので、少し焦っていると、隣の兵士が後ろから竿を支えてくれた」

パス「この水面の下には、どんな魚がいるのだろう？　私は少し、訓練のときに潜った海を思い出した」

パス「あの頃も辛い日々ではあったが、優雅に泳ぐ色とりどりの魚たちには、不思議と心癒されたものだった」

パス　「格闘の末に釣り上げた魚は、意外にも半バーラ（40cm）、もなく、少し拍子抜けだった」

パス　「だけど遊びでやっているわけじゃないから、別に悔しくなんてない」

パス　「ニュークが物欲しそうな顔でうろうろしていたので、釣った魚はくれてやった」

パス　「さんざんな一日と言っていいだろう」

●その3

パス　「例の準備は着々と進んでいる」

パス　「ザドルノフを逃がしたのが私だということに、誰も気づいていない」

パス　「今日はアマンダと一緒に、セシールにガジョピントの作り方をレクチャーした」

パス　「ガジョピントは黒いんげん豆（フリホレス）と米（アロス）を合わせた、素朴な家庭料理だ」

パス　「コスタリカに限らず、中米一帯でよく知られている料理だけに、ニカラグア人のアマンダも得意料理らしい」

パス　「でも、私は物心ついて以来、合衆国（ステイツ）で育てられたから、母のガジョピントをほとんど思い出すこともできない」

パス　「脳天気なセシールや革命家気取りのアマンダに話を合わせるのは鬱陶しかった」

パス　「とはいえ、あまり素っ気なくするのも怪しまれそうで、私は彼女たちに付き合うしかないのだ」

パス　「特にセシールは、あのテープを録音した本人だけに注意が必要だ」

パス　「ミラー達は、私が、見つけたテープを勝手に友達のものと思った、と誤解してくれたようだが…」

パス　「何にしても、用心するに越したことはない」

パス　「…まずはみんなでニンニクや香草を切って、昨日から水につけておいた豆と一緒に煮込んだ」

パス　「豆が煮えるのを待つ間に、フライパンでタマネギと米（アロス）を炒める」

パス　「フライパンを持ったセシールにアマンダがいろいろと指示を出したけれど、セシールは少し鬱陶しそうだった」

パス　「フランス人だけあって、料理自体は得意らしい」

パス　「それからフライパンに水を入れ、炊きあがるのを待つ」

パス　「その間にアマンダは母親の思い出を語ってくれた」

パス　「ソモサのせいで彼女も母とは離ればなれになってしまったらしいが、〝おふくろの味〟はしっかり覚えているらしい」

パス　「豆が煮えると水を捨てて、残りの野菜と一緒に炒めなくてはならない。家庭料理とはいえ、手順は割と複雑だ」

パス　「とはいえ、忙しいのはありがたい。長時間話しすぎると、正体を疑われる可能性も高まる」

パス　「女同士となると、可愛く振る舞っていればいいというものではなく、疑われないようにかなり気を遣う」

パス　「米（アロス）が炊けたら豆と交ぜて、サルサを加えてさらに炒める」

パス　「炒めながら、話題はなぜか恋愛のことに移った」

パス　「女が集まるとどうしてこんな話になるのだろう？」

パス　「セシールはかなり恋愛経験が豊富らしく、アマンダにいろいろとアドバイスをしていた」

パス　「それだけならいいけれど、私にまで好きな人はいないのかと尋ねてきたのには腹が立つ」

パス　「今はいないとごまかそうとしたが、『スネークが好きなんでしょ?』と問い詰められてしまった」

パス　「私は面倒になって『そうかも』などと話を合わせた」

パス　「セシールは『彼、なかなかセクシーよね』などとうなずいていた。脳天気なものだ」

パス　「私は生きることに精一杯で、恋愛など考えたこともない。あんな男に興味はない」

パス　「そうしているうちに香ばしい匂いが立ちのぼってきて、ガジョピントが完成した」

パス　「料理をしていることがわかったのか、ニュークが私たちの足にすり寄ってきたけれど、あいにくと猫が喜ぶような食べ物ではなかった」

パス「兵士達に試食させることにして、私たちは食堂に向かった」
パス「思わずありつけた〝おふくろの味〟に、兵士達は大喜びだった」
パス「あいつらを喜ばせるつもりはなかったが、私だってこの程度の料理はできるのだ」
パス「スネークも喜んで食べていたけど…」
パス「繰り返すが、私はあんな男に興味はない」

●その4

パス「中米ではサッカーというスポーツの人気が高い」
パス「合衆国(ステイツ)ではまだあまり人気がないが、中南米(ラテンアメリカ)では熱狂的なファンを持っている」
パス「69年にエルサルバドルとホンジュラスの間に起きた戦争は、サッカー試合でのいざこざが原因と言われているほどだ」
パス「実際には両国は以前から緊張関係にあり、サッカーはひとつのきっかけにすぎなかったらしいが…」
パス「そうした説がまことしやかに囁かれるほどに、中米の人々はサッカーに熱狂しているのだ」
パス「ここの兵士達にもサッカーファンが多く、そんなわけでコスタリカチームとニカラグアチームに分かれて試合をすることになったらしい」
パス「サッカーと言えばボールの他にゴールが要るが、研究開発班が簡易的なサッカーゴールを開発して、甲板に設置してくれたという」
パス「私は別に興味もなかったけれど、チコに誘われて観に行くことになった」
パス「コートの大きさも正式なものとは違う、いい加減な試合だったけれど、選手も応援団もエキサイトしていた」
パス「空き缶やお手製のメガホンを打ち鳴らし、なんだかお祭りみたいな雰囲気だった」
パス「審判のヒューイがホイッスルを吹き、試合が始まった」
パス「身体的には日頃から鍛えている兵士達だが、本職の選手ではないだけに、技術的には荒削りで、ラフプレイも多い」
パス「途中、選手同士の衝突で1人が怪我をした。

それがきっかけで口論になりかけたけれど、ヒューイが取りなした」

パス　「『僕たちは国を捨て、この惑星と一体になったはずだ』――ヒューイはそう言った。スネークの言葉だ」

パス　「『国の優劣を競っているわけじゃない。国益をかけて戦っているわけじゃない』」

パス　「『これは戦争じゃない。サッカーは平和のスポーツだろう?』――ヒューイのそんな言葉に、兵士達はうなずいた」

パス　「彼らは戦争の痛みを知っているし、スネークに賛同している。それゆえに思うところがあったのだろうか」

パス　「人数の減ってしまったコスタリカチームには、なぜか私が入ることになった」

パス　「それまでコスタリカが押していただけに、ヒューイとしてはバランスを取りたかったのかもしれない」

パス　「兵士達もヒューイの判断に賛同した。コスタリカの選手達も、互角の方が楽しいと思ったのかもしれない」

パス　「最初は面倒に思っていたが、炎天下でボールを追っていると、本気で走らなくても汗だくになってしまう」

パス　「そのうちに半ばやけくそのような気分になり、私は本気でボールに向かい始めた」

パス　「敵陣深くでこぼれ球を拾うと、『いけ、シュートだ!』なんて、ニカラグア人のくせにチコが声援を送ってくれた」

パス　「渾身の力を込めて放ったシュートは、相手チームのキーパーに阻まれた」

パス　「それが悔しくて、私はさらに真剣になってしまった」

パス　「結局、私は1点も取れず、コスタリカは逆転負け」

パス　「でも、なかなかの接戦だった」

パス　「私たちはお互いの健闘を称え合い、疲れた身体を甲板の日陰に横たえた」

パス　「火照った体に、強い海風が心地よい」

パス　「そこはニュークのお気に入りの場所でもあるらしく、彼もくつろいだ様子で寝そべっていた」

パス「澄んだ青い空を、羊雲がゆっくりと流されていく」

●その5

パス「天気がいいから水着になって、甲板に置かれたサマーベッドに寝転んでいると、ストレンジラブが近づいてきた」

パス「この暑さにもかかわらず、彼女はいつもどおりの長袖長ズボンという姿だった」

パス「私が手を振ると、彼女は『こ、これは奇遇ね』などとつぶやいて、目をそらした」

パス「用件を尋ねると、私の体を舐めるように視線を這わせてきた」

パス「そして、『綺麗な肌ね…』と生唾を飲む」

パス「私は少し戸惑いつつ、『そんなことないですよ』と首を振った」

パス「同性愛者だという噂は知っていたけれど、まさか、私は狙われているのだろうか？」

パス「彼女は私を見つめ、『いいえ、綺麗な肌よ。でもあまり日焼けするのはいただけないわ』と、手を握ってきた」

パス「私は『別に日焼けぐらい…』と話を打ち切ろうとしたが、彼女は激しく首を振った」

パス「『それはいけない。いけないわ。女の子は肌を大事にしないと！』なんて、妙に興奮した様子だった」

パス「彼女の主張によると、日焼けは皮膚を老化させ、シミやソバカス、最悪の場合皮膚癌の原因にもなるという」

パス「ソバカスの原因になることぐらい私も知っていたけれど、色素の薄いアングロサクソンだけの問題だと思っていた」

パス「けれど、日焼けは皮膚を老化させるのよと女科学者に言われると、急に怖くなってくる」

パス「10代という設定を守るためにも、肌には気を遣う必要があるかもしれない」

パス「私が困っていると、彼女はポケットから小さなチューブを取り出した。自分が愛用している日焼け止めだという」

パス「プレゼントするから使ってくれと言われ、私は戸惑った」

パス「もらえるのは嬉しいが、彼女の意図はどこ

パス　にあるのだろうか?」
パス「純粋な親切？　あるいは、やはり私を狙っている?」
パス「とはいえ、断ることもないかもしれない」
パス「私もある程度の訓練は受けている。何かあったとしても、運動不足の女科学者から身を守ることとぐらい容易い」
パス「力があれば怖れるものはない。核を持つ国が他国と有利に交渉できるのと同じだ」
パス「私は素直に礼を言ってそれを貰うことにした」
パス「すると彼女は、塗ってあげると言ってチューブから指にクリームを出し、私の胸に押しつけてきた」
パス「突然のことに私は驚き、抵抗するのも忘れてしまった」
パス「白くて細い指が私の腹を撫で、彼女はそれを、ビキニのブラに包まれた胸の谷間へと滑らせた」
パス「『え？　ちょっと…』と慌てる私を、彼女は潤んだ目で見つめた」
パス「綺麗…。10歳以上も年上の女性に対し、私はなぜか見とれてしまった」
パス「耳元で『じっとして』と囁かれ、私は黙って頷くしかない」
パス「体の力が抜けて、魅入られたように動けない」
パス「そんな私の全身に、彼女は丁寧に日焼け止めクリームを塗っていった」
パス「私はそんな趣味はないはずなのに、不覚にも少しうっとりしてしまった」
パス「やはりあの女は危険だ…。気をつけることにしよう」

●その6

パス「健康管理もエージェントの大切な仕事ではあるが、不覚にも風邪に罹ってしまった」
パス「考えてみればマザーベースの人口は増加傾向にあり、様々な出身地の兵士が様々な経緯で集まってきている」
パス「いつどこから未知のウィルスが持ち込まれてもおかしくはない」
パス「とはいえ、私が感染したのはただの風邪だった」
パス「数日寝ていれば治るという医療班の診察に

基づき、私は自室でひたすらベッドに身を横たえるしかなかった」

パス「理解し合える相手がいないことには、もう慣れたつもりだったけれど…」

パス「こんなときは、やはり自分が一人であることを惨めに思う」

パス「私はただニュークの背を撫で、つらさを紛らわせた」

パス「ニュークは黙って、私の隣にいてくれた」

パス「けれど横になっている間に、アマンダやチコ、ヒューイ、セシール、ミラー、それから私と比較的仲の良い何人かの兵士が見舞いに訪れた」

パス「アマンダは風邪に効くという薬草入りのスープを作ってくれた」

パス「ミラーは『今はゆっくり休め。俺が子守歌を歌ってやる』と、ギターを持ってきて、日本語のわけのわからない歌を歌った」

パス「歌詞の意味はわからなかったが、歌が下手なことだけはよくわかった」

パス「その後、『風邪には座薬が効く！　俺が見本を…』とズボンを脱ごうとしたので、そばにあったティッシュの箱を投げつけて追い出した」

パス「それからストレンジラブも来た。なんでも、インドのいい薬を持っているという」

パス「『ユーカリの葉のエキスが入っていて、胸に塗るとよく効くの』――そう言って彼女は、私のジャージを脱がせようとした」

パス「もちろん、枕でぶん殴って追い返した」

パス「チコは小さな花をコップに入れて持ってきた。何かに付着してマザーベースに持ち込まれたわずかな土から、勝手に生えてきたものらしい」

パス「『これ、甲板で見つけたんだ。やるよ』などと素っ気ない態度を取っていたものの、どうもチコは私のことを好きなようだ」

パス「彼らは理解者ではない。見舞いに来てもらったことを、素直に喜ぶこともできなかった」

パス「夜になって、スネークまで私の部屋に来た」

パス「私をただの女子学生と信じて気遣ってくれる彼に、私は尋ねてみた」

パス「なぜ国を捨てたのか？　なぜ自分達の軍隊を組織したのか？」

パス「もちろん私は、その答えを知っている。けれど、一度は彼の口から聞いてみたかったのだ」

パス「想像はしていたが、彼は多くを語らなかった」

パス「ただ、自分は戦うことしかできなかった故に国に捨てられたと。それでも戦うことしかできない故に、国家から自由な部隊が必要だったと」

パス「そして彼は言った。『俺には戦いしかわからない。だが、平和を信じる者を否定しようとは思わない』」

パス「私だって平和など信じていない。闘争こそが人間の本質だ。生き残るには、敵を倒さなくてはならない」

パス「もしかしたら、私たちは似た者同士だったのかもしれない」

パス「けれど、だからこそ私は、彼を殺すことになるだろう」

パス「あるいは私が殺されるか」

パス「このまま ろくでもない人生を続けることを考えると、この男に殺されるのも悪くないように思えた」

●その7

パス「マザーベースでは毎月、その月生まれの兵士達を集めて誕生会をやっている」

パス「戦闘集団がバースデーパーティというのもまたミスマッチだけど、要するに酒を飲んで騒ぐための名目らしい」

パス「洋上の要塞としては、酒を手に入れるのも楽じゃない」

パス「日頃は訓練に明け暮れていることもあり、なかなか自由に酒を飲んだりも出来ないようだ」

パス「そこで兵士達の息抜きのために、スネークとミラーが毎月こうしたパーティをすると決めたのだという」

パス「もちろん無骨な戦士たちの誕生会だけに、ケーキの蝋燭を吹き消したりなんて気取ったことはしない」

パス「煙草の煙が立ちこめる中、酒を飲んで肉を

喰らう。下品な冗談や、お互いの出身を揶揄した差別語が飛び交う」

パス　「けれど本気のケンカになることはあまりないようだ。口ではいろいろ言いつつも、皆このパーティを楽しんでいるみたいだった」

パス　「不思議なものだ。ＦＳＬＮ（サンディニスタ）にいた人もいれば、ＵＣＬＡにいた人もいて、昔はお互い敵同士だったはずなのに」

パス　「これもあの男、ＢＩＧＢＯＳＳ（ビッグボス）の人望のなせる業（わざ）なのか」

パス　「それとも国を捨てたことで他国への憎しみも消えてしまったのか」

パス　「ミラーは『下品なヤツばかりで悪いな』などと私に気を遣ってくれたけれど、そのうち自分も酔っぱらってしまったらしい」

パス　「『本当の俺を見てくれ！』などと叫び、ズボンを下ろしてみんなに尻を見せ始めた。他の兵士達も爆笑だ」

パス　「なんてバカらしいパーティなんだろう。けれど…」

パス　「こんな風に下らないことをして笑っているのが、もしかしたら平和というものなのだろうか？」

パス　「私はなぜか、ここに来てからのことをひとつひとつ思い出していた」

パス　「チコ達とした釣り、アマンダやセシールとの料理、みんなとのサッカー、風邪のときに見舞いに来てくれた人たち…」

パス　「思えばここに来てからが、私の人生で最も平和な時だったのかもしれない」

パス　「しかし、それももう終わる」

パス　「彼が交渉に応じるとも思えない。私は他ならぬＢＩＧＢＯＳＳ（ビッグボス）と戦うことになる」

パス　「私がＢＩＧＢＯＳＳ（ビッグボス）に勝てるかは疑問だが、ＣＩＰＨＥＲ（サイファー）に逆らうのは死よりも恐ろしい」

パス　「ただ死ぬのであれば怖くはないが、命令に背けば、私はそれ以上の恐怖と絶望を味わうことになるだろう」

パス　「それに、孤児だった私に住む場所と食料を与えてくれたのはＣＩＰＨＥＲ（サイファー）だ。その命

令は常に理不尽ではあったが、恩を忘れたわけではない」

パス「やはり私は、あの男と戦うしかないのだろう」

●その8

パス「スネークの右腕とも言えるミラーだが、彼には少しばかり悪い癖があるようだった」

パス「すぐに手近な女に手を出すのだ」

パス「10代は対象外なのか、私には何もしてこないが…」

パス「その代わりと言ってはなんだが、マザーベースで数少ない女性兵士に、次々と声をかけているらしい」

パス「女の方も女の方で、よせばいいのに簡単に引っかかってしまう」

パス「あんな男でも外見だけは悪くないというのが、問題の根幹なのかもしれない」

パス「今日もそんなミラーの悪い癖がトラブルの種となったようだ」

パス「スネークとミラーが珍しくケンカしているところを、私は目撃した」

パス「シャワー室から出てきた二人は、全裸で殴り合っていた」

パス「私も男の裸を見て頬を赤らめるほど子供ではないが、これにはさすがに驚いた」

パス「『これで少しは懲りろ！』などと叫びつつ、スネークはミラーの胸を殴りつける」

パス「あとから聞いた話だが、どうやらミラーが二股をかけていて、女性兵士がそのことでスネークに相談したらしい」

パス「私に言わせれば、そんなことは騙される女が悪い」

パス「ミラーに誠意がないことを見抜けないというのは、女としてレベルが低すぎる」

パス「しかし、こうしたことはこれまでにも何度となくあったようで、さすがにスネークがミラーに注意した」

パス「それにミラーが反論し、そのうち悪口の言い合いになり、殴り合いへと発展したらしかった」

パス「『やりやがったな！』とミラーもスネークを殴り返す」

パス「スネークは『いいパンチだ』と笑い、『だ

パス　が俺には効かん』と反撃に転じる」
パス　「シャワー室でも相当殴り合ったらしく、二人はすでにアザだらけになっていた」
パス　「戦闘のために鍛えられた彼らの肉体は、全身が凶器と言ってもいい」
パス　「殴り合うだけでもあちこち出血していた」
パス　「とはいえ、彼らが本気になればこの程度では済まないだろう。全力で戦えば、どちらかが死ぬのは明白だ」
パス　「『これならどうだ！』と再び拳を振るうミラー」
パス　「スネークも殴り返す。しかし、やはり急所は外しているようだ」
パス　「『さすがだな、ボス…』――息を整えながらつぶやいたミラーの頬にも、笑みが浮かんでいた」
パス　「それからも二人は、しばらく殴り合いを続けた」
パス　「汗が弾け飛び、肌に血がにじむ」
パス　「殺意も憎しみもない殴り合い。こんな暴力行為は見たことがなかった」

パス　「それでも二人はただ馴れ合っているのではなく、お互いの技術を尽くして戦っている」
パス　「スポーツのようにルールがあるわけでもないのに、どうしてこんなことができるのだろう？」
パス　「奇妙な戦いはやがて、二人が疲れ果てることでようやく終わった」
パス　「相手のボロボロになった姿を見て、二人はどちらからともなく大笑いを始め、抱き合って相手の健闘を讃えた」
パス　「バカとしか思えなかった。私には彼らの気持ちは理解できない」
パス　「けれどなんとなく、女好きと言われているミラーが、本当に信頼しているのはスネークだけなのだろうという気がした」
パス　「私などが二人の間に入り込むことはできないのだろう」
パス　「そう思うと少し、負けたような気がした」

●その9

パス　「マザーベースでちょっとしたお祭りが行われることになった」

パス「普段戦いに明け暮れているスネークたちが、年に一度くらいはゆっくりと平和な日を過ごそうという趣旨らしい」

パス「話の経緯はよくわからないが、スネークとミラーの間でそういう話になったのだという」

パス「これにはみんなが賛成だった。娯楽の少ないマザーベースだけに、誰もがイベントは歓迎なのだろう」

パス「しかし、それはいいとして、いつの間にか私が歌を歌うことになっているとは…」

パス「『俺たちは名前が同じじゃないか。平和ってことで』とミラーは言った」

パス「『あとザドルノフの奴も、平和にちなんだ名前だろ?』」

パス「『せっかくの平和の日だし、平和トリオってことでバンドでもやろうぜ』――というのがミラーの主張だった」

パス「私の意見を確認もせず、ミラーはみんなにその話をしてしまっており、私が歌うことはすでに確定事項になっていた」

パス「どうやらミラーは、私が以前甲板で歌っていた声を耳にして、それ以来バンドをやりたいと考えていたようだった」

パス「兵士達の期待も高く、今さら断れそうにもない」

パス「人前で歌ったことなどないが、期待されるのは悪い気分ではなかった」

パス「まあ、ミラーが歌うよりマシなのは明らかだろう」

パス「けれど、ZEKE（ジーク）の改造はすでに完了している。私は使命を果たさなくてはならない」

パス「CIPHER（サイファー）を裏切ったりすれば、私は死より恐ろしい絶望を味わうことになるだろう」

パス「でも…」

パス「今すぐ計画を実行に移さなくても良いはずだ」

パス「少しぐらい決行を遅らせても問題はないのでは?」

パス「せっかくの平和の日…。それを待ってからでも良いのではないだろうか?」

パス「もしかしたら、私は問題を先送りにしているだけかもしれない」

パス「その日が来れば、いずれにしても私かスネ

ーク、そのどちらかが死ぬことになる」

パス「それでも…」

パス「せめて平和の日までは…。CIPHERにはなんとか嘘をつけば…」

パス「なぜかそんなことを、私は考え始めている…」

●その10

パス「正体がバレた」（焦り）

パス「CIPHERのことや真の目的はバレていないけれど、私が工作員であることはバレてしまった」

パス「もう一刻の猶予もない。今すぐ計画を実行に移すしかない」

パス「私の使命を果たさないと…」

パス「いったいどうしてこんなことに…。あと3日、たった3日で良かったのに…」

パス「ミラーの曲ももうできてる。『恋の抑止力』――感情を素直に表現できない女の子の、切ないラブソング」

パス「練習もした。本当の歌手のようには歌えなくても、ちゃんとやれる自信もあった」

パス「それなのに…」

パス「元はといえば、ZEKEの完成がCIPHERに漏れたのが原因だ」

パス「きっとマザーベースの中に、私の他にもCIPHERに通じている人間がいる」

パス「組織の力を編み目のように張り巡らせ、個人の意志が介入する隙間をなくす――あいつらのやりそうなことだ」

パス「ZEKEの完成を知ったあいつらは、私に作戦の決行を急がせた」

パス「平和の日を無事に迎えるためには、決行できない事情を作るしかなかった」

パス「だから私は、ZEKEを壊そうとした」

パス「駆動系でも故障させて、計画を延期せざるを得ない理由ができれば…」

パス「そう思い、私は深夜を待って格納庫に忍び込んだ」

パス「人為的な破壊がバレたらまた面倒なことになる」

パス「私は慎重に、駆動系の負荷がかかりやすい部分を選び、部品を変形させようと試みた」

パス「歩行機械の駆動系には高い工作精度が要求

される」

パス「わずかな変形でも、計画を遅延する理由になるはずだった」

パス「けれど、破壊工作をチコに目撃されてしまった」

パス「また寝付けずにうろうろしていたんだろうか？　私の破壊工作を目撃し、チコは驚き、怯えていた」

パス「その気になれば殺せたはずだ。でも撃てなかった！」

パス「チコが私を好きだというのはわかってた」

パス「私はあんな子供に興味はないけれど…」

パス「でも、その小さな背中に、とっさに引き金が引けなかった」

パス「チコは誰かに言うかな？」

パス「私を庇って、誰にも言わないでくれれば…」

パス「…ダメね」

パス「私が…チコが思ってたような女じゃないって、もうわかっちゃったはず」

パス「事情も聞かずに逃げちゃったし、きっと幻滅してる」

パス「工作員であることがみんなにバレれば、今までのような関係を続けることはできない」

パス「それに…私の他にもＣＩＰＨＥＲ（サイファー）に通じている人間がいるとすれば…」

パス「ＺＥＫＥ（ジーク）を壊そうとしていたことは、ＣＩＰＨＥＲ（サイファー）にも伝わってしまう…」

パス「私にとって、ここは天国（ヘブン）ではなくなった」

パス「…やっぱり、今すぐ決行するしかない」

パス「チコに目撃されたのは破壊活動の最中だったから、まだＺＥＫＥ（ジーク）は動く」

パス「本来のパワー、スピードは出ないかもしれないけれど、修理している時間はない」

パス「ＺＥＫＥ（ジーク）に乗らない限り、私に勝ち目はないのだ」

パス「チコが人を呼ぶ前に先手を打たないと…」

パス「どうせやらなくちゃいけないことだった」

パス「ほんの少し…予定が早まっただけ…」

パス「…行くよ、ＺＥＫＥ（ジーク）」

パス「メタルギアＺＥＫＥ（ジーク）、起動――」

■ザ・ボスの最後の任務

●EVAによるデブリーフィング

EVA「私は彼女から全てを聞いた」
EVA「なぜ私に打ち明けるのか？」
EVA「その時はわからなかった」
EVA「でも、いまならわかる」
EVA「スネーク？　彼女はあなたに伝えたかったのよ」
EVA「あなたに伝えるために私が選ばれた」
EVA「だから私は助けられた」
EVA「あなたには多くの嘘をついた。でも、これは違う」
EVA「私が政府から指示された任務は『遺産』の入手と……」
EVA「真相を知っている者を全て始末する事」
EVA「つまり、あなたをも殺さなければならない」
EVA「でも、それは出来ない」
EVA「あなたと愛し合ったからじゃない」
EVA「あなたに命を救われたからでもない」
EVA「あの人との約束を守るため」
EVA「ザ・ボスとの約束」

EVA「これだけはあなたに言わなければならない」
EVA「そしてあなたには……生きてもらわなければならない」
EVA「スネーク、いい？」
EVA「彼女はアメリカの裏切り者ではない」
EVA「いいえ、彼女はむしろ国の為に死んでいった英雄」
EVA「彼女は全て覚悟の上で任務を遂行した」
EVA「自己犠牲……それが彼女の務めだった」
EVA「ザ・ボスの亡命はアメリカ政府が仕組んだ偽装亡命だったの」
EVA「アメリカ政府は『賢者の遺産』を手に入れるために大きな芝居をうった」
EVA「その主役がザ・ボス」
EVA「ヴォルギン大佐が受け継いだ『遺産』を手に入れ……」
EVA「同時にシャゴホッドを破壊する為に仕組んだ」
EVA「大佐も伝説の英雄であるザ・ボスにだけは気を許す」
EVA「『賢者の遺産』のありかを探るのが彼女の最大の任務」

EVA「偽装亡命はうまくいった」
EVA「ただ思いもしない事態が起こった（VRミッションで）」
EVA「ヴォルギン大佐がソコロフ設計局に向けてアメリカの核弾頭を撃ち込んだ」
EVA「アメリカ政府はフルシチョフから潔白を求められた」
EVA「『遺産』の奪取という当初の計画を中止する事もできない」
EVA「作戦のシナリオは大きく加筆、修正させられた」
EVA「アメリカ政府の潔白を証明するためにザ・ボスは抹殺されなければいけない……」
EVA「自らの政府の手によって」
EVA「公に、そして後々まで記録されなければいけない」
EVA「それが穏便にすませる最善の策だと結論された」
EVA「生還は許されなかった」
EVA「自決も許されない」
EVA「あなたに、愛した弟子(サン)によって命を絶たれる……」
EVA「それが政府の望んだ、遂行されなくてはならない……」
EVA「彼女に課せられた任務……」
EVA「あなたに殺される事が……」
EVA「彼女に与えられた責務だった」
EVA「軍務のために仲間を背(そむ)く」
EVA「常人なら到底、耐えられない重荷」
EVA「彼女は汚名を着せられたまま葬られる」
EVA「後の世紀まで彼女は語りつがれる」
EVA「アメリカでは恥知らずの売国奴として……」
EVA「ソ連では核兵器を撃ち込んだ凶人として……」
EVA「表の世界史に犯罪者として永久に記録される」
EVA「誰にも理解されないまま……」
EVA「それがザ・ボスの最後の任務(ミッション)」
EVA「彼女は見事に任務(ミッション)を全うした」
EVA「でもあなただけには伝えたかったのだと思う」
EVA「あなたの記憶の中には残りたかったのだと思う」
EVA「軍人としてではなく、女として」
EVA「だけど自分の口から伝える事は禁じられて

いた」

EVA「それで私に真実を……」

EVA「スネーク、これは歴史には記録されない」

EVA「誰にも伝えられる事のない」

EVA「あなたの心だけに残す……」

EVA「彼女の帰還報告（デブリーフィング）」

EVA「全ては国のため」

EVA「祖国の為、名誉（オナー）も命も捧げた」

EVA「彼女こそが英雄（ヒーロー）よ」

EVA「彼女こそが真の愛国者（パトリオット）」

■EVAからのメッセージ

●その1

EVA「スネーク、久しぶり…。ニカラグアでは随分派手にやったみたいね」

EVA「私の方は、相変わらずよ。『賢者の遺産』は〝有効に〟使われているみたいね…」

EVA「それより…今回は少し、あなたに話したいことがあるの」

EVA「同封した写真、見てくれた?」

EVA「10年前私は、ザ・ボスにそれを託された…」

EVA「ごめんなさい、今まで黙っていて。本当は、すぐに話すべきだったかもしれない」

EVA「でも、私もこの10年、迷っていた。あなたに渡すべきかどうか」

EVA「そのわけは、これから話すことを聞けば、多分わかってもらえると思う」

EVA「同封した写真…それは彼女の遺品よ」

EVA「これのどこが? って思うでしょうね。新聞や雑誌でも見かける写真だもの」

EVA「そう、写っているのはオリジナル7。アメリカ初の宇宙飛行士達。マーキュリー計画の英雄」

EVA「でも、元々この写真に写っていたのは8人。8人目の姿は、綺麗に消されてる」

EVA「修整によって存在自体が抹消された8人目の宇宙飛行士…それが彼女、ザ・ボスなの」

EVA「なぜザ・ボスの存在が隠蔽されなければならなかったのか」

EVA「政府が、写真を修整してまで隠したかったものとは何か」

EVA「それを話すには、17年前まで遡る必要があ

EVA る…」

EVA 「冷戦の時代、核兵器とともに東西は宇宙開発技術を競い合っていた」

EVA 「1957年、ソ連は世界初の人工衛星、スプートニク1号を打ち上げた」

EVA 「アメリカ国民は愕然とした。それまで、自国(アメリカ)の科学技術が最も進んでいると無邪気に信じていたから」

EVA 「その驚きは、同時に怖れでもあった」

EVA 「人工衛星を打ち上げるためのロケット技術。それはそのまま、核ミサイルに転用できる」

EVA 「アメリカも慌てて宇宙開発に本腰を入れた」

EVA 「次の年には、陸軍がアメリカ初の人工衛星、エクスプローラー1号の打ち上げに成功」

EVA 「秋にはアメリカ航空宇宙局(NASA)を立ち上げ、マーキュリー計画も始動した」

EVA 「人間を宇宙へと送り込む計画…そのパイロット候補として、7人の男が選ばれた」

EVA 「『オリジナル7』と呼ばれた彼らは、国の英雄として、西側宇宙開発の象徴(イコン)として祭り上げられた」

EVA 「でも、エクスプローラー以降、アメリカのロケット打ち上げは失敗続き。焦った政府は一つの決断を下したの」

EVA 「アメリカの宇宙開発技術が成熟するのを待つ余裕はない。ソ連の技術を盗み、同時にその宇宙計画を妨害せよ、ってね」

EVA 「それが極めて困難な任務(ミッション)であることは、あなた自身が知っていると思う」

EVA 「ソ連の宇宙開発は、分厚い機密の壁に覆われている」

EVA 「その情報を得るのは並大抵ではない」

EVA 「研究機関内部に協力者を確保し、潜入工作員(スリーパー)を送り込む。または、協力者自身をスリーパーに仕立てる…」

EVA 「必要なら、自ら潜入して活路を開かなくてはならない」

EVA 「知識と経験、そして優れた直感が必要になる…」

EVA 「その実行役として白羽の矢が立ったのが、ザ・ボスだった」

EVA「大統領直々の指名だったそうよ」

EVA「祖国の命運を賭けた任務（ミッション）を任せられるのは、大戦の英雄しかいない。そう思ったんでしょう」

EVA「それが59年6月のこと」

EVA「そう、ザ・ボスがあなたの前から姿を消したのは、この極秘任務（ミッション）のためだったの」

EVA「だけど、この人事にCIAが臍を曲げた。自分達の頭越しに大統領の指令が下ったことが、面白くなかったのね」

EVA「もともと困難な任務（ミッション）なのに、CIAは彼女への協力を渋った。人も情報も出さなかった」

EVA「孤立無援の状況に、ザ・ボスはある決断を下した。大きな危険を伴う決断を」

EVA「それはあの『賢者達』のネットワークを使うことだった…」

EVA「そしてそのときから、運命の歯車が回り出した…」

●その2

EVA「『賢者達』…20世紀初頭に結ばれた米中露の秘密協定、それを支えた実力者達…」

EVA「もちろん、その頃既に米ソの『賢者達』は袂を分かっていた」

EVA「でも、ソ連側の残留『賢者達』の中にも、共産党の一党独裁を快く思わない勢力があったの」

EVA「ザ・ボスは彼らと連絡を取った」

EVA「秘密裡にベルリンで接触し、ソ連第一設計局（OKB-1）へのつてを探った」

EVA「ある時は大金を握らせ、ある時は亡命の手助けをすることで、シンパを懐柔したの」

EVA「それは彼女にとって、大きな危険を伴うものだった」

EVA「『賢者達』はザ・ボスに関する情報全てを握っている。いえ、情報だけじゃない」

EVA「戦場で生んだ彼女の子供も、生まれてすぐ『賢者達』に奪われていたの。あなたも聞いたはず」

EVA「その子がもしソ連側『賢者達』の元にいたら…身の危険が及ぶのは彼女だけでは済まないかも知れない」

EVA「それでも彼女はそうするしかなかった」

EVA「当時、ソ連のミサイル配備はアメリカの遙か上を行っていると思われていた」

EVA「もしそれが本当なら、ソ連からは核抑止の軛が外れていることになる」

EVA「ひとたび何かあれば、ソ連は核を撃つかも知れない…」

EVA「あなたも知っている通り、ミサイル・ギャップはソ連のはったりだった」

EVA「ソ連はその情報を信じ込ませるために全精力を注いでいたし、結局は宇宙開発ですらその一環だったとも言える」

EVA「でも、当時はそれがわからなかった」

EVA「彼女は自嘲気味にこう言っていた。「私も、ミサイル・ギャップという情報に踊らされたひとりだ」って」

EVA「彼女は祖国（アメリカ）のため、そして核戦争回避のために、火中の栗を拾いに行ったのよ」

EVA「彼女の身を挺した努力によって、何とか設計局（OKB-1）内にスリーパーが確保できた」

EVA「アメリカ航空宇宙局（NASA）は、東側の膨大な技術情報を手に入れられるようになった」

EVA「59年の末には、チンパンジーの『サム』を乗せたロケットが弾道飛行に成功」

EVA「あくまで大気圏内の弾道飛行だけど、この成功はＮＡＳＡに強い技術的な確信を与えたの」

EVA「そうやって活動が軌道に乗った頃になって、ＣＩＡが声をかけてきた」

EVA「『大戦の英雄であるあなたが、いつまでも汚れ仕事（BLACK OPS）を続けることはない。後は我々が引き継ごう』って」

EVA「要は成果を横取りしようということよ」

EVA「でも、ザ・ボスは素直に譲った。『私が必要とされる局面（フェイズ）は終わった。その後の評価に興味はない』って」

EVA「ＮＡＳＡが成果を上げる一方で、ソ連の有人飛行計画は進展していないように見えた」

EVA「『東側の技術者達は、サムの生還にうろたえている』」

EVA「潜入中のスリーパーは、そう報告してきた」

EVA「ソ連はスプートニク2号で、早々に宇宙へ生物を打ち上げていた。『クドリャフカ』

　　…そう、あのライカ犬よ」

EVA　「でも、彼女（クドリャフカ）は地球に戻れなかった」

EVA　「アメリカは、帰還する宇宙船を海で回収出来る」

EVA　「でも、ソ連が面しているのは氷に覆われた北極海。彼らは宇宙船を陸上に降ろすしかない」

EVA　「そのために、どうやって着陸の衝撃を和らげるのか？」

EVA　「スリーパーは『ソ連はその打開策を見つけられていない』そう告げていた」

EVA　「ソ連に対する妨害も順調に見えた」

EVA　「スプートニク4号は大気圏への再突入に失敗」

EVA　「その二月後の打ち上げでは、ロケットが台座で爆発した」

EVA　「スプートニク5号は2匹の犬を周回軌道に乗せて無事帰還したけど、スリーパーからは偶然の成功と報告されていた」

EVA　「犬ならともかく、人間を安全に帰還させる技術はソ連にない…」

EVA　「皆その情報を信じて、安心しきっていた。ただ一人、ザ・ボスその人を除いて」

EVA　「ザ・ボスは送られてきたスプートニク5号の見取り図に疑問を持った」

EVA　「そのカプセルには、不自然な射出装置が付いていたの」

EVA　「『普通に考えれば、必要のない装置だ。一体何を打ち出すと言うのか…？』」

EVA　「彼女の疑問を、NASAは一蹴した」

EVA　「『事故の際、フライトレコーダーを射出するためだろう』ってね」

EVA　「ザ・ボスは調査の必要性を主張したけれど、CIAは取り合わなかった」

EVA　「成果を再び自分のものにしたくて言っている。そう思われたんでしょうね」

EVA　「納得できない彼女は、単身ソ連へ乗り込んだ。CIAからは何のバックアップもなかったそうよ」

EVA　「そして年が明け、1961年になった頃、ついに自らソ連の第一設計局（OKB-1）へと潜入を果たした」

EVA　「そこで彼女は真実を目にすることになったの」

●その3

EVA「かつて彼女が確保したスリーパーは、二重スパイになっていた」
EVA「ソ連に寝返り、アメリカに嘘の情報を送っていた…」
EVA「その理由を知って、ザ・ボスはさらに驚くことになった」
EVA「CIAの現地エージェントが、スリーパーへの報酬を中抜きしていたの」
EVA「報酬が危険に見合わないと感じたスリーパーは、ソ連に提示された金額を前に簡単に転んだ」
EVA「アメリカの諜報活動は、ある時点から東側に筒抜けだったのよ」
EVA「それにスリーパーからの報告と違って、ソ連の有人飛行技術は大きく進んでいた」
EVA「直接乗り込んだ第一設計局(OKB-1)で、ザ・ボスはスプートニク5号の真実を知った」
EVA「大気圏再突入後、高度7,000mで宇宙船からパイロットを座席ごと射出する…」
EVA「それが着陸のためにソ連の出した答えだった」
EVA「スプートニク5号についていた射出装置は、そのためのものだったの」
EVA「重い宇宙服を着て高々度からパラシュート降下する…あまりに危険な方法」
EVA「実際、ソ連でもそれは承知だった。初飛行に成功したガガーリンは、再突入前に二階級特進していたほどよ」
EVA「ソ連ならではの方法だった。あの国の情報統制下なら、失敗した実験は簡単に『なかったこと』にできる…」
EVA「ザ・ボスから情報を受けたNASAは蒼ざめた」
EVA「このままでは、初の有人宇宙飛行という快挙を、ソ連に奪われてしまう」
EVA「それはスプートニク・ショックの再来を意味する…」
EVA「慌てたのはCIAも同じだった」
EVA「自分達の不手際で、偽情報をつかまされることになったのだから」
EVA「確かに、ソ連の偽装情報は見事だった。嘘と真実を巧みに織り交ぜ、諜報活動が順調

EVA　に進んでいるように思わせた」
EVA　「それこそ、ザ・ボスでなければ見抜けないような…」
EVA　「ソ連側に相当の手練がいることは確実だった」
EVA　「だからと言って、CIAの失敗が帳消しにはならない」
EVA　「だけどCIAはそこで、自分達の責任を回避する妙案を思いついた」
EVA　「彼らにとって都合の良いことに、前の年の選挙で新たにジョン・F・ケネディが大統領に選ばれていた」
EVA　「引き継ぎの際、CIAは経緯を知らない新大統領に嘘を並べ立てた」
EVA　「自分達の失敗は隠し、裏切るようなスリーパーを選んだザ・ボスに全責任があると言い募った」
EVA　「彼らはこうも言った。スリーパーをコントロールするのに最も行うべきただ一つの方法を、ザ・ボスは使わなかった」
EVA　「それは、スリーパーの家族を人質にすることだ、と…」

EVA　「『確かに、その方法は極めて有効だ。だが、私にはできなかった。どうしても…』」
EVA　「そうザ・ボスは言っていた。かつて生んだ我が子を『賢者達』に取り上げられた彼女にとって、それだけはできなかったんだと思う」
EVA　「CIAはそこにつけ込んだの」
EVA　「ケネディは、米ソのミサイル・ギャップを埋めると公約していた」
EVA　「宇宙開発競争に負ければ、公約は反故になる…」
EVA　「ケネディが『賢者達』につながる人間でないことも、事態を悪化させた」
EVA　「『賢者達』のネットワークを知らない彼の目には、それを利用したザ・ボスが内通者同様に映ったのね」
EVA　「そして彼女には過酷な運命が待っていた…」
●その4
EVA　「スリーパーが裏切った責任を取り、有人宇宙船開発のためのモルモットになること…それが新たにザ・ボスに下った指令だった」

EVA「当時NASAはチンパンジー『ハム』の宇宙弾道飛行に漕ぎ着けていた」

EVA「それをヒトに置き換えるための、地上実験の数々」

EVA「耐G実験、無重量実験、加圧酸素内でのシミュレーション、宇宙服のテスト…」

EVA「その中には、大きな危険を伴うものもある。マスコミで英雄扱いのオリジナル7を被験者にできないような…」

EVA「彼らに代わって、その被験体になれ。それが指令だったの」

EVA「命令を拒否して、CIAと言い分を争うこともできた。でも、彼女はそれをしなかった」

EVA「『軍務を通して私が得た経験が、その実験に役立つ可能性は十分にあった。ならば、引き受けるべきだと思った』…彼女はそう言っていた」

EVA「その成果はすぐに現れた」

EVA「単に被験者になるだけでなく、ザ・ボスは経験に基づく的確なアドバイスをスタッフに与えたの」

EVA「NASAの計画は再び加速した」

EVA「これなら何とか人を載せて宇宙へ出られる…」

EVA「NASA首脳部もザ・ボスの能力に感服し、8人目の宇宙飛行士、『オリジナル・レディ』として扱うようになった」

EVA「あなたに渡した写真は、その頃に撮ったものよ」

EVA「それもあるいは、『初の女性宇宙飛行士』というプロパガンダに使うためだったのかも知れないけど…」

EVA「ようやく目処が立ってきたその頃、新たな難題が降りかかった」

EVA「政府が『宇宙船に窓を付けろ』と言い出したの」

EVA「当時、NASAの宇宙船には窓がなかった。『ハム』も宇宙を見ることはできなかった」

EVA「けれどソ連の宇宙船には窓が付いているという情報が入って、政府は焦った」

EVA「宇宙開発は一種のプロパガンダでもある」

EVA「宇宙飛行士という『英雄』が、宇宙から見た光景について語る…それこそが重要だ」

EVA「何より、ソ連にできて我々にできないことがあってはならない…それが彼らの理屈だった」

EVA「それは無茶としか言えない指令だった」

EVA「ただでさえ無理なスケジュールに、不確定要素を加えることになる」

EVA「窓を付けることで強度は低下。宇宙線の遮蔽にも問題が出る」

EVA「そんな危険な宇宙船に、マスコミの寵児である『オリジナル7』は乗せられない」

EVA「パイロットに選ばれたのはザ・ボスだった…」

EVA「打ち上げるだけならともかく、生還の可能性は2割もない計画」

EVA「それでもザ・ボスは、淡々と宇宙船（マーキュリー）の設計変更に協力し続けた」

EVA「彼女はNASAで、毎日自分の棺桶を造らされていたようなものよ」

EVA「そんな中、ソ連の有人飛行船『ボストーク』が発射場に運ばれたという情報が入った」

EVA「ソ連の打ち上げは明日、4月12日の予定だと…」

●その5

EVA「ソ連の『ボストーク』に負けるわけにはいかない」

EVA「NASAはテストの工程を大幅に省いて、飛行日程を繰り上げることにした」

EVA「ぎりぎりまで繰り上げて、発射時刻は翌日未明。NASAの飛行場（ケープ・カナベラル）では真夜中の発射になる」

EVA「飛行コースは、東に最も移動距離が長いパターンが選ばれた。『窓』から少しでも地球の昼の部分が見えるように」

EVA「ザ・ボスも搭乗手続きを2割以上省略して、宇宙船（マーキュリー）に乗り込んだ」

EVA「時刻も、コースも危険。テストも不十分。でも、NASAに選択の余地はなかった」

EVA「ザ・ボス自身、地球に帰れるとは思っていなかった」

EVA「二度とは帰れぬ旅。彼女の扱いは、あのライカ犬も同然だったの」

EVA「それでも彼女は船（マーキュリー）に乗った」

EVA「『誰かが最初の一人になるのだ。運命が私

を選んだのなら、受け入れよう。祖国のために。そして世界の均衡のために』」

EVA「そうザ・ボスは言っていた」

EVA「『僅かでも可能性があるなら、それに賭けよう。運命を受け入れた者だけに、それを乗り越える資格があるのだから』」

EVA「そして4月12日午前1時半、ザ・ボスは宇宙へ上がった」

EVA「それは奇跡だった。一つには、急拵えの船で宇宙に上がれたこと。もう一つには、飛行(フライト)がガガーリンとほぼ同時になったこと…」

EVA「彼女はそこから地球を見た。日の出と共に、窓から差し込む宇宙線に蝕まれながら…」

EVA「その時の事は、彼女から聞いたと思う」

EVA「国境のない地球。かけがえのない大地。宇宙は、国からも思想からも遠く離れていた」

EVA「今までソ連と1分1秒を争っていたことが、馬鹿馬鹿しく思えたそうよ」

EVA「『もし窓からボストークが見えていたら、きっと手を振っていたろう』って」

EVA「でも、2隻の宇宙船が辿ったその後の運命は、大きく違っていた」

EVA「ソ連のガガーリンは地球を一周した後、無事着陸」

EVA「一方、ザ・ボスの宇宙船は、再突入の角度に狂いが生じた」

EVA「無理矢理取り付けた窓が、不自然な渦流を生んだらしい」

EVA「彼女の乗った宇宙船は、大幅に軌道を外れて落下し始めた…」

●その6

EVA「軌道を外れたザ・ボスの船は、予定していた着水点を大きく逸れ、減速が足りないまま海面に激突した」

EVA「着水の衝撃で宇宙船は大破。そのまま沈没した。ザ・ボスは何とか自力で水面へ脱出した…」

EVA「全身打撲と放射線被曝。生きているのが不思議なくらいだった」

EVA「彼女はそのまま半年もの間、昏睡し続けた」

EVA「残念ながら、宇宙へ上がった時刻はわずかにガガーリンのほうが早かった」

EVA「それでも、アメリカ初の宇宙飛行は、輝かしい業績であるはずだった」

EVA「けれど、このことは歴史には記されていない」

EVA「それは、アメリカのメンツのためだった」

EVA「周回軌道に乗って地球を一周したガガーリンに比べ、アメリカ側はただの弾道飛行。飛行時間にも大きな違いがある」

EVA「何よりソ連側は、宇宙船もパイロットも無事だった」

EVA「なまじ生還したことで、美談に仕立て上げることもできない」

EVA「決定打は、飛行直後に開始されたソ連のプロパガンダ」

EVA「『地球は青かった』…この言葉を初めとしたガガーリンの体験談が、世界を駆け巡った」

EVA「瞬く間に、ガガーリンは世界中から賞賛と祝福を集めるようになった。ソ連にしてみれば、格好の宣伝だった」

EVA「アメリカ政府は沈黙するしかなかった」

EVA「ザ・ボスの飛行を公開することは、プロパガンダにはならない。むしろ逆効果だと判断されたの」

EVA「政府は、彼女の飛行を闇のミッションとして葬った…」

EVA「NASAとCIAは、マーキュリー計画からザ・ボスの痕跡を抹消することに全力を傾けた」

EVA「その結果が、この写真。本当に見事な修整でしょう?」

EVA「飛行計画だけでなく、彼女の存在自体が『なかったこと』にされたの」

EVA「それだけじゃない」

EVA「アリバイ作りのために、軍はザ・ボスがCIAによるキューバ奪還作戦『コスチノス湾事件』に参加していたことにした」

EVA「そのうえ回復後のザ・ボスを、軍は迎え入れなかった。彼女は、地下に潜るしかなかった」

EVA「公にはザ・ボスは『大戦の英雄』のまま。だけど、実際には違った」

EVA「もはや公的に存在しない人間。汚れ仕事(BLACK OPS)を引き受けるだけの存在…そう、彼女は亡者

として扱われたの」

EVA「ガガーリンは世界中を巡り、祝福を受けた」

EVA「一方ザ・ボスは『生ける亡者』として、それを語ることすら許されない」

EVA「彼女は政府の高官からこう言われたそうよ」

EVA「『君はなぜここにいるのかね?』」

EVA「『あの時、ガガーリンのように一端の名言でも吐いて名誉の死を遂げていれば、英雄として名を遺せたのに』って」

EVA「それから3週間後の5月5日、オリジナル7の一人、アラン・シェパードが宇宙弾道飛行に成功した」

EVA「彼の成功は、大々的に報道された」

EVA「ザ・ボスでの失敗を元に、改良を加えた成果だった」

EVA「ソ連はガガーリンの飛行に先立って、人形(イワン・イワノヴィチ)を使って着陸実験をしていたらしい」

EVA「ザ・ボスは人形同様の扱いだったことになる…」

EVA「でも、彼女は言った『人形だろうとなんだろうと、私の飛行が計画成功の助けになったなら、それは本望よ』って」

EVA「だけど、それだけでは終わらなかった」

EVA「ザ・ボスはソ連内の反政府的『賢者達』のつてで潜入工作員(スリーパー)を確保し、ソ連の宇宙開発計画に近づいた」

EVA「そして、ある時点からその事はソ連に筒抜けだった」

EVA「にも関わらず、アメリカ側ではその事実をつかめていなかった…」

EVA「ザ・ボスがつないだ『賢者達』のネットワークからも、スリーパーの裏切りは伝わってこなかったの」

EVA「そこには2通りの可能性しかない」

EVA「ソ連政府に近い『賢者達』が介入したか、あるいは反政府的だった『賢者達』が懐柔されたか」

EVA「それはアメリカ側の『賢者達』にとって、許すことのできない事実だったの」

EVA「ザ・ボスは『賢者達』のメンツを保つため、言わば落とし前を付けるためだけに、再びソ連に潜入することになった」

EVA「そこで彼女は、ソ連側のエージェントと対峙した…」

●その7

EVA「再びソ連に潜入したザ・ボスを待っていた相手」

EVA「彼女が確保したスリーパーを抱き込み、偽情報を流した男」

EVA「それはザ・ボスのかつての戦友であり、彼女が生んだ子の父親だった」

EVA「そう、ザ・ソローと呼ばれたあの男よ」

EVA「彼も、スリーパーを送り込んだのがザ・ボスとは知らなかった」

EVA「いえ、ソ連側の賢者達が意図的に知らせていなかったの」

EVA「かつて愛し合った二人を戦わせ、殺し合わせる」

EVA「『どちらかが生き、どちらかが死ぬ。それがソ連側賢者達の、私への報復だった』…そう彼女は言っていた」

EVA「二人ともが生き残れば、今度は彼らの子供が報復の対象になる」

EVA「選択の余地はなかった」

EVA「ザ・ボスは彼(ザ・ソロー)を撃った」

EVA「彼はそれを自ら受け入れた…」

EVA「ソ連から祖国(アメリカ)に戻った彼女に、もう居場所はなかった」

EVA「祖国に尽くし、そのために亡者としての扱いを受ける…」

EVA「為政者が代わったというだけで、理不尽に責任を負わされる」

EVA「私なら到底耐えられない」

EVA「そんな彼女に声をかけたのが、ＳＡＳで同期だったゼロ少佐だった」

EVA「これがＦＯＸの始まりよ」

EVA「その彼女が受けた任務…ごめんなさい、これはあなたが一番よく身に染みて知っているはずね」

EVA「アラン・シェパードの弾道飛行から20日後、ケネディ大統領は月へ人間を送り込むと宣言した」

EVA「ザ・ボスが手に入れた情報がなければ、アメリカの宇宙開発は決定的に遅れていた」

EVA「人類が月へ行くこともなかったかもしれない」
EVA「でも、その任務が彼女の身体を蝕み、名誉を奪い、愛する人をも喪わせた」
EVA「ただ数奇と言うには、哀し過ぎる巡り合わせ…」
EVA「ソ連も有人飛行の実績を重ね、63年にはテレシコワが世界初の女性宇宙飛行士となった」
EVA「闇に葬られた、NASAの『オリジナル・レディ』計画を参考にしたとも言われているわ」
EVA「これが、ザ・ボスがあなたと離れてから果たした任務の全て」
EVA「スネーク、あなたはこう言うかも知れない」
EVA「自分をエージェントに使ってくれたら、決して裏切らなかった…そうでしょう?」
EVA「でも、ザ・ボスはあなたを巻き込みたくなかったんだと思う。彼女には予感があったんでしょうね」
EVA「この任務には、『賢者達』のネットワークが必要になる」

EVA「それを使う以上、どちらに転んでも何らかの代償を支払わなければならない…」
EVA「それを、誰よりもわかっていたんだと思う」
EVA「だからどうか、悔やまないで」
EVA「ザ・ボスはこの写真を託す時、あなたに渡すかどうかは私に任せる、と言った」
EVA「彼女もきっと迷ってたんだと思う」
EVA「あなたが自分を責めるだろうとわかっていたから」
EVA「なぜザ・ボスがこの写真をずっと持っていたのか。それはわからない」
EVA「存在を消された恨みを忘れないため? 違う、彼女はそんな人じゃない」
EVA「きっと彼女はこう伝えたかったんだと思う」
EVA「自分は生ける亡者として存在を消された。でも、あなたにだけは真実を知っていてほしい、と」
EVA「スネーク、もう気付いていると思う。10年間渡せなかった写真を今届ける気になったのは、偶然じゃない」
EVA「あなたがある決断をした、って話を聞いた

から…」

EVA「もちろん、あなたとザ・ボスとは違う人間。私もあなたの決断を翻そうというつもりはない」

EVA「ただ…彼女が何を見、何を感じたかを知ってほしかった。それだけ…」

EVA「だから、心に刻んで。彼女の軌跡を、忘れないでいて」

EVA「この地上で彼女の真実を知る人間は、私とあなただけなのだから…」

スネーク「ボス…」

スネーク「だが、それでも俺は…（違う道を歩む）」

■極秘ファイル

●盗聴テープ

UNKNOWN「…私です」

UNKNOWN「ええ、順調です」

UNKNOWN「はい、BIGBOSS（ビッグボス）にも真実は…」

UNKNOWN「ええ、本部（ラングレー）もまだ判断を決めかねているようです」（潰すかどうか）

UNKNOWN「それよりも身内（ゴールドマン）の後始末に大変なようです」（後始末＝隠蔽工作）

UNKNOWN「ええ、KGB（ルビヤンカ）の方も同じく…」

UNKNOWN「はい、他の目も監視を続行していますが…まだ彼らが接触した形跡はありません」（他の目＝NSAや各国諜報機関、カリブ海諸国、国連）

UNKNOWN「ええ、そうです。非正規で自由に使える軍隊です。今すぐ、潰すよりも彼らを利用する方が得だという判断でしょう」

UNKNOWN「ええ…アンゴラあたりで候補が…」

UNKNOWN「それから、あのAIの検証も完了しています…」（愛国者達AI）

UNKNOWN「ええ、そうですね。所詮、機械は機械。シギントの言うとおりでした。考え方を変えた方がよさそうです」

UNKNOWN「やはり機械は高度な情報処理に特化させるべきです」

UNKNOWN「はい…わかりました」

UNKNOWN「それと、例の〝息子たち（バックアッププラン）〟は…？」

UNKNOWN「なるほど、2歳の誕生日を…」

UNKNOWN「…しかし、あくまでも保険なのですよね？

（彼らは）」

UNKNOWN「ふむふむ…なるほど、そいつは…（賢明な）」

UNKNOWN「BIGBOSS（ビッグボス）がどう出るか…」

UNKNOWN「ええ、でも私はビジネスにしか興味はありません」

UNKNOWN「何度も言うように、私はあなたの敵でも味方でもない」

UNKNOWN「ただのビジネス・パートナーです。それをお忘れなく」

UNKNOWN「では…また。親愛なるゼロ（CIPHER）」

METAL GEAR SOLID　PEACE WALKER
SCENARIO BOOK

メタルギアソリッド ピースウォーカー
シナリオ・ブック

原作／監修　小島秀夫

カバーイラスト　新川洋司
アートディレクション／カバー＆表紙デザイン　久留一郎
本文デザイン　荒川　実
DTP　邑上真澄

協力・監修　株式会社コナミデジタルエンタテインメント
小島プロダクション

制作　株式会社新紀元社 編集部

印刷・製本　大日本印刷株式会社

Printed in Japan